Yoshizawa, Yoshinori
Mikan kokubun kochūshaku
taikei



京都帝國大學教授
文學博士
吉澤義則編

未刊國文古註釋大系　第二冊

東京
帝國教育會出版部

未刊國文古註釋大系

第二册　目次

萬葉集殘考

三册

高井宣風著

萬葉集殘考 開題

本書は高井宣風の著である。

本書は萬葉集中より拔抄し、先づ先人の說を擧示した後、自說を述べたもので、かゝる態度からしても聞くべき文字に富んでゐることをおもはしめよう。本大系は無窮會神習文庫所藏の稿本によつた。

本書には「文化十三年丙子八月」の「侍從藤原信德」の序があるので、其の頃の脫稿と察せられる。著者高井宣風は信濃の人、春雨亭とも號した。前記信德の序によれば、此の稿の成つた文化十三年は、宣風の齡七十四である。宣風の著述としては、上梓せられてゐるものに「伊勢物語殘考三卷」「名家和歌集小册三卷」「言葉書題（コシダイ）集二册」等があり、未刊のものに「古事記序訓詁」「筒物語三卷」「源氏物語言葉抄（號源語訓解）全十册」「後達考・續後達考全十册」「こと葉よせかなつかひ小册三卷」「耳風集五册」「新古染色合折本一册」等がある。宣風の男八穗も亦國學を志して宣長の門に入り、「古今假名遣折本一册」「古詞類題和歌集二册」等を著し、また父宣風の言葉書題集をも編集してゐる（以上、春雨亭書目錄による）。

萬葉集殘考　上

萬葉集の考へふみ。くさ／＼かいあつめたりけれど。またくも。おほえざりけるを。まぐはしう。してしがなとよざしたりしを。老のひがこと。ふさはしからじと。すまひたり。さらばこと／＼しからず。解たがふめりと。おほしきをのみ。ゑり出てと。そゝのかしたりければ。かく三卷に。つゞりしはたゞ。吾ためのみのさきはひならじ。しかはあれども。おのがじゝのまに／＼。げに玉の底なく。もてはやさむは。かたかりけるわざなりき。まして。七十餘り四とせ。翁さびかたくなゝる。くせづく齡にかくつとめし。いたづきを。おもへかりけり

文化十三季丙子八月　侍從藤原信德

○すゞのやの翁のいはく、後世の、窂考は、ことはりこそ、さもあらめ、實にあたれりや、あらずや、定がたからむ、さりとて、はたひたぶるに、不可知とて、あるべきにもあらねば、人もわれも心のかぎり、推量ごとはする也と、げに机の上のわざ、あたれるもあらば、さきはひ、たがふめるは、見む人、はぶくべければ今我、先人のあとを、補ひ考そへし、よしあるもまた、しかなるべければ、かくいひ繼／＼しはてには、またく、よみとりぬべうなりぬべければ、等閑に見ずして考へそふべかりけり

○萬葉集の時代は、人の心直にして、歌をも、見きくまゝのありさまに、たくみなからず、よめりしとのみ、おもひ事深き意のこもれるをも、さる心して、解れしと見えたり、いまやつがりいへるに、たぐへぬれば、うらうへのたがひあり、すは、海上など見はたしたるは、心ふれずして、さる景色にも、よみぬべし、戀の歌は、深情つくしがたければ、しかのみは、つゞりがたかるべし、すべて、趣向によりて、めやすくもたくみにも、書くべきをそむけて、ゆをびに、よみとらむとせば、中／＼に、

ひがことなるべし

○似よらぬ字に、あらためしは、とりがたし、故人の註をあげしは、おのが拙き、考ながらも、見くらべにもし、人の非を、いひあらそふは、いとあさましければ、しかおもふべからず、近きころうましたちの、さることの、残れるを見るさへ、いとあぢきなし

○竹取の歌は、故人も、はたさゞりけるを、しひて、いへるによりて、私のよみに、あらためたり、もし後按の、はしともとて

○人の疵(キス)をもとめいふにあらず、たゞしれざることの、まぐはしからむ、ことをこそおもへ、おほかたは、あやまちを、見出むと、かまふ世に、月のみちかくごとく、夜ごとに、さやかなるは、なかりけり、まして、老のひがごと、かりすつべき、草やおほからん、理しれるも、思ひあがれるに、つゝみて、やみにまどへるはすべなし、げにわきがたきは、しひごといへりしを、とがとせられむは、もとより、我かくよしとおもへるは、よしとし、きこえがたしを、おもふのみ、補へりしごとく、こと〴〵に、よからむ、ことわりなきはすゞのやの翁の、いへりしがごとし

○此外もらしたるもおほし、急(イソギ)とはなけれども老ぬれば、こゝろせかれて、見残したるはもゝとせもなからへば、またもとて、筆をおきぬ

先人の註せられし中にたがふめりとおほしきをぬき出て補ふしかはあれとあまたなれはおほかたにして残れるは落穂のたくひにもとてなむ

萬葉集一殘考

信濃高井宣風考

○天皇登香具山望國之時御製歌　七丁ウ

〈山常庭初行　此歌の天乃香具山、此山の名、古書皆、眞名書にて正字をばしらざりしに、文化九年、かしこにめぐり行て、香久山にのぼらんとて、道をとひければ、里人のいはく、あめのかぐ山は、天神山の事なるべしとて、くはしく教たり、天神山を、あめの香久山と、いへるをきゝて、さては、天神山を、あめの香久山とよむ、正字を知りしは、嬉シかひ也けり○神の字を、香具とよめるは神樂の、かぐとおなじ○二行目煙立籠　籠は龍の誤として、けふり立たつとよめり○次に、加萬目立たつとあれば、上をこめとよしはよけれど猶○み下を、立たつとよめりしぞ、まさるべかりき○同行海原　註に大和國には、海なければ埴安の地をいふべしと也○はしがきに、國見し給ふとあるは大和一國にかぎるべからじ、凡に見給ふをせばめいふは、題にかなはず○蜻島八間跡能國者とあるも、日本國中をさして、よみ給ふべし、所せき、大和の國ばかりの、ことにはあらじ天下をしろしめす、大みこゝろにて、とくべし

○天神山は、耳成山をいふともいへり、さては、訓意にしたがふべし、猶可改也

○天皇遊獵内野之時中女命使間人連老獻歌　八丁

△八隈知之　此長歌の二行目　○奈加弭乃　註に奈加弭心得がたし、弓は弦の音すれば、加は留の誤りとし、奈留弭と改たり○六巻に梓弓、末爾玉卷、加久鈴曾、とあれば、鈴を付る故、奈留と改しは、さもとし思侍らる○按に、加と留寫誤るべき字ならず、もし呂の字近ければ、誤しか奈呂弭とすれば、同意なるべし　○伊勢氏の本には、此まゝにて中はづれにて、上中下にて、弓をためぬれば、鈴のなるよしにて、圖をもて註したり、いづれか是ならむかし

○幸于紀温泉之時額田姫王作歌　十丁ウ

久老考

莫囂田隣之。大相土无謂氣。吾瀨子我。射立爲兼五可斯何本

圓は山の形也。莫囂はかまびすきことなきは。無耳也。耳にきかぬ故、かまびすしからぬ也。圓をツブラとよめる。倭姫世記曰。圓奈流在小山支。其所乎。都不良止號支。しかれば。莫囂圓は。耳無山也。此山に隣れるは。香久山也。今按に。圓は。丸き也。山の形丸き也。とはいかゞ。和名抄に培樓漢語抄ニ云豆牟禮とありてつむらも。つむれも。同語也。野などの。小高き所をいふ。圓の字を解かんとて。しかいへるなるべし。大相土は。詩の大雅に云。爰及姜女聿來胥宇とあるによれば、相土は國見なるべし。兄爪謁の兄は。一本无に、作れる也。爪謁の二字はの一字を。誤りしにて。无靈氣は。さやけきなれば。第二句は

國見さやけみ。とよむべきや。四の句は。宣長よみしごとく。結句の古寫の一本。五可新何本と有。新は斯の誤り。いつかあはなも。とよむべしと云僕おもふに。此説またためづらし。されど吾が字を改しを。かひなくおもへば。是又かへたり。さればよしとも。定がたかるべし、此説諸説よりも。まさりぬとし侍らんとて。考しなえべし。

頭註 萬十七曰あし引の山谷こえて野つかさに今は鳴らん　鶯の聲　此野つかさとつむれと同じければ圓を山とはし

△莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣吾瀬子之射立爲兼五可
新何本

東爵○初句を、紀の國のとよみ、大相を、山とよみて、きの國
云○の山こえてゆけと、よめりし也

○宣長云、初句を竈山とよみ、大相を、霜の誤とし、七は吉の誤、爪は氏の誤として、かま山の霜きえてゆけとよめりし也

○國の隣には、必山ありといへども關八○今はかまびすし
州、攝州などには、山なきをいかでかは按囂とよみ、莫を
そへて、かまびすくすなといふ意也、莫は、○かしましからぬ
なかれとよめり俗に、かしましくするな也○は、ひそか也、
ひそかは、密々也、依て、圓隣は　まどかなる中に、さて
莫囂を、美稚と、よむべしや　隣れるは栗也○栗刺
のかたち、圓とよむ○大相ハ　双方より合意も
かなればなり莫囂圓隣之べく　て中と、よむべ
し○又大相ハ天下の中莫にあれば○さあれば、三栗の
や○中と、意もてよませしにや○中とつゞく冠辭也○七ハ
毛の字の上、畫ば○今本、七の字の尻を○依て、七を毛と改
み七となれりしか○はねしにて思ふべし○よむべく、おぼゆ

○兄ハ巴の字の誤とし○爪は流の略字か片假名のルの○巴
て、波とよむべし　ごとく、略し書たるにや○流
とし波流と○謁ハ偈の誤、片ン草書○偈に改、計○射立爲
よまんか　似てまがひやすし○とよむべし
兼射を、發字とせしは非也、射は、いゆくとよめ○五可新ハ
えるに同じ、往にそふことばにて、いゆき立す也
何時を、いつしと○何事もとなとよむべし、集中、おぼ
よめるに同じ　つかなき意に、またよめるあり

頭註 △垂仁紀云一、云天照大神鎮座於磯城嚴橿之本而祠之
此いつかしは倭城上郡也と云云

頭註 霜消れば、山路ぬかりてたどたどし、里の道とはこと也。
霜消ぬまにゆけと、いはゝふべなるべし

頭註 七爪　爪

頭註 古事記大和吉野之内搗上紀伊不見

△莫囂圓隣之、大相毛巴流偈氣、吾瀬子之、射立爲兼、
五可新何本

となれり、中もはるけしは、あはずして、夜をへ給ふ○いたゝ
意、中もといふにて、道も遥に隔つよしをよめりし也○すかに
は行いたり○もとなは、行いたり給ふかおぼ○集中の難哥也、
給ふかなり○つかなく、心もとなしの意也○依て、故人説ま
ち〳〵なれど、いまだ○橿のもとゝいふ説はおぼつかなし、
しかとせしをきかず○かしの詞になづみていひしなるべし○
一本圓を國に作り國隣とあるは○如是字を改ては、わたくし
字のまゝに栗とよむべくこそ○にて考しかひなし、猶後按

頭註 古事記 美母呂能伊都加斯賀母登加斯賀母登由由斯伎加母加志波良袁登賣」此かしかもと同じくおもふべからず」是大和三諸也

○中大兄三山御歌一首今本近江宮御宇天皇　十一丁ウ

〽高山波まへの、天香具山を、天神山といひしごとく、神を香具とよみ、また神〳〵しを、かう〳〵しとよめるは、神の字を、カウともよめるなり、高神、音訓同、カウ也、依て、高は神の借字に書しか○三代實錄に、發遣高山祭使とあるは、此高山に○三行虛蟬毛 世とつゞく冠字也、虛蟬の、世はあらざるべし○目の人も、をとめを見ては、あらそふべしとい 此御歌は、なかし、三山のあらそひしことを、ふこゝろ也（よみ給ふ故、世の人もあらそふべしといふこゝろ也○嬬乎相挌 十丁に嬬嬬等之とよめれ○詩曰鼠相の相をねづはこゝをもしかよまんか みを見れば、よみしごとく、こゝも、見ればよまんか、を○挌ハ闘較にし○依てとめを見ればとよめば、きゝよろし て爭意也○をとめをみれば、あらそをとめと句を切ては、○詁に、卷ニ相競、ふらしきとよむべし○よみよからざる也 十卷、相爭と、相の字をくはへしをもて、これをも相を、上に付てよめれど、さては、上の詞手づゝにて、久きゝよからぬ也

頭註 ○古事記 復奏 覆奏モ ○書紀 復命 服命モ ○萬葉 都 堵モ ○字書 針 榛モ かく借てかき音通を用ひし也

頭註 乎の字をもて相をよみたるなり 神崎 カウザキ地名也

○天皇詔內大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶秋山千葉之彩時額田女王以哥判之　十二丁ウ

〽冬木成 成ハ、盛の誤、冬○說に、冬木なすとよめれど、なすこもりとよめり は、如といふことによみなれし故、春も、冬木のごとくとい○成ハ成の字似たり、成ハ、まもふ意にて感心ならざるべし る、又とゞまるともよめれば、こもるといふ意に借用しか○目 四行曾許之恨之宜長云、恨ハ、誤り ○ 按也乎毛志呂之と云り ニ 恨は限字似たれば、○限は、きはみとよみ○秋の紅葉の、艶なるはあやまりしか○にてかぎりと同じ意也○に、心をよせ、よしと限たれど、人はいかにわれはよしと思へども、人の心ゞいふらんの意にや 〳〵にていかゞいふらんとなり

頭註 久老云 盛の字を用し事見えずと難じたり

○天皇遊獵蒲生野時額田姫王作歌　十三丁ウ

〽茜草指、武良前野逝標野行、野守者不見哉、君之袖布流 紫野は、あふみの國 ○續紀九云以近江紫野ニ奉ニ着ニ御冠一云云 ○蒲生郡の野をならにありといふ說は さき野○蒲生郡の野の名○都の紫野○逝に、觀をかねて、ゆきといふ也としられたり○同じ名也○の美しきを袖ふるといふにて、きかせ ○御冠の下しなるべし ○脫字にや

○藤原宮御宇天皇代

天皇御製歌　皇ハ皇の誤りと云　十六丁ウ

〈春過而夏來良之白妙能衣乾有天之香來山
衣さらせりとあるを、ほしたる○此御歌、凡には意得がたし、
とよみしハ、いとよろしくこそ○里には、衣ほしさらしもすべ
し、山にほすことは、歌にはよまざる詞なり、近き藤原より、
みそなはし給ふべけれど、ほしたると、治定しては、よむべく
もあ○意は、夏來たりとしるく、霞晴たれば、衣をほしたるご
らじ○とく、雲のかゝれるを御らんじて、衣ほしたると、遊は
しけん、されば衣をほしたるご○註に、人の家に、衣をかけほ
とくと、そへて見るべくこそ○したるといへるは、まぢかき
ほどのこと也、こは山をふりさけて○俳諧にて、雲の峰といふ
見給ふ、けしき故、感心の御歌也○も、夏也、夏は、雲の八
重立、時節○よみは、眞淵のよまれ
なれば也○しを、よしとすべし

○過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌脱　同丁
〈玉手次目二行○神之書此註に、書は、盡の誤とし○こと〳〵
で、神のことごとゝよめり○つがの木
とも、つゞきよからざれば神の御言○今按易の序に、河圖落
とよめり、書を、言の誤りとせり○書と、大字にかきは、易の
大意を、此四字にこめし、外題なりといへり、河○昔の河跡、
に、古河新河ありて、瀬の定まらざるによりて也○田畑とな
り、田畑時のまに大河と變○しか變地する故、古來のことはわ
ずるは、瀬の定らぬ故也○きがたき故、水帳をもて、改ぬれ
ばわか○さて、圖は畫圖也、畫圖ばかりにては、後世わきがたけ
る也○れば、書をもて、くはしくかき殘して、後世のためと
せ○されば、書をもて太古の字も傳ふると〈神之書櫻木
り○のことを知也、依て此書よむべくこそ

木乃とよむべし、さらは歌
乃の意、よろしからん

頭註 書傳ト云ヲ以テカキシナルベシ

○輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麿作歌　卅一丁ウ
〈八隅知之目三行石根いはがねのとよめれど、踏の字脱せしな
るべし、いはねふみとよめば、しらべも
こと○禁樹楚樹と改て、しも○今按立木斷とよむべく、禁は、禁
也　とゝよめりし也　とゞくをもて、立
の借○御稜威の、御勢ひにて、立たる○坂鳥乃坂は離の借字
字　木をも押なびかし給ふの意也　也、木群にや
どりし鳥の、立木をなびかし給ふにおどろ○坂といふに、なづ
きて、はなれ〴〵に飛わかれ行をいふ也　みてはいかゞ、好
による○目四行四能乎押靡篠也、禁樹とすれば、篠も同じかる
べし　べし、しもと原ともよみ、木の苗の、
しのばかりなるを、いふべければ、供奉の人の、なびかす○鳥
ほどのことなるべし、立木をも、なびかし給ふは、強勢也○の
驚、さかり行にて、立木に、たがふべかじさて、し○目三行玉限
ののしげきを、押分るとかけ合せし歌のあやなり
を、玉蜻に改て、かぎろ○坂鳥は冠辭殘考にいへ
ひとよめりしは、よき哉○ば、こゝに略したり

頭註 唐禮楚　景行紀　茂林　雄略紀弱木林延喜式楉

頭註 立木押靡榛刺分者獵者勇也と云意也

頭註 坂の多和をこゆる故にしかいふといへりしも有

○藤原宮之役民作歌　卅二丁
〈八隅知之目六行家忘身毛多奈不知東麿云、下三六丁事者
櫛知と同、直知にてたゞ

しらずし今按不知業にて、家業をわすれ、身勞を、くるしと
也云々しか、思はずして、宮造の助力をしてつかふ、まつると也
○御仁徳をあふぎて民かく、づか○掌を略して、多那と
ふまつれるは聖代をあふぐ、故也　いへる、なるべし

○二年壬寅大上天皇幸參河國時歌　廿五丁

△引馬野爾仁保布榛原入亂衣爾保波勢　多鼻能知師（ヒクマノニ、ニホフハリハライリミダリ、コロモニホハセ、タビノシルシ）
爾

榛枝直云、茅子歌、百五十餘首、榛歌十首はかり、花を榛とよみしはなし、鹿雁歌の、よみ合せしもなければ、萩にはあらず○宣長の說もおなじ榛は茅子の、借字とといへり○いへども榛の字、わきがたし今按に○榛字彙云、草木茂貌、草茂曰蓁、木茂曰榛、木叢生貌○韻會切音進子如小栗似レ　奥州南部産　五非子曰　○榛子　和名抄和名波之波美　玉篇如扁小栗
栗（トンクリ）　○物はしバミ○食物也

○長劍帶。榛荊分入。兕豹折ニ虎熊ニ搏不レ畏是獵者勇也○下略此榛荊二字を波利と訓可考　○荊居卿切京　說文曰凡木ノ名　心楚木　○古文作ニ荊
茄ニ紫荊。花名　○和名抄荊音京　○漢語抄　和名　奈末江乃木○莿　七四音次。草木ノ針也又芒也○日本紀　貫不同云　○榛秦ともに針とよめり○潘岳詩云、荊棘成榛と云荊棘ハ、草茂貌、二種よりて、あまた生茂也○合て、榛荊といふ○さて木草のしげるを○榛荊に分入とは草木しげりし、野山を押分入は獨人の勇也と○詩の意も、草の茂れるも、いへる也○木のしけれるがごとしと也　○荊莿字似たれば、荊莿もし誤しか、
猶改むべし、さて、にほふ榛原とよめりしは、野ノ千種のしげりたる花のさかりにて、入みだりとよめりしにて、茅子に非ス（アラ）
○榛は、しげりしといふのみなるべし○衣服令に蓁と有も榛の木の、皮をもて染ると、いへりし也○榛摺とて、此木にて、衣をすり、そめしといへり可考　○今回の畔などに植て、薪とするをも、おなじことに思へるは非也、これは○字書ハン符咸切音凡紫皮、俗爲ニ水浮木ニ此木の皮をもて染るといふ、もしこれらにや、考給ふべし○俗字畔ノ杋に　木とかりけり

頭註 大和國木萩といふあり是を波利といへるかよく改むへし

頭註 雄略紀云「其聚脚如弱木林亦景行紀云」茂林如荻原榛　昆上考難ニ治定ニ

○三野連名闕　入唐時春日藏首作歌　廿六丁

△在根良對馬乃渡渡中爾幣取向而早還許年（アリネヨシ、ツシマノワタリ、ワタナカニ、ヌサトリムケテ、ハヤカヘリコネ）

○眞淵云、百舟乃、波都流對馬、とあるをとりて、百舟の對馬かと云り　○宣長云舟競と改たれど、字の例よらざれば、いかゞあらん　○今按に良の字を、ヨシとよみし例、見えざればいかゞ　○在根は、在明山を、在嚴（アーネ）とよみ、良は根呂、根良同ければ、在根良を、アリネラとよむべし　○伊香保呂、などいふとおなじく、嶺を根良（ラ）とよめりけん、對馬の津とつゞくべし　○津は、屯（タムロ）する詞にて、海中に、嶺良（ネラ）ぞたむろせし、島とつゞくなるべし　○津は、大津なども、人家家屯し

ける故にいへり、良を、ヨシとよめば、○秋成の考を、よしと
別考もあれど、例見えざれば、いはず　すべし、萬葉に良を、
よしとよみしハ、一首也、浪の
略字なればよしとはよまざらん

頭註 秋成云對島國下縣郡有明山朝鮮富山浦より海上四十八里遣唐使此山をさして歸帆す、在根良と冠辭によみしは此山也と云云

頭註 山を以て國をいふは逆なれど是は山か家なれば山をもて島をいふべし

○慶雲三年丙午秋九月幸于難波宮時

志貴皇子御作歌　廿六丁ウ

△葦邊行、鴨之羽我比爾、霜零而、寒暮夕、和之所念

○說云夕の字を、大に改、大○眞淵云、和の字を、ヤマトの事
和としやまとゝよめりし也○に、用ひられしは、奈良の朝にて
のこと也、藤原の朝のことなれば、こゝには、倭の字ならん、奈
良の朝の人、書きとなるとこかへたるか、後人のかきたるか、
此夕和の二字、○千蔭云、夕和の二字、家の字の誤し○に按寒暮
誤なるべしと　にて、家しおもほゆなるべしと也
をさむけきゆふべと夕和を、いもとさむけきゆふべ、い
よむべしと思ふ　夕和よむべし
もしおもほゆ　とよめば、歌の意、深くこそ○男子は終日公
夕和を、妹とよまする意は　勤をし、田夫
其外、家業にて他出して、家にあらず、夕もどりて、夫○おも
婦和合するをもて、夕和を、妹とよまするなるべしや　○しろ
く書たればふと○是は、旅宿なれば、寒きゆふべの、獨ね○大
は、わきがたし○のわびしければ、妹戀しく、おぼしつらん○和

の國の、こととしては、歌の情、あさくこそ
集中かゝる意は、おほく、妹をおもふ意也

○或本從藤原京遷于寧樂宮時歌　廿九丁ウ

△天皇乃三句柔備爾之說に、柔は、和らぎたる、意といひし
目　は、あたらず、賑のかり字なるべし
○にぎはひにて、藤原の宮、○備ハ、布里の約美也、都のに
さかりなるをいへる也　きはひにふれてわれ／＼の
家まで、纂昌　ハ、釋の誤とし佐計天とよめり、藤原　五
せしとの意也○擇の宮を放て、ならにうつりますと也　○句
目隱國乃古說に、山の入口、せまき故こもり口と、いふとい
へりし也、此谷、入口は廣く、おくいとせまし、家
など、泊瀬川に、はり出して、つくりたるあり○所の廣させま
て、おくひろからず、たれみずしていひしや○さをいひては
冠辭にあらず、冠は、首にかふる故、地名○今按に、袋に、壺
などいふ時は、冠辭とはいふべからじ、○樣の、腹ふくらか
なる物を、入れんとするに、袋の口せまき故、入がたし、○茶
依て、袋の口を、はつせと、山の名に、かふらせしなり○入
袋のごとく、かねては○門前を、椿市いふは、もう壺市といひ
つせといひし詞、妙也○けんを、椿と改めしなるべし、是にて
袋の意しる○同國、椿市ニ所有、そ
とすべし　○は、冠辭殘考ニ云り

○栲乃穗爾　說に、栲は白布也、穗は色のにほひのあらは
れたるをいふと見ゆれど、此穗の字の意、
しかと定○六行目川之水凝　水を、比とはよまじ、川の水こは
がたし　りてを、川のみこりてとよむべ

し、疑は凝の誤り○結來は、毛の字似たれば、誤
といへりしぞよき○何千代二手來りしか、千代までもとよむ
べし、眞淵は、千代ま○座多の多は亙の字似たれば、誤
でに、とよめりし也しといふべければ座亙
公與とよまば、意よく聞え得るべし○千代までも、來いませ君
し、座々といふを亙とかきし也○よ、我も通付ふまつらん
と○是は、自宅、作事中に來て○又泊瀬の川に、舟うけてとよ
也○仮粧してよめりしなるべし○めりしを難じて、泊瀬川に舟
はのぼらず、いかゞと云り、此川三輪の邊よりも、流合て、神
南備川といふ、今神並を、甚並川といひて、甚並村へ渡る、川
幅廣し、むかし、藤原より奈良に通行するに、此川をわたる、
舟わたし也、今はあやうき橋をかけしは、往來まれなる故なる
べし、此舟は、渡し舟にて、通舟にあらず、泊瀬川ともよめり
し故、いさゝかたがへるとおもふべし、げに泊瀧川にも、舟はの
ぼら○神を、甚にかへしは、神無川と、きこゆ○甚並村の
ず○るをいみて、甚の字にあらめたしにや○わたり也

風土記云　海石榴市大和大野郡南

頭註　十一、海石榴市之八十衢爾　日本紀十六　妾望奉待海柘市
巷榴市歌垣ともありて二ケ處と見ゆ

頭註　栲の穗古說非なる事後還考木綿の部を引合てゐるべし色の
あらはれたるといひしはしひごと也古今わきがたし

萬葉集二殘考

○郎子　十一丁

△三薦苅信濃乃眞弓不引而强作留行事乎知跡言莫君
二二

眞淵云　薦ハ篶の誤として　三篶苅めりとよ○篶ハ、篠のごとしといへど
も、薄に似て、葉少し麁し、節は、篠に似たり、信濃は、雪早く降故、苅あへずして春○信濃か
苅也、雪に埋れて、弓のごとく、しないたるをもて、と、ふ
らせし冠辭也、紀云大寶二年○景雲元年千○此意に依に、信濃
從信濃國梓弓一千二十張　四百張奉ル○の眞弓とよめりし
也○篶は、薄に似たるといふは、ス、キの、　○眞淵云　强ハ
○キを略してスヾといふにて、あきらけし

弦の誤　弦作留めり　とよ　弦作留　とよむべし、弓弦とはい　次に、都
めれば、難なからん　○されば、をは○もとのよみよろし、つ
るは、弦緒とかさねよ　○ぐとはいひ　○るさるは、釣するとい
ふ意、魚の釣の糸にかゝる○つるさゝるは、弦放つに一、弓引て
ほど、待ま久しきにたとふ○射放也、弓を引ずして矢を放つこ
とはあらじ、いま○ひこづると、いふにおなじく、あはは○離な、
だしらすとよめり○んといひて、久しく、ほどふるの意也○さる
とよめるも放と○此弦作留の考、故人もまち〳〵にてしかとせ
おなじく待らん○ざれば、かくいふもいかがと思ひながらかき

し也○それ、弓の絃とはいへども弓絃とはいはざらん、ゆづるとこそいへ　されば、ヲハグルといひしはひがごと也

頭註　眞淵冠辭にもおもはさりしにやもらしけん

○野鶯鷹と見私記　鷹訓爲須須岐

此考後人の説を待

○禪師　十一丁ウ

東人之荷向篋乃荷之結爾毛妹情爾乘爾家留香問

○調貢を、のざきといふは、秋の田に、かりし稲を、穀にして奉るをいふ也、野さきは、田野の、初穂を、さきと云り○新穀貢るは、河國も同じことなるに、東國を專にかくよみしは、葛飾早稻とて、何國よりとゝみのる故、新嘗に、新穀を奉りしなるべし○荷之結は、緒の誤りとも、いふべけれど、かくてもよかるべし○上は、妹が心に、のりにけるかもといはん、序なり○妹が心に、のりけるは、妹を思ふ故、上氣して、ひたすらに、戀しく思ふの意也、此歌は、右の答歌なるべけれど、目錄に、脱せしにやといへり○荷向は、野の初穂也、田畑を野らといふ、野の意也○乘といはんとて、かく長々しくいひつゞりし也

○但馬皇女在高市皇子宮時竊接穗積皇子事既形而

後御作歌一首　後之字を加　十五丁

人事乎繁美許知痛美己母世爾未渡朝川渡

○宣長云伊母勢乃川の誤ならんと○千蔭云母は我の誤、おのが世にと、有しかと云り○許知痛ハ心痛也、人事は人言也、人の口きたなく、いひふらしけるを、こゝろいたみなげく也○己母世爾の世は、夫の借字也、おのも夫にとよむべし、夫に、あはざるほどの事なり、それを、川の瀬に、いひなしたり、世とよみては、歌の心わきがたし

○朝川渡へ、あらはれわたるといふ意、夫に、あふまほどなく、あらはれしと也○朝は夜の明ぬれば、あらはなる意をもて、朝川とよめりし也○夫を瀬とよみしがあや也

○同石川女郎更贈大伴田主中郎歌一首　十七丁ウ

△吾聞之耳爾好似葦若末之足痛吾勢勤多扶倍思

宣長云卷十長歌に、小松之若末とあるを、小松がうれとよめれば、是も葦のうれとよみて、足痛は、あしなへと、よまんかと云○一本若生と有○若生にようばあしがひとよむべしと也○人傳にきゝしと、いひよるたくみにそらことをつくりて、つかはす也○葦若末は仮字、葦株也あしを苅しあとの、株にて、木をきりし、切株といふにおなじ、葦をかりし跡を、歩行すれば、足痛て、たどりがたし○若末とかきしは、かりし株より芽の生る也角ぐむといふに同し○古事記に、葦牙備とあれば是をも濁て、あしかびよすむべし○足痛は跛にて、こはゐざりのごとくなるべし和名抄に、那閉久とよめれば也○是はつくりごと、いひやるなれば、あしのいたみいたみ給ふかの意也○あしたきとよ

み、又あしたむともよむべきかゝりなり ○勤多扶倍思は足いたみ給ふときゝ侍りぬ自重し給ふべしの意也

○自愛 紀に、つとめとよめるに同じ ○歌の心は、女ながらも、君をとひしに、とひきまさぬは、足いたみ給ふ承れば、とひ玉はぬも理也、きゝしにたがはずば、つとめいたはり給ふべしと也

右依中郎足疾贈此歌問訊也

初句に、わかきゝし、みゝによ〳〵にはとよみしにて、僞言つくりて、贈し也、此註は、實に、足痛するにて、叶がたし、さきに賤女のまねして通ひゆきしに、つれなくせしを恨て、足痛給ふにや、とひきまさぬと、あたりてよめりし也 中郎を、註にはけちたり、此こと和りいはんとて、本のまゝにせしなり

頭註 眞云 葦牙はあしの若めにてそは即あしの苗なれば、葦牙の葦苗てふ意にて蹇に轉しいひかけたるはと云り 苗と牙とは同じからざる也

○三方沙彌娶園臣生羽之女未經幾時臥病作歌三首

○橘之蔭履道乃八衢爾物乎曾思妹爾不相而

此歌の心を。解ト註見えず。橘のかげふむ路のみに。まよふべしや。これは。田治間守が。常世の國にわたりて。橘を。もとめありきしことをもて。やちまたにたどりしごとく。妹をおもふ心に。分まよふと。たとへし故に。橘をもとめてよめりし也。

また巻六ニ十七丁ウ

○橘本爾道履 八衢爾物乎曾念人爾不所知

右一首。右大辨。高橋安麿卿語云。故。豐島采女之作也。但或本云。三方沙彌。戀ニ妻苑臣女。生羽ニ作歌也。然則。豐島采女。當時所ニ口吟ニ此歌歟○略解に云。此歌。巻二に。あるなしらで。またこゝに。のせたるかと見えたり。今按に。同歌なれど。いさゝかかへて。采女が。古歌をもて。よめりしにや。此歌の本は。求の誤りしか。字似たり。求爾道履ならば。たち花を。もとめにちふみ。とよむべし。此よみかへしにて。まへの歌の意。橘の故事をもて。よめりしとしられたり。さるよしなくて。はかげふむみちとは。橘にかぎるべからじ△かく上下を。よみかへし故。同歌ならぬを。しるべし

頭註 橘を尋て、これかれとかけふみまよふ意也

頭註 橘をもとめに外國へわたりしをかけてよめりし也

○石川夫人歌一首 廿四丁

△神樂浪乃大山守者爲誰可山爾標結君毛不有國

○神樂浪を、さゝ浪とよめるは立舞て。神にかけ奉るをいふ○今御目に。懸るといふと、おなじ、奉レ掛奉レ捧といふも同じ、神 猿樂の誦樂は加久流といふ流を、良に通はせし、ことば也 ○に。上懸り。下がゝりといふ懸も。おなじことはなり。さ一加久も、○佐々久も。同じければ、さゝぐを略して。さゝ浪とよめり猿樂もと。鈿命よりの。つゞきし舞故。上がゝりといふは。神懸り也。後也。いやしめいふは。河原などにて能して。見せしよ

り。しかな○神樂に。湯笹とて。小竹の葉にて湯をふりかくる
りつらんか。故。さゝ浪を。神樂浪と。かきしなどいへるも。
よしなきに○天香具山のふもとに。一群の小竹、しげりしあ
はあらず ○り、それを湯笹といへり、畑中にあれどしる人なし、
むかしよりかくて ○田夫云、天鈿命、いはとの前に、ゆだてし
ありしなるべし 給ひし其笹根付て、今もかく、絶ることとな
しと云り、歌のこ ○大山は、大ひえといへば、ひえの ○山守
ゝろはあきらけし 山をいふにや、大は褒詞也 は、
山にこもりて居べき、役なる故、怠らずまも○篠も笹も、さゝ
るを見かしこしと天子の貴を、思ふなるべし ○といふは神事に
さゝぐといふ
よりの名にや

頭註 私記曰師説沙沙者唱進之義也言出居神樂称沙佐庭又佐々謂神樂云々

頭註 古事記曰天皇控御琴而建内宿禰居沙庭請神之命 此沙庭モ神ニ祢之意也

頭註 篠をたくさにとりてなとも見えたりさゝといふ名も此より所の名なるべし

○從山科御陵退散之時額田姫王作歌一首　廿四丁ウ

＼八隅知之 二行目 ○夜之盡、晝者母、日之盡

○よのあくきはみ、ひるはも、ひがくるきはみ ○巻四、十 晝波
又、ひがくるまで、とよむべく思ひしかど 二丁ヲ
日乃、久流留麻弖、 夜者 夜之明流寸食がたしうまへ、とあれば、しかと定 きは

み給ふ ○御陵を、むかしは、はかとよみしことは、源 ○延喜
べし 氏にも御墓おがみに、おはすと見えし也 式云、
陵者、天子墓者、諸王臣下、とわかちたり、大古は、はかとす
べていへりしことなりしを、中國の風にならひて、かくなりし
その ○仁徳天皇、崩御の後、難の四天(王)寺の所に、葬奉り
とはも しを、みさゝぎと申、みさゝぎは大雀の御名を、其まゝ
申て、御墓のことゝなりし也、是より、諸陵をもみさゝぎと
いへるは、いかゞ、みさゝぎは大雀の命の、御名なればなり○
四天王子を、荒陵山といふは、御陵を、河内國に、改葬し奉り
し跡の、荒し陵といふ儀也、後、大山陵と、いへりしも大雀の、
大の字の、○大鷦鷯を、大雀と、古事記にも、誤りて書しなり、
儀なるべし ○こは、入こみしことなれば、略して別記いへり
○是は田多秋齋、職原抄の、註に見えたり、鷦鷯と ○墓を於岐
雀の事、秋齋いへりしによりて、考たるは略せり 都岐とひ
しはなべての名目
にや亦於久都岐モ

頭註 陵の事後違考にくはしくいへりこゝに略

○十市皇女薨時高市皇子尊御作歌三首　廿四丁ウ

△三諸之神之神 須疑已具耳矣自得見監乍共不寐夜叙多

○眞淵云已免乃美耳、將見管本無、似よりし字は誤りもすべし、
蟲ばみしも、いさゝか殘るべし、かく改めしは、私の意たる
べし ○今按具は、○巻四に、忌杉とあるに、むかへれば、神杉忌
や 目の誤か と夢に、いひかけし、助にやあらんとも
○さらいめにをしとよむべし 得見監を、見えけんとよむべし ○乍は片の誤り

しと○共は無の誤り○已目耳矣目。得見監片無夢に見えし、かたちはなし
と、いふ上は、席に一、夢○歌の意は王女の、夢に見え給ひ
ことなり○といはんばかり也○しを、措くおもふまに、夢のさ
めぬれば、見え給ひしかたちはな○さて、またも見え給はんや
しと也、片無は、かたちなき也○と寐ぬれども、見しかたち
のしのばれて、寐られ○また／＼後
ぬよしに、よみ給ふ也○按待つべし

頭註 白は濁音なれど清てよみしも見えたり

、神山之山邊眞蘇木綿短木綿如此耳故爾長等思伎
三輪山を神山とかきしこ○眞麻を蘇と○木綿は蠶の絲の事也
と東麿委くとかれたり　かきし也　蠶の絲は、引
出るに絶すつゞき○麻の絲は、短を續て、長く、○人の命の、長
て、きれざるなり○すれども、もと短きと也　○かれと、いは長
ひしかども、もとみじかき命にて、うせ　麻と、木綿の、長短
給ひしたらんと、なげき給ふげりし也　○をもてあやによみ玉
ひしい○木綿は、古今誤りしを、やゝ○麻は、三輪の故事によ
と妙也○考たえを別記後遣考にいへり○りて、よみ給ふなるべし
し○麻のことも、おなじ集中に、いへりしによりて、略す也木
○綿は衣に織名也絲の事也眞麻のうみをゝ木綿の絲のごとく
すれとももと短
かきといふ意也
此歌の注、冠辭にて、實に解し注なし、眞麻木綿を麻を木綿と
心得ては甚しき違也、麻を木綿の絲のごとく、うみて長すれど
も、もと短かき故、木綿のことゝはあらぬと、短命にたとへし
也○木綿は蠶の、マユをのべて、マユワといふ、又眞の字を略

して、ユワといふことは、内木綿といふ、此考、冠辭考に眞淵いひし
ごとく、見て木綿の意にあきらむべし、此考、後遣考に委く云
り、故人かゝることをも、工によまれしを、よく味はふ
べし、かくいひてもすますおもべし、そは已がまに／＼
蠶のきぬは、大古、安藝國より、神供に奉りし事、延喜式に、
あまた見えたり、是皆、山蠶也、むかしいまだ、蠶つくること
をしらざりけん、かの國より、今も、山まゆの絹を、織出せり、
さて木綿と書くことは、蠶の、木のしげみのこぎ抜につくるは、
木に花の、咲たるごとくなるを、初勢女が、つくる木綿花と、
よめりしを、思ひ合すべし、木の枝に、綿を付しごとく也けれ
ば、木綿と書し也、初勢女の、つくるといふは、子がひするを
いふ也白木綿花に、落瀧津とよみしは、瀧浪の玉ちるごとく、
見ゆるをよめりけん、今世、木綿をも、草綿とおなじく、もめ
んとよめるは、モクメムの音なるべし○今世のかひ子作るも木
の椛の小枝をつかねてそれにまゆつくらする也、此初せ女の歌
を註せしも見えず、くはしくは後遣考にいへり○眞わたといふ
は、よきわた
といふ意也

○此三首は。たく／＼み深く。よみ給ひし故。後世解がたし。歌は。
趣向によりて。工ましくもやすくにもよむべし。今の人。さ
ることもなく。よまんとかまふは。中／＼ひがめるや

頭註 蠶は小也短かしといひ麻は長けれとみしかき蠶の絲は長く引出るを以たとへし也此歌は一わたりにはときかたし

頭註 短木綿になづみては、解がたし此詞のあやをよく味はへざれば。かくいひしをけちぬべし

頭註 短ハ眞麻木綿ハ長シト云意ヲ味ハフベシ

△山振之立儀足山清水酌爾雖行道之白鳴（ヤマブキノ、サキタルヤマノ、シミツヲバ、クミニユカメド、ミチノシラナク）（立儀足　タチヨソヒタル、山清水　ヤマシミツ）

○此花を、皇女の美艶にたとへたり、妹にゝる、花ともよめるがごとく、立儀は、立よそひたるとよむべし皇女の姿にいへり○山清水は泉也、山振の花は、黄なるをもて黄泉といふ意にめぐらしたり○冥途黄泉に、行給ふをよめりし也○さて、黄泉の道をしらば、尋ねて行あはましを、○道しるよしのなければ、すべなしとの意也

○八丁三十　秋山之、黃葉乎茂、遂流、妹乎將求、山道不知母○此山路しらずもとおなじ意也

右三首は、いとたくましく、よみ給ふげりし故、此歌は、ことに古今註せしも見えず、先かくもあるべしや

○一書曰天皇崩之時太上后天皇御製歌二首　廿五丁ウ

△燃火物取而裹而福路庭入澄不言八面智男雲（トモシビモ、トリテツヽミテ、フクロニハ、イルトイハズヤ、モトアフノナクモ）

○契沖云結句の、智ハ、知の誤りとして、面知男雲を、おもしるなくもよめり○眞淵云澄は、登の誤、知、は、知日の二字の、誤として入登不言八面、知日男雲と改ていゝるといはずやも、しるといはなくもとよめり○今按智を知白の二字とし○八面知として、八隅知の儀とし、三字を、君とよむべし○やすみしらす、君といふ意也○もゆる火も、とりてつゝみて、ふくろには、いるゝといはじ、君しらなくも（白男雲）とよむべし、歌の意は○修驗者の火法に火の上を、歩行し、火を握り、火を、紙袋に入ても、やけざる術はあれども、はかなく消給ひし、君がありかをばしらずと也○其術も、無益と也、さほどのきどくあらば、○幻が、貴妃のありかを、尋しなどの、なきみたまのありかはしるべしとの義也

意もあるべし○たくみなく、よむことのみ、思ふ故に、ときあやきりしぞおほかりき

右はし書は持統天皇にあたれり先帝崩（天武天皇ナリ）四年即位十一年八月文武天皇即位此後太上と申べきをかくてはたがへり、まへの天皇崩之時太后御作歌と同じく可レ書也といへり

○大津皇子薨之後大來皇女從伊勢齋宮上京之時御作歌二首　廿六丁ウ

△欲見吾爲君毛不有爾奈何可來計武馬疲爾（ミマクホリ、ワガセシキミ、モアラナクニ、ナニニカキケム、ウマツカラシニ）

○此初句三の句　あがみまく、ほりする君も、まさなくにとよまば、しらべもよろしからむ、もとのよみ、爲をせしとよめりしは、よろし、するとよめるはわろし○不有爾（アラナクニ）は不在爾（マサナクニ）のあやまりか○伊勢國より、はるばるとのぼり給ふけりしに皇子おはしまさぬを、なげかしてよみ給ふ、歌のさま、いとたへなり

○移葬大津皇子屍於葛城二上山之時　大來皇女哀傷御作歌二首　同丁

△礒之於爾生流馬醉木乎手折目杼令視倍吉君之（イソノウヘニ、オヘルツヽジヲ、タヲラメド、ミスベキキミガ）（馬醉木　アシヒ）

任常不言爾

○礒は三十丁目　礒の浦回と有に合すれば地名なるべし　○馬酔木もとのよみあやまれり○此花
は、二三月頃にさく也、是を、馬の食すれば、酔てあ　此花を
ゆまずと言り、依て、一名しどめといふ、馬留なり　○折て君
が馬にはませば、馬の酔てある○さて、手折ンとおもへども、
かじ、さらば君もとゞまらんと也○君がありかをしらざれば、
折るかひ○され　在所の意に　馬止、馬を、志とよます
なしと也　ば　在常はも有らん　○るは志は、馬を追ことば
なもてしどめ○死止といふ意によりて○覆盆子を、しどめとい
と云り云々　かゝるを求給ひけんか　へるは、此子とあしび
の花の、色よく似たる故に、誤りしにや、右の、馬つか○葬所っ
らしにと、よみ給ふにより、かくかへてよみ給ひけん○定り給
ふけれども。さてもこゝに
ありとも。のたまはねば也

右一首今按不似移葬之歌蓋疑従伊勢神宮還京之時
路見花盛傷哀咽作歌此歌乎

歸京は、十一月十六日と見ゆれば、かへり花か、かへり花の、
盛りといふことはなし、漸一二花咲もの也、盛は、二月三月な
れば此註甚非也、移葬は、かりに葬て、廟所出来して、移し葬を
いふ、十一月より、三月頃迄に、廟出来せしなるべし、さて此
歌も時節はた
がはし、歌に

○在所いはなくにと、よみ給ふに、移葬の、廟所の、定まれる
を思ひて、よみ給ふことしられたり、移葬の歌に、似ずとい
ひしも、いと
あぢきなしや

○馬酔花など、手向にすべき、花ならず、それをもとめて、よ
み給ふにて、よく味はふべし、さも見ざりし故、かゝる註を、
かきしとし
られたり

頭註 礒の上は石の邊の意にや石根に花のさきしなるべし

頭註 しとめは、足留の略にや又馬追を晉とよみたれば志晉は追
ことはとしられたり

頭註 此歌は解かたし先しかことたがらなくもとおもふわれさへ
あやしければまたく後按を待侍る也

○日並知皇子尊殯宮之時柿本朝臣人丸作歌一首並
短歌　朝臣を加ふ　廿七丁

△天地之二行目　神集集座而　中臣祓の詞にて、よみかへてとよまんこそ、よかるべけれ　○
かんつまりつどひいまして　つまりいましてともよむべし　○四行目　依相
之極を、きはみと、よみしこそ、よからめ　五行目　神下かんあもりとよめるもよし　奉之まつらし
とよめるをよしとせんか　○高照たかひかるとよめり　六行目　日之皇子波ひのみこはとよめるぞ
よき○神随かみながらとよめりし也　○八行目　吾王わがおほきみとよめりし也○九行目　貴

在等眞淵、貴を、賞に改て、めでたからんとよめり　○同行滿波之計武跡たゝはしけんとよめり○十行天水　水は瑞の借字

○皇子尊宮舍人等慟傷作歌二十三首　三十丁

此歌解事なけれど、よみことごとくよからねば、先人のよみかへられしを、かきそへしのみなり

〈水傳礒乃浦囘乃石乍自木丘開道乎又將見鴨

○水傳礒と、つゞきし歌は見えず、水は瑞の借字か、若がみづといふ意か○礒は、まへに、礒の於にとあるとおなじく地名なるべし○一說に、蒼を紀に、毛久とよみて、木草の茂る意也といひしは、つゝじの外なればとりがたし○木丘は音訓に、こくとよみ、花の色濃さく色を、またいつか見むと、なげきたるべし道草字色草字道色たとまがひてうつし誤りしにや○色として、こくさく色をと、よむべし、躑躅の花の色を、皇子の紅艶にたとへて、またいつか、かゝる花を見んと愁傷せし也○木丘開色乎也　濃開は紅色也かくてはいかゞ

○或本歌曰　三十九丁ウ

〈宇都曾臣等目三行背不得者そむきえざればとよむべし○目四行天領巾隱かくりとよむべし○目六行乞哭別は、刻の誤、刻は時也、別こひなくとき、とよむべし○目七行旦者、三言によみしはいかゞ、なるべしとて　あけぬれば　とよまばよからむか○目八行夜者是も、三言によめり、いづれよみよからねば　ゆふされば　夜はすがらなども、よべけれど明ぬれば、夕されば、とかけ合べし○結句灰而座者　座者は現在のことにて、妹は座等人云者とあれば、妹はいますと、人のいふに依て、來てみれば、いまさぬと也○されば、ませばとはよむべからずこそ○今按灰は尸の字似たれば誤しか而は草字尓とかく也　勿と似たれば、勿を尓に誤りしか尸勿座者なるべし、羽易の山山、我妹はいますときゝて、いまさぬと、かけ合詞也○灰してませばとは、ことばつゞらず灰になりては、いまさぬといふべし○火葬は文武天皇四年三月河内國僧道照白山林に入て、木を集火を付て、其中にして、やりうせしを始と云々○されども人麿の歌に出雲の娘子の火葬の事見たり○次十三丁目に見えたり

頭註 灰となりてませばとはいふべからずよく味はふべし灰になりてとはいふへしては申さじ

頭註 入ニ山林ニ火葬セシト云ハ非ナルヘシ本說にたがへり

頭註 此釋は死去此說とは大にたがへり山林に入て死せしにあらず

○吉備津采女死時柿本人麿作歌一首并短歌此長哥返歌　二首目　四十一丁ウ

〈天數凡津子之相日於保爾見敷者今叙悔

○眞淵云そらかぞふとよめり○此冠辭、是一首にてより所、なけれども○今按に天の數は三十三天とか

十は物を調度する意○さて天數は三十三は三三幷也○かり字也　さゝ浪大津と冠らせしは○廿四丁ヲ

神樂浪乃大山守とかふらせしと○依て、これも同じく○初
おなじかるべし○さゞ浪とよまんか○の
歌樂浪と書しは神の字を略したるか又神を脫したるにや○意たかふべし○神樂浪はまへにいひし故略す

ある人いはく
倶舍論に妙高頂、八萬三十三天、居四角、有二四峯一金剛首所居也略此八萬八稱美也、三十三天の、冠辭のごとし
八萬三千ともいはざるに○凡大も○おほのかなれば
て、推すべしといへり　同じつゞき也
空數とかきたらば、空考にて、そらかぞふとも、よむべし、天數にては、しかはよみがたし、されば、空數のあやまりといふべけれど、此まゝさゞ浪とよまんこそ、よろしからむといへり○重樹いはく。空天なれば。いかでかぞへむと云云
○俗に。空勘定、空おぼえなといはふには。天數などはかくべからし

頭註 そらかそふといひしこと見えす此一首にて例なければさゝ浪とよむべし

頭註 そらねそらことなとゝよみし外空かそふといひしことはなしや

萬葉集二殘考

○柿本朝臣人麿羇旅歌八首　十五丁
△三津埼浪矣恐隱江乃舟公宣奴島爾
○契沖云公は、去の誤りと○宣長云字ヲ改　舟八毛何時、寄奴
して舟行はてんとよめり　島爾、舟中もいつか、よせんぬじ
と、よま○千蔭云舟令寄敏馬埼爾として　舟はよ○今
にめり　せなん、みぬめのさきにと、よめり　按舟公二の
字は、船の字を舟公と講分たるべし、依て、
舟撈隔てよみ、こぎも、かきもおなじ

○舟こぎへだて、ゆくかぬじまに　とよめば歌のしらべ
も意も、よく聞ゆる
也　○是は、思ひよらぬ、書ざま故○浪乎恐は　浪あれて海上お
○一わたりには、ときがたし　そろしく見ゆる
な、舟はなれてこぎへだ○字をあらためずして。よまれんほ
て行、けしきをよめり　どは。もとのまゝかへざるを。よし
とすべし。似よりし
字は。かふもよろし

頭註　久老槻落葉云古本には島の字の下に一字闕有、又島の下に
崎の字を脱せるかとも宜は不通二字誤りしかなといひてわ
かざる也

頭註　玉篇に宜も通にかよふを以行とはたらかせしたるべし

○柿本朝臣人麿獻新田部皇子歌一首并短歌　十七丁ウ
△八隅知之吾大王高輝日之皇子茂座大殿於久方天
傳來自雪仕物往來乍益及常世
○高輝、たかひかるとよ○茂座しきませる○大殿於へ　於を、
めるを、よしと云り　とよめり
とよめりしかど、こゝには○來自の、自は、○あまづたひこ
おほとののべにと、よむべし　日の誤り　めこんといふ
意○大殿に、われも、あまづたひこん、君○雪仕物は、往とい
也○もたえす、おはしませと祝したるべし　ふにいひかけしの
みか、雪のよめれば也○說に、常世の、常は萬の誤と○久老
降をみて　して、よろづよまでとよめり○云
往來乍、益及座世とよ○常世は、時世と、いふ意也とする
めり○べし、谷士淸、日本紀通證にくは
しくい○今按に、皇子の、宮所の、常の御殿○天子に、ならせ
へり○となりますほどの、意によめりしか○給ふ時世と、い
ふ意なるべければ、もとのまゝ、とこ世な
る迄にとよまんこそよからめ、猶考べし

○反歌
△矢釣山木立不見落亂雪驪朝樂毛
○落亂ちりまがふおなし、花にまがふとか、○驪はたらと
ならてはいかゞ、降みだるとよまんか　よむ、よ
しなしと云り、字書に、くりげ馬とよめり、眞黑にはあらぬ
也、しかと、黑からねばあやといふ意に、かりてかきしにや○
雪のあやなす山も、雪に見えわかぬけしきえ　あしたたのし
などいふ意か○もいはれぬをとのゐして見て

もとよめり○宣謂歸と改て、キホヒテとよめりし也、日本紀十
けんそー○五に 顯宗天皇、近飛鳥八釣宮に、即位し給ふ
○八釣山はそこの○契沖 朝樂毛とよめり、來の字なく ○雪の
山をいふならん○云 てはしかはよみがたし

頭註 降るは、遠方にもとより、近きも見え
ざる也、誤りて、見ゆる意にも云り

頭註 卷八けふ降りし雪にきほひてわかやとの冬木の梅は花さき
にけり

頭註 此歌によれはきほひてとよめるをよしとすべし

○從近江國上來時刑部垂麿作歌一首　十七丁ウ

馬莫疾打莫行氣並而見氐和我歸志賀爾安良七國

○疾とくとよめり、馬をむち打○是は、上京する時、同じ役す
ていそぐことゝ、なかれとなり○る人、同道せしに、對ス詞

○氣並而ともよめり、ともに見てこそ○心をおなじくし ○
ゆかめ、といふ意のことば也○てといふに同

見氐毛和我歸は、かへるにてこゝの景色を、よく見○依
ずしていぬべき、しがの浦にあらずと也○一、
歸を、いぬとよむべし、こなた○馬におもふちいそぎ給ふことなか
とよめりしは、あたらず○れ、心ひとしく此洲の絶景を見て
ゆかおと同行を○七國の七は、亡の誤りといへども、かくて
まゝのかしたり もよしや疾は早也、痛は、いたくとよ
むべし

頭註 鳳子曰 久者云疾をはやくとよむへしとくはのちのことは
也と云り

頭註 見すしてわかかへるべきけしきにあらすと氏をにこりよお
べし

頭註 けならへて見ていなん見すしてかへるべき所ならすといふ
意也

○角麻呂歌四首角ヲ角ニ誤兄ヲ脱

久方乃天之探女之石船乃泊師高津者淺爾家留香蒙

○契沖　津國風土記曰、難波高津者、天稚彦、天降時○神代卷
○云　從女、天之探女、石舟乘泊故、高津といふと也○に、天
ノいはくす舟と、見えたり、是は、石舟と書しも、おなじけ
れば、ある說に石楠舟にて、楠をもて、造りシ舟也といへり○
神代の事楠にて造りしとも、さだには、申がたし、くすといふ
名になづみて、しかいふは、後世の人のより所也、おほかたの考
字により○いはくすは、齋奇の意、天乃齋門のごとく、唯いつき
などす也○たる名にて、儀理字訓にては大にたがふ也、文字なか
りし神代な○久方は。冠辭發考に
ればなり くはし。こゝに略す

鹽干乃三津之海女乃久具都持玉藻將苅率行見

○(?)容禮物かたりに中納言は。きぬのあやを。糸のくゝつに入○
てこ供養のやうにてこ所ばかり。奉り給ふとみえたり
說 に久具都ハ裏○莎草とといふ草にて、籠のごとくつ ○俗久古
ふは莎繩○くゞつはもと、馬の口に、沓をはますると(い)ふぞ、繩とい
をいふ也○はじめなる、藁の繩をもて、造れり籠のごとくにし
て、馬の口に○馬人に、くらひつかぬため、また道ノゝに一草を
かふらする也○はお故、道をいそがねは、沓を馬の口に、かふ

らする、 口沓を、略して、くゞつといふ 驛の賣女を、くゞ
具なり ○を莎草にてつくると、誤しなり○つといふ、馬屋の
女故に、いへるなり、 ○海女あまとよみしを○其口沓に、藻
行來の人に喰付意也 よしといへり をかり入る
と、めづら
しくよめり

頭註 糸を入る具也

頭註 袖中抄に 藁にて袋のやうにあみたるもの也と云るにおな
じ

○詠不盡山歌一首并 短歌

∧奈麻余美乃甲二行 出之有之は、立の誤り いでたてる也 ○言不得此よみ雅なら
ず、いへばえにとよめるも、 ○名不知又、なづけもしらずと
いかゞ、猶考あるべしや よめりしもいかゝ也

○座神の、御名なれば、御名をもし ○水乃當烏は焉の○此
らずとかよむべしや、猶考べし 誤と云り 句、
わきがたし、今按に、河とあるによりて水は瑞の借字河 八、
水の邊の、意としても、しかとせざる也 の緣語也 當 富
の誤り字みづのとめるを とよまんか、寶ともと、うけし緣語
似たり にて、瑞は、玉とほむるがごとし、
富は、山の高 ○日本之山跡國乃日本を、ひのもとゝ、よめ
きをいふ也 るは、文字よみとて、字訓
也日本を、やまと○是は、日の本と書て、やまとゝ、よめると
ゝよめるが、訓也○いふ意にて、かくよめりしは、たへなり
後世、これにならひて、やまとゝは、いはずし○日本武命な
○て、日のもとゝあやまりいふ、はじめなるべし どゝ、いに
しへはひのもとゝ
は、いはざりけん

頭註 もろこしのから紅に咲にけりわか日本のやまとなてしこ
昔撰集ありしに此歌この日本のとしてくはへんと有しをよ
み人うけずして入れざりしと云り

頭註 富如南山と云意なるべし

頭註 富富おなしよみなれば難なかるべし

○或娘子等贈裹乾鰒戲請通觀僧之呪願時通觀
作歌一首

∧海若之奥爾持行而雖放宇禮牟曾此之將死還生

難歌にて、註なけれど ○禮ハ禮記の、らいを略
しひていふもいかゞ して、禮を、らとし ○宇禮牟曾
とよむ ○盂蘭にて、うらぼんには、なき魂の、かへるなどい
べし へども、かくほしたる鰻の、いかでか、いきか
へらん○又、かくほしたる鰒を、海に放とも、いかで生かへら
と也 む、されど、うらぼんには、なき靈のかへるといへば、
よみかへら○此うれらんを、いかにぞといふ意に、いかんぞこれ
んかともか がよみがへらんと、いふ意にとりてよめりしは

△十一卷 平山子松末有廉叙波我思妹不相止者、
十二丁
上下せしや 此歌は、右の歌を○右は、うらんとよめる○是は
とりてよめりし故、たがふべし○をうれんとよめりし也○いか
んぞと、いふ意にしても上○海若山海經に、海若は○海はい
下かけ合ざる、歌なるべし 海神なりと云云 つも變

化なければや海若ときしならん　○將死還生を、よみちかへらんとよむべし、蘇生をよみがへるとよめり

○右の有簾を、いかにぞといふ意に、よめりしは、よりどころありやいかゞ、集中にはなし、此外あまたの歌に見えず

盂蘭は、七月僧を供養する事といへり、魂祭は、十二月卅日なりしを、佛家のうらん盆に混じて、七月とはなりけん、されど菰むしろをしき、杉かきをし、供物は、かはらけにもるなどは、佛家にせざる、わざにて國風の殘れる也、法恩經にも、さるよし也これを思ひ出てとしのはしめに

あら玉の、としのはじめを、いはふこそ、王まつりせし、名殘なるらめ

頭註 盂蘭ニハ僧ヲ供養スル也、死靈のかへるを祭る事後世の誤也されともむかしよりかくあれはさる意にてとく也

頭註 靈を祭る事十二月晦也

頭註 ○宇禮乎曾をいかんそといふ意しかとあらはいかんそといふ方まさるへし此詞わきかたけれはまづかくいふ也

頭註 ○うれんそをいかんそといふことは何によりしか古今註せしも見えすあやしけれは誤りとしてとくへからす

○山部宿禰赤人歌六首　三十四丁

〽美沙居石轉爾生名乘藻乃名者告志五余親者知友（ミサゴヰル、イソワニオフル、ナノリソノ、ナハノラシヨ、オヤハシルトモ）

契沖 八、ヨとよみて　眞淵 八弖の誤とし　のらしてよ
○云 五、告こそしとよめり　○云 五て告志弖餘を○とよめり

○今按五ハ吉ノ口、脱したるべし、余は、謄余をナハノラジアいはれとよめれば、余を、禮とよみ 名者告志吉とし、おやはしるともとよめば、やすからん、此歌は、○名余相聞なるを、まかひてこゝにくはへしかといへり　○のりそは、なゝ海草なるを、梓弓、ひきつのべなるなのりそ、とよめりしを、野べと註せしも、あやし

○安部廣庭卿歌一首　三十五丁ウ

〽雨不零殿雲流夜之潤濕跡戀乍居君待香光（アメフラデ、トノグモルヨノ、ヌレヒヅト、コヒツヽアリキ、キミマチガテリ）

○眞淵云潤濕を、月待跡と改、戀を、立の誤として、月まつと、たちつゝをりき、とよめりし也　○宣長云、零は霽の誤として、雨不霽とし、あめはれずとよめり　○雨晴ざるは、降にて、くもるはもとより、依て、曇とはしかたし○曇るは、雨降んとするけし(き)をこそ、いふべけれ、似よらぬ字に、かへばたがふことも侍るべし　○潤 儒須切音閏濘潤也又濘也濕也益也　濕托合切日水之名後省作溼遂以濕下略此一字、よみとりがたし、殿々もる夜のごとく、といふ意なれば、しめ〳〵と、などよまんかし　○光ハ弖里約め、知君待、まつ也○雨もふらずして、くもるよのごとく、はれ〳〵しからず心しめ〳〵と、待がてに思ふ意か

○山部宿禰赤人登春野作歌一首幷短歌　三十六丁（日山ニ可作　野ハ山の誤）

〽春日乎春日山乃（ハルノヒヲ、カスカノヤマノ）まへに、日本之、山跡國と、よめりしことく、これも春の日と書て、かすがとよむと、いふ意也○此人のはじめて、かゝる事を、よみ出られしは、こゝにて、よくわかてり○春日を、かすとよめる、説はあれど、春の日の、かすむと、いふ意なるべし○容鳥能（カホトリノ）眞淵呼子鳥の、一名ならむといへども、よりところなけれ

ばしか○今按に、容鳥は、雲雀の一名なるべし、すごとに、
とせず○またなくしば鳴とよめるは、雲雀と聞えたり、さて、か
ほの保は、秀も、ほとよみ、又日出るともよめば、此鳥は朝日
の出るを待て、雲井に立ちのぼるをおもへば、日とゝもに、立
のぼるをもて、かほ鳥といへるなるべし、又容花といふも同じ
く、是は、俗に、晝貌といふ、朝貌に似て、晝もしぼまず、依
て、ひるがほといふ、朝貌も、日の出る頃咲故、かほといひ、
容花は、日にもしほれぬを以ていへば、雲雀なるべし、此外、
容鳥は皆、春によみてまなくさへ○此歌も、まなくしば鳴、雲
つるとよめれば、たがふべからじ○井なすとよめれば、考み給
ふべ
し

頭註　呼子鳥しれさるをたれ是といふもしかとせしとは申しかた

○大伴坂上郎女祭神歌幷短歌　三十七丁ウ

〵久堅之日二行　○忌穿居　或人說云忌部穿居は、太古、陶を、土
中に堀居て、醸せしまゝにて、奉る故
に、ほりすゑ○酒を造るに、土中に埋て、造る物にあらず、酒
といへりし也○造るわざを見しらずして、あこことといへるにて、
人をまど○保里の約比也、比○齋部は陶也、保里は觸也、神を
はする也○は邊にてふり也　○祝奉るにふれて、奉るの意故、
ほりに意　○竹玉乎祝詞に見えし詞也、是は竹は借字、寶○繁、
はなし　　に也、たからの玉なれど、奉ると也
𥿻貫垂　玉をいくらも、糸につらぬく也、しくは、しげき也、玉
をかず〵つらぬきしにて、垂は、貫し玉を、竹にか
けたれて、○神を祭るに、珍寶山海の珍味をつ
奉るなり　くして、いはふが祭事のもはら也○竹玉乎四十五丁長歌開無貫
垂とあるにて、必竹に付、垂るにはあら　押日ハ、
ず、竹といふ字になづみたる說なり　○押日取懸褄也とい
へるぞ　○折奈牟折は、祈の誤りの　○竹玉の事は、後進考
よき　みなん也と云云　に、くはしくいへり。
よりて。こゝ
にりやくせり

頭註　竹にとりかく故竹玉といはゝ松に付は松玉といはんやいと
あさましき事也

頭註　一說に竹をこまかに切て絹に貫て玉の如くすといへりしは
とるにたらし

頭註　竹をいかにすとも玉といふへからし故人いかにまとひてし
か思ひけん

○仙柘枝歌三首　三十九丁

〵霰零吉志美我高嶺乎險跡草取可奈和妹手乎取　此題歌と
はたがへるのみならず、仙とばかりにて
はわきかたし、歌も題も誤しものなり
宣長云　古事記　はし立の、くらはし山を、さがしみと、
○日。連總別王御歌○いはがきかねて、わが手とらする
此歌を轉じて、こゝに入○和の字を、契沖アワヤの、通音也、
しかといへり、いかゞ　和を、ヤと、よめるは、上三卷上
一丁秋柏、潤和川の。和を、○今按に　和は、わぎもてを
ヤと、よめるがごとしといへり○吾の借字にて
とる　とよむべし、やいもとよみし○山はさがしけれど、草を
ことは、見しらず待るべし　とるか、われは、妹が手

なとゝる〇はさて　險跡なも、さがしけどや、よおさき、〇又十三巻長歌
と也
に十羽能松原、綠子率、和出將見と
とよめりし、和も、吾の借字とおなじ

〇紀皇女御歌一首　四十丁ウ

〽輕池之納回往轉留鴨尙爾玉藻乃於丹獨宿名久二

〇納回を入江とよめれど、他に〇千蔭云納は汭の誤として、汭
入江てふ事は、なしと云り　回を、うらわとよめり、是も
また、池に浦和とよまんこと、いかゞ〇改て汭回と　みなわんか、よま
どにやと、ある人難じたるもよし　水
の輪ぐなごとく、鴨の、うきあそぶに、したがひ〇俗是を、
て、水のめぐりて、輪ぐなごとくなるを、いふ也〇うづまく
といひ〇水わくなまで、老にかけるかなとよめりしは、老女の
へり〇白髮おどれて水の、輪ぐなごとしとたとへてよめり
〇水沫也　みなわの意

頭註 鳴門のうつしほとよめりしうつとおなじ

〇佐伯宿禰赤麿更贈歌一首　四十二丁ウ

〽春日野爾粟種有世伐待鹿爾繼而行益乎社師留烏

〇宣長云　烏は戸母の誤〇やしろしろともよめりしなり〇千蔭云　粟まくを、待は鹿のごとくに、
あはまかましに申あかれて、通はざぬといふ〇今按粟は逢といふ意に
にて、社は神といふにおなじ、と見えたり〇に
よみし〇おふといふ、粟をやくな鹿の待ちはまんと、
なり〇野に行ごとく、つゞきてゆきかよはましと也〇社師
留烏一説に、神師留焉として神しとおるを、とよめり、こは何
れも意はおなじけれど、社のごとくしめはへて、とゞおる
とも、越て行〇此社といふに、本妻をたとへて、本妻の、しつ
かよはんと也〇とするとも、いとはず通はんといふ意なるべし
〇反歌に、とめたる神ぞ、よくよくまつるべし、〇されば社と
〇とあるは本妻をさして、とめたる神といへる也〇いふ方よろ
しくこそ侍れ

頭註 粟は逢んと待と也妹はしるとも行あはんといふ意也

頭註 社は屋知にて家宅の意也、家としの事にやしろしろとよめりし也

〇河内王葬豐前國鏡山之時手持女王作歌三首　四十五丁

〽王之親魄相哉豐國乃鏡山乎宮登定流

おほ君、かくれ給ふを、かゞみの〇此王、持統天皇三年八月、
山におさめたるを、よめりし也〇爲大宰帥されば筑紫に
て、かくれ給ふ故、
此山に葬しなるべし
〇相哉は、まへにいへりしごとく、詩經に、相をみればとよめりし也〇依一、おつたま見ゆや、とよまんか、鏡と
いふにかかりて、みるやとよめりけん、鏡山を、宮と定め給ふによりて、みたまも、見え給はんよし也〇宮登定流は御墓所也

頭註 親は皇親のむつにて王なれはむつ玉とよめりし也

〇三首目

△石戸破手力毛欲得手弱寸女有者爲便乃不知苦
二の句たぢからも○三の句たよわ　○延てよまば、たわやけき
がもとよむべし　き四言によむ　たをやけきともいふべし
○四句めをみなにあれ○手弱は、手のよわきにあらず撓の
ばと、よまんかし○意、たわ〳〵と、とを〳〵の意也

○石田王卒之時丹生女王御脱作歌一首　四十五丁ウ

〽名湯竹乃日二行玉梓乃、人曾言鶴　玉梓の人とは、消息を傳
使と、つゞ　妖言をよめり、流言にて、世間に
くにおなじ○於余頭禮可　及つるといふ詞也、とく人のいふ
意　久敝の約計也、曾計にて、略を、曾具とも、
也○曾久敝能極波夫久とも、よめるが如く、雲の、天を、お
ほひしも、はて〳〵になる　○悦詞に退立極、また天能壁立
を、そぐへとよめりし也　極、國能退立極とある、退に同
○巻四廿五丁天雲乃、遠隔乃極とあるを契沖○退散をしぞく
のあま雲の、そぐへの極とよむべしといへり○とよめるも同く
じ　○天有と四言によむべし、天にあるやい
かゞといふ意にて、天に有や也○左佐羅能小野
ノ小を、さゝといふは、さゝ浪の、さゝと同じ、上○さゝらの
之に、さゝといひもて小野とかけて、あやによめり○小野、天
にありげに、おもふことなかれ、さゝは狹野　相を、
を延、羅野等などゝ云らを、そへて云におほし○七相菅布とよ
みしは、いかゞと、難じたり、ある　味澤相、此相は、アフとハ
ふの、アを、略したるにやと云り○フと、音便也　布とのみは、
よみが○是は、相に、三十二相の、七相の○此齒齊を假て、葉
たしや○儀也七相は、四十齒齊遶、等相也　ひとしくといふ意
とせり、菅の葉の、おくれたる葉なく、
ひとしく揃たるをほめいふこと葉なり
○依て七はなみすげと、よませり　○說に、七節菅といへ
相を　葉並をいふ　ども、菅に節はなし
○七經にて、利府の菅莚のふ　○菅經は、すげをあむ婦也、
と、おなじく、いへりしも有　菅の七婦と、いふにはあ
らず、あみめを婦といふ也、依て、七○葉並菅とは、きゝよか
經すげとは、つゞかざるとしるべし　らねば、何とかよみ侍
らん、後案
をまつ也

頭註　白菅とよみしをおもへは等相といふをもてしかすげのとよ
まんか考ふべし

頭註　眞淵の七ますげとよまれしを久老云師のよまれしに相なま
とよまんことといかゝと難じたり

○溺死出雲娘子火葬吉野時柿本朝臣人麿作歌二首　四十八丁

〽八雲刺出雲子等黑髮者吉野川奧名豆颯
雲は、立なびく、かく　さすは、日ざす、さしのは　依て、是
かゝる、といふべき也○ゑなどにて、品わかちたり○も、立と
いふを、字の誤りと、しられたり、刺刑字似たり、刑
は、罪なふ意をとりて、立のかり字に、かきしにや○古事記
須、伊豆毛多祁流賀とあるをも、同じくおもふは、非也、夜都
は湯津と同、湯津は、夜都の約、米佐須は芽ざすにて、草木の

めざし出る、いきほひ、また威陵の〇吉野川の川は山の誤
意にもいひて、八雲の意には非ず　り、まへの歌
に、吉野山の嶺芽霧とあ〇川の奥を、峯より遠き所を、沖〇黑
れば、山にたがひなし〇といひし說は、信じがたしや
髪は、烟となりて、よし野の〇火葬の事道照を始
山の、おくになづさふと也〇とも、いはじかし

頭註　剝とかきしを刺に誤しにや

〇過勝鹿眞間娘子墓時山部宿禰赤人作歌一首并
短歌

古昔四句帶解替而　けさう人、帶をとき、衣服をかざりて、つまどふと也〇眞間之手
兒名之〇眞淵云てこなは、はて子にて、末子をい〇宣長云、
ふ、末子はおやの、いとしがるなどいへり〇愛子の
義にて子と〇又說に貴子の〇今按に手兒は褒詞にて、名は女
云儀也と〇意とも云り〇よき女とほめしことば也、信濃の、
石井の、手兒とあるは、〇さて、手木といふは、大石、大木な
女の字を略せしならん〇ど、引動かすに手木といふ物を以、
引うごかす也、〇さて、其石など、引うごかすに、よいてこと
それを手木と云〇いふ詞あり、よいとこ〳〵ともいふ、此手木
を、轉じて、〇さて、大物を、手木をもて、動かすによりて、
ところといふ〇まめことを葉として、手兒とほめて、大物とかり
用、大人はおなじ也、依て、是〇北國方言に、手木でかいと
は、大女とほむるを、手兒と云〇いふ、手木もて引うごかす
をいふ、でかいは、大也、かさねた〇上總のは珠名といふも、
る方言にて、いかいともいへる也〇玉女にて、玉は右の大と
同じく、美女とほめしことば〇此てこなは、美女のみにあら
也、女を、奈といふ本名也〇じ、大女とほめしは、人德の備
りて、貴女なるべし、玉女とほめし〇てこらさと、よみしも見
は美女なるべし、猶考もあるべし〇えて、是を轉じたるとし
ら　〇卷九　卅四丁おなじく、子なをよめりしに　直佐麻乎とあるを、註に作ハ發
る　字直麻也といへるは、
〇非也直は、
眞の誤なり

上總玉なの考

〇野洲等云安閑紀　別立三妃一立二許勢男人大臣女紗手媛弟香
香有媛物部木蓮子大連女宅媛中略春勅遣使求珠伊甚國造等
詣京遲晚。踰時不進膳臣、大麻呂、大怒收縛國造等と見えた
る珠は、上總の珠女なるべし、されどもしかともしかたしとな
ん、此文意を、よく味はひみれば、珠女とたがふ事なし、弟と
あるによりて紗手媛、香々有媛、兄弟めされしと、おもふは非
也、美女は、まれにて、兄弟美女なる事はたき事なり、さるす
くなき故、諸部の上總の珠を、求め給ふ也、此文意を、よく味
ふべし、さて、立三妃一とあれど二人にて、
壹人たらさる故に、珠を求給ふにて三妃也
此珠女は、國造などの、女なるべし、美女の聞えありしなるべ
し、此女、大臣家にならぶべき女にあらざれば、地名、郡名な
どよびて、めされしなるべし、此文意は、ことに、餘
情深を、見あやまるべければ、よく〳〵考味はふべし

不進とあるは、此女男にて、いたみ奉りしか、又親など、別うくて、奉らざりしにや、其事、足らざりし故、延引せしを、せめられしなるべし　むかしは、釆女を、諸國より、めされし故、これも、さるたぐひなるべし、此考は、野洲等の、書をねんごろに、見るかひにて、いといとめでたし

眞開手兒奈の事は、頭書にせし、萬葉十四の歌に、手こにあらなくにと、よめりしにて、男女稱の、ほめ詞と、たしかにしられたり、テコの約トコ也、とこをとめにて、と、よめりしも、いつもかはらぬをとめと、ほめし、詞也、此二考は、古今なかりしを、あざやかにしるも、いのちなりけり

日本紀通證云　安閑紀士淸註云　永々珠是眞珠也云云
續紀陸奥信太郡生王五百足々神名式志太郡敷玉早御玉神社
伊甚國造　古事記日天菩比命之子建北良鳥命伊自牟國造之祖ナリ略
士淸本文をいかゝよまれしか上總玉女は美女をいふ也伊甚は
和名抄夷灊郡夷灊

△手兒のよび聲などよめる○てこのよび坂も大聲してよびきかも大聲によぶをいふべし○せし故にいまもしかいふ也と云云
眞佐騰乎にて、まさをとよむべし○たゞさをと、よみては何まそのうみをと、つゞく意なり○とも、わかぬことば也○
眞騰
苧也

頭註　卷十四二十三丁ウ都流伎多知、身爾素布伊毛乎、等里見我禰、哭乎曾奈伎都流、手兒爾安良奈久爾　此手兒も、男の自分のことをよめり、大物にあらぬ、小人故に、なはくくよしによめり是にて大物の意をしるべししかく男をも手兒とよみしをいかで誤りしならん　右の歌を眞淵も等閑にみられし故にあやまりし也

○天平元年己巳攝津班田史生丈部龍麿自經死之時
判官大伴宿禰三中作作歌一首　五十一丁

△天雲之　五行　一手者　かたてに、はと○ドも、おなじく○又、みぎりにはとよか、ひと手ニキタヘマツリとよめり　○ドヽ、ひだりにには○まんは、俗意也和細布奉しぞよき○乎は平の、誤としてたひらけくとよめり○月日香此香を、宣長かぐはしとして四言によめりしかど、○下の、香君日香菌花の、香とよみしことなし、香はせぬ花也

之は、花のにほひにて香には○されぱもとのまゝによむべし○牛留鳥云眞淵あらず、にほひは、餘光也
牛は、牽の誤として　○今按　留鳥とあるにては、魚をとるには引あみのとよめり　いかゞ、留魚とあらばさも、よむべか
り○宇田乃高木に、鳴わなはる、又鳥細張○是は、あみと、よむきなどよみて、鳥なみ引とはよまざる也○べきよしなし、し
ひていはゞ牛の留るは、重荷になづみ、高く荷をつみたるを、て、うてども、引ども、歩ざるの意也○荷秀といふ意に、めぐらして書○秀を保とよめは鸊鷉の、借字に荷秀とかくべき○鳥しにや　を猶意を深く、牛留と、書しかともいふべし　○は、そのまゝにほとりのなづさひこん、とついにてにほとりのなどゞく冠辭なるべしや

○還入故鄕家卽作歌三首　五十二丁ウ

與妹爲而二作之吾山齋者、木高繁成家留鴨

〇山齋は王篇云 㢝 郞罪切山也ト云 〇此ノ字を、二字に誤り字 〇も、大にあやまりし也 仙覺、萬葉抄にも山腰と、誤りしなり、さ 〇山齋を、宿とよめて是も、傳寫の山齋と、あやまりもの也 〇りしも、齋は、齊と、同じく思ひてひとしともよめれば、山にひとしきは、家也と、いふ意にてやどゝ、よむべくいひしなるべし 〇かしわども、妻に別て、京にかへりて、庭のけしきを、まづ見てよめりし故、庭の山の木立、しげりしをよみたるべし、木は木高、しげりたるに、われ、は妻に別れ 〇妹とふたり見んとて、てひとりさびしと、わびたるさま也 作りしといふに、妹が死したるを、思へる也

[頭註] 類聚抄云齋を廬ニ改わがやどゝよめり

[頭註] 木高くしげるは榮ゆるをいふに妹かなきをしのふ也

萬葉集四殘考

○難波天皇妹奉上在山跡皇兄御歌一首　十一丁

△一日社人母待告長氣乎如此所待者有不得勝

註告八繼の意に告也と云り○一日こそ待とつゞけれ也、誤にはあらじ待は其時の儀也○一日は待よければ也、長く／＼まつはまちがたしといふ、つゞき也○所待者此所を、耳の誤とし、かくのみまこば、とよめりし說も、見えたり○有不得勝もとのよみ不決也、ありがてさらめ、とよまば、やすかるべし○又說ありがてなくもと、よめりしはいかゞと、思ひ侍られけり○難波天皇妹とかきしは、誤りなるべし、皇女となくては、皇兄とあるに、たがへり、天皇御子、皇子十王、皇女九女、おはしませり○此うち、いづれにかおはしますらん云云

頭註　妹とは先帝の皇女か考へさりし也

○岳本天皇御製謌一首并短歌　哥字加　十二丁

△神代從目六句去來者行跡　宣長云　去來を、伊佐とよみてはきこえがたし加餘比波行跡、とよめり四行目登の字の間に、六言脫せしといへるはいかゞ次にいふを見べし○今按俗に、方言に、歩行を、さりくといふ國あり、いまだしらざれど、まゝきゝ馴しなり○依去來を、さりくとよまんか○さりくればゆくとよめば、冠辭の意もよくこそ、侍らめ、又さりくは、とつゞめんかし○あぢのむらがり行かへる意也○寢宿難爾登宣長の、此字を難じて六言、脫せしといへり○千蔭云登は死旦の、誤としていねがてにして、とよめりしもよし○されど、誤るべき字ならずいかゞ○今按に登は蚤の字似たればあやまりもすべし○いねがてにのみとよめば、六言脫せしにも、あらじかし○味村の、行かふごとく、世人あまた、行かよへども、我が戀ふる君にあらざれば、待あかすと也

○反歌

△山羽爾味村騷去奈禮騰吾者左夫思惠君二四不有者

說にさぶしゑは、さびしよといふ意也、といへども、按るに○、惠は思のあやまりしか、思思と重ね書しにや○われはさぶししとよめば、きゝよからんか○味のむらがり行を、人の行にたとへ、其行人は、わがおもふ人にあらざれば、詮なしといふ意に、よみなせり○さぶしは、不興の意なりさぶしうの、うを、惠にかよはせしにて、惠といふごとき

○同

△淡海路乃鳥籠之山有不知哉川氣乃己呂其呂波戀乍裳將有

いさや川いざしらずの略也いさや川氣のとはつゞかざる也

○此歌、右のかへし歌と○宣長云氣は、日々ことゝ、呂は、乃○
○も定がたし、猶考ふべし○の誤、けのこのころは、とよめり○
上は助にて、いさや川いざと、いはんとつ○氣乃約、此也、
どくを略して、氣のごろと、よめりし也 ○頃を重てよめり○
契沖、氣は、水氣也といへども、
上助なれば、水氣とも定がたし

頭註 いさや川いさしらずといふ意はこもれるを味ふべし

○柿本朝臣人麿歌四首　十四丁

＼百重二物來及毳常念鴨公之使乃雖見不鴨有哉

○宣長云 二の句、きたりしけ ○とよみたれど、しけかもと○
かも、三の句とおもひかも ○いふことば、いかゞにや

結句の哉は、武の誤といへるも、鴨を、 今按に 百重の重は、
あか、あく意によむべくもあらじかし○經の借字、百千度經へか
よへ來よと、おもへかもなり ○結句鴨は 鳴の誤とし、なかざらむやとよめ
は、よからん、されども歎と、鳴
とひとしからねば、誤る○いく千度も、君が使の、來およべか
べからず、考たまふべし○もと、おもへども、かくなげくを見
せんが、はづかしければ、なかずあらんと、 ○なかざらんや○
おもへども、なげかるゝと、よめりし也 ○なげくとなり○
聲を立て、鳴のみならず、歎は、長息の意にて心にかなしく思ふ
が、顔色に、あらはるゝをもいふ也雖見とよめるにて、かへし
て、なげく
となれるや

○丹比眞人笠麿下筑紫國時作歌一首并短歌　此反歌

白妙乃袖解更而還來武月日乎數而往而來猿尾　十六丁

○宣長云袖を、ときはなして、互○千蔭云 袖は、紐の誤と
にかたみとして、行也といへり ○して白妙のひもとよめり
○白妙の紐とうち付に○袖を、帶の如解かは、觸の誤しなる
も、いひがたしや ○ふこと、集中になし○解べし、白た
への袖ふりかへて、とよまんかし、今按に、白妙の、袖ふりはえ
て、とよむべき格なれど 是は故郷にかへる時、錦にふりかへ
て、上身してか○筑紫にくだりて勤功のうへに上身して、衣
へらんの意也 ○の色まさりてめでたく、歸らんと祝したり○

數而は、上よりよみくだし、よからざ○白妙のそでをにしき
れば月日をよみて、とよむべしや○に、ふりかへて、月
日よみつゝかへ、○いふ意にて、故郷に、錦をか
りこましをと ○ざるといふをより所としけん

○草香孃歌一首　香脫今如　十七丁

＼秋田之穗田乃刈婆加香縁相者彼所毛加人之吾乎事
將成

の刈婆加の、はかは量也、刈人の、出情すれば、分量に○田夫、
こゆるを、はかどる、はかゆくといふ也、俗語に非ず ○稻な
ど刈て、いこふまに、よりあつまりて、人の上の○說に、稻を
こと、いひふらすらんと人口の拙を、よめりし也○刈積をも刈
てほすをも、しかいふ、 道を急くにもはかどるといふに同卷
一量二量といふなり　○十六 草刈婆可とよめりしもおなじ
○吾乎は、わがことならんとも、よむべ
し人のさゝやくを、きゝたるけしき也

○石川郎女歌一首　十八丁
春日野之山邊道乎與曾理無通之君我不所見許呂香裳
○契沖云　よそりなくは、おそりなくと註せり、おそれなく也　○巻十四、吾介余曾利とあるを、引たれど、これは、われによそるといふ意　○よそりは、よそふれにて、おなじからず○なくを、略したる也○古今集に、道行ぶりに、とよめりしごとくよそに、心ふれずして、通ひ玉ひしに、心がはり給ふにや、此ごろは絶て、見えたまはぬとよめり○觸といふ字をくはへて見べし

○京職大夫藤原大夫贈大伴郎女歌三首　十九丁
嬬等之珠篋有玉櫛乃神家武毛妹爾阿波受有者
○契沖云　神家武毛を、神さびけんもとよめり、神一字を、しかよまんか○次にも、神左夫とあれば一字にてはいかゞ
しか○今按に、家は、やどるともよむべければ○神家武毛とよむべく、玉櫛は、神とゞまり給○さて、みならぬ木には、神ぞつくとふ○妹にあはずしてふ意か○と、よめりし格に、よめりしならん○て、ほどふるましにあしき神の、やどらんかと也○此惡神は、こと男を、さしていふ○ぬまに、こと男やし給ふらんと、いふ意也○わが逢やどらんもといふ、もの○玉串と書は玉字にして、はたらく也○寄の借字なり

頭註　阿波受有者をあはさればとよむべし

○大伴郎女和歌四首　十九丁
佐保河乃小石踐渡夜干玉黒馬之來夜者年爾母有糠
宣長云黒の字は、古久の音を、とれりと云　黒馬の、來
○烏梅梅とかく如く、ぬば玉は、下の夜につゞく○るといふこと、もし馬にのり○今按に詩經周南卷之章曰我馬玄黄といふ　註に　玄馬病則黄也云云　○玄は黒也、黄は、玉と同じ藥師に○易之象坤之上六曰　龍戰于野二其血玄黄云云　釋　曰　玄黄者天地之雜色也云云　○黒馬黄變すれば、黒馬と書て大王とし、君とよまるべし○さてきみがくる夜は○とよめばきゝよろし○夜干玉の冠辭は、夜を隔て夜者に、黒馬するなるべし○契沖黒馬とよみて、冠辭のつゞきと此つゞく○しは、下の夜に心ゆかざりしにや　○小石和名抄細石とあるにおなり
じな

頭註　ある人小石をさゝれとのみよめるは非也細石はさゝれいしも也と云りされといひて石と聞ゆるにはりやくしても難すへからし

○高田女王贈今城王歌六首　廿二丁
事清甚毛莫言一日太爾君伊之哭者痛寸取者
○一二句のよみ、女王の、みづからのことに、よめるは誤也　○ことさやにいたくもいふなとよむべし、是は、人口をいへり、ことあらはに、いふことなかれと、いふ意、今城の王を戀るを、あらはに人のい

ふを、いふこ○哭は、哭の字似たれ君伊之哭者とよむべし、
となかれと也ば誤りしとして人口をはば
かりて、一日にても、君がくれてあひ奉らずは、心やましき、
きずとたるべければ、口さがしく、いふことなかれとよめり
○いがくれの伊は○忍び給ふ中を、人みとがめて、
そへいふこと也あらはに、いふことなかれと也

○二年乙丑春三月幸三香原離宮之時笠朝臣金村得
娘子作歌一首幷短歌　廿三丁

此題書改

三香原　此歌の結句　有與宿鴨○一説に與乞の誤としてあ○今按
りこせぬかもとよめり　に
宿は霜の字、似たれ　あるよしもがもとよむべし、秋の一夜
ば誤りしと見えたり　の、もゝ夜のごとく、
ながくあるよしも、○反歌に秋百夜乎、願鶴鴨、とあるに
哉と願ふことば也　あるよしもがもと、願ふに違なし

○丹生女王贈大宰帥大伴卿歌一首　廿五丁

古人乃令食有吉備能酒病者爲便無貫簀賜牟

○令食　食を、をすとよめるを以、二字○契沖云吉備にきび
をさせると、よめりしはよし○の國より出せる酒か
といへり　是また○今按に、吉備に、おほみきぶ○火御酒ぶり
しかともせぬ也　りといふを、略したるべし　にて、天子
より給ふさけめきて、よろしき酒也、とほめしなるべし、　大
備をぶりといふ意によめりしは、まへにいひしごとく也　○御
酒ぶりの、さけのまゝ給ふに、酒に醉ふしたる如く、戀煩ひて
[illegible]、さけをほめし也、[illegible]んすべなければ、戀の痛
を吐出さんによりて、ぬ○貫簀は、酒にかぎらず、しぼりこ
きすを、給はれとよめり　す具也、戀の煩を、しぼり出
さん○戯事に、よめりしのみにあらず、○一本痛を○主殿式に
と也○戀の情、いとふかくこそあれ　病に作る○年一請貫簀
云云　○酒をみきといふは、御食の計を、古に通はせいふ○陶淵
也、酒の名にはあらず、誤りし説も、見えたり　明黍
にて、酒を造りしなどゝ、わかぬ上は、くさ/\の
考出來て、はて/\は、よみとりがたく成ぬべし

頭註　ふる人のをさしめたるとゝまんかむかし人のきせしこと
くといふ意にや歌のしらべ今のみしことゝは聞えかたし

○大典麻田連陽春作歌脱二首　廿七丁

辛人之衣染云紫之情爾染而所念鴨

○宣長云　辛は　宰萬の、又説　辛は、○今按に辛は、宰の
二字の誤うま人のよめり、韓の誤りとも○に　字、似た
れば、誤りしといふべし、宰は、さちとも　是は太宰帥大伴卿。
よめばさち人、か、おほひ人などゝまんか○彼任大納言臨入
京之時府官人等餞卿筑前國蘆城驛家歌とあり○大古は、在
て、大納言にすゝみて、紫衣を、着すとしによめり○位にても、
ゆるされしこ○さて上京して上京の服飾なれこゝろにそみて
と、ありとぞ○ば、辛人と、ほめ祝したるべしは、深切をつく
す、こと○歌次の近者の者は、著の誤り、あ
ばたり　つけばとよむべし

○笠女郎贈大伴宿禰家持歌廿四首　三十二丁ウ

吾毛念人毛莫忘多奈和丹浦吹風之止時無有

宜長云多奈和丹を、旦爾祁丹と改めて、○朝ばかりにては、
○あさなけにと、よめりしは、いかゞ　やむ時もなしとよ
めりしには、かけ合がたしや今按　和は、知の○藤原の宮造
字似たれば、誤りしかたなしりに、とよむべしや○の歌に、身
もたなしらずとよめりしと同じく、掌也、身もわす○是も、たな
れ、掌に、おもふことなく、つかふまつると也　心に、しり
おきて、浦風の絶ざるごとくわすれ
じ、君もわすれ給ふことなかれと也

○同廿二首目　同丁

△不相念人乎思者大寺之餓鬼之後爾額衝如（アヒオモハヌ、ヒトヲオモフハ、オホテラノ、ガキノシリヘニ、ヌカヅクガゴト）

僧は、美味、禁淫事故、餓鬼執行の如く山○大寺の、高僧に
林に住て、情欲を、しらざるよしによめり　○もせよ、人情に
うとければ、其僧に、敬白するごとしと、たとへて、相思○契
はぬ人をおもふは、僧のごとく、情なしと、恨みしならん○沖
云、悪根を、示さんため○餓鬼を、寺に置くならば、今も有べ
ぬ餓鬼を、寺に置と也○し、いかなる形とも、いまだしらず○
ある人いはく、寺に、餓鬼置とも其○餓鬼としては、歌のこゝ
しりに、ぬかづきて、いかゞはせん○ろとけがたしといへり
○巻十六寺寺之、女餓鬼とあるは意こ○女がきは、男餓鬼に、
と也、同じく思ふべからず　○對したる也、大神朝
信が痩たる姿を、
そしりてよめり

○池邊王宴誦歌　三十五丁

△松之葉爾月者由移去黄葉乃過哉君之不相夜多鳥（マツノハニ、ツキハユヅリヌ、モミヂバノ、スギヌヤキミガ、アハヌヨオホク）

是は、宴する歌なれば、主を○月は不變なれども、みちかけす
祝して、めでたくとくべし　れば、松はまのあたり常磐かき
はなれば、松にゆづりおくとよめりさて松のとき○もみぢは、
はに、君は老せずさかりに、うたけし給ふと也　○過しとつゞ
く枕ことばのみ、君がさかり　○不相夜多鳥を、説まち／＼
の、過しや、過はせめと也　なれど、もとの
よみ、あはぬ夜おほきとよめは、難なかるべし、多鳥は、毎夜
宴し給ふ故、妻にも逢まさず、起あかし給ふらんと、いふ意
に、借字せしならん、多鳥は、毎朝鳴まで、○多は、爻の字似
あかし給ふといふ意に、かきしなるべし　たれば、又鳥と
かきて、あさ／＼鳴意かと思しかども、○契沖、黄葉に、うつり
もとのまゝにておほきとよむべしや　○し月影の、松の葉に、
移るを見れば、君にあはぬ夜もおほく、もみぢの、散過るが如
く、過ぬと註せり、ゆづりぬと、移るとは、いさゝかこゝろ
たがふべし、紅葉○かくときては、宴し給ふ意とも○鳥は、鳥
は冠辭なるべし　いふべからじ、好によるべし　○か焉の誤
りとも
いへり

頭註　鳥は鳩の略字なるべし八卷に戀のしけゝ鳩と有

○高安王褁鮒贈娘子歌一首　三十五丁ウ

△奥弊往邊去伊麻夜爲妹吾漁有藻臥束鮒（オキベユキ、ヘニユクイマヤ、イモガタメ、ワガスナドレル、モフシツカブナ）

伊麻夜ハ　契沖云、勤にて、魚をとりし○勞を、自分に、いそ
勞をいそしといへると云云　しとほめいふことは
あらじ、又いそしやの、やの字、○伊麻は儀にて、おきべゆ
さては落着せざるべしいかゞ　き、邊ゆきいそと、

つゞくしら○おきべ磯べやと、魚のあらんと、もとめし勞を、
べなるべし○上にいひたれば、いそしき意には、あらざる也
○ある説に、束鮒は、藻にふし、こもりたる、一つかほどの、
鮒也といへり、是は、わらつとの内に一束に、こめしを、つ
か鮒と○藻にかくれ、ふしたるを、志らで、おき　麻はまそうち
いふ○べ磯べをもとめがたかりし意をよめり　麻はそといふ
にて麻をそ
とよめり

頭註 いまやとよみては意とけかたし

頭註 おきへは海上をいへども湖上などのおきなるべし

頭註 大海には鮒はなければ湖水などなるべし

○娘子報贈歌二首　本書脱　三十七丁

〽幾許　思異目鴨敷細之枕　片去夢所見來之

○此初句、いかばかりとよめれど、何許とあら○契沖云、不の
ばさもよむべし、こゝたくにとよまんかし　字脱し、枕不ニ
片去二也と、諸註も、○眞淵云、卷五に、麻久良片受提、いめにし
おなじくいへり　見えんとあるをもて、是も、枕さらずての、
誤と○宣長云　卷十八に、夜床加多古利の、古は左の誤○今按
せり○にて、床を片去りてぬるといふに、同じと云り　○に
枕を、片へにさりて手枕をかはして、○されば、もとのまゝ、かた
ふたりぬると夢に見え給ふと也　さりとよめるを、よしと
すべ○結句の、來之は、來りしといふ字意にはあら○夢の間に、
し　ず、見えけりといふ意なり、來之の反寸也　二人ぬると

いふをくはべて、
落着すべし

○湯原王亦贈歌一首　三十七丁ウ

〽直一夜隔之可良爾荒玉乃月歟經去跡心遮

○契沖云心遮の間に、不の字、脱せしと○遮は、蔽又、蔽又、
て、こゝろはながす、とよめりし也　閉也、と見えて、お
ほふ意なれば、おぼつかなき心いぶかしとよむべし、一夜へ
意なるべし、さらば心遮を　だてしを、年月久し
く、逢ざるやうにおもふ、わが心　三十九下言借
の、いぶかしさよ、よめりけん　○吾妹とおなじ

○大伴宿禰駿河麻呂歌一首　三十九丁

〽不相見而氣長久成奴比日者奈何好去哉言借吾妹

○契沖云、齊明紀に、好在を、さきく、とよめるを以、○今按に、
好去を好在の、誤として、さきくとよめりし也　字を改ず
してよむべし、意は、好は、すきとよめり、去はいぬとよ
めり、好去をつゞめて、すぎぬや、とよむべく、おもふ也
○此ころは、何をして、過給ふや、われは相見ずして○次の、
へぬれば、わびしく戀くらす、といふ意なるべしや○答歌の
意、又註の文意に、あ○好去は、過の借字、過は、へぬる
はせ見ればしるならん○意いかにへ給ふといふに、おなじ

頭註 次九丁ウ好去好來とあるおなこと

○大伴坂上郎女歌一首　三十九丁ウ

〽夏葛之不絶使乃不通有者言下有如念鶴鴨

○宜長云、夏は、蔓の誤り ○今按に、春生冬藏とて、春は生、
として、はふとよむ也 夏は茂り、秋實入、冬藏に納にて、
夏は、草の茂る故、夏葛と書て、　○不通有者とよみしはよ　○
はふくずとよむこそよけれ　からじかし
言下有如とよむべし、古事記に、高倉下をたかくらしと、よ
めるがごとし、依て、下をしとつゞめ、よむべかり
け○此句にて、うけ歌
るをこたへし也

○大伴宿禰駿河麻呂歌三首　四十丁

△不念乎思常云者天地之神祇毛知寒邑禮左變（オモハヌヲ、オモフトイハバ、アメツチノ、カミモシルカニ、サトトサカハリ）

○神祇を、あまつ神、くにつ神、とよめば、○千蔭云　此結句、
こゝも、神祇を、神々とよむべし　さとれ、さかはり
てふを、契沖はさとれど、かゝることは、なき也、誤りならん、
心みにいはば、うたがふなゆめといふことば、あるべきなりと
ぞ○寒は、左牟と、かなに用たれば、○結句をばよ　○神祇毛知
しらるらむと、よむべしと云り　まざる也
と、句を切べし、もとのよ○邑は吧の字をか○寒をは、左とよむ
みにては、句つゞきがたし　くかきし也　さむ
の略言、寒河江氏、といふ○寒吧禮とよむべし、しか　○左
をさかえと、よめると同じ　あれといふ詞也
とよむべし、右の左に、變じたれ○歌の意は、思は人を、
變ば、もとはなくなりし、といふ意也○おもふといはゞ、いつ
はりなりとて、○おもふ心に、僞のなきは、天地の神々、上
請ひじと也　○らんましませばいつはりは、いはざると也
○されども、しかおもふ情の、目に見えざれば　○おもはぬ
おぼつかなく、心もとなしと、おぼさんと也

を。おもふといはゞ。あめつちの。神〳〵もしる。
さはれもとなさはあれを、略した○集中、もとなといふ詞、
り、又阿の字脱せしか○みなおぼつかなき意に
用た○寒を、さもとよみ、さもはれと
り　もよむべし、またく考へし

○湯原王歌一首　四十二丁ウ

月讀之光二來益足疾乃山乎隔而不遠國（ツキヨミノ、ヒカリニキマセ、アシハヤノ、ヤマヲヘダテテ、トホカラナクニ）

○足疾の、疾を、引とよみしこと、見えず○古說は、とるにた
冠辭なりとおもひて、よみ誤しならん　らざれば、もらし
ぬ○疾は、ときとよみて、はやき意に用ゆれば、足疾を、足は
やきとよむべし、足はやといふ、山ありしか、わかずなり
にけ○歌の意は、山をへだつれど、足疾といふによりて、遠は
ん　あらじといふ心なるべし、されば、足はやといふ名は、
山の名○風はやなどのこ○註に、月讀は、月夜持にて、月弓
ならん　とゝたるべし　尊、月夜見尊、などといへれど、こ
れは、たゞ月夜よしと、いふを略してよめりし○足疾と、遠か
也、月夜よし、よき光にあれば、きませと也　らぬとは、か
け合ふことばな
るを、思ふべし

頭註　足早といふか、歌の要也遠からなくにとかけ合せし也又足
からの山ともよむべけれどさては結句にかけ合がたし

○大伴坂上郎女從跡見庄贈賜留宅女子大孃歌一首
幷短歌

△常呼二跡日　三句　小金門爾（トコヨニト……カナドニ）　此句、古今讀々おほし、契沖、安康
紀ニ云、訶那杜加礎かなどかきとあ

るをより處に、金物など用ひし門の〇此句、解ざれば、意〇し
事といへりしを、よからじといへり〇しかとわきがたし　〇ひ
て、今按ずるも、いかゞしけ　とよみて、悪、不
れど、いはされば詮なしとて〇小金門爾祥の、借字なるべ
ければ、不〇常世の國など、遠く隔て行ざれど、住家をはなれ
祥杯の意か　一、女子にもあひ見ずあるは、さがなりといふ心
か〇悪、不祥を、さがとよめり、さがは、よろしから〇小を、佐と
〇ぬといふ意、さがなしといふ時は、よろしき也
よめるは、小浪を、さゝ浪小石かくては、よしあし〇金門と
を、さゞれ石と、いふがごとし〇意は、きこゆべし〇いふと
はおなじ
からじ

頭註 金門といふはこれと同しからぬ也あはせ云べし

頭註 此歌心にまかせされはまたく考のはしともと書そへし也

〇又大伴宿禰家持和歌三首　五十一丁

△今時有四名之惜雲者無妹丹因者千遍立十方

〇有は、者の誤りとい〇今按あらはれし名のをしけくもなし
〇ふ説は、いかゞしに　と、つゞくべき詞也

〇今時なりしといふ、字意は、時のい〇もとのよみにては、歌
〇たれる儀にて、あらはるゝ、意也　のこゝろ、とけがたし

〇結句ちたび立とも、しよ
〇めりしも、よかるべし

〇同坂上大嬢贈家持歌一首　五十一丁ウ

△春日山霞多奈引情具久照月夜爾獨鴨念

〇同卷　五十九丁ウ

△情八十一所念可聞春霞輕引時二事之通者

〇同卷八　十九丁ウ

△情具伎物爾曾有鷄類春霞棚引時爾戀乃繁者

〇古說に、具久は、くゞもる、といふ詞也〇具久、又具伎、と
〇と、見えたり、是は、曇の、轉語なるべしかきたれば、上を
濁りて、ぐゝとよむべし、和訓は、ド〇關東方言に、押附たる
を濁る例也、されば是は俗言にや〇物の、うごくを、ぐき
つく、ぐきくす、〇又、胸の具伎つくなどもいふ〇集中、此辭
などいふなり　〇也されば、俗語とやいはん〇見えざれば
時あたりて俗〇心うき意にも、聞ゆればくゞ〇より所考得ざれ
語を用しか　〇もるといふに、同じからん〇ば、考給ふべし

〇同五十三丁ウ家持の歌に、久流比爾久流必とよめり、是
らも、俗めかしき詞にて、歌にはまづ、よまぬなるべし

〇又家持和坂上嬢歌一首　五十一丁ウ

△月夜爾波門爾出立夕占問足卜乎曾爲之行乎欲焉

〇宜長云結句の乎は、卷の、誤りと〇今按乎は牟の字、似た
〇して、ゆかまくを、ほりとよめりに　れば誤りしに

〇焉は爲の字、似たれば、〇行牟欲焉と改めよ
や　是も誤りとし　いかゞ

〇更大伴宿禰家持贈坂上大嬢歌十五首　五十二丁ウ

△吾戀者千引乃石乎七許頸二將繫母神之諸伏

〇契沖云神のよりまして、ともねし給ふをいふか、〇千引の石
をくびにかけたらんほどの、くるしき心はすれどもと云々

○神の、ともねし給ふ故に、逢がたきといふかと也此註わきがたしと云り○今按に神代卷曰。千引石引ニ塞其黃泉比良坂ニ其石置レ中各對立度ニ事戸ニ之時と、あるをとりて、一石を、千人して引ほどの、大石を、七つばかり、頸にかけんは、くるしきたとへに、ひきたり○其くるしさは、忍ぶとも、二柱の神のごとく、○夫婦中絶で、もろふしせざらんは、中々くるしきとよめり○事戸、わたし給ふ時をもて○たとへ、たくましくよめり

○同卷　十四首目　五十四丁

△夜之穗杼呂吾出而來者吾妹子之念有四九四面影二三湯

○宣長云　初句は、夜の明方、うす／＼と、明る時をいふ、卷八に夜のほどろにも、明わたるかも、とよめり○呂は、そへていふことばなりとぞ○千蔭云　念有四九四は、またく、おもふらしきといふに同じ、末のしは助なりと云

○今按に、四九四は、しげ／＼にて、しく／＼といふも同じ、しく／＼を略して、しくしとよめり○しく／＼と思へる故にやおもかげに、見ゆるとよめり○又おもふ故にか、しく／＼面影の、見ゆる意か

○紀女郎贈大伴家持歌二首　五十五丁

△神左夫跡不欲者不有八也多八如是爲而後二佐夫之家牟可聞

○八也多八を、八多也八多と改てはたやはたと、宣長よめりし也○此外說々好によるべし○神さぶは、ふるびたるにて、としよりしを、いふと也、男にふるされしをもいふ也○不欲者不有とよみしをよしと云り○今按に、多は、夛の誤りか八八をのべて、夛とかきしなるべし○さて八也夛八つとして、はつはつにとよむべし○つ／＼は、はて／＼の意にて末いかならん、といふ意にいへりし詞也○男にふるされしはて／＼○は、さびしからむと、なげく也○歌の意は、神さび、ふるめかしく、おぼさすばあらじ、おぼさん、といふ意、さてふるされしはては、いかにかならんとよめりし也○略解に。老たりとて、いなにはあらねど、逢てのち、戀心うつろひてあらんとき、さびしからむとゝけり

○大伴宿禰家持報贈紀女郎歌一首　五十七丁

△夢爾谷將所見常吾者保杼毛友不相志思諸不所見武

○宣長云神代紀に、祝を、保佐枳とよめると、おなじからなといへり○紐ときてぬれば、戀しき人の、見ゆるを相思はぬ中故、見えぬと云、說あり○此保杼毛友を、紐の事と誤りいひし也○今按に、保抒毛の、毛は、本の草字、乇と書しを毛と、誤しか、又は毛は、穗也、毛を穗の借字にせしか、いづれ、ホドホドモとよむべし、殆にて、歌の意は、夢にだに、見まほしく、ほと／＼思へども、相思はねば、見えざらん、といふ、ほど／＼も也○相不思者とありしが、みだれてかくなりけん○志は、者の草字、志也、志とまがひて、うつし誤りつらん○さて上下すれば不相思者となる○一本、結句、不所見有武と有の字有を、よしと云り

○大伴宿禰家持更贈紀女郎歌一首　五十八丁

〈板蓋之黒木乃屋根者山近之明日取而持將參來（イタブキノ、クロキノヤネハ、ヤマチカシ、アスシモトリテ、モテマヰリコン）

○諡云、此歌と、次の歌は、戀の歌に、あらずといへりし也○宣長云　取の上に、伐の字、脫したるか、あすきりとりて、ならんと云　○屋根蓋なればそぎ板也、○伐にきるべきに非ず　○板ぶきの屋根は、あらしなどに、やぶられて、荒ぬるとも、山ちかければ、あすもとめ、ふきかふべし、ふたりの中の、あれしは、すむべきよしなしと、たとへたり、かく深情なるを、戀になしと、いはんや

〈黒木取草毛刈乍仕目利勤知氣登將譽十方不在（クロキトリ、クサモカリツヽ、ツカヘメド、ユメシリニキト、ホメムトモアラズ）

まへの黒木は、欅（クレ）也、又榑トモ、是は厨屋（クリヤ）木也、かまどにたく薪をいふ、黒木うりとて、八瀬大原女の、うる黒木と同じ○薪木もとり、草も刈て、つかふまつらめど也　是は、釋迦の、菜摘水くみといふを、より所によめりし也　○勤知（ユメシリ）氣登（ニキト）此知は、和の字、似たれば、誤しか、さらばいそしき、わけとよむべし、いそしきは、黒木とり、草をも、君がためには、からましを、さほどつとめても、いそしき我とほむる人なしと也○我氣は、我也、わがのかにやあらんか、妹がため、しかつとむとも、ほめたまはじと女のつらきを、恨みたる、けしき也　○十方不在（トハアラジ）とよまんこそよからめ、かくても、戀の歌にあらじや

頭註　勤ハ勤誤カ

頭註　ほめん人はあらしといふ意ならん方者とよむべし

○卷八五十四丁目　太上天皇御製歌一首

〈波太須珠寸尾花逆葺黒木用造有室者迄萬代（ハタスヽキ、ヲバナサカフキ、クロキモテ、ツクールヤドハ、コロヅヨマデニ）

○同　天皇御製歌一首

〈青丹吉奈良乃山有黒木用造室戸者雖居座不飽可聞（アヲニヨシ、ナラノヤマナル、クロキモテ、ツクレルヤドハ、ヲレドアカヌカモ）

此二首の御製は、むろほぎに、祝し遊ばせしなるべし○黒木は延喜式に檜榑、榑（クレ）○和名抄欟は木の荊の如トモ○むかしは、此木、澤山にありつらん、後世、伐（キリ）つくしけん、檜よりも、朽ざる木にて屋根に、專ら用ひしと見えて、よめりしとしらる

○榑を、久禮と訓（ヨム）、久呂と通はせ、黒木とよめる也、久禮は暮といふと同じければ、檜の訓（ヒ）、日と同じきを以、日（ヒ）と暮（クレ）と、對したる、名なるべしやいかゞ○厨木（クリキ）も、ひゞき同じければともにくろ木といふ也

頭註　信州クレ木と木をそへて云り檜をもくれといへり

〈中務内侍日記　大嘗會の辭上下略

△明ゆくに見れば、小柴あちこちに、おほくゆひまはして、黒木の鳥居、あまた立たる、めづらかに、おもしろきに、かゝる公事の、おんけいきを、みのこしたらましかばと、こはりなく、けふまでのこと、見つるもうれしくこそおりがたく、ことはてゝ、あふべきにも、あらずと見えたり

△黒木の鳥居は、厨木（クリキ）のごとく、山より、伐（キリ）出しまゝ、皮もさらず、立給ふなるべし、野の宮も、これを移して、齋宮の、御

殯の、かり殿なれば、槫など、木をゑらびて、造り給ふにはあらじ、厨木を、御竈木といふとぞ

萬葉集五殘考

○日本挽歌一首 并短歌脱 目錄筑前守山
上臣憶良悅歌一首并短歌　挽誤作ㇾ悅
目錄無日本二字淡文序對而日本書哉不當云々

五丁

△大王能六行目 ○迦多知波阿良奈乎○宣長云、迦多知波は死
尸にて、家にあらば、
葬らずして死尸の、　○家にありとも、葬らずし○今按に、古事
あらんといへり　○て置事、なきわざなり　記曰、火遠理
命登香木以座、爾海神之女、豐玉毘賣之從婢、持玉器將酌
水云々　此從婢を、まかたちとよめり、側ちかく、つかふる女
な、い○故郷の家にあらば、まかたちも、知緣の人も、あるべけ
ふなり○れど、任國のかり住故、さる人もなければと、なげき
た○此歌にて、手づゝなるを、なけかれし
り○さま、おもひやられて、いとあはれ也○自分は、なけかし
えざるべきに、たすくる人なけ　まかだちの、まはそへ詞也、
れば、いよ〳〵さまよふべし　○迦多知は、傍の都知通ハヤリ
傍立の
意にや

○反歌　三首目　六丁
△久夜斯可母可久斯良摩世婆阿乎爾與斯久奴知許等
其等美世摩斯母乃乎

○一説に、あをによしは、久老云、阿乎、○今按に、奈良
あなによしたりといへり（阿那同意と云々○を出てし時に、
國〳〵の、美景をも、見せん物を、かくみじかき、○されば、
命ともしらずして、見せざりしが、くやしとなり ○青丹よし、
奈良を、出來しといふ意を、略して、くぬ○辭をつくさずし
路とは、よめりけん、さすればならの冠辭也○て中〳〵、優な
るべ○青丹吉のこと、古說むつれがましく解たれば、今按に、
し○青は借字、あふぐ、あをおく、などいふは、天をいふこ
とば○丹は土地、依て此○奈良はならしにて○天地和合し、須
也あをには、天地也○世間おしなへて也○氣よければ、萬
物ならして、よしと冠せしなるべし、平を奈良とよめば、天地
泰平の、意ならんか、依て國路（クヌチ）と、かふらせしとしられたり

頭註 〔〕を見るにあをなくといふにてあをは天也

○梅花歌三十二首　十六丁目

〽波流佐禮婆許奴禮我久利弖宇具比須曾奈岐弖伊奴
奈流烏梅我志豆延爾

○眞淵云　木奴禮は、木闇隱と改○伊奴奈流は、鶯の梅の下枝
○てこのくれがくりと、よめり○にやとりて、ぬるをいふ
○と見えたり、木の下闇は、木の葉しげりて○木のくれかくり
○こそ、いふべけれ、花さく時には、いかゞ○といひて、又、
下枝にやとるといへ○宜長云　木奴禮は木末な○今按に、木ぬ
るもあたらじかし○り伊奴奈流は往也と云り○れは、梢なる
事、集中に見えたり、かくりは、かけ○鶯の、春來たれば、谷
りゆく也かくるゝかける也かくりゝかける也○を出て梢をかけて、花
○のあたりに、など○隱るゝ意にときては歌○伊奴奈流はいぬ
りすゑらんと也○のこゝろ、わきがたし○る意なるべし

頭註 伊奴奈流は眞淵云如く、梢かけり鳴くらし一下枝にぬるとい
ふもよろしからん

○書殿餞酒日倭歌四首　廿五丁

〽比等母禰能宇良夫禮遠留爾多都多夜麻美麻知可豆加
婆和周良志奈牟迦

宜長云　比等母禰能、此母禰を、今按に、集中、方言まお
○禰那の誤として、人皆のとよめり○りぬれば、是も、西國の
方言にや、人もねは、人まね○大伴旅人、大納言にすゝみ、上京の、
ねといふことゝ聞えたり○餞別に、よめれば、人〳〵別を惜む
中に、念頃におもふ心の、目に見えざれば、人まねと思しめさ
んさるに依て、龍田山近づかば、さぞうれしくおぼして、我し
たふ心をも、忘（ワス）れ○人なみならず、深○結和周良志奈牟迦
給ふなるべしと也○情をこめし歌なり○句和周良志奈牟迦
は、次の丁和周良延爾家利と有と同じければ、志は、延の
の始の歌に和周良延爾家利誤りか、わすらえなんかなるべ
し○良延の反、禮也○わすらしなんか、とよめり
や○わすれなんか也○しこと集中になければ也

頭註 龍田山ならに近ければ也

○三首目

伊比都々母能知許曾斯良米等乃斯久母佐夫志計米
夜母吉美伊麻佐受斯弖

多乃斯久モ、多乃約ト也、たのしくもといふ○宣長云、斯は、やまさらんか、酒をのみたのしむ心なるべし阿の誤、等乃は、志万の誤り、能知許曾○と改て、のちこそあらめ、○今按に、阿良米、志萬斯久母○志ましくも、とよめり　○等乃の乃は、及の字似たり、及の音をかりて吉の借○又、ともしくもと、字とせしか、さらば、ときしくもとよまん○いふ說もあれどこゝは、ときしくとよむべくこそ、別れしのちにこそ、君まさゞれば、さびしと思しるらめ、今はかく、視しことまぎれて、さもおもひ侍ら○等及斯久母はときじくに、雪はふるとふ、とず、とよめり　よめる如くいつもさびしからんといふ意也○及の字を、岐とかりしことありや、しかとも定がたし

頭註　此初句上下かけ合さるべし後按

○好去好來歌一首并反歌二首　三十一丁

〽神代欲理八行　○宇志播吉伊麻須古事記曰、建御雷の神、天降て、大國主神に、とひたまはく、汝字斯波計流、葦原之中津國は、我御子の、しろしめさん國と、ことよざし給ふと云々○うしはくは、鎮護し給ふを、いふとのみにて、　今按に、宇志は、美に　播吉は、はく意をのべざりければ　○てうまし國と、褒也　○ともいひて、はくは、養育也、はぐくむを略して、はく、はきとも、よめり、國をはぐゝみ給ふ、神德をいへる也　○道引麻志遠　遠は庭と似たれば、誤りとして、○もとのよみにては、しらみちびきましてとよむべし　○べてづゝにて意もたがへ○阿庭可遠志　一説に、阿は、間か閒の誤、遠は、邊の誤り○阿は、間庭可邊志、と改て、もてかへしとよめり、猶考○今按、遠は、邊の誤り、あてかへしにて、纜縄べしと云々　○のごとく、あて給ひてまた、纜縄を、くりかへすごとくに、かへ○可邊志は歸帆○阿庭は、當を、あてとよめるをも守給ふと也○の事をいへり○る意也、こゝろあてに、などゝいふ○句の意を、よく味ふべし　あて也

頭註　延喜式云遷却崇神祝詞云淸地爾遷出座氏吾地止宇須波伎坐也波許伎欲米也といへり

頭註　祟にて拂淸淨の意也とも云り

頭註　あてかをしはあてかはしにてもとのままにてもよろしかるべし

○戀男子古日歌三首　長歌一首　短歌一首　二首也　三十九丁

〽世人之日五行　○表者奈佐我利　一說云、表は、遠の誤り、なりとほくはなれ給ふな、といふ　○今按　表はおもてとよめれば○父母の、面をあはせ、うしろむかず、ねね給ふ中にねんに　表面の、かり字にやといふ意なれば、表は、顏のかり字とすべし　○三枝之此冠辭は、三葉四葉とつゞけるを、中とはいかゞ○三栗の、中とつゞければ、誤りといふべからじ、あまるべき、字ならず、依て今按に○三枝を、百合草也といふが、名也別名○此三枝は、三枝部を、置せ給ふと見ゆれといふ、より所なし○ば、百合に、もりべを、おかせ給ふべきよしなし、野にいくらもあれば、めづらしきものならず、されば百合といふ説は、ひがごと也○是は三つ端四ツ葉に分れ

て、ほける故、中にこもりた○あらはにいはじさからふに中
るほどをもて、中とつゞく○にたれば、もらしていはず○と
つゞけしを難　此よみわろし、はしきよくとよむべし、
ずべからじ　○愛久うるはしきの略言なり○横風乃　宣長云、
横風乃、爾波可爾母、覆來禮婆と改て、よこかぜ○かくよみても
の、にはかにも、おほひきたれば、とよめり　○俗語にさへよ
こ風とはい○今按に、横風は、無常の風をい○又よるのあらし
はざる也○へばおもはぬかぜとかよまん　○のなどゝやよま
んか○於毛波奴爾、とあるをついで○此下十字、字の誤りか、
し　おもはぬ風と、つゞくべし　○衍字か、わきがたし、考
より所　如此有もにて、かくあるも
もなし○可賀利毛神乃　神のまに/\といのると也○立阿
射里我例　例を衍字とせし○立居して神に敬して、いのる也、頸
を、地に付るごとく、ぬか　いやましにな
づき、おふぎ奉るをいふ也○漸々どゝよまん　○都久保里
久都と上下して、いやましに、　○保利の、約比也、比は、布里
かたちくづほり、とよまばや　○にて久豆禮、めかしき意なる
し

頭註 三枝の事は知る人なし故傳也

萬葉集六殘考

○或本反歌曰　三首　十一丁

△泊瀬女造木綿花三吉野瀧乃水沫開來受屋

白木綿花、落多藝追と○古說、云泊瀬女が、木綿をもて、花を
もよめりしとおなじ　○造るといへり、此說、世々の學者、難
ぜしを見きかず、今按に、何に用ゆるとて、木綿花を造れるや、
また、吉野の大瀧にもまさるほどにつくれるは、無用にはあら
じ、是を考れば、木　和名抄云本草　杜仲一名木綿和名由布、折ㇾ
綿は穀也といへり　之多ニ白絲ㇾ者なりと云々
古語拾遺　其外にも穀木種作ニ白　○木綿と、ふ二字は、杜仲の
幣ㇾとも見えたれど　○一名の外見所をしらず、
訓もわき○杜仲は、藥品にて此木の皮を折は、白き絲出れども、
がたし　○蓮の糸、又蛛の糸のごとくにて、布に織るべき、も
のにあ　さて木綿といふ、出所も　世中の年丹後國あまの橋だ
らず　○訓も、古今解し說なし　○見に、かの國に行けり、
此國、繭をつくるを、專らとして、家ごと、繭はしたるを見れ
ば、木の枝を、まけつかねて、其間に、繭をつくらせり、又延
喜式神祇料に、安藝國の木綿を、　○かの國より、山繭織の、絹
用られしことあまた見えたり　○出るをおもへば、そのかみ、
いまだ蠶をかふ事、世にひろまらざりと見え　○山繭も、自ら木
て、山まゆの綿絹を、織し用られしもの也　○の枝にまゆつく
るは、同　○是を考合すれば、木の綿と、かきしもとわかてり、
じことも也○綿のことは、次にいふ、まづ木綿と書し事、かくて

出所わかてし、かならず杜、杜仲は木綿の糸に似たるを依て、
仲の一名によるにあらず、もて、一名にいへるもの也○初せ
女がつくるとよめりしは、蠶蠶の、木の枝に花さきしごとく
を造るにて、花を造にあらすなる故、木綿花とよめり、さて
家ごと造る故、よし野の瀧の、浪の花に○眞淵曰、眉生の略に
も、まさるとよめりし也、ゆふといふは○て、まゆふと、いへ
るとと○また、眞を略して、木綿○綿を、わたとよむは蠶つく
けり　○といふとあるかごとし　○るに、口より糸を出して、
蛛のすがくごとくにして、輪をつくり○わたむるを略して、綿ワタ
て、蠶となせり、依て、輪也の意也　○といふ也、詁云、綿は、
輪剝クツ也といへりしは、穀の木の皮を、輪にむく
意に解トキたり、木綿といふ、木の字にたてふしか
○此說、ことにあたらず○さて、木綿花といふことあり○正月
人まどはせるもの也○十四日、米を粉にしつかねて、繭の
かたちにつくりて、木枝に付て、年德神に奉る是をまゆ玉とも、
まゆ花ともいふ、蠶かふ家ごとに、するわざ也、年德神にはあ
らず眉より生じ給ふ○今の草綿は、後世わたりし物なり、○後
神に、奉るなるべし○是も、木綿と書也、依て音によむ　○世
わたりし物故、訓なき故○此考、かくては、わきがたかるべし
木綿の音をかり用たり○とて、後違考木綿の部に、くはしく
いへりし故、○古說、栲木ハ楮也と見え栲の類、木の皮をも糸
略したり　○にして、布に織しとのみいひて、神代に、蠶を
生じ給ひしことは、いはずして、たゞ木綿も、木の字なるをも
ざひたすら○木の皮のことゝせし也○て、木の皮也と、あやま
りしな○もとみだれてと○木綿の解は、後違考に、ことごとく
るべし○いへるがごとし○あらためいひしを見て、しるべし

○かくて木綿花の意あきらかにわ
かてり歌の意をよく味はふべし

頭註 葛引とよめれは葛布を織也、穀木をむきて布に織といふ事
は見えす紙にすくとはいへとも穀布といふはなし

頭註 蠶花は木綿花也

○山部宿禰赤人作歌二首幷短歌

此はしづくりは、長歌二首短歌三首を束ツカネて、書たるべし、さ
るを、かく書しは、うつし誤しなるべし、反歌の二首め
〈烏玉之夜乃深去者久木生留淸河原爾知鳥數鳴（ヌバタマノ、ヨノフケユケバ、ヒサギオフル、キヨキカハラニ、チドリシバナク）
詁云久木は、楸也といへども、淸河原は、吉野川にや、三吉
○野の、大川のべの、歷木クヌギ原とよめりし所にて、今は、歷木原
といふ、名のみなれど、川邊、くぬ木のしもと原也、今按に、
久奴木の、奴の字、脫せしか、いづれ楸にはあらぬ事、見し人
しる○和名抄　擧樹日本私紀○又按に、久は、又の誤、又木は、
べし○歷木各くぬ木とよめり○次といふ意なるを、月の借字と
し、生は、出の誤とし、月出る淸きかはら、とよめばけし
きよけれども地名の、しかとせざれば、歷木ならんかし　○烏
ヌバタマノ此こと、古說各○和名抄　一名烏扇　射音夜、和　○考聲切
玉之あたらざるべし○射干　名加良須安布木　韻云
狐射干也關中呼爲野干語訛也と見えて烏扇は射干の、一名とあ
るに、又ぬばたまと、いふべくもあら
じ○また、烏扇は、草也、其子の黑き故に、黑きとかふらせい
はば、ぬば玉の實の、黑きといはざれば、しかとせぬ也、
むかしの人は、さる手づゝな○草の子を、玉と治定すべきや、
ることは、いはざりしなり○露を玉とよめるは、玉の如くと

いふ○玉ならぬ物を玉のごとくにといはされ○今按奴は神代記に、
意也○ば、調がたし、故人は皆、しかよめり○に
瓊鏘と、あると同じく、奴は、語にえもいはれぬ辭也、奴婆は、
奴を延ていふにて、玉を褒る辭、なき故口をふたぎ、感するの
意○玉は、褒辭に、用ゆる、その○さて、ぬば玉の夜とつゞけ
也○玉をほめん、すべなき故也 ○しは、玉は、やみにも、光
あると、いふよりつゞけしなるべし、○くはしくは、後選考に
夜光の玉のごとく、いへりしにや いひし故、略したり
○又按に、白玉、眞玉、竹玉など、皆玉の、褒詞也、 ○竹玉は寶
有も瓊なるを、奴婆と延たる、ほめことば也 玉の、借
字を、竹に玉を付る○奴字を、奴婆と延たるを誤りて、烏玉、
と、誤りいひ傳たり○射干玉などの、字によりて、あやまりい
ひたれし○かくいふを、うけ引人は、今さ
なるべし○らありがたからんもうべなり

頭註 観は久木にて千歳も經ぬる故久木と書て月の假字とせしか
生は出の誤りといふべし月出るとすれば上下のしらへこと
に優美也

頭註 烏扇を一名奴婆玉といふこと何によりていひけん

頭註 書記曰 奴儺等母母由羅爾 古事記曰 奴那登母母由良爾
此奴も瓊にて玉のゆらくをいふ也奴といふに玉はこもれば
也

○過二辛荷島一時山部宿禰赤人作歌并短歌 十八丁
味澤相妹目不數見而宣長云、いもがめかれにことよめり○千蔭云、數は、衍字、いもがめみずでた
ならんと云々 一、櫻皮纏契沖云、櫻の皮にて、とぢたる舟ならんと云々 ○和名抄 樺云 樺

戸花、胡化二反、和名、加○樺たるを、櫻皮とあ○樺は、水
波、又云、加仁波今櫻皮有之る故に、書したらん 氣を放
て、火を付て、水にうかべぬれば、もえながら、たがる○甲州、
ゝ也、軍中續松に、用ゆるは、雨中に、火消ざれば也○信州、
木曾、山中より出る木曾の○濕氣なき故、自ら皮おける也、白
人、あかんぼといふ、木也○あかんば有是は、よろしからざる
と○さて、舟の舳を、此皮もてつゝみ卷しなるべし、○甲斐德
也○浪をさけて、舟よくはしる爲と、せしならむ 本、梅
花無盡藏に見えた○伊奈美嬬からにとつゞけし也、辛は、離
り、見てしるべし といふに、つゞけたり、いなみ
は、固辭にて、つまのいなみて、そふ心なき故、か○是は、眞
れ〳〵になる、といふ意をからにと、かふらせり 淵冠辭考
にもら○辛はかり字、離別をいふ也、か
せり、○ら、かれ、通ふ故、同じ意也

○春正月勅二諸王臣子等一散二禁於授刀寮一時作歌一
首并短歌 十九丁

△眞葛延春日之山○註に、葛は山にはふ故に、いへるの ○
みといへども、山にも野にもはふ也
詩曰、葛之施徑中谷といふがごとくならば、なほ按幽とつゞく
くはいはし、こは春日とつゞく、よしあるべし、玉篇
云、不明深遠微也とあれば、葛の谷をこえて、遠く道は、幽也
と、春日に、かゝらせしなるべし、微かほのかと、よめるにて
字意も、とほく、○春去往跡 往々、由久とはよまじ、誤りにし
かなはし也 て、春去くれば、とよまざれば、

上下の詞に、かけ合がたし、されば、往は誤なり○狂此字、往に似たれば誤りしか、狂を、久留布とよめれば、春さりくるといふ、借字に狂とかきしなるべし○折木四哭之註曰、千蔭云巻切木四泣とあるを、雁かねとよめるをもて、こゝも、かりがねとよむと也○一説に、折は、斷の誤、孟莊子造鋸截斷木器也○四は器の誤なるべし、鋸の音の、かり／＼と聞ゆれば、雁のかなに、用ひたりといへりし也○眞淵云、之來繼皆右の皆は春のあやまり○之來繼春石とし、雁金は、しきつといふまくらことばなりと云り○契沖は、雁がねの、しきつきみなし、とよめり○千蔭曰、皆は、日の誤り、石は、如の誤にて、きつき、このごろとよめり○かくのごときつゞきは、かくつぎてとよむべし、雁がねは、來つきといはん序也、きつきては、春の來つきて、此頃のごとく、かくついゞきて、常に春なりせばといふ、こゝろなりと、いへりしなり○今按折木四哭之の折は、打のあやまり、打木四にて、奥書にことわりし打毬也○哭之なげかしは、投返の借字、まりをなげかへし、うけづく、馬上のわざ也○來繼はまりを、投かへすを、うけつぐをいふ○皆石の皆は、習の字を誤うつせしもの也○習石也○だぎし　なげかしきつきならひしにて打毬の、馬上のしわざを、よめりし也○打毬は、音のまゝによめり○此繼此打毬のおもしろさに、皆人、常にかく繼て、習はまほしくおもふと也○諸註、奥書を見ずして、むつかしき考をのべたり○此歌は、おく書に、打毬樂して、

あそびし時、忽雷雨しきりなりしに、宮内の人、皆樂して、殿上に、居合せざりしにより、おの／＼、とがめをかゝふりしこもりゐてよめりしを、等閑に見しと、しられたり

打毬唐韻云毬　音求打毬内典或謂之柏鞠師説云萬里宇知毛丸打者也劉向別錄云打毬昔黄帝所造本因兵勢而爲之云々蹴色立成云骨擲打毬反打也毬杖八打毬曲技也○雲井春云二條良基作普光園院と中也一とせくそくの御まりありしに關白大臣いしくけんさうの座にまゐり給なとして、公事にもいたくおとらぬほとのことにて侍しと云々用明天皇の御時にわたりしと云々

此くそく毬束にや

頭註 蔦のかすかひのことしともつゝけしにや鎖のごとくなるにおなし

頭註 折木四哭考なしいつれ誤しか故人も同しくおもひしにや

頭註 伐木音の加里とはせぬ也、鋸のはをやすりにてする音はかりともまかふべし

頭註 韻會曰、鞠居六切説文蹋鞠也徐按蹴鞠以革爲圓囊實以毛髮打毬也　正義曰蹴鞠即毬打也

頭註 蹴鞠黄帝造　打毬ヲ略テ多岐ト云リ
右神龜四年正月數王子及諸臣子等集於春日野而打毬之樂其日忽天陰雨雷電此時宮中無侍從及侍衞　勅行刑罰皆散禁於授刀寮而妄不得出道路于時悒憤都作斯哥　かくあさやかにあるを見ましてむかし今あやまりしもをかし

○湯原王月歌二首　廿八丁

〽愛也思不遠里乃君來跡大能備爾鴨月之照有

○宣長云三四句　君來跡之、我待爾鴨と改て、きみことし、わがまつにかもとせり○似よらぬ字に、改めしも、よしとしがたし○大能備山備、海べをうなびとよみて、野べを、野備とよめるを、延る○延引するを、能備といふ、遠からぬ故、君がくに、通はせたり○るやと待しに、大のびして、きまさぬと、いふ心○さて、延引して來ぬは、大野べ○此歌の餘情、いとめ也○にてる月を、見つらむとよめり○でたし、味ふべし

○湯原王打酒歌一首　廿八丁ウ

宣長

打は、折の誤、酒保可比、とよまんと云り、一説に、大夫心を、とろかす酒なれば、ほめたる意にはあらじ、酒をよみしけるを、打といへるぞよき

〽燒刀之加度打放大夫之禱豐御酒爾吾醉爾家里

燒刀は、生鐵をきたへて、眞鐵もかどゝ、よみなれしごとくをもて、刄を、うちかたむる也○加度は、堅より轉して、角を也○さて、生がねと、眞がねと、打かためし刀を生がねのごとく、うちくだく也、眞がねと生がねとを、うち放つといふ意○さほどの勇力も酒○刀をまげ、へし折に依て、刄がねと、也○に力うせしと也○わかれ〳〵になるを、かどうち放つと、つよく〳〵○禱を、のみとよめれば、呑の、借字なるべし、○醉吾めりしか○禱つぐとよみては、人ふたりに、聞ゆべし○ほぐとにけらといふにて、丈夫○一説に、禱は壽の誤りとし○すれたれどといふ意明らか也○ではぐとよみきとよめり

ば、酒をうつと○丈夫誤ニ
は、しがたし○作大夫

頭註 大夫をますらをとよめりしもまた見えたり

○遊覽住吉濱還宮之時道上守部王應詔作歌

〽從千沼回雨曾零來四八津之泉郎網手綱乾有沾將堪香聞　細

○是は、旋頭歌なるを、其こと○眞淵云網手綱として、あだつわりなし、脫せしなるべし○など、よむべし、あみの、大づなゝるべ○千蔭云網手繩の、誤か○あみを乾に、手綱を張て、しと云々○といへるも、同じ意也○あみをひろげ、ほすをいふな○依て、あみたづなとよ○將堪香聞には、聞えがたしはたり○みても、よかるべし○此よみ、もとのまゝにゝへむかもと、○將をはたと、よまざれば、しかとし、侍らじよまんかし、たへんかもは、ほしたるあみを、雨の降りしにぬらせしを、○海士網のぬれしとて、堪かたくおもふくひたることばなり○べくもあらじ、應詔とあれば、より所あるべけど、
愚按及がたし

頭註 歌の意を按に網ひかんとてほしたるをぬらして心うくおもふべしといふをけふめづらしく遊覽し給ふとてこゝにいでませし興をうしなへるにたとへしなるべし

○冬十二月十二日歌儛所之諸王臣子等集葛井連廣成宴歌二首　三十四丁

〽春去者乎呼理爾乎呼里鶯之鳴吾島曾不息通爲

○宜長云島は、庭をいふ、伊勢物　島は、しまりといふ、かり
語に島好み給ふと有がごとし　○宇、居所の、まかきの內也、
海上の島も一しまりにて、しめの內と、いふに同じく、これも
居所の內なるを、島とよめりしなるべし、めづらしくよめりし
故、意をさとらずし　○島は鳥の　○鳴告鳥曾　とし折〳〵鳴繼
て、難としけりけん　誤りしか　鳥にて、鶯の時
〻來て囀るを、鳴　○宴會なれば、鶯の折〳〵來鳴ごとくに皆　○
つぐといふべし　人かよはせと、祝してよめりしならん
鶯の鳴つぐこと　○されども、島をしまりの居所といふ　○乎呼
くといふ意也　ならば、もとのまゝよろしからん
里は、折に、時節をいふ、折
をのべて、をゝりといふ也

頭註 しめの內といふもしまりの內に一かまへをいふ也　シメシマ同

○榎井王後追和歌一首　三十四丁ウ

〈玉數而待益欲利者多鷄蘇香仁來今夜四樂　所念

○千蔭曰多鷄は、集中、たか〴〵と、いへるにひとし、蘇香は、
おろそかの意、かれこれ、ことなるを、あはせいふことばな
り、玉しきて待んより、たまさかに來るが、○今按　多鷄は長
たのしきと也かくても、いさゝかわきがたし　也、長久とつゞ
きてひさし○酒たけなは、月たけ、世たけなど皆久しき意に、
き意の詞也　いへるにおなじ蘇香は曾加のかへし佐也、依二離
の意にて久しく遠ざかりし依、たけそかは、邂逅の意也、た
といふを、かくよめりし也○まさかは、此たけそかの、轉ぜし
ことばな
るべし

頭註 久老云萬葉卷七　八船多氣とあるは海上浪を凌て舟を撈出
るをいふ　土佐日記にたけとも〳〵舟はしそきにしそきと
ありて舟の退也と云々とはかりにては訓意明らかならし

○宴歌一首　四十一丁ウ

〈吾屋戶乃君松樹爾零雪乃行者不去待而將待

○古註云こなたよりは、とふらひゆ　○行者はゆくをばとも、
かじ只まちて、あらんといへり　又かへるはと
も、よ○不去はやらじ○ゆくをばやらじ亦かへるはやら
むべし　とよまん　じとも、よむべ
し○かへる人をば、とゞめてまた○註の意とは、たがへ　○待
〳〵來らん人を、待んと也　り、よく味ふべし
而將待一本、而は、西の誤として、まちにしまたん、と
あるはわろし、まちてを、またんとよめばやすし

○讚久邇新京歌二首幷短歌　四十四丁

此反歌二首目

〈弓高來川乃湍清石百世左右神之味將往大宮所

古註に、山の草字、弓に　今按來は、成の草字、來と書　ゆ
○誤りしといへど、いかゞ○を末に、誤しか、弓高成とし○た
かなる、川の瀬と、つゞくもいかゞ、　○此歌、川の淸きとい
されど、考得ざればまづしかよまんか　ふのみに、上をもと
めし○神之味將を、神のみゆかんとして、神の、御幸などい
か　ふは、とるにたらず、むかしは、御幸をいで

ましとよ○神は、天子○之味は、染と同語にて、馴染の意、新
めれば也○の御事なり○京なれば、馴そみゆかむと祝したり
○是は、神さびゆかむと○佐備のつゝめ、し也、美○猶初句後
いふと、おなじ意也 ○も備も、通ひて同語也 ○按を待

○反歌五首　三首目　四十五丁

八、㜺嬬等之續麻繫云鹿脊之山時之往者京師跡成宿（ヲトメラガ、ウミヲカクトフ、カセノヤマ、トキシユケバ、ミヤコトナリヌ）

○かせば、排にて、糸○往は往來と、つづく字にて、行かふ
をくりまく、具なり○往は意をとりて、時しいたればとよ
まん○もとのよみにてはきゝよろしからず、此頃は、都うつし、
か○しはく\なりし故、百年をめでたきためしに、よめりし
なるべし、今は
いとめでたし

萬葉集殘考　中　従七至十一

萬葉集七殘考

信濃高井宣風考

○詠月　三丁ウ

△玉垂之小簾之間通獨居而見驗無暮月夜鴨（タマダレノ、ヲスノマドホシ、ヒトリヰテ、ミルシルシナキ、ユフヅクヨカモ）

○註にひとり見ては、みる かひなきを、いへりと也○此歌は、獨居てといふが、本意也、月を友と見んに、すだれのひまよりもる影は、夕 ○註の意とは、ことなれば、月かと、あやまたれて、見るかひのなしと也

見む人、よ○玉すだれも、わたくしに、かゝげ見ること、かたく味ふべし○ければ、かくよめりし其夜の情、いとあはれ也

○見驗無（ナヒ）は見るかひのなき、よむべししる しなきとよむは、こゝに不叶

○同　同

△春日山押而照有此月者妹之庭母清有家里（カスガヤマ、オシテテリタル、コノツキハ、イモガニハニモ、サヤケカリケリ）

○意あきらけし猶、○かすかといふ、山なれど、月出て、押照さ いはまくは 故山ばかりは、妹が庭も、まばゆく、

やけし○女のもとに、忍び行に、あまりさ と也 ○やけき、月夜なりといふ意なり ○此月は、今夜の月を、いへる也○

註の意にては、初句 かひなかるべしや

○同　同

△海原之道遠鴨月讀明少夜者更下乍（ウナバラノ、ミチトホミカモ、ツキヨミテ、ヒカリスクナキ、ヨハフケニツヽ）（明少　アクルマヂカク）

○千蔭云明少を、あかりすくなき とよめれど、いかゞといへり

○今按に、月讀は、月○あゐ人のいはく月あかきとはよめれ 宜光といふ意ならん○ど、あかりとはいかゞといへりしもう

べ ○さらば、明少をあくろまぢかく ばと、よまげやといへりければ○げに、夜の明ちかづくを 少と、書しなるべし、こ

はいとたへなり○依 といへりし也 ○て、明少をあくろまぢかくとよめり○更下乍によくだち にけり

と、よみしを、 よしといふべし

頭註　河原遙に月の更行（フケ）を道遠みかもとよめり月の入山のなけ しきをきかせし也

○同　同

△此月之此間來者且今跡香毛妹之出立待乍將有（コノツキノ、コノマニクレバ、イマトカモ、イモガイデタチ、マチツヽカアラン）

○宣長云おのが家に、月のさすを見て、夜更たれ ば妹が出たちて、まつらんといふ心なりとぞ○此間來者を、こゝにきた

れば とよめりし 間は間の字似たれ ばば誤りとして○此間來者（コヽトヒクレバ）とよむべ かど、今按に かりけり○月 か

けの、男の家に、とひくるを見て妹〇古今集　おもあまり、戀
が待つらんとおもひやるけしき也　しきときは、あし引の山
より月の、い〇此歌は此意をと
でゝこそくれ〇りてよめりしか

〇同　四丁ウ

△霜雲爲登爾可將有久堅之夜渡月乃不見念者（シモクマリ、スト ニ カ アラム、ヒサカタノ、ヨワタルツキノ、ミエヌオモヘバ）

〇霜ぐもりと、いふことはなし、霜の降夜は〇霜は　霖の草字
空さえわたりて、くもることなかりけり　のあやま
りし〇霖雲入（アマゲモリ）とよむべ〇霜は、暮秋か、初冬なれば、此部氣
か　かりけり〇をよまざれば、是のみ冬によむべか
ら〇雲理のりは、そ
じ〇へてよむべしや

頭註　霜夜曉のかねの音さゆるともよみしをおもふべし

〇同　同丁

△靫懸流伴雄廣大伴爾國將榮常月者照良思（ユキカクル、トモノヲヒロキ、オホドモニ、クニサカエムト、ツキハテルラシ）

〇契沖、國榮といふよし、し〇千蔭云、卷三家持靫取負而、天
らずとて、註せざりしかど〇地跡、彌遠長にとあり短歌に、
大伴の、名におふゆきおひて、萬代に、〇大伴は武官の、名ある
たのみしこゝろ、いづくかよらん　〇家にて、さて、其ともも
がら、おほき故に、伴の雄廣きといへり、大伴〇かくても、國榮
にといふは、衛門府の、陣をさしていふと也〇えんのこと、わ
きがたし、よて〇卷　大伴乃、見津跡者不云、下略大伴は、三
しひて今按に　四　津と冠ること、冠辭にもくはし、こゝも
同じく、犬どもの〇國は、圓の字似たる故、誤りしこと明らけ
三津とつゞけり　し、其わかちは、圓は、圓滿とつゞくにてけ

月の圓滿するを、みち、〇圓將榮常を、みちさかえんと、月〇
みつといふをもて　はてらしとよむべし
此歌は、大伴氏を祝して、榮を月によせて、よめりしか大伴は、
大屯（タムロ）にて、屯は、滿也、それを月の、みちさかふといふに、か
ふら〇此みち榮えんといふ
せり〇か歌のまなこなり

〇詠山　六丁

△我衣色服染味酒三室山黄葉爲在（ワガキヌノ、イロキソメタリ、ウマザケノ、ミムロノヤマノ、モミヂシタルニ）

〇宣長云色服は、服色の、上下の誤り、三室山〇味酒（ウマサケ）のこと、
〇はもみぢしたり、我家も、色に染まんと也　〇味酒わきがた
ければ　さ〇今按に酒を造る法、米一石、麹一石水一石、此〇
いふ也　て〇三を合てつくる、是をもろみといふ諸味なり
さて、搔ならし／＼て、水に〇又、味酒といふは、醴を、あま
てのべ／＼て、しぼりこす也〇ざけとよめるにて、味は、うま
とよめるも、あ〇昔より、今にいたりても神事には、あまざけ
まと同じこと也〇を造る例也、味酒を、美酒とも書て今、上酒
のことゝ、い〇醴造るも、法〇又、琴酒と、よめりしも同じこ
ひなれし也　〇はおなじ事也〇となり、そこにいへり、さて、
味酒、三諸とつゞけたり、又、　三種を、三分と　神南備と、
三輪とつゞくは、三分（ワケ）の略也　〇いふ意をもて也〇つゞくは醸
といふ〇委は冠辭殘〇次の歌の、三諸就の、就は、造るの略〇
意也　〇考に云り　〇三種もろともに、造るといふこと也
酒を、三輪といふは、此よし也　けきを通はして、宣
神酒を、みきといふは御食（ミケ）也　〇みきといふ也　〇爲在（シタルニ）長、

集中在を、けりとよめば、してげりとよむと也　○土佐風土記曰、神川訓三輪川、源出北山中、届于伊與國、水清故爲大神釀酒也用此河水、故爲河名也、是よりいへるといふは後の事也神代の事をいかにあてん

頭註　色染服とせはそめきんとよむべしのり長もいかゝおもはれしにや

○詠岳　六丁ウ

△片崗之此向峯椎蒔者今年夏之陰爾將比疑

○おくに、向岡とあるを、むかつをとよめれば、山の尾上の事にはあらじ、峰の字になづみては、意たがふべし　○されば、これも、かた岡の、むかひなる、岡邊なるべし、峰としては椎まかばといひしに、叶がたし　○俄に、椎の種をまくとも、ことしの夏木立のしげれるとひとしく、生榮えんやとなり　○一年のはかりことは、春にありと、いへるがごとく、まへかどにはかりおかされば、當用になりがたし　○木の苗を植るは、數年をへざれば材用にはならず、依て、後世の爲也　○佛家にて、木を殖るを、功徳の最とすと也、木を殖る事、我ためにせず、後世のためなれば、無欲也、依て、功徳廣大也とぞ

○此哥、佛敎化めかしく、きこゆるなり

頭註　椎の苗を殖てもことしの夏のあつさをしのぶかげとはならしと也なみんかは古木にひとしからぬよし也すへて俄にすべきことにあらさる也

○詠河　八丁

△湯種蒔荒木之小田矣求跡足結出所沾此水之湍爾

○略解云湯種は、齋種也、水口祭るなどあればと云々　○まへに、谷士清の、由は湯也と、いへりしごとく、此湯も溫なる意にて、籾を、俵に入て、種井にひたして、もやしてそれを蒔也　○春至れば、水ぬるむ時にもやす故、湯種といふ　○苗代して、其もやしたる、籾をまくに、又、國によりて、苗にせずして、種を田にまくもあり、さる所にては、早苗とるわざはせざるといへり、大和國は、菜種を、苗にて殖る、類也　○齋種といふ說もよし、好によるべし　○荒木は地名なるべし　○求跡、此ことば考なしと云り　○按水求跡　水の字、脱したる事、あきらけし、田に水を引とて、あゆひぬらしつるといふ哥のかゝりなり　○さて、初句、ゆだねまくとよむべき、しらべ也　○此水之湍　此水は川の誤りし也　○宜長云足結出の、出は、者の誤り、といへれど、出半のちかければ、半の字なるべし、あゆひは也　○足結は行纏和名抄脛巾波々岐

頭註　袖もこほらぬ故湯とおなじく訓也

○同　同丁

△此小川白氣結瀧至八信井上爾事上不爲友

○註に、神代卷、天照太神、素戔嗚命之十握劍を、こひとり、三たぎに打折、天津眞井に、振そゝぎて、吹うつる、いぶきのさぎりに、なりませる、神の御名を、田心姫といふ、とあれば、その井の上に、霧立るを見て、其故事を思て、よめるなるべしと、いふごとくなれど、歌を解ざりければ、今按に　○瀧至八にて、句を切てたぎたるやとよみ　○信井上爾をまな井

の上とよみ○たぎたるやは、たぎりたるや也△此小川、きりぞむすべる、た
ぎたるや、まな井の上に、ことあげせずともとよむ
べし○小川なれど、川浪の、たぎりたる○事上は、言上せず
にや、霧ふかく、立むすべると也○とも、神代のさま
かくやありけん、といふ意にや、信眞同じければ、信井と書し
か、またいはく、ことあげは神の誓ひ給ふけりしをいへるにや
○もとのよみは何と○先しひことといへるを後うまし
○も意わきがたし　たちまくはしくしたまへとて

○詠鳥　九丁ウ

△佐保河之清河原爾鳴知鳥河津跡二忘金都毛

○宜長云河津は蛙にあらず、河津にて、○さりとも二つとい
千鳥の聲と、所のけしきと二ツ也とぞ○ふ事、不感心也○
今按河門跡二河とを、あとにして過行ども千鳥の門わたる○
に聲に、さほぢのけしき、わすれがたしと也
舟津を、海門、難波津を難波門、川津を、○門を略して、川と
川門といふにて、此津も門とよなどよき○書にて津を、しか
よます○卷十廿　天河津爾、とあると同
るなり○六丁　じ、是も河門とよむべし

頭註 河津ハ河面ニヤ津良ヲ約ナ津トヨメルニヤ川ツラ也

○同　同

△佐保河爾小驟千鳥夜三更而爾音闇者宿不難爾

○驟詩小雅曰、載驟駸々註曰、小曰レ馳○かくては、あそぶ
不馳小疾曰驟亦疾速曰驟とも云　とはよみがたし

と、い○一說に、さおどるとよめりしも、魚○今按に千鳥の、
ふべし　などにはしかもいはんか、考べし　跡とめてなど、
よめば居立にて、○ゐたつとすれば字○夜三更よくだちてよ
ゐたつとよまんか○意にも叶べしや　めるもよし
○爾音闇者闇は、聞の誤、爾音を、なが聲き○宿不難爾
けば、とよめりしをよしとすべし
千蔭曰、いねがてなく○字意は、いねがたきにはあらず、千鳥
に也、なくは詞也とぞ○の鳴聲きけば、いねがたしと、かへる
手には
にや

○山背作　十一丁ウ

△氏人之譬乃足白吾在者今齒王良增木積不來友

○契沖云述懷の心○宜長云吾は、君の誤として、君在者を、君
なるべしとぞ　ませばと、よめりしかども歌の意、くだり
がた○今按氏人は、宇治人にて、あじ○網代の床に、氷魚のよ
しに　ろもゐ、人にたとふ也　るを、待ごとくなる、
我なりと、たとへしを、譬のあじろと、いへりし也、待ぬれど、
氷魚の、よりくる夜も、よらぬ夜もありて、定がたければ也
○待人の、さはりありて、來るともこぬとも○初三句迄はあじ
○定がたければ、網代守の如と、たとへし也○ろもる、宇治人
にたとふべきわれ○木積は不來やといふ○木積は、川にたが
なれやと云意也　ほどの意也　れよる、古木のた
ぐひを、いふ　一說に　網代の氷魚を振舞人のよめるか　此說
と見えたり　○外の人の、不レ來とも、我あればよしと也○は、
よからじ、一本、王は與のあやまりい○只、客人の、問來べきか
まはよらましぞ、とよめるは猶わろし○ねことして、こぬに、

よみてや○待人はよしこずとも、我ひとりして、
りしにや○たのしまんと、ふてゝよめりしか
○此歌、解がたし、しひて考れば、嚳は、嚳の誤か、字よく似
たり、嚳は、オモノ、と訓じたればしかよまんか、オモノは、
禁中御用也、網代かゝりの役人の、よめりしか、宇治へ、見分
に行たりしに、また〳〵、同役人、あとより來たりしを、先に
こし人の、よめりけん、歌の意は、宇治人の、守るあじろを、オ
モノの、あじろとよみ、其あじろを、見分に、我れ來りしに、
また〳〵、君たち來り給ふは無用也、われあれば、子細なし。
外〳〵に、おもしろき所に、行給ふべかりしをと、よめりけん、
木積不來友は、こずともよかりしをといふ略也、不レ來をか
へして、よめりし也、猶後按を待、氏は、宇治のかり字也

○羈旅作　十六丁ウ

△好去而亦還見六大夫乃手二卷持在鞆之浦回乎（コシユキテ、マタカヘリミム、マスラヲノ、テニマキモタル、トモノウラワヲ）（大夫ノ誤）

千蔭云好去を、儀もて、今按好は、須久須吉、ともよめ
まさまくと、訓べしとぞ○に好ば、過の、借字に書しか○行過
のかり好去而ともよむべし、過行ても、此浦のけしきはえ
ならば好去而もいはれず、よりて又立かへり、見んとなり○
初句　道行ても、又か
へり見んといふ意也

○同　十八丁

△麻衣著者夏樫木國之妹背之山二麻蒔吾妹（アサコロモ、キレバナツカシ、キノクニノ、イモセノヤマニ、アサマケワギモ）

宣長曰、此なつかしは、俗にいふ意ならず、したしく、むつ
○ましき意也、我も、麻衣をきてあれば、麻まく妹よ、契あり
て、むつましく、思はるゝといふ、心な○旅の題なれば○今按
りとぞ、いさゝか解がたし、といふべし○さる心すべし○に
夏は、麻衣をきる、夏めかしといふを、馴付とはたらか○妹
せて、旅なれば、故郷の妹、なつかしと、よめりしならん○背
山二には、夫婦の中に、麻をまけ、さらは旅ならずとも、○麻は、
いつもなつかしからんと、旅の情を、のべしなるべし　○夏畑
より引也、夏種をまく時ならず、是は、たと　なつかしは、
へに、まけとよめりし故、時節にかかはらず○馴付の意也

○同　二十丁

△鹽滿者如何將爲跡香方便海之神我手渡海部未通女等（シホミタバ、イカニセントカ、ワタツミノ、カミカテワタル、アマノヲトメラ）

○海士の子らが、かつきしなれしを、しらぬ旅人の見て　○神
汐みちたらば、いかにすらんと、あやうく思ひて也
我手渡とよむべし、かの子らがなれて、うきわたるを、わ
たづみの神は、子らが手をよりて、わたし給ふかと也○
都人のめなれねば、めざましく、あや○方便海と書しも、此
うく思ふ心のまゝを、よめりしなり　心もてかきし
としら○誓海といふよりし○神我の我はす
れたり○てかくかきしにや○みてよむべし

○臨時　廿五丁

△西市爾但獨出而眼不並買師絹之商自許里鴨（ニシノイチニ、タゞヒトリデヽ、メナラハズ、カヘリシキヌノ、アキジコリカモ）

○千蔭曰あきじこりの、こりは、しみこるの○商自許里の商
意にて、物に、熱する意なるべし、とあり　は、

明の借字、なるべし、俗に、あき目くらといふがごとしと也○じこりと、いふなり　明○さて、市に出て、もとめし絹の、よからぬをよしと見てかへりしは、○眼不目あきながら、あきめくら、同然なりと、いふ意也　並とあるにて、其わざに馴ざれば、あやまちあるべき也　○わかつめる戀の重荷を市中のかとりの魚彦かよめりし也此歌を解してよめりさすかに古學をせしほと見えて感心也

頭註　シコの反ソ曾古比と云もおなしく轉したる名也

○同　同丁

＼大舟乎荒海爾榜出八船多氣吾見之兒等之目見者知之母

○八舟多氣は、舟を榜こと也、土佐日記にたゞ○宜長云あやうきけどもくくしりへにしぞきと有を引たり　所にて、難をのかれんと、舟こぐごとく、心をつくし○今按目見者知之母に、て女に、あひ見しにたとへたりと云々○按目見者知之母に、見は、兒の字の誤り、舟たけて、隔つれども、相見し子らは、遠目にもしるしとよめり○榜出よむべし　とつどめ

○旋頭歌　廿六丁ウ

＼劔後鞘納野邇葛引吾妹眞袖以著點等鴨夏草苅母

○著は着の字似たる故、誤けん○着點等鴨とよむべし、着を、きせと○せて、あらんとにかもにて、夫○きてんとにかもとは、ことばきにきせんとて、是の葛引と也○よからず、等を、トテとは、

よみし事見えず

○下三十三丁目

○姫押生澤邊之眞田葛原何時鴨絡而我衣將服の誤り也此歌も、葛を引て、糸にし、くく○葛引わが妹が、勞して衣織て、着迄の、意をこめたり　○纖させんと、いふ意也○

宜長云夏草の草は、葛の○上に、葛引と書し故下前哥の誤りと云り　をかへて書したるべし○夏は、這時節なれば、下はかへてはふくずひくもと、よまんか○葛は、衣に織ること、苅と書ても、引とよむべかりけり　と、今もかはらず、

穀を用ひしことは、哥にも見えざれば、あやし、猶後遑考に、委くいへり

頭註　此歌は旋頭歌ならずまかひてくはへしか

△同　同丁

住吉波豆麻君之馬乘衣雜豆臘漢女乎座而縫衣叙

○契沖曰　遊仙窟曰九十一　觸々横波翻成眼底二廿六　○艶なる日睇而横波言美人雙眼尾狀似水波之菱横波也　を、波に譬て、なみつま君　○宜長曰　波豆麻君は、○乘は乖のと、よめりしなり　按に波里麿着の誤　誤として　はり

と、よめりしは妙按と○馬乘衣と

すりつけしまだらのころも　いふべし○榛摺付也

いふ事きゝなれず、けに、○漢女を、とめとよめり○雄略紀まだらのとよむべくこそ　しは、いかゞし　○泊於住

吉津、吳織及、衣縫兒○是によりて、漢女と、よめりしといふ
媛弟媛等ーと見えたり○心ければ、漢女をあやめ、とかよまん
○座を、宣長、ませてとよめりしかど○今按座坐も同音也、坐
あがめいふ様に、聞ゆべしとて○に　を、座と、か
きし故によめざる也、坐は、す　坐は不慮に來し人　意は、お
ぞろ、そぞろとも、よめりし也○の坐するをいふ也○なじく
は、あらざる也坐は不慮に來りし人　これも、衣を縫はせんと
の、坐也座は、主人の座と、わかつ也○て漢女を、まうけし坐也
○依坐をあやめをまけて　○まけて　は、まうけてにて○冠辭
てと、よむべし　もとめしと、同じ○も、
につるあやめとつ
ゞくべければ也

○同　廿七丁

△夏影　房之下庭衣裁吾妹　裏儲吾爲裁者差大裁
（ナツカゲノ、ネヤノシタニハ、キヌタツワギモ、ウラマケテ、ワガタメタヽバ、ヤヽオホニタテ）

○略解云夏影は、あつき日かげを隔つる所をいふかと也○夏影は女房の居所をたつかげの房と、いふと云々○女は陰なる故、北の方とも、いふをもて、　○下庭の庭は、邇の誤とし
夏影の房といふなるべしとぞ　てねやの下にと、
よめりしは意○ねやの下にはゝ床の下にて、夏過、秋深て、　○
にたがふべし○蟋蟀床下に鳴、といふ頃をいへりし也
きり〳〵す、つゞりさせなどと○さて、夜寒になれば衣うち、た
よめりしも、是らによりしにや○ちぬふ頃にて我ために、衣を
たゝばせまからぬやうに、○こは、夜の衣など、着よからん○
大きにたてと、よめりし也○やうに、せまからずたてと也

裏儲は衣のうらを、もとめてと、いふ意也○此詞にて、冬の心つかひに、たつ事などする、意あきらかなり、房の
下とあるかけ合也　歌の意は、夜寒むを告て、蟲の鳴をきゝて、
はやくきぬたて、わぎもとよめり、依て、きぬたてとよむべし

頭註　きぬたつとよみては歌意きこえかたし

頭註　蟲の聲をきゝてきぬたてゝ下知する也蟲をいはすしてよめりしか歌要也

○同　廿八丁

△水門　葦末葉　誰手折　吾背子　振手見　我手折
（ミナトアシノ、スヱハヲタレカ、タヲリシ、ワガセコガ、フルテヲミムト、ワレゾタヲリシ）

○初句みなとのと四言によめり　○千蔭曰、振手を、見んとばかりにては、きこえがたし、振の下に、袖の字、脫せしかと云○振袖見んと也○今按に、こゝは、海邊なれば、袖振といふこと、まへにも見ゆれど、その意とは、ひとしからず、船出を見んと、○振手は、船出と、誤るべき字ならねど、せざれば、叶はじ　○船出見んとて、あしの葉を、折すてしと、いふ意な○假名なれば、ふな、ふるともあやまるべけれとも○猶考あらばとて、○みなとの、るべし　しひていふ也
あしのうれ葉を、たれか手折し、わがせこが、舟出を見んと、我ぞ手折し也、とよめばしかとすべし

○同　廿八丁ウ

△江林　次完也　物求吉　白栲袖　纏上完　待我背
（エハヤシニ、ヤドルシヽヤモ、モトメヨキ、シロタヘノ、ソデマキアハナ、シヽ、マツワガセ）

○初句を、地名なるべしといへども、定がたし○今按に江は、杜の似たれば、誤りしか杜林にて、もりはやしにや○完は、宍の誤にて、猪鹿を、シヽといふ也○宣長の云次は伏の誤り、求吉は來告の誤ふせるしゝやも、きたりつぐと

よめ〇求告の意にては下に、かけ合がたしや、杜林などに、や
りどされるしゝたど、狩もとめんは、やすかるべし、それよ
りも、わがせこの、いつこんと　〇宍待まつといふに、しげ〳〵に、
も、定なきは、待がたしと也　〇杠を、ゆづる葉とよめ　かねた
り、ししは、　〇杜や、林など也、又卷十四三十五丁　〇杠り、江の字に、まがひ
しげき也
しかと、おもひしかど、さて　〇袖まき上ては、袖をかざして、
は字あまれば、杜なるべし　〇今やと待ながら遠く、見わたす
さまを、
いへる也

頭註　求吉此訓よはしされと考得かたし

〇寄草　卅三丁ウ

＼眞鳥住卯名手之神社之菅根乎衣爾書付令服兒欲得

〇註に、眞鳥は、鷲也といひしは、しひごとに〇鷲とはよめれ
〇や只鳥の住なるべし、眞は、そへいふのみ也〇ど、眞鳥とよ
みしこと、集中〇一說に、菅の根は、實ならんといへり、上に
に見えされば也〇も、菅の實とりになどいへり、書はことばの
み、たゝつけん、なり　〇菅の根を、書付ると　〇今按に　菅の根
といへるも、いかゞ　〇いふことは見えず　の、ねもごろに、
おもふ心ざしを、衣に摺付て着まほしき、　〇おほくはあだめく
よき子もがなと、いふを略したる也　〇女にて、實におも
ふ女のあらば、〇略意深ければ、一わたりに　〇摺を、書し、なり
とれおふ也　はきゝとりかたき、哥なり〇　守にかきしを、あ
やまり
し也

頭註　すがの根を書付ることはいかゝしてにや　何のよし
頭註　菅の根を衣にかき付るとのみにてはわきかたし
なければ餘情を味ふべし

〇寄玉　三十一丁

＼伊勢海之白水郎之嶋津我鰒玉取而後毛戀之將繁

〇契冲云島津を。海士の名かといひしは。ひが事也。按にっ島は、
〇鳥の誤り。取の假字にて下の句の。取てといはん料也。とり
ては。我が物にしと　略解云、いせの海の。あまがとりつるに
いふ心也。と云々　〇て。我の字は。ゑと黍と。似たれば。誤
りしかといへるも、よき考といふべし、〇古說に島津は、島人
なりといひしは、非也、島津てふ事、今按るに、猿樂に、鵜飼
の部の
詞に　島洲洲おろす。あら鵜ども。此川波にはつと放
せば　とある。此島津の事。四座の樂人。しれざる事とせり、
是は、鵜を七八ツも放つかふ共しまつ。約　なるを。島
津といふ也。依て。海士の、海中に入て、鰒の玉を、とりうる
事のしまつ、つゞまかなるを、しまつといふにて、俗に。終末
と書て、つゞまやかとよめるがごとし、今俗。しかする〇し締
を。しまつといふもおなじ意也〇縦又約を。しかよめり〇都み
締都約武也志牟志米同しとり　〇歌の意は、玉をとり得しを、女
しまりなといふと同じ語也　をわが物に、とりおかへしに、
たとへし也。さてとり得たらば、心ぐるしき事は。　〇逢ての
あらじを猶戀しく。おも心の、しげくなりしと也　ち、増戀
といふ、題
のこゝろ也

頭註 島の鳥鵜とつゝけしも是と同しかるべし鵜飼が縄をくりよせくり出しさはぐをいふ也

〇同　卅十四丁

〈如是爲而也尙哉將老三雪零大荒木野之小竹爾不有

九一一

〇略解に卷十一に　かくしてや猶やなりなん、大
〇あら木の、うき田のもりの、しぬならなくに　〇なりは、成、朽の誤とし
て、あきらけしと云々、此歌を、誤り傳へしならん、されど、
此まゝにていはゞ、かくのごとく人にあはずして、年をへ、老
ゆかんとなるべし、〇十一の歌と、同じ十一の意は、かくて
といへりしはいかゞ〇けれど、意は別也〇しや、猶しげ〳〵に
戀しくなりなんと、下を　成を、朽としては　此歌は、大あら
かへしたる、手には也　〇歌の意を、誤る也〇木野は殯の意、
小竹は、死の意、死にもやらず、あふこともなくてか　〇小竹
しらの雪と、つもらん、といふを、老なんとよめり
を、さゝとよみしは、わろし、次にも、や　〇白氏文集曰　過四
はせのしぬとよみながら、いかゞしけん　〇十念彼聊白悅從一
此明鏡中不嫌頭似雪、　〇古今集　さゝの葉に、ふりつむ雪
といふ意もてよめりしか　〇の、うれをおもみ、もとくだちゆ
く、わかざ
かりかも

〇同　同丁

〈淡海之哉八橋乃小竹乎不遣矢而信有得哉戀敷鬼乎

〇今按に八橋の八を、矢として、下の矢は、衍字なる　〇矢には
べし、さらば、しぬをはかずして、とよみてよし　〇けば、
射らるゝなり、はがざれば、射ることあたはず、射宿おなじ詞
にて、ふたりぬる夜を、たのめども矢はがざる故に、いぬるこ
と、なりがたしと、　〇此歌などを、たゞに解ては、よみ　〇千蔭
たとへよめりし也　〇人の意をことざまにするがごとし〇云
八橋の小竹なれば、矢にはくべきを、造らぬといふに、我か領
ずべきに、定りながら、領じ得ぬをたとへたりしといへり、見
る人好に　〇信有得哉あはずしては、世にありながら
よるべし　へがたしと、深情をのべしなり

〇寄木　三十五丁

〈足乳根乃母之其業桑尙願者衣爾著常云物乎

〇契沖云　桑の下に、子の字、脫せしにて、　〇千蔭云　其業は、
桑子尙の三字を〇〳〵はこすらとよめり　借字にて園有也、
業を、那ると用ひし〇今按　其は斯の字の、片のきえ　〇斯業
ことといかゞといへり〇に　て其となりしにや
たれば、母のしわざ　〇願者に、蠶をかねて、母のしわざの、
にせし桑子のわざ也〇　蠶も絲として、織て、衣として、
きる〇此ことばゝ意にこもりて、餘情也。願はに蠶をかねた
と也〇り、かへは衣になるといひなしたり、われは戀ねかふか
ひなしと〇亦云　母がそのわざと、よみても、聞ゆ　〇著はまへ
いふ心也〇れど、猶しわざと、いふこそよからめ　にも
ありて、齊の誤りといへりしに、かく〳〵また〳〵　〇唐詩選云　願作
書たれば此まゝにて、よかるべしやいかゞ　輕羅著細腰
といふ句を、さきに、伊勢物語殘考に、桑子とあるに、引たる
を思ひて、また〳〵かくいふは、蠶も、衣となりて君が身そふ
を、われは戀ねがふ、か　〇此著も、齊意なれ
ひなしと、いふ意にや　〇ば、おなじかるべし

頭註 桒子偁とせされは聞えかたし

頭註 蠶は木の枝につくる故に歌木によす題とせしかされとも題
にはなれ侍るべし

頭註 寄木題故桒子としては寄蠶にて放題といふべし故人いかゞ
心せしにや依て桒すらもとよめりしにや

○寄雨　三十六丁ウ

△甚多毛不零雨故庭立水大莫逝人之應知

○庭たづみ、ながるゝ涙など、つゞく冠辭也○かくては、冠辭にはあらず○に今按大は哭の誤と、しられたり

○哭莫逝　なるべし、哭に、流をかね、涙ながしながらかへり給ふな、人見とがむべし、といふ意にや○しくも、ふらぬ雨故、袖をしぼりてかへり給はゞ、みとがめられ給ふべしと也○かくては冠辭のつゞきに叶ふべし○たいくなゆきそ、といふ詞づかひは、なまなるべし

頭註 大をいたくとよめりしことは見えずされとありしにや

○寄月　三十七丁

△春日山山高有良之石上菅根將見爾月待難

○註云妹を、菅にたとへて、月の夜に、あはん　○眞淵云菅の根
○と契しにやといへるは、歌の意に叶がたし　○は、菅の實の
誤りならん、○宣長云菅の根は、舊鄕の、誤にて、石上故
と見えたり　○鄕見むと、よめりしは似よらぬ字誤り也
○今按に　石上はいはほの邊を、上といふは、川菅の根の、
邊を、川上と、書がごとし、石のほとりの義也○寢見んと、
いふ意にてこよひふたり、○妹がり行には、月をいとふべけれ
宿見んといひかけたり　ど、また宵のまにて、月の出ざれ
ば夜の更ざる○春日山は、めなれし山なるべけれど、戀の情に
を、いふ料也○は、めなれし山も、いや高きやうにおもふべ
し、月の出るを待とほに、○すがのねは、ふたりね見ん○こは、
おもふ心づから、なるべし○と、いふのみの、あやなり○人し
づまらぬ初夜
の、けしき也

頭註 山高き故に月の出ぬか宵過たらむとおもふ心つかひ也妹か
りゆかむと月まつけしき也

○雜挽　終丁

△玉梓能妹者珠氈足氷木乃清　山　邊　蒔散染

○宣長云　火葬して、其炭を、蒔ちらす事也、　○とて、續後紀
淸き山べといへるも、此故也、其ことは　を引てくはし
く、註○今按に　玉梓といふ初句、妹とつゞけし○玉梓は、た
せし也○ことをば註せざれば、下の意もいかゞし○よりきく、
ことにいひてたまづさの○さて、玉梓のたよりなければ、妹な
使、又たよりとつゞく也○つかしく山べをまけこしと也、まけ
は求○蒔は、求の借字、妹まけ入は、妹は玉かもと、○妹に逢見
也　○露の分入に、みだれちるを、よめりし也　まく分入
しに、妹は見えず、露の袖に、玉とちり　此字を、ヌルとよ
みたるを、さては、妹は玉かもとよめり○染めりしこと、集中
に見えず、シム、　まけばちりそむ　とよむべし、求入ば、露
ソムとよめは　の玉のちりそむると、い

ふそむ也○次或本哥云

△玉梓之、妹者花可毛此花かもとあるによりて、火葬の骨など、まきちらすことにはあらず、又骨とも、炭とも、火葬の事もなければ、しひてしかいはんは、わたくし也○清山邊は淨土といふ儀、墓所を、しかたとへて、よみけん　○是は花のさかりの山路を分入ば、萩などのちるを、あやによめりしにや

頭註　染は濡のあやまりしか火葬の炭をまきちらせしこと何によりし說にや例なかるべし

頭註　蒔散染といふによりて炭まくことゝいへりしなるべし

萬葉集八殘考

○春雜歌　初十四丁

志貴皇子懽御歌一首

△石激垂見之上乃左和良妣乃毛要出春爾成來鴨

○初句、いはゝしるとよめるそよき　○垂水は攝津の地名と註せしは、しひごと也　○いはゝしる、瀧にもよどは、ありてふを、などわが戀の、ふちせともなき　○といふ歌の意にて、瀧にもよどむ所は、あるべし、それを、たるむと、よみなせり、纜など張たるに、中たるむごとく、石はしる山川も、水のたるみてながるゝ所を、いへる也　○垂水之上の、上は、邊の意也、水のよどみ、たるむ邊を云　○山の、たわみたる、あたりといふを、たるみとよみ給ふは、新作也其たわめるあたりには、もえ出るとなり　○かくめづらしく、よみ出んは、なま心にては、得いできさるわざ也、依て、地名といふ說は、哥の新作なるを、等閑に見しなるべし　○歌は、人のもとめざるを、見出てよめるを、ほむるぞ、ほいなり

○石はしる瀧のたるみを略してよめりし也

頭註　垂水といふ地名外にも見えたり

頭註　落瀧つとよめるは峯よりおつる瀧也よし野川の瀧も川の石はしるを云也

○尾張連歌二首　名闕　十四丁ウ

〽春山之開乃乎爲黑爾春菜採妹之白紐見九四與四門

○眞淵云乎爲黑は、乎烏里の誤り○宣長云乎烏里の誤りにて、花咲く、をゝりと同じと云々　○開は崎の、かり字なりといへり、崎乎烏里にて山の崎のたわみたる所を、いふといへり　○今按に　開は夜のあくるにて、あくるに二、明の借字　○乎爲黑は薄闇を、乎爲黑とよめり、夜の明てまたしばし、くらくなるを、うすぐれといふ

○あけぐれ○俗うすぐらいといふと同じこと也、と〻、おき出ともいふ○て、わかなつむ、妹が紐は、白き故、うすくらけれど、それと見ゆる、明方のけしき也

○春日山は、山のはの、明わたるけしきを、いふのみに、いへりしなり、妹がすがたを、みまほしといふ意也　○開は、崎の借字、山の崎の、たわみたるをいふ、おゝ、山のたをりなどよめり、字鏡云、㟁曲岸也、太乎里など、なつかしく引出たり

頭註　乎爲約宇也宇爲くれ也

頭註　春日山は東山にて鷄明の時をよめる相當也

○同　十四丁ウ

打靡　春來良之　山際遠木末乃開往見者

（卷十九）　二の句を、春避來之、四　開を咲とせし也、開を（同意也　○の句、遠木末を、最木末○咲としては、花のさくを、いふべし、今春のきたり［一云］あるに、最木末　○花の咲は一月の花の咲ゆくを見るべくもあらじまだ立春也　○頃也、されば、誤り明○此開往も右に同じく立春の、朝のけしきにて、夜のらけし○明ゆくに梢のけしきも、春立あしたは、こと也と也○右の歌を、二首よめりしにて、意もおなじ、開の字に、なづみて見誤りしことあきらけし　○木末をこぬれと、よめりしは中／＼、よからんかし　○とほき木ぬれの、あけゆく見れば、とよむべし

頭註　夜明は夜の開闢なり

○櫻花歌一首并短歌　十六丁

〽孃嬬等之○四句目　敷座流　此上ニ脫字ありけんといへども、略したるにや、をとめらが、かざしのため、みや人の、かつらのために國のはて／＼迄、植させ給ふといふに、君がしきませる國の、はて／＼といふ事は、こもれば也○結句安奈何いかにとは、よめざるなり今按に何は荷の誤り　安奈荷にて、花のにほひも、あなにと、ほめしことば也○大君の、しきませると、くはへて解べし

○反歌

△去年之春相有之君爾戀爾手師櫻花者迎來良之母

○千蔭曰こぞさくらを、めでし人を、此春も、戀つゝその人を迎んとて、花の咲たるかと、櫻の心を思ひてよみしか　○宣長云右長歌、脫字ありて、春山の、人の越行たとせし事ありて、なるべし、さて、反歌に、迎ふとは、よめるなるべし、しからざれば、迎ふてふこと、よしなしと、いへるさも有べしと云り○今按に　こぞの春、あかし人に、あはまく、戀にたり

しかど、あふことは、定かならず、されども去年も、花にささそ
はれて、來りし人なれば、また〳〵、花のその人を、むかへ來
らしめんと
いふ心也

○大伴坂上郎女歌一首　十八丁ウ

△風交雪者雖零實爾不成吾宅之梅乎花爾令落莫

○略解にいまだ、逢も見ぬ、男のうへを、いひさわく事○只梅の歌
なかれといふ、譬歌か、又梅をしみて、よめるか
として、よしといふべけれど、實○今按に風まぜふゞき吹を、
にならぬといふに、別意ありげ也○男の心いられして、女をせ
めいふに、たと○さて、吾家の梅の花、さかりにて、實ならぬ
へしなるべし　ほど〳〵いふに、男の心いられして、深實なき
を、みならぬといふにて、○花爾令落莫は　あだにちらすなに
きかせしあやなるべし　て、花は化の誤
○深實もなく、うかれ心に、わが花とおもふ娘
などを、いたづらに、名をちらし給ふな也

○次二十六丁ウ

△吾屋前之花橘乎霍公鳥來不喧地爾令落常香

此歌の、地にも、化の誤り、時鳥來なかずし○梅を、花にちら
てあだに花をちらしめんとか、といふと同じ　すなといふ詞は
な○化爾令落莫とよむべし花のかふりのき○地も、化似た
し　えしとて、誤りしならん　れば、誤しも
の也、橘の花咲しより、時鳥の來なかんと待しかひなく、あだ
にちらすなと、いふ意いとたへ也、地にとは、地の字あまりて

かひな　○二十七丁ウ　本爾令散都の本は、季の誤り、卒に
きなり　○同哥結句　ちらしつと、いふべしや、
木のもとに、ちらしつと
いひし註は、かひなし

○刀理宣令歌一首　廿三丁

△物部乃石瀬之杜乃霍公鳥今毛鳴奴山之常影爾

○眞淵云山之常影爾は、山の○宣長云山のたわみたる所を、と
木かけと、心うべしと云り　かげといふ、たをかげなりと
○山の上に香の字脱○今按に谷の門、山門、山口を、門とい
せしかといへり　ふは海門、水門、川門などの、門とお
なじか○依て、山の門かげにて、ふもとの
るべし○かげにといふこと也とすべしや

○大伴坂上郎女歌一首　廿九丁

△夏野乃繁見丹開有姫由理乃不所知戀者苦物中

○註云姫由理は、紅にて、ことに、ちいさければ、夏草に、おほはれて、咲とも見えぬと也○其咲くともしられぬを、わ
が思ひを戀る人に、しられぬに、たとふと也、ひめゆり○此註
は、すべて、うつくしくちさき物にいふことば也云々　○はと
りがた○今按　姫は　簾中にかくれて、人にしられぬ意を、とり
しや○に　て祕をも、ひめとよめると同じひめ事など、
いふこと○さて、姫といふによりてし○姫といふが、歌のもと
ばなり　られぬ戀は、くるしきと也○にてよめりし也、ちさ
き物などは、
無用のこと也

頭註 ひめおくは人しれぬことにてひめゆりのしられぬとかぶらせてよめりし也

〇大津皇子御歌一首　三十二丁ウ
△經毛無緯毛不定未通女等之織黃葉爾霜莫零
註なし。仙覺云。黃葉を。錦とよむべし。其例は
〇大伴家持
　〇佐保山に。錦織かく。神無月。しぐれのあめを。たてぬきにして
△古今集〇紀友則
〇たがための。にしきなればか。秋きりの。さほの山邊を。立かくすらん。
　〇藤原の關雄
〇霜のたて。露のぬきこそ。よはからめ。山の錦を。織ばかつちる
といふ歌の。にしきに。おなじければと。いへりしは。珍說といふべし。後人さまで。心をつくして見ざりけん。今按に。經緯定らずして。織よしなし。それをかくよみ給ふを。褒べかりけり。をとめらが。織には經ぬきなくしては織得さるに。經もなく緯も定すして。織し。紅葉のにしきには中〳〵しくべからじと。紅葉をことに。めでませしなるべし。此歌。考ふべき所もなけれど。錦をよめりしを。いまだ註に。もらしたりければ。くはふる也
〇もみぢ葉にとよみては。歌の意くだらず。おもしろからざる也

頭註 たてぬきもなく織しもみぢの錦にはをとめらか織しはいとしからすといふ心をこめし也

〇紀朝臣豐河歌一首　廿九丁ウ
△吾妹兒之家乃垣内乃佐由理花由利登云者不謂云二似
〇宣長云由利は、後にといふ意、集中例あれば、此歌もゆりは、のちにあはんといふ、心なりといへり〇千蔭云由利は、よりにて相あふをいふ、意はよりあはんといふ〇は、あふことからは、よそへいふに、及ばぬにゝたると也〇今按に由利をゆるすといふ意をかねたる也、ゆるすといふ、花の名なればことに出して、諷しらせすも、花物いはぬがごとしといふ意たるべし〇歌を諷て、情を通せしは、伊勢物語にも、見えたり　由利登云者不謂云二似とよむべし、花物いはねども、名にしるければ、ことに出て諷ざるに似ると也　十八卷に　ともし火の、光に見ゆる、さゆり花、ゆりもあはんと、思ひそめてき〇此ゆりも、つれなからす、心ゆるして、あはんと、おもひそめしと、いふはおなじこと也〇眞淵云謂は、諷の字意をもて、かきしかと云り〇一說不許云二似と、あらためしはとりがたし、百合によせて、よめりし故、ゆりをもはらには、よまざる也〇此歌、古說おほければ、しかともせざればいふ、またく〵よろしき說も侍るべし、先は、ゆりはゆるす意に侍るべし

頭註 かきをゆひてみせさゝるをゆりてみするかことし

○市原王七夕歌一首　三七丁
△妹許登吾去道乃河有者附目緘結跡夜更降家類
略解に　河をわたらむと、いふ意にて、緘結跡を、あらため
○て、足結つくるとよみてくはしく註したり、あゆひは、和名
抄に、波々岐と見ゆれば、河をわたるには、○今按に　七夕の
はゞきの類はぬぎて、わたるべかりけり　歌なれば、牽牛
の事なるべし、さて川は堤といふ、ために、よみて、人め忍ぶと
いふを、人めつゞむと、堤をかねたるべし、緘結は糸のもつれ
たるにて、人めを忍○歌の意は、人めつゝましくおもふまに、
ぶくるしさの意也　まだみじか夜なればとくふけしとよみ給
ひけ○夜更降家類とは、よくだちに
りけるとよまんかし

頭註 附目とかきし意世に目付なといふ意にかきしなるべし

○藤原朝臣八束歌一首　同丁　旋頭歌
△棹四香能芽子二貫置有露之白珠相佐和仁誰人可毛
手爾將卷知布
○眞淵云あふさわは、波に通ひて、淡騒あはざはといふ、ことなるべし　○物語文に、あはつけきといふ、ことばに同じ
○意は、芽子を鹿の花妻といへば、芽子の露を、鹿の玉として、
ぬきおける、其玉をたれ人か、心なくあはつけく、さわぎて、
手にまかん　宜長云物がたり文におほざふといふ詞有、これ、
と云と也　○此あふさはの、訛れるにて其おほざふと、いへる
詞の意と、あふざわ○源氏帚木に、おほざうとあるは凡雑に
と合て同じと云り　で、同じからじ、こは、源語訓解にくは
しくいへり、○此四字、古今、解し人なけれ○相は、猶の○和
見合すべし　ば、傳寫の、誤しとすべしとて　あやまり　は、
利の字草書よく似○猶佐利仁と改　なほざりにと、よむ
たれば誤として　て　べし、歌の
意、芽子を妻として、ぬしある人づまを、なほ○又相狹丸と、
ざりに、まかなといふはたそと、とがめし也　かきしは是を
誤り、う○此歌の意は、やすくきこえてたゞ、此四字○かく字
つせしか　によりて、わきがたし、猶後人の考をまつ　を改て
は、考し詮なけれど、いかにも、より所なければ、まづいへ
り、すべて、集中、似よらぬ字に、改しは、よからぬとすべし

頭註 鹿の手は足と同しいかで玉にぬかんよく味はふべし此歌はことばをそへてみさればわきかたし略言してよめりし也

頭註 芽子を鹿の花妻といふ意にてぬしある女をいへる也まかんは求る意まきねせんてふ意也

○巫部麻蘇娘子鴈歌　三九ウ
△誰聞都從此間鳴渡鴈鳴乃嬬呼音乃之知左寸
○結句之は、乏の誤り　○知は鉏の、あやま　○左は、在の、
の　とももしなり　り久とよむべし　りあ
りと○寸は岐とよみて須とよむ事な　とよむべし
よむ　し、すとおもふは、非なり○乏鉏在寸各字似たれ
ば、誤りしことあきらけし、も○乏は、少しといふ意にて、雁
とのよみは、何ともわきがたし　がねのしのびやかに鳴を誰か
きゝつ○宜長も、同按ながら、い○乏蜘在可是と考られたり、
と也　さゝかたがふのみなり　もよろしとい

ふべし〇こは、初雁をよめりしなるべし、乏はめづらしきと、はたらく也

頭註 ある人ともしくもあるかのかとたれとのかけ合いかゝといへることわり也

〇大伴家持秋歌四首　四十一丁

△雨晴而清照有此月夜又更而雲勿田菜引

〇又更のよみ、首尾しがたし、又の字あまりたれば、又は、不の誤りなるべし

〇夜不更而とよむべし〇二の句も、よみわろかるべし〇あめはれて、さやかにてれる、此月の夜のふけずして、雲たたな引〇とよむべし、結句は、雲なたな引そ、といふ略也〇此月は、今夜の月也

頭註 夜又は夜々といふを又と書しかされとも不の誤りといふべしや

〇大伴利上歌一首　利は村之誤ト云リ四十一丁ウ

△秋之雨爾所沾乍居者雖賤吾妹之屋戸志所念香聞

〇初句、むらさめに、とよめりしより、かくしかとよむべし〇雖賤を、やしけれどゝよめるは、きゝよろしからず、いやしけれど、又いやしけれどゝよめりしもよろしからじ〇常は、妹がこと、うと〳〵しく、とはざるに、秋は物さびしく、雨などにぬれても、ほすべきよしなく、物あはれに、妹戀しく、おもふ、わが心の、いやしけれどもと、はかはしけれど、妹がやどなつかしく、おもふとよめりし也〇人情の、あさましきを、みづからかくよめりしは、げに歌の妙意、あふぐべし

頭註 やさしけれどともよむべしや

頭註 淺ましきはいやしき也常はうと〳〵しく雨のつれ〳〵に戀しく思心のあさましくいやしきと也

〇文忌寸馬養　四十二丁ウ

△朝扉開而物念時爾白露乃置有秋芽子所見喚鷄本名

〇朝とをあけて、みぎりの萩を見るに、物おもふ心づからに、しかと見わかぬと也〇物おもひに、心をつくしぬれば、外に心を、うつさぬけしきを、いへるなり

結句〇所見喚鷄本名一説に、喚鷄は、昔はつゝといひしか、今はとゝと、よぶ也と云り〇鳥をよぶに、とゝといふはとゞのつゞまり、といふ詞にて、とゞも、つゝも、同じ、百々を、とゞといふ、百につゞまりしといふ、つゝ也〇依て喚鷄を津々と、よませし也、本名は、おぼつかなしといふ意、おき出て見れどもおぼろけに、見ゆるといふ意也〇是は妹がりゆかざりし、あしたに、妹が恨めしく、思ひつらむなどゝおもふ心からにや

頭註 芽子を妻にたとへて俤にみゆるけしき也

頭註 鷄に餌をあたふをとゝといふ也魚をとゝといふも喰する味物といふ意也

〇鏡王女作家一首　四十八丁

△風乎谷戀者乏風谷將來常思待者何如將嘆

○巻四十三丁同歌い　○風に、背をかねて、其背を戀ればか
さゝか字かはれり　ぜのたよりともしく、絶〳〵也と也○
また、風の吹來んとき、てまた　なげかんは嘆息の意にてか
ば、いかばかりうれしからなと也○　たしくなげくにはあらず
○なげきは長息の意也と宣
長くはしくいはれし也
頭註　夏は風の吹ざる時節のごとくによめりしなるべし
○笠縫女王歌一首　同丁ウ
△足日木乃山下響鳴鹿之事乏可母吾情都末
○千蔭云上は、ともしといはん序也、事は、言○こゝろづまは、心
にてともしは、めづらしき也、といひし也○に妻と、おもひさ
だめたるを、いふと云々　今按に　山○さるを、わが心におも
もとどよましで、鹿は妻を戀なくと也○ふ、つまにはことばか
はすことも、○ともしきは、少しの意なれば也、鹿の鳴○人と
ともしきと也○わぶるをうらやましきほどに、思ひて也○あら
ずは、鹿となりて、戀鳴ま○これは、男をさして○事は、詞の
しをと、いふ意をふくめり○つまとよみたまふ也○ごとく言也
○情を、おもひ
とよむべし
○遠江守櫻井王奉　天皇歌一首　四十九丁
△九月之其始雁乃使爾毛念心者可聞來奴鴨
○略解云　漢書蘇○任國にて、よめり○結句を、所聞奴鴨、と
武が故事なり　しなるべしとぞ　してきこえこぬかもと
よめり　わが忠節をつくす、心ざしを雁の○其といふにて、雁
使にも、きこえあげずして、來しかと也○によせていさゝか
述懐をの
べし也
○天皇賜報和御歌一首　同丁ウ
△大乃浦之其長濱爾縁流波寬公乎念比日
○戀の御かへしに、○寬は、覓の誤り、字似たり、○浪しば〳〵
給ふける也　めにつくといふ意也　よするとい
ひくだし　○覓を、しば　しば〳〵きみを　とよむべし浪の
給ふ也　〳〵とよみ　しげ〳〵にうち
よするをしは〳〵
とよめりし也
○湯原王賜娘子歌一首　五十丁
△玉爾貫不令消賜良牟秋芽子乃宇禮和和良華爾置有
白露
○この句、よけたずたはらむとよむべし○荻の葉におきし露の、つ
みわろし　玉のごとくなれば、つ
らぬきて、きえぬま○和和良葉の、和々は、たわ〳〵といふ
に、たまはれと也　を略して、和々といへるか
○源氏螢の巻に、わらゝかにとあるは、これを又、略○さら
したる、にや題に、娘子に給ふとあれば、戀の意か○ば、
なげき給ふ、君が涙の玉をつらぬ○芽子によせて、よみて、た
き、消ずして、たまへとなるべし○まひしなるべし、宇禮は、
上也、芽子の葉の上に、玉のごとく露○多和和の、多を略せし
たわゝに、おきしに、たとへたるべし○か古今註見えず、猶考
べし和を耶とよめりしは、潤和川と　今按に和和を。やはやは、
書しごとく、耶和良葉とよまんかし○とよむべし。俗言に。や

はやはといふに同。られ。やはやはら葉に。お〇古點の誤り
けり白露とよめば。ことよくこそ。侍るべけれ〇也。源氏のわ
らゝかにとは、〇俗にヤハヤハ
同じからじ　といふに同し

萬葉集九殘考

九丁

目錄

○大寶元年辛丑冬十月幸紀伊國時歌十三首

勢能山爾(セノヤマニ)黃葉常敷(モミヂトコシク)神岳之(カミヂカノ)〔ミワヤマノ〕山黃葉者(ヤマノモミジハ)今日散濫(ケフカチルラム)

○宣長云　常は、落か、散の、誤としてもみぢちりしくとよめり、さては結句とおなじいかゞ　○背山は、男山にて、黃葉は、思ひの色といふにて、妻をおもひの、とこしくやまざるに、神岳の山の紅葉は、けふかちるらむとよめり　○木の國へみともして行て、大和の、妻子を思ひて、よめりし也、國を隔て、思ひこがるゝ意をよめり　○背山、神岳、大和なり

○常敷は、常にわすれざるをいふ○かくては、字を改ずして、きこゆべし、神岳の山の、紅葉は、大和なる、妻子などの、思ひみだれて、侍らんと、たとへし也

頭註 背山は男自分のことにたとへて思のやむときなきを紅葉とこしくとよめりし也

頭註 神岳は神並の誤か字も似たり

頭註 背山の黃葉のいまたちらさるをとこしくとかねよめりけん

○獻忍壁皇子歌一首　九丁ウ

△常之陪爾夏冬往哉 裘扇不放山往人（トコシヘニ、ナツフユユクヤ、カハコロモ、アフキハナタズ、ヤマニスムヒト）
○世界皆、暑寒を、しのばんために、　○仙界は、常住にて、夏
家業に、くるしむをいへるなり　冬のわかちなきよし
を、い○かは衣は冬扇は夏、夏冬をしらず○皇子を、仙人にひ
へる也○へぬるは、仙家の妙といふべし　していはひしなる
べ○歌の意明らかなれどめてた
し○くよめりし故、くはふ也
頭註 紀云長者多經寒暑 往ハ經にや
頭註 往は住の誤か下に住と有かけ合也かくかへしよめりし昔の
すがたなれは也
頭註 夏冬もしらすすむやにてしらすとくはへてとくべし
○名木河作歌二首
△在衣邊著而榜尼杏人 濱過者戀布在奈利（アリソベニ、ツキテコグアマ、カラヒトノ、ハマヲスグレバ、コヒシクアルナリ）
○契沖云、名木河の哥に○宣長の云杏人は、京人の、誤ならむ
あらずといへるが如し○といへりさては、京人が、濱を過る
の意○其京人を戀しくあるといふべ○今按に、杏（カラ）を、離（カレ）といふ
か　しやいさゝか、おぼろけ也　にいひて、離別せし人を、
此から人といふ名に、思ひ出て、戀しくあると、よめりけん、
からも、かれも、同かれし人のなつかしく思ひ出しよし也
○尼は　すべて、僧の事にて、僧は世をすてゝ、山林にすめる
也、尼海士、同名にいふは、海上にのみありて、世の
まじはりをせざれば僧と○宣長海人を、尼と書しは、いか○泉
ひとしきをもて、いふ也○ゞと難せしはげにといふべし　郎泉
ともかくは、泉は、黃泉の泉○されば、僧と同じく、　○次の
也、郎はもはらなる意にて同じ○あまといへる也　丁に

名木河の哥三首とあ
りて同哥一首あり
頭註 杏人の濱地名と聞えたり何くのはまにや
○獻舍人皇子歌二首　十二丁
△抹手折多武山霧茂 鴨細川 瀨波驟祁留（ウチタヲル、タムヤマギリノ、シゲキカモ、ホソカハノセニ、ナミサワギケル）
○今按に霧の深く立とも、谷川の、浪ま○又云、霧深きとは、い
さりて立さはぐとふこと、あたらぬ也　ふべししげきといふ
もいかゞ　霧は　雺（シクレ）の誤字　たむ山しぐれ、しげきかも　とあ
しされば　似たり　りし
を、誤り傳へしはあきらけし、しらべもい○字よく似たれ○此
とよく、さて、浪さわぐとよみしもの也　ば誤りやすし　川
の末は、飛鳥川にてしぐれし
げくふれば、浪立ちわぐべし
○獻弓削皇子歌一首　十二丁ウ
△御食向南淵山之巖者 落波太列可削遺有（ミケムカフ、ミナブチヤマノ、イハホニハ、チルナミタレカ、ケツリノコセル）
○略解云四ノ句　落波太列可、削遺有ふれるはた○ふれるは古
れか、きえのこりたる　削は、消の誤としたり　き意か、と
しふりし人、たれかきえ殘り○又説に、落の下、雪の字○ふれ
たると無常の意に聞ゆる也　脱せしといへるぞよき　るは
たれかと、いひしばかりにては、いはほにはといふに、つゞき
がたしや、雪のいはの上に、はたれ、きえのこりたるといふべ
き○さら　ふる雪はたれと　よむべし、ちる雪○削は、消字、
也○ば　ともいづれにても○似たればあや
まりと○可消遺有（ケタズノコレル）とよむべし、石（イハ）の上には、消ずし
すべし○てのこりたるといふ、歌の首尾也　○波（ハ）

太列は まだらといふに同じ、あまぎりてふらぬ雪故、外は消たれど、石の上には、消のこりしと也

頭註 可消をけたすとよむべし

○手綱濱歌一首 二十丁

遠妻四高爾有世婆不知十方手綱乃濱能尋來名益

眞淵云四高爾有也婆は、しかありの加阿の、 千蔭云 四は、約古たるを、轉じていふにて、しか有也と云々○其の字の誤りにて其高にありせば、○今按に是は、神代卷に、黃泉醜女が、ならんといへりし也 ○平坂迄、追來しをもて、よめりし也、遠方の妻の、醜のごとくならば、我在所は、しらずとも、尋こましを、女の情淺ければ得たづねこぬと、よめりし也○四高は、醜の借字にて、凝にて女の心、しこりかたましをいふなり○醜和名抄云、日本紀云、醜女志古女、或說云黃泉之鬼也○世人爲恐小兒稱許々女者此語之訛也と見えたり○かくあるしこ也、すべて、云々いふ也、此歌も、女の心、かたましく、女の心のかたましきをあらば、尋ねこましをといふ、同意也○句切わろくよみし故、○初句○遠妻とよむべき也 ○よみあやまりしなり

＼卷十二四丁目我背子之將來跡語之夜者過去思咲八更更思

許理來日八面

此間許理はまだしく、夜更たれば、來らじ醜女ならば、くべしといふ意也、しこりの略、しこ也

頭註 一說云常陸國多珂郡多珂鄕在手綱濱をいまはこつたといふ此多珂のさとありせばといふ意にて高にありせばとよめりしといへりさては歌の心おもしろからずしこりこめやもとよめりしと同じければ地名にかゝりしことならじ

○反歌 春三月諸卿大夫等下難波時歌二首とある長歌の反歌也 二十丁ウ

△吾去者七日不過龍田彥勤此花乎風爾莫落

○初句を、わがゆきは ○長歌に、客去君之、及還來た○とあれとよみしも叶はじ びゆく君が、かへりくまでに○ば、餞別によめりし、歌なるべし 今按 君の誤り、字も遠からざ依て吾去とは申さじかし ○に 吾は れば、うつしたがへしに ○君去者合てしかるべし○た七日なればなるべし○は、龍田彥や、とすれば、かけ○花のさかりは、おほかの神なれば、君かへり來る迄は、ゆめ〳〵風に、ちらし給ふた、とよめり 結句をちらしそと、よみしもよけれど、もとのよみにてよか○長歌を、等閑に見て、此るべし ○初句を、誤しなるべし

頭註 附言客去者の客と吾との字似たれば誤りしにやたひゆかばとしても同しければ也

○妻和歌一首 廿八丁

＼松反四臂而有八羽三栗 中上不來麻呂等言八子

○松反は、十反といふごとく○年かへりても、不變をいふ○眞淵難解ければ、しひていふと見えたし○中上は、儀もて、中過てと、 ○月の半も過る迄、來ぬ人なれば、待はかへりて、よむべし しひごとにこそあれ、今さら、待といひやらん物

かはと　麻は借字、呂は追の誤り、子は、　千蔭云あれやは、云意か○方の誤り、麻追等言八方也と云り○といふ時は、やはゝ、返る語なれば、二の句しひにては、あ○今按に、松は、常らぬといふ意にて、いよ〳〵解がたし云々○磐にて、しひて色をます、まさぬなどいふことば○千蔭の難しは○松はいく年、なし、依て、しひてはあらぬ也○こゝの意也　○行かへりても、變せざるをもて、夫の、かけ歌に、消失多例夜、とあるをいさめて、松のかはらぬごとく、心いられせず、おはせと也　○三栗は中とつゞく枕詞也○の中上　上は止の誤り、字似たり、　止不來かなたへてこずとよ○結句、呂は追の　麻追等言八子とよむべし、むべかりけり　あやまりとし　さはりありて、逢がたければ、中絶來○よき折あらば、こなたよりざるを、うらみじとなり　○待といはゞ、來たまへと也○卷十七四丁メ

〽麻追我幣里之比爾底安禮可毛佐夜麻太乃乎治我其日爾母等安波受家牟

○此しひにては、しひてあはんとすれどあはずありけんと也○のおたじことたれどこにをは、いさゝかわかちのみたり

○松かへり、しひにてあれやは、三ぐりの、中たえてこず、まつといはゞこ○も恨みじと也○中絶てこずとしひては、しひて消うせん、心し給ふな、松のごとく、いつもの心したまへと、いさむ也　○松反を、待かへり○あれやの、意にときては、

歌の意、くだりがたし○佐夜麻太乃は、佐は發字、山田なり○乎治は老翁也、山田の翁方角をしりて、鷹の行しを、したひ行しかど、もとめ得ざりしと也○も麻追我幣里は、松のいく年かへりこもとめ行かずとも也○色を變ざるがごとくに、忍びておれといふ意、鷹を、手なれし鷹ならば、かへり○まへの歌もとめ行かずとも也○くべしといふ意なるべし○も、上はおなじこゝろ也○夢に見えしをよめりしと也

頭註　母等はもとめあはざりけむ也

頭註　かくいへどもわきかたからんよく味ふべし

○春雜謌　五丁ウ

△今朝去而明日者來等云子鹿丹旦妻山丹霞霏微

○眞淵云けさ行て、あすはこんと、いふ兒に、朝妻とつゞけたるかに、合ておもふに、けさかへりて、また明日の朝、來らん妻は、朝ごとにあふからは、則朝妻といふべし、夜る逢を夜妻といふ類也、是によるに、朝づまは、右のごとくにて、さて、夜妻てふは、忍て夜妻故に、心くるしきを、人めはゞからで、朝までも、見るはよろしければ、子等が名丹、闕のよろしき、朝妻とは、つゞけたるべし、かけのよろしと、次の歌をるきとは、其名に負ふするが、よろしきと也○是は、合せて、いへりし也○今按に云子鹿丹、鹿の音、呂久の、呂を借○子等を、子ろにもて、等に通はせたら○とよめりし也○次の歌に、子等名丹とある、子等と同じ○此下開は闕の誤り子らが名に、きゝのよろしき、朝妻の　とつゞけし也この句　明日者來牟等とよむ○べし

賞は、今朝わかれ行を、惜みて、又あすも來んと、なつかしく思ふ、子らのごとくなる、名の、朝妻山と、つゞけしは、次の歌にても、しか上は、妻といはんとておく、よく賞されたり○もしろく、よめりし也

頭註　子等に頃をかねて霞棚引とつゝけしにや

頭註　防守の歌は子等子呂とよめり

頭註　眞ハ開ヲ闕ノ誤トシかけのよろしきとよめり

○詠鳥　六丁

△春霞流共爾青柳之枝喙持而鶯鳴毛

○千蔭云霞のたな引を、水のながれの如く見て、なるべしといへり○今按に此枝喙持て、すゑが、たし、柳はしたゞふたれば、折さへに折がたし、まして、鳥の啄にて、くひ折べくもあらず、又枝を啄ながら、鳴といふ事、あたらぬ也○十六卷十八丁ウ　白鶯の、ほこくひもちて、とちるはたとへしにて、ひとしからず○源氏胡蝶三丁め　はなきく、枝どもを、くひて、飛ちがふ、鶯の○これにも、こゝによるとこありて、かきしなるべし○喙は　啄移の似たれば、移の誤りか　○持移詩而は詩の字にまがひしかなるべし、もし此考非ならば、結句の鳴毛は、可の字脱にて、鶯たかぬかもといふべし○一句　共を、たへとよめりしもよろし

頭註　霞はおほろけにて水のことく、わかち見ゆるものたらぬ也

頭註　枝喙持てはなかぬかもといはされはいかがし

○詠花　九丁ウ

△馬並而高山部乎白妙丹令艶有者梅花鴨

○宣長云馬は忍のあやまり　忍並而とあらためたり○此初句、高とはつゞかざるといふ、說によれるにや

誰來にて、今按に、たかき、たかき、馬なへて、たかきて見○かもじをにたれば、誰來なり○ると、いふにかゝれり

○さて、高山部と、つゞけ 梅は 櫻の誤り、といへるぞよ
しにて、誤りにはあらじ○ き前後、さくらの哥なり○
眞淵云、梅は外國より、わたりしといへども、梅に數種あり、今
はむかし、江戸駿河臺に、梅を好みし翁ありて、五百種あつめ
しと也外物かく○又わたりしといふ說も見えざれ○梅の歌
は、變ぜざるなり○ば、しひて、外物とも申がたし○は、櫻首
ありて、國々に數木あをもてお○戸川氏梅を數種植られしを見
もふべし、昔なきにはあらず むかしの人のもてあそびしを
思やりぬ、是も四五百
種也、たとふ物なし

○同　同丁

△去年咲之久木今開　徒土哉將隨見人名四二（コゾサキシ、ヒサギイマサク、イタヅラニ、ツチニヤオチム、ミルヒトナシニ）

○眞淵云久は、冬の誤にて、冬木なるべし、集中、冬木の梅、
又冬木の上になど有、冬ごもりせし、木のまゝにて、早春に
咲をいひて、櫻か、梅の歌なるべし、又、之久木の三字、○今
左久樂の誤りにてこそさきし、さくら今さくかと云々 按
に 久木は、いづれ誤りなるべし、梅は好文木とも、いへるを
とりて、文木と書しを、久に誤りしか、さらば、久木は、文木に
て梅○字も似よりたればあ○梅は、雪中より花咲をめづらしく
也 やまりしなるべし もてはやせば、去年よりめなれ
て、春にさくは、見る人なくて、いたく○歌の意、おもしろくは
づらにちりぬべしと、めで度よめり きこえずして、感心也

頭註 去年より開しとあれば梅にたかひなし

○同　十丁

△阿保山之佐宿木花者今日毛鴨散亂　見人無二（アホヤマノ、サネキノハナハ、ケフモカモ、チリミダルラム、ミルヒトナシニ）

○註云卷 佐樂（サクラ）と、かきしをおも 佐宿木と三字に書しかとい
十三 へば此二字を誤り へりしは、よき考とい
ふべ ○高保云、宿木を、くらとよむべし、鳥の木に、やどるを
し ○もて、塒といふをとりて、宿木を、くらとよむべしと也
○今按に 宿木をねぐらとはよむべけれとく ○宿求の誤とす
らとのみはよみがたし、座も、くらとよめり ればくら
とよむ ○いづれ、さくらの花はとよ○合歡木など、いひしはよ
べし ○まざれば首尾しがたからん○り所もなき、ひが事也
○木は、求のあや
まりとすべし

○同　同丁

△川津鳴吉野河之瀧上乃馬醉之花曾置末勿勤（カハヅナク、ヨシノ、カハノ、タキノウヘノ、ツ、ジノハナゾ、オクニマモナキ）

○四句あしびの花 ○結句六帖、あしびの花ぞ、マウクマノナキ ○此句、よめざ
ぞとよむべし ○手なふれそゆめと見ゆ る故に、六帖
もよみを、あ○宜長云曾は、者の誤なるべし、曾と○勿といふ
らためしにや○いひてゆめといふ例は、なしと云々 例也とぞ
○又說に、本は、士の誤、つちにお○今按 置は 罵（ノヽシル）の誤り、源
くな、ゆめなるべし、といへり○に 氏に、句ごとに
、ずしのゝしるとあるは、詩の句○吉野山の花にめでゝ、あし
をほむるを、のゝしるといへり びの花を、めでのゝしるまし
なしと、いふ ○罵末勿勤（ノヽシルマナキ）とよまんか、○ 罵は、いかる意に
意なるべし ○猶考ふべし あらず、感心の意
に、はたらか○依て花を見て ○馬醉之花點誤也あし
せしことば也○感ずる意也 ひ也猶考給ふべし

頭註 置 玉篇云マウクまうけ見るまなしといふ意にやされはま

うけ見るまなしとよめるにや後按

頭註 山櫻にめでゝあしびの花を見るまなしとにや

○詠月　十丁ウ

△春霞田菜引今日之暮三伏一向夜不穢照良武高松之野爾

○眞淵云、三夜伏いねて、一度向意をもて、かければ、四日の月を、いふべし、さる義をもて、暮三伏一向夜を、夕月夜と、よめるかと也○千蔭云、三伏一向夜、心得がたしといへり　今按に　雲霧霞此三が、月のさはりにて、此三が、伏せば月あきらなり、といふ意もて、書しもの也　一向夜はひたすらにて、夜もすがらと、よむべし　○暮三伏一向夜とよめは、旋頭哥也、まがひてこゝに、くはへしにはあらじ歌の解せずして、なるべし　○春霞、棚引けふの、夕晴て、夜もすがら、きよくてるらむ、たかまどの野にとよめは、歌の意、めでたくかり字も、おもしろくこそ　○巻十三八丁目一伏三向とあるは、また意こと也ぞこにいへり、見合すべし

頭註 棚引ぬれば霞にかすむべければきよくてるとは申がたし

○寄花　十四丁

△藤浪咲春野爾蔓葛下夜之戀者久雲在

○註云下夜は、借字、したよと訓て、下從の意也、又、夜は、從の誤りなるべし、下從は、下待といふが如し　○之は助辭なり　○葛のはふを以、下よりといはん、序とせりといへども下より戀といふ事、集中になし○此說よしとも申がたし○宣長云　久は乏の誤りにて結句、ともしくもあらんとよめり　○今按に　下夜は　よくだつにて、夜の深行をいふべし、人め忍びて、夜くだちし、意をとりて下夜を、忍びしと、よまんか、藤は春咲、葛は秋にて、春は下はふ時節故、藤の下はふ意が、忍ぶ意なれば、忍ぶといはん、かゝり也　○また、夜は延の誤りにて、下延として、忍びしとよめは、難なかるべし、いづれ忍ぶといふ、しらべなり○春の野に生そめしより、夏より秋もはら、はふ時節、花さくまでの久しきを、初句にいひて、久しくもとよめりし也

○同　同丁ウ

△梅花吾者不令落青丹吉平城之人來管見之根

○略解云梅の花を、平城人に、見せむやうに、聞ゆれど、此ついで、相聞なれば、さにあらじ、なら人の、吾娘に、すむべきよしありて、娘を梅にたとへ、其人の、來りすむまで、他し人に、逢せじと、いふ意なるべしとぞ○よし　此註は　結句の、之根は、末をかねて、いふ詞とぞ○一說に　之は　在の誤なるを、濁るべきを、しらでかきしかと云り○四ノ句　ならなる人のと、よめ○今按に　之は、乏の誤り、乏は、ともしとよみて、ともしきは、めづらしく、まれなる、意をとりし也と　ならのうま人　まらう人などよむべしやいかゞ○結句來管見之根は　かくよみては、歌の意きつゝ見ましね　みませといふしらべ也○結句を、難じたるゝよみの、よくだりがたし

からざ
る故也

頭註　見ましのまはそへてよむべし
みませといふ故にしかきこゆる也

○問答　十七丁

狹野方波實爾雖不成花耳開而所見社戀之名草爾

○略解に此下に、さぬ方の、野べの秋萩とも、よめれば、是も
野の名か、其所の、桃梅たどもていふ也、卷十三、つくまさ
ぬかた○近江にて同じ所は、地をのみいひて、實になるをいふ
と有○は、上に、高槻村は、ちりにけるかも、三笠の山は、
咲にけるかも、又、柳に、川のそへれば、もえにけるかもなど、
いへるが如し、心はたとへ、實にならずして、うはべばかりな
りとも、あひおもふ○今按に狹野は、さぬるといひて、二人
よしを見ばやと也 ○ぬる事は、みならずとも、戀のなぐさに、
花をさかせたまへと也、實とつゞけしは、狹野と核と、○答歌は、
同じ詞也、核となる、實ならずともとつゞけし也　實にな
りしを、今更又々花のさく○狹は發字、宿事は、實に
ことは、あらじと答たり ○あらずともとつゞけり

○同　同丁ウ

△梓弓引津邊有莫告藻之花咲及二不會君毳

筑前引津亭　卷十一詞書

卷七、廿七丁梓弓、引津邊在、莫○同歌なれど、○卷三卅四丁
謂花及採、不相有八方、勿謂花○是は旋歌なりみさごゐる、
磯邊に生ふる、名のりその、○なのりそは海草也、引津とい
花さくまでにあはざらめやは○ふも海邊の地名なる事、あき
らけ○引津のべと、よみし故野○神馬藻とかくは、神馬なれ
し　べと、思誤るべかりき　ば恐れみてのるこ
と、なかれと○海草なれども、花はさくべけれど、浪にかくれ
いふ、意なり○て、いつさきしとも、わかざる故、花さくまで
とよみて、いつあはんとも、定がたき○むかしの人は、わたく
に、たとへし也、妙意を考よめりし也○しに、思ひよりたる趣
向を立て、人のあとを、
たどらざりしなり

頭註　卷三、みさごゐる磯わに生る名のりその鴡ゐるありそに生
るなのりその卷七、おきつ波よせるありその名のりその此
外も磯とよみたれば引津野邊とせしは誤也
引津邊とあるをのへとよめりし也

○夏雜歌詠鳥　長歌　十八丁

△大夫丹○眞淵云丈夫として、丈夫どち、立む○又說、丈夫を、
かふいきほひを以、よみしならん○走出丹ノ誤な
らんと、いへりし也、此初句、かくて○今按夫は、天
も、かけ合つゞきがたしといふべし○にの誤り大天丹
におほぞらにとよむべし、空にむかへば、ほとゝぎす○ます
てすみ、神なび山どよみて、なくと也　らを
としては歌の意○諸說も○大天似たれ
に、たがへり　同意也○ば誤し也

○同　二十丁ウ

△吾衣於君令服與登霍公鳥吾乎領袖爾來居管

○契沖云吾乎領は我に○是は、竿にかけ、ほせる○されど、君
こゝろをつけて也○衣をいふにや、いかゞ○にきせよ
と、しらするといひ○眞淵乎云は、干の誤りにて、領は、衣一領た
ふ事心得ずと也　どいへば、きぬとよむべければ、我干きぬ

のたるべし、此歌、かけほしたる、きぬの袖に、來ゐて鳴と、いはんより外なし、されども、領は、きぬとよむべからじかし○今按に、吾衣を袖にきせ○吾の草字、是と、衣と誤りしか○しんことあたらざるべし○夏衣とすれば、かけ合もすべし○卯月のはじめ、子規の、鳴聲を聞て、夏の衣が、へしに、○さなくと袖にきせとも、ほとゝぎすの、程時をしらすと也も、きこし○袖にきゐつゝ は鳴聲をきけば、をちかへりて、ゆべし 軒ちかく、鳴を、袖の上に來て、鳴なとよ○說々わきがたし、猶後按をまつ こは、袖をか○乎めりけん○ざして、見るけしきにきこえて、艶に侍るべし

は尓の似たれは
あやまりしか

○詠花　二十丁

雨間開而國見毛將爲乎故鄕之花橘者散家牟可聞

○初句あまゝあけて、といひ○よしありとも、俗語也、ふことばゝ、集中になし○雨はれてとよむべかりき○國は間の、あやまりなるは、明らけし、國見といふことばはゝ、天子の御上にて、常人のよむべき、ことにあらず○こゝに、あたらざればあ○とひ見をせむをとよむべし、雨晴は、となやまりとして○とひ見をせむを見んとおもへども、雨の降ほどに、ふるさとの、といふかゝ國見としては歌の意をあやもにて、立花は、ちりけんかと也○まるべし、一字にて、一首をへ、花の國見としては、花は放題也、すも花を見むことを、題意たゞ

頭註

○同　同丁ウ

不時玉乎曾連有宇能花乃五月乎待者可久有

○五月は、くす玉とて、香ぐはし○卯の花の、咲たるは、枝にきくすりを、玉のごとくすゐ也○玉を付たるごとく夜ゐもさやかに、見ゆめれ、五月もこぬに、玉のご○卯月は、神まつるとく、夜る立りあるを、いひなしたるべし○月なれば、時ならすしも玉をつらぬきて、○竹玉などよめりしごとく、卯の花は、枝に付しかと思ふ、と也○枝に玉をつらぬきつけし、けしきに見し○竹玉は、たかち玉の○卯花を、玉につらぬくやうにきこにや○事、すでにいへり○ゆれと、さにはあらず、こは卯花の、夜るのけし○ある人、此玉は、露をよめりしにやとい○五きを、見て也○ひしは、玉になづみて、しか思ひけん○月の玉はくす玉也それをおもひてよめりしにや

○寄鳥　廿三丁

春之在者酢軽成野之霍公鳥保等穂跡妹爾不相來爾家里

○初句春之の之○酢軽成野の、成は、如くといふ詞に○酢軽は衍字にや　てすがるなす野の、とよむべき也は○螺贏の借字也、螺贏は、螟蛉といふ蟲の、子を養○眞淵て子とするといふ事、埤雅にいへり、依て略す　云、春巣を借て、生ふ物故に、すがるとはいふなるべしと云、霍公鳥も、鶯の巣をかりて、生たれば、春の、すがるの如と、いふ意にて、すがるな○酢軽は、似我蜂といふ、○すがるは螟蛉のすといふなるべし○はむかしといへり　子を養て、我に

似よと、いふ意もて、○眞曰 ほど／＼妹に、逢べきを、あは
似我蜂といふと云々 ずして、とし月を、過し來にけり、と
いふ意○すがるも、時鳥も、おやにあはざる、意もて○眞淵、
也とぞ○妹にあはぬに、かけてよめりしか、いかゞ ○初二三
句の意を、とかずして、時鳥のほ
ど／＼とつゞくと、思ひしにや

○同　同丁
五月山花橘爾霍公鳥隱合時爾逢有公鴨
註云 ほとゝぎすの、立花にやどりすむとき ○ほとゝぎすの、
我も、君にあへるを、よろこびぬといへり ○やどりすむ時を
待て、あふ ○五月になれば、久しく待し、ほとゝぎす ○其待し
とにや、 の山を出て、立花の(にノ誤リカ)、木がくれて鳴と也 ○如く、
君をまちしに、めづらしく來ながら、まほにも見えず、おもが
くし給ふといふを、かくろふといふに、こめたり、久しくこぬ
故にはだ○橘に、ほとゝぎすの木がくれて、なくを君が來なが
たる意也 ら、木がくれたる、けしきにし給ふと、とがめてか
くよみし○只、ほとゝぎすの、立花に、やどりぬるときに、逢
なるべし○見るとは、何とも、よしなくこそ侍らめ、こはあだ
ことゝこそ、 ○また／＼後按を
いふべけれ ○まつべかりけり

○寄花　廿四丁
鶯之往來垣根乃宇能花之厭事有哉君之不來座
略解云 卷八ほとゝぎす、鳴をの上 今按に 鶯は夏かけて
○の、卯花のと、下至おなじこと也と○なけども、殘鶯とのこ

わりなければ、鶯は、○鳩鳥ほとゝぎすと、よめり ○時鳥は、
かならず、あやまり也 字似たり、誤りけん ○忍ぶ頃な
がらも、かよひ來ぬるに、わが待人は何の、 ○卷八の歌の意
うきことありてきまさぬと、よめりし也 は、卯花のうき
と、かふら ○同し歌を、かへしにもあらじ、
せしのみ也 かゝる類歌はいとおほし

頭註 卷八にも子規とあれはこゝもさるべき也

○同　同丁
△宇能花之開登波無二有人爾戀也將渡獨念爾指天
○註に上の句は、つれなく ○卯の花の、さかぬにはあらず、た
てある人に、たゝふる也 ○ゞさくといふ迄に、かゝれると云
云 ○とは、いひしかど歌のこゝろ ○今按に 初句は、卯の花の、
しかとも、わきがたく侍れ 如くといふかゝりなり
○さて、卯花のごとく、さくとはなくして、ある人に、いふ
しらべにて、卯花は、月の影と、まがふに、かげをだに見ぬ
人に戀わたるは、まことゝ ○初句を梅花櫻花ともかへやすけれど
に、片思也といふ意也 ○さては、影をも見ざる戀に、はたら
かざ○或説に、開を避借字とし、さくとはなけれど、それを頼
る也 みて、片思ながらも、戀やわたらん、といふ意にやと云
眞樴按に初句宇能花之は開といはんための冠辭にて卷四(四十三丁)
に娘子部四、咲澤二生流花勝見とよめると同じ格なり、この
をみなへしも咲澤といはん爲の冠辭にて、この類のち／＼
の歌にも猶あり開は避の借字にて歌の意はつれなくて、有人

ながらさすがに、避(サク)とはなければ、それをたのみにて片思ひながらも戀やわたらんといふ意にや

(朱筆にて)いらぬことながらふと思ひ出るまゝをふたこゝろなく御笑種にもと奉入御覽候御案の如く有人爾は上へつゝけてよむべき也

頭註 さくといはん料ならば何の花にてもよかるへし卯花か趣向也よく味はひてしるべしさくとはなしといふを見すくしてはたがふ也

○七夕　廿五丁

〽天漢水左閉而照舟竟舟人妹等所見寸哉（アマノカハ、ミツサヘニテル、フナワタリ、フネコグヒトニ、イモトミエキヤ／シカモテルフネノハテシ）

○略解云、古本、水下底(ミツノソコ)の字有しかればとて、みなそこさへにてる舟のはてし舟人とよむべしと也○舟人は、牽牛にて、妹は織女をいふ、○今按に而をおく、五十丁ウにしかもと、よめりし也○ばされみづと見えたり

さへしかも、てれる舟、(てる舟の)はてし舟人とよむ○いもと(ら)見えきやは、(本ノマヽ)丞の註のごとく男星のこと也○意は妹とあひ見えけりやといふ、手にをはなり○てれる舟、耳(ミ)さはりなれば、しか○字をかへずしてよむ○上の舟は、月のもてる舟のとよまん○をまづよしとすべし○誤か、てる月のとよまん いいかど

○同　同丁

〽吾戀嬬者知遠往船乃過而應來哉事毛告火

○千蔭云知は一本、爾、火は、哭の誤としていやとほく、とよめり○結句をこともつげなくとよめり○今按に一本嬬は嫣の誤り、是は(イモハシルキナ)とよむ○こぎ行舟に、わりしはつまとよめる也 嬬者知遠べし わが戀ふる、妹とはしるく見れど、こともかよはすことなり○過行ても、こなたにかへりくべしやと、おもがたければ行すくるを見るけしき也 ふと とよむべし、舟中へ、ことばをかはさんと也 ○事毛告火(コトモツゲナム)おもへども、榜隔(コギ)つれば、告やらぬと也 ○火は南方に、かたどるをも、南の音をかり用たり ○此外にも、かく用ひし歌、一首見えし也 ○古說の外考なし

○同　廿五丁ウ

△吾等戀丹穗面今夕母可天漢原石枕卷（ワガコフル、ニノホノオモハ、コヨヒモカ、アマノカハラニ、イハマクラマク）

○此丹穗面は、古說まち／＼也○今按に にのほは、にほひやかなる、ことにて織女をさして、よめりし也、さて、にほひやかなるかほの妹はといふ、妹を略したり○そのにほはしき妹の、天のかはらの石まくらして、まちたくみありげに思ひまどへる故、○にのほのおもつらんと也○いよ／＼とけがたくこそあれ はたる妹は、何ごとも、入ほかなる事なし こよひかもと、くはへて見れば、ことなき歌也

頭註 織女は天河原に石枕をまきてぬるてふをわか戀ふる妹にはあひかたしとよめりし也

○同　同丁ウ

〽天地等別之時從自孋然叙手而在金待吾者（アメツチト、ワカレシトキユ、オノガツマ、シカソテニアル、アキマツワレハ）

○契沖云しかぞ手にあるは、天地分れしより、織女は、お○四
のが妻と、定りて、かくぞ手にあると、いへりしなり　の
句、誤り字○今按に　手にあるといふ　○手は年の字、季とかく
にやと云々ことは俗語といふべし　をあやまりて、手と書く
し　とすればとしごとに秋ま　○秋待と、いはんとて、
か○年而在つわれと、つゞきよろし　としにあると、いひけ
ん猶考べし

頭註　もとのまゝによみても難かるべし

○同　廿六丁

△水良玉五百都集乎解毛不見吾者干可太奴相日待爾

○巻十八思良多麻能、伊保都○水を、しとよみしは、拗音○
都度比乎、とおなじ○を直音に、轉じたりと云べ
水の音、須伊を、五十○又清水を、志美豆とよみ、眞水といふ
韻の約にすれば志なり○も水を、稱する詞をもて、志とよます
る○此外、かくかきし歌○干可太奴はかけてぬるにて、玉
か○も見えず猶考べし　を、ふたじに、かけし
まゝにて逢ふ夜まで、○懸を、かゝとよめりし、神懸を、かむ
とかずしてねんと也　かゝりとよめるがごとし太と天と、か
よふ○千蔭は、かこたぬ意にいひて、涙ともなくては、かくよ
詞也○むことといかゞといへり、干は、在の誤として、四の句を
われはありがてぬか○解さまにて、歌の意、かくた
も、とよめりし也　がふ故、よく味はふべかりき

頭註　清　スミの約シ也　水は新の誤か字似たり

○同　廿六丁ウ

△自古舉而之服不顧天河津爾年序經去來

○初句いにしへゆと　○服は、機の假字として、　○彥星を、戀
よめりしはよし　はたとよめりし也　ふる心の、
切なる故に、その機物も、か○今按　服は、恨の誤りにて、なか
へり見ぬといふ意也といへり　に　しより、一夜逢ふてふと
舉たりし、恨めしさは、今さら、かへり見ずして、なかしより、
けふまでも中のかはらずして、年ぞ經にけると、祝してよめり
し○服としては、舉は、あまり○舉は、定まりし意に
かて、無用のことばならん　よめりしなるべし

頭註　まへに川津とありしと同じく門とよむべし

○同　廿七丁

△天漢夜船榜而雖明將相等念夜袖易受將有

○略解にあはんと思ふ夜の、明るまでも、夜舟をこぐに○かく
時移りぬれば、こよひも逢ずあらん、といへりし也　ても、
袖かへずあらんとあるを、○今按に　此袖とあるは、頭の意に、
解ざれば、首尾せざらん　かけ合ぬ故に、註にもいはずして、
首尾せしやうに、聞えたり、○袖は神の字、似たれば、○神こ、
されば、字の誤りし、なるべし　あやまりしか
夜は明ゆくとも、あはんとおもふ心がへせず○神の
易受將有して、しひてもあはんとおもふとたるべし　字を、
こゝろとよめれば、○また、袖かはさず、あらんや、かはすべ
かくあらんか　しと、いふ意にも聞ゆれど、袖かへずと、
あるにはいか
ゞあらん後按

○同　長歌　三十六丁

乾坤之㞢二行　○㞢㞢乃渡丹　㞢㞢を、歳の誤りとして、としのわたりに、とよめり　○今按に　㞢㞢は、止之の誤り、字も似かよへり、止之のわたりとよみしなるべし

㞢㞢の二字を歳の字に、誤るべくもあらじ、かし　○具穗船乃　くほ舟といふ事見えず　○具の草字、曾の草字、多く似たればあやまりしたるべし　○曾穗舟歌に、左小舟とあるも同じながら、是は、小舟にて、同　○四行　具世丹　とある、具も、同そよにしよまならん　○曾穗舟とも、よめると同じ、此かへしそほ舟あけのそほ舟とも、よめると同じ、此かへしべからじ　具も曾の誤り也　同　そよにとよむべし

皮薄の借字也、薄は、みだれて荒たるさまなるを以、そ旗　荒けるといふ名也、依て、そゝきといへるを、すゝきと、通はせし名也、さて、旗荒を　○はたすゝき、もしは薄もそよにと薄はたずゝきとよませしなり　○の、もしはもみだれ、そよばゝ也

頭註　としのわたりなしとよめるつゞきなるべし

頭註　皮薄　むかしははたすゝきとよめりし也はたは皮にこもりしほしをいふ也はたすゝきほに出るとよめるはたは皮也かはを引はたたといふに同し

○詠花　三六丁

手寸十名相殖之名知久出見者屋前之早芽子咲爾家類香聞

○手寸十　手寸は、たぐりの約にて、たぐり備へ也、たけばぬかみわねは長き、妹が髮、よめりしと、おなじと云々　○

又説に、根こじて植るとは、よめれど、たぐり備へ、たどいふことはいまだしらずと難じたり　○此初句、よりひごとに、　○手は、季のあやまり、寸十は、一尺也、尺をさかいはど　とよめり、季寸十を、根放といふ意に用て、根をわけて、植し苗といふ、ことなるべしや、名相は、　○殖之名苗の借字、根こじ苗を、うゑしといふ意にや

の名は、母か、毛の誤にて　○こは、しひごとたれば植しもしるく、なるべし　○いと〳〵おぼつかなし　○難歌も考なは、考へあた　○年をねと用ひし　○此解ははることとも侍るべし　○なるべし猶後按　○ぶくべし

頭註　相の字をへのかりには用ひさるよしを難じたり

○同　三十七丁

春日野之芽子落者朝東風爾副而此間爾落來根

○朝東風は、春風也、秋東風の吹しも歌には、時節違はよむべからざるなり　○今按に　東は栗の字、似たれば、誤りし　栗は、闇の借字、朝ぐりは、明くれにて、夜やに　○の明て又しばし、くらくなるを、いふなり　○は、奈良の西なれば、東風吹ども、いかでちりこん、西風にこそさもよむべけれ、等閑に見てかくかきしにや　○まへにけのうすぐにわかたな　○依て明闇風とつけむと、あるにおなじ　○よむべくこそ　○も、も

頭註　朝とく吹かせといふに何かより所ありてかよみけん

○詠鴈　三十八丁

△左小牡鹿之妻問時爾月乎吉三切木四之泣所聞今時來等霜

此歌は解ざることゝせし○は、器の誤、切木器の泣にて鋸の音也○しを惠岳註しけるには○孟莊子造レ鋸截レ斷木器と有をもて四かくいへども、鋸にて木を伐る音の、する音は、雁がねに、似雁の聲に、まがふことは、なきわざ也○鋸のはを、鑢にて、たる○されど、通はして、かくたくみ折木四哭とあるもおな也○に、かきしにや　卷六長歌に　じく此哭の字の四器の字とまが○切木之泣にて四の字、あまるは、木を切ば、ひしなるべし云々○枯るといふ意を、雁と用しか、さては四の字、あまれり、またく考給ふべし

○秋相聞　五十丁

△金山舌日下鳴鳥音聞何嘆

○秋山我はと、よめりしごと○舌日とつゞけり、○下は、心をく秋を慕ふといふをもて　○慕ふしたひ同　したといふ、かり字なり、男秋女を、おもふといふ意にて、秋山を、女にたとへて、その女の我を、慕ふ心のあらば、何かなけかんと也○舌日は慕のかり　○此舌日を萎るとして、草木の變じて　○慕字也　○色かはるをいふと、いひしはいかゞ○草木の色かはるを、萎るといふ事見所なし

頭註　下樋に慕をかねたり

○寄雪　六十二丁

△霰落板敢風吹寒夜也旗野爾今夜吾獨寐牟

○契沖敢を、 とよめるは○今按敢は救にて、いたく風こゝろ得がたしと云り　○に の誤板救吹さむき夜にとよめりしは、いた山風のいたと同じ○題は、雪とあるに、あらくいたは、甚しく吹を、いふなり○れとよめりしは、雪の誤り○卷一○みよし野の、山のあらしの、さむけく○此歌とおなか○に、はたやこよひも、わがひとりねんじ意也、旗野は、大和なりと註したり、野にひとりねん、思ひなるべしと、いふ意にて、女のもとによみて、やりしにやあらん○夜やの。やの字に。餘情のこもりて、一首の本音也。かへして。今夜とよみしを。等閑に見ては。わきがたし。よく味はふべし

△白露乎取者可消去來子等露爾爭而芽子之遊將爲

註に。露も今をさかりにおけば。きそひてと。よめりと云々

○やよ野もり。月にやどかせ。おもふどち。はぎのあそびに。日はくれにけり

此歌。たれよみしか。本歌を不レ解して。萩を見て、あそぶことゝおもひ誤りし也。本歌は。子供らが。野にむれはしりて。かけりあそぶをよめり。依て。子どもらがと。ことわりし也。裾をまくり上て。かけはしるを。はぎといふなり。歌に。はきにあげてと、よめるに同じ。裾の足からみて。はしりがたければ。すそをまくり上るを。芽子の花に。いひ

かけたり。裾を上て。はしりかけくらべするを。よめりしに。此心をしらずして。萩のあそびと。思ひしもの也

此子どもらがといふにて。よくわかちし也。脛(ケイ)ハキとよめり

○歌もきそひておけはといふ說もとりがたし

右四十二丁裏出

三笠山にて子ともらが、かけはしりてあそひしを見しもおひも出られたり

此歌一首也　かゝる事よみ出し心を二たひぬすむ事あるへからす歌ぬす人也

萬葉集十一殘考

○旋頭歌　二丁

△新室(ニヒムロノ)壁草苅邇(カベクサカリニ)御座給(オマシタマハネ)根草如(クサノゴト)依逢(ヨリアフヲトメハ)未通女者(キミガマニ)公隨(〳〵)

○延喜式七日、踐祚大甞祭式所レ造新殿一宇(中略)並以二黑木及草一構葺壁蔀以レ草云々○葺にも、草をもてふく、壁ぬるには、土に草を、まぜてぬる也、それを、かべすさかりに○さて、今須佐といふ草、須佐同じこと也○依、とよみても、同じ○その草をも、かりつかぬる如く、新室を、ほぎによりあつまり○須し、をとめも、草のごとくに君になびくと、祝したる也○佐は、進の意、すゝむといふ意をもて、をとめらも、君がまに〳〵と、よめりしなり

△二首めも秡に、しづめ、しづまることを、といへる鎭を賤の子がと、かよはしてよめりしなり○此事は、鎭の意にて、家を、ふみしづむるといふ儀にて、新　○進男命は天神におはしむろの玄(無カ)づきを、しかよめりしにや　けれと地にまじはり給ふ也此により土にまぜる草を須佐と云也

○同　三丁

△天在(アメナルヤ)一棚橋(ヒトツタナハシ)何將行(イツユカム)穉草(ワカクサノ)妻所云(ツマガリトイフ)足莊嚴(アシヲウツクシ)

○貧淵曰足纏は、足をかざるなれば、歩行(カリトイヘハアシヲイツクシ)に、まゝならぬ故に、一ツ棚橋はわたりかねなんといへり、莊嚴の下に、助言の、乎の字なきは、人丸集の、一ツの書體なり、助言は、そへてよむ也、安康紀に、みや人のあゆひのすゞ、ともよめれば、かざ

りなる事〇宣長云、莊嚴は、結髮にて、五句めをツマガリトイ
也と云々〇ヒテ、アユヒシタ、ズとよむべし、是は人のうへを
見て、よ〇道に、一棚橋のあるを、いかにして、ゆかむとする
める也　〇に人が妻がり行といひて、あゆひし出立也と云々
〇兩說ともに、わきがたし〇又說に、棚橋は柱を立、貫をなし
と、ある人いへりしなり〇其上に、板を一ひら、わたせる也
と〇それは、世間にあるをいふべし、是は天上〇今按に卷十三
の、天のうき橋などによて、よめりけん　　十丁　足玉
母、手珠毛由良爾、織旗乎、公之御衣爾、織將堪可聞、此歌
の、足玉も、足結の鈴玉也、此事と思ひて、註せしは、いかゞ
也〇古今集小町　見るめなき、わが身をうらと、しらねばやか
れなであまの、足たゆくゝる、此足たゆくは、足をやすめ
ず勞して、かよ〇此莊嚴にも、いつくしと、いふに、足をつくし
ひ來るをいへり〇ことといふ意を以、かり字に書たり、い
つくしの、いもじは、發〇意は、橋は人をわたす、爲なれど、
字、い行などのいと同じ〇天上にある、あめのうきはしなどは、
いかでわたらん、されども、妻がりといへ〇さて、何將行(イツカモカム)は、
ば、足をつくしてわたらんと、よめりし也〇て、何將行いか
にゆかんと、よむべけれど、脫〇莊嚴の、借字に〇嚴重の意に
字ありて、かくよみしならん　〇なづむべからず〇とりていつ
くしといふ莊嚴の意なれ〇いづれ
ば、うつくしといふべし〇同意也

頭註　如何將行(イカニユカム)の誤

頭註　妹かりを妻かりとよみしことはきゝ馴すかしされとわかく
さとかふらせし故つまとよむべし

〇正述心緒　四丁ウ

\何時不戀時雖不有夕方任戀無乏(イツトテモ、コヒズトキトハ、アラネドモ、ユフカタマケテ、コヒハスベナシ)

〇詳云乏は、爲の誤ならん、といへど〇結句はあらためぬれば、すべなしとよむ
も誤るべき、字ならねばいかゞし
べし、かくては、さはよみが〇今按乏は、ともしとよめは、無
たし、もとのよみはわろし〇に乏と書し故、あまたなる
意〇戀無乏を、戀はまさりぬとよむべし、いつ〳〵〇初卷
也〇も戀しけれど、夕かたは戀まさりぬと也〇に、
さむけきゆふべ、妹しおもほゆ〇すべなしと、よみては〇初句
と、よめりし意をおもふべし　おかしからず侍る也〇を、
いつはしもとよめり、又いつは〇この句、こひせぬとき
あれどゝ、よめりしはあたらず〇はと、よめるぞよき

頭註　次五首目　戀無之こひてすへなしとよめり

〇同　五丁

△日位人可知今日如千歲有與鴨(ヒノクレバ、ヒトシリヌベシ、ケフノヒノ、チトセノゴトク、アリコセヌカモ)

〇初句一本位を、低に作〇今按に日位(ミノル)し、萬物實といひて、位は
てひくれたればとよめり〇昇るにて、日の出るをいふことなり
〇依て日のほらば人しりぬべしと、夜の明ぬれば、きぬ〳〵
按に日のほらばにみとがめられん、といふ意によめり
〇されば、日のぼらは、又日の出ばなど、よむべき也、今日
は、今曉にて、夜の明行、ちかき故に今夜といふべきを、今
日のと、よめ〇一夜を、千夜のながゝれと思ふに、ながゝら
りしなるべし〇て明ゆくと、わかれを惜むけしきなるべし〇
千夜を、一夜に、たせりともと
よめりしも、是によりにしか

頭註 日のほらは日の出はなといふにおなし

頭註 日の暮ぬれは人しるへからず雲泥のたがひ也今日の下落字と見えたり

○同　六丁

△玉久世清河原身秡爲齋命妹爲

タマクセノ、キヨキカハラニ、ミソギシテ、イハフイノチハ、イモガタメナリ

○註云山城久世郡と いふ地名也と云々　○玉は山の誤り　○代の字脫し○淸は能の誤り　山代ノと改くぜのかはら能にと、よめりし也○ひしか、玉久世は、玉串を、玉くせといへ、玉串は、玉奇なり、さすれかく、似よら ぬ字に、改しばみぞぎする意に、首尾すべし○は、自作にて字の、うつしあやまりとは、いふべからず

頭註 玉久之のと世に誤しか

○同　六丁ウ

△狛錦紐解開夕戸不知有命戀有

コマニシキ、ヒモトキアケム、ユフベトモ、シラザルイノチ、コヒツヽアラム

○註云戸を、トモとよみし○戸は、谷の誤にて、ゆふ○今按ことは、あたらじと云々○べだにと、よめりし也○にまにしき、ひもときさけん、ゆふべしらずも、いのちしあらば、戀つゝあらむとよむべし○戸は、へのかなによむべし

○開は故とおなじ訓にてさ○紐ときて、兩人ねん、ゆふべは、いはけんと、よむべし　いつとはしらざれど、命あらばあふことのあらん○かくよめば、字をかへずして○前歌と、よめりし也○意も、めやすくきこゆべし　開公無とあ紐解るも同じく、ひもときさけんきみしもぞなきとよむべし

○同　同丁ウ

△百積船潛納八占刺母雖問其名不謂

モヽサカフネ、カヅキイル、ヤ、ウラサシテ、ハヽハトフトモ、ソノナハイハジ

○註云百積は、百尺也、さかは、十量といへり也○舟の尺を、よみしふことにて、積は借字也、といへりし也○こといひ、諸集に見えず、大舟小舟と、よみし外例たけしと人云り○今按に百積て、千とたる、れば、此說はとりがたしといふ意をもて、大きしあやなり、さて、百積舟を、もゝちふねとよませしなるべし○もゝち舟、かづきいるゝやとよめば○占刺もては、浦をかれたり、心を、うらといふをやすし　母の心にたれと、男をさしてとふともといふ○占なふことには○母の、たれに逢と、とふとも、ことゝ也　あらざるなり○其名はいはしとよめりし也

意は、百千舟、浦さして、漕入るといふ意にて、上は序なり

○同　同丁ウ

△我妹戀無之夢見吾雖念不所寐

ワギモコニ、コヒテスベナミ、イメニミムト、ワレハオモヘド、イネラレナクニ

○今按無之の之は、乏の誤として、よみはす○まへに、無乏に　コヒノマサレハ　べなしと、よめりしもあたらず○を、まさると

いひしと、おなじく、ともしからぬは、あまたなる故、二字をまさるとよむべかりけり○戀いまされ

ばといふ意にて、戀しき人を、夢に見まほしく、おもへども也 ○不所寐（イネラレナクニ）是を、いねらえなくにとよめりしもよかるべし ○巻十一八丁ウ隱沼從裏戀者無乏、とあるも、スべヲナミとよめりしは、意たがふ也、したゆこふるは、まされどもと、よまざれば、歌の意に叶がたし、又すべなしと、よむ意なければよく味ふべし

頭註 すべなしとよみしとまさりぬといふとの意よく味へされは情の淺深わきかたし

○同　同

△戀事意追不得出行者山川不知來（コフルコト、ナグサメカネテ、イデユケバ、ヤマガハキニケルモノヲ／モイザシラズキニケリ）

○初句に、戀事と、よむべくもあらず、拙きよみ、あやまりか ○事は、妻の誤にや字も、似かよひたり ○戀妻（コヒツマニ）上下せしとも、いふべし、妻戀とすれば、猶よかるべし ○追は進の、誤りとせしはよろしかるべけれども ○もとのまゝに戀づまにこゝろまどひてとよむべかりき ○追不得を、まよふ意に、かきしにや ○山川は、妹がり、まよひ出くれば、山川のありとも、いざしらず、出こしと也、依て山川と書て詞たらぬはいさといふを略して書けり ○不知來（シラズキニケリ）不知といふに、伊佐といふは、こもれることば也、依て、山川もいざ、しらず來にけりとよませし書樣也 ○人はいざ、しらずとつゞけしにて、こゝをおもふべし ○出ゆけば、山川もいざしらずきにけりとよむべき也

頭註 山川の下に脱字ありと思ふは非也

○寄物陳思　七丁

△千早振神持在命誰爲長欲爲（チハヤブル、カミノタモテル、イノチヲモ、タガタメニカハ、ナガクホリスル）

○宣長云持は、禱の誤りかと、いへどもこのまゝに、よむべし ○千早振は、荒ぶる神にて、天津神の御事にあらず、高山などに、ある神をいふ也 ○神持在（カミニトラル／トラレム）、とよむべし、持をとるとも、よめる也 ○神にとらるゝ、俗に人身御供とて、人をとる、神ありしなどゝ云り、其神に、とらるゝ命はたすからん、よしなけれども也 ○其命を、長くもと、おもふはたがためぞ、君が爲也と ○命ながらへて逢みんと乞ねがふ也 ○此歌などは、すぐれし歌にはあらねども、めづらしくよめりし也

○同　同

△石上振神杉神成戀我更爲鴨（イシノカミ、フルノカミスギ、カミトナル、コヒヲモワレハ、サラニスルカモ）

○古木には、神靈あるなどいへるは、歌の意に不叶 ○今按に成は成就にて、こと成ぬればふるびぬる、意もて書り、○依てふるびぬるをさぶるといふ也、さは發字にて、ふるといふ詞也 ○神成を神さびしてと、よむべし ○更は、新也と、字にいへり、ことさらなどは、ことあらたにといふ、是也 ○神さびしは、人の老年に、及しをいふ、としよりて、戀心は、うせたりしと也 ○その、としよりが、あらたにまた、戀をするかもと也 ○老人といふを、神さびしと、よめりしが、あやなり ○さび、さぶるは、古きをいふ也、人のとしよりも、同じ意也

○同　八丁ウ

△淡海海白浪雖不知妹所云七日越來（アフミノウミ、オキツシラナミ、シラズトモ、イモガリイハヾ、ナヌカコエコム）

○宣長云結句の七日は、直の誤○巻十に七日しふらば、七日こ
りたゞにこえきぬ、とよめりじとやと、よめりしとおなじ
く思ふは、○今按七日越七日を、一めぐりとよめれば、人めぐ
非也　に　りくる、といふ意に、かり用たりし
か　○あふみの海は、八十くまありて、入江などの、くま〴〵○
をも、戀のためにはいとはずして、めぐりこんと也
さてあふみの海のあふことは、しらねども、○まへの、一棚橋
妹がりといへば、人めぐりこんとたとへし也○とよめりしも、
此歌に合て、よみ人の○七日を、一めぐりといふ事む
意をさとるべかりけり○かしより、いへるなるべし

○同　同丁

△大土採雖盡世中盡不得物戀在（オホツチモ、トレハツクレド、ヨノナカニ、ツキセヌモノハ、コヒニサリケル）

○大土といふ事、故人考○今按に　濱の眞砂も、よみつくすと
へざりしと、見えたり○は、よまざるに、土のつくるといふ
ことは、たきわざ也、又、たむろして、　○積（ツミ）上し、小山のごと
築たるを、大土とは、いふべからず　くたどゝ、思ひしな
るべ　○土は、山、土と、山の草字の、似たるをもて、山を
し　土に誤りし、なるべし、山はほりのけば、たびら
かにも、たりぬ　○山の誤りとし、大山も、とればつきぬべけ
べければなり　れど、つきせぬものは戀にぞありけると
たとへしは、○又土は、かぎりなきを、大
おかしきかも　土など、いふべくもあらじ

○同　九丁ウ

烏玉黒髪山山草小雨零敷益益所思（ヌバタマノ、クロカミヤマノ、ヤマクサニ、コサメフリシク、マスマスオモホユ）
アメソフリシク

○今按に　小雨零しくとは、いふべか○小は尓の誤りか○山
らず降しくは、大雨にこそあれ　山草尓か　○す
げに、といふにやます、雨ぞ降しく　○結句ます〳〵をしく〳〵
と、つゞけし故爾は、上に付字也　と、上をう
けて、よめりしは、いとよ○雨ぞ降
かるべし次の歌の句治也　しく也

頭註　黒髪山所不知下野日光の黒かみ山はもと倉上山にて山の上
に又馬のくらを置たることし今行者の登る山也それをくろ
かみといひなれしもの也
ふもとを馬かへしといふもくらのよし也

○同　十丁

△大野爾雨被敷木本時依來我念人（オホノラニ、アメゾフリシク、コノモトニ、トキトヨリコヨ、ワガオモフヒト）

○宣長曰被敷は誤り　○千蔭被を、零（フル）に○今按　被は服を給ふと、
かといへりし也　あらためし也　に　いふことに
て、かうふる　かうふるの、ふるをもて　又、被の字似たり、
ともよめり　○零の、かりに書しにや　○此字は、揮（フルヒ）かす、と
いふ意にて、俗に、能岐といふ、意にて、ふる　ふるひかすに、
ひし物なれば、借てかきしか猶後按をまつ也○降日數（フルヒカズ）をかれ
て、しく〳〵といふ意をこめて、
つゞけし、かきさまにや、いかゞ
こはしひごとながら書そふ也

頭註　消考時といふ意わきがたし待の誤か木本といふに松をかね
て待の誤にや待によりことよめりしにてよく聞ゆへしまた
くて時の字よみがたし

○同　十二丁

平山子松末有廉叙波我思妹不相止者

○註に巻三に、守禮牟曾此之○又、廉の字は、康の誤りとして、
がとあるにおなじと云り　四字を有康叙波とし、あれこそ
はとよ　○今按に小松がうれ、巻三と同じか　○さて、小松は、大
めり　○らずそこにいひしに、合て見べし○木に、ならばぬ小
木にて、小人○末は、梢、木の枝のすゑにて、○小人にたと
にたとへし也　うらともうれとも、いふなり　へ、すゑに
せられいやしめら　○小松のごとく、小人とていやしめらるゝが、
るゝといふ意也　くやしければ、あはずはやまじとまけぬこ
ゝろを、よ　小松のすゑにいやしく　是は、貴人を戀せ　結句
めりし也　○有廉波こそなるべし　○し戀に聞えたり　○の
者は著の誤り也、上のこそのかゝ　○有廉波○波は　有波康叙の、上下
へなれば、めにたがひなし
せしとし○小松かうれに、あればこ
られたり○そと、よむべかりけれ

○同　同丁

△礒上立回香瀧心哀何深目念始

○契沖云瀧は樋の誤として　○ある人、若松としても、わか松の
たてるわかまつとよめり○意、何とも、すみがたしと云り
○眞淵云　巻十五　はなれそに、立る天香樹、　○とある如く、
うたかたも久しきときを、過にけるかも　荒礒の上にお
ろの木の、根もあらはに立るを見るに、あやふく、心　○回香瀧
いたきをもて、我戀に、たとへし、たるべしとなり　○の三字
を、天木香樹の、四字に誤るべからず、字も似　○此字、よみがた
よらざれば、信がたしと、かの人難じたり　けれどしひてい
は　○瀧は、竹の借たるべし　○礒の上は、川上などの、上と同
ど　たき、たけおなじ　じく、邊の意、礒は石にて、い
はほなどの邊に、竹のあ　○石を、礒と、書し　○さて、いはのほ
るを、いへりしたるべし　○は所々に見えたり　とりに、ある竹
の新竹をわか竹といふを、回香瀧と　○其若竹は、したやかにて、
あやにかきし故に、よみとりがたし　風にもなびきやすき、あ
だ人としらで、何に深く、思ひそ　○深目とよむべし、目を音
めけんと、後悔してよめりけん　によむべしやと云り
○かくても　い
かゞ後案

頭註　石の邊には根さしかたからんに何に深くもといはんとて也
深く根さしかたき心をいはんとて也

○同　同丁ウ

△念餘者丹穂鳥足沾來人見鴨

○今按に　此初句、　○念念餘者と、ありけん、おも　○と、念の
脱字ならん　ふにも、おもひあまればか　字をくは
ふべ　○宣長曰巻十四　安奈由牟古麻能と、よみたれ　○足を、あ
し　ば、沾は、騰の誤り、あなやみこしたならん　とよみて
あなやみ　○今按　沾は、活字、よく似たれ　○足活は、足をやし
來し也　○に　沾ば、誤しこと明らけし　○足活なふ意、足の
すゝみがたきを、養　○足活を、なづさひくるをとよむへし、眞淵
意もて、とくべし　○云なづさをのべて、なづさふといへる、
なづさ　○道を、なづみ行を、人　○巻十五　柔保等里能奈豆左比
ひ也　○の見とがむべしとなり　由氣婆此つゞきのごとく、に

ほどりのなづさふと、つゞく冠辭也

○問答　十八丁ウ

△玉垂之小簀之垂簾乎往褐簾者不眠友君者通速爲

すだれはよこにあむ也よこにねずしてかよひきませとよめりし也

○眞淵曰往褐は持褐の誤にて、門の戸口の、すだれを　○宣長云もとの持かゝげて待居勞はいとはじ、君が來まさばと也　○往は、經のまゝゆきかてとよま　○此歌は、むつかしくよみしひていはゞ○草字似たれむかといへりし也　○故解がたし、しひていはゞ○草字似たれば誤

すだれは、緯がちにあむを、　ぬきは、

しか○經褐借字也　我が中は經がちによめり　○よこにあむ、竹を、ぬ○ふたりの中は、たてがちにて、よこに、ふたりきといふ也　ぬる夜はなしとも、たえずかよひきませと、よめり○さて、緯たちたる物をもて、たて　○大田道灌の歌に武士し也○かちにに、よめりし故、解がたしの、やみやはるけむ、○はし鷹のこゝつちこ　こも槌越といふが　すだれをあむもえを、心ともせよ　○あむ緒をまく槌也○おなじこと也　○往經、似たれば、誤りしなるべし

○同　廿四丁

足日木能山櫻戸乎開置而吾待君乎誰留流

註云、檜、木の、そぎ板にて、せし戸也、　○此註は、木の用ざいにしへは、材そぎ板を用ひしとぞ　○まをもしらで字になづみし説、とるにたらず、又は、櫻をそぎ板に、いかでかせん、○木によりてしかする也、家作の材には、用ざる木也、

眞木の板戸、杉のと、などとよみて櫻戸とよみし　○此初二句は、例も見えず、檜榑杉の類はそぎたにする木なり　○戸を明置とい　はんと○櫻は、放といふ心に、さくらといひて、さくるは、戸て也　○〆する也、我がおもふ人ならでは、さけてあはじと、いふ○外人をばさけんと、おもふ戸　○此歌を山家めかしく、後意也○をあけおきて、まつとよめり○世は、とりなして、山櫻のもとに、家○是は、さくると、いはんとて足　○古今集に、花など縮がく也○引の、山櫻とはよめりし也、　○をし見れば、物おもひなしとよめるも、思ひた、さくるといふ意○酒も憂をに、櫻はこれの也、依て櫻は、さくるといふ名也○さけるといふ意、同じこと也

頭註　後世歌人此歌を解得ずして山櫻のことゝおもひてよめりし歌も見たり櫻戸とよみし例なしよく考へし

頭註　二十四丁前哥奥山之眞木之板戸乎とよめりて櫻戸といふ事はなし　此初二句さくるといふにもとめしを誤りて山櫻にまかひてあやまりし也　後世戀の歌を花見ることゝせしはいとつたなし

○同　二十五丁

△波禰蘰今爲妹之浦若見咲見慍見著四紐解

○今は、今の誤○今按に　はねかづらは、さ○はねかづらは、といへども　せしといふ意、なるべし　かざらめくやうにせしを、いふべし、童女の髪のか○今爲妹之べし　とよむ○慍ざりなれば、さ〔せ〕しといふべし

は、悒の、あやまりにて、うれしみとよむべ
し、いかりとよみては歌の意に、叶がたし　○著四を、つけしとよみ
しは、よろし、童女のほどは、衣に、紐をつけて、きするを、
付紐といふ、其つけし紐を、解といふは、もはや新枕を、かはす
べきよし○依て、つけしとよみ　○今するといひては
によめり○其紐を、とけと也　○下にかけ合がたし

○同　二十六丁
△晒鼻乎曾嚔鶴劍刀身副妹之思來下（ウチナゲキ、ハナヲゾヒツル、ツルギタチ、ミニソフイモガ、オモヒケラシモ）
○眞淵曰晒は、字彙補木由切平聲苔　晒は、漢賊名云々。とありて、かくよむべきより所なし、といへり○晒は、哂の誤、
哂は字書云微笑、一曰、笑とあ　れはうれしく、とよむべしとぞ○咽と同じく、むせぶとよむ○宜長云、嗢は、嚏の誤、嚏は
○巻五　△一之波夫可比鼻眦　云々とあれば、是も、じか　○門子在長
に
云晒は嗢の誤としてくさめして、　げに、妹が思ふ故にか、く
はなをぞひつるとよまんといへり○さめする、といふ意むべ也、
俗に人のかげごといふによて、くさ　○しはぶくと、くさめとは
めの、出るといふごとくなるべし　○おなじからず、くさめよ
から
ん

○同　同丁
△梓弓末之腹野爾鷹田爲君之弓食之將絕跡念甕屋（アヅサユミ、スヱノハラヌニ、トガリスル、キミガユヅルノ、タエムトオモヘヤ）
○宜長云弓食は弓葛の誤として、　○今按に　弓食の食は、くひ、行
○きみがゆづらのとよめり　くへ、ともいふを借て、行

方の意に用ひたり、鷹のそれて、行方のしれぬごとく、
君が心の外にふれて、行方のしれぬやうにはなかれと也
○絶んとおもへや、おもふなと、かへしたるや也、されば、○
ゆくへなくたえんと、おもふなといふ意、なるべし
食の字を改ずしてよ○行方ゆくへと
むにはかゝるべし　よめり

頭註　食をツルとよむよしなし

○同　二十七丁
○宮材引泉之追馬喚犬二立民乃息時無戀渡可聞（ミヤギヒク、イヅミノソマニ、タツタミノ、ヤムトキモナク、コヒワタルカモ）
○此歌の四字、古今よみとらず、わかぬ事
とすれば、げにしひごとなれどいふ也
○追馬は、馬追の蟲聲、シツソと鳴也、乘馬してシツソとい
ふにおなじ聲なれば、蟲の鳴聲たるシソを、上略し、い
ソといふ○喚犬を、マとよぶは、狗を、こまといふ、今も犬
なるべし　をよぶに、こまといふ也、此コマを上略して、
マとよます○犬馬をまそとよまするは、またゝゝ略して書し
るなるべし　と、しられたり、こは、故人のとかれざ
りし、雜句なるを、今さらいふ○信濃方言に、馬をおどろかす
は、考のひがこと、あなかしこ○に、そおまといへり、此歌は
とくべ
からど

頭註　蟲の聲など引出るよしなけれとときかたければ用なから
云也もし後按のはしにもやとてなん

○同　三十丁
△佐保乃内從下風之吹禮波還者胡粉歎夜衣大寸（サホノウチユ、アラシフケレバ、カヘリテハ、クダケテナゲク、ヨルゾオホキ）

○古本四句、僞使胡行、とあり（てせんすべしらに、とよめり）○宣長云、還者の二字、誤ならむと云り○今按に。胡は、相胡の胡にて、粉は、散亂に（アハスナナケリとよむ）て、雜胡といふ意に、書したるべし○胡粉歎べきか○夜衣（ヨゴロモ）と、よむべしとおもひ侍ぬ、佐保のあらしをつらき人め大寸（オホキ）に、たとへて、通ひ行てもあらし吹故に、あはでかへると也○還者（カヘリテヘ）はしかへると、いふ意也（あらしの吹故、あらはす）○さてかへりきて、あはぬよあまたなりとてひとりなげく、夜ごろもおほしと也○胡粉を、しらにとよめるは、おもしろけれども、かへりては、あはぬをなげくと、つゞく方よければ、まづいふ也、歌の意をよくあぢはひて、よきによるべし○下風は、さまたげありて、あひがたき意なるべし

○同　三十一丁ウ

櫻麻乃苧原之下草露有者令明而射去母者雖知（サクラアサノ、ヲフノシタクサ、ツユナラバ、アカシテイユケ、ハハシルトモ）

○註云、初句二字、か（はをとよまんと云々）○又佐倉と、いふ、地名あれば、（これも、櫻は、地名かと云り）○今按に櫻は、割（サク）の借字、麻さきて、うむ物故、を、曾とよむ、眞曾（マソ）さく麻をさくらそと、よみしあやなり○麻とよめる曾なり○又、をみの子のよめるは、麻をうむといふを、かよはして、をみといふ麻と、苧と、かよはしてよめる也○打麻（ウツソ）を、をみとよめるは、麻を打て、うむとつゞけし也、是は苧生と、いふを、苧原とかきし也、麻を作る畑に、生るをいふ、原は、野と同○苧原下草は、麻の生茂る時節は、下草も見えわきがたし、其下草に、おく露ならばとは、露もしけるゝよ故消ずて殘るを云り○意は、麻のしげれる、下草の露ならば、夜明ても、消殘るがごとく、明てかへりませ、母はしる、とも露ならばとがめじと露によせてよめり○冠辭に、さくらあさのとあるも、さくらそのと改べし○卷十二　二十二丁ウ

△櫻麻之麻原乃下草早生者妹之下紐不解有申尾（サクラアサノ、ヲフノシタクサ、ハヤオヒバ、イモガシタヒモ、トケズアラマシヲ）

麻のしけらぬまに、下草の、はやく生たらば、人にしられて、いもが下ひもを、ときてぬることはあらじとなり○此意も、麻のしげりては、下草、見わかぬよしを、もて、あやと、して情をのべたるなり○麻を、あさとも、をとも曾とも、よめる○あさをの、約曾也、御衣（ミソ）を、おんぞといふも麻なり

頭註　麻を作りし畑を見て下草とよみしをおもひしるべしさくらそのおふのとつゝけしは枕こゝとなから冠辭にあらさる也

頭註　此枕ことはゝむかしよりわかぬこと也麻はさきてうむ也

○同　三十四丁ウ

△朝東風爾井提越浪之世蝶似裳不相鬼故瀧毛響動二（アサコチニ、ヰデコスナミノ、セテフニモ、アハズモノユエ、タキモトヾロニ）

○眞淵曰、ゐでは、堰留也、行水を、ゐとめて、田にまかせん爲也、其堰留し、水增りて堰越る事あるを、ゐてこすといへり○世蝶の、てふを、トイフといふ、詞とおもふは、後世の意也、集中、トフ、チフなどはいへど、テフといふことなし、されば蝶は誤ならん、試にいはゞ、越の字にて、せこしなどにやあらん、されば、物ごしにだに、まだ逢ぬといはんとて、其堰越る波を、たとへしたるべし、又は、蝶は、堰を越て、行波を、よそめに、いひそへしならむ○宣長云世蝶似裳は、

目蛾津糞の誤りにて、か○又、鬼は兒の誤りにて○今按に世
つノ＼もならんと云々　○あはぬ子故かといへり○蝶の世に、
背をかねて、夫にあはぬ故、心瀧のごとくにとゞろに　蝶の名
おもひ。せかるゝと、井堰浪に、たとへてよめりけん○は、飛
といふにて、飛まふをもて、名付しなるべし、されど、鳥にお
なじ名あれば、かへて、テフといふなるべし、トヒの約チフ也、
依て、世蝶は、セトフといふに、はたらかせし、さて、蝶は、
書ざま也、眞淵は、是にかゝはらす、とかれし也○音訓おな
じ、むかしよりあるに背をいかて用ん、奥州南部方言蝶を、加
架部と云、かつかべといへる也、かしこにさへ名のあるに、唐
名とおもふは、い○されば、世蝶は、セトフにもとよむべき、
とあさましくこそ○借字也、テフといふは、今チフを、テフ
と、いふごとくチテの○加架部は、かゝぶりの
通ひにて、てふと云也○つゞまりしなるべし
眞淵の蝶は、越の誤、世越なれば、背越のかり字、背來る也、
浪は瀬をこせども、わが背はこぬ故に、瀧のごとく、心せかる
ると云たればさ、中々
おもしろく侍るべし
嬥は人妻也。南部方言に。嬥部といふも。蝶の名也。蝶は。女
にたとへたるにてかゝぶりといふを略してかゝべといふ。筑
波山の、嬥會といふカカも。むかしは。かの山の神事は。女男の
神。二柱を祭る故。祭の夜は。人妻にあふことを。習として。
とがめざりしと也。武藏府中六社の祭。五月五日の夜。嬥會な
りしを。近世は。其夜。女を門を出さずなりし。其例やみし也
依蝶を加可部といふ也○テフはトヒの約め千也チフと云り、
もとは飛とおなじこと也○蝶音訓同母を子供の加可といふ也

頭註 井堤は池也　書紀に造池と見え田に水を引爲に堤を築て水溜おく也井での堤ともいふ畢の用意也　井堤の玉水といふもたまり水也　今玉川といふ大川にはなし小水なるをためおく也

頭註 背云といふ意也

頭註 此蝶ヲチフノ借字トセシニテ音不有ト知ヘシ

頭註 嬥ハ女をいふかゝべは女めかしといふ事也べはぶり也

○同　三十五丁

△玉藻刈井堤乃四賀良美薄可毛戀乃余杼女留吾情可聞

○註に薄かもといひて、うちか○せきとめたる水の、よどみて、
へし厚きことに、なれりとぞ○もれゆくことたきを、戀の心、
深くして、思をやるべき、よしなきに、たとへし、ならむと
いへり、ことながゝ＼しければ、略したり、以上眞淵の說也○
宣長云三の句にて切、四五とつゞくべし、忍ぶ中の、名のもれ
しを、なげくと見ゆ、三の句、薄きかもとよみて、しがらみ
の、うすきにもれたるは、又わが忍ぶ思の、よどみちて、お
のづから、あふれたるか、といひし也、さてもわきがたし　○
今按に薄は、薭の字、似たし○薭ははなはだしと、よめ
れば、あやまりといふべし　ばしげしともよまん　○薭
可毛しがらみをしげくせし故、水○意は、水もらさじとは、人
もももらさじといふ意なるべし○にもらさじと、忍ぶ故に、
しげ／＼にあひ見ることも、せざるを、よどめると、水のよど
めるにいひて、さて、かく心づかひするも人やりならぬ、わが

心かもとよ○猶後案よき
めりけん によるべし

頭註 上の可毛は可計にや しからみしてかけとよむべきか 毛を計ともよむべし上毛のかみつけ也

頭註 濤可毛結句吾情可開かも耳立ぬれば上はしけくかけとよまんかし

○同 同丁

＼吾妹子之笠乃借手乃和射見野爾吾者入跡 妹爾告乞

捜沖云笠の内に、輪の如く紐してきる、其輪を 野に入とい○かりごといふ、さて、輪に野の名をかけしと云○ふは、旅立して、野に入など、いふ意かと、いへりしかど、此は今按につゞきは、無の意にて、旅立などは、いふべからず○借は、指の假たればも○笠は、指とつゞく、三笠山さしてなどのごとやすりしにやく、是も、指手の、わさみ野と、つゞきて、わさみのわには、つゞかじ、さし手と○さて、わさみ野の、わさいひ、又わとつゞけんは、よからじ○見は、わざ〳〵、見に入来りしといふを、みくあやに、わ○意は、いひし如く、わざとき見野と、ためりし故、分かたし○相見に入来りしと、妹につげよ○わざは、業より轉じて、もはらする事をいふ、集中に、と也○わざも子が、わざとつくれる、秋の田のと、よめりしは、業也、つと云○此歌、和射見といふなるをわざとも云○かの一首のかななめなり

頭註 輪をかけてといふことはいかゝよみかたしかをかけてといふこといまたきかす何によりてか

頭註 さしていといふ所のわさみ野といふなるべし所はさたかならす

○同 同丁

＼冷風之千江之浦回乃木積成心者依後者雖不知

○註 風の古語を、知といひ○東風をコチ、急風をハヤチ、とよへば枕辭とせしかと云り○みて連れたる詞をわかちて、チとつゞく枕辭とは、いはじ、千吹といひて風の○秋風は、金風と事とは、いふべからじ、されば此說は非也 ○書也、秋風の、チとつゞかざれば、此よみ、說とすべし、冷風は、すさまじ意なれば、北風にて、木枯の風也、されば、冷風を木がらしとよむべ○木枯の、千枝吹とつゞけした○一說に、和泉血沼の、沼しるべし、江枝おなじければ也○を、江に誤しか、北風吹ば、難波の方のあくたの、○千沼の浦とすれば、千枝の ○猶考なかれよる浦なりといへり○冠辭の、つゞきにあらす べし歌の意は明けし、千沼の浦の誤か、千江は、所不知也、こは、冠辭にはあらじ、猶考へし

頭註 江月冷ナト云モ冬月ヲ云也

○同 三十五丁のウ

＼白細砂三津之黄土色出而不云耳衣我戀樂者

○眞淵云 白まなごとては、ここの何の間に、辭なければ、古語ならず、砂は、紗の布の字の、誤りにて、白たへなるべし三津の三は、眞也、津は、土の略にて、白栲の、 ○さては、○眞土と、いひかけし枕辭と、せんと云し ○眞土の土と、また土にいひかけし意に○袴に白栲に、はほふ眞土の、山て、しからんとも中がたし にといへる、ここにいへども

下に、黄土とはつゞけどれば、ひとしからじかし○千蔭云、三津は、住吉の、三津といふも、同所にて、住吉の、きしのはにふと、いへるも是也、ともいへりしに、三津を、眞土とは、いかでいひけんと、ある人云り○今按に、名高浦之、愛子地、にとよめるごとく愛子といふは、よき子と、ほめしことば也、此またごも、愛子を、見つゝと三津に、いひかけしこと明らけし

○黄土は　黄土とよむを、はにふと、皆よみたり、土の一字を、はにとよむべきを、黄の字をそふ故、黄土を、マハニとこそ、よむべかりけれ○ハニフとは、太古は、民家造るに、柱を、土中に、掘埋めて、建し故、土より生しごとくなる故、ハニフの小屋などゝよめる也、今も、山家などは、しかしてたつる、おほし○されば、黄土を、ハニフとよみしは、これを考ずして、よみしもの也○黄土は、赤土にて、土朱のごとくに赤色をいふなり○愛子を、戀る思ひの、顔色に、あらはるゝをいふ、思ひうちにあれば、色外に、あらはるゝの意也○上は、顔色に、出るといふ序に、よめりしなり

頭註　愛子を見つるとはいはされと顔色にあらはるゝの意也

○同　三十九丁ウ

紅之　淺葉乃野良爾　苅草乃　束之間毛　吾忘渚菜（クレナヰノ、アサハノノラニ、カルカヤノ、ツカノアヒダモ、ワレワスラスナ）

○眞淵云、紅に、淺きがあるも、常なれば、つゞけしと云り○今按に紅と、朊の、よく似たるをもて、朊葉とかふらせしは、よくもとを、見わきてよめりし也、朊のしけりて、葉黄にならざるほどは、紅の葉にまがふ也○いにしへ人は、かゝることを、見出てよめりし故、みづからの歌也、後世は、人のよみしあとをたづねてよめる故、かり物にて、自分の歌にあらず、爲久卿は、今の歌は、ぬすみ歌、わろき所に、筆をくはへれば、古歌也とぞ○すべて、机の上にて、見ざることを、見しさまにすれば、わたくしごとにて、あたらじ○淺きは、何の色にもいへば、冠辭にあらず、紅の葉の、朊の葉のごとく、といふが趣意也

頭註　紅花の葉朊の葉のことしとはめつらしくもとめし也

頭註　薄紅とはいへども紅の淺きとは申さじかゝる事はしれたるをあやまりしもあやし

○同　同

爲妹　壽遺　在苅薦之　念亂　而應死物乎（イモガタメ、イノチノコセリ、カリコモノ、オモヒミダレテ、シヌヘキモノヲ）

○この句俗よみ也といふべし○いきながらへり　いのちのばへり○などゝよまんかし○命を、私に殘すと、いふことあらば、たれも死じかし

○同　四十丁

足引乃山　橘　之色出而吾戀南雄八目難爲名（アシビキノ、ヤマタチハナノ、イロニデテ、ワガコヒナムヲ、ヤメガタクスナ）（アヒカテニスナ）

○宣長曰、難爲名を、いますな、とよみて、人めいむは、はゞかる意なるをもて、難と、かけるかと、いへりしなり○千蔭云八は、人の誤り人めかたみすなとよめり○今按に　八目　は十目は、十分にて、滿れば、あふる八目は、八分にて相當なり○相當は合也、依て、八目は、相逢の借字に、意をめぐらして、おもしろく、書しもの也○十目に、對語せし八目なり○山橘は　日本紀の註に、山立花は虎杖の花也と見ゆ、虎杖は和名抄草の名也、これは虎杖　虎を

杖と、誤りしは、虎杖は、音 虎枝と。假名違なれど。
枝の字似たれば也〇古之にて 柑子を音のひゞきかよふをも
て。あやまり〇八目の考後按を待ため、
しなるべし〇しるてかい付るのみ

頭註 西山公曰 言塵抄に世俗に藪柑子といふ物也髮そきの時山
菅にそへたる草也今按に第七寄艸歌の中にも有六帖にもし
か也清少納言に木はといへる中に山橘と有は疊束なし

頭註 大嘗會神供云 弓弦葉 寄生日蔭 山絲組 山橘子 袁等
賣艸 眞煎葛

〇同 四十丁ウ

〈神南備能淺小竹原乃美妾思公之聲之知氣口
（カミナヒノ、アササヽハラノ、ヲミナヘシ、ヲモヘルキミカ、コエノシルケク）（美妾 シヌビツマ）

〇宣長云、美妾を、をみなへ〇美の上か下に、〇妾思公之か
しとよめる、よしなしとて〇脱字ありとて と、句を切て
わがおもふきみが、こゑのし〇さて、一句何と〇今按美は、羨
るけくと、よむべしといへり〇かよみくはへん〇に 美の誤り
か、したふ、又のぶるともよ シノビツマと、上のしぬ原のし〇忍ぶ
みて、したふは、忍ぶ意也〇羨姿のぶと、つゞくべし〇と、
いはんとて上は、〇下は、もとのまゝによむ〇小竹は しぬ
よみかけし也 べければ脱字にはあらじ と、
まへにもよめり、こゝ〇竹原を、しの原とよむべし、しの原
も、しぬ原とよむべし〇のしのぶとつゞけしなるべし、上は
忍ぶといはんとても也依〇のり長美の字を
て、しのぶわがとよまん〇いかゝ思ひけん

萬葉集殘考　下　従十二至廿終

萬葉集十二殘考

○正述心緒　二丁

△我背子之朝明形吉不見今日間戀暮鴨（ワガセコガ、アサゲノスガタ、ヨクミズテ、ケフノアヒダヲ、コヒクラスカモ）（間　サヘキリテ）

○意はあきらけし、けふのあひだとよみしは、俗めかしければ、今按に○間ハ開字似たれば、誤りしと、しられたり、開は、さへぎるとよめれば、しきりに戀しきといふ意にて、けふはしきりにこひくらすとよめりけん○もとの間にても、けふはすがらにとよまば、おなじかるべし○又さへきりてとも

○同　同

△我心等望使念新夜一夜不落夢見（ワガコヽロ、トヽノゾミオモヘバ、アタラヨノ、ヒトヨモオチズ、ユメニミエケリ）（トモシオモヘバカクテヨノ）

○眞淵云望使は、無使の誤にて、すべなしとよむべし、新夜は、新玉の、枕詞なるべしと云々○あら玉の、一夜とつゞくことも年の一夜などゝ、いふによりしか、甚しき說なりとある人のいへりし也○又說に、使の下に、美の字脱せしか、さらば等を、この句につけて、ともしみもへばかと云り○此說、よかるべし、ともしみは、めづらしき意、まへにも、いへりしごとく、めづらしく思へば、一夜もかれず、ゆめに見ゆるとよめり○新は今按に斯の字、似たれば誤りしこと、明らけし斯夜（カクテヨノ）とよめば、歌の意いとよくこそあれ○あたら夜は、あたらじ、よく味ふべし

頭註　等望使念（トモシオモヘバ）とよめば脱字にはあらじ

○同　同丁

△與愛我念妹人皆如去見耶手不纏爲（ウツクシト、ワガオモフイモヲ、ヒトシミナ、ユクゴトミメヤ、テニマカズシテ）

○說に、與愛とかきしは、いかゞなれど、彼と是となどいふ例にて、なるべし、書法に、泥事なかれと也○又初句うるはしとよめるも、よろしかるべし、如去とあるによりて、思ふ妹が、道行を見て、忍中故、おほよそ人の道行を、見るごとしとなげくなりといひしは、あたらじかし○今按に去は吾の草字玄とかく故あやまりしか○如吾見（ワガゴトミル）耶（ヤ）とよめは、うるはしと妹を、わがおもふごとく人みな、おなじ心に、めづらしと、見るらんと也、手にまかずしては、手枕してねもせずして、といふ心也

○同　同丁

△忘哉語意遣雖過不過猶戀（ワスレメヤ、モノガタリシテ、コヽロヤリ、スグレドスギズ、ナホゾコヒシキ）

○わするやと、ことかたらひに、こゝろやり、やれどもゆかず、なほぞこひしき

○かくよまば、いかゞ、わすれもするやと、心をやれども、えゆかされば、猶戀しさのまさると、よめりけん、過るを、や

るとは、よきされど、意をもて、よませしにや、行過るなど〻、○
つゞく時は、やる意にかよふべければ、心みによみしなり
伊物に、過行方の、戀しきにとあるは、過
こしかたの意の意也、是も先へすゝむ意也

○寄物陳思　二丁ウ

△眞珠眼遠兼念一重衣一人服寢

○宜長云　遠の下に、近の字、脱たる○をちこちかねて○又註に
り、卷四に眞玉付彼此兼とあれば○とよむべしとぞ○歌の意
はしひてことなきは、末あしかるべきによりて、遠をかね思ひ、一
獨寢するといふにて、其獨寢の、わびしさを、いはんとて、一
重衣とい○今按　眞珠は鮑珠にて、卷の四の、眞玉とか○眞珠
へるとぞ○に　きしとは、同じからず不レ可レ混○は眼
奇靡なるを以あはひ玉、　目眼、まともよめば、ま　さて縫事
眼と、いふらせし也　○どほくと、よめりし也　○み、まど
はき故、妹と衣を、重ねざれば、我衣、ひとへ○先達の考、よろ
いばかりきて、ぬるがわびしきと、よめりし也○しかるべけれど
字をくはへ、似よらぬ字などに、改しより○初句　あはび玉
もとのまゝに、よめらばよなこそよからめ○を
とよむべし

○同　三丁

新治今作路清聞鴨妹於事矣

○一說に、あたらしき路は、きよらかな○さやかといふ序に、
ればさやかにと、いはん序也と云り　○路を以、いふべくも
あら○又日、あらたに作る、路のごとくにおも○此註は、清聞
じ○人に、通ふ道をつくりたし、といへり○鴨といふ、要
の意にはかゝはらで、○今按に　新道は、古路の、まはり遠を
いひしなるべし　改て、直道にするをいふ、依て、清は直
の意にて、道の、行やす清聞鴨をすくよかにきゝてしもがも
からん意に、よめりし也　よむべし、新路の通やすき
ごとく、妹かたよりを、ゆくりな○大道如綫と、いへるがごと
くすくよかに、きかまほしの意也○し、綫は、たゞね結ても、
とけば、もとのごとく、すくなる物故に、しかいへりしな
らん、信じかたき說をも、かきそふは、よくわかたため也○此
もて、すくよかにとい道すくにとは　意
よまんか、猶考べし　つゞくべし

○同　三丁ウ

淺葉野立神古管根惻隱誰故吾不戀

○眞淵云　或本によるに、神古の字、必誤なるべし、神は紳の
誤り、古は有の誤、紳は帶にて、しなひ垂る物、いにしへに
有しを以、書るにて、則立紳有にて、立しなひたると訓べし、
古點、立みわこすげとよみたれど、さる名もなしと、いへりし
を、い○千蔭云紳を、しなひとよまんこと、
かゞと○いかゞといへりしはよろしからず　○今按　立ハ之の
誤淺葉野之とありし○神古を神さぶるとよむべし、神さび
なるべし　は久しく、年へしをいふ翁さび
といふがかみさびすがねしとよむべし、野におひしより生
ごとし　管の根とよめり、惻は、字註、

悲又痛と、見えたり、隠は、しのぶ意に、用たるべし依て惻隱をねもごろとよむべしや○さて、すがの根の、ねもごろと、つゞけし枕こと葉也、かくすれば、難なかるべし、惻隱を、カクレテとよみては惻の字あまりて、かひなかるべし

頭註 しなひたるゝ　いにしへに有て今はなしとや

頭註 腕と菅とをかけて神ぶりとあやによみし也

○同　四丁ウ

△天地爾小不至大夫跡思之吾耶雄心毛無寸（アメツチニ、スコシイタラヌ、マスラヲト、オモヒシワレヤ、ヲゴコロモナキ）（イタリイタレル）

○註に天地に、すこしにて、行足（クラ）ざるほどのますらをと、いふ意なりといへり○少しも、いたらぬと思ふ心あらば自（ミツカラ）ますらをと、いかでいはん○大は誤丈夫をますよらをと、めるなり○今按に小モ不レ至は、天地の道理に少しもいたらざる事はなしの意也○されば、いたりいたれる、ますらをと、おもひしわれなれど、戀のまよひには、男心も、うせしとよめり○少しいたらざる、としては歌の意に、叶がたし○うらの意は、いたり、いたれると、思ひしは、心のいたらざる故也と、恥たりしけしき也○自らほこりて、非をしらざるは、人の常也○大夫は丈夫の誤り也、されとあまたかく書し也、大夫をまうちきみとよめりし也

頭註 大夫をもしかよめるあれは難なかるべし

頭註 少しもいたらさることなしとなしはそふことば也

○同　七丁ウ

△五十殿寸太薄寸眉根乎徒令搔管不相人可母（イトノキテ、ウスキマユネヲ、イタヅラニ、カカシツツ、アハヌヒトカモ）（イデ　トキドキウスキ）

○初句は註、いとのきて也いとゝしくにふ、ことなり○と千蔭いへり○いとゝしくは、伊物、又源氏にも見えて、最疾の意、いとはやくにて、いとゝく也、さればこゝに叶がたし今按に寸太は時の片（ヘン）、蟲ばみしか、々をたと見て太と、あやまりしと見えたり○時（トキ）くにて、いでとき〳〵まゆをか々ゝせて、あはぬと恨みたり○又、寸太を、時々とよませしか、いかゞ○眉をかくは、あはんしるしの、意也○殿は傳と、同略して、かり用ひし也

頭註 初句いてとき〳〵とよむべし五十をイとよめる也　五十殿イデ也

頭註 考へれば寸太をとき〳〵とよまするなるべし意しかゝよへる也

頭註 時々の々を誤しにや

○同　九丁ウ

△終命此者不念唯毛妹爾不相言乎之嘗念（シナムイノチ、コヽハオモハズ、タヾニシモ、イモニアハザル、コトヲシゾオモフ）（コヲバ　ヒタスラモ）

○此歌の意、くだらざるを註のもれしは、あやし○今按に此は世の字似たればあやまりならん○いのちをへん世をば思（オモハ）ずひたすらもとよむべし、唯は一向の意なれば、ひたすら也○言は事也

○同　十丁

△各寺師人死爲良思妹爾戀日異羸沼人丹不所知（オノガジシ、ヒトシニスラシ、イモニコヒ、ヒニケニヤセヌ、ヒトニシラエズ）
○初句、略解に、おのがじゝ　○此詞、源氏にも見えて、おのが
いまだ、考得ざると見ゆ　ほしきまゝと、いふこゝろ也
○和語は、上を清なり、濁るは、漢音也、上下　○釋氏要覽入衆條
のわかちにて、寺師も上を濁る故、漢音也　下云、十誦曰、
好惡相教以三語自恣三語者見聞疑也　鈔曰　九句之内、多迷
己不自見過理宜仰憑清衆垂慈示誨縱宜己罪自恣僧擧
過内彰垂私陰外顯有瑕疵自口託他人故曰自恣と
云々かくあるをとりて、よめりしを、訓とあやまる人おほし○
結句良江の約め例也人　○巻五に和周良延爾
しれずといふこと也　家利とあるに同じ

○同　十丁ウ

△夕夕吾立待爾若雲君不來益者應辛苦（コヒ／＼ニ、ワガタチマツニ、ソコバクモ、キミキマサズハ、クルシカルベシ）
○初句ゆふべ／＼立　○一説に、若雲を、もしく　○今按　若は苦
待とつゞけし也　もとよまんかといへり　にの
字の誤り、くるし　○結句の、くるしかるべし、とよめりし　○
くもとよむべし　は、これをかへしたるにて、同事也
夕／＼、立まつがくるしきに、いよ／＼來まさ　○もとのよみも
ずは、いかばかり、くるしかるべしといふ意也　註のよみもよ
からず、くるしと上下によみ
し故、おもしろくこそあれ

○同　十六丁

△劔太刀名之惜毛吾者無比來之間戀之繁爾（ツルギタチ、ナノヲシケクモ、ワレハナシ、コノゴロノマノ、コヒノシゲキニ）

歌の意はあ　○之間の之は先の　○間にてこのごろまなく戀
きらけし　誤　のしげきにとよむ
べし、このごろのま
のとはとゝのはず

○同　同丁

△梓弓末中一伏三起不通有之君者會奴嘆羽將息（アヅサユミ、スヱナカタメテ、ユカザリシ、キミニハアヒヌ、ナゲキハヤメム）
○眞淵云　古への、弓射し事を、考るに、弓は引設て、後ねら
ひを、定る事なし、いま射んとする時、ためらひ定る也、故
に初のわざを愼しめり、其わざは、弓をとりて、一度起て、後
に伏て、的をよく見定て、又起て、矢をはげ、更に高く起し
て、引入る故に、一伏三起と、いふなるべ　○宣長云　末中、一
しといへども、それをかくはよまじかし　伏三起不通有之を
すゑの中ごろ、よど　○兩説、雲泥の　○また／＼よき
めりし、とよめり　たがひいかゞ　説をまつべし　不通之を
○よどめりしと　○しかいへども、川などよせては、よど　○今按
よめりしかど　めるともよむべし、弓には相當せずや　に
○末とは弓の兩はし也、もとすゑ　○中は弓の、眞中　○伏
といふも、上下のはし也　にぎる所也
は　弦を、はけぬほどは、　○弦をすげて、引時は、此三ツ起　○さ
伏たるごとく也　といふをもて、あやに書たりや　て
弦をすげて、引時は、此三　はりて引どもよらざりし○と
ながら、起るをとりもて　よ
まんか、不通有之を、よどめるとよ　○こはよき考を
むよりは、よらざりし、まさるべし　待べかりけり

頭註　次に不通年心とあるは河によめる故よし此歌はかきさまわ
きがたし後按を待べし

○同　十九丁ウ

△浣不取替河之河余杼能不通牟心思兼都母（アラヒキス、トリカヘガハノ、カハヨドノ、ヨドマシコ、ロ、オモヒカネツモ）
○註云今本、衣○一本浣を、○機たる衣を、洗てきる心に、上
を不に誤る　○洗に作る　○より取替と、いひかけしと、お
もひとりて川の名の、と○今按　浣は流は敢の誤り、○流（ヤキ）
りかひ川也といへりし也○に　の誤取各字にたり
不敢て（アエズ）としせきあえず、かはれる河の　とよむべし、せき
かたき早河は、淀
もさだまらず、瀬のかはれば、よどむまなき意也、心せか
れて、よどむまなしといはんため、上よりいひかけし也○
洗衣、とりかへとは、つゞきがたし、かゝる拙こと
を故人の、もらされしはいかゞ歌ことばにあらず

頭註　流不取にてもせきあへずとよむべし

頭註　衣はきかへるといふ外なきことば也とりかへるといふ事は
なし　取替河不知

○同　廿一丁ウ

△殺目山往反道之朝霞髣髴谷八妹爾不相牟（キリメヤマ、ユキカフミチノ、アサカスミ、ホノカニダニヤ、イモニアハザラム）
○註曰紀伊熊野に、きりめの王子○熊野山は、人跡まれなる、
といふ社有、依て、紀州と云り○山中に、いかなる美女のあ
りて、戀せしや、山神の化身なるべし、しかに○石など切出す
げなきことをあてゝ註せしは、人まどはしなり○所ならば也、
今按　殺目は目をころすと書、目の殺目山をくらぶ山と、よ
に　見えざるといふ意にて　ませし筆者の、
あやな○くらぶ山、をぐら山などの、くらしといひて、ほのか
らん　にだにとうけし也、目をころすは、くらますする意なれ

ば、しか○きりめ山、所定かならず、此誤
よません○りをもて、所をしらんとすべし

頭註　寄物とあれはかくよめりしなれどよせ物註の意にていかゝ
しからん

○同　廿五丁ウ

△木綿畳白月山之佐奈葛後毛必將相等曾念（ユフヅ、ミ、シラツキヤマノ、サナカヅラ、ノチモカナラズ、アハムトゾオモフ）
○眞淵云　ゆふだゝみ、田上とつゞきて、畳は疊の誤、上の草字、
乙（ツキ）をりの字に誤田上を、白月と誤りしと云り、田は白に、誤
るべし、乙（ツキ）は、月の草字、乙（ツキ）りとまがはじ、○今按に　白月
されども、此考おもしろく、よしとすべし　○は、曉月の、借字
にて、きぬゞゝの別をい○長庚をゆふづゝとよむ、此星、曉、
ふ故に、曉山とかけし也○東方にありてあかぼしともいふ、曉
の星○空しらむ時故に、白月とかき○ゆふづゝみ、あか月
也○て、あか月と、よませしか
山とよむべし、右にいふごとく、曉の別しに、のちもあ○みは、
ひみんと、いふ意なれば、田上山にては、叶がたし○ふり
に通ひて、長庚にふれし、あかどきといふにて、上
ふにて、ゆふづゝみとよめりしもの也○後もといふ○をうけし意、あきら
しけ

頭註　白は明白にて明月山とよめりしなるべし夕つゝの曉とつゝ
けし也白月といふことはきかさる也

○同　廿八丁ウ

△鴨尙毛己之妻共求食爲而所遺間爾戀云物乎（カモスラモ、オノガツマドチ、アサリシテ、オクル、ホドニ、コフトイフモノヲ）

○註云遺は後の（）此字を、考得ざりし也○遺は、双の借字にて、
借字と云々（）遺は、遺のあやまり也○鴫どち、なつましく、
つがひはなれぬごとくにわれも、戀○結句、こふとふものを
ふものをと、いさゝか、恨けしき也○と、よむべしと云り

○所遣間爾とよむべし

○同　同丁

白檀斐太乃細江之菅鳥乃妹爾戀哉寐宿金鶴

○斐太の江は、略解に、くはしくいひしも、しかとわかぬと見えたり、又すが鳥といふことは、しれざると也○眞淵云集中、つく鳥といふありと、猶考　和名抄云鵜鷉鳥漢語抄於須賣止里護田也
爾雅集註云　鳰音紡一名澤虞、常在ニ澤中ニ見レ人輙鳴、在レ似ニ主守レ官故以名レ之此宦を、守るとあるを以、宦鳥すめ鳥と書しを、菅鳥とあやまりしか○のすむ
といふにつゞくべしすなは、妹と○宦鳥乃と書しが誤りて菅と
ふたりすむをいふ也、猶考を待也○字字の似たれは書しなるべし

頭註 この句のつゞきかくはあらじとおもへど考得がたし
あつさ弓ひきとよ國とつゝけしごとくしらま弓引とかふらせし也ヒキのヒ也

○同　廿九丁

於能禮故所罵而居者驄馬之面高夫駄爾乘而應來哉

○眞淵云夫は、久の誤なるべし、父母にのゝしられて居る、男なれば、馬の顔も、わが顔も、高く擧て、乘くる事はせじ、うなだれて、通はめ、と女のなげくなりと○宣長云　左の註いへりしは、奧書を見すして、註せしにや○に、依て解は、此歌、紀皇女の、御作にて、高安の王、伊豫の○上二句は、吾國に居給ふもとに、よみて、遣はされし也○故、公の咎にあひて、伊豫の國へ、降居給ふなれば驛馬にのりて、面白く、ほこりかに御もとに、參るべき身にも、あらずと也○來へしやは、往べしやの意也行を、　○面高は、馬の顔を上て、行にもい來るといふ例おほし　ひかけて、自ら面白くほこりかにい行意○夫駄は、驛路の荷を、負する馬にて、　○此註甚なり○俗にいふ、小荷駄馬なりと云り　感心也○今按に、猶附言せば、高安王は、罪によりて、伊豫國へ、ながされ給ふに、われは殘りてのゝしられて、居るがくるしければ也、くるしきは、あしと、あとしげ馬に、いひかけ、かくして居るよりは、馬にのりて、君がもとに、行かまほしけれど、女なれば、まゝならぬとなげ○面高く、ほこりかにはあらず、おもて立く也　○てといふ儀也、札を、ふだとよめる也　○夫駄は役を、つとむる驛路の人馬也、夫は夫役○さて是を司どる、驛役つとむる、人也、駄は馬也、役人馬也　人を、を夫駄さしといふ○卷十六、三十一丁ウ、馬爾己曾布毛太志○札とよめるは、也○可久物とあるは荷府也、札の事なるべし○是よりいへりし訓なる　○おくがきを見べし　○てとくべし

頭註 於能禮故は皇女の白の上をさしての給ひし也

頭註 所罵はのゝしらるゝ也

頭註 みつからせし罪といふ意也

頭註 又のりて行へしといふ心にも聞えたり

頭註 又云高安王に馬にのりて來ませと云やうにも聞ゆれと勅勘なれはさは申かたし

頭註 表立て馬にのりて行へしや女の事なれば行こと叶はすとなけく也

○羈旅發思　三十三丁

△度會(ワタラヒノ)大河(オホカハノ)邊(ベノ)若歷木(ワカクヌギ)吾久在者(ワレヒサナラバ)妹戀鴨(イモコヒムカモ)

○略解云　若を、吾に、かさねたる序也、久木(ヒサキ)ともよまんか、○さらば、吾久といふを、かさねていへる也、と見えたり

吾久しく、旅にあれば妹が戀ふるか也　今按に　若歷は、吾來(ワカク)と、いふにかけて、よめりけん、旅に久しくあれば、さぞわがかへり來るかと、妹がまちこひぬらんと、思ひをのべしなるべし、わかくぬ木と、わかを、そへてよめりしに、心をつくべし

○みよし野の、大川のべのくぬ木原　○吾久在者(ワガヒサナレバ)也

とよめりしを、とりしなるべし

萬葉集十二殘考

○雜歌　四丁

△帛(ミユノクラヲ)　叫べからじとて、みてぐらとよむ、契沖云○諸社に、帛を奉る、勅使の、帛を、みてぐらとよめり歌、なるを、よめらんと云々○宜長云　帛を、みてぐらと、訓べからず、みてぐらをと、ばかりにては、いひたらず、故おもふに、帛は、內日なるを、上下に誤り、又叫は、刺の誤り、槨は都の誤にて、內日刺都ゆいでゝ、ならん、天皇ならより吉野に、幸時の歌也　○かく字を改ぬれば、よくきこゆ　○帛和名抄に波久と云々　○べし、猶字を替ずして今按に　乃佐奴薄繪也

○布　の註に、縑は、布○又織䌷及紵―爲ゝ○帛にて、幣を作

帛の惣名也とぞ　帛なりとも見ゆ　る故、幣帛と、

いふ也、よて、帛を、みて　夏引の、白糸なら

ぐらとよむ事、さらになし○催馬樂に　䌷衣織て、とよめり○なら

ばかりの、ならは、平をならと、よめるとおなしく、經緯に、よりをかけざる糸にて織を、ならばかりといひ、經に、よりかけし糸にて、織○略して縑(カトリ)と○依て、帛を、かとりとも、を、かたをりといふ○いへる是也○よめれば此初句も、かとりを、ならとつゞけしなるべし、又夏衣と○今俗、片平又かたびしてもならと、つゞくべし、猶考べし　○らとて、帷子とかけるにて○さて、平は、那良とよめるを以、か知るべし○とりを、奈良と冠らせしたるべし○鳥網張(トナミハル)、坂手(サカテノ)

鳥あみはる、坂とつゞけし、いひかけなり、鳥網張て、さ手過か手して、あみをうちかふらせて、鳥をとる也、此しわざは、見すしては、わきがたし、先媒鳥を芝原に置也、足に緒を付て、芝にゆひて、網を張て、伏置也、小鳥、媒鳥を見て、落きて、あさる所を、逆手してあみをうちかふせり、かくいひても、みずしてはわきがたかるべし、依さか手とつゞけし也○坂手の手は、行方の、方の意也、さかの方を、過て行ばなり　○石走　石走る、瀧、たるみなどつゞけよめり、かみなみと、かふらせしは、なしと云り○今按に古事記曰著ニ其御刀前ニ之血、走ニ就湯津石村ニ所成レ神　此石村に、走り付て、神となるを、つゞめていはじしか、神とつゞけしなるべし

頭註 和名抄註に絁は布帛の惣名也と云りさる故に帛をもかとりとよみしならん

頭註 今江州高宮平帷子也是は經緯ともに平糸也

頭註 石走甘南備山とつゞけしは見えず依て此を引なり

○同長歌　四丁ウ

斧取而丹生檜山　和名抄　檜は非也、と見えたり、まきさく、檜のつまでと、つゞくにて、眞木は檜也、まき柱といふも、檜き也、されば、此よみもにふの眞木山、とよめば、しらべもよろしくこそ○ひの木といふは、火の出る故の名なるべし、されば、家作には、いみ詞にて眞木とはいふ也　○礒榜同乍、同榜上下の、誤りしは、よみにてしるし、いそわこぎたみ、とよむべき也　○機爾作古木　機を、舟とよむよしなし、樣とせるも、舟よそひと、よめれば、しかとも、申がたし、機に書しも有、猶あらたむべし意は、檜を舟に作りて、島傳ひして、見るよりも吉野の瀧の、けしきはよしと、ほめしなるべし

○同長歌　七丁ウ

△百岐年三野之國　冠辭考云岐を、くきとよむよしなし、岐は、詩の誤百詩年と改、もゝしぬとよめり、次に百小竹とあるに、これもおなじく、三野を蓑とせり○しぬは、しなへたる草にて、其しなやかなる草をもて、蓑をつくる故に、三野に冠らせしといへり○ある人云、雨にきる蓑、又雨衣、又あまづゝみなどゝいはど、蓑とつゞくべしといへり○年は、稲といふにはあたらじと、いへども○祝詞に、奥津御年とあるを、おくつみしねとよめり、みとせとよみしも、としある秋など、稲のことによめる也○今按に岐は、岫の誤とし、岫は、莖の借字百莖稲ならん○苗を、二三本殖ぬれば、百莖にしける、三野尾張のならび國、上田也、しげる上に、實入よければ、みのりを三野と、國の名にいひかけたり○次に、百小竹のとあるとは、おなじからじ、次にいへはこゝにもらしつ○すべて、足もとにあるをしらずして、遠くたづぬるがごとし、わかぬことも、もとをよく、あきらかにして、數度考ればしるべし、其もとみだれては、わくよし、なからまし　日向爾を、西の方といふかといへり○三野は、都より、東にあたれば、日にむかひて行べし、是は、都よりの方角を、いひしならん　○奥十山　おく木曾山也、木曾三野、久くみ山し、山中なれば、かくいへりし也

○靡得(ナビケト)四言によめり○人雖語(ヒトハイヘド)跡を、蹈に改しは、わろし、語の誤とすべし○君になびけと、人はいへど、かくよれと人はつけどもと、女のなびかぬを、うしろよりつきよする意也○それを、なびけ此山といふ意に、よめりしなり○景行紀に天皇幸二美濃一左右奏言之茲有二佳人一曰二弟媛一容端正　此弟媛のために泳の宮に、おはし給ふて、通ひ給ひしに、姉八坂入姫に、ゆづりて、あひ奉らざるよしを、よませ給ふげりしにや○さてなびかぬ故、つきよせて、なびかせんとする、意おもしろし

頭註 もとみたれて末治らすといへるかことし

○同長歌　十四丁

〈刺将焼(サスタケル)○眞淵云　将は所の誤り○少屋之四忌屋爾(コヤノシキヤニ)忌は、豆の誤、さすたける小屋の、しづ屋とよみて、小竹を焼は、山邊の、しづ屋の、さまなりと、いへりしもとは○湘水没焚二楚竹一といふによりし、説なるべし、國風には、山邊は、柴焼(シハタク)と、中侍らん、竹を焼と、いふ事は、見わたらず○今按に刺は、榛刺とつゞきて、字書に、草木の、しげりしかたちと見えたり、榛はしもと原の、しげりしごとくなる、意なるべし、まへに云り○されは、刺将焼を、はりたかむ、又、しもとたかむなど、よむべしや、刺をも、はりとよめるは、榛刺とつゞく、よしにや○刺は、針也とも見ゆ○四忌屋の忌は、志の字、似たれば、誤りといふべし、四志屋は、猪鹿を、四志といふ、そのしゝをとらんと守屋也、よりてしゝやと、よめりし也○しもと焼て、しゝやにまもると、つゝけし也○破(ヤブレタル)一字を、かくよむべかりき　薦乎敷而所(コモヲシキテゾ)今まこもといふ、それをあみしなしろなり○掻将折也(カイヲラム)掻居

○鬼之四忌手乎(シコノシキテヲ)まへの四忌屋を、醜屋といひて、此鬼も、醜の誤として、醜のしきて也と、略解に云り○今按に鬼は、魂の字の誤しか、魂は玉の借字にて玉のしき手を、さしかへてにて、玉は、手玉の玉とも、ほめても、いふべし、しきでは、下手にて、手をかはして、枕とせし、下手は、いたき故、さしかへてぬるをいふなり○将宿(ネムキミ)君故(ユヱニ)とよむべし○比師跡鳴左右(ヒシトナルマデ)詞あるを引たり、源氏、夕顔總角の巻にも、此すべて、ひしノ\、しゝぐなどゝいふも、そのひゞきをいふ也、此床の、なげく故に、ひしノ\ひゞく意也云云○巻十四十八丁○花知良布己能年可都乎乃、乎那能乎○尾上の乎に、地につく能、比自爾布久麻提、伎美我與母賀母○迄と、祝したれど、地土也、比師、比自は、おなじからず、此比自同意とは、聞えがたし後按

頭註 今俗刺(シモト)をそだといふ也

頭註 眞淵云　此四忌も豆の誤賤手也と云り

頭註 醜といひし意わきかたし醜はしこりにてこりたるかたましきをいふ也

頭註 比師の約比也比布利敷ニ觸レヒビク也云々

○同長歌　十八丁

菅根之根毛一伏三向凝呂爾(スガノネノネモゴロゴロニ)○註に十訓抄に、一伏三仰不來待妻晴降雨戀筒寝とかゝせ給ふて、是ニよめとみことのり、ありければ○古今集つき夜には、こぬ人またるかきくらし、雨もふら

なんわびつ○とよみければ、みけしきよかりしとぞ、こは嵯峨
ゝもれん　帝の御時など、いへるも、しかとせざるといへり
し○後人の、作意○今按にまへの暮三伏、一向夜は、暮夜○此
也○にとや云り　の二字有、是と同じくいひしは、非也○も
とは、如是一唱三歎といふより、思ひて書しにや、依て、一たび
伏しては、三度、禮拜する意にて一心に、凝(コル)といふをとりて、
ころ〳〵と、○讃歌の、月とよめりしは、一度伏三度仰は、屬
よめりしか　○する意をもて屬を、つくとよめるをつきと、よ
めりし○諸說とは、甚たがふ故、くらべ
ならん○がたければ、人の說ははぶけり

○或本反歌曰　反の字ハ誤加タルカ　十九丁
大船之思憑而木始己(オホフネノ、オモヒタノミテ、コシオノレ)」○眞淵云　木始己の三字、延終石、な
どの誤、はふつたの、とよむべし
と云）ある說に、木始、儀訓にて、根也、己の上に、如の字を、
り）脱せし也、卷九、卷十四に如己を、もころと、よめりし
をも○根如己として、ねもごろと、○千蔭云　木は、本の誤り、
て　よまんといへり　始は、如の誤にて、本如
己とありしか、ねもごろと、○今按に　いや遠ながくとつゞけし
よむべしといへりし也　を、おもへばもとのまゝにて、よ
から○ねもごろに、いやとほながく　○君爾依而者(キミニヨリテハ)有を、者
ん　○とは、つゞきよろしからじ　に改しも
とけれど、已安の約、多也、依
て君によりたるともよむべし

○反歌　二十二丁
縱惠八師二二火四吾妹生友各鑿社吾戀度七日(ヨシヱヤシ、コヒハシヌトモ、イケリトモ、カクノミコソワガ、ヒワタリナメ)

○一說に、火は去の誤にて、去は、いなん○去は、いぬ、いな
とよめば、なんといふ、借に用たりとぞ　んといふ、なんは、
よみくせともいふべければ、な○惠岳曰、火の姓は、五大の時、
んとのみは、よみがたかるべし　堅濕煖動、無导之、火は、煖
なれば、奈牟とよめ○かゝる事を、思ひても、かゝざらん、火
り、是性五大云々　○は南方を、主どれるをもて、かきしなる
べ　此よみい○鑿は、佐久(サク)とよめば、離放(サクサク)などのよみ
し○各鑿社(カクノミコソ)とわろし○と、おなじければ遠ざけて、あいがた
き意な○依て　日は、
るべし○かく　あはでこそわが(よはおべし、われども)○七日の目の誤
りは、上にこそとあ　こひわたりなめ(べしとよむ)○不逢して、戀
る、かゝへなれば　わたらんより
は死なんやと、
いふかゝり也

○同長歌　二十丁ウ
打久津夜乃(ウツクノ)略解に、津は、須の誤か、卷十四に、宇知比佐都、美
とよめれば都と、須同韻なれば、かくもいふな
るべしと云々、此說よろしくこそ、依て、内○當土(ヒタツチニ)當は、常
田刺三宅とつゞく、冠辭也、とよみ誤しなり　の、誤り
かといへども、このまゝにて、比多美知にと、よ○蜷腸香黒(ミナノワタカグロ)
おべきか、字意をもて、しかよませしなるべし、
髪丹(キリミニ)竹取哥に、ゝ名之綿と、かきたり註に、蜷の腸○黑に、
の、黒きを、黒髪にたとへて、冠らせしと云々○冠らせ
んに、腸をもて、いはんよりも、○さて、黒きとつゞけては、
いかほども、あるべかりけり　香の字、無用也此香の字そ
へ、いふ、こと○是は、女の綿といふを、をは○わたはふりしと
ばにあらず　略して、みなのわたといへり　て、女のかふる

ことは、今も同じく、いにしへの、女禮と見えたり、〇その、
さて、綿をかぶれば、髮のみだれしも、かくるゝ也　かくる
を、かぐろと、黑髮に、かふせしはいと妙也、依〇委は、後違
て、香の字を、はぶきてときし、は、あやまり也〇考、冠辭殘
考にいへば、　〇阿邪左結垂眞淵云、何都良か結垂　〇宣長云
こゝに略　かのあやまりと云々　或人云
阿邪左の左は、尼の誤にて、交の意なるべし、髮に、木綿をま
じへ、ゆひたる也、是、白髮付木綿とつゞくと、おなじことゝ
いへり　〇天子、御冠の巾子、木綿を、まか〇今按にあさゝは、
し也　廿給ふこと、神事御圖に見えたり〇朝な〳〵の、略に
や、あさな〳〵ゆひたれ、なるべし、た〇髮は、朝ごとにゆふ
れはかみを結、たれしむるを、いふ也　故、あさといふなり
〇日本之黃楊之日のもとよ、よみしは、字訓也〇こは、唐の黃楊よりもまされるといふ意也　〇
刺細子　刺は、數の誤、しきたへの子とせり、誤るべき字な
らねば、おさへ、さし、さすと、つゞけしにや、あら
んか〇わが心ざす、たへの子は、それぞ
し　わがつまといふ、さすならしか

頭註 十四卷廿六丁上野哥　宇知比佐都美夜能瀨河とよめるに同じ

〇同長歌　廿二丁

頭註 古代は男もたさるほとはかみをたれて結はさる也

△忍照難波乃埼爾〇赤曾明舟　あけのそほ舟は
註に、委く見ゆ〇引豆良
比　ひく、ひこ、おなじ、引よするに
て、俗、ひこづるともいふに同じ〇有雙雖爲　眞淵云
ありなみ

すれどは、夫婦常に在ならびな〇宣長云ありなみは、ありいな
んとすれどゝ、いふことゝ云々　みにて、人のいひふらすを、
否とあらそ〇いなといひて、爭ひつれど、いな〇かく見ざれば
ふ也とぞ　み得ずしていひたてられしとなり　いはれにしと
いふ詞又上の序も、か〇此歌、かくても、しか〇雙ソウ呉音也、
なはずといへりし也　とわきがたし今按に　ソウを略、
有雙を、ありそとよむべし、〇有雙雖爲荒磯にひこづりよす
音訓ませしも、あれば也　れどよらざる也
〇曰豆良賓　引よすれど、いなと、いひづらひに〇又かへし
て、否といふを、くはへて見るべし　て、引よ
すれ　有雙不得叙ありそに、引よすることを〇西は四の誤
ども　得ぬぞと、いはれしと也　いはれ
にしわが身よ〇意はそほ舟を、美女にたとへて、わが方に引よ
とよむべし　すれどいなみて、引よすることを得ざると、人
にいはに〇人に、はづかしめられし、く
しと也　ひごとをよめりし、なるべし

〇反歌　廿四丁　此反歌と書しは傳寫の誤りなるべし長哥也

△何爲而此歌、諸說、とけがたくいひ〇鑽髮乃次の歌に、斬
しを、しひていふもいかゞし　髮とある故に
是もきるとよみけん、鑽は、須久と、よむこ〇眞淵云　年の八
そよからめ、年の八とせを、過とつゞくべし〇とせを、きる髮
の、かたを、過とあらためし
を、難じたるも見えたり　〇吾同子叫過　此句、難儀にて、
何多の誤りなどゝ
いへり〇今按に　吾子に、同じと書しは鷺の巢に、子規の、〇
し也　子を生をいふ、故に、吾子に、同じと、書しなり

次の歌に與和子乎過此よみあたらず、和は我の字似たれば、誤りしなるべし、是は、我に與ふ子と、かきし也、是も同意なれば也○依て吾同子叫過を ほどゝき過てとよむべしや、橘のほすゑを過てといふも、子規の、かけ合なり○程時過てといふに借て、かきしといふべし 下文長汝情待能河

下とはつゞきがたし○すゑも、とこしくと、よむべし○河のながれ、絶せず、すゑながく、までとよめり

頭註 吾同子叫 わかみとはよめかたし

頭註 吾同子といふことは子規にかきりしことなるべし

○挽歌　二十九丁ウ

百小竹之三野王○眞淵云まへの百岐年は、百詩年にて、此百小竹と、おなじく、百しぬとは百草の、やはしき蓑と、つゞくとゝけりしかど、此百小竹を、草の事とは、いかゞ○ある人さらば、百草のと、いふべき、もとめて、しぬとはいふべからじと、いへり、是は、百繁也、しげきを、しぬとよみて、蓑をあおは、百たびしげく、あみかさぬる故に、百繁の、蓑と、つゞけしなるべし 角厩立而説に左傳詩青聲角也、とあるを以、青は東にあたる故しかよみしにや○取而飼旱 宣長云、旱は、常の誤、がひなへと、よむべしとぞ、字も誤るべき、字ならず、前後考合すれば、もとのまゝなるべし ○大分青馬之 眞淵云ましろのこま 千蔭云ひたをのこま とよめり、今按に、大は、眞と同じく、ほ、おなに、おふらする、字なり○依て、大分を、まわけとよむべし ○まわけあをまのとよむべかりき、青馬をつゞめて、まとよめり○此證は反哥 衣袖大分青馬とある、衣手は、左右わかつ故、まわけと、つゞけし也依て、まわけと、よむべき也 ○千蔭云衣袖大分を、ひたをといふは、衣手の、常陸と、つゞくに、同じかるべし、又神代卷に、純男を、ひたをとよめる意にて、大分を、ひたをともよむべしとぞ ○鳴立鶴駒のいばふは、祝といふを濁りていばふといへど、こゝには、あたらぬ詞也、こゝは愁て、なくべくこそ侍らめ○今按に、いなゝきたつる、とよむべし、いなゝくは、いなぶり鳴にて、よろこばずしてなくなり○三野王の、薨し給ふを、駒もかなしみ、いなゝくとよめり○班駒俗ぶち駒といふにおなじ○鳴をイバへとよみしことは見えず、いなゝくのイは、そへことにて、なく也○かなしみなくをいなゝくといふ也

頭註 大般若經をまかはんにやといふまかの約ま也梵語なれと木をまといふ意同じ

頭註 衣手のまわけとつく冠辭也

萬葉集十四殘考

○相聞　遠江國歌　四丁

△阿良多麻能伎倍乃波也之爾奈乎多氐天由吉可都麻思自移乎佐伎太多尼

○眞淵云、奈乎多氐天は、汝を立てゝ也、由吉可都麻思自、自八目ノ誤ゆきかつましもとよみ、雪のつもりし也○自を、清音に用ひたる事、なしと云ど、集中まゝ見えたり　○移乎佐伎太多尼は、寢を先立ね也、○尼は、祢に通はしいふ、東言也　○卷廿東歌に、つくばねを、都久波尼と、かきしかば、尼も、禰のかなとせしなるべし、歌の意は、男の來て、伎倍の林に、立待ときゝしに、女は、いまだ、母のゆるさねば、閨に入がたきまに、雪のふれば、其林に、つもらむには、堪じ、吾よりも先だてゝ閨に入ふして待たまへといひやれると、いへりしなり○千蔭云されどすべて、いといふは、眠るかたにいひて、臥事を、いはざれば、此說いかゞにやと云々いやすき、いだにねられず、いごき、いめなどゝいふにて、ねることゝしても、難には、あらじ○いめは、寢目也、いやすきも、寢やすきにて、いは、ぬかし○ぬ事なれば、眠ることゝのみおもふべからじ、いといふが、ぬる○此題は、相聞とある故、さる意に、とくべし、しかこと也　○ぬに宜長は、旅立の、離別にとかれしは、いかゞと、ある人のいへりしは、理ながら、解がたければ、あたらぬ考○もする也、わがいふことも、しかならんと、かしこみ〳〵宜長云　是は、男の旅行時に妻の、伎倍の○汝を、林に立とま林まで送り來ぬるを、別るときの、歌なり○らせおきて、別行我は、ゆ行やらじ、汝も行か○此說は都麻思自の意、解○今按し、我と共に、ゆかむ也とぞ○のこせしといふべしや　遠州麁玉郡、寸戸といふ、地名也○由は、宙の上、消て宙吉可都あらたまの、冠辭にはあらず　誤しならん麻思自、憂且增にて、うき事のか○自は、濁音なれど、右いひつ〳〵、ましゝとなり○し如く、集中、清てよめりしもあ○さて、林は、早疾の意をあ○はやく、うき名をあらる也　○ぐらし、はやしとよめり○たてゝ、といふ也○玉の、木べのはやしに、名を立事うき○うきことの、かつ〳〵ましかつましし、といをさきだゝで、寢る事はさきだゝずして、となく○尼は、泥の誤りあはぬまに、名のさき立げく也○て、うきことのかつ〳〵、まされりとなり○大平云移乎は移毛の、誤りなるべしといへり、妹さきだゝにとせり

頭註　あら玉のきへのはやしといはんとてよめりし初句也

○相模國　七丁

△阿之我利能刀比能可布知爾伊豆流湯能余爾母多欲良爾故呂何伊波奈久爾

○湯を、ヨとよむか、方言にて出るよの、夜と、かけし序也　○多欲良は絕るの方言、逢見し夜にも、た

ゆべくは、子らがいはざりしと也、故呂は子等○宜長云　たよ
也、上は序にて、夜と、いはんとてかふらせし也○らは、絶る
意にあらず、俗に、丈夫にといふ意なり、上よりのつゞきは、
湯の丈夫に多き意也、歌の意は、あやうからず、丈夫に、たし
かなる意也、妹が丈夫に、いはぬ○千蔭云　此註、落居せざ
を、あやふめるなりといへりしを○るよし略解に見えたり　○
ある人云、湯の丈夫といふ事い
まだ、きかざる詞也、と云々

十四巻東歌

△等夜乃野爾乎佐藝禰良波里乎佐乎佐毛禰奈敝古由
恵爾波伴爾許呂波要

兎をとらむと、ねらふごとく、おもふ子と寝んと、ねらへども、
手にとりかねて、ひとりぬる床の、はゞひろき心ばえするとよ
めり、波伴は、巾ひろき也、許呂は、心の略也、波要は、フリ
の詞、心めく、心もちすると、いふ意也、心めくと心うべし、波
伴は、仁徳紀にトナドモ、ハマ爾とある、はまも、磨を、バ
によみて、はゞにとよめり、皇女、ありき給ふが、残らずはゞ
に、見え給ふとほめしことばとおなじ、乎左は、長
をよめり、専の意にとりて、専らねずおもこと也
○波伴は床に、獨寐すれば、床の巾廣き心して、コロバリぬる
と、よめりしか、子供らがころばりぬるなど、いふにおなじ
かる○婆要の約べ也、こ
べし○ろべ、ころぶ也

頭註 註云　女とねたるに女夜すかゝ男とねものかたりする故母
きゝとかめしと云々

頭註 母のことは歌の意にもなしいかにおもひし註にや
波は婆の誤

○下總國歌　九丁ウ

△可豆思賀能麻萬能手兒奈家安里之可婆　麻末乃於須
比爾奈美毛登杼呂爾

五丁駿河國　○駿河能宇美於思敝爾於布流とあるも、磯邊
のうたに　にて、方言に磯
邊をおしべと　○下總に、於須比とい○依て、於思、於須、方言の
いふと云り　○ふも磯邊のこと也　○違なれど、磯の意は、おな
じ、依　おしてる、難波とつゞくも、此於思と同じく　磯立波
て按に　○　磯たてる、難波とつゞくなるべしや、いかゞ　○早の意
にかふらせしなるべし、波速押照るなどゝいふ説、信じ　○手兒奈は
がたかりしを、かゝるよしありともしらざりし也　○巻三に委
しくいへば、　○眞淵云てこながうるはしさに、いひさわぎし事
こゝに略　を、所につけて、浪もてたとふ、是は、すで
に、身まかり　○宣長云手兒なが、磯べにありしかば、浪さ　○按
しのちの歌也　へめでゝさわきしと、いふ意ならんと云り　○ず
るに　眞淵の、説のごとく死後　○安里之可婆は、在世に
に、よみしなるべしといふは　あらば也、
今もあらば、波もとゝろに、懸相人の立
さわがむと、あやに、よめりしならん

頭註 襲立るなと字をもとめしも此意わかずしてなるべし

○信濃國歌　十一丁ウ

△中麻奈爾宇伎乎流布禰能許藝氐奈波　安布許等可多

思家布爾思安良受波
○契沖云、中麻、地名なるべし、さら　○略解云　推はかりの説
ずは信濃と、定むべからじと云々　也、と云り、げに机の
上の考は、あたれるやいなや、いと○筑摩郡、碓氷などの山水、
覺束なし、よく〳〵きゝて註すべき也　落合、大川となれり、犀
川と流合は、水内郡、川中島、今丹波島、といふあたりにて一
河となりいよ〳〵大河となれり、是より、河の名かはりて千曲
川と書、ちうま川といふ　○奈は名也、千曲といふ○大河にて、
、此中麻といふ、是也　名のごとくといふ名也○水勢ひつよ
く、川瀬定まらず千まがりに○さて、けふわたらずして、舟の
、くまなす故、名となれりし也○こぎ出なば、あふことのかたか
らむと也、千まがりの、くま〳〵に○こは、わが國のことなる
かくれて、もとむる事、あらじと也○故、くはしくしれり、お
ほよその、考などにて、わく事にあらず、此外も椎ご○千曲の、
と〻、いふべし其國人にとひて、明らかにすべし　名のごと
く、舟くま〳〵にかくれて、あふことかたしと、
よめり、中麻名の、名の如と、いふにてしるべし

頭註 筑摩川丹波島より千曲河と云舟はわたし舟にて通舟はなし
こはありけによめりし也

○上野國歌　十二丁
△可美都氣努安蘇能麻素武良可伎武太伎 奴禮杼安加
奴乎安杼加安我世牟
○奴は、之の詞にあらず、安蘇は、下にも、安蘇にと　○努は、
よめり、其あそといふ里に、作れるをいへりし也　野也、

次にも可美都氣野とあるとおなじ、○今按に、下野國、安蘇郡、
野は、努とよめれば也と註せり　あそ山、あその川原、あ
そ村などよめり、上野國に　○十四丁ウ志母都氣努、安素乃河
は、きこえず、誤しもの也　泊良欲とあれば、下野にたがひ
な○十六丁可美都家野安蘇山とあり上野○今世、鹿沼といふ所
し○に、あそ山なければ、下野の誤也　にて、鹿をうりかひ
する、○麻を畑より引て、ほしたり、むし○其むすを、かきむ
市町也○たりして、皮をむき、苧とする也○だきといふ、方言
にて、かきいだき、ぬ○あとかあかせんは、何とかわ○素麻
れどもあかぬとよめり　がせむなり
武良は、麻屯にて、苅つか禰て、
むす也、むして皮をむく也

頭註 上毛下毛元來一國なれば混してよみしなるべし

頭註 畑より引て苧にする迄のしわざをもてよめりし也

○同　同丁
△可美都氣乃乎度能多杼里我可波治爾毛兒良波安波
奈毛比等理能未思氐
○註云小野之田野等之川道にも○千蔭云　和名抄、甘樂郡、緑野
と、改しかど、かくも誤らじ　郡、群馬郡、三郡に、各小野
鄕有、此中なるべし、○此說も、乎度を小○今按に、乎度は、
野と、杼とは通ふ例也　野と、思へりし也　小田の借字、方言
故、かなに、をどゝいふべし、上○多杼里和名抄鶏鳥和名田
毛の、小田と、つゞけし冠り也　鳥似ﾚ雀小鳥也と

云々○鷲をも、田鳥と見えたり　○可波治は河内也、あしがらの、とひのかふち、みよしの丶、瀧つ河内など丶おなじく、波布のかよふ故、かはおともいふ也　○是も方言にしかいふならむ　○小田を、たとり行ども、おもふ子らにはあはで、ひとりのみして、たど／＼しとよめり　○田鳥を、たどるといふによみしあやなるべし

○同　同丁ウ

伊香保呂爾安麻久母伊都藝可奴麻豆久比等登於多
波布伊射爾志米刀羅

此下二十八丁相聞いはのへに、いか丶るくもの、かぬまづくひとぞおたばふ、いざねしめとら　○此歌は、いさ丶か、といなへかへてよめりしと、きこえたり　○契沖云、登は、曾の誤り、といひしは、哥の心をとかすして中／＼誤しなり　○眞註淵云伊香保の山の雨雲、はびこりて、鹿沼といふ所まで、ひとつにつゞけるを、妹と心ひとつぞと人に、いはる丶にたとふ　○於多波布は、おらばふと、いふに同じく、音高く、いひさはぐなり　○末の句は、かくいはる丶からは、いざ相ねしめたらんといふ也、ねしめてあらんの、テアのつゞめ、夕にて常人は、ねしめたらんといふを、とらといへり（らとのみいふが平言おほし）　○千蔭云されど、おたばふのことはたしかならず、按に、刀は己の誤りにて、子らとありしならんといへり　○今按、上野、伊香保、下野、鹿沼と、みけ合たり　○いかほのあま雲、か丶るとみれば、かぬまの方にか丶るを、つくとよめり、男の心、伊香保の方、にあるかとおもへば、かぬまのかたへ、かよふ故、心定まらぬに、たとふ　○雲のごとく、心さだまらず、よそにふれゆく、あだ人を、頼まんよりは、われと寝そめてあれと、こと男の主ある女を、そゝのかしたる也　○於多波布は、本語、たはぶれといふ詞を、轉じたる、上野より、信濃邊の、方言にて、タラベといふを又轉ぜり、今太郎兵衛とも太郎作など、變ず、其もとつ、方言なれば、知がたし　○その、たはふれ男と、ねんよりは、われをたのめと、よめりし也、伊香保呂は、根呂とよめりし、呂にて、等を同じく、そふことば也　○爾志米は寝そめてあれと也　○此方言などは、机の上にて、しることにあらず、歌の意を、考たがふことおほかるべし、よく改べくこそ　○刀羅トラの約夕也、ねそめたらずねそめて、あれかしの意也

頭註　刀と己誤る字にあらず

○同　十四丁

△伊加保世欲奈可中次下於毛比度路久麻許曾之都等
和須禮西奈布母

○千蔭云、伊加保世は、伊香保に住る、我せ子といふ也　○和須禮西奈布母は、わすれはせぬ也、二の句、中次下の三字、此卷の、書體にあらず、しかれば、假とせんも、他の借字の、體にあらず、字の誤か、落たるべし、元暦本に中次下の次を、吹に作る、四の句も、言をなさず、或説にも、とりがたし、正しき本を、待つと云り　○今按、伊香保といふ所に、住る男を、契約せし、女の歌也、在所を隔て、あふ事がたきを、恨てよめりけん　○伊香保世の、世は夫也、男をせと、いへる也

〇奈可は汝にて、男をさしこいへる也　〇中次下歎かせしを、たかしゝもと、よめり　〇於毛比度路方言に、おもひとればといふを、とろといへり〇久麻許曾之都等月をかくすをも、くまといふにおなしく、かげごとするを、くまとよめりし也〇意は、男をさして、なんめ、かげごとしけんと、おもひとれば、外に女をもとめ、かげごとしけんと、恨みてよめりけん　〇和須禮西奈布母ぬものを也〇奈布反奴なり〇れは、男は、くまごとしてつれなけれど、わすれはせぬと、女の深情をこめたるは、い　〇おもひとろもせなとあはれ也　〇ふもこれら方言也

頭註 次一本吹とあるを可是中吹下なかすしもとよむへしさては方言なるべし

〇下野國歌　十四丁ウ

＼之母都氣野美可母乃夜麻能許奈良能須　麻具波思兒呂婆多賀家可母多牟

〇宣長云　許奈良能須は、高〳〵の、序也多賀家可を、高〳〵とよめり〇まくはし子らは、たか〳〵またんと、よめり〇今按　山の椈とつゞけり、許は、木のしかど、猶わきがたし〇字にも、又そへごとにもすべし、木椈に、兒並をかねて、子ならび、〇椈の、山あまたもてるを、こならと云り〇すにて、如の意也〇に茂れる如くよき女子を、あまた、もてりといふこと也、さて、其ならの、しげるが中に、まぐはしき子のあるを、たがかゝにもたんと、よ

めり　〇妻を、かゝといふは、下賤通語也、筑波山の、嬥會の

嬥也、是は、俗語のやうなれど、むかしよりいひなれ

しな　〇まくはしは、ほめい　〇奥南部方言蝶をかゝべ

り　ふことばに、なれり　といふ嬥ぶりの略也

頭註 能須ト云が方言也如也

頭註 麻具波思はよき子をほめしことは也、其よき子を、たれがかゝにもたんと也

頭註 父をとゝといひ、母をかゝといふかゝ也

〇上野國歌　十六丁ウ

＼志良登保布乎爾比多夜麻乃毛流夜麻能宇良賀禮勢那奈登許波爾毛我母

〇此初句、古今註なかりしを惠岳、發明して、あざやか也　〇白砥生田山より出る故に、上毛砥は、新つゞけり〇に、あらざるを、解ざりし故にしかせしは誤り也　〇保布の保は、波の誤りなるべしかくては、冠辭〇宇良賀禮は〳〵にならず、あれかしと也　登許波は　とことは心を、うらといふ也、心かれはとも、いひて常住の　〇さて、新田山は、砥の出る故守人を居意に、いふことば也　て、まもらするごとく、母などまもる故、逢がたけれど、心かれずしてとこ　〇あひがたけれど、心かとはに、あれかしと、こひねがふ也　はらずは、逢ことの、あらんといふ意也

頭註 是は砥の出る山といふのみにて冠辭にあらず

頭註 もる山の、うらがれとはつゞかさるべし、後人考玉ふべし

○相聞 卅一丁

夜麻杼里乃乎呂能波都乎爾可賀美可家刀奈布倍美許曾奈爾與曾利雞米

○註云魏といふ世に、山鳥を飼しに、鳴ざれば、尾の方に、かゞみを置たれば、よく鳴しと也○昔罽賓王結罝峻外之山獲一鸞鳥王甚愛之欲其鳴而不能致乃飾以金樊饗以珍羞對之逾戚三年不鳴其夫人曰嘗聞鳥見其類而後鳴何不懸鏡映之王從其意鸞覩形悲鳴哀下畧是を山鳥也と、誤るべくもあらじをいかに見て、しかいへりしか○宣長も、から國の故事は此歌に、かなはすといへり○亦説に、山鳥の、尾は、夜る光る故、かゝみのごとしなど不快のことを、いへりしは解得ざる故也○今按乎呂は尾を延し詞也、乎呂の約、尾にて、蛇も、尾にて、をろと延たる、名のごとし、知はそへていふ也○波都乎は端尾にて、長きはてと、いふ義にてそれをかされて、をろのはつをと云り○可賀美可家は屈影にて、山鳥、屈て、あさりすれば長き尾の方、立のぼるをいへる也○其尾の立を、雌の見て聲をかはすなり○刀奈布倍美は鳴をいへり、へみは可也 奈爾は汝也 與曾利雞米はよそりはよする也、さて、意は山鳥の、かゞみしを尾ゝみて、鳴かはしぬるごとく、なげくばかりは汝によれども、われはあふことがたしとなげく也○をろのはつをにかゝみかけといふは、尾に、鏡の如く、光ありげに、思ふはいとあさまし、山鳥の尾は、さるものにあらず、見ずして推量にいへるは、孔雀の尾に、玉の如くなるあるによりて、しかあやまれる、なるべし○此歌によりて、よみ誤し歌も見えたり、よく考べし○波都乎爾の、爾字故に、きゝたがふべし、はつをにさゝ、しるきに、屈たれば、いよ／＼しるしの意也○家は清べきを、傳寫もわかずしてか、此字をかきしにや、かくてもよしや

○相聞 二十丁

安是登伊敝可佐宿爾安波奈久爾眞日久禮氐與比奈波許奈爾安家奴思太久流

○眞淵云 されあはなくは、實にあふ事の、なきと也○夜るはこずして、明るあしたに來るは、じちに、あはじとするかと女のうたがふ也とぞ此註は、よろしけれど皆解ざりし也○太平云 思太は、時といふこと也、集中、わすれんしたかなしげした、などありて明る時來る也と云り○今按 初句は、何とした るゆゑか、あはざるといふを方言に、あぜといへると云り○眞日は農業を休てあそぶ日をま日といふ、又眞は發語としてもよかるべし○與比奈波汝寄にて、よひのほどに汝はこぬといふなり○許奈爾は來らぬ也こぬに也○意は、何故にか、あはぬによて、ためし見れば、あそびくらしながら寄より來らずして、夜のあけおときに、來るよ恨て女のよめりしなるべし 安家奴

思太久流は、あけぬるあした
くる、といふこと也
頭註 眞日の眞發字にて日の暮てと云にてもよろしからんといへ
ども田舍にてあそふ日を眞日といふ也
○同　二十一丁ウ
△左努夜麻爾宇都也乎能登乃等抱可騰母爾毛等可兒
呂賀於由爾美要都留
○註云　努夜麻は、左野山に○宇都也乎能登は、斧にて○今按
て木をきるなりといへり○木をきる、音なりと云々○に木
をきるを、うつといふことゝなし、は苧打音也、麻を
斧は、木をけづるといふなり　○乎能登しめして板など
に、うちつけて、ちゞむほど、打○しかして、うむ也うちそ、
付る、其音を、乎能登とゝよめり　○ともいふ○初句のよみあや
まれとよむべし、さぬる夜のまにて、○夜るの、女
り左努夜麻寢ぬまに、夜なべするを云り　のわざに麻
を、うつ○さて、打音の、かすかなれば、遠くはきこえぬをも
をいふ　て、道は遠けれど、兒呂が待故にかおもかげに、見
ゆるといはんとて、上○於由の由は、母の誤り、といへる
よりいひつゞけし也　によるべし、於母は、面影也
頭註 佐は發字ぬるよのまに也
頭註 山に打とつゝかされは山とよみしは誤也
○同　二十二丁
△宇倍兒奈波和奴爾故布奈毛多刀都久能奴賀奈敝由
家婆故布思可流奈毋
○兒奈波は、子等○和奴は、我主　○多刀都久は、立月○奴賀奈
の方言なるべし○の略言なり　の方言、なるべし敝は、
額也、ぬかづくにて、かしらを、うな○千蔭云ぬかなへゆけば
だるゝをいふ、物を、按ずるさま也　ゝ、月日のながれ行ば
なりと○故布思可流奈毛、こひしかりなむといふ、方○意は、
云々　言なるべし、かゝるてには、、なければ也　○子らは
我を戀ふるな、さらぬだに立月日を、ぬかなへへゆくは、くるし
きに、戀したふときかば、いかばかりか、我も戀しかりなん
と、な○さて、ぬかなへは、かしらうなだれ
るべし○て物おもひたる、ことゝきこえたり
頭註 故布奈毛こふることなかれといふ意也　此歌は皆方言也、
○同　廿六丁
△和我目豆麻比等波左久禮杼安佐我保能等思佐倍己
其登和波佐可流我倍
○眞淵云　安佐我保能を、安良多麻能の、草字など○宣長云　目
誤りしかとて、あら玉の年と、つゞくかと云り　豆麻は、め
づまとよみて、思妻也、朝顔の、花○今按　此歌の前後、草な
のごとくなる目妻と、いふ義と云り○どをよみたれば、朝がほ
の花なるべし、あら玉としては、いか○等思の思は、鬼の
どしからん、左久禮杼は、離別の意也○あやまりなるべし　○
等鬼佐倍にて、朝顔の、時のまと、つゞけしなべし、意は、
吾妻を、人さけて、あはせじとすれども、さく
るとよ　○朝かほの、時のまも、われはさく　は幾許こ
めり　るこゝろは、なしといふこゝろ也○己其登ゝたに

て、時のまも、いくばくおもふ子○我倍は、そへいふ、方言也○
故に、さくる心は、なしといへり○倍は、さくるか、にて
こゝたを、こゝと○初句は、我思妻と、い
ゝいふが方言也　○ひしをよしとすべし

○同　二十六丁ウ

〽宇知比佐都美夜能瀨河泊能可保婆奈能孤悲天香眠
良武佉曾母許余比毛

○卷十三に打久津三宅之原とあるに同じ、　○眞淵云　可保婆奈
須を、都といふが、方言なるべし　はおもだかを、い
ふにや、其葉は、人面の高きが、如なれば、面高と、名付いふ、　○
意をまくら草紙にもいひつと也、此說いかゞと略解に云り
今按可保婆奈は、俗に晝顏といふ花也、朝がほに、對したる
に、可保婆奈名にて、晝もしぼまず、日のくれてうつろふ也
あすまたひらく、夜るは、寢るがごとく、しぼむを、人にたと
へて、日もすがら戀くらし、夜るは戀わびて、ねぬらんとなり
○河波、可保と、通ふをもて、みな○佉曾母許余比毛も、昨日
のせかはの、かほ花と、つゞけり
今夜も也歌の○卷八　高まどの野べのかほ花とよめりしは、
意は明けし　權花ときこゆれ
ど、是も、日すがら咲て夜○朝を略して、花をそへて○此花日
る散散、同じくいひしか　かほ花と、いふなるべし○中盛に
て夕しほむ故に戀わひて
ねぬらんとはたらく也

○同　廿六丁

〽芝付乃御宇良佐伎奈流根都古具佐安比見受安良婆
安禮古非米夜母

相州三浦郡の浦の崎也、芝○芝付の、誤にやと走水野洲　字も
付は、地名か、諸說なし　良いへりしは、よかるべし○誤る
べければ是をと、かふべし○古事記に、日本武命の、わたり
よしとして　走水乃らすべし○給ふ事見えたり今走水觀音
あり○根都古具佐是又不レ知　今按　古書により所なし、是は、
今筆といふ草にや、草のかたち、筆によく
似り、葉は、薄のめ出し頃の如し、根は、筆のほのごとく也、
こよろぎの、磯にはおほく有、海邊の砂中に生ず、砂中六七寸
掘は根あり、其根、筆のごとくにつかねしともいふべければ、
根づかね草と、いふなるべし、それを略して、根都古草と、い
へりし○砂に、深かくれ、生ぬるをおひ見ず○猶後按○此草同
にや○あらばといふかふらせしたるべし　をまつ○國大磯
の濱邊邊ノ下一字或二字不明三浦も同國な
り、猶考べしこよろきの磯を、大磯と云

頭註　契沖靈芝にやと云り是も芝といふ字によりていへるにやれ
いし海邊に生る物にあらざる也

頭註　もしほくさかくとよめりしも此筆草より出しことはにや

頭註　又束禰ざるは逢がたき戀をもていひかけしかふりことはな
るべし

○同　廿八丁ウ

〽可良須等布於保乎曾杼里能麻左低爾毛伎麻左奴伎
美乎許呂久等曾奈久

○千蔭云、乎曾は宇曾也子らが、來るとなきながら、こねば鳥は、大うそ鳥なりと、のゝしるなりといへりし也　○僞噓を、をそといふもうそ也、今按　噓言などいひて、人を、實なりと、まよはするは、かしこき意にいひて、うそを、をそといふは、實なる意なるべし　○鳥は雞明と同じく、明るを告わたりて、神代卷にも八呎鳥と、ほめたる鳥也　○吉凶をも告よろこび鳴すると、世上にいへるなり　○さるかしこき鳥を、僞鳥とは、いはじとおもふ也　○麻左低は正傳にて鳥のまさしく、告るといふ意也、ツテの反也からすのまさしく、傳ふると也　○許呂久等曾奈久　子等來となくにて、ころといふが方言也、意は、鳥のまさしく告ざるに、君は來まさぬとしるきに、子らは君が來る／＼とまちてなげくとよめり　○子らが、君が來るかと、待をいさめてたれか心しる人の、よめりしなるべし　○獺俗に、川うそといふ、是もかしこく人に見えぬ、はたらきする故、うそともいふべし　○まさでにも、とあるにて告ざると、きこえたり　○をそはかしこき意と聞えし也、をそのたはれをともよめり、轉してうそといふなるべし

頭註　俗をそき人といふはかしこき人をいふにて此をそもかしこきよしにいへるか

頭註　麻左は正き意されはうそ鳥といふ意はあたらざる也

頭註　此歌は解かたし後人考給ふべし

○同　三十二丁

△於志氏伊奈等伊禰波都可禰杼奈美乃保能伊多夫良思毛與伎曾比登里宿而

○眞淵云、初句、否といひて、二の句、稻つきなど、あらわざすれば、身もとゞろきて、いわがたきに、たとへて、さるわざせざれど、昨夜たま／＼夫子とねたれば、いねがたかりしと、いふかとも、又は是も、賤の女の事を、語りいふか、上いへりしごとし云々　○ある人、稻つくといふことはなし、よねつくといふ也、稻は、こく、こきほすなど、よめり、されば稻春とはいはざる也と云　○奈美乃保能は、神代卷に浪穗とあるに、同じと云り　○卷十一に甚振浪と、あるに同じいたぶるなみとよめり　○今按に於志氏は、しひて、いなどいふに、おなじこゝろ也　○伊奈は、いなむにてしひて、いなむにはあらずと、いふを、伊禰波都かねどゝ、よめりしか　○伊禰、伊奈、かよひて、いたをいねと、方言にいふと聞えたり　○都可禰抒は次／＼の心いなと、つぎていふにはあらねどの意　○いたぶらしもは、右の浪の、ゆるが如く、男の心の、定がたきにたとへて、いなむとよめり　○伎曾比登里宿而の伎曾は、歲にてきそふは、さからひ、あらそふ意にて、定なき、男のあた心なれば、あらそはんよりは、獨りねして、あらんと也　○而の字は、してあらんといふ詞を、こめのこせし手には也　○又男にきそひ、ひとねたらんといふ意にてよからむかし　○伎曾を、昨日といふ意としては、こゝに叶がたし此歌も解がたし、後按を待

頭註　いねはつかねどは、つかはねどにて、しひていなといふ心つかひはせぬと也

○同　三十二丁ウ

〽麻都我宇良爾佐和惠宇良太知麻比等其等於毛抱須
奈母呂和賀母抱乃須毛

○眞淵云　古本などしに、いひさわ○宣長云初二句きこ　○松が浦は
ぐをいふか、解がたしと云り○えがたしと云々　○奥州なる
べし、佐和惠は、和氣　○宇良太知は、上の浦をうけたるにて、
の約、惠、さわぐ也　群立といふ、方言に、つゞけしにや
○うらむらと、かよは○麻比等其等は、麻は發字む○於毛抱須
○する方言なるべし　らたつ人言にて、ことば也○奈母呂は、
おもほすなにて、なもろは、　○和賀母抱はわ○乃須毛は○意は
方言のそへことばなるべし　○かおもふ也　○如なり　○懸相
人の、さわぎ、むれたつ人のことを、まことゝ、おもふな、わ
がそなたを、おもふごとく、ねんごろに、そゝのかしいふと
も、あざむかれ、　○是はことに、方言
給ふなと也　○故きゝとりがたし

頭註　おもふは布なれとおもほとかよふ方言也又おもひほりする
の略にもや

○同　三十三丁

〽思保夫爾能於可禮婆可奈之左宿都禮婆　比登其等思
氣志那乎杼可母思武

○眞淵云於と宇と、かよひて、うかれ　○宣長云　於可禮婆
はかなしにて、浮なるべしと云り　○は置れば也と云り○今按
於輪　いの草字於に、て、よく似た○次の歌に、こぐ舟の、わす
れば、於は、輪の誤にや　○れはせなゝと、よめりしに

よれ　○輪の、あやまり○しほ舟は、汐のみつれば、湊に入し舟、
ば　○と、しられたり○又汐のみつるを待て、水門を出る也
○汐を待ほどは、舟をならべてあるを、し○其しほ舟の如く、
ほ舟の、ならべてと、つゞけてよめり　○枕ならべてふたり
ねし、わかれがか○さて、於可禮婆はわ○汐舟の、ならひたり
なしきとよめり　○かればかなしき也　○しも、汐みちぬれは、
擯わかれぬ　○左宿都禮はふた　○那乎杼可母思武は　○宣長云汝を
るにたとふ　りねたれば也　なにとかもしん也　とかもし
ん、何かもしんにて、あを、　○意は、ふたりぬれば人言しげし、
はんぶけると、いへりし也　いかにかもせんと、よめりしな
るべ　○又方言に那乎杼
し　とよめりしにや

○同　同丁ウ

△於保夫爾乎倍由毛登毛由毛可多米提之許曾能左刀
比等阿良波左米可母

○眞淵云　舟は、艫舳の堅を、專らとして、作れ○宣長云泊れ
ることを、しるべき里人に、口がためせしと也○る舟を、綱
にて、つなぎ、かたむるならんと云り、許曾は、地名なるべし、
もし曾は、賀の誤にて許賀能里人にや、此可母は、可波の意也、
とい○今按に大舟のおもひたのみてといふ冠辭の○大舟は、碇
へり○意にて、たのみかためしと、はたらけり　ただも、し
かとせざれば、風に吹なかさるべければ、かためし
と也許曾は、子等にて、曾は、魯の誤りと見えたり○之は契り
しこ○かたく契りし中なれば、しる人はあらじと、おもへども
と也○たゞ、子らがさと人の、あらはさんかと、うたがはしく

思ふ也、許魯里人は、子等ころくとぞなく、と
を、ころといふ、方言なり○ある子ろとおなじ

萬葉集十五殘考

到壹岐島雪連宅滿忽遇鬼病死去之時作歌

此歌ヨリ九首

○六鯖　二十五丁目

△和多都美能可之故伎美知乎　かしこき道は、海路也、海上は、難風にあへば破船する故に、かしこきといふは、おそろしきと同じ　○毛奈久由可牟登　恙なく也、無難にて行かんといふ意也　○由吉能安末能　一岐國、海人也、いきとゆきと詞通ふ也　○保都手乃宇良敝乎　いきのくにのあまの住ほつての浦にて、地名なるべし　○一説に、ほつての、ほつは、秀つ、手は、そへし詞にて、神代卷に、太占を、ふとまにといへる、太の語とおなじくほむることばなりと、いへり　○宇良　は、うら合也　可多夜伎弖　は卷十四むさし野に、うらべかたやき、とある註に、鹿の、肩骨をとりて、燒て、占ふこと也といへり　○今按に　ほつての浦に、占を、かれたるべし、ほむる詞にはあらじ、地名なること明らけし、海路の、かしこければ、病者によからじとて、ほつての浦べのかたをよぎ、ゆかんといふに、地名なるは、いちじるし　○海路を、ゆかんかいかゞと、占せしなるべし　○反歌　にしらきべか、いへにかゝへる、ゆきのあまの、ゆかむたどきも、思ひかねつも　○此歌にて、よくわかれる也

頭註　由可牟登由吉能とつゞけし也

○娘子九首四首目　三三丁ウ

△比等能宇宇流田者宇惠麻佐受伊麻左良爾久爾和哥禮之弖安禮婆伊可爾勢武

○註云、人の業とする、田も植ずして、國遠く別れ行まさば、我は、何をたづきとして、あらむと云り　○此註は、世わたりの、たつきなく、離がたからん意也　○今按に他國に行を、なげくこそ、妻の情也、なんぞ、世わたりのともしきを、いはん○歌の意は、田を植ざれば、稻なしといひて、稻にわかれた○ば、いねる夜なく、こひあかさんと稻に、不寝をかねたり（官人は、奉公が業也、農人とひとしく註せしはあたらじ

萬葉集十六殘考

○　七丁

△足曳之玉縵之兒如今日何隈乎見管來爾監

○まへの歌に、山縵とあれば、是は誤り、山かづらの子と改むべし縵は蘰也　○三句目、是の字脱せしにや　如是今日とよまざれば首尾せじ　○結句の來も去の誤りか　見管去爾監とよむべし、いづれのくまを見て、身をなげにはいにけんと、いふ意なれは也　○前歌の、還來脈之乎は、われにはやく、つげしらせばかけりきて、引上ん、さらばよみがへりこましをと也

○竹取翁歌　同丁

△緑子之若子蚊見庭　見庭は、身には、なり○垂乳爲母とつゞく、枕詞也、眞淵たらちしは、たらちねの誤といへり、卷五長歌にもたらちしとよめり、さもつゞくか○母所懐搓襁乎掛蚊見庭、生は、掛の蟲ばみて生となりしなるべし　○結經方衣結經は、木綿の借字にや

○氷津裡丹縫服　眞淵云、今千鳥がけといふを、ひつりにぬふと、いへるかとぞ　○宣長云、津は、田の誤か、しからば、ひたうらにと。よむべし、卷十三に、純裏衣を、ヒタウラゴロモとあり、又夕ウラの約、ツなれば、ヒタウラを、ヒツラとも、よむべしと云々　○しかる時は、もとのまゝ、字をあらためず、よむべしとぞ○今按に我が

衣手のひつをからなんと、よみしひつにて、今ひだといふ也、小兒の衣には、肩に、ひつをとり、腰にもしかするを、ひつ入といふを、ひつりと、つゞめてよめりけん ○ひつ入にぬふは、生長する、ためなり ○頸著之の、註に、童髮の頸を衝ほどなるをいふとなり ○今按に、うなづくは、小兒の、ものいはざるほどは、かしらをうなだれてなどするさまを、いまもうなづくといふ也 ○童子蚊見庭二句めを、かへしたる、句法なり ○結幡之註に、纐纈をゆはだといふは略也、ゆふはだくゝり染の事也 ○袂著衣宮人の、袖つけ衣と、よめりしを思へは、註の意は、叶はじ、是より、翁が身の上の、事と聞ゆれば、翁が衣也 ○服我乎袖付衣きし、われをと翁の、みづからの事を云り ○丹因子等何われによれる子ら也、上に我とある故に、略してよめり、似よるには、あらず、よりくるの意也 ○四十庭十を、千に誤十に改 ○我により來る子らが美童なるをよそめに、いかゞみるのわた、とつゞけり ○三名之綿かぐろきかみと、つゞく冠辭也古說誤しを、後達考に委云り ○蚊黑爲髮尾童子の髮は日にまし、黑くなる故に、爲の字をくはへしは、妙也 ○信櫛持於是蚊寸垂取束擧而 裳纒見解 亂髮をゆふさまをいへる也 ○まくしの信は、眞と同じく、ほめことば也 ○とりつかね、あくるは、かみを結也、ときみだりは、ゆふさま也 ○童兒

丹成兒羅見は、兒の誤り字、よく似たり ○此うなゐばなりは、よりし子らが、ことを云り ○丹成も、似よる子らといふにて、なすは如くといふことば也 ○丹津蚊經色丹名著來宣長云、童兒丹成見羅丹津蚊經色名著來として色の下の、丹は衍字とせり ○うなゐになしみ、さにつかふいろなつかしき、とよめり ○紫之大綾衣色なつかしき、紫とつゞけたり綾に、大紋に、織しをいへるにや ○墨江之遠里小野之眞榛持榛の事は、まへにいへり、萩の借字、といへるも、私にて、古書に見えず、萩も集中、芽子と、かきしなり ○丹穗之馬衣丹榛を以、そめ又、摺などして、丹にほはしたる衣と、いふこと也 ○にほしゝに、そめしも、すりせしも、こもれる ○狛錦紐丹縫著高麗の錦を紐にして衣につくる也 ○刺部重さへはそへにて、そへかさぬる也 ○部波累服又、かへしてへならべかさねきると、あやなせり ○打十八爲春海云、打十八爲の、八爲の二字は、烏の誤りにて、うちそを也、麻といふ、枕ことば也、女は、苧をうみぬる、わざをする故、をみな子と女をいふと云々 ○麻は、水にしめして、打てうむ也、さて糸となる ○麻續兒等打そよし、をみの子らと、つゞけし冠辭也、うちそやしはよしといふと、同語也 ○さて、此麻續を、忌と、かよはせり、忌衣を、をみ衣と、いふがごとし、依て、いみしき子らと、ほめし詞に、用たる也 ○蟻衣之寶之子等蚊ありぎぬの、寶の子と、つゞく事冠辭に見えたれど信じがたし ○此考、

より所なければまた〳〵、考そふべし、たからの子らは、子だからといふがごとく、褒ことば也　○打栲者　一說に、うつたへは、美細布也といへれど、打は發なるべし　○經而織布　今按に栲は、楮の類也といひて木の皮をむきて打などし、やはらにして、糸にしたるにや○さて、をりて布とせる也　○日暴之　久老云日ざらしのとよめり　○朝手作尾　卷十四に玉川に、さらすてづくりとよめり、朝は麻のかり字也○麻手は、あさたへの略、麻布也と云り　○信巾裳成者　しきもは敷裳也、麻布にて、しきねする、夜のものを、つくるをいふべし奧州津輕邊にては、綿なき故、麻にてし、綿のかはりに藁の、はかまを入て、作るを、あさでふすまといふ　○之寸丹取爲支　之寸、は重の意、しき〳〵など、いふに同じく、しげ〳〵しきみさぬる也、とりしきを、すきといふも、同じこと也　○屋所經　小女なりとも、女は人めいみて、やどにあると也　○稻寸丁女蚊　一說に稻寸といふ、かばねの、少女かといへりしは、より所有か　○古事記に稻城とあるも、同訓也、是は天子に、背いなむといふを、いなぎといへり、是も、しかめかしき詞なれば、男のいひよるを、いなびうけひかざると、いふことなる、し○いまだ、戀の情を、しらぬほどならん○一說に、丁女の丁は、壯年の意か、又は少のあやまりしかと云り、丁は、下の誤り、下はもと〳〵よみて、いまだ、女にいたらぬほどなれば、下女とかきたるべし、猶考べし○妻問迹　丁女か、ことをきゝて、妻といふよし也　○我丹所來爲　われに、中たちせよと翁がもとに、來たると也　○眞淵云　所來は贈る心をもて、おくるとよまんかと云り○宣長云我丹所來爲われにぞ、來たるとよむべし、おくらしたるとは、よまじと云々　○彼方之　千蔭云、をち方の、二あやとは、つゞきがたしと也　○按に彼方之は、をちこちとよむべし、彼是の兩方をもて、二あやと、つゞけしならん○二綾裏沓　同說に、二綾は、二色の、あやの事か、織部令に、浮物と、二色綾と、ならべ擧げたるは、より所あるかと也　○した沓とあれば、見えざる所故、あやのごとくに、さしとおなどせしか、日立さればと云り　○飛鳥飛鳥壯蚊　註曰此男の、飛鳥氏にて、沓作るに、名高き人、ありしかと云り　○飛鳥の里の男なるべし　○霖禁　此本のよみ、甚わろし、雨中のしわざに、せしと也

○縫爲黑沓　むかしのわざ、いかにぬひしかしひて、いはんよしなし　○刺佩而庭立住退莫立を、立なと、とがめし也　○禁尾迹女蚊　まへ、の稻寸丁女を、又かへして、いなむとよめり、禁は、忌つゝしむ意もて、借かきたり

○鬚髣聞而我丹所來爲　をとめが、男の來りしを、ほのかにきゝたる也、さて、是を、いなひし、をとめの、男をとゞめて、心なくさに、たふらかすなるべし○水縹絹帶尾引帶成　水縹は薄花田色をいふべし○男の帶を、引とめさせ、帶をなすは帶の如く、やらじと、引めぐらすを云か　○韓帶丹取爲　韓借の、かり字にや借引、とらすといふ意なるべし　○又かりそめの意なり、さみに、引とゞむる也、じち

にとゞむに、あらざれば、かりそめならん ○海神之殿蓋丹 眞淵云 海神の、殿にいへるか、何のよしにか心得がたし、蓋をいらかとよめり ○此難むべ也、しひていはば、命海神の娘に、あひにひし、こゝろせしか、めづらしき事故、あやによめりけん ○蓋は、屋根ふくの、ふくとよめる歌あれば、軒ばとも、よまんかし ○飛翔爲輕如來 すがるは、註せしによりてこゝに、りやくせり ○腰細丹 すかるは、こしほそといふ、枕ことばなり ○取餝氷 是は、をとめが、こしほそやかなる、よそひを、ほめたることば也 ○眞十鏡取雙懸而 かゝみをならべかけて、うしろまへを、あはせ見るなり ○己蚊果還氷見乍 かへらひはかへり見るをいふなり ○春避而 春さりは、春にいたれげなり ○野邊尾回者面白見我矣思經蚊 われをおもへるかのつゞまり也 ○狹野津鳥 さは發字野也 來鳴翔經秋避而山邊尾往者名津蚊爲迹我矣思經蚊 是は、春秋のことによせ、男のわれを思へばか、きたりけんと也 ○天雲叢行田菜引還立洛尾所來者 路は洛の誤、字似たり、尾は、音によみて、ビとよみしはまへのふりといふと同じ ○都べ來ればを、みやびをくれば、とよめりし也 ○打氷刺宮尾兒名 見は、兒の誤しか、兒名を、手子とよまんか、手見の字なくては、いかゞあらん ○もとのまゝならば、みやのを見名と、よむべけれど、さすれば、宮女のことゝなりて叶が

たし、猶考ふべし ○刺竹之舍人壯裳忍經等氷 てこなを見て、とねりらまでも、こひしのぶと也 ○還氷見乍誰子其迹哉所思而在 舍人らまでも、かへり見て、たが子ぞ、とけさうする也 ○如是所爲故爲 ふりたる所とすと書たれば、かくよまんか ○千蔭曰 醜として、カクゾシコナル、とよみて、老て醜き人となりし、と註せり ○古部 神さびたりしいにしへとつゞくか 狹々木爲我哉 さき／＼にて、咲／＼の意、若さかりを、花のさくごとくにいへりしことば也 ○かくふりたる老も、むかしは花さかせし、身也と也 ○宜長云 壯年の時、さかりに、そゝめきさわぎし事と、聞ゆると云り ○端寸八爲 愛を、はしきとよめるに同じ ○今日八方子等丹五狹邇迹哉 子らにいざにと、まねかるゝ意也 ○所思而在 まへと同句よみも同 ○如是所爲故爲 まへと同じくかみさびとよむぞ、よかるべかりき ○古部之賢人藻 契沖曰 孝子傳云、原穀者不知何許人祖年老父母厭患之意欲棄之穀年十五、涕泣苦諫、父母不從乃作輿舁棄之穀乃隨收輿歸、父曰爾焉用此凶具穀曰、乃後父老更不能作得コハ上下セシカトイヘリ是以收之耳父感悟愧懼乃載祖歸侍養更成純孝といふ、故事なりと、引たり ○老たりしとてなすてたまひそ、すてし車、やがてめぐりきなんをと、をとめらを、さとす也といへり ○後之世之堅監將爲迹 かゞみにせんともよまんかし 老人矣送爲車

もとのよみは、上にせんとあれば、わろから○かくな
持還來ぬ、もてかへりきぬる、ためしもあるの意也○が／＼
しく、よめりしに、段一所もなしと、見えたり、○故人も、此
のべつゞけの長歌は一首も見えず、いかゞにや　○歌は、あや
しとのみいひ、○古點の、まゝならず、あらたによみを、つけ
すてたり　○たり、わろかめるは、はぶきもし、よしとき
こゆるも侍ら
ば、とてなん

頭註 知之反知乳垂の母とつゝくべしや禰は乃に通てたるちの母とつゞくか　生掛改

頭註 結經方衣　兒の衣をべべといふ方言にや

頭註 千十改

頭註 卷十三廿丁ニ蜷腸と書りそこにくはしく云り
又爲は僞の誤りにや

頭註 見兒改

頭註 部並也

頭註 賺をうむををみと通はせし也

頭註 貸の子らはとあるは一人にかきらし九人の子らのことをいふへけれはこれよりはまへ子とはおなしからし前の子は妻とふといふにかけ合さる也

頭註 穀ハ楮也トモ云穀楮ハ木也と云々楮ハ紙ニ用レト布ニセシハ不見

頭註 後進考にくはしくいへり　穢調布を也

頭註 いたきはいなふけと云意なるべし

頭註 いなきはいなけにていなふる氣也

頭註 彼方此方とかくを略したるべし

頭註 稲城是にていなぶることゝすべしなほも考あらばそふべし

頭註 蜂は軒に巣をかくる故軒とよむべし

頭註 久老云還氷見乍ノ下ニ吾丹所來爲ノ一句脱セリト云リ

頭註 路尾ハ大路ノアヤマリと云リ

頭註 宮尾兒名は宮女也といへるはいかゝ

頭註 手子はまゝのて子なの所にいへり雅女の意にはあらじ

頭註 如是ヨリ翁カウヘヲ云リ

頭註 短歌も、上下のわかちあれば長歌に有べき事也

頭註 當世の人のべつゞけによめるは、誤なるべし

○娘子等和歌九首　九丁ウ

端寸八爲老夫之歌丹大欲寸九兒等哉蚊間毛而將居

○大欲寸は欝悒にて、おぼつかなき、戀なればおゐ○翁の歌の
そかなる、意なりといへりしも、くはしからず　○長／＼し
ければ、一わたりうたひしばかりにては、きゝがた
ければ、おぼつかなしと、いふ意に、よめりけむ　○九兒等
こゝのたりと、なくては、首尾せざるべし、九はこゝのつとは
よめと、コ、ノ、、とはよまず今按に九は、數のつもりにて、
かずのあつまりしなれば、九を、　○つどへる子らや、かま
つどへると、よむべかりき

けてをらむ○蚊間毛は感又滅の字をよめると、見えたり○俗に、ことしげきを、かまけといへるは、搔儲の意なるべし、翁の歌の、こと葉しげゝれば、かいまけてあんじをるらんとにや○感心の意にてもよろしかるべし

○　十二丁ウ

△商變領爲跡之御法有者許會吾下衣變賜米

右傳云、時有所幸娘子也姓名未詳寵薄之後、還賜寄物俗云可多美於是、娘子怨恨聊、作斯哥獻上

○契沖云　商にて、うりしあたへの、やすしとて、かへすやうのわかまゝに、せよといふ、法令のあらばこそといへり○眞淵云、領爲跡をめせとふ、みのり、とよむべしといひしを、めせてふことば、いかゞと難じたり○宣長云、あきかへり、しめせとふみのりとよむべしと云々○今按に　○商は秋の借字、いつもの秋は、暮行て、其秋又、かへりきて田稻、年に二度、實入ことの、あらはこそとなり○天地は則、天子也、その法令の、變ずる事なし、一度めし給ふ、吾なれば、見すて給ふ、事はあらじ、さし給はゞ、天下の法令、みだりなるべしと、恨たり　○領爲跡之度一貢しろしめされしあとの田に、又稻の、實入ことの、あらば也とぞ、あとは、苅しあと也、御法に、實入をかねたり　○下衣　とよむべし、下賤とつゞく意をもて、かけりしか、天子みづから、法令を、みだし給はゞ、天下くにたみ、おさまらじと、理をつくせり　○倭父衣　しづはしづ布也、それを賤といひし、あやなりとしるべし

○　十五丁

△可流羽須波田廬乃毛等爾吾兄子者二布夫爾咲而立麻爲所見

右二首河村王宴居之時彈琴而卽先誦此歌以爲常行也

○かるはすは、契沖、碓からうす也、と云り、さても、からうすの、田とは、つゞかざる也○此歌、川村王、宴し給ふに、かゝる歌ありしを、參らせけん、されば、宴する意二首ともになければ、方言の歌、めづらしく、琴に合給ふにや○常行とあれば、めづらしく、常に合、うたひ給ふべし○依て、今按に。かるはすは、苅ほすにて、上總方言に、ほすを、はすといへるをもてかならず、さきもりの歌、なるべし○かりほす、田ぶせとつゞけり稻といはざるは、意にこもれり○わがせこはいねにきて立るといふに、稻をこめたる故、わきがたし　○田ふせは田の中の家にて、田家のことを、よめる也

○其家の女の、よめりしなり、田家のもとに、わがせ子が忍びきて、ゑみて立るとなり　○二布夫咲而　にふゝは、にほゝ也、にこやかを方言に、にふゝとよめりしか○頬笑也も結句たちますみゆるとよむべし

○詠白鷺啄木飛詞　十八丁ウ

△池神力士儛可母白鷺乃桙啄持而飛渡良武

○淮南子曰　雁從風而飛以愛氣力銜蘆而飛以避繒繳といふより思てよめりしにや○註云、大和十市郡、池上の郷あ

り、神は、借字、〇略解に、池神は、池上か、そこに〇又說、
此池の上かと云 〇て力士舞、せし事有しかと云り 〇力士
は、ちからある〇卷十に 春霞、ながるゝむたに青柳 〇とある
佛をいふかと也〇の枝くひもちて、うぐひすなくも 〇にいひ
しも見合 〇今按 池ト地の、似たれ〇初句地神とよむべ
すべし 〇に ば誤りし也 し、神代卷
に、出雲國、五十田狹之、小汀に、十握の劍を、立給ふけりし
に、國津神は、浪穗をふみて、かけり行給ふことなどを思ひよ
りてよめ 〇力士儛はわたらず、ちからまひと、よみても心
りけん よみあるべし、力士舞といふこと、見
よからず、〇猛を、たけきとよめば、力士と、同〇池上を、地名
考べし 〇じければ、たけきまひとよまんか としても、舞
せし事、ありしやいへ 〇力ある佛といふ
かど、定かならじ 〇は猶とりがたし

頭註 桙八枝を云梢の立枝をほするなと云

頭註 鷺の海邊など飛を小汀にたとへしなるべし桙といふによれ
はつるぎまひかもとよまんかしさらは故事の心にたかはし
むかし今考し人なし此外考あらしとおもひ侍りぬ

〇無心所著歌二首 二十丁
吾兄子之犢鼻爾爲流都夫禮石之吉野乃山爾氷魚曾 〇
懸有 海月 鮎 鯖 鰡

手のさきして、打なぐる石とつゞく也、此氷魚によりて、あじ
ろをよみし歟見えしは、いとにが〳〵し
此歌は、不レ解とて、注なけれどし
いて、愚按をのぶ、あたかしこ

〇是は魚名、五名をこめてよ 〇たふさげに鮏さけを 〇つ
めりしと、思ひ侍るさて こめたり
ぶれいしに 鯔いしなぎ〇つぶて折は、いしをな
を、こめり げるを、石なぎといふ〇よし野
の山爾 鯔なよしと、よみ入たり、よしの山
は、山の名よし、といふをもて也 〇氷魚ひなは、此ま
をぞといふにて、懸有一本佐我禮流、とあるを、よしとして
日ぐらし見る意也 夕日の、山遠ざかるをさかれると云
〇夕日の、遠ざかるは、くれゆくにて、暮るけし〇如レ題心を
き故に、海月と、こめたることばの、たくみ也 つくる所た
く、よみし也詞のみいひ
つらねし故、趣向なし

頭註 犢鼻ハフトシ也是手ふさきとかねたり石をにきれは也

〇夢裡作歌一首 廿二丁ウ
荒木田乃子師田乃稻乎倉爾擧藏而阿奈于稻于稻志
吾戀良久者

〇荒木田を、新墾といふはよからじあ〇しゝ田は、鹿のつく、
らき田といふ、地名、註に見えたり〇田なるべしといへるは
しゝといふになづみし誤也、しゝは繁也、まかぢしゝぬきしゝ
まつなど皆、しげき也、是は、田のいく町もつゞきたるをいふ、
其しげき田の稻〇しゝ田の、しげき稻故〇擧藏を、古女天と、
を、かりつむ也 くらに、つみあまる也〇とめるもよかるべし
〇其つみ重しは、いくうねなるを、戀る心〇古今集に、くねる
のうね〳〵と、いひかけし、上は序なり などとあるもおな

じこ○契沖云　干は干の、誤と○古米を、ひね米といへば、ひ
と也○しひねん\／しとよめり○ねん\／しは、としふりしこと
にて、こゝ○又荒木田は惣名にて、しゝ田は、村里の、○しゝ
に叶はじ○小名にや、又田のあまたなるをいへりしか○は、
しげき也

○　二十七丁ウ

へ琴酒乎押垂小野従出流水○契沖云　琴は押へ、酒をば、垂
るといへば、押たれとつゞけ
た○略解云、琴は、美の誤に○美は褒也、押たれざるほどに○又
り○うま酒なるべしとぞ○美酒と、ほむることはなし　○東
鑑に眞淵云押垂甚時と、いふ人あれ○宣長　小は水の誤、おし
ば、おしたれといふ、地名かと云々○云　はたるみぬゆ、
なるべし、美濃國、垂水　○今按　琴は凝の意、俗に、ことる
を、いふかといへりしなり○に　といふも、こる也、酒
のしぼらぬほどは、こ○そのことゝれる酒を、酒舟に入て、おし垂
とれるを、琴酒と云　○すをかりて、押たれ小野といふ地名に
よみかけし、○酒の事、まへに見えたり、○寒水之と千蔭云も
あやなり　○そこにいひし故、略ス　のよみ
雅ならず、しみづとよむべし、景行紀に、寒水を、さむきみも
ひとよめり、催馬樂にも、みもひもさむしとあれば、さむきみ
もひともよむ○しかすみては、しらべよから○吾宇奈雅流
べしと云り　○ずまし水のと、よむべくこそ
雅を、ケとはよめず、うながるにて、うながせるのせを略○神
せし也古事記曰　宇奈賀世流多䙁能美須䙁流とあるが如し○代
卷、以其頸所嬰五百箇御統之瓊とある、うながせるは、うなじ
也、頸をうなじとよみて、今いふ首玉と、おなじく、かざりに
かく○ながしは、玉をつらぬき　○珠乃七條　條を平に、用
ゑ也○て首に、かけたらせしなり　ひしこと集中
に見○七は、七重の意に、よめりしか、七ツばかりかけては、
ゑず　ながしたるゝほどならじ、依七の數にはあらじ、七重や
への條々の意ならば、貫／＼○少寸三句あり、いづれも○七
する意なるべし、いかゞ　ともしきとよめり　○條
を、ななちをとよめるを、
ツとかよはせしにやいかゞ

頭註 今中汲と云是ことさけ也

頭註 仁德紀曰　旦夕酌淡路島之寒泉獻大御水也　寒泉訓二清水一

頭註 七重八重などゝいへることとなるべし

○越中國歌四首　二首越後歌也　三十九丁ウ

へ伊夜彦乃神乃布本今日良毛加鹿乃伏良武皮服著而
彌布本とゝよめり
角附奈我良

○越後國、蒲原郡、伊夜日古社　○註云、山を、神といふ例○又
三代實錄に、度々神位まし給ふ　也、此神を山とよめり○云
鹿を、加とよまざれば調がたし、鹿は、皮と角とは、もと○卷
よりなるを、人のさまにいひなしたるもの也、といへり　○九
鹿兒自物と、冠辭によめるをおもへば、鹿子と、加鹿と通はせ
て、加鹿と、よめりしか、又は、鹿古の誤か、猶考べしと云々
○此歌を旋頭歌といへども句○集中例ある、
法に叶はざればさにあらず　よみざまなり

△いやひこの神のやしろに。けふらもか。しかのふす
らん。皮衣きて。角つきながら　句切かくては、旋頭歌にてはあらざる也○
布(シク)木と書し故、惠とよむべけれど、や○さて神を、山といふ(ヨム)
しろとよむこそ、きゝよろしからめ○例にはあらざるべし○
卷五、憶良長哥、結句を○可利弖波奈之爾、○志那婆斯農等母
かへして、よめりし也○可例比波奈之爾○能知波志奴等母
○此外結句をそへしあ○みあとつくる石のひゞきはあめにいた
り、佛足石の御歌○り、つちさへゆすれ、父はゝがめ、も
ろ人の○よき人の、まさめに見なん、みあとすらを、われ○ら此
ため○はえ見すして、石にゑりつゝ、玉かりゐりつゝ
の、よみさま也、皮衣の、角○此歌は解がたかりしを、同所、
つけるまゝなるを、着たる也○三條といふ所の門子に、とひき
ゝし○いや彦の山に、むかし鬼女すみしを、神にいはひしと、
也○いひ傳へて、國人かしこみ、尊敬するといへり、此歌に
考合すれば、鹿の角つきし、皮衣を○應神天皇淡路島に、狩し
きて、神事に、儛などせしなるべし○給ふ時、角ある、鹿の皮
衣きし人、出來りしなど、いにしへ○さて、皮衣きし、神事絶
は、さることの、まゝありしならん○て、角つきしといふによ
りて、鬼女なり○後世わかずなりしかど、鬼といひ傳へし
と、いひしにや○は、いにしへの、殘れるよしなるべし

頭註 加鹿とつゝけて句をきりしはわろし

頭註 千蔭旋頭歌といひしはいかに思てにや

頭註 此哥下一句を添よめる也此句佛足石の歌と同じ集中にもふくよみしあり

頭註 神を山とよみしことさらに見えす、しひこと也

頭註 伊夜彦乃山乃麓とすれば猶よろしからむかし

○爲蟹述痛作之歌　三十丁

△忍照八難波乃小江爾(オシテルヤナニハノヲエニ)　小は發字江なり　○廬作(イホツクリ)　蟹の穴をいほとよめり　○難(カタ)
麻理弖居(マリテヲル)○宣長曰、難麻理は、なまりてを○陰の山を、なば
る、とよむべし、陰るの古語也○りの山といふ、
名張といふを、陰とかけり、蟹○今按にかたまりをるは、集り
の穴にかくるといふ意也と云々　居るをいふ、澮集(カタマリ)の意にも、
かきら○俗に、かたまるといふも、おなじく集
ざる也○るをいふ也、蟹のあまたあつまれる也○歌人跡(ウタビトト)註曰
あはふく時、聲のするを、歌笛に、たとへ、しといへども、蟹の
あはふくに、いかばかりの、聲を立らん、かれが鳴しことも、
きかずい○あはふく時、聲は○歌人と、いふよしは、歌は、手
とあやし○えたてざらんかし○にはがもはらなるをもて、蟹の、
手してはふを手にはと、つ○笛吹跡(フエフクト)、琴引跡(コトヒクト)笛もよこにして
ゞめて、たとへしなるべし○吹也、琴も横に
して、引也、蟹の横に○蟹爪あれば、琴引とも、たとへて
はふに、たとへし也○いふべしとは、あさましき考也　○
彼毛(カモ)は、此毛彼毛とせしを○あとは、註せしを、
よしとすべし○よしとこそ申さめ

萬葉集十七殘考

後

○追和太宰之時梅花新歌六首　九丁

△烏梅乃花美夜萬等之美爾安里登母也如此乃未君波見禮登安可爾氣牟

○契沖云、美夜萬は眞山也之美は繁雖有哉也かくのみ梅のありともあかぬごとく、君もあかぬと也　○此註の、ごとくといふべし、猶みやまとの、等の意、解ざる故にいふ、　○とは門是もまへに山のとかげにとあるに、いひしとおなじ　○の意、門山の門也○安可爾氣牟は、見れどあかず、ありにけん、　○一本氣をあかぬと、やの字にて治定せり　世にかきしは歌の意、たがふべしや

○葛井連諸會應詔歌一首　十四丁

△新年乃婆自米爾豐乃登之思流須登奈良思雪能敷禮流波

○新は、あらたまの、借字なるべし、改年と、かくぞよかるべけれ、さて、これを、あら玉の、としとつゞけし、冠辭といふべ　○あたらしき、としとよまんよりは、きゝよろしく、集中し、かくかきし、二首ばかりにて、かならず、かくかきしを、

あら玉と、よむ事　○三十二丁ウあらたまの、○あら玉は、あらと、しられたり　○としかへるまでとよめり○／＼しき玉故、砥もて、とぐの、としとつゞくと諸説に見えたれど、玉はみがくとこそ、申侍らめ　○こは、あらたまるは、あらず、年は改て、一季いかほどゝする也、　○委は、後蓮立春は、あらたむ事にあらざれば、定がたし　としにて、冠辭に考、冠辭殘考にいひしに、あはせて見るべし

頭註　あら玉のとしのはじめとよむべし

頭註　あらたまるのまるの約むあらたむ也

○天平二年庚午冬十一月太宰帥大伴卿被任大納言上京之時陪從人等別取海路入京於是悲傷各陳所心作歌十首

△昨日許曾。敷奈底波勢之可。伊佐魚取。比治奇乃奈太乎。今日見都流香母

袖中抄に、ひぢきの洋は、播磨にありといふも俗説には、ひゞきのなだといふと云々○仁賢紀に菱城邑攝津といふべし、すべて、地名を以、はりま洋、周防洋といふ也、此比治奇も、地名なる事あきらけし、されども、さる地名、いづくともしれず、もし菱城のあやまりか○此ひぢきをあやまりて、ひとおもへども是も地名しれざる也○ゞきと、いひあやまりしか、はりまの國といひしも地名わかざれば治定しがたし

忠見集　音にきゝ　めにはまた見ぬ、はりまなる

ひゞきの洋と、きくはまことか
年山云、忠見の歌に播磨とあ○諸説わかぬよ○源氏物語須磨に、
ろにて、はりまなりと云々　しにいへども○うきことに、む
ねのみさわぐ、ひゞきには、ひ○是も、忠見集の歌によりて、
ゞきのなだも、さはらざりけり○よめりしか、忠見の歌は、ま
ことか僞か、わかぬ○後世の歌、皆ひゞきの洋とよ○伊勢家集。
よしによめりし也　めりしも、本歌を、誤りしか○ありしと
きひゞきの洋ときゝしかは、　初句ありときく、終を○是は、
戀しからすのさきをゆくらむ　せをぞ行らんトモ○地名に
かゝはらずや、島のさき、伊勢なるべし、すべて、名所といふも、
其國をいひて、地名をいふ例也、富士山、淺間山などは國をい
はずして、よからめど、津の國の難波、などいへるが○此治奇
ごとく、此津も地名のひゞきといふ處のなだなるべし○も、地
名なる事、明らけし、播津、播摩の内に有しが、地變じて、名
のらせしなべるし、兵庫の藥島のなかりし時は、難所なりとき
く、さるあたりに○李部王記天慶四年正月十一日、是日備前
や、ありけんかし　備中、淡路等飛驛至ニ備前ニ使
中、賊舟ニ艘、從ニ嚮奈太ニ○是にては、播磨にてあ○此考より處
喚遁疑入レ京乎云々　○らざること明らけし　○は、忠見集
の、歌のみ、それにも、わかぬよしなれば、なかしより、しれ
ずなりにけむ、されども、榛原野洲等は、地名にくはしき故に、
もし考得たりやと、といひしかども、わかぬよし同事也、萬葉
集の歌は、冠辭をもて、地名をいひし故、所のわかぬは、ちか
ら及ばざれど、ひぢきの洋○漁魚取比治奇とは、つゞきが
ありしに、たがふべからず　たし、いさなど
り、ひゞきとは、冠る　日本輿地志曰自ニ筑紫鍾岬ニ至ニ備中
べし　次云り野洲良云　白石ニ七十五里潮入來

也、自ニ紀伊熊野浦ニ入來潮七十五里至ニ備中白石ニ與ニ筑紫潮ニ相
合、又兩方各七十五里、相引而分也、播磨潮、難波半時計遲備
前潮、播磨二時遲備中白石潮、難波三時遲故紀伊滿潮、備中干
潮也、是は、播磨と、阿波の間に、淡路島ある故、汐のたゝへ
て、遲也、さる泊門の汐、さし引あれ
ば、汐のひゞきある也、萬葉集十一に

牛まどの、浪のしほさゐ、島ひゞき、よせてし君に、あはず
かもあらむ

此歌のごとく、おのづから、ひゞきあり、うしまどの邊に、日
比といふ、舟着あり、是を、一說に、ひゞきの、下略也といへり、
ひゞきの浦といひしを、ひゞ
の灘といはむも、よしある也
○此日比もし、響の地名にや、うしまどは、備前なり、されど
も、洋といひしことは、これとも定めがたからむ、いづれ、
萬葉集に、ひぢきとあるを、あやまりて、ひゞきと、いひしこ
とは忠見の歌まことか、いつはりかと、よまれしにて、よくわ
かちし也、猶地名をもとめざれば、わきがたしよ○今按、ひゞ
き人の考もあらばとて、くだ／＼しくいひし也　きは、引ひ
くの、約にて、外所の音を、此方へ、引くといふ、儀にてひゞ
きと、いふなるべし、阿波の鳴門は、汐の引ひく、所なりとい
へば、其汐の、引ひくをもて、ひゞきの洋といひしにや、され
ば、鳴門が、ひゞきの洋なるべし、洋は、海舟の難所也、鳴門は
甚難所なり
といへり
右の、比治奇の、治の字誤しか、ひゞきは、鳴門の、ひゞきと
いふを、より處とすれば、此治の字、あやまりしなるべし○比

の字比と草字に、比ひきと書し誤りにや
かくてもわきがたし、されば、冠辭を考るに、漁魚とり、引ひくと、つゝくべし、網を打て、魚をとりて引よするをもて、引ひくと、かふらせしなるべし、もとは鳴門に、汐の引ひく故、鳴とも響とも、いひしなるべし、されば鳴門が、ひゞきの洋にて、二名にいひしか、鳴門の名高く、洋とは、いはずなりけらし、されば此集の比治奇とあるは、傳寫の誤か、より處なければ也、いにしへ寫本にて、ありければ也〇東海にて、大網を引を、地引といひて大勢、や辭して引よする也〇冠辭考も、こゝには叶はざるべし漁魚取は、漁火を焚て、火の光に、魚を引よせ、網を打て、引よせ引あくるをもて、引ひくとか、ふらせて、比比伎と、つゞけしにや、されば比治伎と、書誤しかといはんか、此枕ことばにて、地名もわくべかりけり、比治奇と、つゞく意わからば、治定すべし〇魚を、奈といふ、酒魚といふ酒のつまなれば、しかいふと云り〇わかざれば、くだ／＼しくいへり、後のうま人考て、明らかにしたまふべし、比治奇と、つゞく冠辭にて、地名も、わくべりけりあなかしこ

頭註　前

頭註　鳴門のなる音のよそにひゞくといふ意なるべし音といふよりいひし名目なるべしされば鳴門をひゞきのなだといひしにや鳴音のひゞくといふ意にや

頭註　曉ノ誤

頭註　眞淵云ひぢきの洋を、のたは、ひゞきのなだといへりしもあたらざる説なりと云々

萬葉集十八殘考

〇姑大伴氏坂上郎女來贈越中守大伴宿禰家持歌　十七丁

〈可多於毛比遠宇萬爾布都麻爾於保世母天故事部爾夜良波比登加多波牟可母

〇註云ふつまは、太馬也、平家物語にふとく、たくましき馬といへる是也〇今按に布都麻は悉也片思の重荷を、こと〴〵く、馬につみ負せて、やらばといふ意也〇於布世を保に、負せ背誤し也なり〇故事部は越中國を、こしのくに、といふ也〇比登加多波牟可母人勾引也、人をかどはかすにて、まどはするに同〇意は、かたおもひを、こと〴〵に、馬におふせて、こしにおはす、御もとへやらば、貨物かと思ひ、人かどはし、うばひとらんと也〇悉は、俗に、ふつ〳〵といふ詞にて、もとは、はつ〳〵也、はつの約ふ也、さてはつは、果にて、しはつの意也故事の、事は、濁音にて、事也、公事、故事、好事にて、濁也〇伊呂波の、はてのずも事の草字也、寸ハキナリ〇勾引ハ後撰集山風の、花の香かとぶ、ふもとには、はるのかすみぞ、ほだしなりける〇

家持の報哥　安麻射可流、比奈能都夜故爾、此都夜の都は、耶の
誤りにて、比奈能耶徒故爾、なるべし、都耶夜徒、字似かよひ
たれば、あやまり　宣長の考、同じけれど、字のたがひは、見
し、なるべしと也○のがされたり、げに、都夜故を、みやこと
は、よみかたし、又國府を都○次の哥　宇麻爾古非許婆、片思
といふべき、よしなしと云り　を、馬に悉負せて、戀來たら
ば、馬もなつみ、荷ひかれんと、こたへし也、依○猿樂謡に、鄙
て、ふつまはこと〳〵の、意なるをくるべし○の都路とある
も、都にのぼる、路といふ事也、鄙の都といふことは、
なきこと也、學者、此心をも等閑に、見過したりや

頭註 勾引　杜甫　舟前落花詩　影遭碧水潜　勾引　韋莊詩　勾引
凭花枝笑牆

頭註 事ハ濁音故ニ誤トスベシ

頭註 都一字ならはみやことよむへし三字をみやことといかてよまん

頭註 あまさかる鄙の都とよめりしことを難ずれどよみ人の心をしらざる也くはしく耳風集に云り

(一)別白可怜之意不能默止聊述四詠唯擬睡覺　日白改准唯改　三十五丁ウ

芳理夫久路等利安宜麻敵爾於吉可邊佐倍波於能等
母於能夜宇良巳都藝多利

[illegible]美名也は（の誤か）宮人のさけたるふくろおのれかけた
りいにしへは袋をさけしと見えたり

○契沖云、四の句、おのれがとも○千蔭云可邊佐倍波、うらが
おのれとも、いふよし也とぞ　へし、見れば也、佐邊は、
せを延べたる詞也、於能等母は、能と母と、相かよへば、おも
てもと、いふならん、心は、針袋をとりあげて、前に置て、う
らがへし見れば、裏　さて、よくみれば、よろしからぬ、○歌
も綴てわろしと云々○袋かなといへるなるべしと云り　の
意、解がたし　○芳理に晴をかねて、はれがましく、よき袋と見
今按ずるに　えしに、とりあげよく見れば、裏もつぎ〳〵に
て、よからぬと、○於能等母於能夜等を、良とよむべし、お
さみせしにや　のれよと、
いふ意と聞えたり、是を家持より、賜られし○他より到來せし
意にときしは、あやまりなるべし、今按に○に、よからざる
故、口すさみに、よまれしを、家持○たはれごとにも、家持よ
に見せんとてかきおくりしなるべし○り、おくり給はど、かく
はよみが○依て、おのらもおのれ、かゝる、
たきなり○あしきをとあざけりし、なるべし

△次の哥　應婢都都氣奈我良衍字都一字○此袋を、帶に付て、さとごとに、これ見よが
ほ、しながらにてらしあるけど、みとがむ○此歌にて、袋のよ
る人もなしと也、褒る人も、なしの意也○ろしからぬといふ
こと、明　猶後按○三首　布佐倍之爾註云古事記に、これは
らけし　○目　ふさはず、こもふさは
す、宜のうらにて、よろしからぬといふ也、源氏物語にも、ふ
さはしからずと、いふ見えて、不祥と、註あり、されは、此ふ
さへしにゆかなは、幸を得に、ゆかんといふ也、是は、東國の
任を、のぞめども、そのよしなきをよめりしならんといへり

○今按に佐部の約せ也布世、布須同、伏也、依て、布佐部は、
令に伏の儀、任國に下り、ふくさしめんとて行の意也、國お
さめにとよめりし○ふさはしからぬといふ時は、不レ伏にて、相
と、おなじこと也○當せぬ意故、よろしからぬこゝろに、はた
らくこ
とば也
文武紀云賜ニ諸王卿等袋様ニ針袋帶袋須理袋火打袋也

頭註 考るに針袋にはあらじ男子の帶に付へきよしなし針治の針
にもあらじ是は腰に付どうらんきんちやくのたくひにや旅
の具にすりありはりといふもありしにや

○天平勝寶二年正月二日於國廳給饗諸郡司等宴歌
一首　三十七丁ウ
安之比奇能夜麻能許奴禮能保與等里天可射之都良
久波知等世保久等曾
○許奴禮は○保與は和名抄寄生一名寓生和名夜止里木一名保夜保與同○契沖
木末也
はツタ蘿なりといひしは、いまだ保夜を、見ずして、しひていひしもの也　○やどり木は、老木な
どに、こと木の種の生ずるを、やどり木といふなり○て、保夜は、老木の木ノ情の發するに
春の木のめの、出るごとく、幾ばく、むらがりて、青き葉に○花の、あらはるゝに、似たる
もあらずもえ出るをほやといふ○を以穂よとも、ほやともいふ、穂を延たる
ことば也○依て、めでたき穂よとりてとは、よめりけん、かざしつらくはかざしつる也○和名抄、寄木の、

一名保夜とせしは非也、此頃、都人なれば、見ずしてかゝれけん　○此外にも、たが
ふこと見えたり○保久等曾保久の約布、保吉の約比にて、保は、秀の字の意也、火の
もゆる勢ひにて、あらはるゝをいふにて、祝ことば也、契
沖、是らのことは、見られけむを、等閑にて、心よせさりしにやされば、机の上の考は、覺束なし　○信濃方
言保與と　○歌によみしは是一首にや、まへにむ
いふ　ろほきに見えしかさもわすれし也

萬葉集十九殘考

○攀折堅香子草花歌一首　九丁
物部能八十乃𡢳嬬等之挹亂寺井之於乃堅香子之花
○仙覺云此歌、古點に、かたかしの花と、點せり　○春暖草也、
○かたかごの花と、よむべし、又ゐのしりとも　花の色、紫
也と　○眞淵云、越の國にては、かたご、奧州にて、かたくりと
云り　○いへり、根は百合のごとく、葉は一葉さし出て、花も、
一ふとたてさけり、されど六帖によれば、かたかしといふ木あ
るか、さらばはしことばに、草とあるは後に、誤入たるか云々
○千蔭云堅香子を、音訓まぜて、かたかしと、よむべきよしな
しとて、必かたかご也、彼かたご、かたくりなど、いへる物
也、越の國にて、かたざかたくり　○六帖木の部ものゝふ
は、かたごゆりの約たる言也云々　の、やその
をとめがふみどよむ、寺○かく木の部に、くはへし○和名抄
井のうへのかたかしの花○はあやまりしなるべし　○本草云挼
王一名黄䅣　和名　○異名分　下採　かたかこの花　釋名　藕旱
沼波利久佐　豆知波利　類集　萬葉十九に出
和名土針　すは○土針は、ぬばり草にて、卷七に○すはり草、
ら草ともいふ　わがやどに、生る土針とよめり　又すべりひ、
うともいひて、○古書の誤りにやあらく○又旱藕を、京にてか
旦採にあらず　○合すれば同しからず○たごゆりといふと也○
今按に、かたかこは、片向の訓にて、計を古にかよはせし也百合
の花のかたふきて咲に、よなだけれは、名におひしなるべし
○百合の花も、かたむきて、花咲と、○俗に、燈籠花といふ、
おなじければ、同じくいふか　色むらさき也、鳥べ野
などに、おほくさけり依て、　○於乃は、邊と同じ○挹亂水を酌な
寺井の邊と、よみけん　らばまが
ふとはよまじ、　○挹扼字似たり、挹は、トルともよめ○はし
按ずるに　ば、折みだすと、よまんかし○書に
攀折とあ○寺井といふによりて、くみまがふと、○右の説、か
ればなり○よみしにや、亂を、まがふとはよまじ○たかことい
ふぞ、よし○片向し、籠のごとくなる、花
とすべき　故かたかごと名付しなるしべ

頭註 根は百合の如くといふにあらす花のゆりの如くかたふきてさく故にいふべし

頭註 土針はかたかことはことにたがふ也見ずしていへる註

○二十四日應立夏四月節也因此二十三日之暮忽思
霍公曉喧聲作歌二首　十七丁
△霍公鳥來鳴響者草等良牟花橘乎屋戸爾波不殖而
○はし書に、立夏の節といへ○橘は夏くれば、花咲故、夏來
りしによて、よめりし也　○しとしらるゝ、其立花は、殖ず
しても、ほとゝぎすの、來鳴どよまば夏としりて、早苗を、と
り植んと也、時きぬとて草とらんは、早草をいふ也、さなへ草
ともいふ　○依て、はし書を、くはしく書○宣長云　草とるとは、
ふ也　○たり、時節をことわりし也　すべて、鳥の木の枝
に、とまるをいひて、これも、ほとゝぎすの、とまるべき○鳥
、橘を、宿に殖ん物を、うゑずして今くゆる意なりと云々　の
木の枝にとまるを、草とると、○卷十、月夜よみ、鳴ほとゝぎ
よめりしこと集中には見えず　すみまくほり、わが草とれ

り見ん人○此わが草とれるをも○月のあきらけき夜、時鳥に、
もかも　ほとゝぎすとせんか　すゝめられて、夜なべに草と
るを、見む人もがもと、よめりしは、人の見るなら○月のあざ
ば農業に、怠りしと、あざけられんと、はづる意也○やかなれ
ば、時鳥の來鳴をも、見まほしく立出たるを、草とれり○橘は
と、見ん人もおもはんかと、いふ意也、よく味ふべし○植さ
れとも時鳥の來鳴に夏と知て
早苗草とらんとよめりし也

頭註　莊公進農の意なり往古暦いまだなかりし頃には花鳥などの
時節を告るをもてたがやしけりと也

○追和筑紫太宰之時春苑梅歌一首　十七丁ウ
春裏之樂終者梅花手折乎伎都追遊爾可有
○宣長曰乎は、毛の誤、伎は致の誤、○今按に乎は、本
毛致とし、手折もちつゝ、とよめり　のあやまりか　手折
本伎都追とよまんか、字の似○手折に、持は、こもりぬれば
たれば、誤しにや　折もて、ほぎつゝなるべし
○遊爾可有　爾安の約奈也、さ○乎伎の乎假名たかひ也置は
てかくよむべしや○おき也さハは手折をきとは
いはじ○今按乎は本の誤かた
かし　をりほきつゝにや
○講師僧惠行　廿四丁
皇祖神之遠御代三世波射布折酒飲等伊布曾此保寶
我之波

○宣長云、布折は、折布を上下に誤れるか、それも猶、酒をの
むに、しくといふ詞は、いかゞなれば、布は、誤字ならんか、
二の句の、波といふことも、たしかならねば、
波は三の句に付て猶あやまり字あらんと云　、今按に波射布
射波布折にて上下せしにや、此三字を祝のかり字として、い　折は
はふ折といふことにや、祝ふ折節さけのむに用ゆる
の儀○さらば上を、遠き御代みよ〳〵○初句も、すめ神のと
か　とかさねてよむべかりけり　よむべき、書さま
也、かく書て、すめろぎ○和名抄　葉椀　久保天○むかしは葉
とよまんも、いかゞし　漢語抄　葉手　比良天○にもりしこ
と、かくて
いちじるし

頭註　柏は神供ヲ盛ニ用レハ祝折ト云ヘシ

○酒肴賜入唐使御歌反歌　四十二丁ウ
四舶早還來等白香著朕裳裙爾鎭而將待
○眞淵云白香を、木綿かつらの、ことゝして著は、御ぐしに、
著る意を以、白香つけとのたまへり、其白香を、御齋迄、垂
ておはしましつゝ、齋てまたんと、の給ふ意也、鎭は、し○かく
ごゝと訓て、垂も同語なれば、鎭の字をかりしと云々　でも
白香のことは、わ○宣長云、大平の考に集中三所に、白香と書
きがたし、猶後按○て、白髮とかけるはなし、されば白髮の意
にはあらじ、白紙の意なるべし、奈良の頃より、木綿にとりそ
へて、白紙をも、付かけきたりけん、されば、白紙をそふべき
か、白紙つけ、木綿付と、いふ意なるべし、さて○紙は、いに
、此御歌の意は、木綿ならで、白紙なるべしとぞ　しへなかり

しこと、明らけし、みちのく紙など源氏物語などに見えて、今に京になり、化野紙屋川といふ所にて、すき出しといへり、今、かい川といふ〇そのかみ唐紙わたりしを用ひしよし、見えたり所なりとぞ〇奈良の時代に、紙漉しことありや、いまだきかず〇されば、しひて、紙と〇にて、手向する也、紙を奉ること、いへりしもいかゞし〇今按に麻木綿は、神御衣を奉る意、何のためともすべから〇後世、紙を漉出しより、麻木綿にかざれば、紙にはあらじ〇へて、奉れるは、費を、いとひてかへしか、甚しき非禮とや、いはん、さて、白香は麻也、志呂の約、曾也、曾は麻也、香は、吉にて、そへたることばにて、意はなし、素を、曾と〇さて此白香より轉じて、白髮といふに、よみ白とよむ意也〇後世もてなしたるは、童女髮置とて、祝ふに、麻を、白髮のごとくたれ、〇幣帛といふも、帛は緒也と餝を付て、めで度いはふ也　あれば、麻にてせしを、おもふべし、幣は、神體にして、神御衣〇依て紙にかへしは、あを、すせ奉れるかたちに幣をきるなり〇たらざれど、寶費なれば、されし侍りけん、それをいとひながら、士雛に錦金銀〇は紙の類をもて、餝るは、うらうへの、誤りとやいひ侍らん後世に、漉ならひし故、和訓なし、書翰のカムの、ムを、美に通はして、加美といふなり、依て、紙といふ說はとるべからじか〇和訓なければ、いにしへ〇和名抄　紙和名加し〇たかりしことあきらけし〇美是加牟の音也

頭註 白幣の白にて麻なるを知べし

註また〳〵此白がを難義せし也

頭註 如白髮麻を冠にかけたれしつまりまつとよみ給ふ也白髮とめでらしくあそはせし也

頭註 延喜式神貢ニ紙ヲ奉事見タレトモ幣ニセシ事ハナシ

頭註 非禮なること是より、おこりしか、錢は、非人迄も、手にふれて、けがらはしき物を、神に初ほとて、投打こと、甚しき非禮也、神前につぶて投打がごとし、其つぶての、澤山に集るを、よろこびて、非禮は、とがめざる、いとかたはらいたし

〇少納言大伴宿禰家持　四十四丁ウ

△天地爾足之照而吾大皇之伎座婆可母樂伎小里
（アメツチニ、タラシテラシテ、ワガオホギミノ、シキイマサバカモ、タノシキヲサト）

〇四の句　之伎座婆可母〇とよめりし〇千蔭云　しきますは、〇をよしとす〇橘の宅に、幸ませるを、いふなるべし、小里は、をはつせなど〇に按　里は、重の、頭うの、をにて、此宅のことをいふと也　〇ぬて、里誤りしか

〇小は少也、すこしきことも、かさなり〇小重を　つめぬれば、つもるといふ、意をもて

とよまんかしひ樂伎小重（タノシキヲツメ）とよめば、歌のしらべは〇もとの點ごとといふべし樂伎小重よし、されどもいかゞ〇よからぬ

故にしひていふ、〇すこしきよりつもるよしやあしや　といふ意なるべし

萬葉集二十殘考終

○天平勝寶七歲乙未二月相替遣筑紫諸國防人等
歌　十五丁ウ
△可之古伎夜美許等加我布理阿須由利也加曳我伊牟
多禰乎伊牟奈之爾志弖
○眞淵云　いんたねは、共をむたといへば、加えといふ所の、吾
妹と夜の共ねし物を、あすより、妹なしに行んの意也とぞ
○今按に此歌のこゝろは、忌なしにして、といはん、　○加曳
上は序也、道中忌事なく、無事を、のみする也
は加部の誤り、聞書時、同じひゞき　○榧子　和名抄、本草云、
故に、部を、曳とあやまりし物也　柏實、柏、音、白
一名　榧子榧音、和　○此榧の子、大木には、楽螺ほどになりぬ、
名加倍　其實の皮、栗色して、皮あつし、くだきて
内なる肉を喰す、いとか　○是をいみじとほめて、加倍が、いみ
うばし、皮とも三重也　じきたねと、云を忌とつゞけたり
○よし野かやとい　○論語曰　歳寒而後知松柏後乎凋とある柏
ふとは、別也　○は五葉の松也、今かしはといふは、槲の字
也と和名抄に見えたり、　○か○色かへぬ、かへの葉のみぞ、秋
世々誤りしかど、六帖　へ○なれど、紅葉すること、ならは
ざりける、松柏の、ときはにゝべき心○とよめりし故にたがふ
かは、みだれん戀も、あやなかりけり○べからじを、など誤り
けん、五葉に數品あり、柏は、葉長くして松にか○防人歌數首
はらざれど、五葉にて、榧子甚大也翁殖置たりあれども、
妹をいんとはねしは見えざる也、されば右いひしごくと、榧子
の、いみじきを、忌にいひかけて、道中いみなく、無事にゆか
むと、よめ　○記紀ともに柏とよみし
りしなり　故、わかずなりになり

頭註　松柏は本草にめてたき木なりと見えたれは、みことのりを
かゝふりて旅立を祝してよめりし也

頭註　本草甘露條云　王者敬養老日老則降於松柏尊賢容衆則降竹
葦皆瑞氣所感也
尊賢といふにいみしき心あるをもて也

頭註　まへに湯種まきとよめりし湯も忌とおなしこと也

頭註　五葉の松に數品あり、柏は葉松よりも長し外よりみれば葉
の白くみゆる時節ある也

○防人山名部文部眞麿
△等伎騰吉乃波奈波佐家登母奈爾須禮曾波波登布波
奈乃佐吉低己受祁牟
○略解云、花はさけどもと、いふをうけて、又花といへ○さきて
るにて、意は、只母はなど見え來らざらむといふ也　こずけ
んは、咲來らざらんの意也、此けむのことばゝ、よけん、あし
けん、などいふけむにて、よけんは、よからん、あしけむは、
あしか　○もとごとに、花はさけども、なにゝかも、うつくし妹
らむ　○が、まださきでこぬ、此歌のごとく、低は泥の誤、咲
出の意也と云々、一本低を、泥とす、今按に、只母は、など見
え來らざらむの、意也とあれど防人の任國へ、母の行事なけれ

ばゝさに○和名　朱櫻和名波々加、是を、母とい　○婦人は、境
はあらじ○抄　ふ花と、よめりしもの也　を越えずと
もいへば、遠國へ、行
よしなし、何待べき　○佐吉低己受祁牟は、母といふ花の
　　　　　　　　　　　名なつかしくおも
ふになどさきい○花の木に、對したるを、母の
でこぬとよめり○くへきやうにおもふはわろし

○玉作部廣目　二十一丁

△和呂多比波多比等於米保等己比爾志弖古米知夜須
良牟和可美可奈志母

○眞淵云、和呂○於米保等は、お○古米知の古は、加保の約、知
多比は吾旅也○もへども也　○は、毛弖を約、轉ぜるにて顔
面、かほもち○夜須良牟は○おもてのおは、連言○又おも持と
ならんと云々　痩ぬらん也○故に、はぶける也　いふ事、物
語に見ゆれば、顔持にや、意は、旅をおもふに、只旅のみなら
ず、故郷を戀る事二心に、悲を重ねて、顔色の、痩やすらむと
いふならむ○ある人いはく、方言に、むつかしく、のべちゞめ
かと云り　○などはいふべからじ、たゞ、國ぶりに、いひつた
へなれしを、しかいへりし○今按に古米知夜は、子待やすらん
は、中〳〵あたらじかし　に、古米知夜なるべし、旅にし
ては妻子を、おもふ情か、專らにて、集皆同じ、○米未似たれば
子待といふに、妻の事は、白らこもれる也　未知とすれば
やすらなれど、米といふが、方言なるべけ
れば、もとのまゝによむこそ、よからめ

○助丁占部廣方

△多知波奈乃之多布久可是乃可具波志伎都久波能夜
麻乎古比須安良米可毛

○千蔭云、初二句は、たゞ、かく○しか解ては、梅の花として
ばしきの序なりといへりし也　も香くはしと、つゞくなり
○今按に立花の香に、しらぬむかしを、忍ぶとよめるにより、
其橘の、下吹風の香くはしさに、昔を忍ぶ如く、我は、故郷
を、しのぶ○下吹風の、如くといふ○千蔭云、集中、かぐばし
とよめり　○を、そへてとくべし　き君、かぐばしき親など、
かふらせて、かくよめりしごとく、つくば山にそへて、家人を
戀ふ心をふくめりとぞ、今按に香ぐはしきは、褒詞に、いへる
なるべし、されど、山を○筑波山は、かげはあれども、とよみ
香ぐはしと褒めし例なし○て、かげくはしきつくば山とかぶら
せしもの也、香ぐはしを、かぐくはしと○さて、筑波山は、故
はたらかせし歌のあやたるを、思ふべし○鄕の山なれば、山を
戀しくおもふと、よめりしは、
故郷を戀しく思ふこと也

○倭文部可良麿　廿七丁ウ

此歌は、長歌ともなし、さるを、長歌の心して、註せしかど、
具定せず、是は三四首を、一筆に、書つゞけしなるべしとて、
わかちぬ

△阿志加良能美佐可多麻波理可閇理美須阿例波久江
由久

かく句をきりて、首尾すべし、○多䕸波理は、山坂を、めぐり結句を略せしは、混本歌にや　〳〵て越行也、越行を、くえ行と云り

頭註　越行をくえ行とよみしは方言也

〵阿良志乎母多志夜波婆可流不破乃世伎久江弖和波由久

是もかくて一首に首尾すべし

○阿良志乎は、猛雄にて、人に　○其勇氣なるあらしをも、不破すぐれて、勇氣なるをいふ　の關路の、難所には、なづみはゞかるをみことのりをうけ　（カ）立也、方言に、たして、越行は、やすしとなり　○たしやは、立也、方言に、たしといふべしくえ行は、まへに同じ

〵牟麻能都米都久志能佐伎爾知麻利爲弖阿例波伊波々牟

是も、首尾すべし○知䕸利爲弖は、防人の、大勢あつまりゐて、無事を祝ふと也、あちまりの略也

△母呂母呂波佐祁久等麻乎須可閉利久麻弖爾

是はまた、一句不足なり　○是は、片歌といふ躰にや　○今按に、此歌の句を、各三首にくはへぬれば、三十一字となれり

△あしがらの、みさかたまはり、もろ〳〵は、かへり見ずして、あれはくえゆく

もろ〳〵を、くはへぬれば、歌の意も、あきらけく、めでたし

△あらしをも、たしやはゞかる、ふはの關、くえてわはゆく、さけくとまをす

さけくとまをすを、くはへぬれば、よき歌なるべし

△むまのつめ、つくしのさきに、ちまりゐて、あれはいはゝん、かへりくまでに

かへりくまでを、くはへぬれば、歌もよろしく、いとめでたし

長歌としては、句つゞきも、意もわきがたければ、まづかく、わかちぬ○一首ならぬ事は、東海道と、美濃路のよみさま、一度にあらじときこゆ、兩度も、筑紫に、ゆきしなるべし、歌の意、よく味ふべし　○馬は、ウマなるを、ムマとよみしも方言、ウムを、　○略解にも、しらべ手づゝなりとて、註せざりし混ずるにや　を、しひてかくわかちたり、よからずばはふくべし○是は、古今註せし人なし、されば、かくいひしも、しひごとなるべし、後のうま人考給ふべし

頭註　此三句幷てくはゝれは、三首を一首の長歌のごとく書しことおきらけし故人此歌は解得ざりしもうべ也」さけくはききく也

頭註　集中馬　ムマとよみしも有

○那須上丁大伴部廣成　三十丁

〵布多富我美阿志氣比等奈里阿多由麻比我須流等伎

爾佐伎母里爾佐洲
〇眞淵云　なら山のこのてかしはの、〇我美は　〇阿多由麻比は
兩面とよめりし、此兩面におなじ　神也　あたふ幣なる
べし〇神に幣を捧て祈つたれども、其神二面にて、吾幣をば
よくうけて、吾を、防人にさしつるよと、にくみよめる也　〇
神をにくみしか、さしし人をにくむか、　〇宣長云兩小腹也、ほ
神をさみし、兩面とも申さじかし　がみといふは、股上
の意也、兩とも、百とも、ほともいふ、五百などのごとし、あ
たゆまひは、痈病也、和名抄、痈（病）、阿太波良是也、さて、三の
句上へうつして　〇ふたほがみ、あたやまひをする時に、防人に
心うべしと也　あつるよ、あしき人なりといふ也、此役を、
さしくる人　〇ある人、股上に、腫物發せしか、それのみなら
をにくむ也　ず、痈病を煩はゞ、其よし、司役まで、とゞけて、
養生すべし、又あてくる人を、　〇今按に　布多富我美は兩拜に
にくむべからじといへり　て、拜を、
をがむとよめり、こなたよりをがめば、こなたに　〇阿多由麻
より、かしこよりをがめば、かしこに付をいふ
は賄を、あたへぬれば、あたらぬ役なれど　〇賄せざれば、さ
比も、あてゝ、防人にさしぬと、にくむなり　〇ゝぬ故也、防人
に行は、徳分ある故、各
のぞむ役と、しられたり

頭註 神は非禮をうけずといへるには此註いかゝし

頭註 拜を保我美といふか方言なるべし

頭註 防人はつくしに下るか役也役付をいむとはいふべからし歌の本意にあらず

〇右中辨大伴宿禰家持　五十八丁
〽始春乃波都禰乃家布能多麻婆波伎手爾等流可良爾
由良久多麻能乎
〇註云　玉箒は、ゆらぐ玉の緒と、よめるから　〇今按に初子日
は、玉をもて、飾たること、しるしと云り　に、箒を賜り
て、宴さしめ給ふは、いかなるよしありと　〇子日なれば、小
も見えず、めでたき物とも、いひし例もなし　松を賜ふべし、
松は千歳、長壽のためし、玉壽といふ意にて、魂壽を、玉箒と
かよはして、しかいへりしにや、はき、ほぎ語のかよへるをも
て、な　〇小松のよく、箒に似たる故ならん、たゞめでたく　〇大
るべし　〇千歳を、いはふためしの、魂ほぎの意なるべし　〇和
山城攝津すべて此近國、箒草なし苕竹を用ゆ　〇ゆらぐ玉のをは
れば、箒を給ふべからし、猶考もあらんかし　〇命を、玉のをと
よめるがごとく、命ものぶ　〇天子、御手ふれ給ふことあらば、
心すといふ意と、聞えたり　〇箒に玉のかざりを付べし、よく味
ふべ　〇箒を賜はるに、王臣をめされ、宴し給ふことあた
し　らずと申べし、此外給ふげりしこと、なければ也

頭註 東海道名所圖會といふ書此頃板本にせしを見れば太平記の文をもて此歌をのせたり委く書たれとも此歌を見すして新古今集をもて書しはいさゝかおよほさゝるわさ也

頭註 しか寺の上人といふ名もなきをおもへはたれか作りしたるべしまた古歌をとるへしよしもなけれはあやし

〇續日本紀　聖武天皇。神龜。二年十一月。大納言正三位多治比眞人池守賜二靈壽杖并絁綿一

此靈壽と同じく。齡を壽ノ、をいふ。杖をつきて長壽すべしとて。給ふ也。是にて。右の玉箒は。魂壽なりとたしかにしるべし。靈壽の小松を給ふといふ事かくてしかとすべし

爾雅曰蔧王彗郭璞注曰王帚也似藜其樹可以掃彗江東呼レ之曰二落帚一又曰蔩馬帚二注曰似蓍可以爲掃彗云々

玉篇云　䓘　莫耕切菖草可レ爲レ帚

王帚誤二玉帚一

萬葉十六玉掃鎌天木香棗　詠歌

玉はゝきかりこかまゝろむろの木となつめかもとゝかきはかんため

此玉はゝきは草の帚也かりことあれは也

續日本紀九

神龜三年六月內裏生二玉來一勅令朝野道俗等作玉來詩賦　文人一百十二人上玉來詩賦　賜　祿有レ差

是ノ玉來不知似タレハ書添也

萬葉集殘考　大尾

萬葉集名物考

六册

萬葉集名物考 開題

萬葉集名物考は、六册から成つてゐて、第一册第二册は草類、第三册第四册は木類、第五册は鳥類、第六册は獸蟲魚貝類の考證である。本大系の底本は大阪府立圖書館の藏本であつて「七條文堂藏書」の舊藏印がある。

本書の著者は何人であらうか。底本には何等の記載もない。併し萬葉用字格の著者僧春登に同名の著書がある。同書は他の春登の著述と共に東京府府中大國魂神社（六所神社）に襲藏せられてゐる。が、この兩書は全く別人の手になつたと見なければならないやうである。主な異同點は左の通りである。

一、府中本の内題には「萬葉名物考」とあつて「集」字を缺く。

二、府中本には各卷の起首に「桑門春登撰」の五文字があるが、大阪本には無い。又府中本大阪本ともに序文があるが、その内容は全く之を異にしてゐる。

三、府中本は序文は平假名で本文は假片名であるが、大阪本は全部平假名である。

四、收載品目に於て

	府中本	大阪本
上草部	九十三種	百三十二種
中木部	五十八種	八十三種
下鳥部	三十八種	四十四種
獸部	九種	二十一種
蟲部	十種	十七種
魚部	十八種	十二種（他に貝類あり）

右の如き相違があり、その記述の順序なども全く異つてゐる。

五、府中本は引歌少く、且つその數句を擧示するに過ぎないが、大阪本は引歌も多く、且つ一首全部を引證するを常としてゐる。又引用書についても兩者間に大差がある。

古歌は其物を得てよみけるかゆゑに、たかふことなく、今詩歌ともに題をとりて物にわたらぬならはせとなりて、詠物をあやまる世とそなりき、古人は目のあたり見もし、きゝもせし㕝をよみけるなれは、實情ならさるはなし、今人のよめるは、詠物をめつなるものとも得知らぬなれは、詑りよめる事多し、されはかゝる事を古へにおとれるとは云なり、たとへは川津、朝顔の如し、此集によめると後の集によめると其名おなしくして物はことなり、そを知らては歌のこゝろ古へにおとりゆくゆゑんにして、かつ實情少くなりぬへきもとそかし

三鳥三木のこときを、三个の祕の事なりといふは、いと後の世のいつはり歌也、物は古へ今ことなることなけれとも、その名のみ呼かはりたるかおほかれは、今めの前に三鳥三木のたくひありといへとも、今その名たかひければ、皆人のえしらぬなりけり、さるをしひて求むへきことにあらねども、人皆のまとひけるものなれは、古へ人の眞心もてよみ出し歌の心にかなひて、それとおのれかおもへるをは云出て、後のかうかへの便りとなしてん心さしを述るのみ

〇又古へありて、今は絕たるものもまれまれにはあなれと、鳥獸草木蟲魚のたくひは古今のわかちあるへからす、古へ今とことなるものは器物也、其別も日々に委しくなり來て、古へのかたを失へるもの多し、その中には用るに便のよからぬ器のたくひは、今は絕てなきものも少からすそ有ける

〇かきりある人の命をもて、かきりなき世のものをしらんとするは、いとかたきわさになん有ける、されと千萬のひとつをたにと思ひて、ふみ見る每にさるこゝろまひのものともかきぬきつゝ、寢て思ひ起て思ひ、思ひおもらてやます、これかれ考へあはして大かた是なんめりとおもふは、猶よく古への哥に文にこゝろみたるかひつけぬ、されとあまたの中なれは、よく古へにかなへり思ふもあれと、據なくて未たしと思ふも又少からす、後の見ん人よくたゝしてよ

〇世のうつり行につけつゝ、ものゝ名たかひければ、式なとを見るに、大御けに奉りけるものさへすたれて、今人の食されは、目の前にありなからそのものそともえしらぬか多かりける

○哥の心をも、此に引出せる限りは、皆解へきわさなるへけれと、詠物の趣に就ていはてえあらぬは、いさゝかいへれと、其余は先生の說き置たる注解ともにゆつりて、爰に出さす

萬葉集名物考目錄

草類一　五拾三種

五十三種

萬葉集名物考　草類一　五十三種

春菜　若菜

巻八 明日よりは春菜つまんとしめし野にきのふもけふも雪はふり管 山部赤人

巻十 國栖とちか春菜つむらん司馬の野のしは／＼君を思ふ此頃 作者未詳

巻十一 河上に洗ふ若菜の流れ來て妹かあたりの瀬にこそよらめ

集中にわかなの歌多けれと、皆春菜と書て若菜とかくはたゝ一首のみ也、古へより春菜は年を祝ふ時にてうしすゝめて、老の若かへる意にとれり、春されは先野に打出て若菜をつみ遊ふをたのしきわさとせり、土左日記にも、けふなれと若菜もつます春日野のと、遙におもひてさへよめり、眞淵云、若菜を正月七日の事とのみおもふは後の癖なり、すへて春の内の雜菜をいへり、古今集に、春の野に若菜つまんとこしものをちりかふはなに道はまとひぬと、花のちる頃によめるもても心得へし、云云七種の若菜のこと、兎角定まれる事あるにあらす、枕草子に、なゝくさの事をいひて、つめと猶みゝなくさこそつれなけれあまたし見れは菊も有けり、七種の名さためあらは、かくはよむまし、たゝ春の若草を色／＼つめる也、公事根源に、供若菜條に云、内藏寮、ならひに内膳司より、正月上子日、これを奉るなり、寛平年中より始れるにや、延喜十一年正月七日、後院より七種の若菜を供す、又天暦四年二月廿九日、女御安子の朝臣若菜を奉る由、李部王の記に見えたり、若菜を十二種供する事なとあるをもて見つへし、若菜は七種に限らす、正月七日にかきらさる事を、その七日に限れるは、漢藉荊楚歳時記に、正月七日俗以七種菜作羹食之人無萬病といふによれり

若草　春草、青草、新草、和草、稚草、和可久佐

巻十一 若草の新手枕を巻そめて夜をやへたてんにくゝあらなくに

巻七旋頭歌 春日すら田にたちつかる公はかなしも若草の嬬なき公

か田にたちつかる

巻十一 振別の髮を短み青草(ワカクサ)を髮にたくらん妹をしそおもふ 作者不知

十四 おもしろき野をはなやきそふるくさに新草(ワカクサ)交り生ひは生るかに

十六 いゆ鹿をつなく河邊の和草(ワカクサ)のみはわかきかへにさねしこらはも

巻三に(二)春草(ワカクサ)のましめつらしき云云、巻十に稚草(ワカクサ)の妻か手まかんと云々、巻十七におほ君の御ことかしこみをす國のことゝりもちて和可久佐のあゆひたづくり 下略、何れも皆義をもて若草とよめり、さて若草の妻とよめるは、春の若草の愛らしくうつくしまるゝを、夫婦にたとへたり、こは、日本紀に、弱草(ワカクサ)吾夫(アツマ)何怜(ハヤ)矣と有て、古者以二弱草一喩二夫婦(ノ)一故(カレ)以二弱草一爲レ夫(セ) 云々 と、あるにて知るへし

頭註 (二)巻一春草之茂生有霞立春日之霧流云々、巻三長歌 春艸(ハルクサ)之益目頬四寸久老云春艸八字のまゝによむへしと、別條トスへシ

(三)左和良妣

巻八 石走る垂見の上乃左和良妣のもえ出る春に成にけるかも 志貴皇子

和名抄、薇蕨 和名 和良比 とあるは誤れり、詩經に、陟二彼南山一言采二其蕨一云云、注に、蕨鼈也、初生無レ葉時可レ食、亦感二時物之變一也とあり、また、陟彼南山言采二其薇一云云、注に、薇似レ蕨而差大、有レ芒而味苦、山間人食レ之、謂二之迷蕨一とありて、おのつから別なり、薇はせんまい、蕨はわらひ也、春早くもえ出て、拳(コブシ)の如くなるを、さわらひと 淺ア サノ意、早苗早淺 云、萌ノ意也 是を訓蒙字會に、拳頭菜と名付たり、古今六帖に、三芳野の山の霞をけさ見れはわらひのもゆる烟なりけり、蕨を藁火にとりなせり、かくさまによめるも多し

頭註 (三)ワラノ反ワニシテ輪ナリ、ビハマキノ反ミナルヲ、マ行ハハ行ニ移テ、濁ノ例ニテ、ビト云、蕨ハ輪ニ巻草ト云名ナリ

(二)堅香子草

攀折堅香子草花歌一首

十九 物部(モノヽフ)の八十の媙嬬(ヲトメ)か挹亂(クミマカフ)寺井のうへの堅香子(カタカゴ)の花 作者不知

ものゝふは枕詞、八十のをとめは數多の女をいふ、挹は、字書、一入切音揖酌也と有、寺井はたゝ寺の井か、又地名か、くみまかふは、數多の女の汲むとて往かふさまを

いふ、六帖に、木の部に、もの〻ふのやそをとめらかふみとよむてらゐのうへのかたかしの花、(二)とて載たり、仙覺抄云、此歌の落句、古點にかたかしの花と點せり、是をかたかこの花とよむへし云云、かたかご、又はゐのしりといふ、春花さく草なり、其花の色は紫也といへり、根は百合の如く、葉たゝ一葉さし出て、花も又一もと立てすみれの如く薄紫也、是か、されと、六帖によれは、右にはあらて、かたかしといふ木あるか、さらは、端書に草と有は後に誤て入たるか、おほつかなしといはれき、千蔭按に、堅香子を、音訓交へてかたかしとよむへき様なれは、必かたかごなりといへり、かたかごは南部にてかたくり、越にてかたこゆり、又かたゆりとも云、又かたゆりとも云、此草寒を喜ゆへに、北地にあるものは、苗ことのみよふ所も有、春のはしめ早く花さくゆへ、はつの形大なり、葉萎蕤(アマトコロ)に似て厚く、若根のものはたゝ一葉也、年久しきものは二葉となる、二葉のものは、兩葉のあひたに莖立出て花さく、根は葱(ネギ)に似て白し、根をとり粉となし餅に製して食ふを、かたこもちと云、本草山慈姑の條に、車前葉、山慈姑といふもの、即此かたかこにあたれり

頭註 (一)梯云

〇康頼ノ和名本草ニ、ヱヌノシリサシ、一名カタカゴ、紫色ニテツ、ジニ似タリ、六帖ニハ、木部ニ入レテ、カタカシト訓メリ、木トモ艸トモ弁ヘカタシ

(二)新選六帖、妹かくむ寺井のうへのかたかしの花咲ほとに春そなりぬる衣笠内大臣

同、小車のもろわにかくるかたかしのいつれもつよき人心かな知家

同、人心なへて思へはかたかしの花はひらくる時も有けり光俊

現在六帖、たれか見ん身をおく山にとしふともよにあふことのかたかしの花爲家

(一)莵芽子

詠煙

巻十 春日野に烟たつ見ゆをとめらか春野の莵芽子つみてにらしも 作者不知

巻二 妻もあらは採てたけまし佐美の山野の上の宇波疑過にけらすや

千蔭云、うはぎは內膳式に蒿とあり、又和名抄に、莪蒿和名於八木、俗によめかはきといふもの也といふは、委しからす、按に、莪蒿は陸疏云、莪蒿一名蘿蒿、葉似青蒿而細、

四月開白花、類ニ茼蒿一とあるものにして、よめかはきとは別也、今俗に、ぎんかふらひといふものにあたれり、卽茼蒿の類にて、葉細く絲の如く切れて、一重の菊の如くなる花咲、色白し、こはよめかはきの如くおのつから野に生るものにあらす、よめかはきは俗によめなといふものにして、救荒本草にいはゆる雞兒腸なり、今も春のはしめつかたつみて食ふ、何處にも多し、秋になれはうす紫の花咲て、菊に似たり、故に俗にきく菜とも野きくともよへり、萬葉の莵芽子は齊頭蒿也(三)

頭註　(二)六帖　里人やおはきつむらん三笠山春日の原の春のうらゝに　衣笠内大臣
同　けふは又雪まのおはきつみませて野への若菜の數やそふらん　信實
(三)出雲風土記に云、附島有ニ椿松薺頭蒿茅都波一、其薺頭蒿者、正月元日生長六寸、この薺頭蒿といへるもの、卽うはきにて、莵芽子とよめるものなるへし、本草云、牡蒿也、一名薺頭蒿、時珍曰、三四月生苗其葉扁而本狹末大、多有秃岐、嫩特可茹云云本綱
○莪蒿オハギ、和名萬葉ニウハキノウニ兎ヲカケルニ依テ、仙覺抄ニウサキノ好ミテくふ物といへり、まことにや、いまたしらす

芹(ホ)

天平元年斑田之時、使葛城王從ニ山背國ニ贈ニ薩觀命婦等所ニ歌一首、副ニ芹子褁ニ

巻二十　茜さすひるはたゝびてぬは玉のよるのいとまにつめる芹これ

　　薩妙觀命婦報贈歌一首

同　丈良雄とおもへるものをたちはきてかにはの田ゐに芹そつみける

さて先のたゝびては賜レ田而也、畫は田を賜ふ事にいとまなきゆへに、夜つみたる芹也と、自ら勞をいへり、かへしは丈夫の太刀佩なから賤か業するをいひて、芹つみおこせたる勞をめつる心を含めり、本草に陸に生るものを菫といひ、水に生るを水蘄といへと、ともに形はおなし、陸のものは根短く、水中のものは根長し、山城の宇治の芹は、根いと長くて味ひもよろしとて、莖葉を切捨て根のみを賞する也、それゆへ後の歌にはもはら根せりとよめり

頭註　(ホ)一說ニ悪具トハ芹ヲ云トいへと、六帖ニハ芹ノ外ニ別ニゑ具ヲアケタリ、俊賴朝臣ハ、若菜ヲ仲實朝臣カ許ヘ遣ストテよめる歌
をつみ川うきつにはゆるゑこのうれをつみしなへてもそこのみためそかへし

心さしふかきみたにゝつみためていしみゆすりてあらふ穪せりか、此歌はゑくをゑことよめり、くしとこと音相通スレハ、同物也、反歌ハ芹トヨメレリ、是ニ依レハゑくト芹ト同物トセシナリ
さていしみゆすりてト云、いしみは笭箵、籮の類にてやあらん、今俗ニ土をスレル籮ヲツチミト云ヘハいしみハ石ヲ入レル籮ノ類ナルヘシ、ゆすりてハユリ洗フヲ云ヘリ
晋張翰因秋風起思呉中蓴羹鱸魚膾ト云ヘリ

（七）惠具

巻十 君かため山田の澤に恵具つむと雪けの水に裳の裾ぬれぬ 作者不知

十一 足檜きの山澤回具をつみにゆかん日たにもあはん母は責とも 同

千蔭云、恵ぐは東國にては與其といひ、土左人はゑぐと云へり、葉は藺に似て小さく、根は白く小さき芋有て、味少しゑぐし、俗黒くわゐと云ものゝ類なりとぞ、後の集によめる義みな芹と聞えたり（ゑくと芹とは別物ゆゑに六帖ニハ芹ノ外ノ題ニゑぐヲアケタリ、又夫木集ニハ六帖ノ歌雑ニアリ）、都人の若菜つむ如く、雪氷とけぬる頃、つまんと野澤に出るとなり、かゝれは黒くわゐの別種のものと見ゆれと、さるものはいまた見す、黒くわゐは本艸に、烏芋とあり、根の味ひゑくからす、かつ雪解の頃に葉あらされは、つむへきものならす、烏芋を播磨にてはいごといひ、阿波にてはごやといへは、東國にてよごといふ名に近し、猶種類のものあるにや考へし

頭註（七）下學集蓴菜トアリ、按惠具ヲ蓴菜ト云説、萬葉ノ歌ニヨク叶ヘリ、摘ムトイヘハ蓴菜ヲ云ニ近シ、又雪解ノ比新芽ヲ出ス也、地ニヨリテハ冬ヨリモ出スモノナリ、又按、巻七ニ蓴ヲ浮蓴トヨメルウタアレバ、別物カ、一物ニメ二名ナル事モ例アルカ、考ヘシ、烏芋ト云説ハ、摘ト云ニ叶ハス、蓴ハ澤ニモ池ニモアルモノナレハ叶ヘリト云ンカ、別記に云、惠具を東國にては與其といひ、近江遠江越前なとにては其和藺といへり、土左の國にてはやがて惠具といふといへり、其土左人のいへらく、葉は藺に似て小さく、内空くてやはらか也、且赤黒なるもありて葉の本を包めり、そを取されは根は白く小き芋にて味少しゑぐし、里人好て食ふと、是東にてよごといふ物と全く同し云云、近江の勢田の里邊に休らひしに、女の田草引に出るとて、兒に向ひて、けふはごわゐ採て來ん、なとなしく待たれよといへるを聞に、全く右の土左人のいひしか如し、又遠江にて、田夫のなす業の鈍きをそしりて、輩はごわゐを拾ひて、夜は夜田を鬪といへり、越前にても此語あり、かゝれは惠具和藺てふを本にて、歌には惠具とのみいひ、東には音通へはよごといひ、遠江なとにては、惠を畧き具と其を轉じて其和藺といふ也けり○後世人此ものをよくも尋ねすして、押はかりに惠具の若菜なといひ芹の類なといへるはいつものの

事ぞ。

葦附

十七　礪波郡雄神河作歌一首

(※)雄神河紅にほふをとめらし葦附（水松之類）とると瀨にたゝすらし

眞淵云、葦附は應神記御歌に、伽破摩多曳能比辭餓羅能（川派江ノ菱殼ノ）佐辭雞區辭羅珥（刺指雞不知）と有も、菱殼に角有て、さすものなれは也、されは今も、葦附は借字にて、足突の意にて、菱殼をいふなるへしといはれき、されとしかさためん證もなし、たゝ川に有て水松に似たるものを云へしと千蔭はいへり、按るに阿波の國に川もつくといふものあり、川の瀨、あるはいてゆの流なとには、いつこにもあり、其形水松に似て岐あり、長さ二三寸斗、海蘊の如くぬる〳〵として、川瀨のしからみ、又石杯に付て色青黑く苔に似たり、冬春の間いと多し、國人採て酢にひたして食ふに、其味ひ賞すへし、是葦附なるへし、あしつきといふは、川邊の葦、あるはしからみ、あるは水底の石なとにつきて、生ひ出るものゆへ、越の國にてはしかよへるなるへし、又歌の注に（水松之類）とあるによれは、うたかふへくもあらしかし

頭註　(※)神名帳に、越中國礪波郡雄神社とあれは、雄神河はそこなるへし

(一)須美禮

卷八　春の野に須美禮つみにと來し我そ野をなつかしみ一夜ねにける（山部赤人）

すみれつむは衣摺ん料なるへし、和名抄菫菜(二)俗謂之菫葵（和名須美禮）とあり、又本艸に紫花地丁と見えたり、何處にもあり、あたゝかなる地にては正月より花咲、色紫にして濃きもうすきもあり、又白きはな咲も有、葉は長きもまとかなるも有、又蔓を引てはふものもあり、花黃なるも、猶此外種々のすみれあり、花も葉も所に隨ひてことなり

頭註　(三)○菫菜は、延喜式にも食菜の部に入たれは、中世までは食品なりし事しるし
○俗にすまひとり草とも云へり

(二)梯云……は墨斗ノ壺ニ似タル花ユヱ壺墨斗ト云ト云ヘリ俗ニすまひとり草ト云トモ云ヘリ本草ノ菫ハサラニ別物也ト或人云ヘリ

(※)都保須美禮

卷八　山振の咲たる野邊の都保須美禮此春の雨に盛なりけり（高田女王）

同 草花ぬく浅茅か原の都保須美禮今盛也わかこふらくははなのかたち含める如くなる花なれは、つぼすみれといふなるへし、と千蔭いへり、又ある説には、葉圓なるすみれあり、これを俗に駒の爪といふ、是なん此集によめる都保須美禮なるへしと、何れか定めかたし、是本草に云菫菜なり

頭註 (三)花の形木工のもてる墨斗に似たる狀故に云へりとも、葉圓くつはやかなる故に、圓菫といへるはあたらず、すみれてふ名は墨入と云へるによるへし

似兒草

十 蘆垣の中の似兒草(一)にこよかに我とゑまして人にしらゆな

十四 足柄の筥根のねろの爾古具佐の花妻なれや紐とかすねん

廿 秋風になひく河びの爾故具佐のにこよかにしもおもほゆる鴨

和名抄蔵蕤和名惠美久佐一云安末奈とへる是か、今われとゑましてといひ、天智記の歌に、むかつをにたてるせらか儞古彌拳骨といふも同し意なれは、似兒草、惠美久佐同し物ともすへし、本艸には萎蕤に作る、述異記曰、葳蕤草一名麗草、又呼爲(三)女草、江浙中呼爲娃草、美女曰娃、故以爲名とあり、萎蕤は山にも野にもあり、今俗にあまところと云、苗の高さ一二尺、莖うす紫にして、葉にしろみあり、莖は必す横へたわみて生ふ、二月の末つかた花咲、かたちは筒咲にして色しろく、すゑ五瓣に分れて、葉の間にうつむきて咲なり、此草のかたちなよらかにて、莖葉うちしなへて花さくを、をみなのにこよかなるにたとへてよめるなるへし、述異記の女草、麗草、娃草なといふ名にも、おのつからかなへりともいふへし

頭註 (一)天智天皇紀の猿か歌に、武舸都烏爾陀底屢制羅我儞古彌擧曾てふも同し意なれは、爾古草、惠美草同しものか、されとも共によくしらすと眞淵いへり、

梯ニ云ハ契沖云、にこ〳〵しき草にて、一種の名にあらすといへれと、十四の歌廿の歌杯を思へは、萩の異名也と或人いへるもすてかたし、

(二)爾故余漢は書紀温字をニコヨカと訓めり、こゝは女のものやはらかに笑める形を云也、俗に爾こ〳〵笑ふと云に同しく、其艸のニコヨカなるをいふにて、和名抄に惠美久佐と云に叶へり

(三)卷四、蒸被奈故也我下云、ナコヤカシタヲ古事記ニ爾故夜ガ

下トアリ、奈ト爾ト通ヘハ、心ハ柔之下也、サレハ爾故草は柔草ノ意ニテ、和ヤカナル草ヲ云ヘルニテ、蔵蕤ノタワミテ柔ナルヲ、カヨハキ女ノ有様ニ見ナシテ、述異記ニ女草、娃草ナトトモ云ヘルナルヘシ

三枝

巻十（一）春去ば先三枝の幸命在らは後にもあはんな戀そ吾妹

巻五憶良の長歌に、父母も表はなさかり三枝之中爾乎爾半登云云とあり、春はすへての草木の花咲ものなれは、春されは先咲といひくたして、さて三枝を幸命といはん序とせり、三枝は和名抄葛（和名佐木久佐日本紀私記云福草）草枝枝相値葉葉相當也とあり、又古今の序に、此殿はむへもとみけりさきくさの三つ葉よつ葉にとのつくりせり、さて三枝は、本幹枝又、みな三椏あるものゆへ、三枝の中とも、三つともいはん冠におきたる也、神祇令に孟夏（是白瑞香ヤ可考）三枝祭（四）義解云謂率川社ノ祭ヲ也以三枝ノ華ヲ飾ニ酒樽ニ祭故ニ曰三枝ト也、また姓氏錄に、顯宗天皇御世云云、三莖之草生ニ於宮庭ニ採以奉献仍負ニ姓三枝部造ヲ、又治部式に、福草（瑞草也朱草ノ別名也生ニ宗廟ノ中ニ）顯宗天皇御世諸氏賜ニ饗醼ヲ于レ時宮庭有ニ三莖草ヲ献レ之云々とあり、また五雜組に、廬山記を引て曰、一比丘晝寢ニ磐石上ニ夢中聞ニ花香酷烈ヲ及レ覺求得レ之、因名ニ睡香ト四方奇レ之、謂テ爲ニ花中祥瑞ト遂名ニ瑞香ト とあるは、即紫瑞香にして、今俗にちんてうげとよぶものにして、即三枝にあたれり、是をもて三枝にあたれりといふは、春されは先さき草とつゝけし如く、年の内よりふゝみて、春の初つかた咲出て、三月の末までもあれはなりけり、又三枝と書るは、此もの本幹枝又、みな三椏にして、葉々相當りて四時ともに榮えつるゆへ、幸と榮とをひとつにいふ事いにしへの常なり、又此枝を割て物をくゝるに、柔にしていと強きものなれは、語の本は割草の意にても有るへし、また瑞香は小木なり、然るを草といふは、彼の乎向草の草もおなし、此花を俗にちんてうけといふは、花の薫り沈香丁香に似たりとてしかよへりとそ、これに木の形はおなしくして、葉の邊の黄なるあり、（附箋この白瑞香の實胡椒の味に似て辛し依て俗に胡椒の木ともいふ小蕣ありといへり）それを花鏡に金邊瑞香と云、又深山には白き花咲あり、葉も花も略相似たり、枝も三椏なれとも花の香劣れり、また黄なる花咲あり、是を本艸に黄瑞香といふ、伊勢にて三ッ枝と

いひ、山城にては(三)三ツ股といふ、皆三枝の名にかなへり、此方は冬葉落て三極の形あらはに見ゆるかゆへに、三ツ枝、三ツ股の名を負ひしもの也、花は枝の端ことに集り下垂て咲、形相似て色黄なり、春の末花さき終りて新に葉を出す、此枝も柔にして折れす、皮を割て紙を作る、右の種々皆瑞香にして古へにいわゆる三枝なる事明らけし、貞淵古事記を引て、少由理草とする説はうけかたし

頭註（一）春にしなれは也しなの反さなり、

（二）三枝をサキクサと訓めるは義訓にして、其モノヲ三枝トカクハ、三ツノ枝ノ如此ナル物故ニ、其形ニ付テ三枝トカキツルナラン、必ス三極アルモノニ非レハ、シカ書クヘキ由ナシ、コレ三枝ノ中トツ、ケシモ、三ツアルモノナレハ、三ツアルノ中ト云ヘル也、

三枝トアルニ付テ考ルニ、今伊勢國人三ツ枝ト云ヒ、山城國ニテ三ツ股ト云ヘルモノアリ、其本艸ニ云黄瑞香ニ當レリ

サキクサヲサイクサト訓ムハキトイト音通ナリ

本綱、瑞香枝幹婆娑タリ、柔條厚葉四時不凋、冬春之交開レ花成レ簇、長三四分如丁香、狀有二黄白紫三色一、其高者三四尺有二數種一云々

和名抄

加賀國ノ郷名ニ三枝佐伊久佐又飛驒國ノ郷名ニ三枝佐以久佐トアルサイハサイハヒト云ノ音便ナリ

名義ハ割艸ノ意ナルヘシ、此モノ枝幹トモ柔ニシテ、割ケレハナリ、サテ其サキト云語ノ本ナルヲ、歌ニハ幸トトリナシテ、幸艸トヨメルナラン、幸ハサチサツト通ヒ、サツサヒト通ヘリ、佐都由美得物矢ト云モ、海山ノ幸アリテ物ヲ得ルイハレ也、又幸又福ヲ活語ニサキハヘ。サチハヒ、サキハフ、サキハヒト云ヘルヲ、サイハヒト云ヘルハ音便ナリ、我國人年ノ始ニ、粥杖、削掛等ニ用ル木ヲ幸木ト云、其木ハ、松、柳、桑、楸木ナトヲ用ヒテ、一種ニカキル名ニハ非ス、千習給而トハ幸給而也、神の人のことを幸なし給ふをいふ也、サテサチハヒノサヲハフキテチハヒトハ云ナリ

（三）三椏木高丈許、枝椏皆三叉而、開小黄花作房結香花、花色鵞黄、較瑞香稍長花、開無葉花、謝葉生枝極柔軟、多以蟠結上盆、香色俱無可取

（四）書記開化天皇卷、遷二都于春日之地一（春日此云二箇酒鵝一）是謂二率川宮一（率川此云二伊社箇波一）とあり、神名帳、大和國添上郡率川坐大神御子神社、率川阿波神社あり、此川は春日山より出て、猿澤ノ池の南を經て、子守町の南ノ方を西へ流るゝ、小川なる是也と云り、古事記傳ノ説

令義解神祇令ニ、孟夏三枝祭註ニ謂、率川社祭也、以二三枝華一飾二酒罇一祭ル故曰二三枝一也

(※)土針

卷七 吾屋戸におふる土針こゝろゆも思はぬ人の衣にすらゆな

和名抄本草云、王孫一名黄孫沼波利久佐此間云二乃波利一とあり、今俗に

つくはねそうと云もの深山にあり、是王孫なり、一根一莖にして、葉は百合の葉に似て薄く、竪筋あり、莖のはしに四枚葉を出して傘をはれるか如し、或は五六枚も葉を出すものあり、その中心に莖を出して花咲、はなひら四ひらにしてみとり也、內に黃色の長き蘂八筋あり、又別に短き蘂あり、是本草にいへる王孫なれとも、古へ土針といふもの是なるや、今土針といふ名のつたはらされは、わきまへかたし、又みつはあふひ、或はゑんれいさうと云あり、是も深山に生す、形相似てまろく、尖りたる葉を莖の端に三枚並ひて、傘の形をなす、花は三辧にして色はむらさき、又はうすへに、又は眞白なるもあり、花の中に円き實あり。根は小き塊ありて味ひ苦し、山人此根を乾し貯て食にやふられし時の藥とす、是等の草を云にや、猶考へし

頭註 (※)愚考蓋草カ、土針ハ借字ニテ土榛ト云心ナラン、蓋草ノ莖葉ヲ以テ染レハ、黃赤トナルヲ榛スリノ色ニ似タルカ故ニ、土榛ト云ナランカ、猶考ヘシ、王孫ニハ非ス

山振

巻二　山振の立よそひたる山清水酌にゆかめと道のしらなく

巻十　花咲て實はならねとも長きけにおもほゆるかも山振の花

巻十九　妹に似る草と見しより吾しめし野邊の山吹誰かたをりし

卷の十一にも山振之爾保敝流妹がともよめるは、山振の花の艶なるを妹に譬へていへり、さて山振の歌數多あれとも、山吹と書は二三首のみ也、振は布利の利と伎を通はしてかけり、今云山吹なり、漢名は花鏡に棣棠花とありて、花を賞することはから大和ともに同し、然るを和名抄には欵冬(※)和名夜不々木一云夜末布木萬葉集ニ云、山吹花と混雜せり、順もその頃訓の同しきがゆへ思ひひかめし也、これよりやゝふるき本艸倭名には、欵冬を九の卷草部中に、和名也末布々岐一名於保波とて出し、新選字鏡には椛の字を木部に山不支と訓て載たり云云、ふゞきといへる語意は、棣梁集の自注に釋たれは、こゝに贅せすと與清か說、欵冬は夜末不々木、山振は棣棠花とすへし、さて山振に八重とひと重とあり、單辧のものを金碗喜水と名つける事、汝南圃志に見えたり、千葉のものは、花はさけとも實な

結ふ事なし、即此集にもよみ後の歌にもよめり、單辨(ヒトヘ)のものは、稀に實を結ふことあり、そは統ての草木の花大かた然り、櫻、山茶(ツバキ)の類も、千葉のものは大かた實を結はさりけり

頭註 (*)款冬を夜末布木といへるは、今食用にするふきの自から山中に生ひたるを山ふきといへる歟

蔓菁(*)

詠行騰蔓菁食薦屋樑歌

卷十六 食薦(スコモ)しき蔓菁(アヲナニ)煮もて來(コ)樑(ウツハリ)に行騰(ムカハキ)かけて息(ヤスメ)此君

和名抄云、蕪菁、北人名ニ之蔓菁ト(和名阿乎奈)又云、蔓菁根毛詩云、采葑采菲(音斐)無ニ以下體ト(和名加布良)と有是なり、近江の國尾花川のものは根扁く、濶さ七八寸斗、色眞白く軟にして味ひよし、是を近江かぶらと云、此種を他邦にうゝれは味ひ劣れりとぞ、又津の國の天王寺村のかぶらは煮食ふによろしからす、乾かぶらとして味ひよろし、此外國々に名高きもの有、さて食薦(ヘツコモ)は、和名抄廚膳具に、食單(須古毛)食を供する所に敷く薦なるへし、又行縢は無加波岐、行騰也、字鏡に牟加波支と有

頭註 (*)應神天皇段歌に
やまかた(山方)にまける(所蒔)阿袁那(菘菜)母きび(吉備)ひと(人)ゝとも(共)にしつめは(採)たぬし(樂)くもあるか

附箋 春菜の條と合せ見るへし
延喜十一年正月七日進七種菜云々薺 はこべら 芹 青菜(アヲナ) 五行(ゴギヤウ)(又母子草と云) すゝしろ(大根也) 佛坐(又たひらこといひ或かはらけなと云)
青菜はかぶらをいへり拾芥抄にすゝなと訓す、是也

九久多知

卷十四 可美都氣野左野々九久多知折はやしあれはまたんゑ今年(トシ)來すとも

九久多知は、和名抄、莖(久々太知)蔓菁之苗也と有、本草莢蔞の條に、時珍云冬春採薹心爲レ茹と云ふもの即此集によめる九久多知也、今俗にくきたちと云、菜類の薹を折取は、枝を多く出し、花實をおほからしめんか爲なり、正字通に、摘レ心爲ニ菜茹ニ其旁心結レ實可レ搾レ油と云へり、くきたちを箭幹菜と名つくること、致富奇書に見えたり

茅草

卷十六 天(アメ)爾有(ナル)や神樂(サヽ)良(ラ)の小野に茅(チ)草(カヤ)苅(カリ)草(カヤ)苅婆(バ)可(カ)に鶉し立母

卷七 山高み夕日かくりぬ淺茅(アサチ)原(ハラ)のち見んためにしめゆはましを

十一　朝茅原の小野にしめゆふ空ことをいかなりといひて君をはまたん

詠黄葉

卷十　秋されはおく白露に吾門の淺茅かうら葉色付にけり

卷七　きみに似るくさと見しよりわかしめし野山の淺茅人なかりそね

(※)淺ちの秋色付を女に譬たり、女をさして君といへる例あり、

和名抄茅一名白羽草和名智、本草に白茅とあり、今もちがやとよぶ、茅に大小あり、其小を淺茅とよふ、葉二三寸許、大をちかやといふ、葉稍の葉に似たり、長さ二三尺に及ぶあり、又四五尺なるもあり、加夜の條に詳にす、根は細長くして色白し、地中をはひはひこりて生ひしける、何處にも甚多し、秋の末に至れはその葉紅にそめて見るにたえたり、卷の七にも、淺茅の秋色付を女に譬て、君に似る草と見しより我しめし野山の淺茅人な刈りそねとよめり、女をさして君といへる例かた／＼有、これか花をちはなと云、卽白茅なり、次條に委し

頭註 (※)眞葛はふ小野の淺茅をこゝろゆも人引かめやもわれなけなくに

淺茅は秋の末に紅に色付をもて、女に譬、卷八君に似る草と見しより我しめし山野の淺茅人なかりそねともよめり

茅花(一)

卷八　戲奴か爲吾手もすまに春の野に拔る茅花そ御食而肥座

紀女郎贈大伴宿禰家持歌

吾君に戲奴は戀らし給たる茅花を雖食いや痩にやす

大伴家持贈和歌

卷の八に茅花ぬく淺茅か原とよみたり、卽前の條に云茅か花なれば、ちはなと云へきを、つはなといふは、たらちねをたら常、あちきなきを小豆なくなと書る類ひ也、春苗の出る時、葉の中に花をつゝみてあり、それをぬきとりて嫩なる花を出して食ふ、本草にも小兒に益すと有、是を茅針一名茅筍と云、夏になれは穂を長くぬき出て白き繁あり、是卽茅花にして、所謂白茅也(三)、初秋の頃に至れは風にみたれてちるもの也、卷の八に穂積の皇子の御歌に、秋芽子は咲ぬべからし吾屋戸の淺茅か花のちりぬる見れはとあり、芽子の花咲頃ちれるものゆへにしかよめり

頭註 (二)梯云、夫木和歌抄、茅花為兼あをみたるしばふの色もすゝしきは茅花みたるゝ夏の夕くれ
(三)白茅根は、補中益氣の功ありといへは、此集にめしてこえませとよめるにあへり

加夜

四四十一 みちのくの眞野の加夜原遠けとも面かけにして見ゆとふものを（笠女郎）

巻十四 をかによせ我苅加夜の(六)左禰加夜のまことなこやはねろとへなかも

同 河上のねしろ多可我夜あやに／＼に左宿さ寐てこそことに出にしか

巻一 吾脊子はかり(借)ほ(廬)つくらす草なくは小松か下の草をからさね

同二 大名兒を彼方野邊に苅草の束の間もわかわすれめや

巻四 紅の淺葉の野らに苅草の束のあひたも吾を忘らすな（日並皇子）

佐禰加夜の左は發語にて根菅なり、それに寐をそへたり、なこやは巻四に蒸衾なこやかしたに寐たれともとあり、和なこやかに寐んといはんと、つねろとへなかもは、誠になこやかに寐んといはんと、つれなきを恨む也、又禰自路多可我夜は、根白高菅也、川の岸に生繁れるか、水高き時あらはれて、本のしろく見ゆるを根白とはいふならん、さてかとあと音かよへは、かやあやといふを重ねたる字也、さてかやとは屋を葺草を統ていふ名也、吾せ子はかりほつくらすかやなくは小松か下のかやをからさねとあるにて知るへし、此かやは假廬ふき又は筵作る料に苅れる也、今かるかやといふ草一種あれと、それにはあらすして、此かやは前に云茅草の大ひなるもの也、本草に秋花者爲レ菅とある是卽たかがや也、葉茅草に似て長たち四五尺はかりもあり、かりて舟の苫に作るゆへとまかやともいへり、又筵に作るをかやむしろといふ、根の形茅に似てふとく白し、よつて根白高菅と云、茅は野に多く、菅は川邊に多し、國人は此ものゝ多き所を菅野といひ、そを水無月の比引とる人をかやひきといふ、皆船の苫つくらせん料なりけり、和名抄、爾雅注云苫（和名度萬）編二菅茅一以覆屋也と有を得たりとすへし、古來菅をかやと訓るは誤れり、菅は萱草にしてわすれ草にあたれり

頭註 (六)ハ宜長云なえ／＼とたなひく菅をいふ也佐禰加夜の

されは眞と云と同く美たる言にて、佐禰は眞なれは、即サネガヤは俗に云眞カヤ也

今加夜と云もの一種あり、屋ふくに主と用る故の名也、さて草字をやかて加夜と訓るも、草の用は屋葺を主とする故也、神代巻、以鵜羽為葺草ともありて、何にもあれ、屋葺む料の草を云名なる事、萬の歌にてしるし、古事記神代巻二、訓葺草云加夜、詩經、白華菅兮、白茅束兮、注云、白華野菅也、已漚為菅云云、また云、白華為菅、則白茅為束、二物至微也、猶必相須為用云々

巻一吾せこはの注

昔は旅ゆく道に假菴作て宿れりし也、こ松か下の云々は小松交りにすゝき高かやなとの生たるを見てよみ給へる也、かやとは屋を葺草をすべいふ名也と千蔭いへり、

拾遺 旅人のかやかりおほひつくるてふまろやは人をおもひわするゝ　よみ人しらす

七 葛城の高間の草野はやしりてしめさゝましをいまそくやしも

しりては領してといふ也、我ものにせん人を他し人にとられしを悔る也、

爾雅ニ、白蓋謂之苫、註ニ白茅苫也、今江東呼為蓋、孫炎曰、白蓋茅苫也、郭云、白茅苫也、今江東呼為蓋、然則蓋即苫也、以白茅為之故曰白蓋、

柴草

巻六 立かはりふるき都となりぬれは道のしは草長く生ひけり

巻十一 疊薦へだてあむ數通はさは道の柴草生ひさらましを

薦をは藁薄なとを一筋つゝ重ね編をもて、隔編と云也、さてこもげたといふ木を横にわたし、こも槌といふものにあみ緒を卷、こも桁へかけて槌を此を彼へ彼を此へ取違へつゝあむ也、其槌の往反如く夫の通ひなはといふ意なり、巻の五に、道の久麻尾爾久佐太遠利志婆刀利志伎提とあり、和名抄に、辨色立成云、萊草 和名之波 一名類草とあれと、萊は韻書に萊藜也と注すれは、臙脂菜の事也、志婆草本草蕕草の集解に云、結縷草なり、後の歌に、みちしばとも、しばふともよめり、葉茅に似ていと細く、長さ二三寸に過す、野原、塘なとに生ひ繁りて、人の往通ふはかり生ひ出す有けり

(二) 八重六倉

十一 思ふ人來んとしりせは八重六倉おほへる庭に玉敷ましを

同 玉敷る家も何せん八重六倉おほへる小屋も妹となりては

いかならん時にか妹を牟具良ふのけかしき屋戸に入ま

さしめん

十九 牟具良はふいやしき屋戸も大皇のまさんとしらは玉敷ましを

むくらと八重むくらとはおなしものにして、今らしかよへり、冬より生ひて、春夏のあひた、廢地なとには殊にはひおほひて、とり盡しかたし、夏の末に至りて悉く枯れ、實落て又生る也、漢名は猪殃殃と救荒野譜に見えたり、和名抄に葎草（和名毛久良）とあれとも、誤れり、葎草の名は本艸蔓艸類に出て、和名かなむくら、或は轉してかなもくらといふものにして、形は大にたかへり

頭註 (一)眞淵云、遠江人はかなもぐらといひて、蔓草にて、荒たる離屋の軒へもはひのほれり、覆小屋とあるにてしるへし、此草たゞに地を這物にあらす、離或は他の草なとによりて、高くも廣くも生覆へは也けり、

○ムクラハ群坐の義也、其根數多く群り繁り蔓延て分れさる艸なれは名付しならん

(二)八重六倉おほへる小屋とよめるを思へは、猪殃々にはあらさるへし、猪殃々は屋上をおほへる事なし、蔓たちてはひこれるなれとも、蔓の長きも二三尺に過されは、小屋をおほふへきものならし、葎草は、二三間も蔓延して、草木をもおほひ枯して穢しきものなれは、萬葉の歌のさまにかなへり

(二)壁草

旋頭歌

卷十一 新室の壁草苅に御座給根草の如依逢未通女者公隨

新たにつくれる家の壁をぬるに、壁草も多く苅用るものなれは、それをことはにて、末の草の如といふ意ないはん料とす、其時新室造るもてかくいひ出しなるへし、壁草とは今すさといふもの也、おはしたまはねは來り給へ也、行をも來るをもあかめておはすといへり、末は草の茂く生る如くよりあへる女は、君かまゝにといふなり

頭註 (※)陸奥南部黑川盛隆云、延喜式七踐祚大嘗祭式云、所レ作新殿一字（中略）並以二黑木及草一構葺壁蔀以レ草云云とあれは、是壁草なるへしといへり、又同國鹽竈の藤塚知明かいへる、彼あたりにては、新室造て壁なといまたぬらざるほとは、草を刈て其屋をかこひおくを、壁草とはいふとはいへりき

古へは壁をぬるに、草を刈て交し歟、今は稍藁を切て交る也

花縵（此條葉蘭蘰ノ條トミ合スヘシ別條メ可也）

三日守大伴宿禰家持之舘宴歌

漢人も栰をうかへて遊ふとふけふそ吾せこ花縵せよ

栰、字書に同レ筏、筏音罰桴也、船也とあり、今本に栰に作るは誤れり、から國にて三月三日水に遊ふ事かた〳〵見ゆ、花縵は時の花を糸に貫て、縵にかくるなるへし、

縵の字宜長云、紀及此集にかつらに用たれは、鬘と通するかといへとも、字書を考るにかづらとよめるよしなし、和名抄容飾具の髪の條下に云、俗用ニ鬘字ニ非也、鬘者花鬘之鬘、また同書伽藍具に云、涅槃經云、種ニ花鬘ーとあり、さてこゝに云花かづらも、今小女種々の花をとり、笄にさしはさみなとするをいふへし

朝菜

巻六 いさ子とも香椎の浦に白妙の袖さへぬれて朝菜つみてん 大伴卿

巻十四 此川に朝菜あらふ兒なれもあれもよちをそもてるいて子たばりに

いさ子ともとは從者をさす、よちとは同し頃ほひの子といふ古語也、さて朝菜は朝食の料に磯菜をつむをいふへし

濱菜

巻十四 長歌に、阿胡(アゴ)の海の荒磯(アリソ)のうへに濱菜採(ツム)海部處女(アマヲトメラ)等かとよめり、濱菜は磯菜といふにおなし、今も浦人は磯菜とて汐の干たる時和可米なとつめるをいふ也、古今にこよろきの磯たちならし磯菜つむとよめるにおなし

藤(一) 藤衣付葛ノ條ニ見ユ

巻三 藤なみの花はさかりになりにけり奈良の都をおもほすや君 大作四綱

巻八 こひしけは形見にせんと我屋戸に植し藤(二)今咲にけり 山部赤人

十九 多枯の浦の底さへにほふ藤靡をかさしてゆかな見ぬ人のため 藏忌寸繩麿

和名抄爾雅注云、藟(字亦作蘽 和名布知)藤也、似葛而大とあり、又本草には紫藤と見ゆ、花に紫と白との二色あり、紫のものは土かひ養によりて、花のしなひ六尺餘に至る、白きものは花の咲事早けれとも、長さ漸く二尺斗に過す、攝津野田の産名高くて花のしなひ尤も長し、稀に八重の花咲あり、俗にやへふちと云、花濃き紫なり、おのつから山野に生ひしものは何れも花のしなひなかゝらす、伊勢物語に、なさけある人にてかめに花させり、その花の中にあやしきふちの花ありけり、はなのしなひ三尺六寸はかりなん有けると見ゆ、いにしへは作らすしておのつから咲たれは長きかまれなりける成へし、清少納言云、ふちの

花しなひなかく色もよく咲たるいとめてたし

頭註 (一)〇ノヂトハ青丹ノ和色ニシテ、ノタア丼也、タアヰノ反チニテ、フヂト云、青丹ノ兩色ニテ薄紫ノ色ヲナス
(二)藤の末葉のなよやかに靡くを、藤浪と云、靡の字の義也、靡と云より波の事によせてよむは文言のみなり

附箋 （一種紫花のものに色淡紫色にして、花大くたかひ養によりて花のしたひ五(尺)六尺にも至るあり、これ尋常の濃紫色花の藤の一種にして別也、尋常の紫花藤はいかにたかひ養ひたりとも、五尺に及ふ事なし、此藤石井村地福寺にあり、花を見は別種なる事を知るへし）

屎葛

十六 葛英にはひおほとれる屎葛たゆることなく宮つかへせん

(一)おほとれるは這ひろこれるをいふ、和名抄辨色立成云、細子草（和名久曾加豆良）と有、(二)葛は今俗にへくそかつらと云、何處にも甚多し、籬の上抔はひ續ふもの也、それに手をふるれは、くさき事いはんかたなし、夏田うゝる頃花さくゆへ、東國にてさをとめはな、播磨にて田うゑはなといふ、花は外白く内むらさきにして大さ三分はかり、灸の痂の落たるが如し、ゆへに近江にてやいとはなと云、花終りて少く圓なる實を結ふ、秋熟して色黄なり、契沖云宮は宦の誤、葛英は皁莢の誤なるへし、和名抄皁莢（皁莢二音和名加波良布知此俗云云）西海子といふ木也といへとも、此説甚混したり、和名抄の説も誤れり、先皁莢は西海子にして甚大樹となるもの也、かはらふちは本草に云雲實也、即今俗にも蛇結とも、しやけついはらともいふ小木にして、いはらあり、其葉は皁莢、(三)雲實大抵相似たり、いかにも契沖の説の如く、葛英は皁莢の誤りと見るそ穩なりける

頭註 (一)源氏東屋におほとれたるとあるは、同し詞ときこゆ、今按に、國人の這おほぼると云は、木の上に蔓艸の這まとふてはびこれるをいふ、即於保登禮流の登を保に轉して、於保ひに於保ひたるいへるならん、被をハビコレリ𪜈又ホドコレリ𪜈訓るにてしるへし
(二)屎葛は、和名抄曰、本草云女青（和名加波）禰久佐一名雀瓢、蘇敬注ニ云子似瓢形一故以名レ之トアル是ナリ、細子草ト別條ニ出セシハ誤ニテ同シ物ナリ
(三)和名抄雲實一名天豆（和名波末佐々介）色黄黒似レ豆、故以名レ之、コレ何ヲサスカ未詳、雲實ヲハマサヽケト訓スルハ誤レリ

見ん

冬薯蕷葛

七巻 皇祖神の神の宮人冬薯蕷葛いやとこしきにわかかへり

九巻三十六丁 冬薯蕷都良尋去祁禮婆云云とあり

和名抄薯蕷一名山芋（和名夜萬都以毛）と有て、冬薯蕷といへるものなし、六帖にすへらきの神の宮人まさきつら（二）いやとこしきに我かへり見んとあるによりて、千蔭はまさきつらとよみつれと、宣長は是をところつらとよめり、古事記曰代宮段歌に、那豆岐多能（田）伊那賀良爾（一）伊奈賀良爾波比母登富呂布許呂豆良と有をもて也、ところは和名抄薢（和名土古呂）俗用二苍字一、漢語抄用二野老二字一、今案所レ出並未レ詳、味苦小甘無レ毒、燒蒸充レ糧、兼名苑注云、黄薢其根黄白而味苦者也と有て、薯蕷と異なれとも、相似たるものなれはかくも書るか、ところつらとする時は、とこしきと詞を重ねん爲の序なれは、是然るへくおほゆ、さて野老と書てところと訓るは、其根幾年も朽すして生ひ榮るものなり、故に蓬萊の飾に野老の蔓と實とを用ひて祝ひのものとす、是に二種あり、俗にあまところといふは、根山芋に似て大也、味ひ甘くして柔也、本經逢原に曰、產川中大塊色白而鬆脆者爲二草薢一とあるに充れり、又俗におにところと云あり、根小く味ひ苦く食ふにたえす、是は本艸原始曰、山草薢、色赤而堅硬と云にあたれり、また和名抄に、黄薢其根黄白而味苦者也と云にあへり

頭註

（一）稻柄に延廻薢葛なりと宣長いへり（景行條）

（二）田中道麻呂云ク冬薯蕷をまさきづらとするは心得す、六帖に右の歌をマサキツラとあるは、萬葉の冬薯蕷の訓をつくべきやうをしらさりしから、妄然訓たるなり、冬薯蕷ハ野老也、其故は、野老は葉も葛も薯蕷に甚よく似てまぎるはかりの物なり、さて薯蕷ハ十月の初め頃まで葛ありて、其後枯ル物なるを、野老は大かたは山芋と同頃枯たれども、物の蔭なとにあるは、冬も葉青くて春までも殘るもある物なれは、誠に冬薯蕷と云つへし、萬葉七歌に、いやとこしくにとつゝけたるは、トコてふ言を重ねたるにもあるべく、又常葉なる故にもあるへし、九の歌に、尋去とつゝけるは、此物葛を尋行て根を掘れはなりと云る、此考へ甚よく當れりと古事記傳いへり、此說に從ふへし

（一）萱草

巻三　萱草我紐に付香具山のふりにし里を忘れぬかため（大伴旅人）

十二　萱草吾ひもにつく時となくおもひわたれはいけるともなし（作者不知）

和名抄兼名苑云、萱草一名忘憂、漢語抄云（和名和須禮久佐）

巻四　萱草吾下紐につけたれと鬼の醜草言にしありけり（大伴家持）

十二　萱草垣もしみゝにうゑたれと鬼の志許草猶こひにけり（作者不知）

憂をわすれる草といふから、わするゝやと我下紐にみそ

かに着たれと、中々それに又いさなはれて物思ふひまなきは、忘草とは言のみにし有けり、さるは醜（三）の醜草也。今より忘草とはいはしと罵せし也、字は醜とも鬼とも書てしことよめるは、見にくきを云古言なり、又後世鬼のしこ草とよむ事とするも、鬼は見にくき物によりて、しことい事に書るとも、得こゝろえぬ也、おには隱の字音也と和名抄に見えたり、萬葉頃におにといふことばはなし、志許草は一草の名にはあらす、戀をわすれん爲に萱草を多く生したれとわすれかぬれは、名のみにてわろき草也と惡み罵るの意也、さてわすれ草は古名にして、今は和漢ともに通して萱草とよふ、枕草子にもくわんざうとかけり、園にうゑて花を賞するものゆへ、種々の品ありてよく人のしる所なれは委くあけす

頭註 （一）袖中抄に、顯昭云わすれ草とは萱草とかけり、本草云、萱草一名萱花名宜男、風土記云、懷姙婦人佩其花生男也、圖經云、今人好歡樂忘憂、田野有之、嵇康養生論云、合歡蠲忿、萱草忘憂、古今にわすれ草何をか種と思ひしはつれなき人の心なりけり又すみよしとあまはつくともなかゐすな人わすれ草おふといふ也

ノ忘艸ノ名ヲ借テ多ク物忘種ニ云カケテ云也、物思フ時ハ何ニテモ紛レ種トス

（二）一說に鬼の志許草を紫菀の事とすれとも據なし、紫菀は古今集にも和名抄にも志乎にとあり、枕草子にはしをんと書たり、

○梯ニ云、鬼ハ醜ノ酉ヲハブケルニテ、言ノ心ハ至リテ物ヲニクミテ云フ詞也、コ、ハ戀ヲワスレム爲ニ忘草ヲ下紐ニツケタレドモ、更ニワスレヌハ名ノミ忘草ニテ、醜ノ醜草ナリト、カツハ賤シメカツハ惡ミテ云ナリ

○シコ艸ハ繁凝艸也、繁ク蔓延艸ヲ云フ、一種シコ艸トテアルニハアラズ、又水凝テ直ナラヌヲ云故ニ鬼ノ字ヲ借ナリ

子太草（一） 名義 四垂艸ノ畧カ

十一 我屋戸の甍の子太草生れとも戀忘艸見れといまたおひす 作者不知

六帖にも軒のした草とよめり、契沖は和名抄の垣衣（二）、屋遊なとを引て、しのふ草也といへと、垣衣、屋遊をしだといへる證なし、今志太といひて山に生る草あり、齒朶（三）と書て正月にかくる注連にさしはさめり、其齒孕に似たる草、古き庭或は軒の下なとに生るを俗に、ぬしだと云へり、其葉齒朶に似たる故軒の下小いふか、齒孕に似て花もなく實もなくして、何處にも生ひ出るものこそ軒のしだくさなるらめ

頭註 (二)子太草の太文字は、萬葉中に清濁の二音につかひたれは、こゝは軒の下草歟、又は軒のしだ草かとも思へり
(三)垣衣も屋遊もともに築墻或は屋上なとに生る苔をいへり。又しのふ草は瓦葦にして、今ノキシノブといふものなり
(三)下學集ニ「齒朶正月用之」ト訓セリ、齒朶も字音を假てかけるのみにて、山に生る故に木の下艸と云へるか四垂艸の意也

茜草

天皇遊獵蒲生野（近江國蒲生郡野也）之時額田姫王作哥

巻一 茜草さす武良前野ゆき標野行野守は見すや君か袖ふる

巻二に赤根刺日之、盡、また巻十五に安可禰佐須比流波毛能母比（物思）、こは日とも晝とも紫ともつゞけたり、眞淵云、あかねのかねの反は氣也、故に約めては阿氣といひ、延てはあかねといへり、茜も根も借字にてこゝは此字の意にあらすと、そはともあれ、茜草は和名抄兼名苑注云、茜（和名阿加禰）可以染緋者也とありて、此草の根赤きかゆへに、今あかねとよへり、此根もて染たるを阿加禰そめと云、草の形は莖に稜ありて蔓長く、葉は四枚或は八枚葉をめくりてあり、秋白く細なる花咲、圓なる實を結ふ、はしめは青く秋ふけて黒くなる、野にも山にも多し

頭註 (＊)古事記八千矛神の御歌に、茜を阿多泥と書るは、加の草書を多に誤れるにやあらんと宣長いへり

紫草

大海人皇子命答御歌（前の條の額田姫王の茜草指武野行てふ歌の答也）

巻一 紫草のにほへる妹をにくゝあらは人嬬ゆへに吾戀めやも

十四 牟良佐伎は根をかも生ふる人のこのうらかなしけを禰をゝへなくに

巻四 辛人(一)の衣染とふ紫のこゝろにしみておもほへるかも（筑前掾門部連）

十二 紫は灰さすものそ海石榴市の八十の街にあへる兒やたれ

紫は海石榴の灰汁をさして染るものなるによりて、つば市といはん序とせり、紫草(二)の根にて染る事今もしかり、紫の根すりの衣とは、昔は紫草の根もて摺たるへし、摺と染るとは同しからす、和名抄云紫草（和名無良散岐と訓す）兼名苑云一名茈莀、今東國にてねむらさきといふ、野にも山にもあり、又苑に作るもの多し、巻の七に紫之名高の浦といひかけしは、紫はことに貴き色として名細けれは名高し

とつゝけたり、巻十六に紫の粉潟の海に云云とは、紫の濃きとかゝれり、此外猶あり

頭註 (一)裨ニ云

辛ハ借字ニテ唐人也、西土ヲカラト云ハ西戎の心、東國ヲえみしト云ハ東夷の心にて、外國ヲイヤシメテ云辭也、サルヲカラハ韓の音ノ轉レル也ナト云ヘルハイミジキ非也、ナゾモ韓國ノミノ名ナランヤ、サテ衣染云紫トハ、師云、紫ノ色ハ皇國ニテ遥ノ古へよりむねと用ひらるゝ色なるにて、分て辛人と云ト云へる事心得す、故辛人は宇萬人の誤かとも思ひしかども、又思へは此ころ唐人の用ゐるかの國の紫草は、ことに色よく染る故に、かくいへるか、くれなゐは異國にもあれとも、分て唐紅とて賞たくひなるへしといへり

(一)巻三、託馬野に生る紫衣に染未たは服すて色に出にけり　笠女郎

延喜式内藏寮式日、紫草二萬二百斤武藏國信濃國二千八百斤云云、紫草は武藏野産す　古今、紫の一本故に武藏野の草はみなからあはれとそ見る、後撰に、むさし野は袖ひつはかりわけしかと若紫は尋わひにきなと古歌おほし、又ゆるしの色位の色なとよめり、根を碎て染る故に紫の根摺ともいへり

韓藍クレナヰ 一名 雞冠草 (一)

七 秋されは影にもせんと吾蒔し韓藍の花をたれかつみけん　宣長云、影は移の誤にてうつしもせんとよむへし、うつすは染る事をいふ也

三 吾屋戸に幹藍まきおふしかれぬれとこりすて又も蒔ん

とそ思ふ　山部赤人

契沖は今の鷄頭花なるへくいへり、鷄頭花も物を染に紅花に類せりといへり

巻十 戀る日のけなかくしあれは御園の辛藍の花の色に出にけり

韓藍は呉藍に同しく紅花也、宣長云、影は移の誤りにてうつしもせんとよむへし。うつすは染る事をいへり。辛も幹も皆借字なり、韓藍といひ呉藍といふも共に其種は同しもの也、さるを昔中末まてくれなゐてふ名の専らなるを思へは、始呉の國よりこし時呉の藍と名つけ、後に韓國よりもこしをからあゐといひしならんと眞淵いへり、さて縫殿式に韓紅花と有は、たゝ深紅の事也、韓にて染るか濃に依て、それか様に染るを云にて、染種はたゝ紅花のみ也、

清香按、呉藍、呉竹なとは、呉國より古へ渡れる事論なし、さて呉國は今の南京の地なり、云義 呉ナヰハ呉成藍ノ要言也。アヰハ天井ノ義、井ハ水ナリ。藍色ノ青キハ蒼天ノ色ニ同キ故ニ天井ト云、俗藍染ノ縹色ヲ空色ト云、

又海ノ潮水モ蒼天ノ如クナル故ニ、海ヲアマト云ヒ、蒼天ヲ天ノ海ト云、地水ト蒼天ト與合フテ同色ナルヲ知ルヘシ、

契沖云和名呉藍也、乃阿反奈なれは約てかくいへり

巻十 よそにのみ見つゝをこひん紅の末採花の色にいてすとも

宣長云末は集中うれとのみよめり、うれつむ花は紅花也、うれより摘とれはししかいふ、

十一 紅の花にしあらは衣袖に染つけ持ていぬへくおもほゆ

七 紅の深染のきぬを下にきて上に取きはことなさんかも

十二 紅の薄染衣淺らかにあひ見し人に戀ゐころかも

同 桃花褐の淺等の衣淺らかに思ひて妹にあはんものか

鴨布を桃花色の薄紅に染たるを荒染といふ、褐は布衣也式に凡紵布之衣者雖退紅自非輕細不在制限と有、江家次第に荒染と書り。

しぬひには戀ひて死ぬとも御園の雞冠草の花の色に出めやも

雞冠草を翁は左注によりて月草とよまれつれと、宣長云、巻十に戀る日の氣長くあれは三苑圃の辛藍の花の色に出にけりともよめれは、こゝも古訓のまゝにから藍とよむへし、からあひは卽紅花にて、紅花の形雞冠に似たる所あれは也、類聚古集に云、鴨頭草又作雞冠草云云、此義によれは、月草なるへしといへとも此說よろしからす、鴨頭と雞冠とはその色いたく異なるを、ひとつものとせるはみたり也、本草に雞冠とあるは俗に云けいとう也、花の形雞の冠に似たり、又雞冠菜といふは靑葙の一名なり、雞冠草を俗に云雞頭草の事そといふはいと誤れり、此集によめるは紅花也、紅花も丸き房ありて、房より赤き花の開出るさまは雞の冠に似たれは、しか書たるなり、俗に云雞頭草は近き頃渡り來りしものなりとそ

和名抄に、紅藍（和名久禮乃阿井）(三)本朝式云、紅花（之俗用）と有、もと上代呉の國より來りしゆへくれなゐといへるを、又其上にからといへる言をは冠らせて、からくれなゐといへるは、今の京になりての俗言也、さてべにの花摘には朝とく露のひぬ間に花ひらをつみとれは、また明るあしたつみといしおとより花ひらの出るもの也、夫ゆへに本草にも乘し

露采レ之とあり

頭註 ニ按 カラアヰクレナヰハ和名本艸ニ依テ別トスヘシ
(三)眞淵云、言ハ呉乃阿爲の乃阿を約て、久禮奈爲といふ也、かくて我朝古へたゞ青藍を以て衣を染しを、呉の國より來たる紅花も、同し衣染るものなれは、紅を呉のあゐとはいひなせしもの也

附箋 ○八鹽乃衣
此卷呉藍之八鹽乃衣云云、八は彌の略にてあまたゝひの意、鹽は物によくしみ入故の名なれは、借字なから言の意は均し、さて是は八鹽入の衣といふなるを、歌には入を略て調へたり、記に垂仁天皇條八鹽折之紐小刀ては、刀の紐の色をいひてこゝと同し、又釀ニ八鹽折ノ酒ニとも有も、物は異なれとも、八鹽折の言は均し、折は借字にて入也、入を略て利とのみいふは常也　眞淵云

山藍

見ニ河内大橋獨去娘子ニ歌一首井短歌

級照片足羽河之、左丹塗、大橋之上從、紅赤裳數十引、山藍用、摺衣服而、直獨伊渡爲兒者、若草乃夫香有良武、橿實之獨歟將宿、問卷乃欲我妹之、家乃不知

反歌

大橋之頭爾家有者心悲久獨去兒爾屋戸借申尾

民部式に見ゆ、古へより專衣を摺は此山藍なりとそ、天子の青鵤色の御衣を染るに用るよし、和名抄本草云、大青和名波止久佐一云久流久佐また延喜式曲藥寮大青とあり、又縫殿寮に山藍五十四圍半と見ゆ、青鵤色の御衣を染るゆへ波止久佐といへるか、さて古へより山藍を本艸原始の透骨草にあつれともよろしからす、(三)今山藍といへる草、山里の木陰にあり、苗の高さ一尺はかり、葉藍に似て緑深し、莖に稜あり、莖葉ともに緑の光りありてうるはし、葉の間より細き穗をなして花さく、花瓣も亦みとり也、後に小きまろらかなる實を結ふ、その實の色も青し、此葉にて染こゝろみれは、色青くして萠黄となる、卽青鵤の羽色に似たり

頭註 (一)古事記浮穴宮卷に師木津日子玉手見命坐ニ片鹽浮穴宮ニ治ニ天下ニ也　とある片鹽は、書紀雄畧卷に、堅磐此云ニ柯陀之波ニと云堅磐の意の地名にて、片鹽と書るは借字ならんか、志波に鹽の字を書るは、志波々由志なとの志波なりと宣長いへり
(二)大嘗式に山藍もて小忌衣をすることあり
內藏式諸國年料供進の中に、藍ハ陸田料とせしを見るに、陸田五町總單功九百十二人云云、藍種始蒔日祭ニ神五色絹各二尺云云、とあり、この神を祭るは藍紅花なとは、物にあえぬれは色濃くなれは祭れるならん、今も稻種おろすに苗代祭る

か如し、

さこ此藍は今阿波國にて作れる藍なるへし、そは内藏式雜染の中に、藍染の物、綾一百疋、絹四百疋、絲帛六十屯、絲六百約、貲布八十端とあり、この藍は彼陸田に作らしめたるを用ひしならん、

山藍は、民部式に、凡神祇官竹及諸祭諸節等所須薦竹柏主將山藍等類亦仰二幾内一令レ進とあれは、内藏式の藍は、山藍にあらさる事はいよ／＼明也、

山藍は山中自然生のものにして作れる藍の類にあらす、此山藍もてすれるを青摺といへり、凡て古へそのすれるものを以て、榛摺、青草摺、赤土摺なといひし也、貞觀儀式踐祚の大嘗會の條に、藍地青草摺、緣地青草摺なとあり、其藍地は藍染の上を青摺にせしをいへるか、緣地の青草摺も同じ心也、さて此青草は、即山藍なるへし、又近衛式に、凡臨時行幸料青摺衫二百領料細布一百端衫別二丈絲一斤九兩別三分生藍四十圍云々とある生藍も、即山藍にて生なるをもて摺れるをそしらるゝ、然らされは青摺といふへきよしなし、青摺は青草摺の中略なるへし

余母疑

ヨモギトハ與齡氣ノ名也、故ニ人ノ氣ニ與合テ灸トナシテ長生ヲ宜、菁莪蓬洞ト云菊ト同性ナリ、

十八長歌大伴宿禰家持　上畧の霍公鳥、來鳴五月能、安夜女具佐、余母疑可豆良伎下畧　同卷にしなさかる越の君のとかくしこそ柳かづらきたぬしくあそばめとよめる如く、かつらきはかつらにかくる事を、かく約めいへり、よもきは和名抄兼名苑云、蓬一名華艾也蓬葉ノ二音蓬畢ハ和名與毛木艾菁五蓋ノ反本草云、艾一名醫草とあれとも、此條蓬と艾とを混するは誤れり、蓬はむかしよもき、またやなきよもきにして、詩經に所謂飛蓬なり、朱註に蓬草名其華如二柳絮一、聚而飛如二亂髮一也とある是なり、花のあとに絮あり、風に從て飛ゆへに飛蓬と云、艾彼采レ艾兮一日不レ見如二三歲一兮、朱註に、艾蒿屬乾レ之可レ灸故采レ之云々と有是也

菖蒲草

卷八　霍公鳥まてと來鳴す菖蒲草(二)玉にぬく日をいまたとふみか　大伴家持　此玉ハ藥玉也五月の玉ともいへり

卷十　霍公鳥あく時もなし菖蒲草かつらにせん日こゆ鳴わたれ

十九　ほとゝきす今來鳴らん菖蒲草かつらくまでにかゝる日あらめや

菖蒲草玉にぬくとは藥玉なり五月の玉ともいふ

公事根源に、五月三日獻菖蒲、六府あやめの輿を南殿の階の東西にたつ、また時の花を折そへて同くをく、四日はあさかれゐの庭に是をたつ、主殿寮所々にしやうふふく、天平十九年五月詔ありて、(三)百官諸人悉菖蒲の蘰をかくへし、かけさらん物は宮中に入へからすとさためらる、弘仁式にも菖蒲よもき花なと三日は早旦に南殿の前にを

くとあり、又(三)五日節會の條に、天皇武德殿に出御なりて宴會をおこなはれ、群臣に酒を給ふ也、內辨なとも同し、人々皆あやめのかつらをかく、日蔭(しかつら)のかつらの如し、典藥寮あやめの机をたてまつる、群臣に藥玉を給ふ、五色のいともてひちにかくれは惡鬼をはらふ云々、和名抄(四)昌蒲(和名阿夜女久佐)とあれとも、菖蒲は卽今云石菖にして、端午に用るものにあらす、端午に用るあやめは、本草に云白菖一名泥菖にして、此集によめるあやめ草也、今俗にせうぶ、また軒あやめとも云、其葉燕子花(カキツバタ)に似て長さ四五尺に及ぶ、故に池澤の水深き所に生る、根ふとくして節まばら也、後の歌に九節(コヽノ)とよめるは、一寸九節(五)のものにして卽石菖をいへり、是は和名抄にも菖蒲と白菖とのわかち有をしらて、たゝ菖蒲とのみ一條あけたるは、あやまれる也、菖蒲は葉細くして漸く長さ二尺斗に過す、根も細くして節多きをよしとす、故に一寸九節と云

頭註

(一)卷三長歌、霍公鳥鳴五月には、菖蒲(アヤメグサ)花橘を玉に貫、蘰にせんと、云々、天智紀童謡に、橘はおのが枝々なれども、玉に貫ときおやしをにと行て、橘を緒にぬくことゝ、いと古きことなり

(三)續日本紀十七云、是日太上天皇詔曰、昔者五日之節常用菖蒲爲縵、比來已停此事、從今而後非菖蒲縵者勿入宮中、

(二)枕草紙 せちは五日にしくはなし、さうぶよもぎなとのかほりあひたるもいみしうおかし、九重の內をはじめて、いひしらぬたみのすみかまて、いかでわかもとにしけくふかんと、ふきわたしたる猶いとめつらし

(四)アヤハ文也、メハ子也、子メカノ言ノ通音ノ例ニテ、則文根ノ心ナリ、故ニ根ヲ曳ト云、亦文目ノ名ナリ

今あやめとよひて花を賞するものは、漢名溪蓀にして又別也、花に紫白の二種あり、花鏡に、白花蓀紫花蓀と名く、

(五)羅浮山記云、山中菖蒲一寸二寸節抱朴子言服食以一寸九節紫花者尤善

大木後德大寺左大臣、菖蒲草九の節をやとゝのへて玉の夜殿に今日はふくらん

(六)垣津旗

卷七 常不知(シラス)人國山の秋津野乃垣津幡をし夢に見しかも

こは他妻を戀て夢に見しをよめり、かきつはたはうるはしきにたとふ、

卷十 吾のみやかくこひすらん垣津旗にほへる妹はいかにあるらん

卷七 墨江の淺澤小野の垣津幡きぬにすりつけきむ日しらすも

十一 垣津幡にほへる君をいさゝめにおもひ出つゝなけきつるかも

天平十六年四月五日獨居平城故宅作歌

十七　垣津旗きぬにすりつけ益良雄か競獵する月はきにけり（大作家持）

競獵するは、四五月の頃鹿の茸を取事をいへり、又五月五日に百の草を採事も見ゆ、爰も此二ッを兼たる幸なるへしと千蔭云へり、和名抄に劇草蕪敬、本草注ニ云、劇草一名馬藺（和名加木豆波太）とあれとも、馬藺は俗に禰ぢあやめと云草にして、かきつはたとは別也、かきつはたは漢名燕子花と漳州府志に見えたり、又古へよりかきつはたを杜若にあてるも誤れり、杜若はやぶめうかにして、垣津幡とははるかにことなるもの也、燕子花ははなの色種々有、よく人のうゑはやすものなれは委くこゝに出さす

【頭註】(*)カキハ垣也、ツハ列也、ハハ葉也、タハ多也、垣ニ列葉多云シ名也ト、一説也

花勝見(*)

巻七　姫押おふるさはべのまくす原いつかもくりてわかきぬにせん

をみなへしを姫押と書るはいかにとも心得す、譬の心はあらは也

巻四　娘子部四咲澤二生流花勝見都毛不知戀裳摺可聞

東萬呂云、花がつみは水に生る浮草にかたはみといふ物あり、黄なる花さけり、それを云なり、今按、かたばみとはかたまめの義也、水にうきならへるか籠の目の如し、よて花かたみともいふ也、枕さうしにかたばみの綾の紋にても、こともの よりをかしといへり、もろこしにては田字草と云、花も葉も四ひらに並へるか、田の字のかたちしたりとて名付しと也と云、此説にしたかふへし、然れとも酢漿草と田字草とを混じたるは誤れり、酢漿草と田字草とは略形の相似たるかゆへ也、田字草は本草に云蘋の事也、涉澤或田の中に生す、葉田の字の形に似て四片一莖に並ひ付、夏白き花さく、花も四瓣なり、根は蔓の如く泥の中にあり、本草に陸に生るを青蘋とし水に生るを白蘋と云、然れとも元一物也、水凅く時は陸草の如くなる、東萬呂の黄なる花さけりと云は酢漿草也、千蔭云、陸奥にて今花菖蒲に似て花の四ひらなるものをかつみとはいへり、是そまことのものなるべきと云説はうけかたし、こは溪蓀の類にして四瓣の花さくものあり、色紫碧にして美しけれとも、此説穩ならす、

眞淵云或説にかつみは菰を云といへと、和名抄にもいはす、六帖には菰につゝけて別に出せれは、異物とそおほゆと云は茭の一種實を生するものあり、常のまこもは花はさけとも實を生せす、實を生するものを本艸に菰米と云、美濃、三河、陸奥にて是をかつみといへとも、其花茭と同しくて賞すへきものにあらす、實を剉み飯に炊き、又粉となし糕として食ふ、此説ふたつなから此集によめる花勝見にはあらさるへし、東萬呂の田字草と見る説にしたかふて穩ならん

頭註（＊）石礫雜考に云菰といふ草、上野下野にてこれをかちもといふ、按るに、かちもは即かつみなり、その實は形ほそ長くてうへの皮黒し、皮をされは三分許なる白き實あり、漢名ハ茭米ともいへり、陶弘景曰、茭米一名彫胡可作餅食といへり、此實麥なとの如くかちたる故にかつみと名付しを、今はかちもといふなるへし、花かつみはかつみと同し種類にて花あれとも實なきもの故に、實にむかへて花とは名つけたる也とて、通志畧、彫蓬即米茭、可作飯食、故謂之䔲、其黍蓬即茭之不結實者、惟堪作薦、故謂之薦を證とせり、此説よろしく聞ゆ、又細注に、花かつみをもはら田字草といふこと、東麻呂より起りて續萬葉論古今打聞なと皆その説を用ひたれと、もとうけかたきことあるによりて、萬葉畧解には異物を説けれと、そはいふ〳〵さまかたらぬ物なれは、これらの説すへてと

らすといへり、弁内侍日記に、寛元四年五月五日あさかれゐにかつみを參らせたるを、歌をそへてとりてまいらせよと仰ことありしに、あやめと思ひて侍れは、ひきたかへたるもおもしろくて

かつみおふるあさかの沼もまたしらて深くあやめと思ひける哉　弁内侍

附箋 花かつみ諸説決めかたし、今安積にて其物たしかに知れたれば紛らしき事はあるましけれど、かしこにても今それとさだかに知れさることは論なし、田字艸也といへるは綾の文によりてのことなるべし、千蔭の説の花菖蒲に似て花四ひらなるものをいふはいかなる艸にか、清香のいへる、こは溪蓀の類にして四瓣の花さいくものあり、色紫碧にして美はしけれども此説穩ならずといふは確證ありてのことか、年長かおもふ所は此説是に近からんか、そは無名抄に「ある人云、橘爲仲みちのくにのかみにて下りける時、五月五日いへごとにこもをふきけれは、あやしみてこれをとふ、その時庄官云、この國にはむかしよりけふさうぶふくといふことをしらず、然るを故中將のみたちの御とき、けふはあやめふくものを、たづねてふけと侍りければ、此國にはさうふなきよしを申侍けり、その時さらばあさかのぬまのはなかつみといふ物あらん、それをふけと侍しより、かくふきそめて侍る也とそいひける、此中將のみたちといふは實方のあそん也」とあるによらは、此菰といふは花あやめに近く似たる艸なれば也、又近き年陸奥國よりとりよせしとて花かつみといふ艸を見しに、これは三角藺といふものにて、花はすゝきの花に似て賞すへき花にあらす、とにかくに難物也、よく〳〵考へ給へ

蓴（＊）

巻七　昔こゝろゆたにたゆたに浮蓴邊にも奥にも依かてましを

ぬまを古はたゝぬとのみいへり、ぬなはとは沼に生して縄の如きてふ意也、古今に、かくれぬのしたよりおふるねぬ縄の寐ぬ名はたゝしくるないとひそといふによりて、春を浮ぬなは秋をねぬなはといふはわろし、もとより水の面にうかひてあるゆへ浮蓴といひ、水の流れにしたかひてなひきふすをねぬなはといへるなり、たゝぬなはとのみいふか古名也、和名抄蓴（和名沼奈波木菜也）蘇敬本艸注ニ云、自ニ三月四月ニ至ニ七八月ニ通名ニ絲蓴ト、味甜體軟霜降以後至ニ二月ニ名ニ環蓴ト、味苦體澁トあり、今俗にしゆんさいといひ、春夏葉をとりて食ふ、半夏生の候を過くる時は堅くなりて食ふに堪へす、六月の頃薄紫の花さく葉は水の面にうかひ、根は水の底にあり

頭註（＊）應神紀ノ歌に
みつたまるよさみのいけにぬなはくりはへけくしらに（水渟依網池奴那波操延不知）契沖云沼縄の義也、沼ニふたつの意あるへし、一つには沼に有て縄の如くはふ物なれはいふ歟、二つには蓴の茎に白き滑ナメらかなる物のつきたれはいふ歟、萬葉に髪のなめらかなるをぬるとよみ、蓴の類なる物をぬかはぬる／＼ともよめり、水にぬるといふも、ぬれたる物は滑らかなれは、もとは同し義か、俗にぬま／＼ぬめ／＼といふ皆通ふ歟、沼もひちりこの滑らかなれはぬまと名付て末にては一義歟、縄ナハホとハと通すれは直ナホの意也

菱

巻七　君かためうき沼の池の菱とるとあか染し袖ぬれにたるかも

十六　豐國の企玖キクの池なる菱のうれをつむとや妹かみそてぬれけん

和名抄、菱子説文云、菱（音陵）秦謂之、薢茩（皆后二音）、楚謂之芰（音岐字亦作芰和名比之）とあり、池澤に多し、根は水の底にあり、葉は水の面に浮ぶ、葉の形扁くして厚く光りあり、夏花咲て實を水面に結ふ、形三角、或四角、其角皆尖りて人を刺もの也、はしめは色青く、秋されは色黒し、煮て皮を去り白き肉をとりて食ふ味、栗の如くして甘し

頭註（＊）日本紀應神の卷に河派江カハマタの菱殼ヒシカラの刺けくしらにとよめる

蓮（＊）

十六　勝間田の池はわれしる蓮なししかいふきみにひけなきかこと

附箋　蓮は實の形蜂の巣ハブキの如くなるより、はちすと號ケしなるへし、今はすといふは省略過たる言なり

同 久堅の雨もふらぬか蓮葉にたまれる水の玉に似ん見む

十三 長歌 御佩乎剣池之蓮葉爾渟有水之往方無とあり

舒明天皇記に、瑞蓮生剣池、一莖二花とあり、剣池は大和高市郡なり、一莖に二花さくものを、本草に合歡並頭と云、又一莖に三花ひらくを品字蓮といへり、又近江の野洲郡田中の蓮池に千葉なるものあり、俗に觀音蓮と云、其花尋常のものより小くして、一莖に二三或四五花も簇り開く、皆内に房なし、此種もと大和の當麻寺より出て、中條姫この蓮の絲もて曼陀羅を織れしゆへ、この蓮は絲なしと里人いひ傳へり、さて統て蓮は春宿根より初て出る、葉の小なるを荷錢と云、俗にせにばとよふ、其次に出る葉は稍大にして水面に浮ふを藕荷と云、俗に水ばともうき葉ともいへり、又其次に出るは莖長く水の面に立出るを、俗にたち葉と云を、本艸には芰荷といへり、芰荷は藕の節に相對して莖を出す、其莖一は葉一は花也、故に芰荷出れは必す花さく、花に紅白あり、又俗に天竺蓮と云あり、花白し、花ひらの邊り一分斗紅にして美はし、これ秘傳花鏡に云錦邊蓮也、此外猶種々の蓮あり

頭註 (ホ)古事記雄畧天皇段、日下江の入江の波知須(蓮)波那(花)婆知須(蓮)ミ(身)の盛人乏しきろかも

古奈宜

巻三 十四 (二)春霞春日の里の植子葱苗なりとみし枝はさしにけり 大伴駿河麿

上毛野伊可保の奴麻爾宇惠古奈宜かくこひんとや種もとめけん

同 苗代の小水葱か花を衣に摺なるゝまに／＼あせかかなしけ

和名抄(三)水葱薙水菜可ㇾ食也、漢語抄云、水葱奈木 一云蔛菜、式供奉の雜菜の中に水葱と見ゆ、植はたゝ生立て有をいへり、水葱を奈木とよめるは誤り也、奈宜に大小の二種あり、この集によめるは、奈宜は本草に云蔛草にして、今も俗にこなぎといふ、田の中に生す、初て出る葉は月草の葉に似て、後に出る葉はまろし、秋になれは花咲濃縹色にして美也、又白き花咲もあり、大葉のものを今俗に水あふひと云ひ、たゝ奈ぎとも云、形相似ていと大也、葉の廣さ三四寸、草の高さ二三尺、花は古奈宜におなし、是は三才圖會の浮薔秘傳、花鏡に云雨久花なり

頭註 (一)卷三ノ歌解久老云、水葱ハ水あふひといふもの也、古へ天皇の供御にも奉りし事延喜式にも見え、卷十六に水葱乃羹物ナキノアツモノともよめり、さて水葱はおゆるに從ひて、枝の幾股にもさして花咲ものなれは、女のおよづけるにたとへたり
(三)水葱の名は正字通に出たり、卽此ツキにイタス處ノ於保爲草也、和名抄に江浦草豆久毛一云太久萬毛と同物なり

於保爲具佐

十四 上津毛野いなうの沼の於保井草よそに見しよは今こそまされ

和名抄(六)莞唐韻云、莞音完一音ハ丸漢語抄云於保井 可以爲ル席者也、また同書云、江浦草豆久毛一云太久萬毛と二條に出せとも一物也、今も俗につくも或はふとゐ或はまるすけとよふ、沼澤の中に生す、燈心草ヰに似て太く、長さ一丈に餘れり、秋葉を苅て席とするをがまむしろと云、卽唐六典に出る水葱席也、又字鏡に莞莧同古九反似レ蒲員芥ウキ加萬久大井と云是なり、蒲ガマに似て丸きゆへ今も俗にまるかまとよふ、是卽正字通に云水葱也、水葱を和名抄に奈木と訓るは誤なる事既にいへり、よろしく此條と合せ見るへし

頭註 (六)爽冲說、莞おほゐ萬葉 和名大藺也、日本紀ニ莞子をかまと點せり

知草

湖草にましれる草の知草シリクサの人皆知りぬ吾したおもひ

知草は和名抄藺音吝和名爲辨色立成云鷺尻刺 似レ莞而細堅宜レ爲レ席とあるによれは、知草の知は借字にて、尻草の意也、今も俗に鷺の尻刺といひ、たゝ鷺尻とも云、莞に似て細く、三角にしてさき尖れり、ゆへに三角ゐ抔と呼へり、田溝なとに多し、辨色立成の說にしたかふて藺にあつへし、然れとも藺をゐと訓るは誤れり、ゐは燈心草なり

伊波爲都良

十四 (一)伊利麻治能於保屋我波良能伊波爲都良引かはぬるヽヽわに奈多要曾禰

同 上津毛野かほやか沼の伊波爲都良引かはぬれつゝあをなたえそね　千蔭云、いはゐつらは水中のものか、ぬるヽヽはかづらの如くつゝけるを、引けはぬらヽヽとして絶されは也とのみいひて、何をさすともしらえす、按に、(三)伯耆の國にていはひづるといふは馬齒莧スベリヒユ也、國人云、此草はいとつよきもの也、引て久く軒にかけ置ても枯す

していとつよきものなるかゆへに、祝ひの義にとれりと、元より都良は蔓なれは、祝蔓に同し、前の大屋が原のいはゐづらといふは此馬歯莧をいふに似たり、此草蔓にはあらされとも、地に布て上へ立のひされは、つるともいふへし、莖圓にして赤く、葉綠にして滑にて光りあるゆへ、ひかはぬる/\といふにかなへり、又上つ毛野加保やが沼の(四)伊波爲都良とは馬歯莧の類に水中に生るものあり、俗に水はこべと云、此草好て沼、涉澤に生す、形馬歯莧に似て水面に浮ひ、根は水の底にあり、莖細く絲の如く、葉も相似て小也、冬春の間蔓の如く繁りて長し、是を本草に水馬歯といひ、野菜博錄に長命菜と有て、おのつから祝の意にかなへりともいふへし、また引かはぬれつゝとよめるにても、いはゐつらは水馬歯莧なる事を知るへし

頭註 (二)和名抄、武藏國入間郡トアル處也、稻彥云入ヲイリ。トイヘルハ東語ナリ

(三)萬梯に岩に延てあるかつらなりといへり、その外にも說あれと、こゝにははぶきつ、いはゐは外の假字はたかへれと、こは伯耆の國の俗說なれは、附會して祝の義いふにて本はいはゐつるといひしなるへし

(四)與淸か說に、伊波爲都良は何にもあれ水中にはふゝろこれろ蔓草也、伊波爲の伊ハ發語にて、爲ハ比の通音也、そは大炊寮ハ大火司の義なるへきに、和名抄に於保爲乃豆加佐と書き、神樂歌に圓居を滿登比、法華驗記に山城國神南備を神奈井、舊本今昔物語廿卷に、池のそこひを底井ともかけるにてしるへし、逢初に藍染をよせ、椎に四位をよせ、鷹の木居に戀をよせしたくひ、いとおほかるもひがことにはあらす云

多波美豆良

十四 安波をろの乎呂田におはる多波美豆良ひかはぬる/\(二)
あをことなたえ

千蔭云、おはをは安房國の岳なるへし、ろは助字、其麓の田に生る也、自ら生たるなれはおはるといへり、たはみづらは玉かつらに同しかるべきか、多和む事と思ふは假字違へり、武藏の多摩川を多婆川と唱ふる如く摩と婆の濁音と常に通へり、みづらは眞蔓なれは、卽玉かつらをたばみつらともいふへし、末はいひ通はす事の絕る事なかれ、其かつらを引が如く遠長かれといふ也、ひかばぬる/\の詞上にも出る云、此は翁の說なれと猶考ふ

へし、按に多波美豆良を石松ならんと云説うけかたし、石松は山にも野にも生れとも、田におひされは也、今俗に（二）つるもといふものあり、田の中、溝堀なとに生る、形絲の如くして水の流にしたかふ、いと長きものは五六尺水になひきて色緑にしてうるはしく見つへきもの也、細くたわやかにてなよらかに打靡くかゆへに、弱水蔓といへるならんかと思へとも、波と和假字たがへり

頭註 （一）梯ニ奴流奴流ハ葛ノ長クヌルヌルト延テアル様ヲ云ナルヘシ
ヌルヌルハ蓴菜ノヌト同ク滑ラカナルヲ云、ナメシ皮ナト云モナメラカナル皮ト云事ナレハ、蓴菜ノ如クヌメル蔓ヲ云ナリ、俗言ニズルズル又ハドロドロ又ハヌラヌラナト云ト同シ意ナリ
（二）越後佐渡の海中にもつるもと云ものあり、形相似てふとく長さ四五尺かれたるものは色黒し、水にひたせは柔也、煮て食ふ、味佳からす

青角髪

巻七 青角髪依網の原の人もあはんかも石走の淡海縣の物語せん

眞淵云、神代紀に生天吉葛天吉葛此云阿摩能與佐圖羅と有て、この與左

圖羅は匏の蔓にて、莖も葉もよに青けれは、青みづらと云、こを匏也とするは、神代紀に神退之時、則生水神罔象女及土神埴山姫、又生天吉葛云云、延喜式祝詞式乃鎭火祭の詞に、右の火神生ませしことをいひていはく、更生子水神匏、川菜埴山姫、四種物乎生給氏、此能心悪子乃心荒比曾波水神匏、云云乎持氐鎭奉止教悟給支云云を合せて也、角髪は訓を借たるのみにて、蔓の意也といへりおもふに多波美豆良、青角髪大かた同しけれは、こゝもつるもの色の青くて依りあひなびく物なれはよさみといひかけしにや考へし

波麻都豆良

附箋 出雲風土記
霜黒葛閇耶閇耶爾河船之毛曾呂毛曾呂爾 師説閇耶作閉耶今從之

十四 駿河の海おしべに生る波麻都豆良いましをたのみはゝにたかひぬ

或說にいそべを東言におしへといふ、出雲風土記に波萬都豆良毛毛夜夜爾といへる如く、廣くはひたるかつら也、

何れといふ名は定めかたしといへり、和名抄に蔓荊（和名波末波非）と有濱延なり、今俗にはまかづらと云即はま都豆良といふに同し、都は綿津海或は山都芋抔と云つに同しくして助字也、豆良は蔓也、さて濱蔓は海河の邊、砂磧中に多し、蔓二三間も長くはひて土に付たる所々に根を出してしける、葉は圓くて面はみとり、背は白し、風に翻りて美し、夏枝の末に花さく、色は縹色也、花終れは實を結ぶ、此花實木葉ともに香氣多し、故に左渡にて葉をとり木の皮をはきて線香に作る、それを濱香と云、

頭註 (ハ)榊ニ黒葛也いへり、馬鞭草とよみかけるなりと云ハ非ナラン

夜麻都豆良

かみつけ野安蘇夜麻都豆良野をひろみはひにしものをあぜかたえせん

和名抄、防已一名解離（和名阿乎加豆良）延喜式にも防已、青つゝらと有、又黒葛六斤なとゝ見えたり、今も俗に山つゝら或つゝらふち、又伊豫にておをつゝらといひ、つゝらかつらといふ、山野ともに多し、古今に山かつの垣穂にはへるあをつゝら人はくれともことづてもなしとあるにおなし、蔓青くして細長し、葉の形色々ありて定まらず、夏花咲て實を結ぶ、實は圓にして小也、始は青く秋に至れは黒くなりて青き粉を生す、蔓を引て籬をゆふの料とす、又深山にはおほつゝらふちと云あり、葉の形こと更大にして厚し、此葉も色々異なる有て定たる事なし、今專ら籬或籠或箱等を結ふもの是也、蔓の長きものは二三間に及ふ、おもふに古へ山つゝらまた青つゝらとよめるは此おほつゝらふちなるへし、猶このたくひ多けれともことしけゝれははふきつ

頭註 (ホ)日本紀崇神紀ノ歌に、や雲たつ出雲梟帥かはけるたち蔓（黒葛多纒）頭纒さはまきさみなしにあはれ（無身）（柯怜）、古へ刀劍を纏し事知るへし、今も奥山人はつゝら卷とて鞘をまけり、山の谷間なとにおのかまゝにはひわたれるを、秋に成て苅、手ぐりをさめて箱につくれるをつゝら箱といふ、又物をくゝる料とす

玉蘰

巻三 人者よし念やむとも(ニ)玉蘰影に見えつゝ忘られぬかも

宣長云、山蘰は日影蔓のことにて、影の枕詞における也、山蘰日影とつゝく意にて、十四の卷に足曳の山かつらかけとよめるかけに同し、十八の卷にもかづらかげとあり、

みなかけは日影の蘰のこと也、然るを後の世に此玉蘰を山蘰の誤なる事をしらすして、影とつゝきたるを懸(カケ)の意と心得たるはひかこと也、十六の巻に足曳の玉蘰之兒(ヤマカツラノコ)とあるは足曳のとあれは山なること論なし、即ならべる歌には山蘰の兒とあり云々

十八 みまくほり思ひしなへにかつらかけかぐはし君をあひみつるかも

天平五年十二月二十五日新嘗會肆宴應詔歌(三) 大伴宿禰家持

十九 足日木乃夜麻之多日影可豆良けるうべにや更に梅をしぬはん

日蔭の蔓をかくる事也、女蘿は山に生る物なれは、山下日蔭と云、山蔭ともよめり、かづらけるはかづらかんともかづらきとも有て、かつらにするといふ詞也、今日日蔭のかつら懸て肆宴に侍る上に何そや梅を慕はんといふ也

十五 足曳之山縵之兒(ヤマカツラノコ)けふゆくとわれにつけせはかへりこましを

古今集に、けふそ我せご山かつらせよとよめるは日蔭也、是もかつら兒といはん爲にかくつゝけたり

十四 足曳の夜麻可都良かけましばにもえかたきかけを置やからさん

十九の巻の足日木の山下日影かつらけるといふに同しく、日蔭蔓なり、然るを日を畧てかげとのみいふは、古今六帖に三室の山の山かつらせん、古今集にあなしの山の山人も人も見るかに山かつらせよと有是也、ましばにもはしば／＼も得かたき日蔭かつらをいふ也、おきやからさんは奥山の老松なとにのみ生るものなれは、たやすくは得かたきを、徒におきからすは世に惜むへき事なるに譬へて、又も得かたき妹をあふよしなくて徒に戀るのみをいへり

十三 五十串たて神酒(ミワ)すへまつる神主(ハフリ)べか雲聚(ウズ)の玉蔭見れはともしも

神代紀一書に、眞坂樹八十玉籤、また五百筒野薦八十玉籤と有て、串は玉幣なとを著る料の榮木(サカキ)と小竹(シノ)也、齋串也、うすの玉蔭の雲聚はかな書なれは之の字有へし、推古記髻華此云二于孺(ウヅ)一と有て、後世心葉(コヽロ)とて冠の巾子(コジ)に

立そふるもの是也、その花に日蔭の蔓をつけて左右へたるゝ也、其日蔭の日を畧て蔭とのみいふは、集中に例有、玉はほめていへりと翁はいはれき、乏は希也、

按に集中に玉蘰、蘰蔭、日影夜麻可都良、玉蔭なとゝよめるもの、何れも本草に云石松也、今も俗にひかけのかつら、山かつら或はひかけくさ、又神だすき抔とよふものにて、上代(三)の神事には眞折をかづらとし、日蔭を襷とすと古事記日本紀に見ゆ、共に山深き所の人氣遠く清らなるものをとりて神事にもちうる也、其鬘とするは正木葛をもて額をゆひ、端を背へたるゝ也、鬘をかくるさま中頃の世よりは絹を細くたゝみてゆひたる也、後世は其末をあやにくみて下る也、古へのさまは式其外の書にも見えたり、さて日蔭の蔓は先達の說とも皆詳ならす、かつ混したる事多し、其思ひまとへるもとは、和名抄祭祀具に、蘿鬘日本紀私記云、爲レ鬘以レ蘿(和名云比加介加都良)また苔類に蘿唐韻云、蘿(日本紀私記云比加介)女蘿也、また苔類に松蘿辨要決云、松蘿一名女蘿(和名萬豆乃古介一云佐流乎加世)かくの如く二條に出して、皆松蘿を指に似たり、日蔭蔓は石松、佐流乎加世は松蘿なる事を辨へさるによれり、さるは神代紀に直木を蘰とし日蔭を襷とすと有にておもふへし、松蘿は深山木に生る苔類にして襷とすへき長きものにはあらす、石松は木に生ひす、地にはひて長きは五六尺もありて、枝多くわかれ、葉は土馬騣に似て色深綠なるも、少し黄はめり、夏の頃穗を出して花さく、長さ一寸許、然れとも花といふへくもあらす、是古に云日蔭の蔓也

頭註

(一)山蘰は影の枕詞にて、其つゝけの意は山かつら蘿といふ意也、さて影に見えつゝとは面影に見えつゝ也

(二)天平の頃まてかくよめるを見れは、紀記の日影は石松なること疑ひなし、延喜式の比には組糸を此かはりとそしける、それを日影の鬘といひて頭に懸たり、松蘿は苔の類にて深山の木に生るもの也、あたへ行をすこの山の眞木の葉も久しく見ねは蘿生にけりといへる歌は、松蘿なること其歌の下にいへり

(三)神代卷以二天香山之眞坂樹一爲レ鬘、以レ蘿(蘿此云比舸礙)爲二手繦一(手繦此云多須枳)云云

古事記に手二次繫天香山之天之日影一而爲レ鬘二天之眞折一而とあるをよしとす、眞淵は二書ともに本は眞折を繦とし日影を鬘としてと有けるを、いと後に誤て右の如く日影を繦眞折を鬘とは書し也、眞折の葛長くして強きものなれは繦とすへく、日影は深山の古木に生る蘚にて弱けれは、鬘には懸へく、繦にはたふへからすといへるも誤れり、諸說とも日影を松蘿と心得たるゆへ、此說出來れり、日影は石松にして長きは丈斗もありて強くやはらかなるものにて、其かたいと美しきものなれは、繦ともなし鬘にもかくへきもの也

（一）玉葛

卷三　大伴宿禰娉巨勢郎女時歌

玉葛實ならぬ木にはちはやふる神そ著とふならぬ木ことに

葛は實なる物ゆへに、次の言をいはん爲に冠らせたるのみ也、さて實なるといふまてにいひかけて、不成の不まてにかけぬ類ひ集中に多し、木とは何にもあれ實なる木をいふ、實のなる木の實ならぬには、神の領し給ふと云諺有し也

同　巨勢郎女報贈歌一首

玉葛花のみ開てならさるはたが戀ならめわはこひもふを

右の實ならぬ木といふにこたへて、花のみ咲て實ならぬ如くまことなきは、たかうへの戀にかあらん、我は花のみにはあらす、まことに戀おもふものをといふ也

十一　山高み谷邊にはへる玉葛たえん時なく見るよしもかも

十二　谷せばみ峯べにはへる玉葛はへてしあらは年にこすとも

十四　谷せはみ峯にはひたる多麻可豆良たえむの心我もはなくに

これら何れも毛詩の葛之覃施于中谷てふに似たり、人丸は他國の事一つたにとらさるを、かたへにはうつしよめる人も有けん、拙かりけりと眞淵いへり、卷の三にも、（一）玉葛絶事無在管裳、云云眞淵云、こは蔓の長くはひひろごる物なれはたえぬとも長きともいへり、玉とは是も子ある物なればいふとのみにて、此外に説ある事をきかす、不可也〔按に玉葛は本草蔓草類の天門冬なるへし、和名抄に天門冬和名須末呂久佐とありて、その實のなれる形すまろ星のあつまれるに似たるかゆへに、すまろ草の名を負しならん、また玉葛といふ名も玉蘰に似たるよりして負る名なるへし、さて此草の形は蔓長く延て樹をまとふ、葉は杉に似て軟にて深緑色なり、光り有て美し、夏の末に白き花咲て實を結ふ、實はまろくして始は青く秋になれは白くなりて水晶の如く透きとふる、其形絲もて玉を貫たるか如くして玉蘰の如し、根は一科に指の大さなるもの數多あつまりたり、とりて藥とし又菓子に製す、

頭註 (一)書紀ニ押木珠縵ニ云立縵、又云磐木縵とあるは、貞觀儀式元日、禮服制親王四品以上冠者漆地金裝、云云 以ニ白玉八顆ニ立ニ櫳形上ニ、以ニ紺玉廿顆ニ立ニ前後押鬘上ニと見えしものにて、此の玉縵とは別物なれとも、其狀に此玉かつらの似たる故に、名負しならん、玉かつらはふ木あまた、又岩もとははへる玉かつらねかたくと言り、又常磐木のかけ野にしける玉かつらははへるうねのゝ玉かつらなと云へり、

是土紅山ナルヘシ、古今ニ玉かつらはふ木藻鹽草に此玉かつらはつた也玉とは一切の物をほめたる詞也云云

(三)〇玉蘰 別條トスヘシ

卷十二 玉蘰木懸時無戀友何如妹爾相時毛名寸云云と有て、種々の玉を貫たれつゝ頭にかける蘰を云

十二 紫綵色之蘰花八香爾今日見人爾後將戀鴨

此かづらは玉蘰也、其貫る緒を紫に染たるか花やかなる也、花はうるはしきに譬ふ也、袖中抄云此玉蘰と玉葛とまきれぬへし

〇玉蘿トハタマハ手股ノ義、カハ搦コト、ツラハ列コトニテ、手ノ股ノ如ク續キ列ト云名ニシテ、蔓艸ヲ云也

蘿

三

いつのまも神さびけるか香山の桙榲が末に蘚むすまでに 鴨君足人

あたへ行をすての山の眞木の葉も久しく見ねは蘿生ひにけり

和名抄に、松蘿一名女蘿和名萬豆乃古介一云佐流乎加世とある物是なるへし、松にあるを松の古介といひて、其外の樹にもあるをはたゝ蘿とのみよめり、然れとも深山の眞木なとに生るは皆松蘿をいふに似たり、卷の七に詠レ蘿と端書ありて、三芳野の青根か峯の蘿席とよめるにて知るへし、たゝ廣く數多の苔をよみたれとも、一首の歌の意によりて委くいふ時は、をすての山の蘿は(二)松蘿也、松蘿は松にしも限るへからす、深山の木には何れにも生ひ出るもの也、木に付たる所はたゝ一筋にして、末にては枝多く別れて總の如く打たれて色白くして少しく青きも有、長きは二三尺、短きは漸く四五寸はかりなり、駿河の富士にてきりさるかせといひ、日光山にて雲のはな、紀伊にて木ひげ、阿波にてさるのをかせといふ、皆松蘿にして石松とは大いにたかへり

頭註 (一)〇卷二ニ子松末爾蘿生萬代爾と有によりて、私になほしつと久老云へり、

(二)蘿は日蔭なるよし師はいへり、今按和名抄蘿比加介女蘿也、又云松蘿一名女蘿和名萬豆乃古介一云佐留乎加世と見えた

り、ひかけもさるをかせもともに女蘿とあれはひとつものたるを、いかて和名抄には條をことに擧けん、今のものしり人の日かけといへるものは木ぬれに生るものにあらす、さるをかせは實に糸をかけたるごとく深山の木ぬれに生て、古へ蘚(コケ)といへるはこれ也と久老いへり

古今六帖に松の木のこけのみたれて

元輔集に松のこけ千年をかけて生しけれ鶴かひこのすとも見るへくなと有も、苔猿をかせとて今も有さかりこけにてひかけの事也

(三)新古今にときはなる松にかゝれるこけ見れは年のを長きしるへとそ思ふ、是は松蘿をよめる事あきらけし

松蘿別錄曰、生熊耳山谷松樹上、弘景曰山東甚多、生樸樹上、而以松上者爲眞、時珍曰陸佃埤雅言、女蘿是松上浮蔓云々

蘿席

詠蘿

卷七　三芳野の青根か峯の蘿席たれかおりけんたてぬきなしに

深山の日影さゝさる地に生る苔をひろくよめり、こゝろみにいはゝ、本草に云土(二)馬騣なるへし、和名にすきこけといふ、されと杉の木に生る苔にあらす、其葉絲の如く枝なくして高さ二三寸、杉の形に似たるによりてしかよへる也、山陰の地にしきみちて席をしけるか如くなるを、馬の騣に見なして唐にて土馬騣とよへるならん、色こき絲にして美(ウル)はしく見つへきもの也

卷六　奥山の(三)磐に蘿むし恐くもとひ給ふかも思ひあへなくに

此歌なとは、和名抄に卷柏(和名伊波久美 一云伊波古介)とあるに近し、奥山の磐ならては生ひす、今も俗にいはこけ又いはまつ、いはひばとも云、葉扁柏(ヒノキ)の葉に似て薄し、其葉乾く時は卷て、潤へはのひて元の如く成(ナリ)て枯るゝ事なし、故に正字通に不死草、花鏡には長生草といへり、頌曰、宿根紫色、多鬚春生、苗似柏葉而細、拳攣如雞足、高三五寸無花子、多生石上(本綱)

七　奥山の石(イハ)に蘿生(コケムシ)かしこけとおもふこゝろをいかにかもせん

かしこけれとも也、今は貴人を戀ふるをたとふ

頭注

(一)土馬騣、禹錫曰、所在背陰古墻垣上有之、(本綱)在墻上抽起茸々然(典籍便覽)

(三)卷三長歌、甘嘗備乃三諸乃神之帶爲明香之河之水尾速生多米難石根蘿生左右二(下略)てふは、速き川水の常に洗ふ石には、苔も生ひ留りかたきを、其石にしも苔生む世までにといへるにて此苔はたゝ譬へていへれは、奥山の磐に蘿むすとよめる類にあちす

萬葉集名物考　目錄

草　類　二　七拾九種

頭註　(※)久具

萬葉第三ニ、鹽干の三津のあまめ（海女）の久具津持玉もかるらん率行て見ん、クヾツハクヾト云草ニテ、編タル籠ノ如キ物ナリ、葛ヲツヽラト訓ミ、夫レニテ作タル雜物入ルモノヲツヾラト名付ル如シ、

久具津ト云ヘル津ハ助辭ナリ、按スルニ今國人馬ニモノ食ハせしとて、馬の口さし入る斗の籠をもて馬の口にかくるを口籠と云、又藁を組ても作れるもともにくつごと云、其形沓に似たれは、ク、ツハ口沓の意にてもあらんか、

久老ハ槻落葉に云、袖中抄にくゝつとは藁にて袋の樣にあみたるものなりと云ひ藻鹽草に海人の藻など入也世ニくゝつめたと云リとあり、うつほ物語に中納言はきぬのあやを絲のくゝつに入て、供養のやうにて三所ばかり奉り給ふと見えたり、

萬葉集名物考

草　類　七十九種

由利

巻七 道の邊の草深由利(クサフカユリ)の花咲(ヱミ)にゑましゝからに妻といふべしや

巻八 吾妹兒か家の垣内(カキツ)のさ由理花由利といへれはよそへぬに似る

二十 筑波嶺の佐由流能波奈のよとこにもかなしけ妹そひるもかなしげ

草深ゆりは草深き所にさく百合と云也、ゆりはよりにて相逢をいふ、佐由流はさ百合也、宣長云、古言に後の事を由利といへり、こゝの歌も即由利を後といふことの序とせり、百合はおのつから山に生して、五月に花咲ゆへ、俗にさつきゆりと云、(*)即さゆり也、葉丸く高さ二三尺、葉の形竹の葉に似て厚く光りあり、故にさゝゆりとも云、花は莖の梢に横むきて咲、或二三花或は四五花、六瓣にして長さ四寸斗、もとは細くして末は開て卷反り色は白きも薄紅もあり、根は蓮の花の形に似て白し、是本草に云百合なり

頭註 (*)即古事記に云山由理草なるへし

姫由理

巻八 夏の野のしけみにさける姫由理のしらえぬ戀は苦しき物を　坂上郎女

姫由理は紅にてことにちひさけれは、夏の野の草におほはれて咲、姫はすへてうつくしくちひさきものを云也、野にも山にもあり、皆天に向て咲、濃紅の花さくをひめゆりといひ、黄なる花咲をきひめゆりと云

根都古具佐

芝付の御浦崎なる根都古具佐あひ見すあらはあれこひめやも

根都古具佐は古へより何らの草とも説なし、阿波にてねぢはなと云草あり、又ねぢこはなとも云、夏の初早苗植るころ野の芝生の中より一尺斗たゝ一筋ぬき出て花さく、其根年を経ること久しきものは、花の莖二筋も三筋

も出るなり、其形打紐の如くねちれて花さく、ちいさくして薄紅なり、是をねつこくさならんといふは、ねちこはなとねつこ草とおなし意なり、ねぢこねづことといふ名は、赶車（ワタクリ）の心のねちれたるをしんことと云、そのしんこに似たる花ゆへ然よへる也、又國人しんこばなと云、京にてはもぢすりといへり、漢名は詩經疏云綬草(※)なり、綬は字書に組の長き者と注す、此花の美しきを形容せんとて綬といへるなり

頭註 (ホ)鷊小草也、釋草云、鷊綬郭璞曰、小草有雜色似綬也 毛詩草木攷 戻摺（モチズリ）と云ハ、織物に戻織（モヂオリ）と云ものに形容（カタトリ）たるよしの名也、花の狀戻織の如く纏（マトハ）れ縺（モツル）絲如くなれはしかよへるなり

葵 アフヒ

契沖云日ニ向ヒテ傾ク草ナレハ、仰日ノ意ニ名付ル歟、此葵ハ和名ニモ園菜ニ載テ、延喜式ニ天子ノ供御ニモ奉ル由見エタリ、云々今ノ世ハ失詠數種物歌タルニヤ知人ナシ、カラアフヒ（アフヒ）ハ蜀葵ニテ、是ト異也、此說自也、

梨棗黍に粟嗣（ツギ）はふ葛の後もあはんと葵はなさく

春海云、梨の實なるを始にて、それより棗實なり、さて黍を蒔、それに次て粟を蒔といふ意にいへるなりと、かくの如く次第してあるによれは、葵花さくといふ葵は詩文に葵花と作るものにて、卽本草の蜀葵也、此說非なり今はなあふひ又たちあふひとよふ、園に植て花を賞す、高さ七八尺に及ふ、五月に花咲、花の形木槿に似て大なり、色は白きも紅きも紫も黑きもあり、祕傳花鏡云、蜀葵陽草也、一名戎葵一名衞足葵、言其傾ㇾ葉向ㇾ日不令照其根(一)とあるによれは、左傳云、鮑莊之智不ㇾ如ㇾ葵、葵者猶能衞ニ其足一とあるも蜀葵ならんか、また花鏡に向日葵とあるは今ひまはり或ひぐるまと云ものにして、葵の類にあらす、また本經逢原に、(二)冬葵子向日葵子也と云は、かんあふひと云て冬より春の始に花咲く葵なれは、此集によめるとは異也、古への五菜の一なり、又六帖古今によめる葵は二葉あふひと云草にして、こゝとは別なり

頭註 (一)文選七、陸士衡園葵詩 朝榮東北傾夕顥西南晞、枕草紙、からあふひはとりわきて見えねと、日のかげにしたかひてかたふくらんそ、なへての草木の心ともおほへておかしき
(二)冬葵古人日用の常食也、故に廣雅に、葵爲二百菜之主一と云へり、五菜は韭薤葵葱藿なり

野干玉

巻四 野干玉の黑髮しろくかはりてもいたき戀にはあふ時有けり

同 夜干玉の其夜の月夜けふまてにわれはわすれすまなく
思へは

巻六 烏玉の夜のふけゆけは久木生る清き河原に知鳥しは鳴（山部赤人）

古事記に、奴婆多麻能久路岐美祁斯遠、云々萬葉に、此外黒玉之玄髪山、また烏珠夜者闌爾乍、雄畧紀に、農播陁磨能柯彼能矩盧古磨、これら皆ぬは玉とよめり、巻二十に（下總國防人歌）牟浪他麻乃久留爾久枳作之云々、眞淵云、こは防人のかた言に牟浪たまといへる也、古事紀、日本紀、萬葉なとに假名にては必奴婆多麻とのみ出て、宇婆玉、武波玉なと出る所なし、然るに防人の歌にたゞ一首のみ牟浪他麻と云は、方言にしていふにたらす、喜撰式てふものに、黒きにはうばたま、夢にはぬばたまといふとあるは、皆據もなきこと也、さて(二)ぬばたまてふ辭は、日本紀私記に(三)烏扇之實也といへるをよしとす、和名抄に射干一名烏扇（射音夜干音如寒此須安布木）又云、考聲切韻云、狐射干也、關中呼爲二野干一語訛也と、しかれはぬは玉に射干玉と書は正字にて、夜干、野干なと書は音を借たる也、且射干の實は黒き玉の如くにして野に生る物ゆへに、わか國には野眞玉と云なるへし、又烏玉、黒玉なと書しはその實の黒き玉に似たれは、推て此字を假りて用ゐたる物也、猶くはしき事は冠辭考に見えたり

頭註

(一)萬葉考別記に、久老云奴婆玉といへる言の意を考るに、東國の方言に寐をぬまるといへは、奴婆は奴麻也、（麻と婆は近く通へり）多麻はその間をいふにて、寐る程の夜といふより、夜は暗きものなれば、黒ともつゝけ月とも夢ともつゝけたり、妹につゝけたるは寐の一言にかゝれり、舊説にてはこの妹につゝけたるをいかにとも解へからす、また黒馬ともつゝくと師のいはれしはあしゝ、こまの來る夜とありて夜の言にかゝれり、集中奴婆に野干の字を假れるよしは師の考に見えたり、

(三)古事記傳に、或人の説に烏扇の葉は羽に似たる故に、此草を野羽と名け、其の實を野羽玉と云なりと云るぞ宜き、信に烏扇といひ、又今俗に檜扇と云も、葉の羽に似たる由なり、冠辭考に此レを野眞玉なりとあるはいかゞ

(*)穂蓼

吾屋戸の穂蓼ふる幹つみ生し實になるまでに君をしまたん

こは去年の秋の末に枯たる蓼の古莖の實を採納めて、今年の春蒔生しそれか又子になる秋までも同し心に君を待

たんといふ也、萬葉考に委し、十六の長歌に八穗蓼乎穗積乃阿曾我、云云八穗蓼とはひと本の蓼に多くの穗あるものなれは、彌穗といふ也、且古へ蓼を摘て用るは、内膳式に蓼葅てふあり、穗積は大和の地名也、多く人家に作るものは本草に云紫蓼なり

頭註 (＊)播磨の赤穗にとうたてとよひて、名産の蓼あり、赤穗の地名はこの蓼によるといへり、形紫蓼に似て、秋に至て赤き穗を生す、正に枯んとする時全草皆赤し、是は本草に云赤蓼なり

水蓼

卷十三に帛叫楢從出而水蓼穗積至云云

水蓼はもとより水に生るもあれと、こゝはこと更に水なるをいふへくも覺えねは、稚蓼てふ意にそ侍らん、專ら稚穗をつむものなれは也、水は借字、稚は若く美き也と眞淵いへり、本草に水蓼といふは、俗にかはたでといふ、葉青く柳に似て細長し、川邊に多し、味辛きをいへとさにはあらて、稚穗のみつといへるそ穩なりける

濱木綿

卷四 三熊野の浦の濱木綿百重なすこゝろはもへとたゝにあはぬかも

濱木綿は今濱おもとゝ云、宣長か玉勝間に委し、葉は萬年青に似て其莖幾重もかさなりて生ひ出るなり、七月の頃花咲、其色白くて垂れたるか木綿に似たるからしかよふならん、今紀の國の熊野の浦、又そのちかきわたりの浦々にも有て、須賀島といふ所には殊に多くありといへり、漢名は廣東新語の文珠蘭といふにあたれり、此草いたく霜雪を恐るゝものゆへ、南の海邊には多けれとも、冬の間は葉のすゑなかは枯るれとも、春になれは又新たなるか生ひ出て榮ゆるもの也

澤蘭

天皇太后共幸二於大納言藤原卿家一之日黄葉澤蘭一株拔取令レ持二內侍佐佐貴山君一遣二賜大納言藤原卿幷陪從大夫等一御歌一首

此里は繼て霜や置夏の野に吾見し草はもみちたりけり

和名抄云、澤蘭 和名佐波阿良々木 一云阿加末久佐 生二澤傍一故以名レ之、また延喜式云、大和國三十七種澤蘭十五斤とあれとも、皆眞の澤蘭にはあらさるへし、此に云は今ふしぐろ或しろ根と云草也、水邊に多し、莖四角にして節黑く根白し、故

にしかいふ、葉細長くして粗き切れあり、秋の頃高さ四五尺となる、葉の間に白き花咲、花葉ともに香氣あり、是は救荒本草に、地瓜兒と云にあたれり、此集及ひ延喜式に澤蘭と云は此草也、此草の葉稀にもみちするものあれは、うたかふへくもあらさらんかし、眞の澤蘭は今俗にさはひよどりと云もの也、地澤の傍に生ひて、蘭草(フジハカマ)に似て小く葉も狹し、莖に毛有、苗の高さ一二尺、秋花咲、花も亦相似て淡紫と白との二色あり、本草に澤蘭根紫黑色と云ひ、葉尖微有レ毛不レ光レ潤と云にかなへり

麻素

上つけぬ安蘇の麻素むらかきむたきぬれどあかぬをあとかあかせん

上野の安蘇の里に作る眞麻(マソ)の群りて有を序とす、和名抄周禮注云、苧(和名加良無之)麻屬白而細者也とあり、今まをと云もの是也、出雲にてしらそ、土佐にてしろそ、佐渡にてやまそと云也、本草云、苧麻山にあるを山苧(ヤマソ)といひ、野にあるを野苧(ノマオ)といふ、それを植て圃に作るものは卽苧麻なり、葉の形楮(カウゾ)に似て背白し、夏皮を剝きとり水にひたして外の粗皮(アラカハ)を去り、內つらのしろき糸をとり、布に織り、晒して眞白なるを白苧(サラシ)と云、越後より出すもの殊によろし、奈良より出るものはをとれり

麻　櫻麻　安左乎　安佐提古夫須麻　麻衣　白麻衣

藤原宇合(ウマカヒノ)大夫遷レ任上レ京時常陸娘子贈歌

卷四　庭に立麻を刈干しきしのふあつまをみなを忘れたまふな

卷七　麻衣きれはなつかし木の國の妹背の山に麻蒔吾妹(アサマクワギモ)

庭におり立て麻をかり、その麻からを敷並て干すをもてしきしのふといひ下したり、しきしのふは重々したふ意、東女(アツマ)はみつからいふ也、卷九にも、小垣內の麻を刈干とあり、和名抄云、(ヲ)麻(和名乎一云阿佐)枲屬也、爾雅注云、枲(和名介無之)麻無レ子名也とあり、本草云大麻なり、麻に雌雄あり、をあさは花はさけとも實を結はす、卽枲麻なり、古名を介無之と云、今俗にさくらあさと云、雌をみあさと云、花なくして實を結ふ、救荒本草に麻母と云是也、六月の頃蒸して皮をとり、さらして布に作るを麻布(アサヌノ)と云

卷十一　櫻麻(サクラヲ)の苧原(ヲフ)の下草

卷十二 櫻麻の麻原の下草早おひは妹か下紐とかざらましを

今は櫻あさと訓たれとも、古今六帖にさくらをとあるをよしとす、をふと重ん料なれは也、さて櫻麻といふを、千蔭はさくらてふ所より出る麻をしかいふかといへとも、今も櫻麻を今にさくらあさといふをよしとす、麻原は麻の生る畠をいふなり

卷十四 安左乎良を遠家にふすさにうますともあすきせさめやいさせ小床に

良は助辭也、麻笥に多に也、一首の意は今宵さのみ麻を多くうますとも、あすの日もあれば、明日又うみたまへ、今宵は其業をやめていさ早く小床に入て寢んといへり

卷十四 庭に立安佐提古夫須麻こよひたに妻よしこせねあさでこふすま

麻布の小衾也、提は多倍の約言也、つまよしこせねは夫を依來させよと也

卷七 千名にはも人はいふともおりつがんわかはたものゝ白麻衣

同 今年ゆく新島守か麻衣肩の間亂者誰かとり見ん

太宰府に防人司あり、西蕃の寇を防かん爲、東の兵をつかはさるゝ也、新に行をにひさきもりと云、肩のまよひは和名抄紕萬與布一云與流繒欲壞と有て、衣のやれぬべくよれるをも旅にして誰かとりあけんと云なり

頭註 (＊)古語拾遺、好麻所生故謂之總國、古語麻謂之總也、今爲上總下總二國とあり

伊良

卷十七 長歌上略 伊多家苦乃日異麻世婆可奈之家口許己爾思出伊良奈家久下略

此伊良は古事記仁德條御歌、伊羅那雞區そこに思ひてかなしけくこゝに思ひて云々といふをとれり、契沖云、大和物語に我さまのいといらなくなりたるを思ひはかるに、はしたなく蘆も打捨て走りにけにけり、和名抄苛何音和名伊良 小草生刺也とあり、是によらは無苛の意か、又翁の說に燃るをいるといへり、胸のいらるゝをいふならん、源氏物語に心いられなとあるに同しといへり、契沖の說にしたかへは、今俗に云いらくさなり、又たゝいらとも、人さしくさ、いたいたくさなとゝいへり、本草に云蕁

麻也、何地にも多し、莖葉ともに刺ありて、人を螫こと蛅蟖の如し、莖は四角にして葉は苧麻に似たり、人この草にふれて腫痛む時は鹽水にて洗ふべし、洗へは速に痛のやむもの也

久君美良 ○韮(*)オホミラ和名抄ニラ。ミラ同韻にて通す

きはつくの岡のくゝ美良われつめとこにものたなふせなと摘さね

きはつくの岡、常陸の眞壁郡に有といへり、久君美良は字鏡に菲久々爾雅菲注本草曰一名蟲蛉菲一名蝦蟆藍 薤奈女彌良 韮太々彌良 とあるによりて、濱臣云菲をくゝとよめるは、蝦蟆よりの訓ならん、祝詞に谷蟆なとあり、さてこゝのくゝみらは菲と薤韮との内なるへしといへるはいまたしき考也、卷十四に上つけ野左野のく久多知とよめる九久に同し、和名抄に莖久々太知蔓菁之苗也と有て、俗に云莖立也、されは久君美良は莖韮なるへし、菲は只名精なり、薤は和名抄於保美良と有、今云らつきやうなり、韮は和名抄に古美良と有、今云にらまたふたもしともいふ、苗を刈とれは速に復出る、夏莖立て白き花さく也、久君美良は莖たちし韮をいふ也

頭註 (*)日本紀神武天皇卷ニ 瀰都瀰都志、倶梅能故邏餓、介耆茂等那、阿波赴那破、粟田介瀰羅毗苫茂苫、一本蘸曾迺餓毛苫、曾禰梅其妻屠那藝弖、于笞弖之夜莽務、

蒜(*)

卷十六 醤酢に蒜都伎合てゝ鯛もかも吾になみせそ水葱の煮物

和名抄蒜和名比流 食療經云、搗二蒜齏一比流豆木 齏四聲字苑阿倍毛乃 擣二薑蒜一以レ醋和レ之と有、かてゝはかね合する義を以て書り、歌の意は醤と醋とに蒜を搗かてゝはた鯛もかなと願ふ吾なれは、水葱のあつ物なとはほりせすといふなり、蒜は山蒜を圃にうゑて培養するものにて、即小蒜なり、春の間苗及ひ根をつらねとりて食ふ、夏に至り莖を抽出る一二尺、其梢に數多く群りて花咲、實を結ふ、實の大さ豆の如し、落ておのつから生す、本草に山蒜澤蒜石蒜の分あれとも、何も皆その生ひける所につきての名にして、もとはひとつもの也

頭註 (*)古事記中卷仁徳記の御製に、伊邪古杼母怒毘流都美迩比流都美迩とによみませしも、蒜ハ古ヘ饗膳の下菜なりし事知るへし、つみにといへるは葉を摘るか又根をもとれるたるへし

山菅 菅ニ作ルヘシ

大伴宿禰家持悲怜物色變化作之也

咲花はうつろふ時あり足日木の山菅の根しなかくは有けり

巻十一 山菅のみたれ戀のみせしめつゝあはぬ妹かも年は經につゝ

同 足曳の名に負山菅押ふせて君し結はゝあはさらめやも

同 菅の根のねもころ君かむすひたる我ひものをゝとく人あらし

同 美酒の三室の山の石穂菅ねもころ吾は片思ひそする

同 奥山の石本菅の根深くもおもはるゝかも吾もふ妻は

同 高山の岩に生る菅の根のねもころ／＼にふり置しら雪

七ノ廿三 妹かため菅の實とりに行吾を山路惑ひて此日くらしつ

和名抄麥門冬和名夜末須介とある是なり、此集に青菅山とよめるも別に山の名にあらす、常に常葉なる山菅の茂れる山といふことなりとそ、さて本草に大葉小葉の二種あることをいへり、その大葉といへるは即山菅にして山におほし、葉細くして長さ一二尺斗、多く群り生ひて夏長き穗を出して薄紫の花咲、圓なる實を結ふ、根は糸の如く長く這ひみたれ、且根に丸きもの數多つけり、即門冬なり、この根の長く延るものゆへ、菅の根の長春日とも菅根の念亂てとも冠らせたり、又小葉麥門冬と云は、俗にじやふがひけ或りうのひけなといひて、何處にも多し、葉狹くして長さ一尺斗、花の莖二三寸に過す、葉にかくれて見えす、實の色瑠璃の如くしてうるはし、根の形大葉のものに似てちいさし、妹かため菅の實とりにゆくとよめるなとは此(三)小葉のものともいふへし、大葉の方は實のいろ黑くしてさのみうるはしからされはなり

頭註

(一)菅、スハ統、カハ搦事ニテ、菅ノ根ハ土ニ搦ムコト懇ナル草也、ネモコロトハネハ根ナリ、モハ舫也、コハ凝也、ロハ塲也、故ニ根舫凝塲ノ心也、

大納言大伴卿 巻三

奥山の菅の葉凌ふる雪の消はをしけん雨なふりそね

久老云山菅は麥門冬也、しぬぐといふ言の意を考るに、自ラ堪忍ぶをしのひしのぶといひ、他のたへがたきを是よりおしてするをしのぎしのぐといふ、神代巻に凌二奪吾高天原一とあるしぬき即是にて、凌礫の字意也、されはこゝも菅の葉をおしなびけてふる雪といふ意となれり

(三)七ノ巻に眞鳥住うなてのもりの菅の實を衣にかきつけきせん兒もがも、こゝも小葉のものゝ實をよめるならんか

(＊)菅 菅原

巻十一 三吉野の水隈か菅をあまなくにかりのみ苅て亂りなんとや

和名抄菅 音姦字或作菅 讀和名須計 草名也とあり、古へより菅を須計と訓るは誤りなり、菅はかやなり、集中に多可我夜とよめるもの即菅にあたれり、(加夜の條下にさくいへり) さてすけをよめる歌いと多けれは、おの〳〵條をわかちてそのけぢめある事を知るへし、詩經に南山有レ臺(臺即莎草)といへるものすげにあたれり、臺はすげの惣名なり、注に云、莎草はすげ、かやつり草、く丶の類をすへていふの名也、爾雅云、臺有二二種一、一曰山莎 莎作蓑 一曰草三稜 稜作笠 とあるにしたかふへし、山莎は蓑に作るゆへ俗にみのすけといひ、草三稜は笠に作るゆへかさすげともこすけとも云

頭註 (＊)古事記、高津宮御宇、天皇の御製に、やたの一本菅は、子もたず、立はあれなん、あたら須賀波良、ことをこそ、須宜波良といはめ、あたら須賀志賣、と一首の内に言をかへて須賀とも須宜ともよみ給へり

七 眞珠付越の菅原わか丶らす人のからまくをしき菅原

またまつくは枕詞、越智は大和高市郡也、息長の遠智とよめるは近江也、いつれにか、

小菅

巻十一 吾妹子か袖を憑て眞野の浦の小菅の笠をきずて來にけり

神樂歌に奈加止美乃古須氣乎佐紀波良比伊能利志古登波、云々眞野は、菅に名ある所なれはつゞけたり、小菅と訓る非也、今按、小菅と訓べき歟、小田小山なと云小と同しく小はほむる詞也、

巻四 (二)眞野の池の小菅を笠にぬはすして人のとほなをたつへき物か

同 山城の泉の小菅おしなみに妹かこゝろはわかおもはなくに

巻十三 師名立、都久麻左野方、息長之、遠智能小菅、不連爾、伊苅持來、不敷爾、伊苅持來而、置而、吾乎令偲、息長之遠智能小菅、とあるは、笠に作る菅にして、即草三稜なり、都久麻と息長は近江國坂田郡也、左野方は筑摩郷

の内也、遠智は息長の内に有、眞珠付越能菅原ともよみたれは、菅を出す所なりけり、今は近江の簗瀬といふ所に多く作り、夏の頃苅とりてさらせは色眞白くなるをもて、笠にも作り或は薦にもあみて敷ものなれは、かくよめり

頭註 (一)眞野浦池ハ攝津に有
(二)泉ハ山城の相樂郡に有

(*)在間菅

巻十一 王の御笠に縫る在間菅ありつゝ見れとことなき吾妹

巻十二 昔人の笠に縫てふ有間菅ありての後もあはんとそ思ふ

大嘗會式云、車持朝臣一人、執ニ菅蓋一云々と有、仲哀紀に皇后の御笠の事も菅と見ゆ

頭註 (*)有間は攝津の國の有間郡の菅もて、大嘗會の御笠を津の國の笠縫氏か奉りしとそ、中世の歌に難波菅笠とよめり

菅笠

十一 おし照る難波菅笠おきふるし後は誰かきん笠なをなくに

同 三島菅いまた苗なり時またはきすやなりなん三島菅笠

詩經都人士の章に、臺笠緇撮と云、臺笠は即すけかさなり

(*)白菅

十一 葦多頭の騷く入江の白菅のしられん爲と乞痛めるかも

三 去來兒等倭部早白菅乃眞野乃榛原手折而將歸 高市連黒人

三 白菅の眞野乃榛原往左來左君社見良目眞野乃榛原 黒人妻答歌

白菅は菅の一種なりといへともこは笠に縫ためにさらして色の眞白くなるものゆへ、白菅といへるにて、別に白菅といふものあるにあらす、

頭註 (*)白菅發語也、別記に契沖云、菅ハ干まゝに白くなるゆえに白菅といふ、眞野とつゝけたるは、眞菅と云へは眞の一言につゝくなりといへり、久老云、巻十一にあしたつの云々といへる歌あり、干まゝに白くなる故にいふといへるは非也、もとより白菅と名おへるもの有と見えたりといふ、此説に依て按るに、菅に一種葉のしらけたるありて、葉の幅も世の常のよりはいさか廣し、眞菅とよめるも是なるへし

眞菅

十二 眞菅吉宗我の河原に鳴千鳥間なし我せこわかこふらくは

眞とはほむる詞也、眞菅は笠にぬふすけを云、菅を曾我と

も云、即語も通ふを文として重ねたる也、吉は借字にて眞菅與菅の河原といふ、しの助辭を添たる也と眞淵いへり

菅枕

十四 足柄の間々の小菅の菅枕あせかまかさんとろせたまくら

駿河に足柄郡間々下の郷といふ有、あせは何そといふ東言也、小菅の若くしなゆるをもて枕にゆふ事あり、今猶田舍にてする也

頭註 順菅
七ノ卅四、天なる姬菅原の草なかりそねみなのわたかくろき髪にあくたしつくも、天在ハ日とかけたる枕詞にて、ひめ菅原ハ地名なるへきよし翁はいはれき、宣長ハ天なるさゝらのを野のたくひにて、たゝまうけていふのみ也といへり、此說によるへし

七相菅（＊）

七ハたゞ數の多きをいふ語にて、多くの菅をいふと千蔭いへり

卷三長歌 天なるさゝらの小野の七相菅手に取持て久堅の天川原に出立て潔身てましを（下略） 祓に菅を用る事ハ、神樂歌に中臣の小菅をさきはらひなと見ゆ、別に七相菅といふものあるにあらす、さゝらの小野は卷十六にも天なるやさゝらの小野にちかやかりともよみて、天にかくいふ野有といふ諺の有しならん、契沖は地名ならんともいへり

頭註 （＊）玉の小琴に
七相菅をナヽフスゲとよめり、なゝふは七節の義也、みちのくのとふの菅こもなゝふには君をねさせてみふにわかねん、久老云相ハふの假字に用ふへし、太をほの假字に用ひしと同例なりとそ、ふは節の意なれは、七ふ菅とよむへし、七節ハそのたけの長けれは也、菅ハ祓に用ふるものなり、寸賀といふ名もすが〳〵しきものなれは名におひけん

菅根

卷六長歌 千鳥鳴、其佐保川丹、石二生、菅根取而、之努布草、解除而益乎、往水丹潔而益乎（略下） 菅の根取て之努布草ハ、祓は菅もて掃清むれは也、身潔は水もて身をそゝぐ也、しぬふ草はこゝは草にあらす種也ハ菅の根といふはおなしく小菅なり

菅根のねもころ妹に戀せましうら思ふこころおもほえぬかも

眞淵云、菅根ハ山菅なりとそ

菅實

卷七 眞鳥住卯名手のもりの菅根を衣にかきつけきせんこも

かも
根は實の誤にて山菅の實もて衣にすらんといふなるへし、上にも妹か爲菅の實採に行我をとよめれは、かた〳〵菅の實ならん、かきは詞のみ

靜菅

巻七旋頭歌　橋立の倉椅川の河の靜菅我か苅て笠にも編す川の靜菅

しつ菅は下草の意にて、菅の小きをいふか、別にしつ菅といふものあるにあらす、菅の水底に生ひ沈めるを沈菅といへるか、靜の假字ならん

山草

十二ノ廿七　山河の水陰に生る山草(*)のやますも妹かおもほゆるかも

陰一本に隱に作る、みこもりとも訓へし、千蔭はこの山草を山すけとよみて水にこもれる菅をいふへしといへり、上はやますといはん序のみといへり、此說によれは山莎なるへし、山莎は山に生ひて葉狹きものゆへ蓑に作れり、草の形は大かたおなし

頭註　(*)餘齋說に、山草のやますとかけて、其草ハ水邊の草なれはそれと指物なし、たゝ山川の水にそひて生たる草なりといへり、此說おたやかにてよし

(*)多麻古須氣

十四ノ十八　美奈刀能や葦か中なる多麻古須氣かりこ吾せこ床のへだしに

一本に初句美奈刀安之能とあり、繁く集り生ひてまろく見ゆるを、玉笹なとゝいふ如く、小菅のしけれるを玉といふへしと翁はいはれき、又すへて玉といへるはたゝほめていへるにても有へし、へだしのしは知に通ひて、床の筵乃中隔をいふといへとも、ここの古須氣は殊ものなるへし、今海邊の葦にましりて生るすけあり、臺に似ていと細く長さ二三尺、卽苅取て筵のへたしとし、又端午の粽をまくに用ひ、又蓑に作る、是を俗にくゞと云、漢名は磚子苗と救荒本草にあり、臺の類にして葉しなへやはらかにして強し、和名抄に莎草和名具々草名也と云是なり、今は莎草をかやつり草と云ものにあつ

頭註　(*)十一ノ十　湊にはさねはふ小菅しぬはすて君に戀つゝ有かてぬ

根夜波良古須氣　（かも　是もたま小菅なるか）

十四ノ廿五　海原の根夜波良古須氣あまたあれは君は忘れす我は忘れや

此海原は海邊をいへり、やはらは契沖云海際に生たる菅は潮にあひて根のやはらかなるを云といへり、又さいはらに貫川のせらのやはらは泥の事をいふとみゆれは、其泥に生る菅なれは、寝和ら小菅といひなしてうるはしきやはたの妹をそへたるかとあれは、前の條の多摩古須氣とおなしものならん

薦　ノ次ニ花勝見を出すへし

巻七　三島江の玉江の薦をしめしよりおのかとそ思ふいまたからねと

十一　獨寝と茭朽めやもあやむしろ緒に成まてに君をしまたん

十一　眞薦苅大野川原の水隱にこひ來し妹か紐とくわれは

巻三長歌　弱薦乎獵路乃小野爾（略下）とよめり、薦は菰なり、若きを賞して刈故也、いと老たる菰はかたくて用ひかたけれはわかきをかるもの也、爾雅(一)云、蘧蔬鄭樵云、黍蓬野茭也、以可爲薦故曰薦とあり、又和名抄本草云、菰一名蔣（和名古毛）辨色立成云、茭草一云菰蔣草、七卷食經云、菰首味甘冷（和名古毛布豆呂一云古毛豆乃）今も俗にまこもと云池澤に多し、春夏のあひた葉のやはらかなる時苅て枕とするを集中に(二)薦枕とよめり、葉は泥菖に似て薄し、秋に至れは長さ五六尺となり穗を出して花咲て實を結ふ、此實を菰米と云、秋ふけて根の上に筍の如きものを生す、即菰首なり、その中に黑き灰の如きもの滿てあり、是を茭鬱と云

頭註

(一)花勝美ノ條と見合スヘシ

(二)巻十四　須我麻久良と有ハ菅もて束たる枕なるへし

巻十六　食薦とよめるハ和名抄に食單又延喜式に葉薦と書てともに須古毛とよめり、飯を炊くに竹或ハ蘆、稻藁の類を編て、甑に入蒸す料の具なり、布單を敷て蒸す事中世よりあれは食單とは書るなり、

荻

巻四　神風の伊勢の濱荻折伏て旅寐やすらんあらき濱邊に（碁檀越妻）

巻十　葦邊なる荻の葉さやき秋風の吹來るなへに雁なき渡る

十四　伊毛奈ろかつかふ河泊豆のさゝら荻安志とひとこと語

りよらすも
妹名根とよみ、兄名ともいへば、妹名と斗もいふへし、呂は等に同し、都可布は妹と吾と行ちかふをいふなり、河泊豆は河津なり、さゝらをきは荻に大小ありて其小きをいふへし、常の荻なり、あしと一とごとゝは蘆とひとつ如くといふ也、蘆荻は水に生ひて形も似たり、今男の行河津の向よりよそなから心かけたる女の來るに行ちかはん時、何そにことよせて言問よらんと思ふに、こゝに蘆荻の有て分ちかたく見ゆれは、いつれかいつれそと問よらんといふ也、さて荻の葉は萱に似て長し、莖ふとく節しけく肉厚くして、内實してよなきか如し、花は蘆に似て初は色黑く後には漸く白し、これに濱をき岳をきの別あり、海邊にありて莖やはらかにて節の間長く折取て箸とするものは濱荻也、さゝらをきはこの小なるをいへり、岳をきは川邊にありて莖かたく節の間短く節高し、是を俗に鬼よしと云ひ、この小なるをさゝをきといふ

葦(*)

巻三　葦邊には田鶴か音鳴て湊風さむく吹らんつをの崎はも　若湯座王

巻十　押照難波堀江の葦邊には雁ねたるかも霜のふらくに

和名抄蘆葦兼名苑云、葭一名葦(和名阿之)爾雅注云、一名蘆玉篇云、亂ハ菼也、菼(和名阿之豆乃)蘆之初生也、蘇敬本草注云、蓬蕽ハ葦花ノ名也とあり、蘆荻ともに名多くしてまとひぬ、先初長成の三ッに配して分つべし、葭は初生なり、蘆は長なり、葦は已成なり、而して蘆は其總名なり、又菼は初生なり、亂は長なり、萑は成なり、而して荻は其名なり、夢溪補筆談に云、蘆葦葭ハ蘆也、亂萑菼ハ荻也とあるを正しき說とす、したかふべし

大友田主か脚の疾あるに石川女郎か贈れる歌

巻二　吾聞之耳爾好似葦若末乃足痛吾勢勤多扶倍思

この葦若末を阿志加比と訓は、神代紀に天地之中生二一物一狀如二葦牙一云ふによれり、さて葦牙は葦の若めにて、そは卽葦か苗なれは葦牙の葦苗てふ意にて、人の蹇に轉しいひかけたりと眞淵いへり、葦若末を阿志奈倍と訓る說有、冠字考に委し

巻二十　安之我知流難波能美津爾云々、こは古事記に(安康の條)興レ軍待戰射出之矢如二葦華散一と有によるに、難波の浦風に葦

の穂花のふる雪のこと散をもて冠らせたるなるへしとい
へり

巻六 難波乃國者葦垣乃古郷跡人皆之念息而云々こは昔名高き都なりしも、既ふるされて民の住處となりて葦垣なとして有ならひなれは、故郷といはん料にあし垣をは冠らせたり、巻九に葦垣之思亂而云々、巻十三に葦垣之末掻別而君越跡とよめるを合せて、此籬の様をしるへし、葦を立て籬とすれは穂末わゝけ亂れて有ものなるを、思ひのみだれにたとへたり

頭註 (※)〇葭葦ヨシトハヨシノ反イニシテ入息ノ灵也、アシトハアシノ反イニシテ出息ノ灵ナリ、此兩草ハ地中ノ火水ヨリ生ス、出水火ハ陽ニ向テ吹、茲ヲモテ東南ノ方ニ多ク生テ西北ノ地ニ乏シ、天地ノ水火ハ總テ陽ニ進ノ故ナリ

菅藻

氏河に生る菅藻を川早みとらす來にけり裹にせましを

菅藻ハ葉菅に似て薄く流れにしたかひて打靡くもの也、近江の水海なとにはことに多し、その水底にてなひくを都人のめつらしみてつとにせんとなるへし、出雲風土記に、法吉坡有ニ鴛鴦鴨鮒須我毛一當夏節尤有ニ美菜一本草水草類に出せる苦草なり、是を近江にてせきせうもと云、又海にもこの形したる藻あり、それを土左人はすげとも云、海と河との異なるのみにて、其形はおなしきものなれは、水海にてせきせうもといふものは即菅藻なるへし

伊都藻

巻四 河上の(※)伊都藻の花のいつも〳〵きませ吾せこ時しけめやも　吹黄刀自

伊都ハほめたる詞なり、又伊都藻は五百津藻にして多く生ひたるを云、この藻は水の中には生ひすして、水際或は淺澤なとにいや生ひしけりて水より上へ立のひて花さく、花は紫なり、葉も花も浮藻に似て殊に美し、是を阿波にて花藻と云ハ花の美なるかゆへ也、藻のたくひ何れも花さけとも見るへくもあらす、獨りこの藻のみうるはしき花咲かゆへ、いつもの花とはよめり

頭註 (※)川上のいつもの花とよみたるはいつもしく云藻の名になしていひかけよみたるなり、即いつもの冠辭となせし也、

巻三 妹か家に咲きたる梅の何時も〳〵なりなん時にことは定めん

附箋 久老云梅は五瓣に咲ゆゑに、咲たる梅の五とうけていつもといへり、巻四に伊都藻の花のいつも〳〵とある伊都藻は荇菜也といへれと、是も五瓣に花咲ゆゑにいつ藻の名やおひけんとおもひて人々にとふに、水草はおほく四ひらなるを、睡蓮こそ五ひらには花咲といへれ、さてはいつ藻は睡蓮にていつも〳〵とつゝけし意もことおなしかりぬへし、○標注に巻十二に道邊の五柴原も何時も〳〵とあるは、いつといふ言をかさねたるのみにて、巻四に大原の此市柴の何時鹿とあるに同し、伊都藻のいつとつゞきたる言の重りは右に同しかるへけれと、伊都藻といふ名は五瓣に花さくゆゑにいふなるへく、おもふに花のいつもとつゞきたるもこゝの咲たる梅のといふにひとしけれは、その花の五ひらなるゆゑにやとこそおほゆれ

(*)玉藻

明日香川湍瀬に玉藻は生ひたれとしからみあれは靡あはなくに

水底に生る玉藻の生ひいてすよしこの頃はかくてかよはん

玉藻に海と川との二種あり、こゝは川の玉藻なり、或は池溝にも生る也、水の流れにしたかひてなひくを、山城にてきんきよもといひ、近江にてふさも、土左にてすゝも、阿波にてすぎもと云、葉至て細く絲の如し、節毎に聚り付て總の如く美しき也、この玉と云は葉の美なるをほめての名なり、是本草に云聚藻なり、

頭註 (*)○玉ハ美稱、モハモヤウ事、多ク生ヒテ結レモヤウタルヲ藻ト云、水ノ底ニカラミモヤヒテ連ル故ノ名ナリ

珠藻

麻績ノ王流ニ伊良虞島ニ時時人哀傷作歌

巻一 打麻を麻績の王白水郎なるやいらこが島の珠藻刈ます

同 空蟬の命を惜み浪にぬれいらこの島の玉藻かり食

荒礒越浪はかしこししかすかに海の玉藻の憎はあらぬを

巻一 釧つく手節の崎に今もかも大宮人の玉藻刈らむ

これやこの名におふ鳴門のうつしほに玉藻かるとふあま少女とも

これやこのは是や彼也、うつしほはうつ高しなといひて高き意也、これは海中の玉藻にして、玉の如く圓なる實の形したるもの多く付けれはいへり、葉は柳に似て細くしけし、是をさぬきの浦人は玉藻といふ、巻二長歌 玉藻吉讃

岐國者云々とあるを、或人さぬきより吉き藻を出せりとて、三教指歸にさぬきのこよなき玉藻ノ所歸之島椽樟蔽レ日之浦と云によりてなりと云へとも、しかならさるよし冠辭考に委し、さて讃岐にて云ゑひも、玉藻といふを見るに、阿波にて云ひゑも西國にて云ゑひも是なり冬の間とれるは、玉の形なるものいと小にして、稗の穗に似たるゆへしかよへり、又西國にては此藻の多き所には必す小鰕の集るゆへに呼へりと

海松

十三 神風之、伊勢乃海之、朝奈伎爾、來依深海松、暮奈藝爾、來因俣海松、深海松乃、深目師吾乎、俣海松乃、復去反、都麻等不言登可聞、思保世流君

附箋 みるに丸みる平みるの二種あり、共に色深緑色にしてうるはしく故に染色にも海松茶といふあり、丸海松に棒蘭の形狀とも違ひ、股多く總の如くなる物もありとみえて、物語文に女の髮多く美はしきをみるふさの如しとたとへ云へることあり、此ひらみるの形狀委しく覺えず、猶尋ぬべし

延喜式に深海松、長海松なとの名あり、またあれは俣海松ともいふへし、深海松は緑色の深きをいふ歟といへと、みるは海のふかき處に生るものなれは、深みるといへるにもやあらん、和名抄云水松狀如レ松而無葉（和名美流）楊氏漢語抄云、海松（一）（和名同上 俗用之）とあり、今もみるとよへり、海庭の石上に生ひて形棒蘭の如く色緑にして長さ一尺斗、又薩摩の海に長みるといふあり、長さ四五尺、深みるとは海庭に生るをいふか、俣みるは岐あるかゆへの名なり、俣の字字書に見えねと、股を股と書るより誤り來れるならんかといへり、土左日記廿九日の條に、京の子の日のこといひ出て小松もかなといへと海なかなれはかたしかし、ある女かきて出せる歌、おほつかなけふは子の日かあまならは海松をたにひかましものを云々、うみまつとよめるは海松の字に付て也、後の歌にはみるの事をうみまつとよめる多し、（續古今賀）動きなき岩ほにねさすうみ松のちとせをたれに波のよすらん、（夫木廿五）なたの浦のしほにふうみ松をみきはの波そとしはこえける

七卷 （二）磯に立の歌次に見ゆ

頭註 （一）中山傳信錄に海松と有ハ石帆の事也、物理小識に、海松と云ハ琉球珊瑚なり、本草に海松と云ハ朝鮮松の事なり、此

書と四物同名也、
(三)海藻條別ニ出ス

稚海藻

十六 角島の迫門の稚海藻は人のむたあらかりしかど吾共は

和海藻

十四 ひたがたの礒の和可米のたちみだえわをか待なも攸そ
も今宵も

七巻 礒に立奥へを見れは海藻刈舟海人擣出らし鴨かける見
ゆ

和名抄海藻 和名邇木米 俗用ニ和布ー とあれとも、たゝ海藻とのみにては和可米あらめにかきらす、本草に云、海藻は海中藻類の總名也、わかめは漢名裙帶菜と時珍食物本草にあり

軍布苅

三ノ二十 しかのあまはめかり鹽やきいとまなみくしけのを櫛と
りも見なくに　石川少郎

久老云、今本に軍布とあり、類聚抄草に作れり、蓋軍の誤なるへく思ひて私になほしつ、昆軍の音同しけれは、通して書るにやと契沖も云へり、さてめもも相通ふ言

なれは、海藻の惣名をめとももともいふなるへし、分けては和海藻、滑海藻、昆布、鹿角菜、糸藻 巻ノ十二ニ見ユ なとくさ／＼多かり、今軍布の字は書たれとひろく海藻をいふなるは右にてしるへし

加知米　荒海藻

巻四 豫人事しげしかくしあらはしゑや吾背子おくもいかに
荒海藻

この加知米荒海藻とは、てにをはのこと聞れとも、かく書るを見れは、物の名によみ入れし也、和名抄滑海藻 阿良女俗用ニ荒布ー 末滑海藻 加知女俗用ニ搗布ー 搗者搗末之義也 とありてか知米荒海藻は狀大かた似たるもの也、荒海藻は和加米に似て色黑く堅にひたありて厚し、今の淸人は是を黑菜とよへり、加知米は阿良女に似てやはらかなるものなり、今さからめといへるにあたれり、和名抄の說にてはあらめを搗けるをいふに似たれともさにあらし、搗者搗末之義也とはあらめに似てやはらかなるもの故、搗てやはらかならしめたる心にて、かちめと名付しならん、非ナリ ちゝます幅二寸斗一株に多く集り生ひて色黑し、是を鹽濱にてあんど

ゝめと云、鹽をたくにねまりてかたまる事あり、その時かちめのあくをさす時ハ鹽のねまる事なしといへり然れは加知米と清てよふべきなれとあらかぢめと濁るは、音便にておのづからしかなるべし

頭註 (*)土左日記廿九日の條に、白散を云々、えのますなりぬ、芋も海帯もはかためもなし云々、あらめを海帯と書ハあたらす、海帯ハみつわかめといふものなり
十六、角島之迫門乃稚海藻者人之共荒有之可杼吾共者和海藻、
角島ハ式ニ長門國角島牛牧……

附箋 かちめを那賀郡海部海にて「ハタキメ」といふ、卽搗海藻の意也、干て臼にて搗麁き粉にして米麥に交へ炊て貧民食す、三十斗前には海部郡より此ハタキメの粉を持來り那賀郡邊にて米に交事せしに、今は其事を聞ず、漸に舂てハタキメを食の足しにすることもなくなりしにや、此カチメを「アニロニメ」ともいふよしなり、

(*)繩乘

わたつみのおきつ繩乘くるときと妹かまつらん月は經につゝ、

十二 海若の奥におひたる繩乘の名はかつてのらしとひはしぬとも

十三 海原の奥津繩乘うちなびく心もしぬにおもほゆるかも

十三長歌 々離依雨、來依繩法、深海松之、深目思子等遠、繩法之引者絶登夜、下略

なはのりといふもの今ある事をきかす、千蔭今長のりといふあり、それかといへと然らす、長のりといふものは弦藻のことくして色黄なるもの也、阿波にて丸こふと云、味ひ昆布に近し、又ひたりねぢと云ものあり、是は繩の如くねぢれて細く色みとりにしてやはらかなり、岩に付て生す、冬春はなし、四五月の頃多くて味もよろし、そのねちれたる所繩に似たれは、古へ繩乘といへるもの是ならんか、眞淵は次の條の名乘藻と同物ならんといへり

頭註 (*)のりといふは何にてもぬる〳〵とするものをいふ、海草も此のり有ゆゑに某のりといへり、然れは池のぬなはなどの如く長く引てのり有を繩のりといふへし、なのりそも同物にて、それもなはのりのはを略きてなのりそといふにや

名乘藻

巻三 美沙古居る石轉に生る(二)名乘藻の名は告してよ親は知とも

巻七旋頭歌 梓弓(二)引津のへなる莫謂その花つむまてにあはさらめやもなのりその花

巻十 梓弓引津の邊なる莫告藻の花咲までにあはぬ君かも

なのりそをよめる歌いと多けれとも、皆海によめり、野邊に生るものならねは也、(三)允恭記に、衣通姫の歌に海の濱藻のよる時々にといふを、天皇此歌他人にきかすへからす、皇后恨たまひしより、時人號濱藻謂奈能利曾毛也といへりと、いふはさる事なから、本其藻をはなのりそといひしとせば、違ひあらじか、和名抄莫鳴菜(奈々里曾、漢語抄云、神馬藻ノ三字ヲ云ニ奈乃里曾上、今案本文未詳、但神馬莫騎之義也)と見ゆ、今も出雲にてはじんばそうとも、じんめそうともいへり、卽正月春盤に用ゆる所のほんだわらてふもの作るもの是なり、故に伊勢にてはたわらもと云、長さ三四尺莖細く枝多くして細き葉あり、葉の間に圓らなる實の如きものつけり、其實の如きものは中空にしてつふせは聲あり、花は咲ねとも、此丸らなるものを實といふより花とよめるならんか、莖葉生なる時は黑けれとも、湯に入れは綠となる、冬春の間にとるものは柔にして味よし、春過てとるものはかたくして食ふに堪えすとそ、漢名は本草海藻の條下に馬尾藻といへるもの是なり

頭註 (二)名乘藻ハ今の世ほだはらとよふものなりと久老云

(二)七巻引津邊在とよめる、引津ハ巻十五引津亭舶泊之作とあれは海邊なる事しるへし、引津のべなるは二首同し歌なり、いつれかもとならん

(三)日本紀允恭天皇、十一年三月幸於茅渟宮(河内也)衣通郎姫歌之曰、等虛辭倍邇枳彌母阿閉椰毛異舍儺等利宇彌能波摩毛能餘留等枳等枳弘、時天皇謂衣通郎姫曰、是歌不可聆他人、皇后聞必大恨、故時人號濱藻謂奈能利曾毛也

藻鹽

巻六長歌 名寸隅乃、船瀬從所見、淡路島、松帆乃浦爾、(笠朝臣金村)朝名藝爾、玉藻刈管、暮菜寸二、藻鹽燒作、海末通女(下略)とは土左にてすげもといひ、伊勢の二見にてもしほ草と云ものを燒て、それに水をそゝき煮る時は鹽となる也、その藻は泥菖葉に似て細く長し、生なる時は青く、枯たるものは黑し、波にてうちよせて久しくなるものは色しろし、漢名は本草海藻の條に云、大葉藻なり、夫木集にみさごゐる濱の眞砂のうちあけし浪きは見えてよるもくすかなとよめり、又もしほ草かきあつめたるかひありてみるめうれしき里のあま人とある是なり、しかれとも古へ藻鹽にやきしは是にかきらす、海邊に打よせたる藻屑をすへ

て燒しなるへし、今は絕てこの業なし、天工開物作鹹の條に、海水順風飄來斷草勾取煎煉名ニ蓬鹽ーと云もの吾邦の藻鹽とおなし

(＊)稻

卷七 石の上布留のわさ田をひてすとも繩たにはへよ守つゝをらん

卷十 橘を守部の里の門田早稻かる時過すこしとすらしも

卷十 佐のえの岸を田にはりまきし稻のひてゝかるまてあはぬ君かも

同 戀つゝも稻葉かきわけ家をれは乏くもあらす秋の夕風

同 秋の田の穗むけのよれる片よりに君によりなくこちたかりとも

稻は爾訓あり、凡四書五經等の經書に稻といふはもち米うる米の通稱なれは、いねと訓す、又醫書及本草類に稻といふは皆もち米の事也、和名抄稻熟有ニ早晩ー早稻和名和勢晩稻和名於久天とあり、凡いねの類其品甚多し、國々の土地によりて色々の名あり、

十六 荒城田乃子師田乃稻を倉につみて阿奈干稻々志吾戀らくは　忌部首黑麻呂

あらき田ハ新墾をいふ、しゝ田は鹿の付田也、この倉は屯倉にて、稻を幾萬束も積重ねおくを、我思ひのかさなれるに譬ふ、契沖云、干稻をひねノ\しとよむは物の盛過たるをひねといへり、逢見ぬをいはんとて稻の久しく成て乾くによせたりといへり

八 吾妹兒の業とつくれる秋の田の早穗の蘰見れとあかぬかも

卷五に業をしまさねとよめるも、業はひをいへり、こゝはなりはひをするとての意なれはなるへし

頭註 ○(＊)イ子トハイハ息也、子ハ根ニシテ則息根ナリ、命ヲ宰テイ子ト號、五穀ノ總名ナリ、然トイヘトモ名ハ貴モノニ有テ米ニ名ヲナス

麥

十二 柜楉越に麥咋駒ののらゆれとなほしこふらくしぬひかねつも

卷十四久敝胡之爾武藝波武古馬乃とあり、その久敝ハ離を俗にくねといひて、くべもくねも同しく物を限り隔る

よし也、されはこゝはくべと訓べし、又うませは馬塞(ウマセキ)の界か、小木もて垣とすれは柜梠の字を書り、卷四に赤駒乃越る馬柵(ウマセ)の云々ともよめり、田家にて馬屋近き庭に麥をほすを、馬は柵こしに頭をのへて咋(ハム)を罵てはませぬ也、さて父母に罵るゝをたとふ也、和名抄麥（和名牟岐今按大小麥之惣名也）大麥（和名布土無岐一云加知加太）小麥（和名古牟岐一云末牟岐）と有て、大小麥ともに品類百種に餘れり

粟(*)

卷三 千盤破神の社しなかりせは春日の野邊に粟まかましを

十四 足柄の筥根の山に安波まきて實とはなれる阿波なくもあやし

和名抄唐韻云、粟（和名阿波）粟は粱に比すれは穗小く粒も細なり、ゆへにこあはと云、粱は和名抄に粱米（和名阿波乃宇留之禰）とあり、粟より穗大にして長き毛あり、おほあはと云、白粱米は色しろし、餈(モチ)となしてよし、黃粱米は飯となしてよし、粱粟ともに粘あるものを秫といふ、即もちあはなり、

頭註 (*)神代卷ニモ粟田(アハタ)ト云ヒ、神武天皇大御歌にも、阿波布(アハフ)とよみ給ひて古へより多く作りし物也

寸三 詠數種物歌

十六 梨棗寸三に粟つぎはふ葛の後もあはんとあふひ花咲

和名抄丹黍（和名阿智木々美）秬黍（和名久呂木々美）とあり、今俗にきび、またこきびといふ、粳と糯とあり、本草に粘りなきものを稷といふ、うるしきびなり、粘りあるものを黍といふ、今俗に云もちきび是なり

稗

十一 打田にも稗はあまたにありといへとゑらゑし我そよる獨りぬる

十二 水をおほみあげに種まき比要をおほみゑらゑし業そ我獨りぬる

和名抄薭（和名比衣）左傳注云、草之似レ穀者也とありて、稗は自然と野に生るものゆへ、俗に野ひえといふ、色々有、陸田或ハ路の旁に多し、夏穗を出す、䅗子(ヒエ)(一)に似て小く、芒(ノギ)あり、て黑きを黑いぬひえと云、是本草に云早稗なり、また水田に生して苗を害するの草にて詩經に云莠(ハクサ)なり、俗にくさひえと云(三)、本草に水稗とあり、いねひえよりは大なり、即此集によめる稗也、さて此歌の意は神代紀に高(アケ)

田湾田といへる、湾田は田にて高田は畠をいふ、くぼ田は水多くして畠によからねは、あけ田に畠物を種蒔しに、そこは稗多くてその稗を擇捨らるゝか如く、多くの中より吾は撰捨られて夜獨り寝する身をうらみたるなり

頭註 (一)本草云、穇子は今作るひえなり、是にも水陸の二種有ほ
(二)藻鹽草ニに出ぬ夏よさへまたるひえ草の引すて見れは世をや過なん

(*)宇利

かな文にて瓜をふりと書るかな使ひの習ひと云説あり、甚誤なり、ふの字を上に置てうとよむ古例なし、和名抄宇利とあり

貧窮問答歌

巻五長歌 宇利波米婆、胡藤母意母保由、久利波米婆、麻斯提斯農波由 下略

凡單に瓜と稱する時は甜瓜を指なり、こゝも然るへし、甜瓜は國々に名産あり、皆其土地に限りて、他處にて作れは形變して味ひおとれり、まくはうりは美濃の眞桑村にて作る、殊に名高し、その種を鄰村にうゑても劣れりと云、唐にても汝南圃史、蒜同瓜、唯出崑山圓明村、他土栽レ之不レ生と云へり、和名抄熟瓜（和名保曾知俗用ニ熟瓜二字ニ或説極熟蒂落之義也）皆熟瓜名也とあり、

頭註 (*)○推古紀二十五年六月出雲國言於ニ神戸郡ニ有レ瓜大如レ缶ノ

拾遺集雑下

○おとにきくこまのわたりの瓜つくりとなりかくなりなるよしもかな　三位國賓

返し

さためなくなるなり瓜のつらみてもたちやよりこんこたのすきもの

朝光集

○山しろのうりのつらくはみゆれともおもふこゝろのなとさはらめや

(*)宇毛

凡て伊と宇とは近く通ふ音にて、魚を伊哀、芋を伊毛、鱗を宇呂古なと云例多しと宣長いへり、

十六 蓮葉はかくこそあれも意吉麻呂か家なるものは宇毛の葉にあらし

いも古へハうもといひしか、又宇は伊の誤かといへり、和名抄芋（以閉反 以毛）葉似レ荷其根可レ食、之唐韻云蕷（和名以毛加良一云以毛之俗用芋柄ノ二字）芋莖也、今も國によりてはいもをうもといふ所あり、芋の子をうものこ、芋の莖をうものくきといへり、芋莖を通してずいきといへとも、國によりてはいもからとい

ひだつとも云、

頭註 (＊)いもを宇毛と云ハ、魚を中昔にハイヲといへれど、今ハ多くウヲと云を、古言にもウヲと云へり、魚鱗をイロコと古言に云を、今はウロコといふ如く、ウとイとは何れも通はしいへるなり

○古今六帖に今やを驛にいひかけたる歌あり、そのかみの俗語に今をうまといひけん、されと歌書ともに今をうまとかけることなきは、歌ハ詞をえらひ正して俗語をなるべきたけハ用ぬゆゑ也、隆正ノ說

波(＊)保麻米

二十　道野邊のうまらのうれに波保麻米のからまる君をはかれか行ん

うまらは荊なり、はほまめは這豆也、和名抄藊豆（阿知萬女）籬上豆也といふ是なり、からまるは纏はる也、はかれは離なり、神代紀廢渠槽此云秘波鶡都と有も、はなつをはかつといへり、本草に藊豆に作る、今俗にひらまめと云、伊豫にてかきまめ、土左にてとうまめといふ、形鵲豆に異ならす、たゝ莢濶く扁たし、豆の色白くして黄なるゆへ白藊豆と云、（隱元禪師の將來しものにていと後のものなれは此歌によめるは藊豆なる事しるへし）またいんけん豆ハ形相似て豆の色黑くして、旁に白屑あり、花も紫と白との二色あり、是藊豆の條下に云鵲豆なり、隱元豆の花紫白の二種のみにあらす、淡紅色の本のものもあり

頭註 (＊)梯ニ云保ハふに同し、這豆也、扁豆の事なるへしと云へり

都多

卷二長歌　延都多乃別之來者云々　卷九長歌　蔓都多乃各々向向ともよめり、こはつたかづらの如くかたかたはひわかるゝを、人にわかれ行にいひかけたり、つたは種々ありてこゝは何れをさすかわきかたし、古今集及ひ六帖にもつたをよめる歌なし、今紅葉を賞するつたは本草木蓮の條に云地錦なり、枯木或岩に這付て根を生し、冬は葉落て春また生す、秋は紅葉して美し、葉の形色々ありて定まらす、蔦をつたと訓るもあたらす、絡石を和名抄に豆太と訓るも然らす、絡石は俗に云ていかかづらにして地錦の類にあらす、

頭註 (＊)卷十七ニ、
玉匣ふた上山にはふ都多のゆきは別れすとあり
あめにかも五百都綱はふ萬代に國しられんといほつつなはふ
此五百都綱はふとはおほかる心也

石綱

卷六　石綱乃又變若反青丹吉奈良乃都乎又將見鴨

眞淵云、石綱ハ石蘿なり、その蘿かつらのはひわかれ

ては又はひかへるものなるを、人の老て又若かへらん例にいひ冠らせたり、かつらの類には別るゝとも後もあはんとも集中によめるに同しき也、（々かれ春わかがへる意にあらず）顯宗紀の室壽の御詞に、築立稚室葛根と有と、式の御殿祭祝詞に下津綱根てふは同し事なるを葛とも綱とも書たり、古ハ葛綱角の訓相通ふ故に、字をも相借てかけりと、猶冠字考に委し、この石綱も一種のつたをさすにあらすして、廣く藤蔓の類をいふめり

頭註 (*)久老云、此歌師のよみにてハ又わかゞへりとよまれたり變反ノ字いづれひとつハ衍れるにあらずや、本居氏の説に、吾盛後將變八方と有、將變の字を遠知と訓へき也、卷五ニわが盛いたくくだちぬ雲に飛藥はむともまた遠知米也毛若きに變らめやもといふ意にて、遠知かへると訓へし、霍公鳥の歌にをちかへり鳴とよめるも物語ふみに折かへしうたふなといへる乎利も此遠ちと同言とすへし、利と知とは通ふ例なり、槻の落葉に委くいへり、

狹根葛

十二 狹根葛後毛將相等大船之思憑而云々

十一 核葛後もあはんと夢のみをうけびわたりて年は經につゝ

こはかつらの長くはひ別ては、末のまたはひあへるに譬へたり、又さねかつらを轉してさなかつらともよめり

十二 木綿疊田上山の狹(二)名葛ありさりてしもいまならすとも

同 ゆふたゝみたなかみ山の佐奈葛のちもかならすあはんとそ思ふ

同 丹波道の大江の山の眞名葛たえんの心わかもはなくに

卷一 玉匣三室の山の狹名葛さねすはつひにありかてましを

和名抄五味（和名佐[illegible]加豆良）皮肉甘酸、核中辛苦都有二鹹味一故以名二五味一也とあり、本草に五味子に南北の分ちあり、藥には北五味子を用ふ、佐(三)彌加豆良ハ南五味子の方也、俗にひなんかつら或とろゝかつらと云、古事記に佐那葛の根を舂て、其滑汁を簀椅にぬりて、大山守命の蹈ばたふれ給ふべく設けられし事あり、今も是を櫛けづり用るに滑けき汁のあるを思へは、佐彌かつらの佐は發語、名と根は音の轉にして、實はぬかつら也、ぬはぬる〳〵となめらかなる汁有を惣ていふ事也、池のぬなは、海のゝりの如し、ぬるとのりは音通へり、或人もみつると詠

たれは五味子ならすと云は誤也、卷十二 寄二黄葉一とて、足引の山佐奈葛黄變まて妹にあはでやわか戀をらんてふは、常葉なる物を擧てそかもみぢん時までにあはすやあらんとすらんと、餘り逢かたきゆへいふ也、かの烏の頭白からん時といひしか如き也、且古へは題を設て歌よむ事はなし、これももみちてふ詞によりて後人の寄黄葉と書しものなるをやと眞淵いへり

頭註 (二)袖中抄云、さねかつらさなかつら同し事也、ねとなと同音也
(三)さねハ眞と云と同く美たる言ならんか、即ち眞ノ字をサネともよみたり、さねかつらも眞かづらと云意の名と聞ゆ、其をさなかづらとも云ハ、稲をイナ金をカナと云格なりと宣長云へり

(一)
葉根蘰

大伴宿禰家持贈童女歌一首

卷四 葉根蘰いまする妹をいめにみて心のうちにこひわたるかも

はねかづらは少女の髪の飾にするものなるへし、其詳なる事は知らすと千蔭いへり

童女來報歌一首

同 (三)葉根蘰いまするいもはなかりしをいつれの妹かこゝに戀たる

はねかつらはいとをさなき時のさまにて、此こたへし童女は十五六にも成べければ、はねかつらする年頃は過つるを、わか事にはあらし、何れの妹をか夢に見給ひつらんといふなるへし

卷七 波禰蘰今爲妹をうらわかみいさいさ川の音のさやけさ

上はいさといはん爲の序也、川の名はいさ川なり、佐奈葛の條にいへる如く奈と根とは音轉なれは、こゝは波奈蘰なるへし、花蘰は時々の花を糸に貫て髻にかくるを云、此事既に前の花蘰の條にいへり

頭註 (一)萬梯ニ、波禰蘰ハ花かつら也、女の髻に作花をさすを云也、
(三)袖中抄ニ云、此歌の注ニ是ハ女の花の蘰を敦隆か部類古集に葛篇に入れたる如何、文字も蘰とかけり、今する妹とよめり、葛にまきるへからす

(＊)
鴨頭草

卷十 朝露に咲すさひたる鴨頭草の日たくるなへにけぬへくおもほゆ

同 朝咲夕はけぬる鴨頭草のけぬへき戀もわれはするかも

十二 百に千に人はいふとも月草のうつしこゝろをわかもためやも

月草のうつろひやすくおもへともわかもふ人のこともつけこぬ

月草に衣そ染る君かためまたらの衣すらんとおもふて

和名抄に鴨頭草(都岐久佐)とあれと、けぬるけぬへきなとよめるからは、つゆくさともよむへけれと契沖いへり、古へより月草とも露草ともいへるにや、今は專ら露草とのみいへり、鴨頭草は鴨跖草の誤なり、今俗にはなだともあを花とも云、夏のあしたことに花咲て、晝の頃に萎むものなり、近江の栗本郡山田村に此草を多く作りて、花ひらの汁をとり、紙にそめ又それをうつして、物をそめれはうつし花と云也、その紙を花田紙ともある紙とも云、染殿にて衣の下繪を畫くに必す此紙を用ゆ、其色甚鮮なれとも、いささかにても雨露のかゝる時はぬけさりて、たゝちに本のしら地とはなれり、古今に世の中の人の心は花そめのうつろひやすき色にそ有けるとあるも、此月草をもて染しなり

頭註 キハツキクサトハ、ツハ水也、キハ氣ニテ、則水氣草(ツキクサ)ノ心ナリ、又月(ツキ)モ水氣ナルヲモテ、文字ヲ借ナリ

月草ハ假字にて此草染つきやすき花ゆゑにつき草とは云歟

此草を寸々に切て土上にちらし置ハ、節毎に根を出してゐ付ものなれは、つき草といふならん、つくとはゐ付(ツク)事にてツクをツキともいふ也

宇家良我波奈

十四 こひしけは袖もふらんをむさし野の宇家良か花の色につな夢

同 我せこをあとかもいはん武藏野の宇家良我花のときなきものを

同 あせかゝたしほひのゆたにおもへらはうけらか花の色に出めやも

和名抄朮(ヲケラ)(和名乎介良)似レ薊生山中故名ニ山薊一とあり、字鏡白朮(乎介良)、千蔭云此花白きも又白きに紫を帯たるも有、此紫朮を色に出とよめるならん、本草に白朮蒼朮の二種あり、苗の形大かた相似て少しく異なり、高さ二三尺、三葉にして芽子(ハギ)の葉の如なるも有、五葉なるもあり、變して一葉二葉なるも有て定まらす、邊に細なる刺あり、秋にな

れは薊の如き花さく、白きもの多くあつきものは少し、是苔求なり、白求は苗長大にして葉も苔求に似て薄く軟にして三葉或一葉なり、花ハ白し、根は肥大にして拳の如し

頭註 (ホ)古語拾遺ニ、以竹葉飫憩木葉爲手草今多久佐と有、飫憩木ハ乎介良なるか、草をも木といふ言例おほし、荻芒の類也、ヲケラを略てヲケといひしか、求ハ本草にも邪氣を辟る由縁あれハ、手草に取てと有にもよしあり

七種花

山上臣憶良詠秋野花二首

卷八 秋野爾咲有花乎指折可伎數者七種花其一

芽之花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤袴朝貌之花其二

旋頭歌也、牽牛花をも槿花をもあさがほといひしと見ゆ、彼夕影にこそ咲まさりけれとよめるなとは槿花なり、此歌は何れにても有へし、右二首にて意をよみをはりつれは、詩になそらへて其一其二とかけり、さて七種はおの〳〵條にあかちてその處に委し

(一)芽子

卷八 高圓の野邊の秋芽子比日の曉露に咲にけんかも　大伴家持

卷十 秋風ハ涼しく成ぬ高並ていさ野にゆかな芽子の花見に　作者不知

同 見まくほり我待こひし秋芽子は枝もしみゝに花咲にけり　同

同 ことさらに衣は摺らし姫部志咲野の芽子にゝほひてをらん　同

同 奥山にすむとふ鹿のよひさらす妻とふ芽子の敷まくをしも　同

和名抄鹿鳴草、爾雅集注云、萩一名蕭（萩音秋一音焦蕭音宵和名波木今按牧ノ名ニ用ニ萩字ニ莪會ト云是也辨色立成云新撰萬葉集等用芽ノ字ニ唐韻芽ハ音胡誤反草名也國史ニ用ニ芳宜草ノ三字ニ楊氏漢語抄ニ又用ニ鹿鳴草ノ三字ニ並本文未レ詳）萩をはきと訓るは誤なり、萩ハ俗に川原ほうことといふ草にして、はきの類にあらす、芽子或鹿鳴草をはきとするも和名なり、はきは救荒本草の胡枝子、一名隨軍茶なり、此集によめるは山野自然のはきにして、木はき山はきなるへし、今俗に糸はきと云は古今にからはきとよめるものにて、花の色深くして殊に美しきもの也、山はきは木本にして枝枯れす、糸はきは草本にして枝枯れる也

六月十五日見芽子早花作之

十九 吾屋戸の芽子開にけり秋風の吹んをまたはいとゝほみかも

卷八 吾岳に棹牡鹿來鳴先芽の花嬬問に來鳴棹牡鹿 太宰師大伴卿

梯ニ云芽ノ咲コロ鹿ノソノ萩原ニナレテオキ臥ナトスル故ニ、秋芽ヲツチ鹿ノ妻トハ云ヒナラハセル也、拾師ハ先芽ヲサヽハキト訓レタリ、花嬬ト云事ハ十四ノ卷ニモ見エタリ、

先芽は初芽子也、さいばりといへるも此さきに同し、はきの咲ころ鹿の其芽子原に馴るゝものなれは、芽子を鹿の妻として花嬬とはいへり

卷十 たぎそなへ植しもしるくいて見れば宿の早芽子咲にけるかも

たぎはたくりを約言にてたくり備へ也、秋の七種なとを多く備へ植たる中にはきの先咲たるをいへり、早く咲はきをわさはぎといふなり

卷八 咲花もうつろふはうし奥手なるなかき心に尙不如けり

大伴坂上郎女晩芽子歌

奥手は晩稲をおくてといふ如く、芽子の花咲か遅きをいふ、すへて花はうつろふかうきものなれは、心なく咲出るにはしかさりけりとなり

頭註 (一)〇ハギトハ、ハ初ノ言キは草ノ灵ニシテ、秋ノ初ニ花咲ヲ名トシテハギト云ナリ

〇ヲギトハヲハ終ノ言キハ草ノ灵ニシテ、秋ノ終ノ草ト云ヲ名トシテ荻ト云、此兩ノ草ハ相對シテ秋ノ始ト終ヲ宰ナリ

挿紙 十七長歌ニ

萩の花にほへる宿を朝庭に出立ならし夕庭にふみたひらけず云々

此歌萩の花と書るはおほつかなし、いつこも芽子とハ書れたり、本書によつて考へし

宗祇旅日記に本あらのさくらともよめれは、春刈燹したる去年の古枝に咲たるをいふと聞置たるに、宮城野のあたりに本あらといふ里有て色ないとも外には殊なる萩のありし、枝さしなへての萩よりもそはそはしくあはら也といへり云々

案に本あらの里に木萩のもとのあらはなるをかねたるか、古今宮城のゝもとあらのこ萩露をおもみ風をまつこと君をこそまてとよめる、即木萩にして今の山萩なり別に木萩てふはあらす

頭註 (三) 救荒本草一 胡枝子俗亦名隨軍茶、生平澤中、有二種、葉形有大小、大葉者類黒豆葉、小葉者莖類蓍草、葉似苜蓿葉而長大、花色有紫白、結子如粟粒大、氣味與槐相類性溫

花史 觀音菊天竺花是也、五月開至七月、花頭細小其色鈍紫、葉如嫩柳、其幹之長與人等

(二) 尾花

卷八 伊香山野邊に咲たる芽子見れは君か家なる尾花しおも

ほゆ　ゞ朝臣金村

巻十　さを鹿の入野の爲酢寸初尾花いつしか妹か手枕にせん

同　吾屋戸の麻花おし靡置露に手觸わきもこちらまくも見ん

同　暮立の雨ふることに春日野の尾花かうへの白露おもほゆ

十六　暮立の雨打ふれは春日野の草花か末の白露おもほゆ

此歌いさゝかたかへり、草花を尾花とよめる例多し、さて和名抄爾雅云、草聚生曰ㇾ薄〔新撰萬葉集ニ花薄ト云、花薄ハ須々木〕とありて、薄の字をすゝきと訓るは誤なり、薄ハ諸草の聚り生るをいへり、すゝき尾花は同物なれとも、種々のわかち有、漢名はすへて本草山草類に芒と云是なり、秋花さく、その形獣の尾の如き穗の出るゆへに尾花と名つくと眞淵いへりとそ

巻八　めつらしき君か家なる波奈爲酢寸穗にいつる秋の過らくをしも　石川廣成

集中皆はたすゝきとあるを、此一首のみ波奈すゝきと有は、奈は太の字の誤りかといへり、こは誤りにもせよ、穗

に出し薄を花薄といへるに論なかるへし、たゝ一首ある付て誤かとすれといかゝあらん、新撰萬葉集に花薄と書によりて、其後花薄とよめり、こは應神紀の歌に伽愚破志波那多智麼那とよめるをおもへは、薄のほに出たるを花薄といふに論なし、いと後の歌に花櫻又花蓮とよめるも同例也、こは櫻花蓮花といふを打かへしてよめるならん、

巻一　金野の美草刈葺やとれりし宇治の都の借廬し所念

宣長云、貞觀式大嘗祭條に、以ニ美草ニ飾レ之と有、又延喜式にも見ゆ、又巻八に草花と書て尾花とよめり、巻十五長歌秋波疑のちらへる野邊の波都乎花借廬にふきてとあるによりて尾花とよめり、千蔭は秋の野の百草を花なからかりふきたるかり宮に宿りしを、面白く覺えし事を後までも忘れかたきとなり、美草は眞草と同し、こゝは秋の百草をいふといへり

巻十　我門にもる田を見れは佐保の内の秋芽子爲酢寸おもほゆるかも

十七　めひの野の須珠寸押なへふる雪にやとかるけふし悲しくおもほゆ　高市黒人

たゝすゝきとのみ此二首の外に見えす、或人すゝきとは未た穗に出ぬ時の名にして、既に穗に出しを花すゝきとも尾花ともいふといへとも、さるわかちあるにあらし

十二 波多須珠寸尾花さかふき黑木もて造れる室は萬代までに

十一 吾妹子に相坂山の皮爲酢木穗には咲出す戀わたるかも

卷一長歌 旗須爲寸四能乎押靡[下略]とあり、眞淵云はたすゝきは旗の手の如くに物にはしるしすれと、又思ふに皮の字を書たるによれは、はたのたを濁りて膚の意とし、穗を皮にふゝみて漸に開出るものなれは、はだすゝきといふらんともいへり、千蔭は秋の野の中にすゝきはものより高く離れて、柴長くはゞ有なれは、幡すゝきといふならんといへり、(略ニ云波多須爲寸トアルニ同ジ、ハタハ花也サルヲ旗ノ如キ、スヽキナリト云ヘルハワロキ說也)

卷七 妹かりと吾通ひ路の細竹爲酢寸我し通ははなひけ細竹原

眞淵云すゝきのしのと云はしなぶ物なれは云、すへてしのとはしなべるをはふきて云事と知るへし、後撰集にあふことはいさほにでなんしの薄しのびはつべき物ならなくに、千蔭云しぬはしなふを約め云、細竹は借字也、しぬ原ハ卽しのすゝきをいふ、或說にしぬ薄は篠と芒とたるへし、しぬ薄といふもの外にはなしといへとも、しのと云は芒蘆の莖をすへていふの名也、今婦女の細き竹にて綿をまくをしのまきと云ひ、又芒莖を束て蠶の繭つくらするをしのを作ると云にて知るへし

頭註 (一)○旗芒、葉垂芒也、垂レタルノ風ニ飄ルノ義ニ依テ旗ノ字ヲ借シ也、スヽキトハスハ直ノコト、キハ莖ノ省ニテ直莖ノ義也、ハタスヽキ、シススヽキ、スヽキ、別ニスヘシ

新撰字鏡曰蘩生木曰ニ榛草ニ蘩生曰薄也

眞淵云をはなハ男花也、集中に須々志競とよめるハ、壯士とものあいきみあらそふをいへり、祝詞に伊須呂比てふも荒ふる神達ノ競ふをいへり、草のすゝきも物より高く茂りて雄々しきさまなれハすゝきと名つけ、かつ男花といふ男をみなの花とあるも、男花女郎花をむかへる也

(三)時珍曰、芒葉皆如ニ茅而大、長四五尺、甚快利傷ニ人如ニ鋒刄、七月抽ニ長莖ニ開ニ白花ニ成ニ穗如ニ蘆葦花ニ也、日本紀蘆荻の字共にスヽキと訓するも、又日本紀に薦スヽキと訓せり、字彙に草稠曰ニ薦云々、是等を合せ考ふれハ、何れも茂生するもの故しかよめるならん、されハ一草の名のみにあらすして叢生するをすゝきとハいへり、をはなハ殊に叢生すれハ、すゝきと呼はるゝならん

(三)梯ニ尾花逆葺、サカブキハ穂ノ方ヲ下ニシテフクナリ
(四)一説に、皮の字檜皮なと云例によりて、穂の皮こもりなるを、はたすゝきと云とそ、
(五)今俗にしのといへるは、國人の糸引をりに用る山芒の莖をつゝめる皮をも莖をも統てしのといへり、又小竹にて綿を巻く、それをもしのまきといふを思へは、薄の莖は小竹に似しものゆへにしかよへるならんか、一説にハ篠に似て生靡くを云へりといへり、さにても同じ心はへ也
又案に芒の穂を皮に含みたるがぬき出たる、其莖を小竹と云ひシベとも云へり、稻の莖をシベと云に同し、俗にシベをスベと云音通也、されば細竹爲酢寸ハシベにぬき出たるを云ひ、尾花ハ即獸尾の如くなるを云ならん

葛(※)

卷十 吾屋戸の葛葉日にけに色付ぬ來まさぬ君は何こゝろそも

同 雁かねの寒く鳴しゆ水莖の岡の葛葉は色付にけり

二十 高圓の野邊はふ久受のすゑつひに千世にわすれん大君かも

七 姫押生る澤邊の眞田葛原いつかもくりて我きぬにせん

卷六長歌 眞葛延春日之山者とあり、をみなへしを姫押と書、眞葛を眞田葛とかけるは、いかにとも心得す、葛は山にも野にも多し、蔓長く延て木の梢にはひて秋葉の間に穂を

出し打垂て花さく、藤の花に似たり、この蔓をとり水に漬置て皮を去り織て布とす

卷七旋頭歌 劍のしり鞘に納野に葛引吾妹眞袖もてきせけんとかも夏葛引も

いり野は山城也、劍のしりは鞘に入るといひ下したり、我に織てきせんとてか眞手もて夏葛引といふ也、左右の手を眞手といひ、眞手を眞袖といへり、今も遠州掛川にて製す、皆蔓の絲にて織るなり、是を本草に葛布と云へり、

第三〇藤衣 須麻の海人の鹽燒衣の藤衣間遠くあれはいまた着なれす

久老云、藤もて織たる布也、今もゐ中にはさる布あり、卷十二に大王の鹽燒あまの藤衣なれはしぬとも彌めて見んもと見えたり、古今集にすまのあまの鹽燒衣をさをあらみとあるにて、藤衣の間遠とつゝけたる意は知られたり、間遠く隔をりて逢かたきを藤衣の間遠きに譬へたり

頭註 (※)花鏡曰、葛一名鹿藿産ニ南方ニ春初生ㇾ苗引ニ藤蔓ニ長一二丈、其藤皮可ㇾ作ニ絺綌ニ惟廣中出者爲ㇾ最根可ㇾ作ㇾ粉能解ニ酒病、古事記ニ藤袴といふは葛袴也、又河内の藤井寺を葛井寺ともかけは也、古へ葛の皮をもて布を織るこれをふち衣とい

ふ、此集中に山田守翁が藤衣又須磨の海人の鹽燒きぬの藤衣なとよめり、和名集に緂衣をよめり、葛布をもて素服とする故也、古へハはらへしてすてられたるにや

〔拾遺集〕
服ぬき侍るとて
藤衣はらへてすつる涙川きしにもまさる水そなかるゝ

附箋 此拾遺集の歌の藤衣ハ意をかへり、こゝハ喪服にて其色をいへり、此藤衣ハ藤もて織れる麁き布をいふなれは、こゝに引へくもあらす

（＊）
瞿麥

巻八 吾屋戸の瞿麥の花盛なり手折て一目見せん兒もかも　大伴家持

巻十 野邊見れは瞿麥の花咲にけり吾待秋は近つくらしも

巻三 石竹のその花にもが朝なさな手取持て戀ぬ日なけん　大伴家持

見渡せは向ひの野邊の石竹のちらまく惜も雨なふりそね

詠庭中牛麥花一首　越中國守大伴宿禰家持

十八 ひともとの奈泥之故うゑしその心誰に見せんと思ひそめけん

契沖云一切經音義第十二に、瞿此謂云レ牛と有、これにつきて瞿麥を一名牛麥とかけるを思ふに、瞿麥の瞿は梵語也と知られたり、牛を梵語に瞿と云、或遇の字を用ゆ、瞿も梵語には濁音に用ひたり、さて此花をなでし兒と云は、兒の如く撫うつくしむべき花なれは、嬰兒に比してしかよへり、此集によめるものはもとよりわか國に自然と生るものをよめり、今云川原撫子なるへし、大和なでしこはから撫子にむかへて大和とはいへり、古今にわれのみやあはれとおもはんきり／＼す鳴夕かけのやまと撫子、元石竹と瞿麥とはおなし類なれとも、花の形聊たかへり、瞿麥ハ花ひらの先絲の如く切れたり、石竹は花ひらの先絲の如くならすして花の形も小なり、是をからなでしこと云、元唐國より渡りしゆへ名つく、和名抄瞿麥一名大蘭（和名奈天之古 一云止古奈豆）と有、とこなつといふは夏の内より咲て、秋の末冬までも咲もののゆへ夏を常しなへにする心にていへり

十九 石竹は秋さくものを君か家の雪の巖にさけりけるかも　米廣繩

とあるにて知るへし、後撰に十月はかりにとこなつを折て贈り侍りけれは、冬なれと君か垣穂にさきけれはむへ床夏に戀しかりけりとありて、冬迄咲つゝき殘れるもの

也、

頭註（※）巻十七 等許奈都爾

なつハのとと通ひてのどかに長き意ならんか、瞿花も花久しくのどかにある物ゆゑに、トコナツと云かと先達の説也

○ナデシコとはナハ頭のこと、テハタレの反にて、頭の低の義也、シコとはシハ昇水の灵なり、コハ凝ことにて、此草頭低ク丈ハ延ザルヲ名として、ナデシコと云、其義によりて撫子の文字を借なり

○床夏のなつハのどと通ひてのとかに久しき意也、草のとこなつといふ名も花ののどかに久しく在るよしの名なり、なでしこものどしこにて同し意なりと宣長いへり

枕册子に、撫子からのはさら也、やまとのもいとめでたしといへるハ、大和なでしこ、からなでしこと云二種あるをいへる也、萬葉に瞿麦又石竹と書るも共になでしこと訓り、古今秋上にわれのみや　拾遺集に家に咲て侍りけるなでしこを人のかりつかはしける、伊勢、いつこにも咲はすらめどわかやとのやまとなでしこ誰に見せまし、千載集夏歌に、和泉式部見るに猶此世のものとおほえぬハからなでしこの花にぞ有ける、此唐撫子ハ今石竹なり、

餘材抄云、瞿麦をなでしことといふは本名也、床夏といふは異名也、云々 床夏とは此花夏秋冬三時にわたる故に總名をもて常夏といふ、常夏とハ常の義也、常夏といふより［六帖 貫之］涼しやと草村ことに立よれば暑さぞ増る常夏の花、又常を床にとりなして［古今 躬恒］塵をだにすゑしとぞ思ふ咲しより妹とわかぬる床夏の花萬葉巻十七に、

多知夜麻爾布里於家流由伎乎登已奈都爾見禮等母安可受加武賀良奈良之とあるは雪の久しく消ぬをいへりこれにても知るへし、床夏ハ常住不絶の意也

（二）姫部志

十四 姫部志咲たる野邊を行めくり君を思出たもとほりきぬ 大伴池主

巻八 娘部思秋芽子た折れ玉桙の道行つとゝこはん兒のため 石川朝臣老夫

巻十 手にとれは袖さへにほふ美人部師此白露にちらまくをしも

同 吾さとに今咲花の女郎花あへぬこゝろになほ戀にけり

和名抄女郎花、新撰萬葉集云、女郎花和歌云、女倍芝美乎那閉之今案花如蒸粟一也、所出未詳 とありて、又別條ニ敗醤陶隠居日、敗醤和名知女久佐 氣似敗豆醤故以名之と二條に出せとも、敗醤ハ即女郎花なり、すへて女にたとふれは、女郎花美人部師また娘部思なとゝかけり、花に黄白の二種あり、黄花のものは花細かにして色蒸せる粟の如きもの是也、白花のものを俗にをとこへしと云、又男郎花或南樓花とも書、皆和名也

二十 秋野爾波今已曾ゆかめ物部の（三）乎等古乎美奈の花にほひ

見に　大中宗持

袖中抄に乎等古とハをとこべしといふか、おほとちとてをみなべしのやうにて、花の白き也と有、契冲も此說によれり、翁はものゝふはをとこといはん料也、薄を男花、をみなへしを女花といふべしといはれつれと、恐らくは强ごとならん、千蔭云按に薄の穗を乎花と云は、鳥獸の尾に似たれはいふなるへし、されは多く尾の字を用ひたり、さて此歌のをとこをみなのといへるは草の名にはあらずして、男女うち交りて行こと也、秋野に千種の花のにほひ見に男女打交りて今こそゆかめといふ意にて、一五三四二と句を次第して心得へし、又もの〻ふといふは、もの〻ふの八十件の緖といひて男女にわたる事也、卷十九にも物部の八十をとめらがともよめれば、もの〻ふはをとこといはん料也といひつるもよからす

頭註

女郞花ヲミナヘシ契冲云、萬葉ニ姬押トモカケリ、是ニ依テ名ノ意ヲ思フニ、色ヨキ花ニテ女ヲモオス心歟、姬ハヨキ女ナリ、押ハ俗ニオスをヘスト云ヘリ

かくさま〳〵に書てあり、今をみなへしと云て、いつくの野山にも多くあり、

古今よりこなた歌にも多くよめり

○ヲミナメシトハヲミナハ女也、メハ女ナリ、シハ補言ニシテ省キ女ト云名ナリ、故ニ文字モ其義ニヨル

㈢男郞花茶(オホドチ)といふ草の事とそ、袖中抄におほとちハをみなへしに似て花の白き也、されはをとこへしともいふ

和名抄爾雅注云、茶(音途和名於保都知)苦采之可食也と有は、のげしと云ものにして、をとこへしとはことなり

宣長云此歌ハ一三四二五と句を次第(ツイ)て見へし、乎等古乎美奈能花と云はあらす

尾花の條に、眞淵の說を出せり、見合へし

藤袴(＊)

秋の七種をよめる旋頭歌に、藤袴とのみありて、別に藤袴をよめる歌なし、さて和漢ともに古へ蘭と稱するものは、今の茅葉黃花の蘭花にあらすして皆藤袴なり、楚騷九畹の蘭孔子の王者香と稱し、後の世に燕尾香、都梁香、佩蘭葉なとゝいふもの、卽古の蘭也、柯葉花ともに香ひつよし、古今集に秋風にほころひぬらし藤袴つゝりさせてふきり〳〵す鳴とよみしもの、皆古の蘭を咏して、今の幽蘭にあらす、和名抄兼名苑云、蘭(和名本草云布知波加萬)とあり、詩經注、蕳蘭也、其莖葉似澤蘭、廣而長節々中赤、高四

五尺と云もの是なり、春苗を生す、葉固く節に對して長葉左右に出る、刈取て乾くものは香氣愈烈し、秋枝の末毎に小なる薄紫の花むらがりて咲、又ふち色なるも白ろきもあり

頭註 (＊)蘭(フヂハカマ)トハフヂハ藤ナリ、ハカマハ袴(ハカマ)ノ言ニテ、藤色ノ袴ノ有草ト云名也、亦此草ノ同性ニラニ(蘭)ト云草有、音便ニ唱テラント云、則ラニノ反リニシテ、リハ出入水火(イキ)ノ双タルコトニテ、此草ノ葉ノ長ハ水ヲ宰、短キハ火ヲ宰テ水火(イキ)也、故ニ自(オ)ラ人ノ水火ニ和シテ香ヲ好テ、葉ヲ愛ナリ、

(＊)朝貌

卷十　ことに出ていはゝゆゝしみ朝貌の穂には咲出ぬ戀もするかも

同　こひまろひ戀はしぬともいちしろく色には出し朝容貌の花

同　朝果(諸本作)は朝露おひて咲といへとゆふかげにこそ咲まさりけれ

千蔭云槿花なり、牽牛花にはあらす、槿花は朝に咲て夜に至て萎めり、朝毎に新花の如く咲故に朝顔の名は負しならん、さて此歌にいふは、其花夕陰にをもしろく見えつる時にふとかくよみしなり、何の意あるにあらす、杲は音を借たり、かほ鳥を杲鳥と書に同し、眞淵云、此國上古朝顔と云は、木槿の花なり、ゆふ陰にてそ咲まさりけれとは木槿の花のさまをよみたる也、六帖なとに野邊によみたるもむくげなり、後に蔓草の朝のみ花さくを藥用の物にから國よりもて渡りしか多くなりたるより、むくけを朝顔といふ事人皆わすれたり、槿花一日自爲榮といふて、朝より咲出て夕つけまて花ある也、秋もやゝふかく日影薄きころほひ、夕影まちてさかりを見するをめつらしみてやよみつらん、云云よろしく此說にしたかふ、詩經有レ女同レ車顔如二舜華一（舜ハ木槿也樹如レ李其華朝ニ生暮ニ落ツ云々）和名抄蕣（和名木波知須）云云とあり、今奥州にて木槿をきばちすといひ（木蓮ノ意ナリ花ノ似タレハ水蓮ニ對シテイヘリ）東國にてははちすとのみもいへり、京にてむくげといひ、阿波にてもくげといふは、木槿を轉したるにて木堇(ムクケ)也

頭註 (＊)朝貌トハアサハ朝ナリ、カハ香、ホハ火浮(ホノイク)コトニテ、朝ニ香ノ火浮草ト云名ナリ○ヒル貌ハ晝(ヒル)香ノ火浮草ト云名也、夕貌モ同義ナリ

興清說にあさかほは桔梗にも牽牛子にも木槿にもすべていふ

名にて、その花あしたにうつくしく咲ものなれは也、かほハ顔面容貌彩色にいへる詞なるへし、和訓栞六の巻加の部に注せしか如し、云云皆美しき花をさはよめる也、たゝ花の美しく咲るをいふ也といへるかよし、

萬葉考に槿とせしは實にうけかたき說也、後にハ桔梗をきちかう（古今物名）に見ゆ異名を阿利乃比布岐、乎加止々岐一重草、ありのひこと、李といふよし本草和名十の巻草部下、和名抄等に出たり、牽牛子をけにこし（古今物名）木槿をむくけ、多識篇灌木類部、木槿和名牟久計是等の異名ともは異名分類に諸書を引て載たれハ、閲してしるへし、かく異種（コトモノ）にて同名なるも、そのたくひすくなからす、近頃あさがほを一種のものにかたづけんとこれかれろうぜし人おほかれと、ひとつも理なるはなし、

新撰字鏡に桔梗阿佐加保、又云岡止々支ト（古今六帖）春日野の野へのあさがほおもかげに見えつゝ妹はわすれかねつも、家持

此歌萬八に高圓の野の容花面影に見えたり、

新勅撰、おほつかなたれとかしらん秋きりの絶間に見ゆる朝かほの花　よみ人しらす

夫木、しはしなほしほれなはてそゆふ日かけかくれの小野のあさかほの花なとよめるは、野に生たるさまもおもひやらるれハ、これらは桔梗をさしてあさかほといふ証とすへし、

又萬十詠花歌に、朝果朝露負而咲雖云云、又夫木秋部槿花條顯朝卿歌あさかほの名にこそたてれ夕露に咲そふ花の色も有けり抔よみたるは木槿也

容花

卷八 高圓の野邊の容花面影に見えつゝ妹はわすれかねつも　大伴家持

卷十 ㈡石はしの間々に生たる貌花のはなにし有けりありつゝ見れは

十四 みやしろのをかへにたてる貌㈢か花な咲いてそねこめてしぬはん

是も翁は槿花ならんといはれき、或人今晝顔といふものならんといへり、いつれもより所なし、推はかりのみ也、貌といふより妹か面影にいひ下せり

十四 うちひさつ宮のせ河の可保婆奈のこひてかぬらん伎曾も許余比母

うちひさすと云すとつと通はせいふ也、巻十三に打久津三宅の原ともかけり、かほ花は顔よき妹に譬へたるか、きそもは昨夜をいふ、此序穏ならす、かほ花は眞淵翁云、おもたかをいふにや、かれか葉は人の面の高きか如くなれは面高とも名付といふ意を枕さうしにもいひつ

頭註 ㈡石橋の間々に生たる貌花とよめるにつきて、後世かきつはたをかほよはなといへとも、より所なし、こは草の花の美しきを貌よき人にたとへていへるにて、一種の名に非す、朝貌夕貌晝貌なとみなその花の美しきを人の貌にたとへてよへるなるへし

㈢此歌とも皆木槿桔梗抔をよめるならん

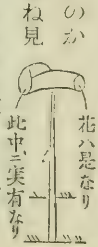
契沖說、かほ花ハたゝうつくしき花をいへり、或云、朝貝夕

貞なとのやうにほめていへる也、梯云、唯秋ノ美シキ花也、サレド巻十ニ石橋ノマヽニ生ヒタル貞花ノ云云トアルニテ一種トモミユ、サテ八ノ五十二丁ニ容花（カホハナ）トアルヲ六帖ニアサガホト改メタルハ何故カ心得ス

(*)思草

巻十　道の邊の乎花かもとの思草今さら〳〵に何をかおもはん

たゝ此一首あるのみにてこれを置ては見えす、宣長の玉勝間に思ひ草と云草はいかなる草にかさたかならぬを、一とせ尾張の名兒屋の田中道麻呂か許より文のたよりに、今の世にも思ひ草といひて薄の中に生る小き草なんあるを、高さ三四寸あるは五六寸ばかりにて、秋の末に花さくを、其紫の黒みたるにてうち見たるは、菫の花に似て菫のこと色の匂ひはなし、花さく頃ハ葉はなし、此草薄の中ならてはほかには生す、はなのはしつかたなる所の中に黒大豆はかりの大さなる實のあるをとりてまけはよく生る也、されとそれも薄の下ならてはまけとも植れとも生る事なし、古への思ひ草もこれにやあらん、されとすゝきの中にのみ生るから、近き世に事好むものゝおしてそれと名つけたるにもあらんかといひて、其花の圖をも書て見せにおこせたり、そのかたはかくそ有ける、さるは後に尋ね見れは、此わたりの野山なる薄の中にもある草にて有ける、古への思草ならんことはしもけにいとおほつかなくなむ



頭註　(*)西山公の御釋にも、思草のこと先達の説とあれともより所なし、されは信しかたし、今按るに尾花か下にかきらす、物のかけに生たる陰草を總て思草と云か、六帖に思疲と云題に入たる歌に、初蒔（ハツマキ）の痲生（ヲフ）の下草陰しけみあるかなきかにわひつゝもふる、櫻痲の苧生（ヲフ）の下草やせたれとたとふはかりもあらす我身は、これらの陰草ハやする物ニよそへよめり、されは陰草のやするは下思ひにやする人に似たる意にて、思ひ草とハ名付たるか、此集第十一に我せこにわかこひをれは吾やとの草さへおもひうらふれにけり、此草さへ思ふといふは思ひ草の意にて、我戀やすれは、我宿の陰草さへ物思ふやうにしなへてうらかるゝとなり云云、
新古今多　題しらす　和泉式部
野へみれハを花の本の思ひ草かれゆく冬になりそしにける

(一)玉掃

詠ニ玉掃鎌天木香棗ニ歌

十六　玉掃（ハヽキ）刈來鎌まろ室の樹と棗かもとゝかきはかんため

にはゝきは今はゝき草といふものにて、和名抄地膚一名地葵〈和名 爾波久佐〉一名〈末木 久佐〉と有もの是なり、其形丸らかに生出れは玉の詞をそふるか、巻廿に賜二玉箒一事端詞に有て、初春のはつねのけふの玉ばゝき手にとるからにゆらく玉の（二）をとよめるは、玉もて餝りたる箒にて、今とは異也、刈こ鎌まろはたゝかまといふへきをやつこなとの名にいひなせし也、天木香と棗とは木の部にいへり、今たまはゝきといふ草別にあれと、それにはあらす、

袖中抄に此玉箒とは蓍（メド）といふ草に小松を取そへて正月初子日こかひする屋をはきそむる事也といへり、直兄云、今加茂にて子日の松に玉箒を引そへて必す神に奉ると云、其玉箒と云はいかなる草にやと尋るに、此國にてウサキカクシと云物なり、去年の冬枯れたてるを取りてははきに作ると云、是古の玉箒なるへし

頭註 （二）〇タマハ、キトハタマハ美稱、ハ、キハ羽帚ヲ本ニシテ草ヲ束ネタルヲモ箒（ハヽキ）ト云、五十八丁ヲ見合スヘシ

萬葉裨ニ多麻（タマ）波々伎（ハヽキ）、宣長說ニ玉帚ハ玉をかざれる帚（ハヽキ）也、ゆらぐ玉の緒は其帚の玉のゆらゆらとなるをいふ也といへり

今も泊瀬の山中に一種の玉はゞきと云草あり、地膚のことくにてウルシ付たるはかりの光澤（ヒカリ）ありて、子ハ蜀黍（トウキビ）ニ似たり、又興福寺の什室に草箒に玉を着たるも有と云、これらハいと後の世のこしらへもの也、〈是右長生ナラン〉

西山公ノ御說アリ別ニ記ス

（三）契冲云、玉箒を君より賜ハりて、初子のけふの玉はゝきとよめるは、地膚を結てかされる箒也、子日はいはふ事なれは箒の塵を拂ふことく身に禍を拂ひ、心を清くして君に仕へよというふ事を、物に長して賜へるなるへし、弓を作るによき故に、眞弓の木といひ、眞弓の木にて作りたる弓をも共に同し名にいふ如く、箒に結によけれは玉箒とつけ、玉箒にてゆへるをも又玉箒といふなり云云

羊蹄

〈巻十〉年のはに梅はさけとも空蟬の世の人吾（ワレ）羊蹄（シ）春なかりけり

集中に羊蹄の二字を之の音に用ひたるは、和名抄に羊蹄菜〈和名之布久佐 一云之〉今も南部にて羊蹄根をしのねといひ、葉をしのはと云、京にてぎし〳〵といひ、阿波にてしぶくさと云も皆古名のしを轉し來れる也、野邊に多し、葉の長さ二尺斗春の末薹（クキ）立て、其梢に花さく、根はふとく黄にして大黄の如し、故に仙臺にてしのは大黄と云

頭註 （＊）大黄（オホシ（＊））ヲオホシト云ハ、羊蹄ヲ□□ト云、夫レガヤウニテ大□ナ

レバカク名付タリ、紫菀ヲノシト云は、野羊蹄歟、其葉少し、羊蹄ニ似タリ、知母ヤマシ山羊蹄歟、白英ほそし細羊蹄歟、蓄蕪スシ和名ニ爾雅注云、—似羊蹄、葉細味酢者也トアレハマサシク酢羊蹄ナリト契冲ノ說

母々余具佐(＊)

二十　父母のとのゝしりへの母々余具佐もゝ世いてませ我來るまて　同郡生玉部足國

此歌の前に並ひて、佐野郡丈部黑當の次にあり、和名抄遠江佐野とあれは、足國も佐野郡の人なり

とのゝしりへ（殿の後方へ）ハ父母の住所の後へなり、ももよ草しられす、六帖に雜の草の部にのせたり、もゝよくさはもゝよといはん料にていてませは百歲もいませ也、わかきたるまては吾歸り來るまて也とあり

頭註　(＊)〇或說ニ月草なりといへど、六帖に月草の外に出せり、又一說には菊なりといへり

手向草

卷一　白浪の濱松か根の手向草幾世までにか年の經ぬらん　川島皇子

草は借字にて種也、何にてもあれ手向の具を云へり、卷十三長歌 相坂山丹手向草麻取置而とある手向草は麻幣の事歟なるもてこゝをも知るへし、此手向草には種々の說あれとも、皆論にもたらす、幣帛をはしめ、種種の物を神に奉るを云

水草

久老云池につきては、水草のみハ字の意なるへくおもへど水は假字にて、眞草なるへしとそ

卷三　昔省之ふるき堤はとしふりみ池の瀲に水草おひにけり　山部赤人

卷十　春されは水草の上に置露の消つゝも我は戀渡るかも

同十　秋つけば水草の花のあえぬ蟹おもへとしらすたゝにあはされは

千蔭云水は借字にて眞也、水篶も眞篶なるを水の字を借れるか如しといへり、然れとも池の渚に水草生ひけりなとは、眞草の意にあらすして水草ならんか

眞草

秋の野に眞草刈ふきやとれりし宇治の都のかりほしおもほゆ

宇治の都はこゝに都ありしにあらす、行宮を一夜なから宮所と云也、さてそのかみは旅行して野山に夜ことやとりを作りてふせりし、それをも行廬といふ、拾遺集にも、旅人のかや刈おほひ作るてふまろやは人をおもひわするゝ是古へにならへる歌にて、丸屋は我をまろと云にかけたり、かりそめの屋をふくとて刈を(＊)刈かやといふ也

巻一 眞草刈荒野にはあれと黄葉の過にし君か形見とそ來し 人麿

眞はほめたる辭にて、こはすゝき茅なとの高かやをいふ、眞にこゝろなし、水草とかけるにおなし、荒野は荒山といふかことく人氣遠きをいへり

頭註 (＊)巻の上にいへる加夜の條と合せ見るへし

山草

十二 烏玉の黒髪山の山草に小雨ふり敷しく／＼おもほゆ

山草と書たれと、事の様山菅也といへり、小雨のふりしきるにしをれなびけるはいよゝ繁く見ゆるをいへり

山陰草

みやまかくれの草をいへり

影草

巻十 影草のおひたる宿のゆふ陰に鳴蟋蟀は聞とあかぬ鴨

(＊)山の陰草の類にて、物の陰に生るをかげ草と云へり、影は僞字にして陰草也

頭註 (＊)夏ふかき山のかけ草とにかくにことのしけきは我世なりけり（新六 爲家）

庭草

巻十 庭草に村雨ふりて蟋蟀の鳴聲きけは秋付にけり

和名抄に地膚を邇波久佐と有は、今はゝき木といふものにて、此歌の庭草とは異なり、こゝはたゝ庭に生る草なるへし

(＊)水陰草

巻十 天漢水陰草の金風に靡くを見れは時來るらし

巻十二山河の水陰に生る山草のやますもいもかおもほゆるかも、此陰を一本に隱とす、是によるに今も陰は隱の誤か、然れはみこもりと訓て、祝詞に水分をみくまりともみこもりとも訓る如く、みなまたに生たる草をいふ也、是を水かげ草といひて水草にいへるはひかこと也、水邊

の山野に有草なりと翁はいはれき、されと陰草とよめるは山の陰草也、然れは水に生る草を水陰草といふ也と契沖かいへるによるへし、天の川邊の草の靡くを見て二星の相あふ時來るらんといへるのみなり

頭註 (*)かくいとやすきとを、中比の人の心ははかなきか、おしよみにみつかけ草とよみて、古今六帖には假字にて見つかけ草と書けるたにあるを、いかにはかなき人の水掛草とよみつ、七月なれハ魂祭の手向てふとすなるに、思ひよせて、こはみそはきのを也といふそ笑はしき、又水陰を水隠と書かへてみこもりと假字つけしもあり、さるを見こもりといひたる事古書にハなきをや、かくよしなき事をすなるだに有を、是によりて彼水陰草をも、水隱草と書誤れりといふ人もあなり、これらみな己か心ひとつにのみ定てまことに求ねはや、玉函叢説ニ、水陰草をミツクマクサとよみて、御説に此集クマと云に多く隈の字を用て、此二首のみ陰の字を書たれハ、迷ふ人あなり、抑萬葉集ハ人の書たる歌を、只其マヽニ寫し記せしと見えて、書様さま/\也、されはかたへのをもて例とし、かたしこは、唐詩にも碧水陰綠水陰を碧水隈綠水隈なと通し用ひしかは、水陰ハミツクマとよむに疑もなき事也、水陰草とは水のかけにおふる草をいふか、又山河の水陰におふる山菅とは水の陰に生るをいふにて、即水陰草と云に同し、さて水陰草とは、何草にもあれたゝ水陰におふる草とよめるなり、さるを今七夕に水カケ草と俗にいひて千屈菜(ミソハギ)を星に手向るは據なき後世の風俗なれとも、天漢水陰ノ秋風と云に因れるならん、されとも水陰草既に云へる如くにて、千屈菜を云にあらす

(*)暮陰草

巻四　我宿の暮陰草(ユフカゲクサ)の白露のけぬかにもとなおもほゆるかも　笠女郎

夕暮草といふも草の名にあらす、水陰草山陰草といへるにおなし、庭の夕陰の草なり

頭註 (*)草ノ名ニアラズタヾ夕陰ノ草ナリ

戀草

巻四　戀草をちから車になゝくるまつみてこふらく我心から　廣河女王

戀草はたゝ戀也、くさはそへたるのみ、力車は物を積て引車也、人を戀ふよしのあるを戀種(コヒクサ)といふ、思ひの種(タネ)といふに同し

目不醉草

十二　五更(アカトキ)の目不醉草とこれをたに見つゝいまして我をしのはせ

めさまし草は草の名にはあらて、何にてもあれ贈れる物をさしていへり、くさといへる詞によりて、前後草をよめる歌の中に入れとも、語草(カタラヒクサ)つれなし草なといふか如し、猶この類ひによめる歌多けれとも、何れも皆同じことなれは悉くあくるに及ず

加多羅比具佐

十七 萬代乃加多羅比具佐

かたらひはかたりあふの約言にて、萬代のかたらひ草とは、古代の事又今の事をも後にかたりなくさむ也

草陰

草陰の荒藺の崎の笠島を見つゝか君は山路こゆらん

くさかけとは草こもりしあれたるを云にて、あらるとはつゝけたるか、荒藺と書たれと字にかゝはらぬかいにしへ也、陰草といふもおなし。

馬草

七 此崗に草刈わらは然な刈そね有つゝも君か來まさん御馬草にせん

然の下莫の字を落せり、しかなかりそねは如レ此かゝる事なかれと也、ねはなと同しく願ふ言其草の在たらは君か來まさん時、馬にかはんと也

○五左右草　五の指を向合たる木と云ことにて五葉松を云と、一説也、又木も草も同性也、故に木を草と云、此説いかゝあらん可考

○草根　とは木ノ根と云ことにて、松を云也松を根と云は諸木に勝て岩石に根を生の故也、既に根延(ネノビ)の松とも云、殊に陽木にして長生也、萬葉岩代乃岡能草根乎伊坐結天(ムスビテナ)と有も草根は松也、同集に在根良(マツラナル)など訓て根は松也、近世の俗説に草根は草のことに云は僻こと也、

附箋 毛々久佐 五 年月は流るゝ如し取つゝき追來る物を百くさに責より來たると云は、世のつとめのくさ／＼にしげきを云

之努布草 六巻 和名抄苔ノ部に垣衣一名烏韮、しのぶ草と見ゆ、屋遊ともいひて、屋の上の苔なりとも云、今しのふ草と云物山谷に生ひて、軒のしのふ草なとはよむへきにあらす

萬葉集名物考 木類目次

眞辟葛マサキノカツラ　古語拾遺、古事記作㆓眞析サキ㆒、眞佐岐蓋取㆓眞幸之義㆒、萬葉集云、言幸眞福座跡コトサキクマサキクマセト是也

(一) 木類

梅

三 妹家に咲たる梅の何時毛々々々なりなん時に事は定めん 藤原朝臣八束

久老云、梅は五瓣に花咲ゆゑに咲たる梅の五とうけていつもといへり、卷四に伊都藻之花乃何時毛々々々と侍る、伊都藻は荇菜也といへれと、是も五瓣に花咲ゆゑにいつ藻の名やおひけんと思ひて、人人にとふに、水草はおほく四ひらなるを睡蓮こそ五ひらに花開といへれ、さてはいつ藻は睡蓮にて、何時毛々々々とつゝけし意もことおなしかりぬべし

○ウメトハウハ起言、メハ芽也、陽氣陰中ニ回リテ芽ヲ出シ花咲事、萬木ニ勝レテ、寒中ヨリ芽ヲ出テ花咲故ニ、起芽ト云、梅ヲメノ假字ニ用ハ是ナリ

冬十二月十二日歌儛所之諸王臣子等集ニ葛井連廣成家ニ宴歌

卷六 我屋戶の梅咲たりと告やらは來ちふに似たりちりぬともよし

卷五 春されは先咲宿の烏米の花獨り見つゝやはる日くらさむ 山上憶良

同 人每にをりかさしつゝあそへともいやめつらしき烏梅乃花加毛 氏萬呂

卷十 百磯城の大宮人はいとまあれや梅を挿頭てこゝにつとへる 作者不知

十七 御苑ふの百木の宇梅の落花のあめにひあかの雪とふりけん

二十 宇梅の花香をかくはしみ遠けとも心もしぬに君をしそおもふ 市原王

和名抄梅和名宇女似杏而酢者也と有、集中に宇梅、烏米なとゝ書たり、又烏梅とも書て、梅の字をめの假字にも用ゐし事おほし、但シ烏梅は字音なり、烏梅とは梅の子を干たるをはしめ、藥用の爲にから國より渡し來りて、後又其木を根こして來りし時、是そかの烏梅の木也といへる

より、つひにその木を烏梅の木とよへるならん、からはいよゝむめとは書へからぬことはり也と眞淵いへり、さて古へは梅か香をめつることはすくなかりしなり、梅か香をよめるは、此集中に市原王の歌たゝ一首のみにて、これをおきては外に見えす、是より後に至りては香をむねとよむことゝはなれり、もとも紅梅なとは此頃はなかりしなり、(四)紅梅をよめるは貫之集にこをばいの木に女ともおりて見る、等とのみおやまたれつる梅の花紅にさへかよひけるかなと、はしめて見えたり、此頃紅梅の渡り來しゆゑ、かくよめるならん、今にては梅の種類三百種にあまれり

頭註　(一)古書に皆ウメとのみかけり、古今物名に梅を題にてあなうめにつねなるへくも見えぬかなとよめり、今はむめとのみ書ならひてウメと書人なし、愛日の意に付たる名歟と契沖いへり
(二)梅はもとより皇御國のものなることを、玉函叢説に論ひて明けし、されは眞淵の説よろしからす、
(三)天平二年正月十三日大宰帥大伴卿の家に梅ノ宴せしときの歌三十二首あなるに、烏梅守梅なと二字をかきてうめとよませたるを、こは烏梅の渡て後に梅ノ木をこしもて來つれは、こは烏梅の木そ、烏梅の花そといへるによりいて、うめは是御國の言葉ならす、梅かめの假字にて烏梅の音也といひたるは、誤なることを論せし御說に從ふへし

萬八ニ引攀て折はちるへし梅花袖にこき入れつ染者しむとも　三野連石守
そまはそむともは、其花の色に袖の染らは染るともといふ也、名花をよめり
神龜四年正月の歌に、梅柳過良久惜佐保乃内尓遊事乎宮動々爾、かの梅宴よりは五年まへなるに、梅の一字にてうめとよませたり
(四)後選集　紅梅を見て　みつね
くれなゐに色をはかへて梅の花香そこと〲ににはさりける
色は紅にかへつれと、香は白梅に異らすと也

若木梅

巻四　春雨をまつとにしあらし吾屋戸の若木梅もいまたふゝめり　久須麻呂

巻八　去年の春伊許自て植し吾屋外の若樹の梅は花咲にけり　阿倍廣庭

伊は發語、許自は根こしといふに同しく振動かす事也古事紀に天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許士而と有におなし、許士は堀と云古語なる歟、さて此歌によりておもへは、今の野梅は古へより自然と吾邦にありしものなるへし

柳

巻十 霜かれの冬の柳はよき人の蘰にすへくもえにけるかも

同 丈夫のふし居なけきて作りたる四垂柳の蘰せ吾きも

同 梅の花とりもち見れは我宿の柳の眉しおもほゆるかも

十九ニ (二)青柳乃細眉根ナト云ハ、青柳ノ如ク細クウツクシキ美人ノ眉根ト云事ナリ

巻八 うちのほる左保の河原の青柳は今は春へと成にけるかも

十 百しきの大宮人のかつらける垂柳は見れとあかぬかも

和名抄柳一名小楊（和名之太里夜奈木）と有是なり、巻五に阿乎夜奈義梅との花を折かさしのみてののちはちりぬともよしも、又波流楊奈宜とも、刺柳ともよめり、(三)すへて柳は枝を刺てよく生たちつものなれはかくいへり、楊、柳ともにやなきとよめれとも、柳は枝の垂るゝをいひ、楊は枝の上へ立のほるものをいへり、柳は常のしたりやなきにして、俗にこしたれと云、漢名は秘傳花鏡の垂柳にあたれり、又俗におほしたれと云有、葉のひろさ一寸はかり、長さ七八寸、大木になれは枝のたるゝ事二三丈にいたる、是は秘傳花鏡の垂柳なり、ともに春いまた葉の出さる先に花あり、花は穂をなして色黄なり、後に實を結ひて絮となり、風にしたかひて飛なり

頭註 (二)貫之集に、青柳の眉にこもれる原なれど春のくるにや色まさるらん

(三)柳は枝を折て地にさしおけは生ひやすく、根植はかへりて育ぬもの也

楊疑

十四 戀しけは來ませ我せこ(四)垣内楊疑うれつみからし我立待ん

とは糸たれすして上へ小枝のたつをいへり、俗にたちやなきと云、それを植て垣とする也、此歌も其柳の梢を採からして越るに安からん爲なり、和名抄に楊（和名夜奈木）赤莖ノ柳也と二條に出せり、よろしくしたかふへし

頭註 (四)梯云、可伎都楊疑垣中ノ柳也、サテ柳ヲヤキト云ハ昔ハ柳ヲ矢ニセルニヤ、屋支ハ矢木ノ心ナルヘシ、延喜式兵部式ニ、矢科ノ柳ト云事見エタリ、又左傳ノ杜注ニモ、蒲ハ楊柳也可ニ以作ニ矢也ト云事見ユ

柳ヤナギ名義、ナハノト通スレバ、ヤノギノ意ナルカ、胡簶ヲヤナクヒト云モ矢ヲ杙ノ如クサセハ、矢杙ノ意ニ名付ル歟

河楊

巻九 河蝦なく六田の河の川楊のねもころ見れとあかぬ君かも

も

巻十 山のまに雪はふりつゝしかすかに此河楊はもえにけるかも

和名抄水楊（和名加波夜奈木）とあり、青柳をあをやきとよめは川やきとよむへし、川の邊に多く生す、葉厚く面緑にして背は白し、春いまた葉を出さゝる先に穂をなして花咲、筆の頭に似て長し、故に備前にてふてやなきと云、又狗尾草の穂に似たるゆへ、ゑのころやなきともいへり、其色眞白くして銀の光りあり、卽ち銀やなきともいへり、後に實熟する時はその絮風にしたかひて飛ちる也

七 あられふり遠江のあと川楊かれゝとも亦もおふちふ余跡川楊

柳の刈てもやがておふるに思ひはなれても、又はなれか(二)たみしておふをたとへたるなるへし、霰降は枕詞也

椿

椿ハ借字也、ツハキトハアツハキト云事ニテ、アヲ省テツハキト云、諸木ニ勝レテ葉ノ厚キヲ名トス、又椿ハ古名タマツハキ（玉椿）ト云、タマハ手向ナリ、ツハ列言、ハキハ葉木ナリ、手ヲ向タル如ノ葉ノ木ト云名ナリ

巻一 巨勢山の列々椿つら〱に見つゝおもふなこせの春野を　坂門人足

十九 奥山の八峯の海石榴(三)つはらかにけふはくらさね丈夫のとも

七 足病の山海石榴さく八峯こへ鹿待君かいはひ妻かも

二十 足曳の八峯の都婆吉(三)つら〱にみともあかめや植てける君　大伴家持

和名抄椿（和名豆波木）木名也、楊氏漢語抄云、海石榴（和名同上）つばきとはもとあつは木のあを畧きたる歟、宣長は刀の鐔に作、又古へつばとのみもいへり、大和の海石榴市、越前の椿坂なと也、つら〱は多く生連り生ひたるを云、續日本紀に海石榴油一罐を唐國へ贈られし事も見ゆれは、多く植られしなるべし、古へより椿の字をつばきとよめるは、椿は大樹にして古名を玉つばきとよひしより訛りたる也、其玉つはきといふ木は、今俗にしろはぜと云木也、河内にては古名をつたへて今も玉つは木と云へり、後の歌に(四)八千代の椿とよめるは、椿壽八千歳てふをつみていへり、此集よめるつはきは、漢名山茶花と本草に有、又海石榴と書もあたらす、海石榴はさくろの一種、朝鮮さくろの事なり、椿も海石榴も山茶の類にはあらす、此誤

りの事は唐國までも聞えたり、藥方雜記ニ云、日本山茶花其國名爲レ椿、不レ名以ニ山茶ニ也とあり、又其下の文に日本にてよふ山茶の名を栽たり、白玉　唐笠　白妙　高根　白菊　六角　加賀牡丹　渡守　春日　有川　朝露　亂拍子　薄衣　大江山　三國　玉簾　浦山開　荒波　鳴戸　關戸　金水引等の二十一號あり、日本唐ともに山茶の種類多し、殊に日本にては近世多く植て其品數百種に及へり

頭註

(一)出雲風土記ニ海石榴字或作レ椿トアリ

(二)古事記雄略段ニ、日並家に生ひ植る葉廣厳葉海石榴其葉の廣りいまし其花の照います云々

(三)按に此集によめる都婆吉は今のやふつはき、山つはきと云て、紅の一重咲たるもののみ有て、今の世の如き種々のものはなかりしと見ゆ、日本紀天武帝の時吉野より白つはきを貢せし事を擧たり、ともに花の形躑躅花に似たる故、漢名躑躅茶とも本草山茶の條に見えたり、四都婆吉を海石榴とするは、山茶の類に海榴茶、石榴茶等の名あるによりて誤れるなるへし、西陽雜俎續集に山茶似ニ海石榴ーと云をもて証とす

(四)椿ハ花咲ク木ハ稀也、總テ草木共ニ雄雌アリ、此木ハ雄木多クシテ雌木ハ至テ稀也、雌木ニ花咲テ實アリ、然レトモ人其花實ヲ見ル事難ケレハ、八千代ノ例ニ云ナリ、雄木ノ本ニ蘖多シ、是ヲ別テ植ユ、諸國共多キ木也

(一一)櫻

玉函叢説に櫻をめつる事は、世くたり人の心もうすく成ぬるまに〳〵なるへき云々、櫻の見えそめぬるは履中記より也、それも十一月の朔日、いはれの伊ちしの池に御舟泛て御遊ひ申せしに、膳部臣といはれしか大御酒奉る時、櫻花散來て御盃にいりしかは、あやしみまして長眞膽連をして其木を覓よし也、さて其宮を磐余の若櫻の宮と名つけられ、長眞膽連の姓を稚櫻部造膳部としし稚櫻臣と改ましき、是は櫻の書に見えし初とはすべし、めてし初めとはすべからす、いかにそなれは、十一月に櫻花咲けるだにあるに、大御酒盃に入にしはいかゝあしきさか也、さていはひかへまして也、さるは花のちるはかりおとろへなるを、稚櫻とおほしませるにてしるし、其後は允恭天皇井傍の櫻を見給ひてよませ給ふ御歌波那具波辭佐區羅能梅涅ことめてははやくはめてす和我梅豆留古羅と、櫻を衣通郎姫によそへる御歌也、云々　櫻の咲ひろこりつるは、似るへき物なけれは、かくかうむらしめ給らをしそうへ也ける、さていたくめてこしは、天平寶字の頃よりにや

卷八　足曳の山櫻花日ならへてかくしさけらはいとこひめやも　山部赤人

同　春雨のしく〳〵ふるに高圓の山の櫻はいかにあるらん　河邊東人

和名抄櫻和名佐久良此集によめるものは、皆山中自然生の山櫻なるへし、花はみな一重なり、又庭にも植て花を賞す、本草に山櫻桃とあるもの卽山櫻也、八重櫻より早く咲てちりやすし、花の後に圓なる實を結ふ、はしめ青く熟して赤くなり、後に黑し、この實を俗にさくらんほと云、

八重櫻は實を結はす、近世は櫻の種類いと多し、

附攷 八重櫻は實を結ふことは少しと書べし

松岡の櫻品に數百種を圖し、國々の名義をあけて詳にいへり、又唐山に櫻のある事は、蘭山翁の蓁筵小牘にその證を引て考へたれは、こゝに委しくいはす

巻六 赤人の長歌に(二)櫻皮纏作流舟二眞梶貫とあるは、今の舟の舳を蕨縄して卷如く、櫻の皮もて卷たるならん、是を後にはかば櫻といへり、かにはは櫻の畧也、源氏物語にかば櫻のうつくしき色あるよしに書る所々に見えたり、それか中に(三)外の花は八重咲花櫻さかり過てかは櫻はひらけ藤はおくれて色つきなんとはすめるをとかゝれしは、一種山櫻のいとおそく春のくれかたに咲るものをいふならん、和名抄に樺（和名加波又云加仁波今櫻皮有之）木皮名可ニ以爲ニ炬者也、宜長云、邇波佐久良とあるは加の字落たるにて、かには櫻也、かばさくらと云は此迩文字を略きたる也とあるとは別なり、樺木は東北の國に多し、今も信濃にてかはの木或かんばと云、棐桑に似て尖り四月頃に至り穗になりて花さく、花は至て細にして見るにたえず、皮は櫻に似て薄く紙の如く、幾重にへけやすし、物をとち或は卷つへきにたえす、花も又賞するにたらす、然る時は櫻皮纏といふは山櫻の皮もて卷たるならんかし

頭註 (一)鶴林玉露曰、洛陽人謂ニ牡丹ニ爲レ花、成都人謂ニ海棠ニ爲レ花、尊ニ貴之ニ也、我邦にて櫻を花とするも此心なり

○サクラトハサハ昇ヿ、クサノ反カニシテ、カハ暉火ノヿ、陽氣澄昇ノ義也、是ヲ名トシテサクラト云、故ニ陽盛ナルニ從テ花咲也、サカハ榮ルヿ、盛リ榮エサカモリ皆陽氣進ノ義ナリ

(二)怡顔齋櫻品に云、樺櫻は花桐谷に似て重瓣也、鬱金色にして瓣によれあり、黄櫻とも云、樺茶色なり、俗誤て淺黄櫻と混す、淺黄にはあらすと云もの、即此集によめるかにはなるか、さればその木の皮もて卷るをいふへし

又同書別條に樺櫻白かんばの木と云、其皮を乾して炬火とす、雨中にも火消す云々とあるは、即和名抄に云加波也

(三)源氏幻巻は、ほかの花は一重ちりて八重さく花櫻さかり過てかはさくらはひらけ藤はおくれて色つくなどあり、花櫻カバ櫻を並へあげたり、六帖にも、かにはさくら花さくらと並へあげたり、されば黄がちなる花の咲をいへるにや

桃

桃トハモハ水ノ巽ニシテ舫言ニテ則舫舫ノ心也、故ニ實モ多ク舫ヒナル、水ハ三ノ數ナルヲモテ、三月三日ヲ宰テ、桃ノ節句ト云

巻七 向峯にたてる桃樹なりぬやとひとそ耳言し汝こゝろゆめ

桃の實のなるによせて、我中のなりぬやと人もさゝやき

あへは、つとめて人に忍ひてしらるなといふ也

卷七 はしきやしわきへの毛桃本しけく花のみ咲てならさらめやも

卷十 吾屋戸の毛桃の下に月夜さししたこゝろよしうたて此頃

十九 春のその紅にほふ桃花したてる道にいてたつをとめ

和名抄桃子 和名毛々 此集によめる毛桃といふは、桃の一種下品のものにて、花に紅白二品あり、實に毛のおひたれはいふなるへし、本しけくは只木のしけきをいふ、熟すれは核おのつから離るゝあり、離れさるあり、ともに漢名は本草に云毛桃なり、桃の類もいと多けれとも、みな後の世にから國より來れるなれは、此毛桃こそ古へより我國に自ら有りしものならん

頭註 (二)毛桃爾雅名褫桃小而多毛、核粘味劣不堪、出鏡
卷四日本の室原乃毛桃本繁くいひてしものをならすはやまし、木の實のなるを戀のなるによせたり
室原は神名式に宇陀郡室生龍穴神社と有と、毛桃は今も多くは是なり、一つ毛なき桃有になかへていふのみ、紀の黃泉條に、告桃子汝如助吾於葦原中國所有宇都志伎青人草之落苦瀨而患惚時可助告賜名號意富加牟豆美命、かゝれは上つ代より多し、彼の室生は是を多く出せし所也けりと眞淵いへり、

李

十九 我そのゝ李の花か庭にちるはたれのいまた殘りたるかも

和名抄李子 和名須毛々 とあり、李の花は桃に次てさく、唐にても桃李と熟してともに花を賞するなり、實は六月に熟す、色赤くして梅の大さ也、是を赤李と云、又あをすもゝといふあり、實の色青し、是皮李なり、又しろすもゝといふあり、皮の色しろし、是は花鏡に云白李なり、又色黃なるあり、是は本草に云御黃李なり

茵花

卷三長歌 茵花香君之牽留鳥名津師來與云々

茵花讀香君 にほふとは紅顏なるをいふ、牽留鳥今本牽を之牛の二字に誤れり、師說詳也、久老按に、牛留は爾富の草子を誤れるにや、さらは香へる君之にほ鳥の云々とつゝくへし

卷十三長歌 青山乎横放見者茵花香未通女云々とあり、集中に茵花と書てつゝしはなとよみ、和名抄に茵芋 和名仁豆々之 云々 とよ

めるもともに誤れり、茵花、茵芋はみやましきみといへるものにして、つゝしの類にあらす、つゝしは漢名躑躅と本草にあり、躑躅はつゝしの總名なり、十三に都追慈花爾太遙越賣ともよめり

石管自

巻二 水つたふ磯の浦まの石管自もゝさく道を又も見むかも

巻七 山こえて遠津の濱の石管自我くるまてにふゝみてありまて

和名抄羊躑躅（和名以波豆々之一云毛知豆々之）とあれとも、いはつゝし、もちつゝしを羊躑躅にあつるは誤れり、羊躑躅は一名黄躑躅と本草に見えて、黄花のつゝし也、和名をきつつしと云、深山にありて海邊にあるものにあらす、此二首の歌によれは、石管自は尋常のやまつゝしなるへし、葉及ひ花の蔕に粘りあり、故に今も俗にもちつゝしと云、花は淡紅にして紫の匂ひありて、濃き紅の斑あり、漢名山躑躅と本草に見えたり

白管自

巻三 風早の美保の浦廻の白管自見れとも不怜無人おもへは

不怜は不樂と書るに同し、集中すべて佐夫之とありて、佐備之といへる例はなし

巻九 たくひれの鷺坂山の白管自我ににほはね妹にしめさむ

巻十 姫部思咲野に生る白管自しらぬこともていはれし吾背

花葉ともに山躑躅に似て粘りなし、花はおなし折に咲く、今も俗にしろつゝしと云、漢名は白杜鵑花なり

(※)丹管士

巻六長歌 龍田道之岳邊乃路爾丹管士乃將薫時能櫻花とあり、につゝしは花赤し、山中何處にも多し、俗にあかつゝしと云、漢名紅躑躅と本草に見えたり、春の末に燃るか如く照れるつゝしをいへり、此外つゝしの類猶多し、むらさきつゝしは一名三ツ葉つゝしと云、先花咲て後に葉を出す、其葉必す一所に三葉つゝつく故にしかよふ、花紫なるあり、赤きもあり、漢名紫躑躅と本草に有、深山には木の高さ一丈餘なるものあり、今枝炭にやくもの是なり

頭註 (※)梯ニ云丹躑躅也、丹ハ色ノ美麗赤キ事ヲ云ヘルニテ、紅顔ヲ丹穗面ト云ヘルモオモヒ合スヘシ

(二) 馬酔木

巻二 礒の上に生る馬醉木を手折めど見すべき君がありといはなくに　大久米皇女

道麻呂云、あせぼを事にふれて煎し用うる事あるに、其灰汁のあまれるを馬洗ふ湯にまじへて馬あらへは、其馬日を經ずして痩る事妙也、

是は美濃榛木村の庄屋新五兵衞といふ人右の灰汁のましれる湯にて誤て馬を洗ひ、其馬の俄にやせたる事を道丸に語りし也とぞ、

藻鹽草に馬食此葉則死故馬醉木と云といへり、とりつなけ玉田よこのゝはなち駒つゝしましりにあせみ花さく、又おそろしやあせみの枝を折たきて南にむかひいのるいのりは、又みまくさは心してかれ夏野なるしけみのあせみ枝ましるらん　新六

六帖にあせみと有は、音の通へはやゝ後にはしかとなへしなるべし

巻十 吾瀬子に吾こふらくは奥山の馬醉花のいまさかりなり

同 春山の馬醉の花のにくからぬ君にはしゑやよせぬともよし

同 川津嶋吉野の河の瀧の上の馬醉之花（今本ツヽジト訓リ）そおくに間もなき

屬目山齋作歌

巻二十 乎之のすむ君かこの島けふ見れは安之婢の花も咲にけるかも

同 池水にかけさへ見えて咲匂ふ安之婢の花を袖にこきれな　大伴家持

同 礒かけに見ゆる池水照るまでに咲る安之婢のちらまくをしも　伊香眞人

六帖に大久米皇女の歌をのせてあせみの花と書つれは、古くはあせみとよみしならん、然れとも巻七に安志妣成榮之君巻二十に三首とも安之婢と書るをもて、此集は皆あしひと訓へし、和名抄に馬醉木を載せす、眞淵云、あしひは木瓜なるへし、いかにそなれは其もけは字音にてここの語ならす、東人のしどみといひて、且馬の毒也とする物そ、是なる安志妣を馬醉木と書るにてもしるへし、さて馬のこれを喰へは醉て足なへとなるなるへし、其あしひともしどみともいふ語を考るに、病に志良太美あり、貝に志多太美、草に毒だみといふ、太美は病の事なり、さてその太美と度美と音の通ふに依に、志度美は安志太美の安を略き、安志妣は安志太美の太を略ける也、後の俗のあせぼといふものをもて、古へのあしみを思ふはいと誤なり、今のあせぼてふ木の花は白くていとこまかなれ

は見るめもなきもの也、集中にいへるあし䑕は赤く照る色のよしよみたり、云々此説近きに似たりといへとも、今奥州にてあせみといひ、出雲にてあしぶ、阿波土佐にてあせびとよひ、枕草子にあせびとあり、越前にてあせぼといひ、伊勢にてゑせびといふは、みな本草にいへる梫木にして、木瓜の類にあらすして、何れも安之䑕の轉にして、古名の殘れるものなるへし、此もの春の末に穂をなして、白き花打たれて咲、穂の長さ二三寸はかり、花ちれは若葉を出す、其芽出しの葉赤くして美し、若牛馬(三)この葉を食へは醉るか如し、ゆへに馬醉木と書つ、鹿是を食へは不時に角を落すといへり、是毒あるかゆへ也、又田舍にて野菜に蟲を生る時、この葉を煎してそゝけは其蟲盡く死す

さてあせみは、三月の頃野山につゝじとひとしく赤く咲木瓜の花なるへし、といへと穏ならず、巻十に奥山の馬醉花の今盛也、又吉野の川の瀧の上の馬醉之花とよめるなとは、木瓜にはあるへからぬか、木瓜は奥山なとには生出ぬものなれは也、猶よく考へし

巻八 草香山歌國河内郡ニアリ 忍照難波乎過而打靡草香乃山乎、暮晩爾、吾越來者、山毛世爾、咲有馬醉木乃、不惡、君乎何時往而早將見、この山もせに咲たるあしびのにくからぬとよめるにて思へは、いよいよ木瓜にはあらさるへし、木瓜は山もせきてまてに咲へきものに非す、且ツ野には生ひぬれとも奥山なとにおふることなし、よりて思ふにつゝしの類に一種三葉つゝしとて、三葉並ひて出るあり、其花殊に赤くてりて何れの歌にもよくかなへり、是は奥山なとには大木となるあり、岡山にも野にも多し、三月の頃咲て山も燃るかとみわたされて尋常のつゝしなとはけおされて見るへくもあらす、是にてもあらんか

出雲風土記ニ云茵芋本草和名ニ云茵芋和名爾都々之一名乎加都々之コレ三葉ツヽジナリ、アシビハ是カ

頭註 (二)萬葉十三に、三諸者人之守山本邊者馬醉木花開末邊方椿花開、これは山の本末にて麓と山の上とたりと、古事記傳卅三明宮中卷ノ須惠都波と云條に宜長いへり (三)東海談云、堀川百首に俊頼、とりつなけ玉田横野のはなれ駒つゝしの岡にあせみはなさく、顯昭此歌を解して馬醉木と書てあせみとよめり、馬の毒にてあれはとりつなけとはよめる也といへり

唐棣花 此花分類ノ本草ニ見ニ當ヘし

大伴家持唐棣花歌

巻八 夏まけて咲たる波爾受久堅の雨うちふらはうつろひなんか

十二 唐棣花色の移ひやすき心あれは年をそき經る事はたえすて

巻四 おもはしといひてしものを翼酢色のうつろひやすき我心かも

十一 山振の匂へる妹か翼酢(ハネズ)色の赤裳のすかたいめに見えつゝ

唐棣花と書て波禰受と歌にはよめり、詩経に云、唐棣は朱注に唐棣ハ移也、似二白楊一と有によれは、本草に云扶移にして、和名してさくらのこと也、扶移は三月初つかた花さく、花ひら細長く左瓣にして色白し、風吹は其花ひら裏表(ウラオモテ)に飜(ヒルカヘル)る也、稀に紅花のものあり、俗におかしてと云とそ、大くは白花のみ也、ともに山櫻と時を同しうして花さけは、夏まけて咲と云にかなはす、按るに唐棣は詩経の常棣の誤なるか、常棣は朱註に實如二櫻桃(ユスラ)一可レ食とあるによれは、本草に云郁李(ニハウメ)を指に似たり、郁李は春の末夏の初に赤き花さきてうるはし、萬葉略解に或人今俗に庭梅といふ物也といへる是なり、天武記十四年秋七月淨位以上並朱華を着よしありて、朱華こゝには波泥擩といふと注せり、朱華は蓮花の一名にして、事物異名に出たり、蘭山云、蓮花を古歌にはねすはなとよめりと、此說によれは天武記に朱華と云ものは蓮花也、蓮花の赤きと庭梅の花と其色相似たるかゆへに、蓮花をも郁(ニハ)李花をも波禰擩色といへるなるへし、家持の唐棣花と題して、波禰受とよめるによる時は、庭梅と見る說を得たりとす

頭註 (一)論語子罕篇ニ唐棣之花、朱註ニ唐棣郁李也トアリ、郁李ハニハサクラナレト、郁李ハ春花咲ナレハ、夏マケテト云ニ叶ハス

貞丈說ニ、萬葉ニ唐棣(タウテイ)花ト書ルハ、棣棠花ト書ヘキヲ誤テ唐棣花ト書タル也、棣棠花ハヤマフキ也、此花ハチズ色ナル故、ヤマフキノ字ニハチズト訓ヲ付タル也、義訓也、ハネズハハニシノ轉誤也、ニトネ音相通也、シトズ音相通也、ハニシト云ハ和名抄黃櫨波士之今之黃櫨木也トテ、色々考アレト非也

天武記淨位以下並著朱華(此云波泥擩)と見えたり、朱華といひこゝに赤裳と有にとらは、紅にあらす緋色也、式に諸王の服色を熏とあるは、朱に黑み有といへり、此木今薩摩より來しと云を、五月の頃見しに木も葉もたゞ木槿にて緋色の濃花咲ぬるなり、はねず色のうつろひやすきといふは染たる色の變をいふへし、雨打ちらはしといふは花の散をいふへし、後世の紅の袴は此赤裳より轉したるなりと眞淵いへり、此說モ迂遠ナリ、木芙蓉ト見テ叶ヘリ、翼酢色ノ赤裳ノ姿ト云ヘハ、ハネズ色ハ赤キ事論ナシ、サレハ朱華ト說ニ近ケレトモ朱華ハ蓮花ナレハ叶ハス、木蓮蓉(キハチス)ノ事ト見ル說佳ナリ

波禰受といふ木外にあるへし尋ぬへし

山治左能花

巻七 いきの緒におもへる我を山治左能花にか君のうつろひぬらむ

十一 山萵苣のしら露重みうらぶるゝこゝろをふかみわかこひやます

十八長歌 世人のたつることだて知左能花佐家流沙加利爾(※)とあり、今俗にちしやの木と云、石見にてちなゐ、伊與にてちない、阿波土左にてちやうめんどいひ、近江にてちやうめといふ木なり、山にも野にも多し、夏葉の間に花さく、橘の花に似て色白く香氣あり、木の皮白くして青と黑との細なる斑あり、この木を傘のろくろに作る故に、熊野にてろくろ木と云、漢名は本草摩厨子の附錄に出る齊墩果是なり、和名抄の賣子木加波知佐乃木字鏡の賣子木河知左と有を引て、相似たるものなるへしと云はしからす、賣子木は山丹花にして和產なし、琉球より來るもの今世に多し

いかはかり人めあふらしかくらくの初勢にまける山ちさの花
年くるゝつま木にましる山ちさのたゝ一枝はうなひ子かため
しら雪のはれせぬ山の山ちさの花さける色われ見はやさん
以上もしほ草

巻三長歌に霍公鳥鳴五月者菖蒲花橘乎玉爾貫蘰爾將爲登(ナクサツキハアヤメクサ…カツラニセムト)、云々久老云、五月の藥玉(クスタマ)にあやめ花橘を貫交(マシ)へて蘰(カツラ)にするなり、藥玉は續命樓をいふとあり

頭註 (※)俗言にちしやの木と云はしやはさなり、石南花(サクナゲ)をしやくなけと云か如し、藻鹽草ニ山萵苣、萬ノいきのをに……」

卯の花

十 皆人のまちし卯の花散りぬとも鳴ほとゝきすわれ忘れめや

五月山卯花月夜ほとゝきすきけとあかぬをまた鳴ぬかも

十 時ならす玉をそ貫る宇能花の五月をまたは久しかるへき

十九 宇能花をくだす霖雨(ナカメ)の水はなによる木積なすよらん兒もかも

和名抄溲疏和名宇豆木とあるをよしとす、土佐人はうつげといひ、阿波にてうつ木といふ、卯月に花咲ゆへ卯のはなと云、何處にも多し、枝の梢に穗をなして花さく、花の色雪の如くしろし、花は一重と八重とあり、木の內うつなるゆへに空木と云へるか、一種小葉小花のものあり、俗にひめうつ木と云、此外卯の花の類種々あり

橘　等伎自久能可久能木實、梯に云今の橘と云者也とあり、トキシクは萬葉に時自見又時自久會なとありて、時繁くにて時となくと云心也、不斷と云も同し、されはここは常々にかはらす常磐なるよし也、

冬十一月左大辨葛城王等賜二姓橘氏一之時御製歌一首

巻六　橘花は實さへ花さへ其葉さへ枝に霜ふれといや常葉の樹

十七　橘の陰ふむ道のやちまたに物をそおもふ妹にあはすて　三方沙彌

十七　橘のにほへる香かもほとゝきす鳴夜の雨にうつろひぬらん　大伴家持

十八　多知婆奈能したてる庭にとのたてゝさかみつきいますおほ君かも　河内女王

十八　月まちて家にはゆかんわかさせるあから多知婆奈かけに見えつゝ　粟田女王

橘歌一首并短歌　大伴宿禰家持作之

十八　かけまくも、あやにかしこし、すめろきの、神の大御世に、田道間守、常世に渡り、やほこもち、まゐてこしとき、時しくの、香くのこのみを、恐しこくも、殘したまへれ、國もせに、おひたちさかえ、春されは、ひこえもいつつ、ほとゝきす、鳴五月には、初花を、枝に手折て、をとめらに、つとにもやりみ、白たへの、袖にもこきれ、かくはしみ、たきてからしみ、あゆるみは、玉にぬきつつ、手にまきて、見れともあかす、秋つけは、時雨の雨ふり、足曳の、山の木ぬれは、くれなゐに、匂ひちれとも、橘の、なれるそのみは、ひたてりに、いやみかほしく、み雪ふる、冬にいたれは、霜おけとも、その葉もかれす、常盤なす、いやさかばえに、しかれこそ、神の御世より、よろしなへ、この橘を、ときしくの、かくのこのみと、なつけゝらしも

安由流實は玉に貫つゝ此あゆるとは、枕草紙に汗あゆることゝちそしけるとありて、今按こは未熟の橘の落をいへり、八に玉に貫五月を近み安要奴加爾花咲にけり云々　枕の草紙に、五月のついたちなんとの比ほひ、橘のこく青きに花のいと白く咲たるに雨のふりたる、つとめてなんとはよになく心あるさまにおかし、花の中より金の玉かと見えていみしうあさやかに見えたるなんと、あさ露にぬれたる櫻にもをとらす

返歌一首

橘ははなにも實にもみつれともいやときしくに猶しみかほし

垂仁記三年春三月、新羅王子天日槍來歸焉云々有、同紀九十年二月田道間守を常世國に遣て非時香菓を求めしめ給ふ、今橘といふ是なりとありて、九十九年天皇崩給ひて後あくる年三月、田道間守常世の國より、賚物非時香菓八竿八縵とあり、和名抄兼名苑云、橘一名金衣和名太知波奈と見ゆ、橘はかうしの類を總ていふの名なり、今俗にたちはなとよひて、庭にうゑ或春盤に用るものは、漢名包橘にして古へよふところの橘にはあらす、禁(三)庭の右近のたちはなといふものこそ古の橘なれ、形金柑より少し大にして、肌あらく味ひすゆく苦みありて食ふに堪へぬものなり、是古の橘にして、漢名は八閩通志の猴橘にあたれり、宣長云古より後世のまされること萬の物に多し、其所以をいはんに、古は橘をならひなき物にしてめてつるを、近き世にはみかんといふものありて此(四)みかんにくらふれは、橘は數にもあらすけおされたり、その外山くねんほ、たいたいなとのたくひおほき中に、蜜柑そ味ことにすくれて中にも橘によく似てこよなくまされるもの也云々

頭註 (一)梯ニ云今安加良多知波奈ハ書紀ニ、熟稲トアレバコモ熟橘ナルベシ、安加流橘トモアリ、同シ事也

○タチハナトハタチハ立也、ハハ葉也、放也、ナハ双言ニテ葉ノ列ヲ揃テ能立放テ双ト云名也、

卷十七 我宿の花橘をはなごめに玉にそあかぬくまたばくるしみ

卷三 花橘近江之海、泊八十有、八十島之島之埼邪伎、安利立有、花橘乎、末枝爾、下略

(二)西山公御釋に云、和名抄曰橘一名金衣和名太知波奈南方草木狀下ニ云、白華赤實皮馨香有美味、今按此橘といふは今の世に蜜柑と名付る菓あり、俗にたちはなといふは柑子に似て少さく皮の色黄にしてあかゝらす、味も少酸くして苦けれは、美味に非す、凡二橘とも柑とも詳らかにはわかちかたかるへし、皇神の神とは垂仁天皇なり

(三)南殿の橘は今の京の前より有つる木のよし、禁祕抄にかゝせ給へるか如し、其後にも世々を傳へてうゑさせらるゝなり

(四)續日本紀に橘者菓子の長上ニ人所好云々、續日本紀神龜二年十二月中略初賚甘子從唐國來蟲麻呂先殖其種結子云々とあり、甘子は柑子にて今の蜜柑なり

○應神紀歌に伽愚破志香菓波那多智麼那辭豆曳下枝羅波比等人皆未那等利採、こは橘は五月の比迄實殘りて花と實と時をひとしうする故に、花橘といへるか、されは花咲たる橘をいへること明らけし

阿倍橘

十一 吾妹子にあはす久しも馬しもの阿倍橘の蘿むすまでに

阿倍橘は甘橘也、あべとあめと通音、飴をあめとよふも甘味

の義なり、

附箋 眞淵云味物の甘橘といへり、是卽今ある橘の事也、蘿は日影をいへり、日影は奥山の木に生て橘なとの里の木には生されと、年久しきことの譬には何にもいふ類多し、あべ橘に橙なとの字を當しは皆よろしからす、古へ諸の蜜柑柑子の類なき時、此橘を菓子の長上として橘氏を賜はり、南殿の橘も遷都の前よりありしを、後も傳へて植させらるゝめり、ましていと古き代橘に二種あらめや年へてまどひしか、今やゝ思ひさだめたり

和名抄橙〈和名安倍太知波奈〉似柚小者也とあるをよしとす、本草に云橙に香橙臭橙のわかちあり、たゞ橙とのみいふ時は香橙をさして卽今云くねんほなり、其大さ柚よりはやゝ小くして、皮厚く熟する事遲し、皮に香氣あり、ゆへに皮ともに食用とす、皮を唐にても魚鱠中に入るゝを金虀玉鱠といひ、又江南珍味といふ名事物異名に見えたり、又橙をたい／＼と訓るも誤りなり、たい／＼は形九年母に似て大なり、俗に其蔕二重なるゆへたい／＼といへりと、又冬熟して赤くなり春に至り又綠にかへり、幾としをも經て落ちることなくして木にあるゆへ、漢名を回靑橙と云事八閩通志にあり、又俗にかぶすといふもの有、形柑似て蔕一重にして重らす、漢名臭橙と祕傳花鏡にあり、此皮を蚊遣に用るゆへかぶすといへり

枳

〔一〕詠數種物歌

枳(カラタチ)の棘(ウバラ)かりそけ倉たてん屎遠くまれ櫛造る刀自(とじ)

枳をからたちと訓るは誤なり、〔二〕からたちは本草灌木類の枸橘なり、枳の類にはあらされとも、今もからたちの實を枳殼に僞るゆへ、此木にて作れる垣を俗にきこくの垣と云、葉は胡枝(はぎ)花に似て木に棘おほきもの也、讃岐にてじやきち、阿波にてじやきつ、備前にてじやけつといふ、枳は韓種を傳へて植る、からたちとは形異にして木に刺あれとも、枸橘の如く利なる刺の多くあるにはあらす、實は臭橙に似て皮厚し、小なる時とりたるを枳實といひ、秋に至り採りたるを枳殼といふ

頭註 〔一〕和名抄枳椇、玉篇云、枳似橘而屈曲者也和名加良太知

〔二〕カラタチトハカラハカラム(ミ)ト活キ、タハ列言(ツラナル)、チハ劒(ツルギ)ノ畧ニテ、搦連テ針アル木ト云事也

相市〔※〕

アフチトハアハ起言ニテ省、フヂハ藤(フチ)色ナルト云名也、サレバアフチト濁言ニ云ヘシ

卷十 吾妹子に相市の花はちり過ぬいま咲ることありこせぬ

かも

十七 玉にぬく安布知（書持）をやとにうゑたらは山ほとゝきすかれすこんかも

和名抄云楝（和名阿布智）とあるをよしとす、後の世に樗の字をあふちと訓は誤れり、樗はこんすいといふ木也、楝の類にはあらす、楝は今せんたんと云木也、阿波にて略してせんだと云、夏の初に花さく、五瓣の淡紫にしてうるはし、實は圓くして長し、はしめ青く秋は熟して黄なり、漢名金鈴子と云、唐より來るを川楝子といふ、味ひ苦きゆへ苦楝子とも云、日本のものは味ひ苦からす、是を山楝子と云、實も唐よりは小なり

頭註 (*)枕草紙に、木のさまそにくけなれとあふちの花いとおかしかれはなにさまことにさきて、必ず五月五日にあふもおかし

蝦手　腓（文選）　モミチ、萬葉にはおほく黄葉をモミチとよみ、常には紅葉とかけり、モミタス物はともよみたれは、採出の意にいふ歟、染具は皆もみてしほる故にいふか

巻八 吾やとの芽子の下葉は秋風もいまたふかねはかくそ毛（ここも）美照（みてる）

吾屋戸にもみつる蝦手見ることに妹をかけつゝこひぬ日はなし

十四 兒もち山和可加敞流氏のもみつまてねもとわはもふ汝はあとかもふ

和名抄雞冠木（賀倍天乃木）辨色立成云、雞頭樹（加比留提乃木）今案是一木名也、(三)葉の形蝦の手に似たるゆへの名也、雞冠木、雞頭樹も雞の冠に似たるゆへ强てから名の如く書るなるへし、古へ黄葉（モミツ）と書てもみつとよめるは草木の赤出（モミイツル）を略きて毛美豆といへる也、紅葉を賞する事蝦手第一なるゆへ今紅葉といへはひたすら蝦手のことゝはなれり、さて蝦手の類いと多くして百種に餘れり、楓をかへてと訓る誤りなり、今から種のかへてといふものあれとも、是も眞の楓にあらす、眞の楓は享保年中に渡りて江戸の藥園及日光山にあり、其葉三つの尖ありて廣さ四五寸はかり、秋に至れは黄みて落つ、唐には丹楓を詠する詩おほし、蝦手は漢名救荒本草の槭樹なりといへり

頭註 (二)もみづるはもみぢせるを約言る也治世の約め泥（デ）なればなり

(三)其葉の狀モミチシタル色モ雞冠（トサカ）に似たれは、蛙手（カヘテ）の木、加比留提乃木と云名同し、萬葉ニハ蝦手ト書テカヘテト訓リ、

其葉蛙の手に似たれはかくいへり

(二)久木

ぬは玉の夜のふけゆけは久木生るきよき河原に千鳥しは鳴

十一 浪間より見ゆる小島の濱久木ひさしく成ぬ君にあはすて

和名抄楸(和名比佐木)と有をよしとす、濱に有しゆへ濱久木とよめるなるへし、今俗に木さゝげと云、美濃にて川原さゝげ、伊勢にて川原かしはと云、葉桐に似て五つ尖り有て廣さ六七寸より一尺はかり夏枝の梢に穗をなして花さく、淡黄色にして紫の點あり、後に圓なる莢を結、長さ一尺餘、多く下垂して裙帶豆(ナハさゝけ)の如し、故にしかよへり、秋の末に葉落て莢なほ梢に殘りて春までもあり、俗に此莢を雷除の守とせり、故に京にてらいてんきりといへり

頭註 (ホ)眞淵云、或人いへり、久木は赤めがしはそといへと、そは里に生て桐梓の類なれは、潮風の立る島に生へくも覺えす、同し久木てふ名にて濱久木有、異木にやあらん

梧桐 キリトハキリノ反キニシテ、火ヲ宰ノ𣝣ナリ、故ニ木心ノ穴ノ大ナルヲ名トシテキリト云、因テ育(ソダツ)事速(ハヤ)シ、天地ノ氣(キ)ヲ知テ秋疾ク一葉ヲ落ス

師大伴卿梧桐日本琴贈ニ中衞大將藤卿ニ歌二首

卷五 いかにあらん日の時にかも聲しらんひと(人)のひさ(膝)のへ(上)わ(我)かまくら(枕)せ(爲)ん

こと(不語)ゝはぬ木にはあり(有)とも(雖)うるはしき君か手なれ(馴)のこ(琴)とにしあるへし

琴娘子答歌

ことゝはぬ木にはありともわかせこかたなれのみことつちにおかめやも

日本琴は雅樂式云、和琴一面長六尺二寸と有、梧桐は俗にあをきりと云木、高く聳て葉及ひ膚とも緑にしてうるはし、夏枝の梢に花咲、楝の花に似て黄也、格物論に鳳非ニ梧桐ニ不レ栖と云、卽此あを桐なり、然るを枕草紙に、桐の花紫に咲たるはなをおかし(中略)もろこしにことく\しき名つきたる鳥のこれにしも栖らん心ことなり、まして琴に作りてさまぐ\なるねの出くるなとおかし、(下略)とあれとも、桐の花紫に咲と云は尋常の桐なり、古の琴は梧桐にて作りしと見ゆれとも、今は皆白桐を用ひて梧桐

なもて作れるものなし、鳳を画くにも唐繪は皆梧桐をかき、日本にて白桐を画くはしからす、此誤れる事の久しきを知るへし

　齊民要術曰、梧桐山石間生者爲樂器則鳴とあり

合歡木

　紀女郎贈大伴宿禰家持歌

巻八　ひるは咲よるはこひぬる合歡木の花われのみ見むやわけさへに見よ

　大伴家持贈和歌

同　吾妹子か形見の合歡木は花のみに咲てけたしも實にならしかも

梯云、合歡木和名抄云、唐韵云、棔合歡木、其葉朝舒暮斂者也、細註音昏和名袮布里乃木辨色立成云、睡樹、夫木和歌抄に甚俊、山ふかみいつよりねふの名をかへてかふかの木には人まよふらん、六帖にかふかの題に入れり、かふかは合歡の音也、さてねふは六月に花さく也、また字鏡に合歡樹。椋。ともに彌夫利と訓めり、今も京にてねむの木といひ、阿波にてねぶの木、近江讃岐にてかふかの木といひ、阿波にてガフカノキともいへり、佐渡にてかふかといふは古今集にかふかとよめり、皆合歡の音を轉したる也、山野に多し、大木となる、其葉酉の刻より兩々重りて眠るか如し、辰の刻より漸くひらく、故に合歡夜合の名あり、五月枝末ことに穗をなし花さく、花は絲の如く房の如し、半は色白く半は色薄紅にして長さ一寸斗、後に扁き莢を結ふ、長さ三四寸斗内に小き實あり、

由豆流波

二　古に戀る鳥かも弓弦葉の三井の上より鳴渡り行

御井は秋津の離宮の邊にあるなるへし、此鳥は郭公をいふ

十四　あともへかあしくま山の由豆流波のふふまる時に風ふかすとも

和名抄に載せす、枕草紙にゆつりはのいみしうふさやかにつやめきたるはいとあをうきよけなるに、おもひかけすにるへくもあらす、莖のあかうきら／＼しう見えたるこそいやしけれともおかしけれ、なへての月ころは露も見えぬ物のしはすのつこもりにしもときめきてなき人の

くひものにもしくにやとあはれなるに、又よはひのふる はかための日々にもつかひたんめるはいかなるにか、紅葉せん世やといひたるもたのもしとあり、ゆつる葉とは(二)新葉とふる葉と相換るの義をもていへり、からにても交讓木といふ名事物異名に見ゆ、本草に云楠の一種大葉楠とあるにあたれり、其形はよく人の知る所のものなれはいはす、蘭山云近江の竹生島よりこの嫩葉を乾して貢上にす、其箱に樑絲と書けりと云へり、樑はゆつり葉の和字なるへけれと字鏡にも見えす、今も紀州熊野にて此若葉をとりて食ふをせうくはつなといへり、阿波にてゆすりはといひ、俗に若ばといひて正月のしめ繩には歯朶とこの葉を必すさしはさむこと也

頭註 (一)ふゝまるは卷廿の東歌に、ちはのぬのこのてがしはの保々麻例等(マレド)といへるに言は同じくて、かれは妹が懷に含まる也、こゝは此若葉のひらけざるを戀のいまたしきほどにとりいへり
(二)肥前にてつるし葉といひ、肥後にてつるの葉といへり、
(三)一説に丹誠乃弓削(ユゲ)山に多く生るゆへ、弓絃葉の義に固て名くといふはとらす

保寶柏

見攀折保寶柏葉歌二首

十九 吾勢こか捧てもたる保寶我之婆あたかも似るか青ききぬかさ

十六 皇祖神の御代〳〵はいしき折酒飲といふこの保寶我之波

いしきをりのいは發語、しき折は折敷といふ意か、古へをし物を盛に木の枝を折敷し也、書記に葉盤八枚〈葉盤此云毘羅耐〉和名抄に云、本朝式云、十一月辰日宴會、其飲器參議以上朱漆椀、五位以上葉椀、〈和語云久保天〉又漢語抄云、葉手〈比良天〉なと見ゆ、膳夫をかしはてといふも此よし也、和名抄云厚朴一名厚皮、漢語抄云厚木〈保々加之波乃木〉と有、今俗にほゝ(※)の木と云是也、然れとも眞の厚朴は和産なし、本草に云厚朴五六月開細花葉如槲葉と云にあはす、ほゝの木は厚朴の條下に云浮爛羅勒にあたれり、ほゝの木は葉長大にして枝の梢に簇りつきて夏花さく、玉蘭花(ハクモクレン)に似て大さ尺に近し、香氣多し、花の中に紫の心あり、花ちりて心中に赤き實あり、萬年青(オモト)の子の如し、年久しきものは樹皮厚くして厚朴に似たり

頭註 (※)今俗にほうの木と呼はほゝの木の横なまれる也

楓

巻七 向岡の若楓の木しつ枝とり花まついまになけきつるかも

若楓の下枝に手もふるゝばかりしめ置けども、花を待間の待遠きをなげくといひて、少女を戀るにそへたり

四 月には見て手にはとられぬ月のうちの楓の如き妹をいかにせん 湯原王

巻十 黄葉する時になるらし月人の楓の枝のいろつく見れは

此二首は月の照るのを月中の桂の色つくといひなせり、和名抄兼名苑、月中有レ河、河上有二桂樹一、高五百丈また酉陽雜俎云、舊言月中有レ桂、有二蟾蜍一中略或言月中蟾、桂地影也、空處水影也、此語差近云々とあるによれり、古今にも久堅の月のかつらも秋くれはもみちすれはやてりまさるらんとあり、さて楓の字をかつらとよめるは、和名抄楓一名欇和名乎加豆良爾雅云、有レ脂而香謂二之楓一桂一名梫和名女加豆良と有、しかれとも楓ををかつらと訓るは誤りなり、〔二〕公事根源賀茂祭の條に、けふ人々あふひ桂の蘰をかくるなり、云々 又陽白賀茂詣の條に云、上達部車をつらね社頭にて神拜あり、葵桂を禰宜持てまいれは是を冠にかく、云々 今昔物語に五條西洞院にかつらの宮と申人おはします、其前に大なるかつらの木有故になつけまゐらせたる也とあり、今も加茂祭に葵と桂とをかくること猶古への如し、其かつらと云木は深山におほし、葉まろくして末尖りふたはあふひに似てうすし、葉のおもては緑ふかく裏はうすし、其大木となる花はいかなるやしらす、古今集物名にかつらの宮を、秋くれと月のかつらのみやはなる光りを花とちらすはかりをとよめり、秋は月の桂の光の花の如くちるはかりよ、〔三〕花咲と見れと子はならぬといへるを見れは、實のなるは稀なるものなるへし、楓のことは蝦手の條に委くいへり

頭註 〔一〕神代卷、止二於天稚彦門前所植湯津杜木之杪一、杜木此云可豆邏、湯津ハ祝詞に湯津盤村、五百箇盤村トアルニ同ク、五百津ノいはヲ約メ通ハシテ石ノ多クムラカルヲ云、サレバ湯津杜之木モ杜ノ木ノ多クムラカリ生ヒタルヲ云ナラン

〔二〕南方草木狀云、葉如二柏皮赤者爲二丹桂一、葉似レ柿者爲二菌桂一、葉似二枇杷一者爲二牡桂一、

〔三〕○木犀、モクセイ、呂氏春秋曰、桂之一種也、叢二生巖嶺間一、謂二之巖桂一、俗呼爲二木犀一、南方草木狀曰、江南桂八九月開レ花、無レ子此木犀也

兒手柏

このて柏、藻鹽草にも種々說あり、皆非也、梯云、兒手柏、或人云、食敷葉ノ義也、則食ノ手柏也、扨側柏ト心得テ兩面ノ物ト思フハ俗ナリ、兒手柏ノ兩面トツヽクニ非ス、手ト云ヨリ左毛右毛ツヽク也ト云ヘリ

謗佞人歌一首　博士消奈行文大夫作之

十六 奈良山の兒手柏の兩面にかにもかくにも佞人のとも（今ノ事書留メ作考合スヘシ）

二十 千葉の野の兒手柏乃保々麻れとあやにかなしみおきてたかきぬ

能因か歌枕にかしはを兒のて柏といふ、ひらてとも云、云々宣長はこひ人のともとよめり、ともは輩なり、さてねぢけとよめるは今物の曲れるをねぢれたるともいひてねぢけびとゝ訓るも、いと後の人の訓とも聞えねは暫く古訓によれり、一本に兩の字なくてふたおもてとよめり、和名抄菓蓏類に、本草云柏實一名椲子（和名加倍）とあるは誤なり、柏と椲とは大に別なり、椲はかへにて今俗にもかへと云、又誤てかやとも云、（へとやと通はす音に訛れる也）さて柏はひの木、兒の手柏の類を通していへり、わきていへは柏は本草に[一]云側柏なり、その葉そはたち生ひて掌を立るか如し、故に兒手柏とよめり、其葉の面背ともに緑なるゆへ兩面と云、此木西[三]にむかふて枝を出すゆへに樵夫山に入りて方位を失ふ時はこの枝の向ふ方を見て東西を知るといへり、それゆへ土佐人は此木をはり木といふよし也

仁徳紀、取[下]到[二]熊野岬[一]其處之御綱葉[上]（註）葉此云[二]箇始婆[一]と有、是を證とすべし

あさ柏は朝露にぬれて葉のつやゝかなる也、兒手柏はちいさき葉也、ほゝ柏は厚朴の葉也、あから柏はあからみ紅葉せる葉也、うつほ物語に松の葉をもゝかしはとよめるは繁多なるをいふなるへし、柏木の葉守の神もすへて木の葉を守る神をいふなるへし、あかめかしはとは莖の赤きをいふ、又め出しの赤きをもいふへし、古へは神供皆葉にもりければ、御祭葉ともいへり、（雅言集覽）

頭註　（一）埤雅云、柏有數種入藥唯取扁而側生者故曰側柏（三）本草綱目、萬物皆向陽、而柏獨西指陰木也、故字從白、白西方也

柏[二]

カヘノ事藻鹽草見合スヘシ

巻十九 長歌（上略）御面はたゝむかひ見ん時までは松柏の榮へいまさねたふときあか君とあるを、略解に和名抄の柏一名椈（和名加閉）柏實一名椲子なといへるを引て、今かや[三]といへる木なり、唐にても松柏とつゝけて常葉なる事にいへは、今かくよめる也と云はうけかたし、松柏の柏は扁柏なるへし、詩經にも如[二]松柏之茂[一]とも、陟[二]彼景山[一]松柏丸丸（丸上）

（丸直也）あるひは柏舟なといふものは皆扁柏（ヒノキ）をさして、榧（カヘ）を云にあらす、しかはあれとこゝにかへとよめるは榧なるへし、和名抄に柏實一名榧子と云は誤れり

頭註 （一）景行紀、到的邑而進食是日膳夫等遺（ワスル）レ盞（カシハデ）（二）榧カヘ捩沖云、常々ハカヤト云、和名ニハ出サス、通スルヤウ知ラス、神代紀ニ松柏（廿一）ヲモマツカヤト照セリ大木廿、相模、神山のかしはのくほてさしながらおひなほる身のさかゆへきかな
和名に云柏實（柏音百）一名榧子（榧音非和名加倍）これらによれは、松柏の柏すなはち榧なるやうなれとも、本草綱目を考ふれは別也、似たる聲（コヱ）に異本に同名を付たる歟

檜

（巻七）古へにありけん人もわかことか三輪の檜原にかさし（挿頭）折けん

（同）ゆく川の過にし人のたをらねはうらふれたてり三輪の檜原は

（十）巻向の檜原もいまたは雲ゐねは小松かはらにあわ雪なかる

和名抄爾雅云、檜柏葉松身（和名非）とありて即今俗に云ひ（三）のき也、檜は本草に柏葉松身者檜也とありて爾雅の文と同し、こは今俗に云ひやくしんなり、（略てひやくしとも云）葉杉に似て細く、枝葉繁くこもりて葉に針ありて人をさす、故に一名刺柏と云、是にも種類おほし、此集に檜原とよめるはひの木原也、ひの木は本草柏條に云、扁柏にあたりて其葉側（コノテカシハ）柏に似て葉峙ち生せさるもの也、葉の面は緑にして背は白みあり、今曲物とするもの扁柏也、ひはりこも扁柏割子（ヒワリコ）なり、猶兒手柏の條とあはせ見るへし

頭註 （ホ）巻三長歌、斧取而、丹生（ニフノ）檜山木折來（コリ）而、𣗄（サブネニツクリ）爾作、二梶貫（マカヂヌキ）、礒榜回乍（イソコキタミツヽ）、島傳（シマヒ）、雖レ見不レ飽、三吉野乃、瀧動々落（モトヾロニ）白浪

（一）母蘇　楢　櫟

ハハソト云ハ、ハハハ葉々ナリ、ソハ白事ニテ染スモノハ白ノ義ニシテ葉々事ニ染ヌト云名ナリ

（巻九）山科の石田の小野の母蘇原見つゝや君か山路こゆらん（宇合卿）

和名抄に櫟（和名加之波）とあるもの即母蘇也、今も俗にはゝそと云、轉してほうそともよへり、又たゝかしはともほうそかしはともよふ、又ならとよめるもおなし木也、なら（二）しばとも云、しかるを和名抄に楢漢語抄云、（和名奈良）又別條に、柞（和名由之漢語抄云波々曾）木名椹作レ梳也と、以上三條に出せとも、かしはゝそ奈良の三名皆同類にしていささか異也、それを楢あるひは柞にあてるは誤なり、巻二十に波々蘇婆能波々

能美許等波とあり、はゝその木と母と語の似通ひたれはかさねいふのみ、さて槲は甚大木となる、葉の廣さ三寸餘長さ七八寸一尺斗となる、葉の本狭く末廣くして厚し、葉の邊に粗ききれこみあり、是大葉の槲なり、歌に葉廣かしはならかしはとよむもの也、端午に糕を此葉にはさみたるをかしはもちと云、夏花さき實を結ぶ、花實ともに櫧(カシ)に似て大なり、木は大なれとも材に用るに堪へす、たゝ薪となすのみ也、一種小葉のものあり、俗にこほうそと云、葉の長さ二三寸斗實は相似て長さ一寸斗も有、俗になかかし(これは拾玉集の長柏か可考)ともいへり、是も大木となる、俗ニナカカシハ、今按長女柏ナルヘシ、實ノ形長ケレハナガミカシハト云ヲ、ミトメト通スレハミヲメニ轉シテ長女柏ト云ナラン

頭註 (二)古今秋、
さほ山のはゝその色はうすけれと秋はふかくも成にけるかな
新古今秋
入日さすさほの山へのはゝそ原くもらぬ雨と木の葉ふりつゝ、好忠
和名抄柞(和名之比)木名棫作柞也とある柞は、本草に云柞木にして和名いぬつけなり、
毛詩に柞棫とつゝけたるはくぬ木也、朱注に柞は棫也、枝葉盛叢生レ刺、また栩もくぬ木也、朱注に栩は柞櫟也、其子爲ν皁斗云々櫟いちひ日本紀、古事記、萬葉、和名集等並曰イチヰと書へからず
(三)櫟柴
十二みかりする狩場の野の櫟柴(ナラシハ)のなれは増らす戀社まされ
後撰集に左大臣用はべりてならの柴をもとめ侍りけれは千かぬかあひ知りて侍りける家にとりにつかはしけれは俊子我宿をいつならしてかならしの柴のならし都には折におこせるト見へて、葉ひろきがゆゑに物を盛に用るとて、楢のはをもとめに仕したるころと知るへし、次の秋柏の條にいへるを見るへし

安可良我之波

梯云安可良我之波ハ明柏(アカラガシハ)也、色ツキタル柏(カシハ)ヲ云也

二十 印南野々安可良我之波は時はあれと君をあかもふ時はさねなし　安宿王

あかはみたる柏を云、あから橘もあからみ色付たるをいへり、眞赤(マアカ)なるにはあらす、あからかしはは色つきたる槲なり、供御の料の干槲(カラカシハ)を諸方より貢する事式に見ゆれとさにはあらすさて常に君をは思ひ奉るといはん料也さねは實にて時は實になしといひて常にといふ意となれり」槲は秋深くなりてもみつるもの也、冬になれは殊に色深くそみて美しきゆへ、後の歌にはゝそのもみちとよめり、槲のもみちはちりやすきよしを専らとよめるはも

ろくちるものなるゆへ也

柏(*) 藻鹽草にならのは、ならのはかしは、ならのひろは、もと―、なかめ―、あから、なら―、ひろ―、あさ―、あき―、青―云々皆槲也、然ルヲ又別條ニ椅ヲ出シテならのは、―しば、―かしは、―の紫かしはナト云ハ皆同木ニテ槲ヲ云也、椅ノ字ニ付テ別トスルハ非ナリ、日本紀御綱柏又三角柏ナトモ同物也

十一 秋柏潤和川邊の細竹の目の人にしぬへはきみにたへなくに

十一 朝柏潤八川邊の小竹のめのしぬひてぬれは夢に見へけり

この柏と云も槲なり、眞淵云秋も朝も借字にて商の事也、然れは共にあきと訓て商柏を賣とかゝれり、柏は延喜式に公の神供、供御なとの干槲、青槲は幾内なとより日ことに進ると見えたり、諸社諸家なとに用るは買なるへし、又後の考に秋に成てかしはの色付たるをあからかしはといへは、是も赤き槲うるはしといふ意にて、うるや川に冠らせしにやといはれき、柏は兒手柏の條にすてにいへり

頭註 (*)後選集に柏木に葉守の神のましけるをしらてそ折したゝりなさるな、河海に云葉守神は樹神也、基俊云、葉守神はなへての木を守るにあらす、只柏木をのみ守る也と云、柏木も槲なるへし

杵奈良能須

以上みな一木にしてことものにあらす、椅柏柞ともにこゝによめるはみな槲なり、はゝそともならともかしはともよめる名はことなれとも、木はみな同し

十四 しもつけぬみかもの山の杵奈良能須まくはしころはたかけかもたん

みは發語にて加茂山か、小椅のすはなすにて如く也、宣長云、杵椅は木椅也、まくはしは古事記にくはしは愛る詞、まは發語也、たかけは高々にといふに同しくふりあふき望む意、もたんは將待也云々、こならは小槲の意也、今も俗にこならといふ山中に多し、木の高さ二三尺葉は槲に似て小く夏の初枝の間に實を結ふ、櫧子に似たり、又別に栗毬の如くなるものを生す、其刺柔にして人をさゝす、是は蟲の巣にして實にあらす、破れは中に小なる長き蟲あり、是即此集によめるこならの巣なり、此を播磨にてしばふぐりといひ、さるのもゝと云、石見にてからすのふぐりと云、筑紫にてならごうと云、此巣を煎して黑色の下染とす、又夏の頃たま／＼實にあらす蟲の巣にあ

らす一種のものを生す、其形孛婁の如くして大さ柑子ほとあり、其色始は青く後には紅をぬりたる如くなる、味ひ酢し、それを破りても内には何もなし、是も蟲の巣ならん、西洋の書には無食子の類なりといへり、此木を別に漢名枹と云、本草槲の條下に出たり、一名教落樹、一名字落葉と鎭江府志にあり、この葉も紅葉してうるはしきもの也、葉の形は大葉の槲に似てうすく小なるのみ也

櫟柴（大條）

（巻十二）御獵する雁羽の小野の櫟柴のなれはまさらす戀こそまされ

櫟柴をならしはと訓る時は小なら也、上はなれんと云序也、しかれとも櫟はくぬ木也、この櫟柴は教落樹なるへし、くぬ木は次に歴木とある是なり、和名抄唐韻云楢（音秋）（漢語抄云奈良）堅木也とあり、奈良は奈良かしはにしてすでに槲と見えたり、楢は奈良にあたらす

歴木　和名抄釣樟（和名久沼木）とあるは誤、釣樟は今云クロモシノ木也

（十二）度會の大河の邊の若歴木吾久にあれは妹こふるかも

此は旅の歌にて吾カ此旅の日數の久くなりなは、家なる妹か吾を戀しく思はんかとなり、此上の句は吾久と詞を疊む料の序なれは、歴木は必すヒサギなること著ければ也

四巻ニ佐保河乃涯之官能小歴木莫刈焉、云々 此小歴木をハシバと訓るまこと然訓べし、こは何レノ木にまれ柴なるを云なり、故小の字を加へてしらせたり、然れとも其を歴木としも書る意は一種の木を思へるなるへけれと、何レノ木とも知りがたしといへり

（三）和名抄歴木（和名久沼木）とあり、即本草に云櫟なり、今も俗にくぬ木或くに木とも、くの木とも云木也、又別條に擧樹（和名久沼木）日本紀私記云、歴木とあれとも、擧樹は本草に云欅にして、和名けや木なり、櫟の類にあらす、名同しくて異物なり、字鏡には櫪櫟日ク久沼木とあり、此說可なり、くぬ木は葉の形栗に似て木の高さ二三丈となる秋冬に至り葉枯れて落す、春若葉の出る頃まても猶木ぬれにあり、此木生長しやすきゆへ川原なとの荒廢の地に植て薪とする事今然り、されは歴木をヒサギと云へるは木は櫟なれとも歴を久しきの義訓也と云說可也、西山公御說も

久木は久しき木にて老木の意也とあるかなへり、又炭にやくにことによろし、今攝州の市倉にて炭に燒て池田に送り四方へ出す、ゆへに池田炭と云、是櫟炭なり、本草に爲レ炭則他木皆不レ及とあり、集中に橡(ツルハミ)とよめるものは卽くぬ木の實なり、契沖も久奴木は今も久奴木とも久能木とも云てつるばみのなる木也と云るはよし、さるを宣長は橡(ツルハミ)を久奴木の實とせるは違へりと云は非す

頭註 (一)一說若歷木をわかくぬきとよみしは惡し、さては詞かゝらす、歷は久しきの義訓なり也

(三)○書紀景行卷ニ到二筑紫(シリノ)ノ後國ノ御木(ミケ)一ニ云々天皇問(トヒタマヘハ)レ之曰是何樹(ナニノキ)也一有(アル)二一老夫曰ニ是樹者歷木(ツトアルヲキナマヲシキスキナリト)一也

橡

卷七　橡の衣きる人はことなしといひし時よりきほしくおもほゆ

同　橡の解あらひきぬのあやしくもことにきほしき此ゆふへかも

十二　(二)橡の袷衣(アハセコロモ)の裏にせはわれしひめやも君かきまさぬ

(三)和名抄染色具、橡(和名都流波美)櫟實也とあるをよしとす、櫟實は今どんくりと云もの也、染種には其實につきたるよめか合器(ゴキ)といふものを煮て、其汁もて染る也、また和名抄に櫟梂、爾雅云櫟其實梂(和名以知比乃加佐)孫炎曰、草之自裹者也といふもの卽よめか合器也、しかれとも櫟梂はつるはみのかさにしていちひのかさにあらす、和名抄にはつるはみといちひとを混したり、いちひは次の市柴の所に委し、さて橡は古へ家人奴婢の衣の色なる事衣服令に見えたり四位の服となれるは後の事にて古はしからす、此歌なとも賤き人の我きる衣もてよめり、櫟子は形圓くして尖り櫧子(カシノミ)の如くして大なり、本に梂彙(イガ)ありて其半截(ハンブン)をつゝむ其刺柔にして人をさゝす、卽本草に云橡斗子殼なり、今も播磨にてはこれを煎して鐵醬をかへて染るといへり

頭註 (二)十二橡の一重衣(ツルハミノコロモヒトヘ)ともよめり

(三)梯云、橡(ツルハミ)ニ衣先達云、和名抄本草云釣樟(クスキ)、欅樹(クスキ)ト有テ俗ニドングリト云、其皮ニテ染タル衣ニテ出家ノ服也ト云ヘリ、僧尼令云、木蘭ハ黃橡也トアリ、續世繼第八ニつるばみハ王ノ四位ノ色也ト云ヘリ、或人ハ服者ノ服也ト云ヘリ

市柴

五柴原、袖中抄ニ顯昭云、いつしは原とは道のほとりの柴原と云也、世俗の說にもいちしは葉しはと云、これなり、又云、御狩するかり場の小野のかしは木のなれはまさらて戀こそまされ、此歌を或本に狩場のをのゝ櫟柴のと書り、いちしはいちひしばと云歟云々市柴(イチシバ)、五柴原(イツシバハラ)、いちいつ通音にて櫟柴(イチシバ)也、シバのシは繁葉(シゲキ)を云、椎柴栖柴皆葉のしけきを以て柴と云

卷四 大原のこの市柴(イチシバ)の何時しかと吾もふ妹に今宵あへるかも 志貴皇子

十一 路の邊の五柴原(イチシバハラ)のいつも／＼人のゆるさんことをしまたむ

路の邊の(一)壹師(イチシ)の花のいちしろく人皆知りぬ我こひつまは

市柴はいちひ柴なり、用明紀(四ウ)舍人迹見赤檮と云人あり、注に赤檮此云伊知比と有、櫧(カシ)の類にて伊勢にていちかしとも云、葉櫧に似て細く甚大木となるもの也、實も櫧に似て小なり、熊野にては食用にすといへり、漢名は石櫧と邵武府志に出たり、又飛彈の位山に一位の木といふあり、俗にあらゝぎとも云、こゝによめるとは異なり

卷八 あまきらし雪もふらぬかいちしろく此五柴にふらまくを見ん 若櫻部朝臣君足

千蔭云、いちひを略きていちしばと云(三)、大原のこの市柴のとよめるにより五をもいちと訓へし、たらちねを足常とかきあぢきなくを小豆無と書る類なり、阿波にて一宇(イチウ)かしと云是なり、花は櫧に似たり、材理は櫧と異にして橡(クヌギ)に似て白し、工人杓子に作るものおほし、市柴、五柴、壹師の花ともに皆同しくいちひしはの略なり

頭註 (一)壹師の花は椎の花の如く梢に穗をなして春の末夏の初に咲もの也、色は白くして黄はめり、花は細かにして分明ならす、遠く望めは、いちしろし

(二)市柴と書は、いち柴とよみ、五柴と書は、いつしばとよみてともに櫟柴の事ならんといへり

眞淵云、伊豆國人云、櫧の類にて大木也、其木色赤く堅き事櫧に增る、車の輪舟楫なとに爲ものと、さて同しものも椎なるをはしばといへは、此いちひを略きていちしばといふにや、椅柴くぬ木柴てふかことし

附箋 古事記日代宮殿に、竊以二赤檮一(イチヒノキヲ)作二詐刀一(タチヲツクリテ)爲二御佩一(ミハカシト)、宣長云赤檮はイチヒノキと訓へし、書紀用明卷、赤檮此云二伊知毘一毘字は濁音なれども、書紀には淸音にも用ひたり、濁るへからず、和名抄菓類に櫟子和名以知比、字鏡には杞また櫟を一比の木とあり、萬葉十六(卅丁)足引乃此片山爾二立(ナミタテル)伊知比何本(ガモト)に、また市柴(イチシバ)五柴(イツシバ)などあるも此木の柴なるへし、此木今も伊知比と云ひ、イチカシとも云て櫧(カシ)の類なり、此記にカシに白檮をあて、イチヒに赤檮をあてたり、此事傳廿五(廿葉)にも委し

古事記傳、訶志比宮段に、櫪木の處に、宣長云、櫟(ツルハミ)は伊知比の實也、和名抄に依れる說にして誤なり

黃楊

君なくはなにそよそはん匣なる黃楊小櫛もとらんとおもはす

十一 朝つく日むかふ黃楊(ツゲ)梳(クシ)ふりぬれとなにしか君か見るに

あかさらん

十一 夕されは床の上さらぬ黄楊枕いつしか汝かぬしまちがたき

をとめらし後のしるしと黄楊小櫛生ひかはり生ひて靡けらし母

和名抄黄楊和名豆介色黄白材堅著也とあり、古へより梳に作、印に剜するつけを黄楊にあつるは誤なり、梳とし印とするつけは漢名柞木本草綱目灌木類なり、俗にいぬつげといふもの也、近江にてけづるともかしらけづりとも云、葉いと小にして厚くいろ深緑なり、枝葉しけくこもりて冬も枯れす、夏葉の間に小なる花咲、圓なる實を結ふ、小木はは山にもおほけれとも大なるは深山ならではなし、附箋阿波にて黒つげと云もこれなるべし堅くして入歯に用ふ 是即此集によめるつけなり、又此類に尾張つけと云あり、伊勢にて朝熊つけと云、朝熊山におほし、葉の形柞木に似て廣く枝葉ともに柔なり、是は漢名錦熟黄楊江陰縣志と云、其木軟にして梳及ひ印材に用るに堪へす、是に似て高さ僅に一二尺斗にてそれより大ならざるあり、俗にひめつけ或はくさつけとも云、

枝葉ことに柔にして草の如くなれとも冬しほます、これ本草灌木類に云黄楊なり、櫛に作るへきものにあらす

(＊)味狭藍

契沖云、紫陽花アヅサヰ、和名抄如レ此、萬葉ニハ味狭藍ト書テアヂサヰトヨメリ、六帖モ同シ、味ハホムル詞、狭藍（サヰ）ハサアヰト云ヘキヲアヲ略シテ云、アヂサヰノ花ハ青ケレバカク名ツクル也云々

巻四 こと丶はぬ木すら味狭藍諸ち丶かねりのむら戸にあさむかれけり 大伴家持

寄味狭藍花詠

巻廿 安治佐爲の八重佐久如くやつよにもいませ我せこ見つゝしぬはむ 橘諸兄

あちさゐはこちたきまて咲重れるはななれはかくよめり、やつよのつは助辭にて、彌生なり、乎は助辭、しぬはんは見る見る慕ふをいふ、和名抄白氏文集律詩云、紫陽花和名阿豆佐爲とあり、然れともあちさゐを紫陽花とするは誤れり、紫陽花は紫花の木犀をいふと蘭山翁の説なり、あちさゐは今もしかよへり、俗にあちさへと書は誤なり、漢名は祕傳花鏡に、八仙花一名紫繡毬とある是也、五月

頃四瓣の碧花聚り咲て毬の如し、故に後の歌に四(ヨ)ひらの花ともよめり、又白花のものあり、又薄紅の花さくあり、

頭註 (*)六帖ニ、茜刺ひるはこちたしあちさゐの花のよ(宵)ひらにあひみてしかな　アチサヰノ花ハ四ヒラアル物ナレバ、宵ラニアヒタキト云ニヨセタリ

山橘

巻七　紫の糸をそ我よる足曳の山橘をぬかんともひて

巻十九　この雪のけ残る時にいさゆかな山橘の實のてりも見ん　大伴家持

二十　島山に照れる橘宇受にさし仕まつるはまへつきみたち

巻十九長歌に、島山爾安可流橘宇受爾指紐解放而(ヒモトキサケテ)千年(チトセ)保伎云々ともあり、島山は禁中御池の中島ならん、あかる橘は實の色付を云、山橘は今俗に云藪柑子(ヤブコウジ)なり、式大嘗會供物註文に、山橘子と有も同し、古今栄雅抄に、山橘は世俗やぶかうしと云、髮そぎの時山菅にそふる草也と云、今猶國によりてはやまたちはなとよふ所もありとそ、漢名は本草に紫金牛、花鏡に平地木、濟世全書に小青樹と見えたり

○眞淵云、山橘は山邊の木蔭岩根なとに有て子(ミ)赤く葉常にあれは、是しも橘の名を負せし事かくはやき世にも有しかな、びんそきなとのことふきものとするも、然らははやくよりの事か、今田舍にて是を藪柑子(ヤブコウジ)と云も橘より轉せしならん、

第四　足曳の山橘の色に出てかたらひつきてあふこともあらむ　春日王

西山公御釋に云、山橘は言塵抄に云、世俗にやふ柑子といふもの也、髮そきの時山菅にそへたる草也、今按此集にあまたよめる中に第七山橘とあるはおほつかなし、延(*)喜式造酒式の大嘗會神供物の注文に、弓絃葉、寄生(マホヤ)、眞前葛、日蔭、山孫組(ヤマヒコクミ)、山橘子、褭等賣草、各一擔とあり、實の珊瑚の如くなるものなれは色に出てといふへき序におけり、古今に友則歌にも山橘の色に出ぬへしとよめり

頭註 (*)延喜式大嘗祭乃供物に、弓絃葉、眞前葛、寄生日蔭、山橘等見ゆ、常葉(トキハ)の物を祝して用ふる、殊に山橘は冬に堪て子を生するを賞すへし

葛英　フチノキ

十六廿四丁　加茂翁ハクズハトヨメリ、或人ハカハラフヂトヨメリ、和名抄ニ皀莢ヲフチノ木ト點(ヨ)メリ、葛英ト字相似タリ、シカレドモ皀莢ハサイカチノ事也、扨葛英古本ニ皀莢ニ作レリ

玉函叢説

要を摘て記す

田安君の御説

神代卷に大山津見神の御言に使木花之佐久夜毘賣者如二木花之榮一座と御名によそへてほきのたまはせたる木花はひとつの名とそ聞ゆさて木花としもいはんは梅と櫻なれと櫻花は咲初しよりちり畢るまて七日には過す且花咲みたぬ間にはや始に咲しはちりそむるなれは是をのたまふ意ならぬはしるし、梅は花多に咲みち盛も久しけれは木の花とは梅の花也けり古今集序に難波津に咲やこの花冬籠今を春へと咲やこの花とあるも梅なる事しるし○南殿の櫻ももとは梅なりけるを梅は桓武天皇今の都に移りましゝ時植しめられて承和の末皇太子の折らせ給ひしたにあかなひせさせましゝほとなるに、枯ぬるとも梅をもてこそ植つくるへきに櫻に植かへられしはこゝにいふへけれと意の長けれはいはす

○類聚國史に弘仁三年二月辛丑神泉苑覽花樹命文人賦詩賜錄有差花宴の節始於此矣とあり、尤前年の十二月閏ありしかと立春は十五日也けりとて三年二月辛丑の則十日にて立春より五十五日なり吉野の櫻皆單にて里より咲初る也そも立春より六十五日（七ノ誤カ）を盛りといへりはた單葉（ヒトヘ）櫻は咲たつより散終るまて七日には過すかゝれは彼の花樹をみそなはせしとあるは梅なる事明らけし又延喜内匠式正月七日の舞臺の餝の中に花形料絲一絇綿半屯とあるも貞觀儀式を合せ見れは梅の花形の事也將こをもて江家次第の四方拜の條に作花も梅の作花なるをしらる

梅を花といへる證歌

古今集に春の始によめる

春やとき花やおそきと聞わかむ鶯たにもなかすも有かな　藤原のことなほ

花の間を風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる　紀友則

春たてと花も匂はぬ山里は物うかるねに鶯そなく　在原棟梁
梅の花をゝりて
人はいさ心もしらす古里は花そ昔の香に匂ひける　貫之
水のほとりに梅の花の咲たるをよめる
春ことになかるゝ河を花と見てをられぬ水に袖やぬらさん
鏡敷
年をへて花のかたみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらん
てふ伊勢の御の歌も入たり
後撰集
吹風や春立きぬと告つらん枝にこもれる花咲にけり　よみ人しらす
花たにもまた咲なへに鶯の鳴一枝を春と思はん　貫之
兼輔朝臣の閨のまへの紅梅を
春ことに咲まさるへき花なれは今年をも又あかすとそ見る
新勅撰　春の歌とて讀侍りける
難沼津に咲や昔の梅の花いまも春なる浦風そふく　後京極攝政前太政大臣
猶此外あまた記されたり

萬葉名物考　木類　四

萬葉名物考　木類　下

萬葉名物考木類目次

附箋（千蔭云）十一磯上立回香瀧心哀何深目念始（イソノウヘニタチマフカケキノコ、ロイタクナニ、フカメテオモヒソメケン）

此二の句むろの木と有べく覺ゆ、卷三わぎも子が……柄浦の天木香樹（ムロノキ）ハ……と有、されは瀧は樹の字の誤ならんか、天木香樹と書たれハ、回香樹と書る故も有べく覺ゆといへともいかゝあらん、按に立回香瀧は本の儘に立回はたちはふと訓み、香瀧ハかたきと訓みて堅木（カタキ）を云るか、香瀧ハ借レ字たるか、されは堅木ハ樫（カシ）をもいひ、叉樫の類なるウハメガシなとをいへるか、ウバメガシハ海邊の石上なとに根はふて生榮ゆるものなれハ、しかならんかと思へり、多企都瀬なと集中にかなに書けり、木はぎ（ギ）、若クヌギ

萬葉集名物考　木類

之伎美

篤信云、莽草はアシキミト云意也、俗ニハ樒トカク、シキハアシキ也、アヲ略ス、ミハ實也、シキミノ實ハ毒アリ、クラヘハ人ヲ殺ス故ニ惡キ實ナリ、小兒ヲイマシメテクラハシムヘカラスト日本釋名ニ云へり

佛家にハ柴を焚香に用ひたれと、實は毒有て柴の茂き山下の流水(ナカレ)には魚すまぬ由にて、しきみとはあしきみと云名なりともいへり

莽草といふ名ハ、香木の毒あるにて、王莽にや比(ククヒ)けん、木を草と呼事、宋の代以來のあだ名也

二十　奥山の之伎美か花の名のことやしく〳〵君に戀わたりなん　大原眞人今城

しきみのしきを重る事として、其名の如く重々といふ也、しく〳〵といはむ料にまふけて序に用ひたる也、和名抄樒 漢語抄云 之岐美 香木也と見ゆ、然れとも樒ハ本草の蜜香にして沈香の類なり、しきみの類ならす、又別條に和名抄山海經注云、莽草 和名本草云 之木美 可ニ以毒ㇾ魚者也とあるをよしとす、本草の毒草類にも莽草と見えたり、佛家の書に梻の字を書てしきみとよめとも、新撰字鏡にも見えす、さかきを榊と書るに對してなるへし、しきみはさかきに似て葉厚し、冬も凋ます、花は夏さく、大さ一寸斗、七八瓣にして色白く黄を帶て光りあり、夏醬(ヒシホ)あるひは糊なとに蛆(ウジ)を生したる時、しきみの葉を入れはたちまちに死す、毒あるかゆへなり

椎

シヒトハシヒノ反シニテ、繁(シゲキ)コト也、此木枝葉細(コマヤカ)ニ茂ケリタルヲ名トシテシヒト云

巻二　家にあれは笥にもる飯を草枕旅にしあれは椎の葉にもる　有馬皇子

ト詠ルハ廣キ葉モアルカ中ニ狹キ椎ノ葉ニ盛ト旅ノ不自由ナルヲ云、今モ盃ヲ折敷(ヲシキ)ト云ハ葉ヲ折敷ノ義ナリ

十四　おそはやも汝をこそまため向峯の椎のこやてのあひはたかはし

同　おそはやも君をしまたん向峯の椎の小枝の時はすくとも

和名抄笥 和名 計 盛食器也、今も檜の葉を敷て強飯を盛事あるか如く、旅にてはそこらに有合椎の小枝を折敷ても

りつらん、和名抄椎子和名之比といふは實の名にして閩書に見えたり、木の名は本草に柯樹とあり、後の歌にはおほく椎柴とよめり、葉は櫧(カシ)に似て薄く、おもては綠にして背(ウラ)はしろく銀の光りあり、冬も凋ます、實も櫧に似て長し、小兒好て食ふ

榎

爾雅楈山榎註今之山楸トアリテ未レ詳木也

吾門の榎の實もりはむ百千鳥千鳥はくれと君そ來座(マサ)ぬ

もりはむは其實の所をはなれす守りゐてついはむ意か、百千鳥は多くの鳥を云、和名抄爾雅注云、榎一名楈和名衣とあれとも、榎にあつるは穩ならす、字鏡に朴衣之木と有、今も俗にえの木といふ、葉梅に似て厚し、夏實を結ふ細圓にして青し、秋に至れは熟して黃也、冬のはしめに葉黃みて早く落つ、漢名は朴樹と漳州府志に見えたり

棗

十六 梨棗きみに粟つきはふ葛の後もあはんとあふひ花咲

和名抄本草云大棗和名奈豆女酸棗和名佐禰布止とあり、此說よし、なつめは芽を出す事他の木より遲く、夏になりて芽の出るものゆへナツメト名ク、棗ハ本草五果類に見えたり、藥には大なるを用ゆ、故に大棗と云、酸棗は今俗にさねふとなつめと云、味酸くして食ふに堪へす、仁を藥に用ゆ

梨

詠黃葉

卷十 黃葉のにほひはしけししかれとも妻梨(＊)の木を手折かさゝむ

同 露霜の寒き夕の秋風に黃葉にけりな妻梨の木は

黃葉せる木はおほけれとも、妻といふ名によりて妻梨を殊更に折かさゝんと也、妻梨といふもの一種あるやしるへからす、按にものゝ端をつまといへは、こゝもつま木のつまにして小枝をいふか、別に妻梨と云もの有事を聞す、梨は種類多し、何もいとよく葉の染るものゆへ卷の十九にも梨の黃葉をめてし事あり、和名抄梨和名奈之楠子和名夜末奈之山梨也とあり、山梨は京にてありのみといひ、美濃にていぬなしと云、木高く聳へて枝に刺あり、桃より小にして冬に至りて漸く熟す、本草山果類に鹿梨と云是なり、

頭註 (＊)つまなしと云はことはの文にして、たゝ梨の木をいへる

ならんか

(ホ)栗

巻五長歌 久利波米婆麻斯提斯農波由 下畧 巻九短哥 三栗乃中爾向有曝井の絶すかよはん彼處に妻もかとあり。こは栗は一ッの刺皮の内に子三ッあるを云、さて三ッあるものは左右と中とある故に、中てふ語に冠らせつ、然れとも三ッあるものは稀にしておほくは二ッあり、又一ッあるものは形圓にして末尖る、俗にひとつくりと云、漢名獨顆栗子と本草栗の條にあり、その三ッありて正中の扁きものを俗にをばぐりともくりの杓子とも云、漢名栗楔と本草の注にあり、後の歌にしばぐりとよめるものは木の高さ三四尺にして實を結ふ、漢名は本草の茅栗なり

頭註 (ホ)顯神紀ノ哥次ノ加新ノ條下出ル、此所ニ入ルヘシ

榛

古事記雄略條に、其猪怒而宇多岐依來。故天皇畏ニ其宇多伎一登ニ坐榛上一歌曰和賀爾宜能煩理斯。阿理袁能。波里能紀能延陀と見えたり、是にていよ〳〵榛は波理ならぬを知るへし、芽子ハ小木也、榛は喬木也、高木にあらすは登るへからす、眞野榛原の考、攝津名所圖會ニアリ、非也

七 古へに有けん人のもとめつゝきぬにすりけん眞野の榛原

巻一 引馬野ににほふ榛原いりみたり衣にほはせたひのしるしに

巻一 (一)綜麻形乃林始乃狹野榛の衣につくなす目につくわかせ住吉の遠里小野の眞榛もてすれる衣のさかり過ゆく

巻七 時しくに斑衣のきほしきか衣針原ときならねとも

巻十 (二)おもふ子か衣すらんに匂ひこせ島の榛原秋たゝすとも

狹野榛のさハ發語にてたゝ野はりなり、さて榛の皮は古へ衣を摺ものにて物にうつりつき安きをもて、寄せこか目に付にたと へたり、巻十にもあたらしき斑衣は面着てとよめり、天武記綦摺御衣とありて古への摺衣は御狩御遊又旅衣にせしこと見ゆ、和名抄榛和名波里之波寸榛栗也とありてはりの訓なし、通雅にも榛は樺に同しく又綦に作ると あり、字鏡に榛を波自波彌と訓るをよしとす、又大和本艸に榿の字をはりとよむもあたらす、はりの木は古今注云、赤楊霜降則葉赤材理亦赤也とあるにあたれり、はり

は山野ともに多し、葉榛に似て狭く尖れり、葉に光りありて皺なく斑點なし、はしはみは葉に皺多くあるゆへ葉皺みと云の義也、榛は小木にしてはりは大木となる、此皮をとり此木を土中に埋置時は此色彌赤くなる、それをもて赤色を染るに蘇木の如し、然れとも古へのはりすりは此木の皮を剝取て其まゝ水に浸し石灰を加へて汁を出しそれにて染しなるへし、今も是をはりそめと云、古へ染殿にてはり皮もてかくの如くして染しなるらん、さて花の形ははりも榛も同事にて實は大に異なり、圖あり見て知るへし

針の實を尾張にて山だんごといふ、染るに用ゆ

頭註

(一)久老云綜麻形乃ハ紗麻形の誤なるへし、巻十ニ小額田と見ゆ林始乃契沖か訓に從ふ、

巻十一ニ岡前十四ニ夜麻乃佐吉なとあり、

契沖云、榛ハはりの木なり、俗にはんの木といふ、武士の氏に榛谷といふも見え、片山里乃川邊なとに多き木也、昔ハ榛摺の衣とてよき人もこの皮をもてそめける也、萩か花摺といふ事もある故に、榛と萩とよくまきるゝ也といへる說をえたりとす

眞淵云狹野榛のさは發語、榛ハ借字にて野萩也といはれき、島の榛原も萩原也、此外にもあれと哥の意は惣て秋はきなりといへと、枝直は榛と書るは花咲萩に非す、波利と訓て今の波武の木と云ものなりといへり、集中芽子哥百五十首餘ありて皆花の咲散るとよみ、雁鹿又露なとよみ合せたり、榛と書ると針、波里、なと書る十餘首ありて皆花をよめる事なく雁鹿露なとよみ合せたる事もなし、されは榛は今の萩にあらす、波里と訓て今はむの木といふもの也、此木の皮もてすれはよくうつるものなれは、古へ摺染にせしなるへし、契沖か說によるべきなり、云云此說をよしとす、此說によりて眞淵翁の萩といはれし言のひか言なるを思ひ明らむへし、

(二)巻九に詠榛思子之衣摺牟爾爾保比與島之榛原秋不立友、遠江國人の言、秋に至りて實乃熟するをもて衣に染といへり、集中榛ノ哥ニ丹保比、仁保布とよめるははり染の色の赤きをいへるなり、

天木香樹

巻三　吾妹子か見し鞆浦の天木香樹は常世にあれと見し人そなき　大伴旅人

同　鞆浦の磯の室の木見んことにあひ見し妹はわすらゑめやも

巻三　磯の上に根は(一)ふ室の木見し人をいかなりととはゝかたりつけんか

右三首過鞆(三)浦日作歌

十五　はなれ磯に立て牟漏能木うたかたも久き時を過にけるかも　よみ人しらす

卷の十六にも題に天木香と有て哥には室の木とよめり、天木香樹と書るは如何なるよしにや知るへからす、むろの木ハ香氣あれは天木香と書けるならん、和名抄樫一名河柳（和名無呂）とあれとも、樫にあてたるは誤れり、樫は寛保年中に初て渡り今世に多し、通して御柳と云、室の木は阿波にてひむろといひ、たゝむろとも云、木に雌雄あり、雄むろは枝直立して空に向ふ、雌むろは枝葉とも四垂て細し、葉はめをともにみな針ありて人をさす、此枝を鼠の通ふ道にさしはさめは來らす、故に讃岐にてはねすみさしとよふ、漢名は閩書の杜松なり、めむろの方は別に漢名絲杉と本草の天門冬の條下にあり

頭註

(一)根蔓ハ根延るをいふ

(三)久老云、備後の國の鞆也、そのむろの木は木樹にて古へ名高かりけん云云、さて牟呂は和名抄云々とあれとも此樫の字をあてたるはいかゝならん、卷十六にも端詞に天木香樹と有て哥には室の木と書たり、天木香樹と書るはいかなるよしにか考なし今むろといふ木は柏子に類して香氣あり、天木香と書るは香木なる故にやといへり

柘

仙柘枝歌三首

卷三 霰ふりきしみかたけをさかしみと草取かなは妹か手をとる

同 此ゆふへ柘の左枝の流れ來は梁はうたすてとらすかもあらん

同 古へに梁打人のなかりせはこゝもあらまし柘の枝はも

柘枝といへるは古へ吉野の里女仙と成て在しか、同し所に味稻といふ男の川に梁打て魚とるに、其仙女柘枝と化て流來て其梁にとゝまりぬ、男それを取て置にうるはしき女となりしをめてゝ相住けるといふ事也、此事仁明記の長歌に出たり

爾雅ニ檿ハ桑山桑似ニ桑材中ニ作ニ弓及車轅ニ〇考工記ニ云、弓人取ニ幹ヲ柘ヲ爲ス上ト檿桑次ク之ニ是也 此說モ檿ト柘トハ同類別種ナルニ似タリ

和名抄柘（漢語抄云豆美）蠶所食也とあり、今やまぐは或いぬくはともいへり、山中に多し、葉常の桑よりひろくして厚し、花及ひ實も桑に似て大なり、實は粘りつよし、字鏡には(三)檿山とあれとも豆美を檿にあてゝるは誤れり、檿は毛詩の注に檿山桑也、與ニ柘皆美材可ニ爲ニ弓幹ニ又可ニ蠶也とあるによれは、柘とは同類別種なるべし、大和本草に檿は漢

渡のから桑ならんといへり、栢は和名抄にしたかひて豆美と訓むへし

頭註 (※)今染殿にてづみとよふもの有、信濃の國にてこなしと云木の皮也、其木皮にて絹布を染るに色黄なり、こゝに云栢とは別なるか、又和名抄の栢をつみと訓し、字鏡に檿をつみとよめるも共に誤にして、今俗間にづみといふものは即此集によめるつみくはなるかしるへからす

可新

橿實、カシハ本語カタシ木ナリ、カシノ反キニシテ木ナリ、堅シ木ノ略ニシテ今モ堅木ト云、又堅木ノ二字ヲ合テ樫(カタキ)ニ作ルハ、堅シ魚ヲ鰹ニ作レルニ同シ、古人ノ作字ナリ

幸于紀溫泉之時額田姫王作哥

巻一 紀國の山こえてゆけ吾瀨子か射立せり兼五可新何本

五は借字にて嚴なり、可新か本は橿の本也、このかしは神の坐山の齋木(イハヒ)なれはいへり、嚴(イツ)は崇くして恐き勢ひをいふなり、垂仁記天照大神磯城嚴橿(イツカシ)か本に坐といひ、古事記に美母呂能伊都加斯加母登加斯賀母登由由斯伎加母加志波良袁登賣といふに同し、和名抄唐韻云、橿 和名加之 萬年木也、爾雅集注云一名杻一名檍 神代巻一書曰 檍此云阿波岐 とあれとも、橿檍杻の三字は皆冬青(モチ)の一名なり、かしの類にあらす、又樫(※)の字をかくは和字なり、かしを俗にかた木といへるゆへ樫とかけるならん、字鏡に櫪 加志乃木 とあれとも和字なるへし、かしは漢名本草の櫧なり、櫧は二種あり、あかかししらかしと云、赤かしは春芽出の葉赤く材も又赤し、故に漢名血櫧 本草櫧字條下 春葉の間に二寸斗の穗をなして花咲、實は枝の梢に生す、形圓くして尖れり

○巻九に若草の夫かあるらん橿實(カシノミ)の獨りかぬらんとはまくのほしきわき妹か家のしらなく云云是なり、かしの實は聚り結はすしてまはらに付ゆへしか冠らせたりしらかしは次の條に委し

瀰菟愚利能那伽菟曳能府保語茂利(ミツクリノナカツエノフホコモリ) 三栗 中 枝 含 顯宗紀上略

頭註 (※)集中に厩衣きればなつ樫(カシ)と云に樫の字を假て書たれは、古くより樫をかしの事とせり

白杜

は

巻十 足引の山路もしらす白杜(シラカシ)枝の枝もとをゝに雪のふれゝは

字鏡に杜をさか木と訓り、さか木は常磐木なれはかしにかくかけるか、しかれは杜枝は杜樹の字の誤れるかと翁はいはれき、千蔭云和名抄牱牁 加之 所以繋舟と有、此二

字を借たるか誤れる成へし、景行紀御歌、志羅伽之俄延塢于受耶左勢許能固と有、枕草子にしらかしなといふものましてみやま木の中にもいとけとをくて、三(※)位二位のうへのきぬそむるおりはかりそ葉をたに人の見るめる、めてたき事おかしき事にとりいつべくもあらねと、いつとなく雪のふりたるに見まかへられて下略といへるは、め出しの葉いとしろく光りあるを云也、材も又白し、實の形は赤かしに似て大なり、漢名麪櫧と本草櫧子の條下に見えたり

頭註 (※)貞丈云、二位三位の袍、延喜式縫殿寮に染草の分量あれとシラカシを用ルコトナシ、染式ノハヤスタレタルニヤ

(一)松

従二吉野一折二取蘿生松柯一遺時　額田姫王奉レ入歌一首

巻二　三吉野の玉(二)松かえははしきかも君かみことをもちてかよはく

同　妹か名は千世になかれん姫島の子松かうれに苔むすまてに　河邊宮人

老松の葉は圓らかなるを玉松といふへし、丸らかにしけき篠を玉ざゝ、まろき筐を玉がたま抔いふ類也と千蔭はいへり、宣長は此集には山を玉に誤れる例多し、こゝも山を誤れることとしるし、然るを後の歌に玉松(此説非ナリ)とよめるは此歌によれるにて皆ひかこと也、十六巻にも足曳の山縵とある山の字をも玉に誤れり、是明らかなる例證也といへり、何れにもよるへし、おのつから枝葉のまろらかに生たるを今も俗に玉松ともされ松とも云、漢名は汝南圃志に云天目松、花鏡に云千年松の類なるへし、子松かうれに蘿生までにといふ蘿はをかせなり、即松蘿を云既に委しくいへり

巻六　茂岡に神さひたちてさかえたる千代松の樹の歳のしらなく

二十　麻都能氣乃奈美多流見れは伊波妣等乃我を見於久流等多々理之母己呂

まつのけは松木なり、いはひとは家人也、たゝりしもころは立て在し如くといふ也、神代紀若をもころと訓、見送るとてといふべきを略けり

巻七 住吉の岸の松か根打さらしよりくる波の音のきよしも(三)

こは波風の烈しき浦にて根高く顯れ出るを俗に根あかり松と、漢名は江南通志の黄山松の類なり

十七 麻都能波奈花かすにしもわかせこかおもへらなくにもとなさきつゝ 平群氏女郎

松のはなはうるはしく花といふへくもなきものなればわか身にたとへて、結句にさきつゝといへるは色に出て戀るなりとぞ、此外松をよめる歌いと多けれとも、皆山野自然の松にしてことなる歌なし、姫松或は五葉の松なとよめるは後の世のことなり

頭註　(一)篤信曰松ハ持也、持レ久之意、マハ向言(コト)ツハ續(ツヽキツラナル)列 コトニテ、二葉相向テ列ト云名也

(二)○玉松ト云タハ手也、マハ股(マタ)の言、手ノ股ノ如クニ五ツ向ヒテ續(ツヽク)ト云名ニシテ、五葉ノ松ヲ云ナリ

○玉柏タマカシハとはタマハ手向(タマ)也、カシハのカシノ反キニシテ木也、ハは葉ニテ手ヲ向タル如ノ葉ノ木ト云名ニシテ則ニ

松ノコト也、扨此カシハト云木ハ、諸木ノ中ニモ松ホド葉ノ凋(シホマ)サル木ハナシ、萬木ニ勝レタルヲ以テ松ニ名ヲナス、既ニ柏手ナト云ハ松ノ葉ノ如クニ手打合スノ唱ナリ、文字モ松柏ト云時ハ女松男松ノ義ヲナス、今一種ノ柏ト云モノアルモ、雜木ノ中ニモ勝レテ常磐ニシテ葉ノ凋ト云ヘトモ枝ヲ離ス、故ニカシハノ名ヲナスナリ

(三)古今に風ふけは浪うつ岸の松なれやねに顯れてなきぬへらも也とあるに同し

(一)眞木

巻三 眞木葉のしなふ勢の山しぬばずてわかこえゆけはこのはしりけん

注に眞木は檜也、檜の木はしなやかなるものなれはいふと也

巻三 大君は神にしませは眞木の立荒山中に海をなすかもあたへ行をすての山の眞木の葉も久しく見ねは蘿(コケ)生にけり

十一 奥山の眞木の板戸をおしひらきしゑや出こね後はなにせん

しくれの雨間なくしふれは眞木の葉もあらそひかねて色付にけり

十七 眞木柱作るそま人いさゝめにかりほの爲と造りけめやも

麻氣(マケ)波之良(ハシラ)ほめて作れるとのゝごといませ母としおめかはりせす 坂田部首麻呂

和名抄杙(二)日本紀私記云末木 木名作レ柱埋レ之能不腐者也とある是也、

眞木は深山に多し、今も杣人は眞木といふ也、大和の高

野山なとに殊に多きゆへ俗に高野眞木ともよふ、阿波の杣人の眞木といふは一樹の名にあらす、(三)ひの木杉都賀の類の良材を統てま木といひ、彼の高野眞木をほんま木と云、此木柱となして幾百年を經ても朽ることなし、和名抄に眞木を柀にあてるは穩ならす、柀は字書に（碑雅切杉木埋不腐）とありて別也漢名は酉陽雜俎に金松といへるもの眞木にあたれり、其木は高く聳て葉の形松に似てふとく長さ三寸斗葉をとりまきて付、其葉年を經て漸く落つ、又是に似たる木にいぬ眞木くさ眞木といふあり、葉の形相似て廣し、こは腐やすくして良材にあらす、漢名羅漢松と物理小識に出たり

頭註

(一)眞木は檜をいふよし眞淵翁いへり

(二)日本紀神武天皇卷云、（上略）又祈之曰、吾今當以嚴瓮沈于丹生之川、如魚無大小悉醉而流、譬猶柀葉之浮流者（柀此云磨紀）吾必能定此國

(三)景行記御木（此云毛）と有て、古へ木をけといへは眞木柱なり、柱は檜都賀を第一良材とすれは、眞木柱と稱ていへる也

○眞木立荒山道乎とよめり、荒山のアラは生なからことにて、人氣になれぬ深山に眞木の生ふるを云へり

○眞木佐苦檜乃嬬手乎（一卷）てふは杣人の檜の木を制造れる枝をいへは、我國の杣人の眞木といふにかなへり、檜の木都賀杉の類は文理直くさきやすけれはいへり

眞木は檜にて深き山に生るを云也と眞淵いへるは穩ならす、檜は檜原と集中によめる歌多し、かた木を樫と書の類なり

字鏡に槇（萬木）とあれとも和字也、

神代卷、（上略）定其當用乃稱之曰杉及櫲樟此兩樹者可以爲浮寶、檜可以爲瑞宮之材、柀可以爲顯見蒼生奥津棄戸將臥之具（柀此云磨紀）

柀

爾雅說見合へし

玉篇云柀作柱埋之能不腐者也、爾雅注云柀即杉別名也、俗ニ眞柀ト云モノ即高野柀也、狗槇一名臭槇ト云モノアリ、故ニ眞柀ト云テ別ツ

○（萬二）奥山之眞木乃板戸乎押開、（亦）繼體紀ニ眞紀佐倶避能伊陀圖鳴飫斯毗羅枳ト在テ、皆正日木ノ檜ノ都賀板戸ノコト也、大古ハ鋸ト云モノナケレバ、只割裂テ板ニナシタルコトト知ラル、也

巻一

柿本人麻呂過近江荒都時作歌

（上略）神乃御言樛木乃。彌繼嗣爾。天下。所知食來（下略）卷の三に赤人作歌、五百枝刺。繁生有。都賀乃樹乃。彌繼嗣爾。玉葛。絕事無。在管裳。不止將通（下略）卷の六に瀧上之御舟乃山爾。水枝指。四時爾生有。刀我乃樹能。彌繼嗣爾。萬代爾。とあり集中皆(三)都賀の木とのみあり、刀と都

と通へは刀我とてもつぎ〳〵とつゝくへけれと、猶思ふに外皆都賀とのみあれは刀は都の字のかたはう缺たるか刀となれるにもやあらんといへり、今も俗につかの木ともとかの木とも云、樛木と書てつかと訓すれとも、樛は字書に木下曲曰レ樛とありて一木の名にあらす、又栂を古來よりつかとよめとも栂は和字なり、然れとも字鏡にも見えす、つかは漢名いまた詳ならす、深山に多し、葉樅に似てこまかなり、葉は四時ともにあり、花は松の花に似て小く實も松毬(チヽリ)に似て細なり、木は良材にして柱とし土に埋て朽る事なしといへり

頭註 (*)關東ニハ都賀ト云ヒ、關西ニハ止賀ト云ヘリ

夫木 爲家 いささらは茂り生たるとかの木のとか〳〵しさを立て過さん

臣木

萬葉集玉の小琴に臣木(オミノキ)、師云樅木(モミノキ)也、古へ樅栂(モミトカ)なとをすへておみの木といひしを、やゝ後に樅をは眞おみといひ、マオをも約むれはモ也、栂は刺あれは尖りたる意にてつかともとかともいひしなるへし、神武紀に草香の戰に此木に隱れて命たすかりし人有し故に、毋木と其處を名つけしよし有、これによりて後に栂の字を作りし也

神武紀孔舍衙(クサヱ)の戰人大樹に隱れて難を免かる、其樹の恩毋の如しとて時人其地を毋木邑(オモノキ)といふ、今飫悶廼奇(オボノキ)といふは訛れるよし見ゆ」千蔭云へり

書紀神武卷孔舍衞之戰有レ人隱二於大樹一而得レ免レ難、仍指二其樹一曰二恩如(シト)レ母、時人因號二其地一曰二毋木邑(オモノト)一、今云二飫悶廼奇(ハオボノキト)一訛也

契沖云今オミト云木ナシ、オトモト同韵にて通スレバモミノコトナルヘシ

卷三長歌 山部宿禰赤人至二伊豫温泉一作歌 上略 三湯之上乃。樹村(コムラ)乎見者。臣木(オミノキ)毛。生繼(オヒツキ)爾家里 下略 卷十六の長歌にも毛武爾禮乎とあり、ともに今云もみの木也、字鏡に樅毛牟乃木また和名抄爾雅云、樅松葉柏身和名毛美 とある是なり、山中に多し、木高く聳て葉の形都賀に似て大なり、夏葉の間に花咲、松の花に似たり、實は松毬(チヽリ)に似て長さ四五寸、鱗甲の間に子あり、熟すればおのつから落て生ひ出る、一名鳳尾松と爾雅にあり

附攷 萬葉考久老云、こむらは木の群たるをいふ、今の森也、和名抄云纂要云木枝相交下陰曰レ樾音越和名古無良 とあるは、強て漢字をあてたる也、臣木は風土記云以二岡本天皇并皇后二一軀一爲二一度一、于レ時於二大殿戸(オホトノト)一有レ椹云二臣木一、於二其上一集レ鵤云二此米鳥(シメノ)一、天皇爲二此鳥一繫レ穗(テイナボ)養賜也、云々 此をりの臣木も生繼て今猶ありといへり、和名抄に云樅松葉柏身和名毛美 とみえたり、このもみの木といふは眞臣(マオミ)なるよし抄いへり、此臣木の有つる

あとを、今木の下といふと重波いへり

杉

巻四 うま酒を三輪のはふりかいむ杉に手ふれしつみか君にあひかたき（丹波娘子）

十一 石上ふるの神杉かみさひて戀をもわれはさらにするかも

十三 神なひのみもろの山にいはふ杉おもひすきめや苔むすまてに

和名抄杉（和名須木）とあるをよしとす、すきは直木の義なり、木理直きゆへの名なりといへり、俗にあふら杉といふは赤くして香氣つよし、水に入て朽す、器となすによし、漢名油杉（本草杉條下）又俗にしらたすきといふは木の色白く朽やすし、漢名白杉（本草杉條下）杉の葉は皆末尖りて手を刺也、一種手をさゝさるあり、俗にひめすきと云、漢名溫杉（物理小識）又尋常の杉にして木に節多く直ならさるものあり、是をおにすきと云ひ又薩摩すき夜久すきとも云、板にして文理美しきゆへうつらもくと云、卽本草に云野雞斑なり

鉾椙

巻三 いつしかも神さひけるか香山の鉾椙（椙の誤也。）か本に薛むすまてに（鴨足人）（上カ云久老考）

鉾椙とは杉の若木は鉾の如くなれは云へりと、椙は和字なれとも字鏡にも見えす、さて木の本に苔の生るは常なり、然れは若木の杉の本に苔生るまてにと云意なるへしと千蔭いへれと、久老か槻落葉に云桙檻之末爾ハ桙の如く立る杉なり

頭註 (＊)榅は字曲に集韻烏昆切音溫。杉也。と見えたり

爾禮

延喜內膳式に桙橘子と有るはいかなるをいふにや可ㇾ考、榅は顯宗紀に石上振之神榅と有、注に榅此云須疑ーとあれは今本は誤れり、末も今本は本に誤れり、卷二に子松か末爾蘿生萬代爾と有によりて私になほしつ、薛は蘿の條下にいへり

巻十六 足引乃。此片山乃。毛武爾禮乎。五百枝波伎垂、天光夜。日乃異爾干。佐比豆留夜。辛碓爾春。とあり、和名抄爾雅注云、楡之皮色白名ㇾ粉（和名夜仁禮）とある是なり、毛武ハ樅にて已にいへり、楡はたゝにれとのみもいへり、內膳式楡皮一千枚（枚別長一尺五寸廣四寸）搗得粉二石（枚別二合）右楡皮年中雜御菜

並薬等料云々なと見ゆるを思へは、古へ此木の皮を剝て日に干て臼に搗粉にして食しものとし供御にも用ひられしと見へたり、又延喜式にも食料せし事有、にれを木曾にてねれといひ、越前にてねりといへり、楡に春にれ秋にれの二種あり、春にれは先花咲實を結ひて後に葉を出す、實は圓く扁く大さ三分計内に小き子あり、是を楡莢と云、葉は櫸に似て厚く、短し、此木寒を好むゆへに南の國に稀也、木の粗皮を去り白皮を粉とす、秋にれは阿波にてねへの木と云、卽本草の榔楡也、葉春にれに似て小なり、葉に沙(サラツキ)あるものを刺楡といひ沙なきものを綿楡と云、皆榔楡にして八月葉の間に小なる花咲て莢を結ふ形楡に異ならす、冬に至り葉落て莢は木の梢に猶殘れり

眞弓

七　陸奥のあたたら眞弓つら絲(アゲ)てひけはか人の吾(ワ)をことなさん雜出ニ

卷二　水篶苅信濃乃眞弓我ひけは宇眞人さびていなといはんかも

七　南淵の細川山にたつ檀弓（四）束級(ユツカマク)まて人にしらえし

紀に景雲元年信濃國より弓（二）二千四百張を献する事見えたり、古への弓はたゝ木をためて作れり、延喜式に御弓の料を奉れるに竹は見えす、檀木は弓に最よろしけれは則眞弓てふ名を負たるなるへし、和名抄唐韻云檀和名萬由三木名也とあれとも檀は本草喬木類に出て和產ある事を聞す、藏器の說に葉如檀高五六尺云々とあるものは俗にこばんの木又きは木と云にあたれり、其木は深山に生ひて葉小く圓にしてこはん形なり、春五瓣の小なる紫花をひらく後に小き圓く赤き實を結ふ、是一種の檀なり、其材堅彊にして弓となすへきもの也、深山ならては大木はなし、古へ檀弓といへるは是なるか、蘭山翁云まゆみは衞矛（三）なりとそ、和名抄衞矛和名久曾末由美一云加波久末豆々良とあるもの此集によめる眞弓なるか、今俗ににしきゞと云もの衞矛なり、その木箭羽(ヤハズ)あるゆへやはす錦木とも云、山中に多し、高さ一丈餘葉は桃に似て短く春葉の間に花咲實を結ふ、實の形扁くして光れり、秋に至り自ら裂て紅子外にあらはる、葉も紅に染て錦の如し、故にしかよぶ、後の歌に眞弓のもみちとよむもの是なり、其枝幹にある箭羽(ヤハズ)を本草に鬼

箭羽と云へり、古へ弓材に用ひしもの是なるか

巻三 (三)天の原ふりさけ見れは白眞弓張てかけたる夜路は将去（古本ニ從ヘリ）

巻十 白檀弓今來山に行雲のゆきやわかれん戀しきものを、

衛矛に似て箭羽なきものを紀州にておほ眞弓、伊勢にてます木と云、葉桃に似て大なり、花は衛矛に似たり、實は衛矛より大にして四方なり、秋に至り四ッに裂て紅肉を吐く事前に同し、此木白質にして美也、山中には大木あり、弓の良材ともなすへきもの也とて白檀弓と云へり、是本草に云桃葉衛矛なり、しら眞弓とよめるもの是なるへし、此外に種類のもの甚多し、和名抄杜仲（和名波比末由美）とあるは今俗に云まさ木なり、然れとも杜仲にはあらす、その葉丸く厚し、形山茶葉に似たり、故に本草に山茶葉衛矛と名つく

頭註 (一)魏志倭人傳木弓短下長上、考工記工人取幹之道柘爲上檿桑次之、檿桑山桑也

(三)○十一 白檀石邊山常石有とも有

山茶葉衛矛をこゝにてマサキと云、小兒オメコの木といへり、桃葉衛矛をマユミと云り、弓材によしと云、里に生るものも木の質白けれども深山に生る物ハ至て白く木性も又里に生るものに勝れりとぞ、白眞弓ともいふべきもの也、形狀も異ならざれば地によりて色も性も異なるかしらず、此桃葉衛矛を小兒重箱オメコといふは其實角なればにや

(三)久老云白眞弓ハ古へはすへて木弓也、是はあらきの弓をいふなるへし

(四)ゆづか和名抄弓末曰弭（和名由美波數）中央曰弣（和名由美都加）と有也

紲糸次第也と宗書にあれは、まくと讀へからず、纏及と有しを纏の傍滅て及を上へつけしにやと千蔭いへり

(一)波自由美

萬葉廿ニ、神代紀に天梔弓見ゆ（日安ノ說）、(三)梔の字物とたかへり、櫨にて作りし弓也

貞丈說日本紀天梔ヲアマノハシユミト訓セリ、梔ノ字クチナシ也、ハジトヨムハ正訓ニ非ス義訓也、ハジハ和名抄櫨（和名波邇之）トアリ、波邇之ヲ略シテ波之共云、古哥ニはじもみぢト詠る是也、田舍ニハはぜト云、シトセ音相通、又和名抄梔子（和名久知奈之）トアリ、梔モ櫨モ黄色ヲ染ル具ナル故ハシ弓ニ梔ノ字ヲ借リ用ルナルヘシ、舍人親王ノ此ハジニ櫨ノ字ヲ用ルコトヲ未詳ナラサリシ故、黄染ノ義ヲ取テ梔ノ字ヲ借リ用シニヤ、梔木ハ弓材ニ非ス、櫨ハ弓材也、今モ弓ノ側木ニ用之、古ハ丸木弓也

頭註 (二)萬葉二

波自由美乎多爾藝利母多之麻可胡也乎多波左美蘇倍弖

(三)爾雅ニ桑辨有ニ葚ハ梔註桑子曰葚爲梔ト有て梔の字ヲ用、此ニ據レハ誤トモ云へカラス

槻

十一 天飛や輕の社の齋槻いくよまてあらんこもり妻はも

旋頭歌 長谷の弓槻か下に吾隱せる妻は赤根さし照れる月夜に人見てんかも

卷十三に百不足五十槻か枝丹水枝指下略とあり、齋槻は槻を神木といはひ祭れるをいへり、弓槻は五百槻にて初瀬に五百枝繁き槻の木有をいへり、又五十槻とよめるも齋槻なり、齋垣をいかきといふか如し、又卷の十に佐豆人之弓月我高荷霞靠靅とあるは弓に作る木なるかゆへ弓槻と云也、紀に甲斐の國より槻弓八十張を奉るよし見えたり、和名抄唐韻云槻和名豆木乃木木名堪作弓也、つきは欅云木の類なり、今もつきの木ともつきけやきとも云、葉も木の質も欅に似てかたしといへり、山中に多し、年ふるものは甚大木となる、打見たるところは欅に異なる事なし、然れともつきは槻にあたらすといへり

卷二長哥 趍出の堤にたてる槻木のこち／＼の枝の春の葉の茂か如く

こち／＼は此彼也、春のはの茂きか如くといへる、春を葉茂き事に集中多くいへり

頭註 (＊)夫木抄定家卿、けふ見れは弓きるほとに成にけり植し岡邊のつきのかた枝

是槻の枝を切て弓に造ルコトヲヨメルナリ、又顯季卿闕守か弓にきるてふつきの木のつきせぬ戀に我おとろへぬ

伊勢物語の哥にあつさ弓ま弓つき弓年をへて我せしかことうるはしみせよ、貞丈云丸木弓は木なるゆゑあら木のほとはうるはしくひかれぬもの也、されは年を經れは弦なれてうるはしくひかるゝゆゑ年を經てといひうるはしみせよと詠る也といへり

梓

卷二 梓弓ひかばまに／＼よらめとものちのこゝろをしりがてぬかも

同 梓弓つら(二)をとりはけ引人はのちの心を知る人そ引

天皇遊獵内野之時 中皇女命使間人連老獻御哥

卷一上畧 御執乃梓弓之奈加弭乃音爲奈利朝獵爾今立須良志、云云

千蔭云、奈加弭解かたし、卷六安豆佐由美須惠爾多麻末吉可久須酒曾とよみたるを思ふに、古へは弓弭に玉をまき鈴を懸つれは、弓射ることに弦の弭にあたりて鳴からに鳴弭といひしか、さらは加は利の字の誤ならんといへり、眞淵も鳴弭と訓へしといへとともに誤れるか、奈加弭は奈賀弭にして弭の長きをいふか、猶考ふへし、弓はくさ／＼の木もて作れと、紀に大寶二年信濃國より梓

弓一千二張を献するよし見え、(二)延喜式に御弓は梓なるよし見えたれは、古は梓をもて御執弓（ミトラシノ）をは作し事知るへし、和名抄梓（和名阿豆佐）とあり、今京にてあかめがしは又あかがしはとも云、四國にて川原がしはと云木なり、山野に多し、木の高さ二丈餘となる、春若芽の時甚赤し、夏に至り漸くみとりに變す、莖は猶赤し、夏枝の梢に穗をなして花咲て實を結ふ、實は大さ三分斗外に軟なる刺あり、熟すれはおのつから裂て內に黑き實あり、凡序文に上レ梓と云はたゝ上レ木と云意にて、必しも此木を用るといふにはあらす、梓の一名木王といふゆへに木工を梓人と云也

頭註 (二)つるとは蔓緒の意也、凡て蔓（ツラ）といふはかゝるたぐひの物をはしめ草の蔓も其一ツ也と宣長いへり
(三)延喜式兵庫式云、梓弓一張（長七尺六寸槻柘檀准此云云）

附箋 アツサはもとよりアカメカシハにてあらざるべし、アツサは淸香の吉備の道艸に考あり、此說もいにあらん、愚老もアカメカシハを以て試しに、さらに弓になるべきものにあらず、栗原大人の造らるゝアツサ弓ハ如何なる木にかしらず

(十)
知智乃實

十九長歌上略 知智乃實之。父能美許等。波播蘇葉乃。母能美己許。於保呂可爾。情盡而。念良牟。云云 こはちゝてふ木の實をもて父にかさねたり、眞淵云相模の箇嶺人にとひつれは、ちゝの實はしらす、ちゝの木とは今いてうの木を云、これか老たるは乳房の如きもの垂るなれはいふならんといへり、此木を乳の木といひその實を乳の實といはんそ古き語なるへきといへり、阿波にて乳の實と云ものあり、そは俗にいぬびはと云木なり、此木を折れは乳汁のこときもの出る、それか實を乳の實とて童なとの翫ふ也、實よりも白き乳の如なる汁出るを吮ふめり、いてふの乳と云よりはまされり、こは本草に云無花果の類にして何處にも多し、花なくして實を生す、別に漢名天仙果と無花果の條下に見えたり

頭註 (*)今俗にしら木ともしら乳の木とも又木たんほゝともいへる木あり、莖葉を切れは白き乳の如き汁出れはしかよへり、葉は柿の葉によく似たり、秋に至れは紅葉して落つ、夏花さく栗の穗の如して圓き子を結ふ、其實を乳の木の實いへり、炒りて食ふに味よしとぞ、これらを乳の實とよまるゝやあらん、猶考ふへし

保與

十八 足曳の山の木ぬれの保與とりてかさしつらくはちとせ

ほくとそ

木ぬれは木末なり、ほよは和名抄寄生一名寓生(和名夜止里木一名保夜)この保夜なるへし、老木に生るものなれは、祝事に是をかさせるなり、つらくはつるを延言也、(ホ)ほくはいはふ也、寄生は其木の餘氣にて生るものにして、諸木ともにあり、俗説に鳥他木の實をくひたる糞乃木の上に落て生るといふは誤なり、ほやはそれ／＼の木におのつから生るものにて、其木によりて葉の形みな異也、鳥の喰ひし木實の樹のうつに落て生るもあれとそれにはあらす、桑に生るを桑寄生と云、蠶飼せさる國にては桑を斫る事なきゆへ木盛に茂りて寄生多し、葉柳に似て厚く枝の間に薄黄色なる實を結ふ、其枝葉をとりて乾せは深黄色となる、此外松樅櫻なとにあるは葉柞木に似て厚く實小豆の如くして色紅なり、これらは大抵形同しけれとも、乾けは節々相離れて色青黄にして深黄ならす、ほやといふもの世に多し、石勃卒を云、又ほや貝はや苔と云あり、茯苓をもほやと云、すへて物にやとりぬをものをいふなるへし

頭註 (ホ)保久ハ祝也、壽は言祝也、酒ほがひは盃上にてほぐ心也

可頭乃木 骨董集弱杖條云、北越にて(ニ)祝木と名つけ古へより傳へて今に作る杖なり、勝軍木(又勝の木といふ)或は胡桃木にて造り云云

十四 あしかりのわをかけ山の可頭乃木のわをかつさねもかつさかずとも

かつの木は穀の木也、筑紫にてかみの木ともかずの木とも云、此哥上はかづといはん序にて、下は吾をかたはせかたはしかたくと云意也、ぬすむ事をかだすかづすかたふなといひし也、字鏡に□(折曲也加止非也 加太久自久)とあり、和名抄(以下ケツリ去ヘル)楮ハ穀木也(和名加知)とあれとも楮と穀とは同し類にてたかへり、構は木の高さ一丈斗葉廣さ尺に近し、五つに分れて葡萄の葉の如し、又岐なきものあり、木に雌雄あり、雄には實あり、色赤く苺のことし、雌は夏花咲一寸許の穗をなして垂る事栗の花の如し、楮はかうぞ又かうその木ともいへり、木の高さ五六尺葉も四五寸に過す、花と實は構に同し、皮を剝取て紙にすく、諸國とも多く作る

頭註 (ニ)奥州にてかつぎかつの木又かちの木ともいふあり、皆勝

の木の意なり、此名によりて軍團の柄に用ゆ、勝軍木ともよふものなり、即五倍子を生る木なり、催馬樂に井奈野ふし原とあるも同し、北可頭乃木を穀の木と見るよりは勝の木とせしかた歌のこゝろにもかなへりといはんか
梁沖ハ穀木也といへり、或人はヌルテノ木ヲ田舍にて今もカツノ木ト處（本マヽ）アレハソレカトイヘリ、
和名抄ニ
樗和名沼天悪木也、辨色立成云白膠木（和名同上）ヌテハヌルテノ略也、今ヌルテノモミチト云是也、

木綿

木綿とかけるは西土に木綿と云物有を、同類に心得て借たるのみなり

通證曰、木綿古者剝木皮串刺之、今者青和幣用麻白和幣用紙也、神樂歌云、木綿造流信濃原爾也麻䔬彌云云絲毛紙麻也、民部式主計式等云、木綿紙麻子又紙麻斐紙麻穀皮斐皮、倭名抄引兼名苑有穀紙斐薄紙、斐今云紙斐音我牟比、與穀少異、史索隱云、穀木名皮可爲紙

白香付ノ哥

卷七　木綿かけてまつる三諸の神さひていむにはあらす人目おほみこそ

同　木綿かけていむ此神社もこえぬへくおもほゆるかも戀のしけさに

和名抄祭祀具云木綿（和名由布）折之多白絲者也、由不はもと野蠶なり、語のもとは眉生なるを略轉してゆふといへり、後に楮の木の皮もて造るをも由不といへるは眉生の糸綿に似たれはなり、即前の條の楮穀をいふ也、宣長云古へ木綿といひしは穀の木の皮を剝て白くさらしそを布に織たりし事、古へはあまねく常の事なりしを、中昔よりこなたには紙にのみ造りて布におる事は絶たりしに、今阿波の國に太布といひて穀の皮を糸にして織れる布あり、色白くいとつよし、洗ひてものりをつくることなし、洗ふたひことにいよ〳〵白くきよらになるといへるものは、即我國にて山深き里人の造れる太布を云へるなり、國人といへとも得しらぬもの多し、奥山人の常にきるものにて細きは夏の一重とし粗なるは袋とするものゝ是なり、猶他の國にても造る處あり、是大古の製の殘れる也

○丹比屋主眞人歌一首（志是八重ノ訓也、今幣ヲ木綿垂ト云ヒ、或略シテ志付ト云）

卷六　おくれにし人をおもはゝしての埼木綿とりして、ゆか

んとそ思ふ
しては垂るを云、こゝろは旅行し跡に留まれる妹をおもひて神に祈りつゝ行也、今ゆふしてと云は木綿もて作れるしてを云也
してはしたれのつゝめなり、木綿をもて物に付て垂るゝをいへり、神樂哥ニ賢木葉爾木綿取垂弖誰世爾可神乃御室登祝比初介牟

○　大伴坂上郎女祭神歌の返詞

巻三　木綿疊手に取持てかくたにも我はこひなむ君にあはすして

是も木綿もて織たる布をたゝみて手に捧て神に奉るなり

○

十九長歌　(※)木綿手次(タスキ)。肩爾取掛。倭文幣(シツヌサ)乎。手爾取持而。また巻三に木綿手次可比奈爾懸而とも有、ゆふたすきは木綿をもて襷にするを云、神官等か常にするもの也

頭註　(※)式曰、小齋親王以下皆青摺袍、五位以上紅垂紐、親王以下女孺以上皆日蔭蔓、又曰、神服宿禰一人當色木綿襷(タスキ)ニ日蔭蔓ト、手次ハ衣袖を約て事を使する者是を用ゆ、民間にも亦此手次を用ると同し
式ニ襷をタスキとす、疑クハ襷ノ字ノ誤カ、類篇ニ衣系ニ曰レ襷と有、又手襁モ同シク誤カ、前漢宣帝紀ニ曾孫雖レ在二襁褓一、李奇註襁ハ絡也以ニ繒布一爲レ之絡ニ負小兒トアリ

○夫木集永仁大嘗會歌天照す日影の手襁(スキ)かけまくも可畏(カシコク)守れ八十乃諸神

○

肥人(ウマ)の額髪ゆへる染木綿のそめしこゝろは我わすれめや、うま人は貴人なり、神代紀結レ髪爲レ髻なと有をおもへは、わか古へ男は髪を額にて結たりと見ゆ、多く紫の糸もて結ひしなるへし、古訓こま人と有からは肥は狛の誤か、さらは高麗人もわか古へにならひて額に結ひし故にいへるともすへし、本は染といはん序のみ、そめゆふは染たる木綿の糸也、古今集ニ濃紫わかもとゆひとよめる如く染糸也、即白ゆふを色々にそめたるにて今の水引ならんかとおもへり

○

巻六　泊瀬女の造る木綿花三吉野の瀧の水沫にさきにけらすや

たきり落る水の泡の木綿花の如く見ゆるを云、由不もて造る花の如くにと云也、又瀧川のむせぶにも海の波頭に

も見立て云也、木綿花は穀皮をさきて糸の如くせし也
また卷六に山高み白木綿花に落多藝追とも、卷十三に淡(※)海之海白綿花に浪立渡なとよめは木綿もて造れる花をいとめつる事ありてよめるをしるへし、また卷二に木綿花乃榮時爾云云 卷三にも眞木綿もてかづら結たりとありて木綿もて造りし花を髮にかけるは若く榮る女の體なり、又卷七に未通女等之放髮乎木綿山ともよめり

頭註 (※)相坂を打出て見れは淡海の海白木綿花に浪立渡る

○

卷三 奧山乃。賢木之枝。爾。白香付。木綿取付而 下略 千蔭云この木綿ハ白髮に似たる物なれは、白髮付と冠らせいひたり、付はその物に似付てふ語のみ、宣長說に集中三所に有に皆白香とのみ書て白髮と書る所なし、されは白髮の意にてはあらさるへし、白紙の意なるへし、奈良の頃より木綿にとりそへて白紙をも切かけてつけたりけん、されは白紙を添着るといふ意にてしらか付木綿と云なるへし、卷十九に四船早還來等白香蓍朕裳裾爾鎭而將待、この御歌は木綿にはあらてたゝ白紙なるへし、白紙をしらかといふは白髮の例に同しといへり、猶よく考へし

○

卷五 水沫なすもろきいのちを栲繩の千尋にもかとねかひくらしつ、栲をたくともたへともよめり、栲は楮の字の誤れるならんと翁云れき、古へは楮の皮にて布を織且繩なとにもせし也、網抔の繩には今もちうと也、卽其繩をたくなわと云へり

卷三 大伴宿禰三中長哥、上略 帶乳根乃母命者齋忌戸乎前坐置而一手者木綿取持一手者和細布奉、久老云祈年祭の祝詞に御衣者明妙照妙和妙荒妙爾稱辭竟奉牟といへり、和妙とは細なる布をいひ、荒妙とは荒き布をいふ言なれは、和細布の三字はにきたへとよむべきなり、絹をにぎたへ、布をあらたへとせるは後也、多倍は布帛の稱也

○

卷十三 白木綿之吾衣袖裳通手沾泥 卷一持統大御歌 白妙能衣乾有

卷九 白栲之我衣手者 十三 白細布飾奉而 此外卷三長哥に白妙之衣袖不干嘆乍吾泣淚 下略 白妙の衣は喪服なるべし、

巻二高市皇子ノ殯宮の時の歌に、御門乃人毛白妙乃麻衣着云云、白妙ノ麻衣著とも、白細爾舍人裝束而、又志路多倍乃多須吉乎可氣ともよめり、皆楮もて織れる布なり、それを本にて絹布の類にはすへての名とす、極て白き布なれは妙の字を書は義をかりてなり、妙の字に付てあやまれる説あり、用うへからす、眞淵云孝德紀に其葬時帷帳等用ニ白布ー以上右に同し王以下小智庶人云云可レ用ニ麁布ーと、喪葬令義解に錫紵者細布、云云同集解に不レ限ニ布麁細ー皂色布也と有を對て、布を多倍といふ事を知るへし、又古語拾遺に植レ穀造ニ白和幣ー植レ麻造ニ青和幣ーと有對へて、白妙は穀の皮もて造る布なるをしれ、多閇ノ反ハ丑也、故に和多閇とも和丑とも云穀をかちと訓は専ら紙に造る時よりの名なるへし、ゆふと訓は古語なり猶冠辭考に委し

○

巻二　神山の山の眞蘇木綿短木綿如此耳故爾長くと思ひき

木綿麻なと割て用るものを曾と云、其中にゆふをほめて眞曾といふ也、式にも木綿を貴み麻を賤しめり、短木綿云云は木綿は長きも短きもあるを、短を設出て此御命の短きによそへたまへり

頭註　(＊)梯云眞蘇木綿ハ眞苧ニテ作ル木綿ナリ麻ニテ作ルハ長木綿也、其苧ニテ作ルハ短木綿ナリ

佐宿木

巻十　(一)阿保山の佐宿木の花はけふもかもちりみたるらん見る人なしに

(二)佐宿木は巻十三に作樂花々々と書るをおもへは、こゝも作樂の二字なるを佐宿木の三字に誤つらん、さくらの花と有しこと明けしと千蔭いへり、

頭註　(一)略解ニ云、阿保山は山城の山崎のほりと伊賀の國とにあり、阿保氏の出し地なるへし
(二)出雲風土記栗島有ニ椊。松。多年木。小竹。眞埼木葛ー羽島有ニ比佐木多年木蕀頭蒿ー此多年木ハサネキト訓カ又タネキト訓カ何レナラン、物ノ多キコトヲ古言ニサハト云ヘハ、多ノ字ハ下一言ヲ略シテサノカナニ用シカ

賢木

阿波國人ハ、年ノ終ヲ大年ノ榊ヲ祭ル棚ヲ作ルニ、松ノワリ木ヲ以テスル家アリ、其ツリタル木ヲサイキト稱ス、即幸木ナリ、是モ幸サイ、サヘ、サキ、サチ、サカ、ト活クナレバ、ヤガテサカ木ト云ニ同シ下略

附箋 師の考に云、賢木ハ榮樹にてもと一樹の名にはあらすて、松杉檜なとの常葉なる木を神事公事に用ふるには、稱讃て眞榮樹といふなり、それが中に古へもはら坂樹とて用ひしは櫁なるべきよしいへり、（冠辞考に見えたり）是は倭建命の御歌に異能知能麻曾祁務比登波志邏迦之餓延塢于受珥左勢許能固、雄略天皇の大御歌に美母呂能伊都加斯賀母登加斯賀母登由々斯伎加母なとよませ給へる大御言によりてしかの給へりしなるへければ、さも有なんとおもひをりつるに、一とせ越後國高田なる日吉神社の社人猪俣茂吉がふること學せんとておのかもとにありつるをり、この榊の事をいひつるに、茂吉かいへらく、今神宮に用ひ給へる榊といへる木は、越の國にはなき木也といへり、故已とひけるは、しからは越の國にては何その木を坂木とはいへるぞと問に、今此所にて美者々木と（美者呉ともいふ）いへるは、吾邦にて神事に用ひ來れる榊也といへり、是そ神武天皇の御製に伊智佐介幾未廼於朋雞句塢云々とみよみまし〻なるべく、實の多けれは實榮樹といひしを、今は美者々木とも美者呉とも訛れるものならんとおもへりしに、本居氏の古事記傳に田中道麻呂か言をあげて榊の事をいへるも全く同しかりけるを、吾弟子西村重波か疑けるは、神樂歌に榊葉の香乎加俱波志美覓來連八八十氏人曾滿登比世利介流とあるに、貫之の歌にも、おく露に色もかはらぬ榊葉の香をやは人のとめて來つらん、（新古今集）源氏榊の卷にもをとめ子かあたりとおもへは榊葉の香をなつかしみとめてこそくれとあれは、必葉に香氣あるべきに櫁も今の榊も美者々木も葉に香氣たければ、古への賢木にはかなはすやといへり、是もひとつの考なるへくおもひて、今按を加るに、和名抄、新撰字鏡等に龍眼木の字を佐賀木に當たるは叶へりや、かなはしや、おほつかなければ、そはおきて、古へ佐賀木といへるは師の言の如く榮樹にて何にまれ常磐木を用ふるか中にもはら神事公事に用ひしは櫁なるへくこそおほゆれ、さるは卷廾に奥山乃志伎美か花乃とよみてかならす深山に生るものなれは、奥山乃賢木か枝云云といへるにもかなひ、和名抄に櫁は香木也とありて其葉香氣あれは榊葉の香をかくはしみと神樂哥にいへるにもかなへり、さて是をしも佛に貢るは元來神に奉るものなるもて、佛のわたり來し後其をうつして佛にも獻しか、（いにしへ佛をまつれる意今とは甚異なり、たゞ國家の泰平自らの幸福を祈れるためにして後世安樂を祈る意さらになし、されは神を祭るとひとつ意にて、神に奉る榮樹を佛にも奉りしもの也けり）

今はもはら佛のものとのみなりゆきて、神には他木を用ひしより櫁は花とのみ呼て、賢木の稱は失へるものたらんとおもへりしに、吾外宮神宮に十二月晦の夜小内人等花賢木か末爲ッ多と申て、玉串御門に（内ノ玉垣ノ御門ともいふ）奉れるを見れは、櫁にこそ有けれ、是をおもへは神武天皇の大御歌に伊智佐介佐未廼於明鷄句塢とよみまし〻は實賢木にて、（和名抄櫁比佐加伎とあるは是にや、比美と通へる例多し）美者々木をいひ、（實のいと多かるもの也）神宮に花賢木といへるは櫁をいふなるへく、（しきみの花のとよみたれはなり）いにしへの榊はもはら櫁を用ひしならんとはおもひなりぬ、（峯衣樹にいふ、丹後ノ國にては神に貢るは統て櫁にて、其をさかしばといふといへり、また或人伊豆ノ國箱根邊にても櫁を用ふといへり）

巻三 久堅之。天ノ原從。生來。神之命。奥山乃（二）賢木之枝爾

下略 古事記天香山之五百津眞賢木矣根許士而とあり、神代紀採二五百箇眞坂樹八十ノ玉籤一とある是なり、今伊勢太神ノ太玉串ト云ヲ見ルニ榊ナリ、和名抄楊氏漢語抄、龍(二)眼木佐加岐今按、龍眼者其子ノ名也、見二本草一日本紀私記云、坂樹刺立爲二祭神之木一、今按本朝式用二賢木二字一、漢語抄榊ノ字並未レ詳とあれと、新撰字鏡に榊梻梡の三字佐加木と訓よめり、本朝の作字也、又字鏡に杜毛利又佐加木とあれとも、ともに坂樹の漢名にあらす、(三)さかきとは榮木の略にして、神に木綿和幣なとを奉るを著る料也(四)、必す一種の木をさすにはあらされとも、今さか木といふ木一種あり、枕草紙にさか木は臨時のまつり御神樂のおりなと、いとおかし、よに木どもこそあれ、神の御前のものといひはしめけんもとりわきおかしといへり、其木は葉冬青に似て廣く長し、葉に光りありてうるはし、冬も凋ます、夏葉の間ことに花咲く形梅に似て小く色黄にして光りあり、(五)香氣つよし、其花うつむきてさく實は少く青し、熟すれは黑くなる、此實をもてから國にては飯を染ること、故に漢名爾雅に烏飯樹一名楊桐とあり、此考は蘭山翁の紊筵小牘に委し

頭註

○寶基本紀曰、受二自然正氣一冬夏常青、故衆木中以二賢木一爲二神木一、通證ニ引ケリ

(一)○賢木をさかきとよむは、賢ノ良をさがしとよむによれる假言なり

(二)○さか木を龍眼木とするはあてたかへり

(三)○神木仙覺榮木ト訓ス、サカエキノ義

(四)○古へさか木の枝に物をとりかけしは、几案の製いまたあらす、物を奉るに常磐木乃枝に掛てさゝけ奉し也、百取の机代として賢木の枝に物取掛る事後の物語にもをちこち見ゆ

延喜式に、楉机とて、黑木もて作れるは、故實にて枝にかくるによれるなるへし、今も神社の奉り物を黑木の机に供へまゐる事あり

(五)神武紀の哥に、伊智佐介幾未廼於明雞句塢とあるにて、今の榊なる事しるし

清正集に、榊葉のかをとめくれは千早ふる神のいかきにさしてきにけりとよめるも、榊葉の香にはあらで榊の花香をよめる事しるへし

神樹

ーーハ榊ノ字ヲ分ケテ神木トカケルカ、されハ神木をサカキと訓る義訓ナリ、仙覺モ神木をサカキと訓て榮木ノ義トス、續千載集ノ長哥ニ繚なる坂木の枝の立榮エト詠ルハ、榮木ノ本義也

巻四 神樹にも手ハ觸とふをうつたへに人妻といへはふれぬものかも

うつたへは打は詞、たへは堪の意にてひたすらにと云意にいへり、神樹はかみ木と訓へし、さか木とてはたゝ山に有さか木にまかひて、此哥に叶はすと宣長いへり

都萬麻

十七二上山賦一首此山者有射水郡也有て長哥返。之夫多爾能佐吉(シブタニノサキ)ありそによする波いやしく／＼に古へおもほゆとよめる處と同し、ともに家持卿の哥也

過ニ澁溪(※)ー見巖上樹歌一首樹名都萬麻

十九 磯の上の都萬麻を見れは根をはへて年深からし神さひにけり

いそとは石をもいへと、こゝのいそのうへは磯のあたりを云、つまゝいまた考へす、樹名と注あるからは越にのみ有木と見ゆ、年深からしは巻三にふるき堤の年深みとよみて年久しきを云と千蔭云へり、國人うまめと云木あり、又むまめがしとも云、其木好て海邊の岩上に生る、根をはへてなとあるによくかなへり、此木の根はことにあらはれ出てそのさま異なるあり、注に見巖上樹と有からは近からん、されとより所なけれは定めかたし、葉は濱ひさか木と云ものに似たり、花は橿(カシ)に似て小なり、其材甚かたし、薪となすによしといへり、又あこうと云木あり、漢名榕樹と云、國人はむもれ木といへり、これも岩上に長き根を打はへ岩をまとひて生ひけれとも、雪をいたく恐るゝ木なれは彼國にありともおもはす

頭註 (※)越中に澁谷の濱、澁谷の磯又崎なとよみ合たる哥あり

附箋 つまゝの木の哥夫木抄にもあり、おのれはやくより心にかゝりて考れど、思よりしことなし、猶遠き國に古名の殘りしもやあらん

黄葉

モミチトハ本語モミダシナルヲ、タシヲ約テモミチト云、陽氣(ヒノキ)陰中(ミツノ)ニ舫テ紅ノ色ヲ採出スヲ云、夕日に空ノ丹(アカキ)モ同、故ニ諸木モミチセサルハナケレトモ、能ク染ルヲモテ楓(カヘテ)ニ名ヲナス、紅ニ染タル絹ヲモミト云モ此義ナリ、俗ニ糖袋ヲモミヂ袋ト云モモミタシ袋ノ義也

巻八 美酒を三輪のはふりか山ひかる秋の黄葉ちらまくをしも 長屋王

同 經もなく緯もさためす未通女らか織黄葉に霜なふりそね

同 吾屋戸に黄葉蝦手見ることに妹をかけつゝこひぬ日はなし

同 吾屋戸の芽子の下葉は秋風もいまたふかねはかくそ毛(モ)美照(ミテル)

十 秋されは置しら露に我門の淺茅かうら葉色付にけり

高敷のうへかた山は紅の八鹽の色になりにけるかも 小判官

足曳の山下ひかる紅葉のちりのまかひはけふにもあるかも

巻十三に秋の赤葉眞割(モミチバマ)持る(キモタル)とも又、秋付は丹之穗に黄色(モミツ)

味酒乎とあり、集中に(一)黄葉と書て毛美治婆とよめるは正訓なり、同し黄葉の字を毛美豆毛美治なと訓は畧なり、専ら黄葉と書れとも、又赤葉と書し所もあり、紅葉と書しは只一首のみ也、毛美照はもみちせるを約言へるなり、治世の約め泥なれはなり、すへて古へ黄葉とよめるは草木の赤出を略きて毛美豆とよめる也、紅出の意にて黄の字にあたれり、なへては蝦手の黄葉をよめり、かへては種々の木よりもみつる色の殊にしあれは今の世にはもみちといへは蝦手のことさへなれり、集中に其名をさしてよめるははつかに蝦手、楓、妻梨、芽子、淺茅、澤蘭、安可良我之波の六七種に過す、後世黄葉を賞してよめるものあまた也、柞、はじ、櫻、眞弓、柿、ぬるで、蔦のたくひ猶多し

頭註 (一)集中に加敝流弖ともよめり

(二)後撰集、秋、かり鳴て寒きあしたの露ならし立田の山のもみだす物は、注にもみちとは紅ハ揉出して染る物なれはもみ出しの約言なり、されはもみだすものはと訓へしと翁はいはれたり、云云 萬葉八ニ吾宿の芽子の下葉ハ秋風もいまたふかねばかくそ毛美照と云もあり、又かくばかりもみづる色の濃けれはや錦たつ田の山といふら

ん、友則、錦をたつといふはたゞ截のみをいふにはあらす、俗に云爲立る事也、此哥なるもかくはかり他に勝りて紅葉の色こきゆゑにや錦爲立の山といふらんと、云意なるへしと甕磨いへり

母智

巻五 世の中はかくそことわり母智とりのかゝらはしもよ、云云 また巻十三にありたてる花橘を末枝に毛知引懸仲枝爾伊加流我懸、云云 毛知鳥の事は古へあまたよみたり、もちは本草枸骨の條下に粘黐とある是なり、もちをとる木は種々あり、その木を後の歌にもちの木とよめり、漢名は冬青と本草にあり、實の色赤くてりて美しきものゆへ庭に植るもの多し、又別にとりもちの木と云あり、その葉冬青より廣くして薄し、その木の皮を剝取て水に漬置て腐るころ搗て黐膠に作るなり

楚樹 楚樹ト萬榜ニ出セシヲ思ヘハ本書ヲ校合スヘシ

巻一 長哥 隱口乃。泊瀬山者。眞木立。荒山道乎。石根。楚樹押靡、下略 しもととは繁本の略にて弱き木立の茂きを云、本とは木の事也、さて其茂き若木ともを押なひかし行さまを云、古今ニしもとゆふかつらき山にふる雪のまなく時な

くおもほゆるかなと云もおなし、眞淵云若木の茂く生ひたる共しもとを伐て薪にせんとて藤葛(カツラ)をもてゆふ也、此意もてかつらき山にしもとゆふと冠せたりとそ、今阿波の國にて細き竹のいや生ひたるをしもと竹と云、是も古言の殘れる也、楚樹とかけるは毛詩に揚之水不レ流(レル)ニ束楚一と云楚に同しく小木を云なり、萬梯楚樹(ニハフセキ)ふせきは舊說にふしたふれたる木也といへり、又さへ木(サヘキ)とよめるは自閑の說にて、道にさゝへたると云心也

爪木

磯の上に爪木折たきなかためと吾潛來し與つしらたま

爪木は物の端をつまといひて小枝を云、又爰に書る字の意にて指先にて折斗の細き木をいふへし、白玉は鮑也、鮑とる海人か海を出れは必燒火して身をあたゝむるとそ

埋木

巻七 眞鉋(マカナ)もて弓削(ユケ)の河原の埋木(ウモレキ)のあらはるましきことにあらなくに

〔三〕埋木も終にあらはれさらんともいふへからぬをもて吾中にたとへたり、埋木は唯久しくうつもれたる木なり、谷の埋れ木なともいへり、古今になとり川瀨々の埋木あらはれていかにせんとかあひ見そめけんとよめり、丹後及ひ若狹の海邊には土中より堀出す木あり、色淡黑し、筥根の湖よりもいたすを俗に神代杉と云、漢名老杉と物理小識に出たり、これら皆埋木なり、此外國々より出る所多し

頭註 (*)ウツムレ木ノ略なれはムモレキと書へからす

黑木

巻四 板蓋(イタフキ)の黑木乃屋根は山近し明日しも取て持てまゐらん 家持

同 黑樹とり草(カヤ)も刈つゝつかへめといそしきわけとほめんともあらす

巻八 波太須珠寸尾花逆葺黑木もて造れる室は萬代までに 元正天皇

同 靑によし奈良の山なる黑木もて作れる屋とはませとあかぬかも 聖武天皇

黑木は皮の付たるを共儘用ふる也、黑木の屋根とは續紀に、神龜元年十一月、太政官奏言、云々 其板屋草舍中古遺制難レ營易レ破といふことあれは、其比は專ら板屋根也、江家次第の卯杖の條に、大舍人進ニ御杖六十束一とあり、

その六十束は式云曾波木二束比々良木、牟保許、棗、桃、栢、各六束已上一株爲レ束、燒椿十六束皮椿四束黑木八束已上四株爲レ束とあり

芳

詠　芳

巻十　高松（タカマト）の此峰もせに笠たてゝみちさかりなる秋の香のよさ

峰も迫（セ）きまて香草の長高く多く生たるを笠立といふか、今俗にもかさ高なといへり、和名抄芸久佐乃香香草也とありと翁はいはれき、宣長云、はし書に詠レ芳とある芳の字は茸を寫しひかめたる也、さて此歌は松茸をよめるにて有けり、此哥杯より外に物の香をめてたる哥は見えす、にほひと多くよめるはみな色の匂ひにして鼻にかゝるゝ香にはあらすといへり、按に和名抄菌茸爾雅注云、菌有木菌土菌石菌和名皆多介狀如二人ノ著一レ笠者也と見ゆ、げにも松茸は秋生るものにて香ことに深ければよくかなへり、拾遺集にも物名に松茸をよめる歌あり、兩說何か是ならん

竹　類

竹

巻五　梅の花ちらまくをしみ我園の多氣乃波也之に宇具比須鳴も

十九　御苑の竹の林にうくひすはしはなきにしを雪はふりつゝ

和名抄四聲字苑云、竹和名多計草也、一云(*)非草非木と云は、竹譜に竹性不レ剛不レ柔非レ草非レ木と云により、草也と云は山海經に竹を以て草とするによれり、誠に竹は剛なる如くして柔なり、柔なるか如くにして剛なり、さるを君子の德に比して稱するなり、そかうへに筍の地を出て日數いくはくもあらすして長高くなること外に比すへきものなきゆへに、古人も植ものゝもとも靈なるものなりといへり、されは竹を人の齡の長きに譬へてよめる哥多し

巻四　神南備（カミナビ）の淺小竹原の美妾（ウツクシミ）しぬへる君か聲のしるけく

頭註　(*)古今集に、木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしたに我はなりぬへらなりとよめり

附箋　飛鳥の神南備山の邊の篠原也、淺小竹原は小篠原也、淺茅（チ）淺葱（ツキ）なとちひさき事をも淺といへり、小さゝの中に交り生たる

女郎花の見分がたきをしぬふに譬へ下して、さて人にしぬびて心になつかしむ君か友の中たとに在て物いふ聲のいちしるく聞ゆるを頻になつかしむなりと眞淵いへり

竹玉

附箋 竹玉 もとは神代紀にいへる野槌者採五百個野篶八十玉籤云云と有て、玉を緒に貫て小竹に付て神を齋ふ事に用ひたるならんを、やゝ後に成て玉の代りに竹をくだの如く切て緒に貫けるなるへし、竹玉を八十玉ぐしの事としては、其竹に付けたるを竹玉をしゞにとはいひがたし、其竹玉はかくの如くつらぬきたるなるへしと宣長いへり 

巻三長哥 いはひへをいはひほりすゑ竹玉をしゝにぬきたれ 坂上郎女哥

巻十一 刺竹のはこもりにたる吾せこか吾かりし來ずは我戀めやも

又刺竹の大宮人、また刺竹の舍人壯もなと數多つゝけたり、刺竹は立竹也、古事記に夜久毛多都伊豆毛と有を此集に八雲刺出雲とかきたるにて、刺も立も同し事にて生立てあるを云也と眞淵いへり、又萬葉考に云、巻三刺所燒少屋之四忌屋尒云云とある刺所燒は、小竹を燒てふ意にて、小竹を燒は山方の賤屋のさまなれはさる賤屋をいはん爲に先いふ也、かくて小竹を佐須と云は佐は阿佐の略、須は志奴の約にて、淺篠てふ事也、刺竹の君てふ冠辭の考をも此度かくの如くあらたむるとそ

頭註 (※)眞淵云、刺竹の刺は借字にて淺篠竹てふ事也、篠は本も葉もことに繁くこもれるをもて、葉隱にて有といひて、ふかく人目忍ひ隱するに譬へたり

刺竹は篠竹の通言ともいへり

○巻十四 宇惠多氣能もとさへとよみ出ていなはいつしむきてか妹かなけかん

神代記に所植此云多底婁とあれは、刺も宇惠も古へはおなし事にて、生ひたちてあるをいふとそ

○巻十 吾屋戸のいさゝ村竹吹風の音のかそけきこのゆふへかも

村竹はむらかり生たる竹を云也、和名抄切韻云、篁（和名太加無良 俗云太加原）竹叢也とあり、竹村といふも同し事なり

奈用竹

梯云、なゆ竹ははかなげなる竹をいふとふ、よるはたわみよる也、かよはき女の有様也

巻二 秋山下部留妹。奈用竹乃。騰遠依子等者。巻三名湯竹乃十縁皇子、巻十四にも奈湯竹と有、こは女のたをやか

なる姿を萎竹にたとへたり、なゆ竹は女竹にて是を皮竹ともいふ、ことになよゝかにたわめはしかいひ、（なゆなよ音通へり）且とをよるもたをやかてふに同しくて、共に音かよへりと眞淵いへり、古今、なよ竹のよなかきうへにはつ霜のおきゐて物をおもふ頃かなとよめるに同し、和名抄長間筍（今案和名之乃女）筍青最晩生味大苦也とある是なり、今國人もなよたけ又なへたけとも云、又俗にをなこ竹をとこ竹と云、其女竹は卽なよ竹なり、男竹と云は漢名苦竹也、苦竹、淡竹の類は筍秀ぬれは皮脫おつるになよ竹はいつ迄も皮付て有故に皮竹と云へり、是を河竹と書は借字なり、和名抄辨色立成云、苦竹（加波多計）本朝式用河竹二字とあるは誤れり、漢名の苦竹はまたけ也、和名に苦竹と云はなよ竹也、なよ竹は未た漢名しれす

附箋 學圃雜疏云、竹之僅可爲篾者曰篾竹

頭註 ○篾（竹ノ皮）（※）徒然草にも、呉竹は葉ほそく河竹は葉廣し、御溝に近きは河竹、仁壽殿のかたによりてうゑられたるは呉竹なり云云

小竹　日本紀一書篠小竹也、此云斯奴（一）

巻七　かくしてや猶やおひなんみゆきふる大荒木野の小竹ならなくに

同　淡海のや八橋の小竹を矢はかすてまこと有えむや戀しきものを

十　打なひく春さりくれは小竹のうれにを羽うちふれて鶯鳴も

和名抄篦（和名乃）箭竹名也、また別條に篠（和名之乃一云佐々俗用細小竹二字謂之佐々）細竹也とあるによれは、（二）今云やだけ也、卽本草に箭竹と見えたり、なよ竹に似て細し、葉はくまざゝの葉に似たり

十四　うまくたのねろの篠葉の露霜のぬれてわきなは汝はこふはそも

頭註 （一）眞淵云、小竹はしなべる物なれはしぬといへり
（二）矢橋の小竹なれは、矢に造へきを、はかぬといふに、我領すべきに定りて有なから、領し得ぬを譬へたり

小竹葉

巻二　小竹葉はみやまもさやにさわけども我は妹思ふ別れ來ぬれは（人麿）

巻九　やまとには聞へもゆくか大家野の竹葉苅敷廬せりとは

二十　小竹の葉のさやく霜夜になゝへかる衣にませるこらか
膚はも

前條にひきける和名抄の說によりて見れはこれも矢竹の事なり、後の歌に玉篠とよめるは丸らかに繁くこもりて庭なとに生ひたるをいふへし

水篶

巻二　水篶苅信濃の眞弓わかひけは宇眞人さひていなといは
んかも

同　三篶苅しなの、眞弓引すしてをはぐるわさをしるとい
はなくに

こは眞篶を苅野とつゝけたり、荷田大人云水篶は眞すゝ也、（水は借字実と眞とはことに通へり）神代紀に使山雷者採五百箇眞坂樹八十玉籤、野槌者採五百箇野篶八十玉籤云云これによるにすゝてふ小竹をかる野とつゝけしもの也と、こは古意也、篶はしのめ竹の類にていとちいさくて色黑き竹也、それを阿波土佐なとの國にては須々といひ、野須々とも云、東の國の山邊にては矢竹をもしかいふものゝあれと猶別也、後世の歌に吉野の嶽にすゝ分てとよめるもかの野篶也

湯小竹

湯は湯津楓湯津岩村なといふ湯に同しくて、五百枝杯書ル五百の略きにて、繁きをいひて小竹のしげきをいへるなるへし

巻十　はなはたも夜ふけてなゆきそ道邊行湯小竹の上に霜の
ふる夜は

ゆさゝは今俗にゆきさゝと云ものあり、それなるか（さに非す）、葉箬に似て狹く葉の邊眞白し、ゆへにやきばさゝとも云、多く生ひたる所は雪のふりかゝれるか如し、こは漢名本草の竹乃條下載する所の山白竹なり

頭註　（※）古今集、さゝのはにふりつむ雪のうれをおもみもとくたち行我さかりはもとよめるも相似たり

辟竹　此一條ハ刺竹の次に入るへし

巻七　吾せこを何處ゆかめと辟竹の背向にねしく今しくやし
も

辟竹は破れる竹なり、背向はうしろむきと云に同し、さきとそかひと語の通へは、重ね冠らせたり、語の通ふとはさとそは本よりにて、幾も加比反なれは、さきと曾我

比と通ふ也と眞淵云へり

笶　巻十に足日本笶と、のゝ假字に用ひ、後世の言にも笶ふかに射るなといへは、のは矢の莖をいふ也、和名抄に笶ハ夜とあり

萬葉集名物考

日本紀一書曰、是時素戔嗚尊下ニ到安藝國可愛之川上一也、彼處ニ有レ神名ヲ曰ニ脚摩手摩一、其妻名曰ニ稻田ノ宮主簀狹之八箇耳一、此神正在ニ姙身夫妻共愁、乃告ニ素戔嗚尊一曰、我生兒雖レ多、毎レ生輒有ニ八岐大蛇一來呑、不レ得ニ一存一、今吾且レ産、恐亦見呑、是以哀傷、素戔嗚尊乃教レ之曰、汝可下以ニ衆菓一釀中酒八甕上、吾當ニ爲レ汝殺レ蛇、二神隨レ教設レ酒云云

萬葉名物考目錄

鳥類　五十一種

鸎　春鳥　比波理　百鳥（イホツトリヲ此間へ入）　千鳥　百千鳥　呼兒鳥　貌鳥
伯勞鳥　伊加流我　○此米　○阿等利　燕　○奴要鳥　霍公鳥
雞　鴉　山鳥　鷹　白大鷹　鷲　鴫
○美夜故杼里　鴨妻　千鳥　○二寶鳥　也左可杼利　鶴　雁
歸鴈　鴈乃兒　鴨　安治　高部　○秋沙　○志長鳥
男爲鳥　鷺　水鳥　大鳥　渚鳥　菅鳥　伊保都登里
朝鳥　村鳥　坂鳥　放鳥　母知鳥

萬葉集名物考 目錄

鳥 類

(一)鶯

巻八 百濟野の萩の古枝に春まつとをりし鶯鳴にけんかも 山部赤人

同 足曳の山谷こえて野つかさに今は鳴らん宇具比須のこゑ 同

同 打きらし雪はふるともしかすかにわきへの園に鶯なくも 大伴家持

この打きらしのうちは詞、きらしは霧を延たることにて、くもり隔るの意也、しかすかには然しなからになり、さすかにといふもおなし、わぎへは我家を約言なり、さてうくひすは和名抄鶯漢語抄云春鳥宇久比須(二)春鳥也とあり、然れとも鶯の字は今歌によめるうくひすにあらす、歌によめる所のうくひすを、から人は柴鷯鴝といふよしなれとも、唐文にも見えさりき、鶯の字は俗にからうくひすとも、朝鮮うくひすともよひて、わか國にはをらさる鳥なり、稀に唐人の携來れる見るに、大さ伯勞ほとありて立春より必す鳴といへり、格物論に鶯大勝鸜鵒黒眉嘴尖紅脚青遍身黄色羽及尾有黒毛相間三四月間鳴聲圓滑とあるにあへり、筑紫の澳に蛇の島といふ小島ありその嶋は朝鮮に近き地なるかゆゑに、此鳥たま〳〵來る事有とそ

頭註 (一)契沖云、ウクヒスハ愛作巣の意ニ名付ル歟、鳥ノ中ニ鶯ハ殊ニウツクシク巣ヲクフ物ト云へり
(二)巻二長哥に春鳥のさまよひぬれは云云、春鳥は枕詞、うくひすのとよめるはわろし、さまよひぬればゝさまよひぬるにといふ意也、さまよふは紀に吟の字を書て、なげき呼ふ意也

比波理

巻十九 うら〳〵に照る春日に比波理あかり心悲しも獨りおもへは 大伴家持

巻二十 比婆利あかる春へとさへになりぬれは都も見えす霞たな引 大伴家持

和名抄云雀似雀而大和名比波里楊氏漢語抄云、鶬鶊とあり、然れとも其形雀に似てやせて頭に冠毛あり、早春にみ空高くあかりてなく、又冬の内にても風なくてうらゝかなる日は鳴ことあり、漢名は常熟縣志に嘆天と書たり、又一名告天子ともいへり

百鳥

巻五 梅の花今さかりなり百鳥のこゑのこほしき春來るらし

巻十八長歌 きこしをす國のまほらに山をしもさはにおほみと百鳥の來ゐてなく聲春されは聞の悲しもとありて、春は萬の鳥のおもしろく囀る物なれはかくよめり、百鳥といふも百千鳥といふも同し

後 千鳥

千鳥は鳥の數多きを云也、數鳴はしば／＼鳴也

巻十一 明ぬへく千鳥數鳴白栲の君か手枕いまたあかなくに

巻十六 吾門に千鳥しは鳴起よ／＼我一夜妻人にしらゆな

此二首の哥なとは夜明てくさ／＼の鳥の鳴をよめる也、百鳥とよみ千鳥とよめるも字の如く數多の鳥なることをしるへし、百千鳥とたゝみていふ時は、百を捨てたゝ千鳥とのみいふ也

巻三 吾せこか古家(フルヤ)の里の明日香には乳鳥鳴也君まち不得而(カネテ) 長屋王故郷歌

此乳鳥も千鳥に同して、乳は借字ナリ、故郷の人けなきさぶしき屋戸の木立に千鳥の鳴をるさまいとあはれ也と久老いへり

先(＊) 百千鳥

巻十六 吾門の榎の實もりはむ百千鳥千鳥はくれと君そ來まさぬ

もりはむは其實の所をはなれす守りゐてついはむ也、此百千鳥も字の如くたゝ多くの鳥をいへり、五百つ鳥とよめるも同し、百千鳥はと再ひ重ねいへるにて、もゝちの鳥なる事を知るへし、別に百千鳥といふ鳥の名あるにあらす、さて百千鳥といふにさま／＼の說ともあれとみな古に跡なきつくりことなり、ゆめ／＼信すへからす、春は萬の鳥のおもしろく囀る物なれはしかよめるなり、此哥ともをよく心得てまとふことなかれ

頭註 (＊)顯昭云、百千鳥は百千の鳥といふ事也、もゝ／＼の鳥をいふへし

(二) 呼兒鳥

十 春日なる羽買の山ゆ佐保の内へ鳴(こ)ゆくなるはたれ喚子鳥

十 朝霧にしぬゝにぬれて喚子鳥三船の山ゆ鳴渡る見ゆ

卷八 神なひのいは瀬の山の呼兒鳥いたくな鳴そ吾戀まさる 鏡女王

卷十 吾せこをなこせの山の喚子鳥君よひかへせ夜のふけぬとに

眞淵云、呼兒鳥は集中にもはら春夏よめり、そか中に坂上郎女の世の常に聞は苦しき喚子鳥音なつかしき時にはなりぬとよめるは、三月一日佐保の宅にてよめるとしるしつ、げに山の梢やう／＼青みたち霞のけはひもたゝならぬに、これか物ふるく鳴たるはなつかしくもあはれにもものに似すおほゆ、それより五月雨るゝ比までもことにあはれと聞ゆめり、さて鳴聲ものをよふに似たれは、呼子鳥といひ、又其聲かほう／＼と聞ゆれは集に容鳥ともよみたり、ゐ中人のかつぽうとりと云、即是也、かんこ鳥てふも喚子鳥のよこなはり言也、同し鳥をさま／＼に名つくるは常のことにて、此鳥萬葉に多出て何の疑もなきに、後の世の人は古今集の哥一ッを守りてひかこといふめり、こは何この山方にもあれと、下つふさの國にて何とかや藥にすとてとれるを見しに、凡は鳩にゝて頭(カシラ)より尾かけてうす黒也、腹は白きにいさゝか赤き氣有て

雀鷹(スヾミタカ)のはらさまなるかた有、背は鳩のことして少しく長くうす黒し、足はうす赤にて鳩よりも高しといへるは、本艸啓蒙に云、鳲鳩(三)カッコウドリ、カンコドリ、カッポウドリ、(水戸)一名郭公鳥(戦雅 漫筆)布谷、(通雅)秸鞠、(埤雅)護穀(曲禮便覽)此鳥四月時分ニカッコウト鳴ク、聲甚高ク淸ミテ山谷ニ震響ス、即郭公ト自呼フナリ、俗誤テカンコドリト呼フ、此鳥深山ナラテハ居ラス、故ニ俗諺ニ幽閑ナルコトヲカンコドリ鳴ト云フ、然ルニ古ヨリホトヽギスヲ郭公ト書ハ非ナリ、鳲鳩ノ形鴿ニ似テ大サ鳩ノ如シ、尾長ク目ハ鷹ニ似テ淡黃褐色ナリ、郭ハ淡赤ニシテキザアリ、背黒ク下ノ本黃色末尖リテ鳩ニ似ス、脚ハ黃色ニシテ赤皺アリ、其指前ニ後ニソノ爪尖テ黒シ、全身黒文灰黒雑ル、吻ト腹ハ淡黃ニシテ白黒文アリ、喉下ハ微ク淡黒ヲ帶フ、尾ツヽ赤褐色ニシテ、端淡靑色、尾ハ灰赤ニシテ白點アリ、尾ノ端白シ、農夫此鳥ノ鳴ヲ聞テ豇豆(サヽゲ)粟(アハ)等ヲ下種スルノ候トス、云云とあるにあへり、又同し條下に、鳲鳩ヲツヽドリト訓スル説ハ非ナリ、(四)ツヽドリハ(古名)フヽドリ(和名抄)一名ナハシロドリ(播州)ムギウラシ(土州)スミダドリ

豆州駿州鳴時田水清故也　ヨブコドリ　古歌　大サ鴿ノ如背黒ク小白點アリ、鳴聲竹筒チタヽクガ如シ、かゝれは鳲鳩と呼兒鳥(五)とはことにして、こゝにふゝとりといふものはその形大かた相似て、鳴聲竹筒をたゝくか如きものは何れをさすとも知りかたし、和名抄鴶鵴和名布々土利布穀也とあれは、眞淵の説の如くふゝとりは鳲鳩とおなし、獨り蘭山翁のみ殊なり

頭註　(一)巻一　倭爾者鳴而歟來良武、呼兒鳥象乃中山、呼曾越奈流

(二)鳴行又鳴渡るとよめるを思へは、雁の鳴渡るか如きさまに聞ゆれは、喚子鳥はカツポウ鳥にはあらす、別なるか、カツポウにては鳴渡るとよめるに叶はす、猶よく可考

(三)毛詩注云鳲鳩、秸鞠也、鳲鳩之養其子朝從レ上下暮從レ下上、平物如レ一

(四)都々鳥は寂蓮の歌に、是も又さすかにものそあはれなるかた山陰のつゝ鳥の聲、とよめり

(五)第三、山部赤人登春日山作長歌

春日を春日の山の高座之御笠の山に朝さらす雲ゐたな引容鳥の間なくしば鳴、云云久老云、今かつほ鳥といふものにて喚子鳥といふ是なるよし、師說（眞淵也）に詳

貌鳥

巻十七 長歌上略　山びには櫻花ちり可保等利のまなくしばなく春の野に須美禮をつむと白妙の袖をりかへし云云

巻十　容鳥のまなくしは鳴春の野の草根のしけき戀もするかも

同巻　朝井代(一)に來鳴杲鳥汝たにも君にこふれや時をへすなく

略解に云、ゐでは堰留なる事既にいへり、されどこゝに堰をいふへくもなし、はた朝の詞もいかゞ也、此下にも朝戸出之といふ語あれは、こゝは井は戸の誤にて朝戸出になるべし、杲音高にてかほのかなにかりたり、皃鳥既に出時終す鳴は鳴やますして頻に鳴をいふ、吾夫を戀ふるか如く汝すら戀れはにや頻に鳴といふ也

巻六に櫻花このくれがくり貌鳥はまなくしは鳴ともよめり、貌鳥杲鳥なと書しは字の訓を借しのみ也、集中に見之欲てふことを見容之とも、見容石とも書るをむかへて知るへし、容の字に付て(二)かほよき鳥そなといふは例のことにていふにも足らす、此類のひかこと猶も有、みなしたかふことなかれ、容鳥は呼子鳥の一名なりと眞淵はいはれき、呉竹集にかほ鳥は翡翠の事なりといへり、藻鹽草にかほよとりは魚狗のことなりとも見えたり、夫木、家長の歌に、武庫川に跡もとゝめぬかほよ鳥いくるも見えぬ五月雨の頃とよめるは魚狗をさすにも似たり、朝井

代に來鳴某鳥とよめるによれは魚狗なとの類ならん、堰(イテ)、武庫川(ムコカハ)なと水邊なれは也けり

(二)井代ハ堰留(セトメ)の事也、今も俗に流れをせきて水をたゝへたるをゐてと云

(三)八雲御抄に、貌鳥は定家卿も不知之、たゝうつくしき鳥也といへり、眞淵、呼兒鳥の一名なりといふも、據なけれはうけかたし

貌花と同しくたゝうつくしき鳥をいふ也とそ

六帖、夕されは野へになくてふ貌鳥のかほに見えつゝわすられなくに

夫木、靑羽山木の下かけに貌鳥の見えかくれせし聲のかなしさ

伯勞鳥

爾雅、鶪伯勞也、注引春秋傳曰伯趙鶪也、以二夏至一來冬至去、云云月令仲夏之月鶪始鳴是也、〇杜註云、伯趙伯勞也、以二夏至一鳴冬至止是也

附箋　萬葉卷四

春日山霞たなひき情具久(コヽログク)てれる月夜に獨かもねん　この具久(グク)とはふくむ心なりと契沖は尺せり、古事記上卷に多邇具久(タニグク)あり、祝詞には谷蟆(タニグク)とかけり、是を宣長ぬしは谷くゞりの義なりといへり、しかるに潛(クヾル)は下のくを濁る語なるに、上を濁り下を濁らさる事をたやかならす、されはくゞるの義にはあらてかの情具久(グ)の具久なる事明也、具吉は久をかよはせて體になせる詞也との故に、谷具久は蝦蟆の谷にこもりをる物なるよりの名なるへし、草具吉は伯勞鳥の草にこもりをるをいふなるへしと御杖か說也、北邊隨筆に見えたり

卷十　(一)春されは伯勞(モズ)鳥の草具吉(クサグキ)見えねとも吾は見やらん君かあたりは

同　秋の野の草花かうれに鳴百舌(モズ)鳥の聲聞らんかかた時吾(ワ)妹(ギモ)

和名抄云、鶪一名鸐 楊氏漢語抄云伯勞毛受一云鵙 伯勞也、日本紀私記云、百舌と見ゆれとも伯勞と百舌とはことなり、本草にも伯勞と百舌とは別に條を出せしをもてことものなるをしるへし、袖中抄顯照說に、草具吉は草くゝり也といへり、古事紀集二御力之手上一血自二手股一漏出(クキデ)、云云訓レ漏云二久伎一と有に同し、くゝるは後のくを濁れと、古へはすへて淸てとなへし見ゆ

卷十七　足引の山邊にをれは霍公鳥木の間多知久吉(クキ)鳴ぬ日はなし

卷十九長哥　はる／＼となく霍公鳥立久久(クク)等羽觸(ハブリ)にちらす藤浪の花なつかしみ云々とあり

同卷　山振のしけみ飛久久鶯の聲を聞らん君はともしも

とよめるも同し、立久吉はたちくゝり也、飛久久もとひくゝりなり、くきとくゝとは同詞と聞えたり、さて伯勞は秋蕎麦の花さく時に鳴也、其聲高くして喧し、よく小鳥をとりて食ふ、又野鼠をもとる也、常にいなこ、雨蛤、石龍子のたくひをもとりて、己かゑにあける時は其ものを木の枝に串ておけり、此を俗に(二)もすの草ぐきとも、もすのいけにへとも、もすのはやにへともいへり、顯昭の說の如く草木の間を飛くゝりて其ものを尋ねもとむるを伯勞の草くき見えねともとよめるかも

頭註

(一)年山打聞に鵙は春と夏との始には鳴す、鵙の草くゝることは見えすとも、我は件かあたりを見やらんと詠るは、彼は見えすとも親切にいはん爲にまふけてよめる哥也、云云已上御釋の要をしるすとあり

(二)伯勞の草にへの事、昔霍公鳥は沓ぬいにして有けるか、鵙其沓をとりてかへさゝりしかは、其かはりに霍公鳥のために蟲蛙やうのものをとりて草の莖にさしはさみ置とそ、是を鵙の草くきともはやにへともいふと云へり、菅家萬葉集に郭公鳴立春之山邊沓直不輸人幾住鵙、かゝれは古きふみには是を證とすへし

袖中抄に、無名抄に云もすの草くきは、云云或萬葉抄云、もすの草くきとは古への人の云傳へけるは、もすと云鳥は郭公の沓手をとりて有けるか、えあさりける時に、ほとゝきすのくゝる種にはもすのはやにへと云事をして、とうつの草のくきにいきたる蟲もしはかへるなとをとりてさして時鳥のためにとてかくるを百舌鳥のくさくきとそ云ける、

今云、萬葉の哥に付て今案鵙此哥の心はもすは春前は夏のはしめにはなかす、されは月令には五月せつに鵙はしめて鳴とも注せり、郭公にしのふ也、されは春は鵙の草くゝる事見えすとも、我は君かあたりを見やらんと詠るは、只見えすといはんことを證をとる也、古哥の躰皆如此か云云

伊加流我

紀曰、舒明天皇十一年己亥冬十二月己巳朔壬午幸于伊豫温湯宮云々、一書云是時宮前在二一樹斑鳩此米一鳥大集、時勅多掛二稲穂一而養之といふこと見ゆ

十三長哥 近江之海、泊八十有、八十島之、島之埼邪伎、安利立有、花橘を、末枝に、毛知引懸、仲つ枝に、伊加流我かけ、下つ枝に、比米をかけ、已之母乎、取久乎不知、已之父乎、取久乎思良爾、阿蘇婆比座與、伊加流我等比米登

毛知は黐なり、卷九母智騎利乃可々良波志母與とも有、さていかるかとしめの二つは枝にかけ置て媒鳥とする也、をりが母父をとるをもしらす、遊ひをるといへり、とるを延てとらくといひ、遊ひを延てあそばひといふ

十二 斑鳩の(二)よるかの池のよろしくも君をいはねはおもひそ我する

和名抄鵤〈和名伊加流加〉貌似鴿而白喙者也、兼名苑注云、斑鳩〈和名同上見日本紀私記〉鴲大尾短者也とあれとも斑鳩をいかるかと訓するは誤れり、斑鳩は今俗にしゆつかけばと又はとしよりこひとよふものにしてことなり、いかるかは今も筑前にていかるかとよひ、周防石見にてはいかるごといひ、出雲及ひ水戸にてはいかるとよへり、是皆古き名の殘れるなり、阿波にてまめまはしとよふ鳥あり、即此集によめるいかるかなり、著聞集に二條中納言宣高卿いかるかを家隆卿のもとへ送るとてよめる歌に、いかるかよまめうましとはたれもさそひしりこきとは何をなくらんとあるをもて、いかるかまめまはしなる事をしるへし、其鳥は深山に棲て秋冬の間里に來る、形鳩よりは稍小にして鴲太く短くして色黄なり、すへての羽色はねつみ毛にして項のみ黒く翅のはしも黒し、漢名は本草に桑扈(二)、詩經に桑扈とあるにあたれり

(一)内可(コルカ)ノ池(イケ)の池は大和の國平群郡なるへし、推古記興二宮室於斑(イカ)鳩(ルカ)一と有、法隆寺の古名斑鳩寺(イカルカテラ)といへは此所なるへし

(二)食鳫、時珍曰、處々山林有之、大如鴝鵒、蒼褐色有黃斑點、好食粟稻、其喙微曲而厚、壯光瑩或淺黃或淺白、故俗名蠟脂

蠟觜、本綱

此米

十三長哥　花橘をほすへに毛知引縣仲つ枝に伊加流我縣下つ枝に此米をかけ〈下略〉

和名抄鵤、孫愐切韻云、鵤〈音脂漢語抄云之女〉小青雀也、といへり、いかるかしめは大かた形も大さも相似たり、かしらの色淡赤く兩の翅黒くして白き横斑ありて尾はいかるかより黒く端の所いさゝかしろし、鴲はいかるかに似て黒きかゆゑに漢名を鐵鴲といへり、三才圖會に見えたり、桑扈(イカルカ)の一名を蠟鴲と云ははしの色黄なるかゆゑ也、しめは相似て鴲の色淡黒、かれは鐵鴲といふめり

阿等利

二十　くにめくる阿等利かまけり行めくりかひりくまてに睍てまたね〈刑部蟲麻呂〉

契沖云、此阿等利は臈子鳥にて鳥の打むれて行如くさわきてまつるといへるにや、宣長云、國めくるは則臈子鳥の事なり、此鳥は多く群つゝ國をめくり行もの也、かまけりはかまひすしき也、かしましやかましなと皆かまと

云、さてあとりの渡るは甚かまひすきもの也、初二句は行めくるの序也、國をめくるあとりのかまひすしくかたり行如く行めくり也といへり、天武紀七年十二月、臘子鳥弊レ之自ニ西南ニ飛ニ東北ニと見え、和名抄辨色立成云、臈子鳥（阿止里一云胡雀）楊氏漢語抄云、獦子鳥（和名同上）今案兩説所出未レ詳、但本朝國史用ニ獦子鳥一、又或説云、此鳥群飛如列卒之滿山林故名ニ獦子鳥一也と見えて、此注の或説防人かむれ立にも似つかはしくなん、歸りくまてには歸り來迄に也、いはひてまたねは家人の齋て待てよといふ也、今俗にもあとり或あつとりと云、秋冬の間數千打むれて渡る鳥なり、其形雀よりはいさゝか大にして羽は朽葉色にして赤みありて黄赤色の斑あり、腹は雀に似て薄白し、和名抄に載る所の諸名は皆和字なり、漢名は山堂肆考に出る所の麻雀にあたれりとそ

燕

十九 燕來る時になりぬと雁かねは國おもひつゝ雲かくり鳴（家持）

和名抄鷰（和名豆波久良米）白脛小鳥也、今もつはめ又つはくらめとも云、本草に春社（一）來秋社去といへる如く、立春後五戊日前後に來れは、鴻雁かへり、立秋後五戊日前後燕歸れは鴻雁來る事家持のよめるか如し、燕につはめおほつはめの二種あり、人家に來りてすくふものはつはめにして本艸に云越燕是なり、おほつはめは和名抄胡鷰子（阿萬止里）とあり、俗に山つはめともあなくらつはめとも云、共に燕はさふきを畏るゝものゆゑ春社の頃來り秋社より南方の暖國に渡ると見えたり、中山傳信錄に七月玄鳥來とあれ、然れとも攝津の六甲山の嶺には土中に蟄して正月にても風なく暖なる時は出て群り飛ふとそ、本草に伏氣蟄於窟穴之中といふにあへり、然る時は悉く南に歸るにもあらさるへし

頭註 （一）禮記、月令、仲春之月鴻雁歸是月也、玄鳥至と見ゆ
爾雅燕燕ハ鳦、詩ニ云、燕々于飛一名玄鳥齊人呼レ鳦（音乙）

（二一）奴要鳥

（卷一長歌）霞立長春日の晩にけるわすきもしらす村肝の心を痛み奴要子（エコ）鳥うら鳴居れは（下略）（卷二長歌）綾にかなし、又宿兄鳥の片戀嬬（ツマ）とも（卷十七長哥）奴要鳥のうらなけしつゝともあり、（卷十）久方の天の川原に奴延鳥の裏歎（ウラナケ）ましつ乏きまてに、

同　よしゑやしたゞならすとも奴延鳥のうらなけをると告んこもかも

和名抄唐韻云、鵼漢語抄云沼江　恠鳥也、今も俗にぬえとよふ、(三)深山にすみて里に出る事なし、其形つくみに似て大なり、故に筑前にては鬼つぐみとよふ事大和本艸に見えたり、秋の末より冬春かけて鳴聲谷間にとよみて喧し、冠辭考にも鵼か鳴音は恨哭か如きよしいへり、人の裏歎ウラナキは下になけくにて忍音をいへり、然れは鵼よりは恨鳴といひ、受る言は下歎なりといへり、ぬえ鳥は黄赤色にして黒き斑ありてうつくし、腹青しろくしてうす黒きふあり

頭註　(一)梯ニ

五　奴延鳥乃能杼與比居爾、鵼ノ咽聲ニナク也、ウメクヤウナル事なり

(二)山家集　西行

さらぬたに世のはかなきを思ふ身にぬえ鳴わたる明仄の空

○新撰字鏡に鵺奴江

○又鵺の字をぬえとよむ

霍公鳥

巻八　霍公鳥いたくな鳴そ汝聲を五月の玉にあへぬくまてに　藤原夫人

同　夏山のこぬれのしゞに霍公鳥鳴とよむなる聲のはるけさ　大伴家持

同　霍公鳥聲聞小野の秋風にはき咲ぬれや聲のともしき　湯原王

和名抄鷸鴂鳥(一)和名保度度木須　今之郭公也とあれと、郭公は喚子鳥なる事既にいへり、集中に保とゝ支須をよめる哥おほけれとも、皆霍公鳥とかけり、然れとも郭公鳥をよめるにはあらす、哥は皆今のほとゝきすなる事あきらけし、ほとゝきすは本草に杜鵑とあるにあたれり、ほとゝきすを和歌にては其聲をよろこひ、詩にては本綱に其聲哀切とありて聲を聞を悪めり、其こゝろ好悪のたかへり、さて(二)鶯の巣の中よりほとゝきすのひなのなり出るといふ事は

巻九　詠霍公鳥長歌、鶯之生卵カヒコ乃中爾霍公鳥獨所生而已シガ父爾似而者不鳴シカ己母爾似而者不鳴下略とも、又巻十九卯月乃たては夜こもりに鳴霍公鳥昔より語つきつる鶯のうつし眞子かもともありて、實にさる事ありと今もいへり、和名抄卯加比古鳥胎也とあり、己はしがと訓へし、似ては鳴すは鳴聲もおのか父母には不レ似といふなり、本艸啓蒙に、杜鵑ハ四五月鳴テ晝夜ヲ問ハス、初秋ニ至テ止ム、中略白頭ヒヨ鳥ヨリ痩テ長ク、上背は黒色微青、下背ハ淡黒色吻ハ白シ、

額青黒色頭ハ黒褐色ニシテ淡褐斑アリ、背ハ淡青色背後ハ黒褐色肩翅ホロニ至リ黒褐色、カサキリハ深黒色喉ハ淺青色ニシテ黄褐ノ横斑アリ、胸ト腹ハ色淡クシテ黒色ノ横斑アリテ鷹腹斑ノ如シ、尾ハ深黒色ニシテ大白斑三ツアリ、脚ハ淡紅微黄、前指二ツ後指二ツ、雌ナル者ハ上背黒色下背ハ本淡黄末淺黒色、吻ハ深黄色、額頭深黒褐色ニシテ淺青ヲ帶ヒ黒色ノ横斑アリ、肩翼黒色喉ヨリ胸ニ至リ淡褐色、ソノ下ヨリ尾ノウラニ至リ白色、胸ヨリ腹マテハ黒色ノ横斑アリ、尾ハ黒色ニシテ白斑甚細クシテ四箇アリ、中略又大ムシクヒト云鳥アリ、形色略相似テ混シヤスシ、一說ニ大ムシクヒハ杜鵑ノ雌ナリト云ハ非ナリ

頭註 (一)古說ニ十王經ヲ引テ、鸕鶿示怪語鳴別都頓宜壽トアルヲ證トシ、杜鵑ノコトトスルハ誤也、十王經ハ僞書ナルコト玉勝間ニ辨アリ

(二)江談云鸎樓鳥者鶯子也、昔人宅之樹陰ニ造巢生子漸生長之比近臨見之有鶯頻太羽毛漸具舐其羽即奇思之間ホトヽキスト鳴去了云云、又もろこしにも、杜工部杜鵑詩、生子百鳥巢、百鳥不敢嗔、仍爲餧其子、前後略 和漢ともかくの如し

雉

本綱杜鵑ノ條、不能爲巢居他巢生子と見えたり

契沖云、雉をニハツ鳥といふは共に庭に馴て居る故の名也、つはやすめ言也、又一名をカケと云は催馬樂ニモニハ鳥ハカケロトナキヌと有て、かれか聲によりて名付たり、家雉なりと云は僻事也、古事記ニ八千矛神（三輪御神）の御歌に、庭津鳥かけはなくとよませ玉へり、神代にもろこしの音あらんやは

巻十一 あか時と雉は鳴なりよしゑやし獨りぬる夜はあけぬとも

巻十二 ものもふといねすおきたる朝けにはわひて鳴也雉さへ

巻七 庭津鳥可雞のたり尾の亂尾の(二)長き心もおもほえぬかも

巻十九 打羽振雞は鳴ともかくはかりふり敷雪に君いまさめや（縄麻呂）

同巻和歌 鳴雞はいやしきなけとふる雪の千重に積こそ吾立かてね（大伴家持）

かけとは催馬樂に庭つ鳥かけろと鳴ぬといひて(一)雞の鳴聲よりいふ名なり、古事記の歌に佐怒都登理藝岐斯波登與牟爾波都登理迦祁波那久、云云 雞は人の家庭に棲て名を加氣といふは、彼か鳴聲もてかけとは呼也、かりノ＼とも鳴こゑもてかりとよふか如し、又くたかけと云は百濟雞の意なるへし、今云唐まろしやむなとも皆その出る國所をもてよふにて知るへし

頭註 （一）本綱、朝鮮一種長尾雞尾長三四尺
（二）漢書長鳴雞、師古註鳴聲長者也
西京雜記曰、成帝時交趾越裳國獻長鳴鷄一以刻漏驗之、與
晷度無差

鴙

巻八 春の野にあさる雉の妻こひにおのかあたりを人にしれつゝ 大伴家持

十九 足曳の八峰の雉鳴とよむ朝開の霞見れは悲しも

十五長歌 春さりて野邊をめくれは面白く我を思へか狭野津鳥來鳴かけらふとあり、さは發語、野津鳥は雉なり、又古事紀八千矛神の御歌に佐怒都登理藝岐斯波登與牟とありて古くは皆きゝしとよめり、集中雉と書るは統てきゝしとよむへし、和名抄廣雅云、雉 和名木々須 一云木之 野雞也とあるは後也、春夏のあひた夜の更るに應してなく也、其聲必す二こゑ高く響て短し、何こにも山野ともに多くをれり、人を見る時はにけ走る事速なり、雛をとりて畜へはよく馴れとも漸く長すれは逃れ去りてなつけかたし

山鳥

おもへともおもひもかねつ足日木の山鳥の尾の永この夜を 或本歌曰 足日木の山鳥の尾の四垂尾の長永夜を獨りかもねん、千蔭云永は此の誤か、なかき此夜をと有へし、後に人萬呂の哥とすれとも此卷と十二卷は皆よみ人不知古歌なれはとるへからすといへり

巻十一 足引の山鳥の尾のひとをこえひとめ見し子にこふへきものか

十四 （六）夜麻杼里乃乎呂のはつをに鏡かけとなふへみこそなによそりけめ

呂は助辭也、尾乃秀つ尾也、尾の中に長きをいふ、から國の魏と云代に山雞をかひて鳴さりし尾の方に鏡を置たりしかはよく鳴つと云傳ふ諺もてよみつらん、宣長云、から國の故事は此哥に叶はす、これは或人の云、山鳥の尾は夜いみしく光る事あるものにて人その光を見て捕んとして行に、やゝ近くなるまてうこかす、今まさに捕ふへきほとに近く時に俄に立去て又行先の方にて光るを、人又行て捕んとすれは又先の如くにて終に捕かたきもの也、されは此歌に鏡かけといふは尾の鏡の如くよる光るを云、となふべみは捕ふへみ也、卷八に足引の山鳥こそ

は峯向につまとひすともよめり、山鳥は雌雄峯を隔て住といふことのありといへり、和名抄七卷食經云、山雞一名鵕鸃和名夜萬止利今案山雞鵕鸃種類各異見漢書注 地理志云、山雞形如家雞、雄斑雌黑者也

頭註 (＊)久老考に云、此歌は初の二句ははつをといひ出ん料の序なり、はつをは終の岡にて墓をいふなるへし、はかといふも終處なるへし、今の哥いつくをはかなといふも終處也、その終をはつといふはこもりくのはつせとかゝる發語は隱城之終とかゝることにて、墓をいふよしは四の卷別記にいふか如し、こもり城は十六の卷にことしあらは小はつせ山の岩城にも隱るはともに那もひそわかせと見えたり、隱城岩城の城は奥津城或みさゝきなといふ城也、きを久に通はせてこもりくとはいふ也、さて墓所に鏡を懸る事は上古のならはしにて、豐國の鏡山河内王を葬れる墓也山科の鏡山天智天皇乃御陵也なといふも墓に鏡をかけしより名におへるものなるへし、となふへみは兒屋根命の故事になずらへて祝詞となふるをいふなるへし、統て上古の葬儀はいはまくもかしこけれとも天照大神の岩戸こもりのをりの神事にならへる事多し、さるは大御神の岩戸を出まして再ひ世を照しませしことをねきいのれる上古の風俗、儒佛の道に迷はされぬ古への人情を思ひ明らむへし、然らは右の哥は墓處には鏡かけて祭らるゝまても他に心を移さす汝に心をよすれといふ意ならんとおもへり云云

鷹

卷十七上 長歌 多加波之母、安麻多安禮等母、矢形尾乃、安我大黑爾、大黑者蒼鷹之名也 之良奴里能、鈴登里都氣底、朝獦爾、伊保都登里多底、暮獦爾、知登理布美多底、於敷其等爾、由流須許等奈久、手放毛、乎知母可夜須伎、許禮乎於伎底、麻多波安里我多之、左奈良弊流、多可波奈家牟等、中略奈我古敷流、曾能保追多加波、矢形(注)尾は屋形にて屋の棟の如くいろはかなのへの字の形せる斑文あるをいふならんと翁はいへり、白ぬりの鈴は鈴沙燒付たるなるへしといへと、鷹の書には銀の鈴と有、又黃金の鈴も有由、木柴の雪にいへり、五百津鳥千鳥ともに數多きを云、於敷其等には逐毎に也、由流須許等奈久は放ては必捕るを云、乎知は初へ返る事をいへり、保追多加は秀鷹にて津は助辭也

反歌 矢形尾の鷹を手にすゑみしまぬにからぬ日まねく月そへにける大伴家持

同 二上のをてもこのもにあみさしてあかまつ鷹をいめにつけつも

卷四に 高飛鳥爾毛欲成云云は鷹は深山より出くるに、天にそひて木の葉の一つ飛らんやうに見ゆる物なれは、ことに高飛といふへく、これをたかと名付しもさる意にや、から文にも鷹揚如鷹之飛揚也てふをおもふへし

頭註 (ホ)木柴の雪に云、やかた尾は杉府とも云、或唐書に屋形尾と言は、數十三也、府は八文字にきる也といへり

白大鷹

詠白大鷹歌一首并短歌　大伴家持

十九 上略 乎知許知爾、烏布美立、白塗之、小鈴毛由良爾、安波勢也里、布里左氣見都追、伊伎騰保流、許己呂能宇知乎、思延、宇禮之備奈我良、枕附、都麻屋之内爾、鳥座由比、須惠氏曾、我飼、眞白部之多可、(一)毛由良はまゆら也、ゆらはすへて玉の鳴音をいふ、伊伎騰保流は字鏡ニ悁伊支度保留伊多彌字鬱爪と有、宇禮之備奈我良は喜しく思ふまゝにといふ意、なからは隨の意也、後のなからの詞とは異なり、白部のふは節の意にて、今切生なといへり

反哥一 矢形尾乃麻之路能鷹乎屋戸爾須惠可伎奈泥見都追(三)飼久之余志毛、かきなてはめつる意也、卷六に宇頭乃御手もて搔撫ぞねきたまふ云云飼久はかふを延たる詞、しは助辭也、和名抄廣雅云、一歳名之黃鷹俗云和加太加二歳名之撫鷹俗云加太加閇利三歳名ニ之青鷹白鷹ー今按、青白皆色名之俗說鷹白者不論雌雄皆名之之良太賀不論青白大者皆名於保太加ましらふの鷹ましろの鷹といへるは青鷹の全くしろきを云、即廣雅に云、白鷹にして世にまれなるものなりとぞ、或人云一通りのしらたかは嘴灰色にして足の色黄なり、又嘴足ともに白く爪までもしろきあり、それを雪しろの鷹とて殊に貴しといへり

頭註 (一)梯ニ
眞白部乃多可ハ白毛のましりたる鷹也
(三)飼久之餘志毛ハ鷹を飼ふかよろしき也、毛ハ附字也、よスしきはおもしろきといふに同し

鷲

卷十六施頭哥 越中國歌四首ノ内ノ施頭歌也 (一)澁溪乃、二上山に鷲そ子產とふ指羽にも君の御爲に鷲そ子生とふ、續紀越中國射水郡二上神と見ゆ、さし羽は和名抄服玩具に翳和名羽と有、式にはさしはと訓り、鷲の羽もて作るなるへし、仁德記御歌に大和の國に鴈古武等と有も雁子產といふなり

卷十四 筑波禰に(二)可加なく和之の音のみをかなきわたりなんあふとはなしに

かゞなくは鷲の鳴聲也、かゞと聞ゆるやうに鳴といへり、和名抄文選無城賦云、寒鴟嚇ㇾ鶵師說寒鴟讀古伊太流止比嚇讀加々奈久鷲は鷹に似ておほきなるものなり、翅黑くしてしろきふあり、背太

く爪するとくして狸兎の類をもつかむといへり、尾の羽をもて箭羽に用ゆる事今猶しかり

巻七 (二)直鳥すむ卯名手の神社の菅の實を衣にかき付きせん兒もかも

眞鳥は鷲のことなりといへり、うなては大和高市郡雲梯也

頭註 (一)十二おもはぬを思ふといはゝ眞鳥住卯名ての杜の神もしらさん

(三)梯ニ云可加奈久和之は鳥の餌なと喰ときに、異鳥に奪はれしとて鳴をカヾナクと云也、和名抄に嚇をカ、ナクト訓めり

眞鳥　餘爾說

眞鳥は鷲也と云れたり、鷲は人里ちかき森林なとにすむ鳥にあらす、筑波ねにかゝ鳴とよみて今もかの山にすむ事聞ゆ、かの山のみならす、高峯おく山の人氣とほき所にすむなり、按するに眞鳥は鶴を云へし、やまと姫の世記に、廿七歳秋九月に鳥聲高聞天不止囂、此靈と宣天大幡主命の舍人紀麻呂等を差使令見彼鳥鳴處、罷行見は島國伊雜方上葦原中在稻一基生、本は一基に爲て千穗茂也、彼稻を白眞名鶴咋持廻て此見顯其鳥ノ鳴聲止支と返事申支、中略 其處爾伊佐波登美の奉宮造皇太神の爲ニ攝社ハ伊雜宮是也、彼鶴の眞鳥號稱大歲神云云これ正しく鶴を眞鳥といひたり、此鳥は野におりて餌ばみする故にしら鳥の眞野といふ冠言も見えたり、さらはうての森なとに巢くふて住へきものそ

水沙兒

巻三 美沙ゐる磯わにおふる名のり（乘藻）のその名はのらしてよ親はしるとも

十一 水沙兒居る奥つありそによる波の徃方もしらすわかこふらくは

同 水沙兒居る渚に居る船のゆふ鹽をまつらんよりはわれこそまされ

日本紀景行天皇記に、相模にて覺賀鳥の聲せしといふ事あり、覺賀鳥鶚鳥の事なりといへり、和名抄爾雅集注云、(二)鵙鳩 和名美佐古今按古語用覺賀鳥ノ三字ニ云ミ加久加乃土利ト見ニ日本紀私記ニ公望案高橋氏文云水佐古 鵰屬也、好在ニ江邊山中ニ亦食魚者也、みさこは形は鵄に似て水鳥にあらすして水邊の木にすみ、水上を飛旋りて影をうつせは魚驚て走りおとりて水の面に浮ふをとる也、又人のよられさる

巖の間に魚を積置事あり、それをみさごのすしと云、久しくなりたるも腐らすして味も人の作れる鮓に似たりとそ

第三　阿倍乃島宇乃住石爾よする波間なく比來日本しおもほゆ

頭註　(二)毛詩鶚鳩注云、鶚鳩水鳥、一名王鴡、狀類鳧鷖、今江淮間有之本綱、翔水上捕魚食江表人呼爲食魚鷹

鸕

巻十七長歌　安山走る夏の盛りと島津鳥鵜養かともはゆく川の清きせことにかゝりさしなつさひのほる云云

巻十九長歌　叔羅川(一)なつさひのほり平瀨には左泥さし渡し早湍には水鳥を潛つゝ月に日にしかしあそはねはしき我せこ

反歌　鸕川たちとらさん安由のしが(三)はたは我にかきむけ思ひしもはゝ

反歌　叔羅川湍を尋つゝ我せこは宇河たゝさねこゝろなくさに

和名抄辨色立成云、大曰鸕䳄日本紀私記云志萬豆止利小曰鵜䳄俗云字爾雅注云、鸕䳄水鳥也、觜頭如鈎好食魚者也とあれとも、鵜䳄と鸕鷀とはおほひに異なり、鵜は俗におほ烏或はからんちやうと云ものなり、鸕鷀は今土左にて海にすめるうをしまつとよふ、是古名の殘れる也、さて諸國にてうを遣ひて香魚をとらしむる、其漁を鵜川とも鵜飼ともいふ、其舟を鵜舟とも鵜飼舟ともいへり、しかれとも今たえたる所多し、

巻十九　年毎に鮎しはしらは左伎多河鸕八つかつけて河瀨たつねん、この八つかつけてといふは一人して鵜を八つ使ふを云、今美濃の岐阜にては一人にて十四五隻使ふものありといへり

頭註　(一)越前人云、今府に白鬼女川あり、されは此叔は新の誤にて、しらき川なるへしといへり
(三)しがはそれか也、はたは鰭者也、ひれを云、かきは詞なり、むけは吾に贈りこせといへる也

烏

巻七　あかときと夜烏なけと此峯の木ぬれのうへはいまたしつけし

巻十二　朝烏はやくなゝきそ吾せこかあさけのすかた見れはかなしも

巻十四　烏とふおほをそ鳥のまさてにも來まさん君をころくとそ鳴

からすとふは烏といふ也、乎曾はうそといふに同し、僞言事ならん、烏といふ大僞鳥（オホウソトリ）といふ意也、兎（ウサギ）を乎左伎、現（ウツヽ）を乎都都といふか如し、乎字通音也、まさては眞定也、ころくは烏のころくころくと鳴こと有を子等來（コラク）と聞なして君か來るやと待にかひなければ、大僞鳥そと烏を罵也、後に鶯の聲を人來（ヒトク）と聞なせる此類なり、和名抄唐韻云、烏（和名加良須）孝鳥也、兼名苑云、烏一名鵶（字亦作鴉）爾云、純黒而反哺者謂之烏（反哺故反食在口也）と見えたり、本艸に鵶烏、烏の二條あり、鵶烏といふは尋常のにして多居るからす也、俗にはしほそといひさとからすといふ、から文に反哺の孝ありとて孝烏といへり、烏鴉とあるは俗に山からすはしふとからすといひて山に棲て里に出る事稀也、常のよりは嘴太くして食を貪ることも甚しとそ

鶉

巻四 鶉鳴ふりにし里ゆおもへとも何かも妹にあふよしのなき（大伴家持）

巻八 鶉鳴ふりにし里の秋はきをおもふ人とちあひ見つるかも

巻十一 人ことをしけみと君を鶉鳴人の古家にかたらひてやりつ

和名抄准南子云、蝦蟇化爲鶉（和名宇豆良）うつらは秋渡り來て夏歸るもの也、その歸らすして常に居るものを俗にありなといふ、鳴聲高く清て遠方に聞ゆるもの也、曉には殊更に鳴てあはれふかし

鴫（一）之伎

見飛翻鴫作歌一首　（梯ニ云羽をふりてなく鳴也、今は秋によめれとも、是は春によめる也）

巻十九 春まけてものがなしきにさ夜更て羽振鳴（ハフリナク）志藝（シギ）誰田にかすむ

巻一 旅にして物こひ之伎の鳴こともも聞へさりせは戀てしなまし

羽振をはぶきとよめるは山吹を山振と書るにて知るへし、又集中に（三）羽觸とも書たれははふりと訓へきか、和名抄玉篇云、鷸（音橘楊氏抄云和名之木一云田鳥）野鳥也、さてしきは水鳥にして澤邊或は田にすむもののゆゑ鴫の字を用ひ、又田鳥の二字に作れともみな和字なり、漢名は本草に云鷸に充れり、しきは羽音高く打羽振て鳴もののゆゑ、古今集に曉の鴫の羽

ねかき百羽かき君か來ぬ夜は我そかすかくとよめり、形は秧雞に似て觜細長くして淡黑し、脚は灰黑色にして羽は茶色にて小なる白き斑あり、目の上及ひ喉下に白き條あり、腋に淡黑き斑ありて腹と尾とはしろし、此外種々の品數あれともことしけゝれははふきつ、委しきことは本艸啓蒙に載せたり

頭註 (一)日本紀、神武紀の哥に宇田のたか木に辟藝和奈はる云云 本草綱目鷸之無斑者とあれは鴫にあらさるへし (三)卷十九長歌に、霍公鳥立久久等羽觸爾知良須藤浪乃花奈都可之美と有

美夜故杼里

廿卷 ふなきほふ堀江の河のみな際に來ゐつゝ鳴は美夜故杼里かも　家持

ふなきほふは舟の多く競漕をいふ、都鳥は伊勢物語に白き鳥の觜と足と赤きしきの大さなるか水の上に遊ひつゝいをゝくふ、これなん都鳥とあれは白き鷗也と(四)千蔭はいへと、今俗に都鳥とよふ鳥あり、形鴫に似て首長く頭より脊翅ともに黑く、胸腹は眞白にて觜と脚と長くして紅なり、足の指三本にして後のひかへ指なし、大和本艸にも伊勢物語にいふ都鳥是なるかといへり、水際に來ゐつゝ鳴とよめるは此鳥に近し、著聞集にも都鳥を叡覽にそなへし事ありて歌なと多し、鷗ならは江海ともに多くありてめつらしからぬものならんかし

頭註 (四)眞淵翁に都鳥の事をとふ人ありて云、古今集には川のほとりにあそひけりとありてことはり明らけし、伊勢物語には水のうへにあそひてといへは足はみえしやと、翁こたへていふ、此鳥は鷗にてむれつゝあそふ故に飛立も邊に在もあるへけれはこの間は頑、これはかもめなるをしらせんとて詞をそへつらん云云、按此說非也 都鳥は所々にあれとも在五中將の詠によりて專隅田河の景物とすれとも、鷗にはあらし、今云都しぎなるへし、其形のいとみやひたる故に都鳥稱せしならん、八雲御抄、藻鹽草にも、都鳥は隅田河ならても都近き河にもありとしるされたるにてもしるへし

(二)鴨妻

卷一 天皇登香具山望國之時御製歌

上略 國原波、煙立籠、海原波、加萬目立多都、可怜國曾、

香具山の北麓の埴安の池の面に鷗の群て飛立遊ふをのたまへり、卷の三長哥にも、香具山の哥とて、松風に池浪立而櫻花木晩茂爾奧邊波鴨妻喚邊津方爾味村左和伎、云云千蔭云かもめのめは群の約也、味村とむかへて知るへし、と云時は鴨の群立喚といへる也と有もこのさま也、

かもめは和名抄鷗和名加毛米水鳥也とありて、池によめるかもめは本艸に云江鷗なり、形は計里といふ鳥に似て觜尖りて長く赤し、計里より短くして赤し、頭より背ねつみ色にして胸腹ともに白し、近江の湖海[一]に多く群り飛て、網引する時魚の跳りて水に浮ふものをとれり、鳴聲喧し、海鷗は形おほきにして茶色也、腹は白く翅に黒と白との斑あり、潮の滿る時は群り飛てなく、其聲こぶくと聞ゆ、潮をよふに似たりとて伊豫にてしほこひ鳥とよへり、埴安の池によめるものは江鷗なる事しるし

頭註 (一)本綱、在海者名海鷗在江者名江鷗

(二)久老云、燕をつばともつばめともいふ類にて鴨にめの言をそへてかもめつまよびとよむべき也、さて燕鷗(ツバメカモメ)。のめは群(ムレ)の約めにて、味村さわきとある村(ムラ)も同言也、卷ノ一香具山の歌にも加萬目立多都とあれは、かならすかもめなるべく鴨は假字とすべし

千鳥

卷三 淡海の海ゆふ浪千鳥汝かなけはこゝろもしぬに古へおもほゆ 柿本人麿

同 飫海乃(オウミノ)○河原の乳鳥なかなけは吾佐保河乃おもほゆらくに 久 田部(?) 又河上に河一字脱せるかと久老言へり

十一 河千鳥住澤の上に立霧のいちしろけんなあひいひそめては

卷七 佐保川に鳴なる知鳥なにしかも川原をしぬひいや川のほる

卷六 ぬは玉の夜の更行は久木おふる淸き河原に千鳥[一]しは鳴 山部赤人

十九 夜くたちて鳴河千鳥うへしこそ昔の人もしぬひきにけれ 大伴家持

侍於內裏聞千鳥喧作歌一首

十九 河[二]渚にも雪はふれゝし宮の裏に智杼利鳴らしゐん所なみ

ふれゝしの之は也の誤ならん、ふれゝやはふれゝはやの意也と宣長いへり、河のすに雪のふれはやおりゐん所なくて宮中に鳴ならんといふ也、さて集中によめるは皆川千鳥にして濱千鳥にあらす、形鶺鴒(ニハタヽキ)に似て翅より背尾ともに灰色にして胸腹白し、川白に多居るゆゑ俗に川原はしりといふ、鶺鴒よりは少し大也、其聲チヽチヽと聞ゆるゆゑ千鳥とよへり、漢名は水喜鵲と百鳥圖にありといへり[三]、海邊にすめるを濱千鳥といふ、形大かた相似て川

千鳥よりはるかに大き也、漢名は南產志に載る所の呼潮なりとぞ、千鳥は海河ともに四季の時わかす鳴ものなれとも、もはら冬によめり、けにも霜夜の寢覺なとに打聞たるはいとあはれふかし

頭註 (一)〇千鳥數鳴ハ鳥ノ數多(カズオホ)キヲ云也、數鳴ハシバシバナク也
(二)日本紀、
おきつも(藻)はへにはよれ(雖寄)ともさねとこ(寢床)もあたはぬ(不能)かもよ播磨津(ハマツ)智耐理(チトリ)磬(ヨ)
(三)古事記景行紀に、
波(濱)麻都知(千鳥)登理、波麻用波由迦受(不行)。伊(磯)蘇豆多布(傳)。
古來鵆あるひは𪀚の字ちとりとよめとも、ともに和字也、然れとも新撰字鏡なとにも見えす

一二寶鳥

〇卷三 水鴨成(ナス)語(發) 二人(フタリ)雙居(ナラヒヰ)、卷五 邇保鳥能布多利那良(ナラ)眦(ヒ)爲(ヰ)卷八にも見ゆ

卷四 二寶鳥の(一)かつく池水心あらは君にわかこふこゝろしめさね

卷十一 思ふにし餘りにしかは丹穗鳥のあぬらしこしを人見けんかも

和名抄郭璞方言注云、鸊鷉(和名邇保)野鳧小而好沒水中也、今も肥前の長崎にては俗ににほとよふ、是古名の殘れる也、美濃にてみよといひ、上總にてみほとよふは古名の轉せしもの也、京てはかひつぶりとよひて古言を失へり、新撰字鏡に鳰(爾保)とありて鳰和字なり、此鳥常に水に浮るて遊ふ、又水底にかつき入りやゝ久しくして出る、後の哥に鳰の(三)浮巢とよめるは此鳥水をはなれて飛事あたはす、是翅の小なるかゆゑ也、水邊の藻屑をあつめて水の上にすくふ、それか水に漂ひ風にしたかふて波になつさへるを鳰の浮巢といへり、鳥の形はたかべに似て腹白く背黑し、尾は殊に短く脚は尾の方へよりて形よりは大也、其脚尾にならひて付たるかゆゑに陸に上りて歩むことあたはす、本艸に大を鷿鷉といひ、小を鸊鷉といへり、我國にも大小の二種あり

頭註 (一)應神天皇段に、
美本杼理能、加豆伎伊岐豆岐、カヅキ古事記、訶志比宮段ニ、
邇本杼理能阿布美能宇美爾迦豆岐勢那和(セナワ)、此も一句をへたてゝカヅキの枕詞也、
(三)無名抄、こをおもふにほのうきすのゆられきてすてしとすれや見かくれもせぬ、賴政卿、このうためつらしとてかちにき、祐盛法師これを見て大きになんしていはく、にほのうきすのやうをえしらぬにこそ、かのうきすはゆられありくべきも

のにあらず、海乃汐はみちひるものなれはそれをしりてにほのすをくふには、あしの莖を中にこめて、しかもかれほをくつろけてめくりにくひたれは汐みてはかみへあかり、汐ひれはしたかひてくたる也、ひとへにゆられありかんには風ふかはいつくともなくゆられいてゝおほ浪にもくたかれ人にもとられぬへし

也左可杼利

十四 沖にすもを小鴨(かも)のもころ也左可杼利いきつぐ妹をおきてこぬかも、沼にも深きところを澳といふ、須毛は須牟也、乎は小なり、母古呂は如く也、也左可鳥は八十量(ヤソハカリ)の長息つく鳥といふ也、やさか鳥といへるは鳰鳥なるへし、有か中に久しく水底にかつき入て居鳥なれはなりといへり、されと小鴨の如くといへは統て水に入る鳥の事をいふか、水鳥は魚をもとむるに水に入て息をつかてあるを、八十はかり息つかぬ鳥のことをいふになん、其中に鳰鳥そ久しく水底にかつき入て息つかぬもの也

鶴

巻六 兒らかあらはふたりきかんを沖つ洲に鳴なる鶴(タツ)の曉のこゑ 守部王

同 若の浦に塩みちくれは潟(カタ)をなみ蘆邊をさして多頭鳴渡る 山邊赤人

巻四 草香江の入江にあさる蘆鶴のあなたつ〳〵し友なしにして

巻七 難波かた鹽干にたちて見渡せは淡路の島に多都渡る見ゆ

同 暮(ユフ)なきに求食(アサリ)する鶴しほみてば奥浪(オキナミ)高み己か妻喚(ツマヨブ)

巻三 磯のさき前榜たみゆけは(コギタミユケバ)(一)近江海(アフミノミ)八十の湊に鵠(タツ)さはになく 同行者 久老云鵠を今本に鵠に寫れるはあし、古本による

巻六 鹽ひれは葦邊にさわく白鶴(アシタツ)(二)の妻よふ聲は宮もとゝろに

集中に鶴を何れの歌もたつとよめり、鶴は田ゐ或は葦邊に打むれゐるものゆゑしかよへるなり、然るを田鶴と書てたつ訓るはわろし、古書に田鶴と書る例なし、又鵠をたつとよめるは五雜爼に鵠即是鶴也とあるによれり、唐國にも古へは鵠鶴を一物として海鶴を海鵠とも書、黄鶴を黄鵠とも書けり、今鵠は別なる事本草にも委くいへり、和名抄に和名久々比とあり、今はくちやうとよへるもの即鵠なり、又白鶴と書るをもあし、たつとよむへし、しらたつとよめる例のなけれは也といへとも、しらつると

よみてもよろしからんか、巻三にはや人の薩摩のせとを雲ゐなす遠くも家はけふ見鶴鴨、巻三十三蘆邊より滿くる鹽のいやましに思へか君かわすれ兼鶴なと數多ありてつるとよませたれはなりけり、白鶴は本草に云、仙鶴にて今畫く所の丹頂をいへり、和名抄鶴（和名豆流）似鵠長喙高脚者也、唐韻云、鶴（楊氏抄云多豆今按和俗謂鶴爲葦鶴是也）鶴別名也とあるにて詳なり

頭註 (一)三手回、集中に磯回浦回島回などあるを廻とよめるは非也、此所ニ手回と有を例にて回は美とよむへき也云云 (二)契沖云あしけ馬と云も、蘆花の白きにたとへし名にて、あしたつも又白きよし也 道濟集に、ほに出たる汀の芦のあしたづの千世にかはらぬ色かとそみるとあれは、鶴と芦ノ花の色のひとしきよし也といへり

(一)鴈　雁の使　雁(二)玉章玉梓　鳥總

巻八　久堅の雨間もおかす雲かくり鳴てゆくなる早田雁かね（大伴家持）

同　さ夜中と夜はふけぬらし雁かねの聞ゆる空に月渡る見ゆ

同　九月のそのはつ鴈の使にもおもふこゝろはきこえ來ぬかも

十五　天飛や鴈を使に得てしかも奈良の都にことつけやらん

和名抄毛詩鴻鴈篇注云、大曰鴻小曰鴈（洪岸二音和名加利）とあるをよしとす、かりとよへるは鴈の鳴聲かり〳〵と聞ゆるをもてかりとはよへる也、鴻は鵠に似て腹白く形大にして好て菱を食ふゆゑ、俗にひしくひと云、鴈は鴻より形小にして腹に黑文あり、俗にまかんといふ、凡雁は冬は北より南に來り春は南より北に歸る、其飛事必序あり、相並て次第に退きとふ故にから文にも雁行雁陣なとゝいへり

頭註 (一)巻十、秋風に山飛こゆる雁之音の聲遠さかる雲かくるらし、鴈か音の聲といふは鴈か鳴音の其聲とかへしてうたふ詞なり、時鳥をあはれ其鳥といひし格也 (二)〇久老云玉梓の二字は全く假名にて飛翅の略轉なるへし、さるは古へ鳥をもて使とせる事のおほけれは、使の發語とも直に使といへる言ともなれるなるへし、さて其飛を多麻とも云は多牟の轉にて、多牟とは古事記に輕の太子の御哥に、阿麻多牟。加流遠登賣と見え、これを集には巻二天飛也輕路者、巻十一天飛也輕乃社、巻四天翔哉輕路從とあれは、多牟と登夫とはひとつ言にて、多牟は飛の古言なるを知へし、又その牟と麻とは近く通ふ言なれは多麻ともいへる也、翅は巻十に天飛也雁の翅とよみ、和名抄に翅（和名）都波佐鳥翼也と見えたり、今

は都波佐の波を略てたまづさとはいへる也、又はこの都波佐と鳥總と同言とおもふよしあれは、玉梓は多牟鳥總ともいふべし、登夫の約豆となれり、かく鳥をしも使の事とするはまかん先歸り三月の末に白雁かへるなり、古事記神代段に、高御座日神の天若日子のもとに雉名鳴女をつかはし給へる事あり、其雉不還故於今諺曰雉頓使本是也と見え、同記神武段に、云云遣八咫烏問二人曰略兄宇加斯以鳴鏑待射返其使しとあるをはしめ、云云集には卷八に九月の其初雁の使にも念心者所聞來ぬかも、卷十一に妹に戀いねぬ朝けにをし鳥の從是鳴わたる妹か使歟、卷十七に雁かねは使に來んとさわぐらん秋風寒みその川のべになとよみて、統て鳥をしも使とせり、登利は多與利といふ言にもやあるらん、多與の切登也下略

雁の使とよめるは漢書蘇武が古事なり、後に雁の玉章ともよめり

歸鴈

卷十九 春まけてかく歸るとも秋風にもみ出ん山を越こさらめや 大伴家持

同 つはめくる時になりぬと雁かねは國おもひつゝ雲かくれ鳴

毛詩注、鴻鳥名似鵝畏寒秋南春北といへる如く、八月に白雁先來り後にまかん來る、又春歸るにも二月の末にまかん先歸り三月の末に白雁かへるなり 櫟云、或人云、鴈ハ鴻ノ誤カ、此考よろし 按とくらは鳥坐なり

雁乃兒

○鴨子 花鳥餘情にも鴨の子をカルノコともカリノコ共いへり、里留相通ス

卷二 鳥垣たてかひし雁の兒すたちなは檀の岡に飛かへり來ね、とぐらは鳥籠なり、鳥垣は鳥栖の誤かといへり、字も訓もかりとはいへと、實はかるかもの事也、鴨の妥に子うみしは難波高津の御代に聞えし、後は物にも見えすと眞淵いへり、かる鴨は夏鴨とも黑鴨ともいひて、こゝに常にすみてひなもあり、後の物語文にかりの子といへるも是也、猗冠字考に委しく見えたり、」はしめ一六うちすてゝつかひさりにし水鳥のかりのこのよにたちおくれけん 續千載 いくつづゝいくつかさねてこのまゝしかりのこのよの人の心は 鴨の卵也

頭註 (一)按に雁の字は假字にて、かりかる通音なれは、この雁の兒はかるの兒とよめるやとおもへり、かる鴨の子なれはかるの兒とよみてもきこゆへし

(三)淸少納言うつくしきものはかりのこ

鴨

巻三 芳野なる菜採乃川の河よとに鴨そ鳴なる山陰にして 湯原王

三 輕池乃うらみゆきたむる鴨すらに玉藻の上に獨り(一)ねなくに 紀皇女

巻十一 葦鴨のすたく池水はふるともまけみそのへに我こひめやも

巻十四 麻をこものふの短くてあはなへに奥つ眞可母のなけきそ我する

さて葦鴨は巻の十七にも渚には阿之賀毛さわきとあり、古今にも蘆かものさわく入江のしら波のとよみて、鴨は蘆邊にすむもののゆゑしかよへり、別に蘆かもといふものある事なし、鶴を蘆たつといふか如し、眞可母は巻十四に於吉爾須毛乎(二)加母乃云云とあるに同しく、眞鴨は俗に云青くびなり、和名抄爾雅集注云、鴨野名曰鳧家名曰鶩とありて、鴨をかもと訓するは誤なり、毛詩注云、鳧水鳥如レ鴨青色背上有レ文といへるを據とすへし、鳧は即かもにして鴨はあひるなり、漢文に家鳧とあるはあひるをいひ、野鳧とあるはかもを云、鳧は鴨に似て小なり、乎加母は頭より頸の毛綠にして光りあり、鵜は頭頸ともに淡黄にして綠の光りなし、海河にすみて人に近よらす、鴨は人家にかひてよくなるゝものなり、形相似て共すむ所ことなり

頭註 (一)巻五水鴨成二人雙居一、丹保鳥條見合へシ
十二足ひきの山河水の音不出人の子ゆゑに戀渡青頭鷄、青頭鷄は鴨なれは借たり
(二)梯ニ小加母乃母己呂、如ニ小鳧一ト云心ナリ

安治

巻三 香具山歌、奥邊波鴨妻喚味村左和伎
眞淵云味はあち鴨といへる鳥なり

巻七 安治村のとをよる海に船うけてしら玉とらん人にしらゆな

巻四 山のはに味村さわき行なれと我はさふしゑ君にしあらねは 岡本天皇

また巻の四長歌に、人さはに國にはみちて味村(一)のいさとはゆけと、云云こは人のむれ行をあちかもの友いさなひて群つゝ飛行にたとへたり、又巻六長歌に奥鳥味經乃原、

云云また同卷味澤相(アヂサワフ)よるひるいはすともよめり、凡の鳥は日の間のみ飛かふを、味鳬は晝夜となくむれ渡るゆゑかくいへり、味鳬は今俗に誤てあしかもとも云、まかもに似て小なり、たかへよりは少し大なりとも又あち鳬たかへ同しものそともいへり

卷廿 安治牟良乃佐和伎伎保比弖云云

頭註 (一)味村(アヂムラ)、アヂト云鳥ハ己(オノ)カ友ヲサソヒテムレ飛フ物ナレバ、アヂノ村鳥ト云ナリトゾ

(二)味澤相とは、安治鴨の屯(ムレ)をなして飛わたる故に味村といひ、又多(サハ)に群わたる故にあぢ多(サハ)を延てあぢさはふといへるか

高部(タカベ)

部(ベ)は牟禮(ムレ)の約の米(メ)に同し、米部は同音也、さてムレは群(ムレ)にて一連(ヒトムレ)をいふなり、連をムラジト云モ群主(ムラヌシ)ナルベシ（爲與 ナシト相落萃ーートカケリ）

卷三 人こかすあらくもしるしかつきする乎之と高部と舟の上にすな（足人）

卷十一 高山に高部さわたり(※)たか／＼(高高爾)に我待君を待でなんかも

和名抄爾雅云、鸍（漢語抄云多加閉）一名沈鳬貌似而小、背上有レ文と見えたり、雄は文彩あさやかにして美し、雌は文彩なし味鳬と同しく群飛て高山を越る、其音大風の聲の如し、越後にてたかぼといひ、南部にてはたかぶといふよし、秋まかもより早く來りて、春歸るはまかもに後れて歸るとそ、漢名は本草の鸊鷉の條に出る刁鴨なりといへり

頭註 (※)左渡の左ハ發言ニテ刺渡ルト云意
高々爾、遠々爾にて公カ來ル事の間遠なる也、言ハ登保幾の登保の約はとなるを、たに轉し、幾を加に通はせて多加と云へり、此言多かれと皆是なりと眞淵いへり

秋沙

卷七 山のはに渡る秋沙のゆきてゐんその川の瀨に浪たつなゆめ

今俗にあいさかもと云、種々の分あり、小あいさ、海あいさ、川あいさ等あり、鳬類の冠毛あるものをいへり、漢名は冠鳬と正字通に見えたり、無名抄にすみのほる月の光りに横ぎれてわたるあきさの音のさむけさ（賴政の歌）ともよめり、形は鳬に似て頭赭色にして冠毛あり、觜細くして先曲れり、脊は灰色にして腹淡黄色、翅の中央に白き羽ましれり、足は鳬より長し、足と觜と紅也

志長鳥

卷七 志長鳥居名(キ)野乎來者(クレハ)有間山夕霧立ぬ宿はなくして、（同卷旅歌）

四長鳥居名之湖爾云云

巻九 水長鳥安房爾繼有梓弓末乃珠名者、云云集中猶多し、こはにほ鳥の率とつゝけて、率とは雌雄ひきゐるをいふならんと眞淵いへり、猶此外にくさ／＼の考あれと、今俗にしなかといふ鳬あり、大かたは眞鳬に似て雄は翅の裏しろく腹の色淡白し、翅に赭色の羽あり、雌なるものはこの羽なし、觜尾ともに眞鳬に似て少し長し、脚の色黄にして高し、志長とは此鳬の脚も觜も長きゆゑに、觜長或は脚長を上略してし長とよへるならんか、そのむれ飛故に率とつゝけ、その名足長の略故安房といひかけしにやともおもほゆ

頭註 (*)袖中抄ニハ水長鳥ト訓めり、可考

男爲鳥

巻十一 妹にこひいねぬ朝けに男爲鳥のこゆ喙鳴久去來 わたる妹か使か

巻二十 今城眞人 いその浦に常よひきすむ乎之杼里のをしき我かみは君かまに／＼

礒の浦は池の礒にてうらは裏也、つねよひきすむは常喚來栖也、をしより惜しといひくたしたり、とらるゝ己か身も君か隨意にといへり、和名抄崔豹古今注云、(*)鴛鴦（和名乎之楊氏抄云鸂鶒云云其音溪勅）とあれとも、鴛鴦は吾邦には住ます、をし鳥は鸂鶒と本草にあるにあたれり、阿波にてかしかも、土佐にてかし鳥といふもの卽男爲鳥也、冬の間池澤に集り鳬と共にむれ居るもの也、大さたかべに似て頭に長き冠毛ありて後へ垂れ翅と尾との間に思ひ羽といふあり、又歌に劒羽ともよめり、此鳥大小の二種あり、又島をしといふあり、ことに小なるものを岩をしと云

頭註 (*)皇極紀に

山川に鴛鴦ふたつゐてたくひよくたくへる妹を誰かいにけん

契冲云、をしの名義は互に愛すれは名付る歟、愛をヲシムト訓リ

鷺

巻九 たくひれの鷺坂山のしらつゝしわれににほはね妹にしめさん

たくひれは巻十一にも栲領巾の白濱浪とも有て、栲は木綿なるか故にしろきとつゝけるの例多し、ひれは和名抄

に領巾（日本紀私記云比會）婦人項上餝也とあるによれは、鷺のみの毛を領巾と見なしてかくつゝけしならん、（巻九）に白鳥鷺坂山云云ともつゝけたり、こはかくれたることなし、（巻四）に白鳥能飛羽山松之、云云眞淵云には（巻十一）に霍公鳥飛幡之浦とよめるを思ふに、とぶとつゝけて鳥羽いひかけしにはあるへからす、さて此白鳥を鷺とつゝけたるはこともなし、飛羽といへるは必すしも鷺のみならし、仲哀紀に獲白鳥養之てふは、鵠の事歟、出雲國造神賀に白鵠乃生賀とあるをもしら鳥とよむへき故ありと冠辭考にいへり、又巻の十六に詠₂白鷺啄木飛₁歌といふあり

池神の力士儛かも白鷺乃桙啄持て飛わたるらん

大和十市郡池上郷あり、神は借字也、此池上かそこにてかゝる舞をせし事あるか、力士は手力あるをいへり、鷺の巣つくらんとて木の小枝をくはへて飛をかの力士儛に見なしたるなり、和名抄唐韻云鵝白鷺也、食經（云鷺和名佐木）色純白其聲似人呼喚者也、さて鷺の類くさ〳〵おほけれともよく人のしれる所なれはこゝにくはしくいはす

頭註 (※)すへて羽毛の白きを云へは、鷺又鵠をもしらとりと云事日本紀に見ゆ

水鳥

（巻十四）水都等利のたゝんよそひに妹のらにものいはすきにて思ひかねつも

（巻廿）水鳥（美豆等利乃）のたちのいそきにちゝ母にものはすけにて今そくやしき

水鳥はにはかに飛立ものなれはかくつゝけたり、ものはすは物不ₗ言を略けり、けにては來去て也、さて水鳥は水の上におりゐる鳥をすへていへるなれとも、鳧をさすに似たり、巻八に、秋の露はうつしなりけり水鳥の青羽の山の色付見れは、こは鳧の青羽を山の青葉にいひかけたり、また水鳥之鴨乃羽色乃春山のとも、又水鳥乃可毛の羽の色の青馬を、云云集中にあまたよめるにてしるへし

大鳥

（巻二）大鳥羽易乃山爾

和名抄に鸛（(※)楊氏漢語抄云比）水鳥似鵠巣樹者也とあるによれは、今俗にいふこうつるなり、詩經注にも鸛水鳥似鶴者也とありて、形大かた鶴にひとしくすへての色白くして翼のするゐ

のみ黒し、翅を斂れは黒き尾の如く見ゆれとも尾にはあらす、翼をひらく時は短き尾あらはる、色白し、此鳥喙を撃て音をなす事拍子木の音の如く聞ゆ、聲を出して鳴事なきは舌の短きかゆゑなりとぞ、晝は田澤にあさり夜は樹上にすむ、此外禿鶖鵜鶘をもおほとりとよへとも、稀なるものにして常に見る事かたき鳥なれは、古へに大鳥といへるは鸛をさしてよめるに近し

頭註 (*)毛詩曰、零雨其濛鸛鳴二于垤一、箋曰、鸛水鳥也、將二陰雨一則鳴

(*)渚鳥

巻七 圓方の湊の渚鳥浪たてや妻よひたてゝ邊に近つくも

十一 武庫の浦乃入江の渚鳥羽くゝもる君をはなれてこひにしぬへし

巻十一 大海のありその渚鳥朝なさな見まくほしきを見えぬ君かも

す鳥は何鳥にまれ洲に居る鳥を云ならん、されは何れの鳥ともさしかたし、巻十七にいつみ川湊の須登利朝なきに潮にあさりし鹽みてはつまこひかはすともよめり、古事記に我心宇良須能登理叙と有も同し、沖の洲先に居る鷗鳧なといふならん

本居はたゞ洲に在鳥なるへしといへり、萬十四ニひとのこのかなしけしだは波麻渚杼里あなやむこまのをしけくもなし、はます鳥は枕詞、あなやむは足悩む也

頭註 (*)梯云濱州鳥也、みさこを洲鳥といふ、

萱鳥

巻十二 白ま弓ひたの細江の萱鳥の妹にこふれやいをねかねつる、萱鳥といふ名ものに見えす、萱は管の誤歟と翁はいはれき、管鳥は和名抄鵲鴒和名布々土利布穀也とある是也、蘭山翁の説も筒鳥は古名ふゝとり、大さ鳩の如く背黒く小白點あり、鳴聲竹筒をたゝくか如しといへり此事喚子鳥の條下に委しくいへれはこゝに略きつ、合せ見るへし

(*)伊保都登里

巻十七長歌 朝獦爾伊保都登里多底暮獦爾知登里布美多底、云云

いほつ鳥は五百津鳥にて數多むれ居る鳥を云、千鳥百千鳥といへるの例なり

頭註 (*)此一條巻の首、の千鳥と百千鳥との間へ入るへし

朝鳥

巻二 朝鳥のかよひし君か夏草のおもひしなへて云云

あしたは鳥のねくらを出て遠く行かよふものなるに、君か通ひし事を譬へたり、巻三にも朝鳥のなきのみなかん云云とよめり

村鳥

巻六 村鳥乃朝たちゆけは

これもあしたには鳥の打むれて立ゆくをよめり、猶集中におほくあり何れも同し

坂鳥

巻一 君かねのしもとおしなへ坂鳥の朝越(コエ)すして、云云こは谷の木かくれなとに宿れる鳥の朝には群て山のたわめる所なとを飛こえ行ものなるを、供奉の諸人の山路おし越るに譬へたり、坂路は凡は山のたわにあり、鳥も専らその邊を飛こゆる物なれは、坂鳥といふよし眞淵いへり

(※)放鳥

巻二 嶋の宮まかりの池の放鳥(ハナチトリ)人めにこひて池にかつかす

一 嶋の宮池の上なる放鳥あらひなゆきそ君まさすとも

放鳥は水鳥の翅なと切て放ち飼はせたまひし鳥をいふ、其鳥のなれし人めをなつかしみ思ひて、水の上にのみ浮ゐて底へかつき入事をせすといふなり

頭註 (※)後撰集、かけろふに見しはかりにやはたち鳥ゆくへもしらす戀にまとはん、籠(コ)の鳥をはなちやれは行方しらす飛さるを、心のやるかたなくおもひまどふに冠らせたり、萬葉集の放鳥とはこと也

母知鳥

巻五 父母を見れはたふとし妻子(メコ)見れはめくしうつくし世の中はかくそことはり母知鳥のかゝらはしもよ 下略 これは黐にかゝれる鳥の立はなれかたき如く、親(ヤカラ)にかゝはりてのかれかたき理りをいへり、黐鳥の事は巻十三にも、鳥の埼邪(ザキ)伎ありたてる花橘を末枝(ホスエ)に毛知引懸仲つ枝にいかるかかけ下枝(シヅエ)にしめをかけなか母を取らくを知らになか父を取らくをしらに、云云神樂歌にも湊田にくゝひ八つをりとろちなやとろちなやつなからとろちなや、なとあまたよみたり

水鳥

巻廿 美豆等利乃多知(タチ)能伊蘇伎(イソキ)爾

萬葉集名物考目録

獸類　二十二種

蟲類　十七種

魚類　十二種

貝類　十二種

(一)鹿 久老云集中しかには牡鹿と書、鹿の一字はおほく加とのみよみたり

巻八 山ひこの相とよむまて妻戀に鹿鳴山邊に獨のみして 大伴家持

同 なと鹿のわひ鳴すなるけたしくも秋野の萩やしけくちるらん

同 此頃の朝けに聞は足曳の山をとよもし小牡鹿なくも

巻一に秋去は今も見るごと妻戀に鹿將鳴山曾云云といふ歌にいへる如く、鹿とのみ一字書る所はかとよまされは、しらへ調はぬあり、しかには必す牡鹿と牡の字を添てかけり、鹿の一字をしかと訓てよろしきはわつかに一ッ二ッなり、和名抄にも鹿和名加とありと宣長いへとも、鹿と一字のみ書てしかとよめる歌集中多し、古へは鹿をかとも、しかとも、しゝともよへるは常のこと也、巻十三に射目立十六待如床敷而とある十六は鹿なり、巻六御山者射目立渡朝獵爾十六履起之、云云 十六は猪鹿をすへていふ名なり、十六は四々の言に借たり、久老云、しゝとは猪鹿の惣名なれと、わけていへはゐるといひかといへり、巻九に秋芽子乎妻問鹿許曾一ッ子二ッ子持有跡五十戸鹿兒自物吾獨子之草枕客二師往者、云云 巻廿に可胡自母乃多太比等里之旦、云云 鹿ハ子一ッ二ッうむものといへり、然れは子のいと少き譬にあけて人の獨子には冠らせたるなり、巻四に夏野行牡鹿の角の束の間も妹か心を忘れておもへや、鹿は夏の初に角落ておひかはるかいまた短けれは束の間といはん序とせり、心はしはしも思ひ忘れんやといふなり、夏鹿の弱角を取て藥に入ることあり、巻十六に爲レ鹿よめるといふ長歌に、四月と五月の間に藥獵つかふる時にとて、吾角は御蓋のはやし吾毛らは御筆の林云云 とあるも、夏獵とて鹿のわか角をとる狩也、推古天皇十九年五月五日、兎田野に藥狩し給ふよしあれと、此歌によれは其日に限らさるへし、和名抄、鹿茸和名鹿乃和加豆乃とある是なり、又和名抄鹿和名加 斑獸也、爾雅集注云、牡鹿曰麚日本紀私記云牡鹿佐乎之加 牡鹿曰麀和名米加 其子曰麛和名加具 とあるにて詳なり

頭註 (二)人丸長歌、三の巻弱薦乎獵路乃小野爾十六社者伊波比拜目シカトハシカノ反サニテ、サハ早キ言、カ臭也、鹿ハ臭猛キ物ナレハ鹿ヲカ一言ニ云フ、臭ハ本語ナリ、早男鹿ト云、走ル事早キ故ニ早鹿ノ義ニテ、シカト云カ、又一名カセキト

云、セキノ反シニシテカシ、トモ云

(三)鹿兒自物吾獨子之、云云鹿ハ春の土用さめに九月ぶりに兒うむといへり、たゝ一ツのみうみけるものゆゑ人の獨り子もたるにたとへたる也、二ツ子うむことはなきものそと狩人いへり、其子ビイビイと鳴て母鹿につきありきて乳を飲ものないとなん、一とせに一度ならではうますとそ

(三)禮記月令ニ、仲夏之月、鹿角解ト見エタレド、コハサバカリ細ニ云ヘキニ非ス、只夏ノ初ニ落テ生ヒカハレルカマダ短クテ手束ハカリナルヲ、夏の行をしかの角のつかの間トハ云ナリ

(一)宍

巻十一 高山の峯行宍乃友おほみ袖ふらすきぬ忘るとおもふな（猪ハ友多ク群行故ニ云、鹿ハ牝牡別レテ群ル事ナシ、故ニ妻乞スルナリ）

巻十四 (二)安太多良のねにふす思之のありつゝもあれはいたらんねとなさりそね、さて古へは鹿猪ともたゝ(三)しゝとよみたれと、此二首の歌は(四)野猪なり、猪は必ふす所をかへぬものなれは譬にとれり、いたらんは往たらんを略けり、ねとなさりそねは臥所を外へしる事なかれと也、和名抄本草云、野猪（和名久佐非奈岐）とある即今俗にいふゐのしゝなり、後の歌にはたけりゐ、ふするなとゝよみて、しゝとよめるはなし、されとたゝゐとのみいふ時は家猪也、和名抄爾雅注云、猪一名彘（和名井）兼名苑云、一名豕、方言注云、豚（亦作豘）(五)豕子也、ふたとゐのしゝとは大かた其形似たれとも豚はもと唐國のもの也、ゐのしゝは古へより我國にすめり、ふたは家に飼ふものゆゑ唐にて家猪といひ、ゐのしゝは山にすみて人になれさるものゆゑ野猪といへり、猶かもとあひると相似てことなるものゆゑ家鴨野鴨とかきてわかてるか如し

頭註

(一)△雄略紀、天皇校猟于葛城山、云云嗔猪従草中暴出逐人、云云

○ヰハ動ヌ言ニテ、猪ハ臥處ヲ定メテ其處ヲ他ニ移サヌモノ故ニヰト名付、

(二)巻七に陸奥の吾田多良眞弓とよめる所なり

(三)○シシトハ足アシノアノ言ノ省ニテ、四足ノ心ナリ、四足ノ總名ナリ

(四)○野猪ハ春の土用さめと秋の彼岸と年に二度子うむといへり、春秋ともに十二疋也、潤月あれは十三疋うむと狩人いへり、その子産には人の往かひかたき谷に薄をうす高くかきつみて小屋の如くになして一方に出入すへき口を明たりとなん、それを狩人はカルモカクゐといふよし也、されは後の歌人も猪のかるもかき臥猪の床なとよめるそ、さることなりける

七巻、江林にやとる（次）宍やもとむる（求告）によき白栲の袖まきあけて宍待我背

宣長云、次ハ伏の誤、求告は來告の誤にて、ふせる宍やもきぬとつげけんなるへしといへり、この宍も猪をよめるならん

(五)△武烈紀鮪臣を乃樂山に戮せし時、影媛収埋畢てよめる歌、

上略水そゝぐ鮪の稚子をあさりつな偉能古（勿求食猪子）

牟射佐妣

卷三　牟射佐妣は木末もとむと足日木の山のさつを（獵人をいふ）にあひにけるかも　志貴皇子

卷六　丈夫か高圓山にせめたれは里にをりくる牟射佐妣そこれ　坂上郎女

卷七　三國山木ぬれ（末爾）にすまふ（住歴）むさゝひの（武佐左妣乃）鳥待かことわれ待やせん

和名抄本草云鼺鼠一名鼯鼠(*)（和名毛美佐比　一云無佐々比）今阿波の俗にもゝといひ、土左にてもゝが、薩摩にてもま、東國の人はもゝぐはといふよし、これ皆古名の毛美を轉したる也、又のぶすま或はそばをしきとも云、深山には何こにも住めり、樹の上をかけりて鳥をとるといへり、形猫に似て將て毛の色赤黑し、尾ひらくして身よりも長く、手と足との間に肉翅ありて尾につらなる、それをひらきて飛時は伏翼の如し、梢より飛下るのみにて下より飛上る事はあたはさるものなりとそ

頭註 (*)爾雅、鼯鼠狀如小狐似蝙蝠肉翅々尾項脅毛紫赤色、背上蒼艾色腹下黃喙頷雜白脚短爪長尾三尺許飛且乳亦謂之飛生、聲如人呼、食火烟、能從高赴下、不能從下上高
久老云毛美と云名ものに見えたるなし、むさゝひは集中を始め後の歌にもよみたれは俗言といへるはいかに、是のみならす和名抄にはかゝる類おほし

乎佐藝(*)

契沖云ヲサキハ東ノ俗語ニテ都ノ方ニ通セヌ言歟、此外見及はず、ウサキトハ愛鷺ト云意歟、鷺に似てうつくしけれは也

卷十四東歌　とやの野に乎佐藝ねらはりをさ〳〵もねなへこ故に母にころはえ

鷹あはせんとて柴なとさしてうかゝひ居る所を田舍にて鳥屋といふ、それを轉して獸とる爲にするをもしかいふか、をさきねらはりは兎ねらひ也、をさ〳〵は何にても專らなる樣の事にいへり、專ら相寐し事もなき妹なから其母に嘖られしと也、和名抄兎（和名宇佐木）今も俗にをさきともうさきともよへり、山にも野にも多くすめり

爾雅云、詩周南云肅々兎罝是也、李巡云、兎自作徑路張罝捕之也、然則張網遮兎因名曰罝

頭註 (*)天武紀に置始連菟と云人名をも、元正紀には宇佐伎とかゝ

れたり、されは乎佐岐ハ本より田舎言にて、宇佐伎そ正しかりける、清香云東ノ歌にうさぎををさぎといふ訛なり、今は東國にてもうさぎといへりとそ

狐(一)

巻十六 さすなへに湯わかせ兒とも櫟津の檜橋よりこん狐にあむさん

こは詠數種物歌といふはし書ありて宴會の席にありとあるものを一つによみたる也、さすなへは和名抄銚子（佐之奈閉俗云佐須奈閉）とあり、櫟津は允恭記に、到二倭春日一食二于櫟井上一とある是也、檜橋もそこに有へし、狐にあむさんは令レ浴なり、和名抄狐（和名木豆禰）獸名射干也、さて木豆禰の禰を略きてきつとのみ歌にはよめり、伊勢物語に夜もあけはきつにはめなんとあるに同し、又俗にきつねを轉してくつねともけつねともよへり

頭註 (一)○キツ子トハキハ氣也、ツハ列コト、子ハ根ニシテ天地萬物ノ氣ノ根ニ續列ノ名也、故ニ命長シ
敎長集にきつねのなくを聞て、聞人のさかゆときけは夜を寒みなくなるきつをあはれとそきく

虎(一)

巻十六 虎にのり古屋を越て青淵に鮫龍とりこん劍刀もか

和産なけれとも和名抄説文云、虎（和名止良）山獸之君也、巻十六に韓國乃虎云神乎生取爾八頭取持來其皮乎多々彌爾刺ともよめり、獸の中にてすくれたれは神とはいふ、欽明記に(二)紀膳臣巴提か虎に向て汝威神也ともあり、さて古屋といふ所大和にありてむかしそこに名高き武夫有しならん、鮫は蛟の誤也、和名抄に蛟（和名美豆知）龍屬也と云是なり

頭註 (一)巻一 敵見有虎可叫吼登、云云敵を見付タル虎カホユルトオビユルマデニト云心ナリ
(二)神代紀ニ素戔嗚の蛇に向て汝は可畏神也とのたまひし類なり

馬

巻七 妹か門出入乃河(一)の瀬をはやみわか馬爪衝いへもふらしも

巻一 玉きはる内の大野に馬なめてあさふますらんその草深野

巻三 鹽津山打越ゆけは我のれる馬そ爪突家こふらしも

巻四 千鳥鳴さほの川との清き瀬を馬うち渡しいつかかよはん

巻六 馬の歩(アユミ)押てとゝめよ住吉の岸の黄土(ハニフ)ににほひてゆかん

巻六に馬白物(ウマシモノ)縄取附云云 巻二十に宇麻能都米都久志能佐伎爾、云云 巻十八に馬乃爪いつくすきはみふなのへのいはつるまてに云云 猶(一)多し、神代紀に素盞嗚尊秋則放二天斑馬一使レ伏二田中一とあるを見れは、神代より馬はありとおほゆる也、二條良基公の嵯峨野物語に、馬は昔唐國より來し時、耳の獸と云て稀なりしかは、帝王の御氣色よき大臣公卿の外は乘ことなし、されは良家と書て馬人(三)(ウマヒト)とよむといへり

附箋 馬、木之部梅の條にいへる所々にてうまと正しくいへり、是古言を今に失はざる也、さて二條良基公の御説の唐國より來りしとあるは御誤なるべし、時によりて唐國より良馬を奉りしことはありもすべけれど、もとより皇國に上つ代より馬あることは論なし、この御説の是非をもいふべきことなり

頭註 (二)巻九に、妹か門入出見川(イリイツミガハ)の常滑にとあれは、是も入出水河と有しを入出を下上に誤り、水を乃に誤れるならん、さて泉川なるを妹か門入出と云下したり

(三)十九、馬太使由吉氐(ダ)、行ガタキ處ヲモ馬ニ乘リテシノキ行事也、武ヲタケト云モシノグ事ヲ云名ナリ、又ハ馬ノ手綱ヲタグル也ト梯ニ云ヘリ、

(一)馬ウマ、日本紀萬葉ハ皆ウマとかけり、萬葉第廿ニムマと書たれと、それは東歌なれはそのよしたるへし、和名にはおほくムマとかき又ウマともかけり

多都能馬

巻五 多都能馬も今も得てしか青によし奈良の都にゆきてこんため 太宰帥大伴卿

答歌 多都能馬をあれはもとめん青によし奈良の都にこん人のため 大伴淡等

周禮凡馬七尺以上爲レ騋、八尺以上爲レ龍といへり、日本紀竟宴歌に十つゐあまり八つゐをこゆるたつのこまとよめる是なり、和名抄駿馬、穆天子傳云、駿 漢語抄云上岐字萬日本紀私記云須久禮太留字萬 馬之美稱也といひて、すへて駿足の馬を稱して龍乃馬(タツノマ)といへり

(*)駒

―コマハコウマ也

巻十一 妹か髪あけさゝ葉野の放駒あらひにけらしあはぬおもへは

巻二十 宇ま屋なる縄たつ古馬のおくるかへ妹かいひしをおきて悲しも

和名抄王仁煦曰、駒 和名古萬 馬子也、また天中記云、馬一歳曰レ馵、二歳曰レ駒ともあり、さてうまやは廐也、なはたつ駒は繫る縄を斷て駈出るをいふ、おくるかへは馬の

人を送らんとする如く、妻の送りてもゆかんさまにする歎きの切なりしをいふにて、かへはなへに同し、縄たつ駒はおくれしといふ譬喩にとりて、おくるかへはおくらんやといふなり、毛詩注に、五尺以上曰レ駒とも、又朱注に駒馬之小者ともいへり、されと歌によめる駒は子馬(コマ)にあらすして高麗國(コマノクニ)より渡り來し馬をよしとせし故にこまとよへるか、狛錦、狛劍も高麗國より奉り來しをいへは也けり

附案 此說いかゝあらん今も馬の子を駒(コマ)といふにあらすや

頭註 (※)左檜の隈檜の隈川に駐馬(コマトメテ)馬に水かへ吾よそに見んともよめり

黒馬

巻四 佐保川の小石(サヾレ)ふみ渡り夜干玉の黒馬(コマ)の來る夜は年(一)にもあらぬか 大伴郎女

巻十三 川の瀨の石ふみ渡り野干玉の黒馬の來る夜(二)は常にあらぬかも

此歌いさゝかたかへり、黒馬と書るはうめを烏梅と書る如く字音をとれる假字のみ也、宣長云、黒の字はこくの音をとれる也、ぬは玉の下の夜といふへかゝれりと云へり、古馬も黒馬も假字にして駒をよめる也、こまはこうまの略ならんか、又老若にかゝはらてこまといへり

頭註 (一)年は常の誤なるへしといへり

(二)巻十三に、烏玉之黒馬(クロマ)爾乘而河瀨乎七湍(セ)渡而ともあり

黒駒

巻七 遠くありて雲居に見ゆる妹か家に早くいたらんあゆめ黒駒(クロコマ)

巻十三 赤駒厩立黒駒(クロコマノ)厩立而とあり、毛詩注に、純黒曰レ驪とも、又驪黒色也と有て、今俗に云からす黒なとのたくひ也

赤駒

巻十九 皇は神にしませは赤駒のはらはふ田居を京師(ミヤコ)となしつ 大伴安麻呂

巻三 赤駒のあがき早くは雲居にも隱れ行んそ袖まかん我妹(ワキモ)

巻四 赤駒のこゆるうませのしめゆひし妹かこゝろはうたかひもなし (越 馬柵乃)

馬柵はうませとよむへし、十四に宇麻勢胡之麥はむ駒の、云又柜楉越爾麥咋駒乃云 これによりて知るへし

巻五 阿迦胡麻爾志都久良宇知意伎波比能利提とあり、あかこまは赤駒なり、しつくらは和名抄韉（之太久良）とありて、下つ鞍なり、さて赤駒は毛詩古義云、騂本作レ騮、說文云、赤馬黑毛尾也、また古註云、赤身黑鬣曰レ騂によれは、俗に云へにくりけならん、巻十七に鸕坂川渡る瀨おほみ此（コノ）阿加馬（アカマ）の足搔の水にきぬ濡にけり、巻二十に阿加胡馬を山野にはかしとりかてに多摩の横山かしゆかやらん、此二首の歌は赤駒にあらすして我駒（ワカコマ）をあかまともあかこまともよめる也

青駒（並）青馬

巻二 青駒（アヲコマ）の足搔を速み雲居にそ妹かあたりを過て來にける（人麻呂）

巻二十 天平寶字二年正月爲七日侍宴 大伴宿禰家持作歌

水鳥の可毛の羽の色の青馬（アヲウマ）をけふ見る人は限りなしといふ

水鳥の鴨の羽色とは青といはん序也、巻八に水鳥の鴨の羽色乃青山ともよめり、限りなしといふは命の限りなきをいへり、さて白馬（二）の節會の事は、延喜式凡青馬二十匹自二十一月一日一至二正月七日二一寮半分飼レ之（一疋五飼）云云、きはめて白き物には青色あるものなれは、青馬とはいへとも、實は白馬なりと眞淵はいはれき、されと續紀神護景雲二年九月獻二青馬白髮尾一と有れを思ふに、青を白き事とせは殊更に白髮尾とは書へからす、はた鴨の羽色といへるも青といはん序とのみ聞えねは、青馬は今もあを馬とゝなふるものなるへしと千蔭はいへり、大かた古書延喜式まても白馬と書る事なく皆青馬と書たり、其上唐ふみ、禮記月令にも青馬といへるをや、兼盛集にふる雪に色もかはらて引ものをたれあをうまと名つけそめけんとよめるは、春白馬を見るといふこと白虎通にならひて其頃は白馬を率けんとおもはるゝ也、毛詩注云、青驪曰レ騅とあり、又孫炎曰、色青黑之間、郭璞曰、今之鐵驄也といへるは騅は俗にあをけといふにあたれり、黑毛にして青き光りあるをいへり

頭註 （二）河海抄巻五、引十節錄云、正月七日看青馬、青以レ白爲レ本、天有二白龍一地有二白馬一、是日見二白馬一、即年中邪氣遠去不來也、仁明天皇承和元年正月に、豐樂（ブラク）院に御坐て青馬を見給、同六

年正月には紫宸殿に御覽せらる、禮記に春を東郊にむかへて青馬七疋を用ゆとあり

大分青馬

葬三野王歌

卷十三長歌 百小竹之、三野乃王、金厩、立而飼駒、角厩、立而飼駒、何然、大分青馬之、鳴鶴

卷十三反歌 衣袖の大分青馬の嘶音もこゝろあれかも常ゆけになく

大分青馬はたゞ眞白なる意也と冠辭考に委くいはれたり、按に大分青馬はたゞひたをのこまとよまんか、ひたは神代記に純男ひたをとことよめる意にて、大分とも書へし、あをゝ略きてをとのみいふは常なり、さて衣手の常陸とつゝくと同し意とすへしと千蔭はいへり、また久老考云、この金厩角厩と書て西東とよめる書さまを思ふに、青も東の意に假れる字ならん、しからは大分の二字も泰の一字を誤れるものにて、泰は爾雅に西風を泰風といふと見えたれは、泰は西の意に假たる字、さて西は右東は左なれは右のうまや左のうまや、云云 衣手のみぎひだののうまの云云と訓へし、左をひたとのみいふはみぎりをみきといふに同し、葬馬を左右に立たるをよめる歌なり

驄馬

卷十二 おのれゆゑ詈て居れは驄馬の面高夫駄に乘て來へしや

和名抄驄馬青馬也、(※)黄驄馬葦ノ花毛馬也云云と有、翁云常は身をよそひ馬のうるはしきにのり馬の頭あけつゝいさみ來りしを、われ故に父母に罵れて居る男なれは、馬の頭も吾頭をも高く擧て乘來る事は得し、うなだれてこそ通はめと女のなけく歌なりといはれき、夫駄は驛路の荷を負する馬にて俗に云ふ荷駄也といへり

頭注(※)新撰字鏡に驄をあをうまと訓り、驄は青白を駮へし斑馬の老て白毛のみに變るを害事也とて御覽する也、一種圓形の斑なるを連錢葦毛と呼也、今の白馬とて眼の赤く濁たるは又一種にて病相也と云へり、驄の老て純白なるをこそ白馬とは云と馬術の人のかたりき

十八 かた思ひを宇馬に不都馬におほせもてこしへにやらは人かたはんかも

不都馬　大美馬

(※)不都馬は太馬の約言也、ふとくたくましき馬を云、かたはんは後撰集、山風の花の香かたふ麓には春の霞をほたし

なりけるとよめるかたふに同しく、今かとはすなといふことくかすめぬすむことなり、重き荷を馬に負せやらは盗人かとるへきと戯る也、卷三に夕狩に鳥ふみたて大美馬の口おしとゝめ云云 とよめるおほみ馬は、おほきにたくましき御馬といへるなり

頭註（※）太を布都と云る例ハ、古事記の比古布都押之信命を、書紀に彦太忍信命と有にてしるへし、

梯云、宇萬爾布都麻爾、或人云ウマニフツサニト訓ヘシ、天ヲマノ假字ニ用ヒタルト同シク、麻ヲサノ假字ニ用ヒタル也、フサタヲリト云ヘルニ同シクフツサリトト俗ニ云心也ト云ヘリ

事負乃牛

卷十六 吾妹兒か額に生る雙六の事負乃牛の倉のうへの瘡

端書に無心所著歌とあり、實に心のよる所なき様にもとめてよめる也、濱成式に雜會躰といふ也、源氏物語に常夏の卷に草若みひたちの海のいかゝさきいかてあひ見んたこの海浦浪なといふ類ひなり、さてことひ牛は卷九に牡牛乃三宅之瀉爾指向鹿島崎爾、云云 眞淵云、牡牛は大牛にて物を殊に多く負故に殊負牛と云へり、和名抄特牛和名古度比頭大牛也とあり、又阿波にてこつとひといひ、中國にてこつていゝ東國にてこてといふ皆ことひより轉し來れる也、卷十六に牛にこそ鼻繩はくれあし引のこのかた山の云云 こは牛の鼻を繩あるひは木をもて貫けるをいふ也、和名抄牛麋波奈都良 牛繮也とあり、本草に木にてつくれるを牛鼻、木繩にて作るを草桊とも牛鼻繩ともかけり

頭註（二）○宣長云事負之牛は殊負にて、物を殊に多く負よしの名なり

○今俗ニゴツトヒ牛ト云ハ此事負乃牛ノ誤レルニヤ、ト梯ニ云ヘリ

○牛ノ音モウ也、故ニ牛鳴ノ字ヲ牛鳴ト義訓ヲナス

（三）字書云、桊牛乃波奈岐 牛鼻環也

熊

卷十一 荒熊の住とふ山のしはせ山責てとふとも汝か名はのらし

和名抄熊和名久萬 獸之似羆而小者也、熊は深山にすみて猛き獸にて人を害するものなれは提みて荒熊といふ也、しかれとも木曾の山人は熊の兒を捕て畜ふものおほし、兒の

時よりかへはよく人になるゝといへり、喉の下に白く曲れる毛のあるを月の輪と云へり、月の輪あるものを眞くまといひ、月の輪なきものを笹熊[ササクマ]といふよし也

眞神

卷八 大口の眞神乃原にふる雪はいたくなふりそ家もあらなくに

卷十三 大口の眞神乃原從[ユ]云々こは狼の事(一)にてよに猛き獸なれは畏[カシコ]みて眞神といひならひ、且かれか口は殊に大きにしあれはおほ口の眞神の原といひかけたり(二)、欽明紀に秦大[ハダノオホ]津父[ツチ]云、山逢[ニ]二狼相鬪汚血[ニ][テナスレルニ]略汝是貴神[イマシハカシコキカミニシテコノミス]而樂[ニ]麁[アラフル]行[ワザヲ]一といへり、和名抄說文云、狼[和名於保加美]今俗におほかめともいへり、形犬に似て耳は小し、毛の色薄黒くして赤みあり 顏長く口尖りておほき也、脚ふとくして指に蹼[ミツカキ]ありてよく水を涉るといへり、常に鹿を捉り食ふ、その聲大にして山に響き遠く聞ゆといへり

頭註 (一)狼、[オホカミ] 契沖云、大嚙[オホカミ]歟、大神歟、日本紀ノ欽明紀、狼[ニヲ]指[テハ]汝是貴[カシコキ]神ト云ヘル事アリ、又大和高市郡[ニ]眞神原アリ、萬葉ニ大口ノ眞神原トつゞけたるは昔狼のあれけるより名付たるよし、彼國の風土記に有といへり

(二)飛鳥の鄕の北に在、あすかの苫田[トタ]又滿見か原とも呼し地なり、
大口の眞神といふを略しておほかみといへるか、すへて獸類の靈あるをは神といふは古言也、唐國の虎と云神とよめるに同し

猿

紫式部集、ましも猶をちかた人の聲かはせ我越わふるたこのよび坂
八雲[ニ]ましらまたましと出たり

卷三 あな見にく賢[サカシラ]をすと酒のまぬ人をよく見れは猿[サル]にかも似る

神武紀に大醜乎鞅奈彌儞何[アナミニク]と訓り、卷十六情出[サカシラ]、情進[サカシラ]ともかけり、賢人ふりたるをにくめり、集中に巾の(一)猿の字をましと訓る所おほし、ましは猿の(二)梵語摩斯[マシラ]咤の音を略せる也、猿は猨の俗字にて、猿を古へよりさると訓めるはあてたかへり、猿はてなかさるにして、今多きさるの事にあらす、毛詩注云、猱猨[ハ]屬性善登[レ]木々朱注云、猱獼猴也といふもの卽こゝにいふさる也

頭註 (一)卷二
妹か家もすぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあら猿尾[マシヲ]
(二)祖庭事苑曰、梵云[ニ]摩斯吒[ト]此言[ニ]獼猴[ト]

○マシラトハシラノ反サニテマサナリ、マサルト活用ク、諸獸ニ勝テ四足トモニ手ノ如ニ能働ノ名ナリ、又サルトモ云、マシラノマハ大ナルコトニテ、形ノ大ナルヲマシラト云、サルノサハ小事ニテ、形ノ小ナルヲサルト云也

(一)犬

巻七旋頭歌 垣こしに犬よひこして鳥狩する君青山の葉しけき山へ馬やすめ君、巻五長歌伊奴時母能道爾布斯弖夜伊能知周疑南、云云 加茂翁云、犬は道のまゝに打臥も死もするものなるを、旅路なから死することに譬たり、犬し物とは犬の如くなり、犬といふものなとゝいふ意なり、さて垣こしに犬よひこして鳥狩するとあることく、狩には必す犬つかふもの也、その狩に用る犬を本草に田犬といへり、長喙とて頭の長きめいぬをゑらひてつかふとそ、花鏡曰、田犬長喙細身毛短脚高尾卷無毛、使之上山履險甚捷、胎三月而其性比他犬尤烈豺見之而跪兎見之而藏毎率之出獵、以鷹爲眼目鷹之所向犬卽趨而攫之故好獵者多畜焉

頭註 (一)十三長哥射目立十六待如床敷而吾待公犬莫吠行年

禮記曲禮疏、狗犬通名若分而言之則大者爲犬小者爲狗、爾雅、狗未成豪注曰、狗子未生乾毛者といへるによれはゑのこなり

○犬イハ氣也、ヌハ貫也、牝牡交合テ氣貫ヲナシテ離難キヲ名トシテイヌト云、亦ヱヌトモ云、ヱハ搦事ヌハ貫ニテ、氣搦合テ貫ヲナスノ名ナリ、扨婚姻ニ犬張子ヲ用ルハ狗ノ如クニ健ナル兒ヲ多儲ノ義ニヨリ犬張子ヲ用

蟲類

蟋蟀

巻十 秋風の寒くふくなへ吾屋戸の淺茅かもとに蟋蟀鳴も

同 草ふかみ蟋蟀さはに鳴宿の芽子見に君はいつか來まさん

同 庭草に村雨ふりて蟋蟀の鳴聲きけは秋付にけり

和名抄文字集略云、蜻蛚(和名古保呂木)とあり、漆海云蜻蛚といふ名は文選晋張孟陽七哀詩に仰聽離鴻鳴俯聽蜻蛚吟と見え、李善注に易通卦驗曰、立秋蜻蛚鳴蔡邕、月令章句曰、蟋蟀蟲名俗謂之蜻蛚、かゝれは蜻蛚と蟋蟀は同物なれは也、且和名抄兼名苑云、蟋蟀一名蛬(和名木里木里須)と見えたれはきり〳〵すの名も古くいへる名なるへし、按るに和名

抄促織和名波太於里米鳴聲如急織レ機故以名也とありて、蜻蛚。蟋蟀。促織。を三條に出せるは誤なり、三蟲皆同物なるを各別ものとせしは共蟲の名の異なるによりてみたりにわかてるならん、毛詩注にも、蟋蟀蛬也、朱注云蟋蟀似蝗而小正黑有光澤如レ漆有二角翅一或謂二之促織一とあるにて三名同物なるを知るへし、本草啓蒙に諸國の方言を出して委し、促織和名イトヾ 京ハタオリメ和名抄キリ／＼ス同コホコギ同イトジ城州八幡ツヾリサセ越後クロツムシ筑後クロツヾ同イトムシ尾張カタサセ南部コウコウ江戸コロ大和テヅヽチドシ詩經名物辨解フテツムシ同コホロキ紀州水戸此外猶多く古名の殘れる國々あり、卷十旋頭歌に蟋蟀之音床隔爾鳴乍本名とよめるは、詩の豳風に七月在レ野八月在レ宇九月在レ戸十月蟋蟀入二我牀下一といふにかなへり、さて此蟲は必す立秋の頃よりなく、聲高くしてりう／＼といふか如し、蛬は聲低くしてつゝりさせといふか如し、大倉州志に促織鳴懶婦驚といふはてつゝをどしの名にあへり、古今集に秋風にほころひぬらし藤はかまつゝりさせてふきり／＼すなく、此歌もこほろきをきり／＼すとよめり、又古今六帖にくれぬれはねになかんとやきり／＼す床のあたりにちかつきぬらんとも有て、此頃はやくこほろきをきり／＼すとよめる事いよゝ證とすへし

頭註(*)楊子方言、蜻蛚即趨織也精列二音楚謂二之蟋蟀一或謂二之蛬一梁國呼南楚之間謂二之蚟孫一孫一作蜙

(一)蟬

卷十五　岩はしる瀧もとゝろに鳴蟬の聲をしきけは都しおもほゆ　大石蓑麿

集中詠蟬といふ題に多く日具良之とよめり、蟬をせみとよめるはたゝ此歌一首のみなり、さて蟬をせみと云は、字の音にて蘭をらにといへる類なり、又蟬をは夏のものとし日くらしは秋のもの也といふは後の誤なり、夏秋と物のたかひたるにはあらす、蟬は六月の節たては鳴ものゆゑに、夏衣のうすきに譬へて蟬の羽衣なとよめる歌後に多し

頭註(一)今按ニ、セミハ蟬ノ字音ニアラス、蚤、衣魚、蛇ナト云ミ。ニテ、ミハムシノ反ミトナレハ、セミハセムシナルヘシ、蟬ノ鳴聲ハセワシ鳴モノ故ニセギリムシノ意ナラン、物語文

ニセギリ聲トイヘルハ世話シクモノ言ヲ云ヘリ、サレハセミハセキリムシノ意ナルヘシ、蚤ハノギムシノ意ニテ、ノギハ芒ナリ、芒ハ人ノ身ニツキテイラ／＼トサスモノナレハ芒蟲ト云フヲ中略シテノミト云ナラン、衣魚ハシラムシ、蝨モ白ムシノ略、蛇ハヘヒムシノヒヲヘニ轉シテハヘ蟲ノ意、蝮モハヘ蟲ノ意ニテハヘル蟲ヲ云カ、跂行、唐韻云、跂音岐波布、蟲行也、足ノ有無ニ限ラス蛇ヲモ云ヘルナラン

日晩

大伴家持晩蟬歌一首

八 こもりのみをればいふせみなくさむと出立聞ば來鳴日晩

巻十 默然もあらん時もなかなん日晩のものもふ時に鳴つゝもとな

巻十五 今よりは秋つきぬらん足引の山松かげに日具良之鳴ぬ

巻十 はきの花咲たる野邊に日晩の鳴なるなへに秋風の吹

巻十七 日晩の鳴たる時はをみなへし咲たる野邊をゆきつゝ見べし

さて今俗に日くらしとよへる蟬に三種あり、和名抄茅蜩和名比久良之小青蟬也とあるは誤なり、集中によめる日晩にあらす、萬葉によめる日晩は本草云蚱蟬なるへし、しかいふは巻十、巻十五、十七に萩女郎花なとによみ合せたる歌多きをもてしるへし、和名にあかせみともあきせみともいふ、今も阿波にては古名を傳へて此蟬を日くらしといひ、筑前にてゆふせみとよへり、八月のはしめつかたよりなく、翅あか黄色にして透とをらす、未の刻より後によく鳴せみ也、又和名抄に茅蜩和名比久良之といへるは大さ六七分にして身の色うす黑きに黄と綠との條あり、翅長くして透とをれり、此蟬は必す申刻より鳴、その聲ひくし、又朝とくよりも鳴事あり、拾遺集に朝ぼらけ日くらしの聲きこゆ也こやあけくれと人のいふらんとよめるものなるへし、又伊豫の吉田にてひくらしとよへる蟬は、阿波にてみこせみといひ、土左にてなつせみといへるものにて、五月の頃朝とくよりゆふくれまて鳴つゝきて聲に抑揚あり、形小くして淡黑く羽色は透とをれり、本草に四五月鳴而小紫青色者蟪蛄也と云是なり

寒蟬 此條蟬の條に付くへし

巻一 寒蟬の命ををしみ浪にぬれいらこが嶋の玉藻かりを

す　麻續王

巻四 虚蟬の世やもふたゆくなにすとか妹にあはすてわか獨りねん　大伴家持

巻十九 宇都世美波戀乎繁美登春麻氣氏、また巻三に虚蟬之代者無常跡云云こは顯しき身の命、顯の身の世とつゝけたるなり、さて集中に空蟬、虚蟬、欝膽なと書しは借字なるを後人は空蟬の字に泥て、蟬脱(*)の事とのみおもへり、其本を極むれはいき死の違になん侍りけると眞淵いへり、

・巻二に天智の崩ませし時ある婦人の歌、空蟬師神爾不勝者離居而、云云 この婦人今顯にてある身は遠つ神の御靈に從ひ奉ることかなはねはおくれ居て歎くと也、また巻十一 虚蟬之妹蛾咲狀思面影爾所見、巻十二 空蟬之人目乎繁不相而云云 これら皆うつゝの身てふ意なる事ことわるを待すして明らか也、さてうつしみともうつそみともよみてうつせみとのみはいはす、そのうつしみは顯しき身てふ意にて正しきを、うつそみうつせみ杯いふは音の轉ろひし物也、古今集の頃にくたりては卽蟬のもぬけに譬へてはかなき意にもいひなし、又蟬をやかて夏はうつせみ

鳴くらしともよみけるは、もぬけするものなれはいきてあるをしもうつせみといふ事となれるもの也と冠辭考に委し

頭注 (*)古今集に、堀河のおとゝをいためる歌に、うつせみはからを見つゝもなぐさめつ深草の山煙だにたてとよみたるより、空蟬を脫殼の事となりて世にも人にもはかなき事にのみ云事になりたりき

○後撰集夏部に、打はへて音を鳴くらすうつ蟬のむなしき戀も我はする哉

酢輕

巻十 春されは酢輕なす野の霍公鳥ほと／＼妹にあはすきにけり

巻九 腰細之須輕娘子之其姿之、云云 巻十六飛翔爲輕如來腰細丹ともよめり、和名抄蠮螉 悅翁二音 和名佐曾里 似蜂而細腰者也、兼名苑、一名蜾蠃と有、雄略記蜾蠃といへる人ありてこれをすかると訓す、俗に似我蜂といふもの也、今常陸にて此蜂をかそりといひ、信濃にてぢすがり、仙臺にてつちすかりといふは皆古名の轉したる也、さて此蜂は桑の木の蟲を負來て己か巢にて七日咒ひすといへり、草木疏に、細腰也、取桑蟲負之于木空中或筆筒中七日

而化爲二其子一、里語曰兒云象レ我象レ我といへは已か如き蜂となれる、其子は一度巣を立さりて再ひ巣には歸らぬものとそ、さるを酢輕如野乃霍公鳥とよみたり、杜鵑も鶯のかひ子の中におひ立て飛ゆきては再ひ歸らぬをかのすかるの如くと云意なり、その蜂は色青黑くして腰は絲の如く細きものなるを、手弱女の腰の細きに譬たり

(一)桑子

卷十二 中〳〵に人とあらすは桑子にもならましものを玉の緒はかり

卷七 たらちねの母か其業桑。尙願へはきぬにきるとふものを

其業は借字にて園に有也といへと、契沖は桑の下子の字を落せしにて、其業の桑子すらとよむへき也、業をなるに用るもいかゝなりといへり、和名抄桑蠒卽桑蠶也といへる卽桑子なり、形は蠶に似てやゝ小く黑茶色なり、こは人の飼ものにあらすして、桑の木におのつからおひ出て繭をなすものにて、桑の木の多くおひたる野には何處にも居れり、天工開物に野蠶といふもの卽桑子にして、そのまゆを野蠶繭いへり、山繭は又別なり

頭註 (一)桑子は桑の葉に養はれて生長する故に桑子といへり神代紀に保食の神の死給ひて眉上生蠒、云云 又口裏含蠒便得抽絲自此始有養蠶之道焉といへり、こゝに倉梯の正房てふ翁がいへる、わか姑は女の業に堪てまゆ引ことをも知つ、一日桑の枝におのづからなる蠒の多かゝるを見つけて、糸ひかはやといふに姑このまゆは唐まゆの如くはあらす、口に含み潤はせて糸はやがて口より引出つへしとて、其わざして糸多く得たりと、なん、これそいと昔より傳れりしわざなるを、かの紀に合せてしらると眞淵いへり

(※)具波麻欲

卷十四 筑波禰のにひ具波麻欲の衣はあれと君かみけしゝあやにきほしも、和名抄桑蠒、唐韵云蟓和名久波萬由と有、新蠶のきぬを專らとするゆゑにかくよめり、卽桑子のつくるところのものにしてまゆの色黃なり、後の歌に富士の桑子のにひ綿とよみて色は黃なれとも綿につくれは色眞しろくなる、(已下未ルヘシ)又俗にかしことといへる蠶あり、櫧の葉を喰ふかゆゑの名なり、そのまゆを山繭といひ、蠶を柞蠶といふこと、種樹書といへるから文にあり、まゆも蠶も野蠶よりはことに大なり

頭註 (※)後漢書光武紀野蠶旅生繭本尤盛、野蠶成レ繭被於山阜一人

收二其利一
最勝王經常著二青色野蠶衣一(註云謂三野蠶繭二和名加羅綿一)とあり、いつこにも上つ代のさまはかくそ有ける

養蠶

卷十二 たらちねの母か養蠶の眉こもりいふせくもあるか妹にあはすて

卷十三 たらちねの母か養蠶の眉こもり氣つきわたり

卷十四 新室の許騰伎(一)にいたれははた薄ほに出し君か見えぬ此頃

和名抄蠶(和名加比古一云古加比須)蟲吐絲也、俗爲蠶字、說文云繭(和名萬由)蠶衣也、もとことのみいへるか蠶の名なり、それを家に飼ゆゑにかふこともかひこともいへる也、催馬樂に走井の蠶萱(コカヤ)かる長女(オサメ)かけそれにこそ繭つくらせて糸引おさめとよめるも同し、眉隱(マユコモリ)(二)の眉は借字にて繭なり、萬由はもと眞木綿(マユフ)の略なるへし、由布は木綿(ユフ)なり、木綿は皮を絲に造りて織るへきもの也、蠶の糸もその木綿の糸に似て殊更によろしきゆゑに眞の木綿(マコトユフ)也といふ意にて、まゆとはよへるならん、さて眉隱は蠶の卵を出て漸々生長して四たひ眠り四たひ起て後蠶萱(コカヤ)を刈てそれに繭をつくらせること催馬樂の歌の如し、そのまゆをつくらんとする時に、先かすみのやうなるいとを出すを俗にすがくといふ、そのすかきたる中に繭をつくりてかきこもるを眉隱とはいふ也、繭の中に蠶のひとつこもりたるを和名抄に獨繭(和名比岐萬遊)と有て、絲にひくは必す是を專らよしとす、後撰に引まゆのかくふたこもりせまほしくとはよめれと、絲にひくにはひとつこもりをゐりてこそひけ、中務の集にさ月五日爲中の家に女ともいそく糸くりさうふ、ふけり、あやめくさ手引の糸の手にかけて長き日くらしひくそわひしきと見えて、今も糸くりけるはもはら五月のはしめつかたする女のわさなり、又繭の中に二ツも三ツも蠶のこもりてつくれるものはいとにならさるゆゑ綿に作るといへり

頭註

(一)許騰伎は蠶を養ふ時也、三四月の間を云

(二)卷九盧木綿(ウツユフ)乃牢而座在者(コモリテヲレハ)云云、及次

こは菟原の處女か今は年のおよずけたれは、恥らひて家にふかくこもりてのみ居るを、まゆの內に蠶のこもりてあるに譬て冠らせたり、又云盧木綿は野蠶をいふ、何そなれは後世に用

るまゆは仁德の御時に渡れるから蠶也、それより前にゆふてふものは野蠶の外なしと眞淵いへり、

綿

巻三 白縫の筑紫の綿は身につけていまたはきねとあたゝかに見ゆ　沙彌滿誓

詠緜歌といふ端書あり、筑紫の綿は續紀に神護景雲三年三月より始て毎レ年運二太宰府綿二十萬屯一輸二京庫一と有、延喜式にも大宰府貢レ綿こと見えたり、今は其綿を積重ねたるを見てよめるなるへし、童蒙抄に云、しらぬひのとは筑紫の綿のひろくよきを、きぬに入れすしてたゝ縫て昔はきけり、今やうはさるへきやむことなき人なとさてきることとあまた聞ゆとあるは、今の世にいはゆるわたこのさまなるへし、さて綿といふは眞綿にして、本艸に絲綿といふ是なり、凡て繭の絲となすにたえさるものをもて眞綿となすといへり、

夏蟲

巻九 夏蟲の火に入るかことく水門(ミナト)入りに船こくかことく云云

とよめる夏蟲は、こは火に入るの虫をいへり飛蛾とも燈蛾とも本草にいへるものにして、夏蟲とよめるに種々あり、(二)何も歌のさまによりて定むへきなれと、こは飛蛾也、今俗に火とりむしといふ是なり、蠶蛾(ヒヽル)に似て大小種々のことなるあり、晝は隱れ睡りて夜は飛かけりて燈火に集り終に油に入りて死するもの也、和名抄莊子云、夏蟲(俗云奈豆無之)不レ可二以語一レ氷、また正字通に不レ安二其昧一而樂二其明一譬猶二文蛾去レ暗起レ燈而死一也といへるも是也、古今集に宵のまもはかなく見ゆる夏蟲にまとひまされる戀もするかな、また伊勢か歌に夏蟲のおもひに入てなそもかく我こゝろからもえんともするとよめり、(三)又螢をも蟬をも夏蟲とよめる歌あれとも意たかへり

頭註

(一)後選集、夏蟲の身をたきすてゝたましあらは我とまねばん人目もる身ぞ
伊勢集に、宵のまに身をなけはつる夏蟲はきえてや人にあふときくらん
仁德紀哥、那菟務始(夏虫)能臂務始(火虫)能虚呂望(衣)、赴多幣(二重)著(著而)氏云云
古今集に、夏蟲の身をいたつらになす事もひとつ思ひによりてなりけり、夏蟲の燈火によりてこがれ死る愚さを、身をいたつらにといふ也、いつれも思ひを火にとりなせり
(三)又蟬をも後撰に、やへむくら茂れる宿は夏蟲の聲(是ハ蟬チヨメリ)より外に問

ふ人もなし、
後撰集、是ハ螢也、又つゝめともかくれぬものは夏蟲の身よりあまれる思ひなりけり
一首の意を以て蟬とも螢とも燈蛾ともしらるなり

螢

卷十三 玉章のつかひのいへは螢成ほのかにきゝて大士を 下略

いへるは、螢火の如くほのかに聞つたふおほつかなさを云よせし也、神代紀に如二螢火一赫神と云へるにてこゝはよく聞ゆ、和名抄兼名苑云、螢一名熠燿和名保太流大和本艸に云、ほたるは火垂也、又或說に星垂の意なりともいへり、花鏡に群二飛天半一猶若二小星一といふにあへり、螢は清水のたえすなかるゝ川筋に多し、腐草の化して螢となるにはあらすして、螢の腐草に卵をうみつけたるか夏のはしめに化して螢とはなれるなり、水蟲の羽化してなれるなとゝいへるさまさまの說ともあれといふにもたらす

頭註○蛙、契沖云中務家集に、かれたる蛙につけてよみかへるとそへたるを思ふに、蟄もる蟲はいつれも同し中に、蛙は殊に春になりてむくめき出るは魂のかへれるやうなれは、還る心に名付たる歟
○蝦手、カヘテト萬葉訓ミ又若可敝流氐モアリ、和名抄雜冠木和名加倍天乃木又雞頭樹加比留提乃木と有て、葉の狀蝦ノ手ニ似タル故ノ名ナリ

此二條川津ト別條トスヘシ

(二)川津

卷三 今もかも明日香の川の夕さらす川津鳴瀨のさやけかるらん 上古麻呂

卷六 おもほえす來ませる君を佐保川の河蝦きかせてかへしつるかも

卷十一 瀨をはやみ落瀧ちたるしら浪に川津鳴也朝よひことに

同 上つ瀨に河津妻よふ夕されは衣手寒みつまゝかんとか

同 神なひの山下とよみ行水に川津鳴なり秋といはんとや

是等はさたかに秋によめる證也、さて右の歌ともに河にのみよみ合せて、古くは田にも沼にも池にも蝦をよめる例なけれは、今の田面に鳴蛙にはあらしと久老云へり、又云、鹿火屋が下に鳴蝦とよめるかびやも河邊屋なるへくおもへるに、奥義抄に魚とる料に河邊に造る家なるよしいへるは、古へに叶へり、また卷十一に山田守翁置蚊火之とよめるは師說の如く鹿おどす火とも蚊やりとてくゆらす火ともすべし、云云阿波國人いへらく河鹿といふは元來魚にて化して蛙となれり、故谷川に住て田面に住も

のならねと川近き田のゐでなどにたま〳〵鳴ありといへり、さては古今集にかはづ鳴ゐでの山吹とつゝけたるも、伊勢物語に水口にわれや見ゆらんかはづさへ水の下にてもろ聲になくと有も、此ゐでに鳴といふにかなへりと久老云へり

川津を春のものと思ふは誤り也、集中によめるを考るに秋にのみよみて春によめるの例なし卷八に、河津鳴甘南河に影見えて今や咲らん山振の花とよめるは河をいはん料における發語にして、下の山振の花まではかゝらぬ也、今田野陂澤にすみてうたてかしかましきものを、川津とよみて春のものとおもふは古への歌をしらさるかゆゑ也、卷十秋雜の歌の中に詠蝦歌五首と題して神名火の山したとよみ行水に川津鳴也秋といはんとや、おもほえす來ませし君にとよめるをもても音のいとおもしろきしるへし、長明の無名抄云、井堤の蛙は外に侍らす、よの常のかへるのやうにあらはにおとりありくこともなとも侍らす、常に水にのみすみて夜更るほとにかれか鳴たるはいみしく心すみて物あはれなる聲にて侍る、云云かゝれは今俗に云かじかなる事疑ふへくもあらす、さて古へ河津とかへるとのわかちあるを知るへし、本草に錦襖子(一)と有もの此集によめる河津也、啓蒙云カジカハ山谷清流ニ住ム、京師川々ニ甚多シ、就レ中八瀬ノ產名アリ、形雨蛤ヨリ微大ニシテ背ニ排癗アリ、色黒シ、又褐色ニシテ黒斑アルモノモアリ、コト更ニ石上ニ出テ鳴ク、一箇鳴ケハ擧族ミナ鳴ク、ソノ聲小ニシテ清ク抑揚多シ、七遍反スモノヲ上トス、好事者生蟲ヲ以テ畜フ云云 といへる是なり、又かへるは祕傳花鏡に一竈鳴百竈皆鳴、其聲甚壯名ニ竈鼓ニ至レ秋則無レ聲矣と有て田澤に多く居るあをかへると俗にいふもの是なり、又魚の類に河鹿といへるものあり、其聲川津に似たるかゆゑに混してよへるなり、是も山川の清流にて鳴聲うるはしくすみて賞すへきものなり、漢名は本草に杜父魚といへるものなり、此外に石伏魚、黄顙魚の類も鳴ものなれと、聲遙に異也

頭註 (一)七卷、佐保川の清き川瀬に鳴千鳥河津と二つわすれかねつもとよめる川津は、蛙にあらす、佐保の川津にて千鳥と此川のけしきのおもしろきと二つなからわすれかたしと也と宣長いへり
日本紀履神の卷に

夫國栖者其爲レ人淳朴也毎取二山菓一食亦煮二蝦蟆一爲二上味一名曰二毛瀰一と見えたり、國栖は吉野の山中の民也、今は十八村ありて國栖の荘と云へりとそ、さて此所に煮蝦蟆爲上味と云蝦蟆も、此集によめる川津なるへし、土佐國には此河鹿を蝦蟆岐利といふとそ、國人いへはかた／＼同物なるへし

㈢錦襖子は諸國ともにあり、皆山川の清流にのみすむ、音は小さき鈴をふり立るやうにさやかに聞ゆ、さてこの河津は夏より秋に至て盛に鳴也、中世よりよめる田野陂澤にすみて春の題によめる蛙は秋にいたれは聲なし、本草の鼃也

多爾具久

山上憶良令反惑情長歌に

巻五 阿麻久毛能牟迦夫周伎波美多爾具久能佐和多流伎波美㈠といへるは、延喜式祈年祭祝詞に、白雲能墜坐向伏限谷蟆能狹度極、云云 雲は遠く望めはひきくふせる如く見ゆるものなれはいへり、谷蟆は蝦蟆にて三谷の草木の中をも安く潛る故にいふ名なり、しからは谷久具と下の具を濁るへけれと古くは潜を久々留と清音にいひしと見ゆ、さわたるのさは發語にて、其かへるのくまもなく歩ゆくをわたるといひし也と千蔭いへり、和名抄に蝦蟇和名加閉流と あり、本草に蝦蟇懷土の事を載せたり。もとかへるとよへるは蝦蟇にかきらす、蟾蜍、鼃、雨蛤のたくひみな遠方に移しすつれは必本の處に還り來るか故にかへるとはいへるなり、其色黑く形蟾蜍に似て小く痱瘟多くして臭きものは蝦蟆なれとも、此集に谷具久のさ渡る極みとよめるは蝦蟇なるかしるへからす、按るに、本草に㈢山蛤といへる類ならんか、山蛤は俗にやまかへるともあかかへるともよひて、前足は短く後の足はいと長くして跳る事捷にして捕へかたし、阿波の俗に三間飛といへるものにて、實にひと飛に二間あまりも飛て速なる事いふへからす、其色淡赤く形鼃の如し、小兒に食はしめて疳を治するといへり、さわたるきはみなとゝよめるに近からん、常の蝦蟇はおとりゆくこと遲く、かつ山の谷にはすまされはなり

頭註 ㈠第六に高橋蟲麻呂もかくよみたるに、谷潜と書けり、心は谷くゝりにて蝦の異名也、かへるは水の中をくゝれは此名をおふせたるなるへし、伯勞は草むらをくゝる故草くきとよめるに同し、又鶉をかやくきといふも是れに同し、鶉は小鳥にしてさゝひに似たる鳥也、草をくゝる故の名也

㈢宣長云、祈年祭詞ニ、谷蟆能狹度極とあるは蟾蜍の事にて、具久は鳴聲によれる名、谷とは物のはざまに居ル物なる故也、

又久々は蛙の惣名にて蟾蜍を谷具久とはいふか
○梯云、谷ク、ノサワタルキハミ狭ハ借字にて眞渡也、此物はいつこまでも靈く行通る物なるゆゑにいへり、谷蟆也といへり
(三)谷蟆を前條の川津とおなしものとするの說は誤れり、川津は常に水底にすみて鳴時は水際或石上にて鳴也、山蛤は水邊をはなれて山中の草むらにすみて跳る事速にして捕ふへからす、これ古へに云谷具久なるらん

蜻蜓 カケロヒ

巻六 炎乃春爾之成者、云云 巻二 香切火之燎流荒野爾、また蜻火之燎流荒野爾、云云 此詞萬葉に假字にて書しなければ、古事記に加藝漏肥能毛由流伊弊牟良云云 よめるに依れるなり、こはかけろふ火てふ事なるを、ふを略てかきろひといへるなるへし、さるを中比よりかげろふのといへるも、ろふのふは火の音の轉れるものと意得へきか、かきろひは春の容に糸の如くかげろひつゝ見ゆるものを云、此語の本は火影のきらめくより出て、かのそらに遊へる糸なとは譬てかぎろひといふ也、實にうら／＼と晴たる春の天のさまなれは專ら春に冠らせていふならん、巻八 蜻蜓火之燎所見而別去者云云 と有は、火かけのかすかに見えたるに譬ふ、巻一 玉蜻夕去來者、巻十三 往影乃月文經往者玉蜻日文累念戸鴨これらは日の氣のきらめくをいへり、夕日はことに火かけの如くなれは譬へつゝ、巻二 玉蜻磐垣淵之、云云 こは石を打は火の出る故に磐とつゝけたりと見ゆ、蜻蜓を蜻火と書は、赤卒か飛を火の如く見なしてかきろひといへるなるへし、さて古事記に宮に火つきたるをも、萬葉に葬の火をもかきろひといへるに依に、其本は火なり、然れは蜻蜓をかけろふ火と見なしけんは後なれとも、又はやき時の語なる故に萬葉には蜻蜓の訓をかりたるも有なるへし、又玉蜻とも書は蜻蜓か目は實に玉の如く見え、はたそを土に埋おけは珠となるよし博物志にいへるなとの意にも有へしと眞淵いへり、和名抄蜻蛉和名加介呂布赤卒和名阿加恵無波 蜻蛉之小而赤也と有て、蜻蜓、赤卒は別也、蜻蛉は 巻三 秋津羽の袖ふる妹を玉くしけおくにおもふを見たまへわ君とも、(二)秋津羽ににほへる衣とあり、古名にあきつむしあきつはとよめるにて俗に云とんぼなり、赤卒はあかとんぼにて身も翅も色朱の如し、形は大小種々ことなるあり

頭註 (一)契沖云蜻火、カケロヒ古事記履中天皇ノ御製ニ、火ヲカクヨマセ玉ヘリ、眞名ハ萬葉ニ春ノカケロフトカクカケリ、カケロフノモユルサマ蜻蛉ノ飛カヘルニ似タレハナルヘシ、コレモカケロヒト云ヘキヲ、火ヲホモト云ヘハ通ハシテカケロフト云カ
(二)巻十、秋津葉乃匂へる衣ともよめり、こは蜻蛉の羽の羅衣に似たりと云也、赤卒の羽の匂へるを羅衣の色あるにたとへし也

蜘

巻五　竈には煙ふきたてすこしきには蜘(クモ)の巣かきて云云

和名抄蜘蛛(和名久毛)とあれと、蜘蛛といふは晝はかくれて夕くれより出て簷の下或は木の間にすかきて蟲をとり夜は出て朝はかくるゝものを云へり、蒸籠(コシキ)には蜘の巣かきてといふは、和名抄蠨蛸(和名阿之太加乃久毛)小蜘蛛の長脚者也といへるくもにして、床の下或笘の中にすみて形小く脚の細長きものをいふなるへし、簷に巣をかくるものは(*)日本紀さゝかねとよめるにて即蜘蛛なり。

頭註 (*)允恭紀ノ歌にわかせこかくへきよひなり佐瑳餓泥能區茂(吾夫子可來夜也 小蟹蜘蛛)のおこなひことよひしるしも(行 今夜)

管見

巻六　草管見(クサツヽミ)(一)やもひあらせすすみやかにかへしたまはね本の國へに

巻五　都々美無久さきくいましてはや歸りませとも又集中につゝかなくとよめる所に無恙と書けり、こはわづらひあらせすしてはやく歸り給へてふ語に、旅の草むしろにありてふ蟲の名を冠らしめたりと眞淵いへり、さて管見は說文に恙蟲名、入レ腹食二人心一古人草居被二此害一故相問無レ恙乎といふより出たり、下學集にも上古之時倭漢兩國未レ知二家居一人々居二土窠一恙虫(ツヽカムシ)螫レ人云云といへるによれは、蚊蚋蟆子のたくひをいふならん、說文に恙蟲名入レ腹食二人心一といへは、蚊蚋蟆子のたくひにはあらさるへし、又(二)巻廿に防人の別を痛む歌に、事しをはらば都々(ツヽ)麻波受(マハズ)歸りきませてとよみ、唐詩に布帆無レ恙挂二秋風一などいへるはとゞこほりなき事にいひ、轉せる物なるへし

頭註 (一)草管見とあるも草の字は莫を誤れるにて、つゝみなくとあるをとれり
(二)巻廿に青海原風浪なびきゆくさくさ都都牟許等奈久(ツツムコトナク)ふねははやけむとも有り

蛽(*)

卷三 五月蝿なすさわく舍人は白たへにころもとりきて云云

卷五 五月蝿なす佐和久兒等をうつてゝは云云こは五月は蝿の群かりさわく時なれはたとへていへり、古事記に於是萬神聲者狹蝿那須滿萬妖悉發、また神代紀にも夜者若二熛火一而喧響之晝者如二五月蝿一而沸騰之とある如く、人の群りて騷騷にたとへるをもておもへは、本草に蒼蝿聲亂レ聲と有、又蒼蝿肌色正蒼聲壯と有にあへり、さて蒼蝿は俗にくろばひと云、日のあたる所に集りて飛翔り色蒼黑くして聲の高きものをいへり、又人の坐敷に多くして食物にあつまるものを俗にこばいといふ、こは三才圖會に一種不レ青不レ蒼俗謂二之麻蝿一、夏大好集二人體間一驅而復來、故俗謂二人可レ憎者一爲二麻蝿一といへるたくひをすへていふなるへし

頭註 (＊)蝿ハ、羽アリテ匍匐ル故ニ云カ、羽ハハノ義ニテ羽羽ノ重レルヲ一ツ省ケル也、蝿ハ羽重也、類凡テ其羽一重ニテ餘ノ蝶也蜻蛉ノ如クニ重ナラス、故ニ羽一重ノ意ナルヘシ

魚 類

年魚

卷五 隼人の湍門の磐も年魚はしる芳野の瀧になほしかすけり

大伴卿

同 松浦なる玉島川に阿由つるとたゝせる兒らか家路しらすも

同 とほつ人松浦の川に和可由つるいもかたもとを我こそまかめ

同 春されはわきへの里の川とには阿由故さ走るきみまちがてに

此三首の歌の端書に、余以下暫往二松浦之縣一逍遙、聊臨二玉島之潭一遊覽忽値二釣レ魚女子等一也とありけるは、神功記に夏四月頃、到二火前國松浦縣一而進二食於玉島里小河之側一云云 因以擧レ竿乃獲二細鱗魚一時皇后曰二希見物一、故時人號二其處一曰二梅豆邏國一、今謂二松浦一訛焉、是以其國女人毎レ當二四月上旬一以レ鉤投二河中一捕二年魚一、於レ今不レ絶、唯男夫雖レ鉤不レ能レ獲レ魚と見ゆ、されとおのれ彼地に遊ひし頃此事を里人にことゝひしけるにいふ、何そさる事あらん、尤童とものあゆこ鉤ることあり、あゆは目のよく見ゆる魚にて彼れを鉤るには鉤針の見えぬやうに餌をさしてあけさけする事ひまなくすれは何處の川にてもよ

くつらるゝ也、男女の童にかゝはることにはあらすといへり、さてあゆを和名抄に本草云鮧魚、蘓敬注云、一名鮎魚（和名安由）楊氏漢語抄云、銀口魚又云細鱗魚、崔禹錫食經云、貌似レ鱒而小有二白皮一無鱗、春生夏長秋衰冬死故名二年魚一也とあれと、本草云鮧魚、一名鮎魚は今俗に云なますにしてあゆの事にあらす、あてたかへり、あゆは漢名香魚一名記月魚と雨航雜錄にあり、又日本紀に年魚或は細鱗魚とあるもあゆなり、又和名抄魚鳥類に本朝式云、年魚氷頭背腸（年魚者鮭魚也、氷頭者比頭也背腸者美奈和太也）また和名抄鱗介部、崔禹錫食經云、鮏（和名佐介）其子似レ苺赤光一名年魚春生年中死故名レ之とある年魚はさけの事にて、あゆにはあらす、鮭魚も香魚も一とせかきりのものなれは年魚といふならん

頭註（*）卷十九、足引乃山下響墮多藝知たかるさき田の河の瀬に年魚兒さばしり云云
阿由故佐婆斯留、年魚ノ川瀬ヲ走ルヲ云也、佐ハ發語也、サシハシル事也、故ハ借字にして子の假字也、同卷反歌毎年に鮎し走婆左佐田川鸕八つかつけて河瀬たつねむ
あゆは川海の交れる所に生出て春の間早瀬をよく走のほるもの也

鮒

卷四　おきへゆき邊に行今や妹かため吾すなとれる（*）藻臥束鮒

詠二香塔則屎鮒奴一歌

卷十六　香塗流塔爾莫依川隈乃屎鮒喫有痛女奴

さてはしめの藻ふし束鮒といへるは藻に臥かくれ居る一つかほとの鮒をいへるなり、次の歌は端書せし如くおもひよらぬ種々のものをよめる也、此類の歌集中に多し、屎鮒は俗に小鮒といふものか、屎は物の屑のことをもいへはなり、和名抄本草云、鯽（上音即）一名鮒魚（上音附和名布奈）とある是なり、されと鯽といふは孟詵の說に、寬大者是鯽といふものにして、近江の湖に産するまふなといひ俗に源五郎ふなといふもの也、又孟詵の說に狹小者是鰿といへるは近江にてまるふなともまるなともいひてともに味ひの美なるものなり、此集によめるは又一種のふなにして俗にもうずふなとよひ池にすみて湖に居らす、形も小にして味も美ならす、もうすふなといへるは藻ふしふなといへるなるへし

頭註（*）古事記應神天皇明宮段の終に、斐伏岡あり、田中道麻呂云、萬葉四の、吾漁有藻伏束鮒とあるは誰もたゞ藻にかくれ

たる鮒と心得たるめれとも、若此裳伏の地より產るよしにはあらじかといへり、
裳伏岡諸陵式惠我藻伏山岡陵、輕嶋明宮御宇應神天皇、在河內國志紀郡云云

鈴寸

卷十一 鈴寸とる海人のともしひよそにたに見ぬ人故にこふる此頃

卷三 荒栲の藤江の浦に鈴寸つる海士とか見らん旅行我を（人麿）

和名抄播磨國明石郡葛江（布知衣）とある所なり、古事記に爲釣海人之口大之尾翼鱸（訓鱸云須受岐）とあり、又和名抄鱸（和名須須木）貌似鯉而鰓大開者也、云云本草啓蒙に云、すゝきは性錫を好む、錫丸をもて釣るへし、故にすゞきと名くといへり、又云鱸魚に河海の別あり、川すゝきは脂多くして味勝れり、寧波府志に江鱸と云、海すゝきは脂少く味淺し、正字通に海鱸大者四五尺其肉麄者尤美といへり、鱸魚の小なるものを俗にせひこと云、和名抄に鲈（音枯漢語抄云世比）とあるを見れは其名來る事ふるし

頭註 (一)捜神云、鱸モ鰓大開者也とあれは、鈴鰓歟

(二) 鯛

平魚（延喜式） 太比ハ平ノ略ナラン、其類イト多シ、太比トノミ云トキハ眞鯛ヲ云（名義）、平ナル魚ナレハタヒハタヒラノ略歟、平魚トカクニテ知ヘシ

卷九 水の江の浦島の兒か堅魚つり鯛つりほこり七日まて（下略）

卷十六 ひしほ酢にひるつきかてゝ鯛もかも我にな見せそなぎのあつ物

此歌草の類のところに出して既にいへり、和名抄崔禹錫食經云、鯛（和名太比）味甘冷無毒貌似鯽而紅鰭者也とありて古へより鯛の字をたひと訓すれとも、鯛は何をさすかしるへからす、按鄭望膳夫錄曰、鱠莫先於鯽魚鯿魴、鯛、鱸次之とありて淡水の產なれは今のたひにはあらさるへし、たひは閩書に棘鬣魚一名奇鬣といへるにあたれり

頭註 (一)神代卷、赤女即赤鯛也口女即鯔魚也
(二)閩書南產志云、棘鬣魚似鯽而大其鬣紅紫色云云

氷魚

卷十六 吾せこか犢鼻にする都夫禮石の吉野の山に氷魚そさかれる

端書に無心所著歌とあり、たふさきは和名抄史記云、司馬相如著ニ犢鼻褌一云云 漢語抄云、袪子 毛乃之太乃 太不佐伎 と有、たふさきは股寒(マタフサキ)の略なるべし、都不禮石は紀に圓をつぶらと訓てまろき石をいふへし、氷魚は和名抄考聲切韻云、似ニ鮊魚(シロヲ)一長一二寸者也。小者小今按俗云氷魚是也、初學記冬事ノ魚對ニ雖レ有ニ氷魚冊鶴之文一而尋ニレハ其義ノ一非也、また字鏡に鱦 比乎 と有によれは、鱠殘魚(シロヲ)の一種麪條魚(イサヽヒヲ)なるへし、本草啓蒙に、麪條魚ハ長サ二寸許、濶サ一分許、頭尖ラス圓ニシテ、石伏魚(ゴリ)ノ頭ノ如シ、至ク白色ニノ目黑シ、云云 生ナル者ヲ見ルニ甚透徹シテ水晶ノ如シ、云云 腹ニ小黑圈及ヒ七ノ小黑星左右ニ相對ス、死スル者ハ色白クシテ透徹セス、此魚三月海ヨリ川ヘ多ク上ルヲ梁ニテ取ル、性死シ難シ、云云 と有にて詳なり、又國によりては香魚(アユコ)兒の事を氷魚(ヒヲ)とよへとも、それとはたかへり、又鱠殘魚(シロヲ)の事を出雲州にてはたゝ冰魚(ヒヲ)とよひ、麪條魚をいさゞひをといへり、いさゞは鱎魚の事なり

武奈伎

卷十五 石麿に吾物まをす夏瘦に吉といふ物そ武奈伎とり食(メセ)

同 瘦々も生らはあらんをはたやはた武奈伎をとると河に流るな

端書に嗤ニ咲瘦人一歌二首とあり、瘦なからも生てあるへきを武奈伎をとるとて水に溺るゝ事なかれと也、和名抄䱇魚文字集略云、䱇 和名無奈木 黃魚銳頭口(一)在頸下者也、云云 とあれとも、䱇はうなきにあらす、後漢書註䱇 音善 似蛇長者不過三二尺一黃地黑文と有て、䱇䱔と相通してともに今云うつほ、あるひは海くちなはといへるものに充れり、むなきは今うなきとよひて小兒の夏瘦するによしといひ、又疳の藥とする事古へに同し、漢名は本草に鰻鱺魚(二)とあり

頭註 (一)契沖云、口在ニ頸下一鰓當ニ在レ胸、胸鰭(ムナギ)乎云云 うなきと云は訛轉なるへし
(二)和名抄鰻鱺魚 諸香夜

都奈之

卷十七 汝かこふるそのほつ鷹はまつた江の濱ゆきくらし都奈之とるひみのえ過て、云云 都奈之はこのしろのこをいへり、このしろは和名抄四聲字苑云、鰶(三) 字亦作䲙 和名古乃之呂 魚名、似レ鯽而薄細鱗者と有、今遠江人はこのしろをつなしといへりとそ、阿波にては俗につなせと云、又つなせはコノ

シロノ子には非す、相似て別也とも云へり。閩書に鰶魚一名青鯽と有、

頭註（＊）孝徳紀、鹽屋鯯魚と云人の名あれは、コノシロと云も古名也、字鏡に鮗鯯鰶等の字共にコノシロと訓めり、下野や室の八島にたつ烟たかこのしろにつなしやくらん

堅魚

巻九長歌 水の江の浦島の兒か堅魚つり鯛つりほこり七日まて、

和名抄鰹魚唐韻云、鰹音堅漢語抄云加豆乎式文ニ用ニ堅魚二字ー とあれとも鰹（＊）と云は鱧魚の一名にしてかつをのことならす、かつをゝ堅魚と書るはかしを樫と書るの意にて、かしはかたき木故にかたし木といへるを、略きてたゝかしとのみいひて字も堅木と書るを、一字に書て樫の字を用ゆるにてしるへし、かつをは古へより其肉を乾して食用とする事今猶しかり、其乾肉の堅きこと木の如くなるものゆゑ堅魚と書るならん、かつをふしを今の唐人は木魚と書るも其心おなし、さてかつをは中山傳信錄に黒饅魚なり、其文に曰、佳蘇魚削ニ黒饅魚肉ー乾レ之爲レ脂、長五六寸梭形出ニ久高ー者良といへるにて、佳蘇魚は俗にいふかつをふしなるへし

頭註（＊）埤雅曰、鱧ハ今玄鯉是也、鱗細有ニ花文ー一名文魚、與レ蛇通レ氣、是蛇所レ化、至難ニ死、猶有ニ蛇性ー、故或謂ニ之鰹ー也、爾雅鄭注曰、鰹、大鯛、小鯇註曰、即鱧也、カツヲニ非ス、鱧ハ舶來アリ、清俗黒鯉魚ト云、大ニ別也

鮪

巻五 荒妙の藤井の浦に鮪つると海人船さわき云云

巻十九 鮪つくと海人のともせるいさり火のほにか出なん我したもひを

和名抄食療經云、鮪一名黄頬魚和名之比 爾雅注云、大爲王鮪小爲ニ叔鮪ーとあり、詩經注云、鮪似レ鱣而小色青黒と有によれはしひにはあたらす、しひは雑字簿の金鎗魚にあたれりとそ、眞黒ひれなか等の類あり、しひは今も釣もし又しひ網てふものをはりて浮ひ出るを鎗にて突てとるなり、古事記の歌に淸寧天皇段、將レ治ニ天下ー之間、云云志毘臣立ニ于歌垣ー云云 王子亦歌曰、意本袁余志、斯毘都久阿麻余、斯賀阿禮婆、宇良胡本斯祁牟、志毘都久志毘、こは大魚よ鮪とつゝけし也、余はよひ出す辭、志は助辭なり

（＊）鯨魚

巻二 鯨魚取淡海乃海乎、巻三 勇魚取海路爾出而云云

巻十七 昨日許曾敷奈底婆勢之可伊佐魚取比治奇乃奈太乎今日見都流香母、いさなは鯨をほめたる辭にて、且海つ物の中にかの魚王の鯨とるをもて大海の稱言として冠らせしなるへし、さてその海とつゝくるより轉て濱とも灘ともいふは冠辭の例也、そか中に淡海に鯨はなければたゝ海てふ語に隔てつゝけしなるへし、允恭紀に異舎儺等利宇彌能波摩毛能と有、假字に依にいさなとりと訓へしといへり、猶冠辭考に委し、和名抄唐韻云、大魚雄曰レ鯨雌曰レ鯢和名久知良淮南子曰、鯨鯢魚之王也と有、鯨の事は鯨志てふ書に委し

頭註 (*)和名抄、壹岐國壹岐郡に鯨伏郷あり、此國風土記に、鯨伏在二郡西一、昔者鰐追レ鯨走來隱伏故云二鯨伏一、鯨並鰐共化爲レ石、相去一里一、俗云レ鯨爲二伊佐一といへり

蛟龍

巻十五 虎に乘古屋を越て靑淵に鮫龍とり來ん劍刀もが

古屋といふ所大和に有て且むかし名高き武夫有しか、鮫は蛟の誤なり、和名抄說文云、蛟 和名美豆知日本紀用二大虯二字一 龍屬也、山海經注云、蛟似レ蛇而四脚、池魚滿二千六百一則蛟來爲二之長一とありて、龍の類なるゆゑ知る人なし、また說文に龍無レ角曰レ蛟ともいへり

於可美

巻二 吾岡の於可美爾いひてふらせたる雪のくたけし彼所にちりけん

於可美は紀に斬二軻遇突智一爲二三段一云云一段爲二高龗一、其注に龗此云二於箇美一と有、こは雨雪をしたかへる龍神ゆゑに、かくはよまれたり

貝類

(一) 眞珠 鰒玉の次に出すへし 白玉附

巻十六 眞珠は緒たえしにきと聞しゆゑに其緒また貫我玉にせん

巻十八 我妹子かこゝろなくさにやらんためおきつ嶋なる之良多麻もかも

同 白玉をつゝみてやらはあやめ草花橘にあへもぬくがね

同 思良多麻のいほつつとひを手に結ひおこせん海人はむかしくあるか

此三首の歌の端書に爲レ贈二京家一願二眞珠一歌とありて、其長歌珠洲のあまの沖つ御神(ミカミ)にい渡りてかつきとるといふ安波妣多麻いほちかも下略 とよみたれは、古へ眞珠といひしもあはひ玉なるへし、いほちは五百千なり、また歌にいほつつとひをとあるは、神代紀の五十箇御統(イホツミスマル)といふに同し。むかしくは向はましきにて愛る意なり、和名抄日本紀私記云、眞珠之良太麻 また巻十三に、眞珠奈須我念妹毛(マタマナスワカモフイモ)、ともよめるをおもへは白玉眞珠(マタマ)ともに石决明(アハヒ)の玉にして、本草の本條に眞珠とあるとは異なり、(三)眞珠はあこやかひの珠をいへり、又此集巻七に、わたの底志須久白玉風吹て海はあるともとらすはやまし、大海の水底照し志須久珠いはひてとらん風な吹そね、巻廿にちゝはゝえいはひてまたね筑紫成水清白玉(ミツクシラタマ)取て來までに、このしつく白玉、しつく玉、みつく白玉とよめるは水に漬るにて何れも石(ア)决明玉(ハヒタマ)をよめるならん、すへて貝の珠は其貝の殼の裏の色の如し、石决明の珠は形長きあり、楕なる有て正く圓きものは稀なり

十九ノ一 長歌反歌 玉の浦の沖つ白玉ひろへれと又そおきつる見る人をなみ

頭註(一)巻三
一日(ヒトヒ)爾は八重波敷ておもへとも奈何(ノソ)その玉の手に卷がたき
駿河麻呂
古へ眞珠(マタマ)と云はあはひ玉をいひ、珠は海中に産すれは千重波敷なと海に言よせて、その玉の手に卷かたきとて、女の得かたきにたとへたりと久老いへり
(三)七、雨はふりかりほは作るいつのまに吾兒(アコ)の鹽干に玉はひろはむ
眞珠
アコヤ玉ト云フコト異名分類抄ニ説アリ

附箋
巻七 住吉の名兒の濱邊に馬並(ナメ)て玉拾(ヒロ)ひしく常わすらえず くは助字也
同 雨はふる借廬(カリホ)はつくる何暇(イツノマ)に吾兒(アゴ)の鹽干に玉は拾(ヒロ)はむ
あごは志摩英虞(アゴ)郡なれと、住吉のなごをあごともとなへしにや、次にも阿胡の海とよめり、いつのまはいつのひまにかといふ意なるをしらせんとてかけり、此玉はしづく玉、又みづく白玉とよめるに同しく海邊の水に漬りたるにて鰒珠をよめるか、或人の説に今すかひといひて小き貝のふたあり、それならんかともいへり、すかひは郎君子と本草にありて、和漢とも醋にひたして動くを見て童もてあそふものなれは、それを鹽干に拾ふをよめるならんとそ
巻七 遠近の磯の中なる白玉を人にしらえすみんよしもかも、
是はこゝかしこの石に交りて有玉といひて、女を玉にたとへて多かる人の中にて人にしられす相見んよしもあれかしといふ也

鰒玉
巻七 伊勢の海の白水郎の島津(二)我鰒玉取て後もか戀のしけゝん

卷六　和太の底奥津伊久利に鰒珠さわにかつきて（下略）

鰒は珠あるものゆゑ鰒珠と書るにてたゝあはひをよめる也、

古へより鰒珠を伊勢の海より出す事其名高し、今俗に伊勢眞珠といへとも、伊勢には眞珠を出す事なし、皆鰒珠にして眞珠に比すれは其價も甚いやし、此集に眞珠と書るは[一]しら玉とも眞玉（マタマ）ともよみて皆石决明（アハヒ）珠（タマ）なる事前にいへるか如し、廣東新語に眞珠或以爲二石决明産一非也と有にて知るへし

頭註 （一）島津我の島は鳥の誤、我は流の草書より誤りて、あまかとりつるなるへし、逢見て後戀の増らんかといふをそへたりと千蔭いへり

（二）武烈紀太子贈二影媛一歌曰、ことがみに來ゐる影姫珠ならば あかほる（吾欲）珠の婀波寐之羅陀魔（鰒白玉）

鰒乃貝

卷十一　伊勢の海人の朝な夕なにかつくとふ鰒の貝の片思（カタモヒ）にして

和名抄本草云、鮑一名鰒（和名阿波比）崔禹錫食經云、石决明（和名上同）食（ヘハ）レ之心目聰了、亦附（テ）レ石生（ニ）故以名（ツクト）レ之と有て、古へ鰒と石决明とをおなしものとするは誤れり、蝦夷志に[一]鰒魚、石决明、一類兩種、其形小大、亦自不同、或以石决明爲二鰒魚一疑非とあり、本草にも一類二種と見えて異物なる事知るへし、鰒魚は今俗にとこぶし或はなかれこといひて大さ二三寸に過す、形石决明（アハヒ）に似て殼薄く瘦せてその孔の數多し、石决明の形大にして孔の數少きに異なり

頭註 （一）鰒魚（トコブシ）には珠ある事をきかす、されは此集によめるは皆石决明（ナガレコ）なるへし

忘貝

卷七　いとまあらは拾にゆかん住吉の岸によるとふ戀[一]忘貝

同　住吉にゆくとふ道に昨日見し戀忘貝ことにしありけり

卷十一　木國の飽等（アカ）の濱の忘貝我は忘れすとしは經るとも

卷一　大伴の美津の濱なる忘貝家なる妹をわすれておもへや

大伴は枕詞、みつは難波の御津也、其濱にある忘貝を卽序にまふけて妹は忘れぬと云也、忘貝といへるは何貝をさしていへるか知らすと千蔭いへり、按るに忘貝を住の江の濱づとに拾ふ歌集中に多し、みな種々うつくしき貝の波によれるを見れはうき事を忘るといへれと、實にうつくしき忘貝をはひろひ見れとも忘るゝといふ名のみに

て、うき思ひは忘られぬとなり、今忘貝といへる一種の貝あれと、歌によめるは色〳〵うるはしき小貝の波によれるをいへるにて一種の貝をさしてよめるにはあらさるへし、忘貝は色々に美くしく染まじへたる貝をいへるらん、さらすば家路忘るゝはかりの遊ひすべきともおほえず

住の江に忘貝忘草忘水とて三个の祕める事ありといふは、後の世の僞り言也

讃岐國松が浦に戀忘貝とて蛤類の紋あるを名產として、崇德院播迁し給ひし時、松山の松が浦かせ吹よせは拾ひてしのべ戀忘貝と詠じ給ひしよし也―されと此歌は後拾遺別の定賴歌也

頭註 ㊂代匠記に、チヒサキ貝ヲ拾ヒテウキヲ忘ル、ト云心ニテ名ツクト見エタリ、一種ト見ルヘカラス

四時美

六　住のえの（小濱なる浦をいく、中在家村の海邊也といふ）小濱の四時美あけも見すこもりてのみや戀渡りなん

しゝみは水と潮とのまちはれる處に多く生する也、住吉の小濱も大和川の尻にて潮に落合ふ所ゆゑおほかりけん、されと淡海の湖水にも多し、古歌に堅田の蜆をよめれとも今は勢田に多くして名高し、和名抄文字集略云、蜆貝（和名之々美加比）似レ蛤小黑者也、ぬまに生るものは色黑く、沙にゐるものは色黃なり、廣東新語にも在レ沙者黃在レ泥者黑しといへり

打背貝

巻十一　住吉の濱によるとふ打背貝みなきこともて我戀めやも

巻三　石花（せの）海と名付てあるも彼山のつゝめる海そ、（下略）端書に詠不盡山長歌とあり、せの海とは富士の鳴澤の事也、石花と書るは和名抄崔禹錫食經云、老蹄子（和名勢）貌似ニ犬蹄一而附レ石生者也、兼名苑注云、石花二三月皆紫舒レ花附レ石而生故以名レ之、今俗にせいと云貝なり、土左にてせかひとも云、岩に付て生す、其形龜の手に似たるゆゑ俗にかめの爪とも云、海邊の岩に付てあり、その岩に付たる所は鱗ありて末尖れり、尖りたる所五ッに分れて爪の如し、春になれは爪の中より紅き肉を出して花に似たり、閩書

に石蜐春而發華者春月肉吐而在レ外、秋冬則呑といへるなりけり、(二)うつせ貝といふは此石花貝の空になりたるか浪によりたるをうつせ貝といふなるへし、今貝を弄ふ人の空瀬貝と云ものはこゝとは異にして、それにはあらす

頭註 (＊)眞淵云打は借字にて、石花貝の空に成たるか浪によりたるをいふ

磯貝

巻十一 水泳玉にましれる磯貝の片戀のみに年は經につゝ

千陰云此玉はさゝれ石を云、磯貝は石貝にて今俗に片貝といふものなるへし、上は片戀といはん爲の序のみ也とそ、眞淵云磯貝は何の貝にまれ、われて片貝となれるか磯波の中に玉にましりてあるをいひて、片戀に冠らせたりといふによるへし、一種磯貝といふものあるにあらす

頭註 二十、獨見二江水浮漂糞一怨二恨貝玉不一レ依作歌、保理江欲利安佐之保みちによる許都美可比爾ありせは都刀にせましを、こづみは芥木くづ也、玉のよらさるをうらみてよめり、これに貝玉といふはすかひなるへし

貝

巻七 裹もかと乞者とらせん貝拾ふわれをぬらすなおきつしら波

巻二 (二)けふ／＼と我待君は石川の貝にましりてありといはすやも

巻七 (三)妹かため貝をひろふとちぬの海にぬれし袖はほせと乾かす

巻十八 波たてはたこの浦まによる貝のまなき戀にそ年は經にける

海川ともにたゝ貝とのみよめるはひろく色々の貝をさせり和名抄尙書注云、貝(音拜和名加比)水物也と有是なり、本草に貝子と有はたからかひをいへり、俗にこやすかひとも云、貝の字をたから貝とよめるは、說文に古者貨レ貝と有て唐にて上古寶とせしゆゑしかよへるなり

頭註 (二)此は先達も一首の意心得かたしと有り、人麻呂死時妻依羅かよめる歌にて、石見の鴨山の麓にある石川なるへし、貝をよめるからは海へ落る所ならんとぞ、此貝もひろく色々の貝と見るへし
(三)按此歌殊更に妹かため貝を拾ふといふ貝はこやす貝ならんか、今俗に貝子をもては產しやすしといへるによりて、その貝をこやす貝とよへるもさるまじなひに用るより負し名なれは、此歌妹かため拾ふは古へもしかせしならんかとおもへり、竹取物語にも燕の巣の中なるこやす貝とあれはいとふるき名なりけり

小螺

卷十六 所聞多禰の机の島の小螺をいひりひ持來て石以都追伎破夫利早川爾洗濯辛鹽爾古胡登毛美高坏爾盛机爾立而母爾奉都也、云々 高坏はつきのたけ高きをいふ、坏とは凡て飮くふものをいるゝ器をいへり

神武紀御歌に伊勢の海の大石にやいはひもとほる之多儺彌能、云云 今きさごといふ貝なり、ちしやごとも云、海濱に多し。阿波の俗ぜゝかひといへり、和名抄楊氏漢語抄云、細螺 之太太美 貌似甲蠃而細小口有白玉之蓋者也とあれと、螺はすへて卷たる貝の名にて細小なる物ゆゑ、小螺或は細螺とかけるなるへし、漢名は本草の白及の條に扁螺とあるにあたれりとそ

美奈

卷五 美奈乃和多迦具漏伎可美爾、卷七 に天在日賣菅原草莫刈嬢彌那能綿香烏髮飽田志付勿、卷十三に蜷腸香黑髮丹、云云 卷十五三名之綿蚊黑爲髮尾信櫛持於是蚊寸垂、下略同 卷十鴨じ物浮寢をすれは美奈能和多かくろき髮に露そ置にけるなとゝよめる歌猶多し、和名抄河貝子 和名美奈俗用蜷ノ字非也音拳連蜷蟲ノ屈スル貌也 殼上黑小狹長似人身者也とあり、眞淵云蜷腸はいと黑けれは髮にたとへたるか、猶おほつかなしと冠辭考にいへり、本草啓蒙も蝸蠃ニナ、カハニナ豫州 ビンロウジ能州 ニダ備前 ビー、ジ加州 カラスガヒ播州 溪澗及ヒ溝瀆流水中ニ多シ、湖邊ニモアリ、長サ一寸許一頭ハ尖リ一頭ハ漸ク濶ク四五分許ニメ筆頭ノ形ノ如シ、殼ハ田螺ヨリ厚シテ薄靨アリ、全ク黑色ナリ、其肉ハ小蝸牛ノ如シ、賤民食フ、中略 又海涯ニ産スルモノヲウミニナト云フ、形色淡産ニ異ナラス、只尾上禿セズ、是海螄寧波府志ナリ、又小長海螺殼上ニ頭髮菜ヲ生スルアリ、形細クメ絲ノ如シ、賤民採リ食フ、丹後ニテミナノカミト云フ下略と有によりて思ふに、蜷は其腸も黑けれは昔人はよく知りてかくつゝけしものならん

龜

卷一 我國は常世にならん圖負る神龜も新代登泉の河に下略

卷十六 干磐破神にもなおほせト部すへ龜もな燒そ戀しくに痛我身そ下略 神龜とは唐國に龜ノ負レ圖出ニ洛水ニてふ事有をおもひよせていふなるへし、天智天皇の御時神龜の出し

事紀に見ゆれと、それをいふにもあらし、龜卜は毛詩爰ニ契ニ我龜一と云是なり、儀禮士喪禮ニ云、楚焞置ニ于燋一在ニ龜東一、楚焞即契、所用灼レ龜者也、燋謂レ炬其存レ火也、楚荊也、然則卜用レ龜者以ニ楚焞之木一燒ニ之燋炬之火一、既然執レ之以灼レ龜也、多波禮具佐に雨森芳洲著なり龜を鑽ともいひ、灼ともいひ、契ともいへり、鑽もうかつにして灼は灼灸の灼に同しく契は龜をうかつの鑿なり、此國に傳へし卜法を見、又卜の字を象形なりといひ、七十二鑽なといへる言葉を思ひ合するに、此國に傳へし龜卜は古の遺法ならんと覺ゆ、中略龜卜の事漢の時よりあきらかならさるにや、今もろこしにて龜卜といへるは其名をかりたるのみにして古への法にあらすといへり、さて龜は和名抄、大戴禮云、甲蟲三百六十四神龜爲ニ之長一と有て、龜は神靈なるものゆゑ神龜あるひは靈龜なとゝかける也、本草啓蒙に古ハ龜板ニトノ字ヲホリ牡荊ニテ燒キソノヒヽキノ筋ノ入ヤウヲ見テ吉凶ヲ占フヲ龜卜ト云フ、ソノ龜トニ幾度モ用ヒタル舊キ板ヲ用ルヲ敗龜版ト云フ、舶來アリ、皆上甲ヲ去リ中ニ焦痕アリといへは、今猶もろこしには龜卜の法の傳れるや知るへからす

葦河爾

巻十六 忍照八難波乃小江爾廬作難麻理弖居葦河爾乎下略

なまりて隱るゝ事の古語也、婆と麻とは常に通ふ例也、なばりとなまりも同し、葦河爾は蘆田鶴、蘆鴨の如く葦有處に住めは附ていふ也、和名抄兼名苑云、蟛蜞楊氏漢語抄云葦原蟹形似蟹而小也といへるものは海邊の蘆の中にかくれかにとも、つましろともいふあり、潮の退きたる時多し、人近つけは速に走て穴に隱る、螯の色白し、漢名は沙狗と本艸にあり、これらの類を葦河爾とも蘆原蟹ともいふなるへし

萬葉動植考

三冊

伊藤多羅著

萬葉動植考　開題

萬葉動植考は三卷から成つてゐて、上卷は鳥類・獸類・虫類、中卷は草類、下卷は木類を解說したものである。本書の著者は越前武生の伊藤多羅である。

本書は、京都帝國大學國文學研究室藏（杜鵑花園文庫舊藏）本を底本とした。其の他宮內省圖書寮にも一寫本があり、無窮會神習文庫には故井上賴圀博士の手になつた圖書寮本の影寫本がある。その見返しに次の如く記されてゐる。

「越前武生平民　伊藤多羅著
俗　稱　近江屋久兵衞　賣藥營業
當時戸主　伊藤才助　多羅之孫
多羅の事は本居宣長の玉勝間に見え申候」

玉勝間に見えてゐるとあるのは、卷十「もろ〳〵の物のことをよくしるしたる書あらまほしき事」の條に

此六七年ばかりさきに、越前國の府中の人とて、伊藤東四郎多羅といへる、まだわかきをのこなりけるが、とふらひきてかたりけるは、多羅が父は、いはゆる物產の學を好みて、ものしけるまゝに、多羅も、わらはなりしほどより、其すぢに心よせけるを、もろこしさまの事は、たれも〳〵物するわざにて、人のふみはたよにともしからぬを、皇國の此すぢの事、よくしるしたるは、いまだ見え聞えざンなれば、多羅は、今より皇國のこのまなびを、物してんと心ざして、かつがつ考へたる事どもゝある也とて、一卷二卷かきあつめたるをも、とうでゝ見せけるを、はし〴〵いさゝか見たりしに、おのが思ふにかなへるさまにて、考へも、ふかしく見えしかば、これいかでおこたらずつとめて、しはてゝよと、ねんごろに、かへす〴〵すゝめやりしを、さて後いかになりぬらむ、音もなし、ちかきころ、そのちかき國の人にあへりしに、この事かたりて、とひけるに、たしかにはしらぬさまにて、かのをのこは、みまかりぬとか、ほのかに聞しよしいひたりし、それまことならば、いとあたらしくゝちをしきわざにぞ有ける。

とあるのをいふのであらうが、「一卷二卷かきあつめたるを」とあるのが本書であるか、本書は宣長と會見した後に補訂せられたものであるか、明かでない。

なほ多羅については越前人物志に次の如く見えてゐる。

伊藤多羅は府中（今云武生）近江屋東四郎と云ふ藥舖の主人なり、同地の舊家にして幼名を功介と云ひ、今立郡粟田部山田淸兵衞の男伊藤の養子なり、性學を好み殊に皇學を硏修し敬神の志厚く神道に關する著書數種あり、萬葉動植考・音韻新書を著す、文政五年壬午七月十五日卒、年五十七、法名を多羅と云。

多羅の曾孫に當る武生町蓬來の伊藤博氏の襲藏せられる資料によれば、多羅は橘曙覽と深交があつたらしく、前記音韻新書の再板に際しては需めに應じて序文を書いてゐる。この序文によれば、多羅にはなほ「神奈賀良」・「伊吹廼調」等の著書のあることを知ることが出來る。其の他太宰純の辨道書を反駁した「百雜碎」一冊が伊藤家に傳はつてゐる。又京大本萬葉動植考の貼紙によつて、門下藤井五十足が多羅の所說を編成した新撰字鏡師說抄といふものもあることがわかる。

萬葉動植考　上

越前武生平民
俗稱伊藤多羅　近江屋　久兵衞　著
當時戸主　伊藤才助　賣藥營業
多羅の事は本居宣長の玉勝間に見え申候多羅之孫

鳥類

奴要子鳥　宿兒鳥　加萬目　多津　鶴　鴨　水鳥　鳧鳥　於吉都騰可毋許毋　之伎　多杼里
呼兒鳥　霍公鳥　味　渚鳥　乎可毋　鷹　鶉　大鳥
鷲　高部　千鳥　美沙呉　容鳥　鷄
雉　佐野津鳥　白鳥　白鷺　一寶鳥　志長鳥　于具比須　雁
秋沙　烏　眞鳥　鷲　山鳥　伯勞鳥　菅鳥
伊加流我　此米　燕　比婆理　美夜故杼里　阿等利

獸類

馬　鹿　シカ　鹿　シ　虎　牟佐佐婢　猿
伊奴　大口能眞神　牛　熊　乎佐藝

虫類

玉蜻　秋津　河津　多爾具久　五月蠅　久毛　日晩
蟋蟀　須輕　虛木綿　子眉　桑子　螢　蟬

魚類

鰷魚　[illegible]　鈴寸　年魚　束鮒　鮪　堅魚
鯛　氷魚　武奈伎　都奈之　忘貝　鰒　珠　白玉
美奈乃和多　四時美　小螺　信貝　打背貝　石花　河爾　龜　於可美　蛟龍

鳥には

○奴要子鳥 ㈠長云云村肝乃、心乎痛見、奴要子鳥、ト歎居者、珠手次、懸乃宜久云云 宿兄鳥 ㈢長云云宿兄鳥之、片戀爲乍、朝鳥、往來爲君之㈤長云云奴要鳥、能杼與比居爾、㈩久方之、天漢原丹、奴要鳥之、裏歎坐津、乏諸手丹、㈣吉哉雖不直奴要鳥、浦歎居、告子鴨、㈦長云云、奈良乃吾家爾、奴要鳥能、宇良奈氣之都追 ぬえ鳥は皆人こゝろ〳〵にいへとすへてよしともおほえすこれはかもめの古き名なり 〔古事記〕八千矛神御歌云云阿遠夜麻邇、奴要波那伎、佐怒都登理、佐藝斯波登與牟爾波都登理加祁波那久カク青山ニトアルニ鷗ハ水鳥ナレハ此八千矛神ノハ別鳥ニヤトモ思ヘト雉ハ狹野津鳥雞ハ庭津鳥トアリテ奴要ニハタ、青山ニトアルハ奴延ハ必シモ山ニ住鳥ナラネバナリ鷗ハ春ヨリ夏カケテ青山ト云ヘキ比ハ海モ河モナキ野山ニアサリ居リ字鏡和名鈔ナトニ奴衣ト可毛米ト別ニ出サレタレト其比ノ奴衣ト云物ハ何鳥ニカ有ケン古ヘノニハアラシ又字鏡ニモ和名鈔ニモ同シ物ノ名ノカハレルヲハ二處ニモ三處ニモ出サレタル事多シサレバ是モサルタクヒニヤ 今も國々にねこ鳥といふ所多し 河ニ居ルヲ近江ヤ筑紫ニテネコ鷺海ニヲルヲ肥前ニテネコトリ上總ニテ海ネコ濱ネコト云マタ外ニモネコ鳥ト云所多シ越前ニハ海ノモ押ナヘテネコ鳥ト云 のど聲にぬえ〳〵と鳴けば其聲を名によひつるものにて 唐ニモ〔本草綱目〕時珍曰鷖者鳴聲也ト云ヘリ鷖ハ鷗ノ又ノ漢名ニテ鷗ト云モ鳴聲ナルヘシ越前ノ方言ニ喉聲ニカケテ物イフヲネコ鳥聲ト云モ彼ノ能杼與比居トアルニカナヘリ又奴要鳥ヲ嘆ク事ニツヽケタルハ㈣ニ於吉都可麻母乃奈氣伎曾安我須流トアル並ニテ水鳥ノ長ク息ヲツクニ譬ヘテサテ奴要ノ聲ハ人ノ泣ワヒタルニ似タレハ云ナルヘシ それか聲に似たれは獸にもねこといふ名は付たりけん 〔和名抄〕猫和名禰古萬ト云ヘリ猫ノ聲ニ似タレハ猫鳥ト云ゾト心得タルハ本末タカフヘシ猫ハ末ノ世ニ異國ヨリマヰ來ツルモノナレハ本ヨリアル鳥ノ名ヲ負セテ名付タリ今ノ世家毎ニ飼置テ猫ノミケチカキ世ノ人ノ心モテ云ハシカラス ぬえこ鳥のぬえを合してねこ鳥といふもたかはず今はぬえといへば常ならぬあやしきことのとしもおほえたり 〔和名抄〕鵼唐韻云鵼音空漢語抄云沼江 怪鳥也トアル鵼怪鳥也ハ唐韻ノ文マタ鵼ヲ沼江ニ當タルハ漢語抄ノサタナレハ鵼字コソアレ沼江ヲ怪鳥ト云レタルニモ非ス〔夫木集〕西行去ヌタニ世ノハカナサヲ思フ身ニヌエ鳴ワタル曙ノソラトヨメルモ徒然草ニヌエト云ルモ怪鳥ノサマニ非ス尚哥ニモ多カルヘシ今思ヒ出ス是等ハ〔大和本草〕ニ黒ツクニ二名ヌエト見エタルノナトニヤ〔十訓抄〕十二巻高倉院御時御殿ノ上ニ鵼ノナキケルヲアヤシキ事ナリトテ如何スヘキト云事ニテ有ケルヲ或人頼政ニ射サセラルヘキ由申ケレハサリナントテ召レテ參リニケリ云云後徳大寺左大臣ソノ時中納言ニテ祿ヲカツケラレケルニ云云罷リ出テ後ニ昔養由雲外射雁今頼政得鵼トソ感セラレケルトアルモ鵼ヲ怪ト云ニハアラス御殿ノ上ニ

鳴カ不祥トテ射サセラレケルナリ又コノ物語ト一續後紀一承和元年二月云云是夕當于禁中之上有飛鳴者其聲似世俗所謂海鳥鴨女者其類數百群或言非海鳥是天狐也宿衞人等仰天窺望夜色冥朦唯聞其聲不辨其貞焉トアルハ奴衣ト可毛目ノオモムキ能似通タリ又一長云云國原波、煙立籠、海原波、加萬目立多都云云トアルヲ鷗ノ事ニ云ヘト可毛免ト云名ノ古クハ聞エネバ然ラジ加万見トアリツルヲ加万目ト寫シ誤リタルニヤアラム又㈢ノ奥邊波鴨妻喚、邊津方爾、味村佐和伎トアルモカモノヨハヒテトヨムモソロシ鴨ツマヨハヒナリ㈥納諸爾波千鳥妻呼㈦清瀧爾千鳥妻喚㈣湊之渚鳥、波立巴、妻唱立而㈧夕去者鶴之妻喚㈦都賦欲失等、須騰埋波佐和久、ナトアルヲ考ヘテ知ヘシカモメテフ名ノ聞エタルハ一催馬樂一紀伊國波末爾於利爲留可毛女波禮曾乃太末毛天己トアルヤ早キノナルラン

○多津 一云云此渚崎爾、多津鳴倍思哉㈢櫻田部、鶴鳴渡、年魚市方云云㈣長云云且雲二、多頭羽亂コノ外ニ多頭テフ歌イト多シ 鵠㈢云云八十之湊爾鵠佐波ニ鳴コノ鵠文字ハ鶴字ノ書誤リナルヘシ鶴ニ鵠字ヲ書コトノアレト集中コノ歌ノ外スベテ見エスサテ鶴字ト鵠字ト通シ書コト唐ノ書ニサマ〳〵ニ云テ一五雜組一ニモ鵠是鶴物同而音亦同也ト云ヘレト一文選一瑯命論鵠鶴千歲年之殊也ナトアルシ一康熙字典一古本皆作鶴鶴不宜與鵠通ト云ヘリ 芦鶴㈢云云芦鶴之哭耳所泣、朝夕鳴天ハ湯原爾、鳴芦多頭者云云コノ外多シ 白鶴 六鹽干者芦邊爾躁白鶴乃妻呼音者宮毛動響ニコレハシラタツト云ヘキ所ニモアラネバ白ハ百ニテモ、タツニヤサテシラタツモ哥ニ多クヘ詠ネト兼盛集ニシラタツノ天ノ原ヨリトヒツルハ遠キ心ヲシレルナルヘシ重之集松カ枝ニ住テ年フル白ツルノ戀シキモノハ雲井ナリケリ 鶴㈨云云吾子羽裹、天乃鶴群ハスヘテ多頭トノミ詠タルニコレノミ都留ト讀ミ來レリ天ノ多頭良ト吟ンモサスカニ耳タチテ覺ユ集中借字ニハ鶴寸乎白土ナト多頭ト云事ニ用ヒタルモアリマタ夢所見鶴ナト都留ト云語ニ鶴字ヲ借リタル事モ多シ

歌には多頭とよみて都留といふ事は稀なりけるを後にはもはらつるとよめりまたはめてはまなつるともいひき一倭姫命世記一十七年云云彼稻白眞名鶴咋持廻乍鳴支地見顯者其鳥鳴聲止支云云 然れとも今の世にまな鶴といふはくさ〳〵の鶴の一種にて古へのにはあらす今ノマナツルハ漢名ヲ鶬鷄ト云モノニテ頂ハ赤ク身ハ灰色ナル鶴ナリ

○鶴 ㈠長云云上瀨爾、鶴川乎立下瀨爾云云コノ外多シ 之麻都等里鶴 ㈤云云奈都能左加利等、之麻都等理、鶴養我登母波云云㈨ニモ同シツヽケアリ和名鈔ニ大ナルト小キトモテ鳶ツ鳥ト鶴トヲ分タルハソロシ奥ツ鳥鴨ヤ庭ツ鳥カケヤナト、同シツヽケナリ 水鳥 ㈨長云云早瀨爾波水鳥乎潜都追云云鵜モ水鳥モ字ノ漢名ニハ非スマサシキ漢名ハ鷄鷗

○鴨 一長云云鴨白物、水爾浮居而コノ外イト多シ 水鴨 ㈢長云云妹之有、世登、水鴨成、二云云人雙年云云ハ美可母トヨムサテ昔ヨリカモニ鴨字ヲ書ケト實ニハ鳧ト云リ漢名ナルサレハ集中カモニ鴨トノミ書タルニ借字ニハ㈦過不勝鳧(十一)

青高兒同不所念兒(十三)情有兒ナト所々兒字ヲ書リ兒ノ又ノ漢名野鴨トモ水鴨トモ云然レトモコノ水鴨成ハ鴨字ヲ可毛ト定メツ・美可毛ニ水鴨ト書タレハ漢名ノ水鴨トハ異ナリ(十四)ニ哉ノ借字ニ戀渡青頭鷄ト書タルモ漢名ニハ非ス漢名メカシク文字ヲ並テ可毛ニ用ヒタル也

鴨鳥　㊃鴨鳥之、遊此池爾水葉落而云云

水鳥　㊇秋ノ露者、移爾有家水鳥乃、青羽乃山能、色付見者常ニハ水鳥ノ鴨トツヽクルヲコレハ水鳥ト云テヤカテ鴨ノ事ニセルナリ

葦鴨　(十一)葦鴨之多集池水雖溢云云コノ外ニモ

於吉都麻可毛　(十四)云云於吉都麻可母乃奈氣佐曾安我須流

奥鳥鴨　(十六)奥鳥鴨云船之還來者コノツヽケ二所アリ

許母　㊉多知許母乃、多知乃和佐爾、阿比美旦之云云、田舍ヨリ立タル防人ノ訛リナリ

かもをはあち　にむかへて今まかもとも青くひともいふ　唐ニモ〔本草綱目〕時珍云食用綠頭ハ爲上トモ又青首トノミ云テ鳥ノ事トオホシキハ〔戰國策〕秦魏燕趙者鵝雁也齊魯韓衞者青首也ト見エタリ又(十二)ノ青頭鷄モ是等之ココロナリ

○之伎　㊀旅爾之而ハ物戀之伎乃鳴事毛云㊈云云羽振鳴志藝誰田爾加須牟

多杼里　(十四)可美都氣乃乎度能多杼里我可波治爾毛云云〔和名鈔〕齋楊氏抄云之木一云田鳥ト見エ今鴫字ヲ書ハ田鳥ヲ一字ニ合セタルナリ漢名ハ鷸

○呼兒鳥　㊀倭爾者、鳴而歟來良武、呼子鳥象乃中山呼曾越奈流コノ外㊇ニ二首㊈二首㊉ニ五歌スヘテ九處アリ躬恒集年コトニ鳴ケトシルシモナキモノヲクレ行春ヲ何ヨフコトリ

よふこ鳥は何にかあらん思ひ得す　中頃モ何鳥ト云事知レサリツルニヤ〔和名抄〕萬葉集云呼兒鳥其讀與不古登里トノミ出サレテマタノ名モ漢名モ記サレサリ

近き世にさま〳〵にいへとよしともおほえず　〔徒然草〕呼子鳥ハ春ノ物ナリトハカリ云テイカナル鳥トモサタカニ記セル物ナシ眞言書ノ中ニ呼子鳥ナク時招魂ノ法ヲハ行フ次第アリ是ハヌエナリ云云ト徒然草ニハ云ヒ契沖カ〔餘材抄〕ニハ又或抄裏書云東野州古今傳授箱内切紙說呼子鳥ハカツホウ〳〵ト鳴鳥ノ事ナリ云云ト契沖ハ云ツヽナホ契沖カ心ニハ曾丹集ノ呼子鳥ハ山鳩ニヤ思ヘリ又〔廣大和本草〕ニハ鷦音和名ヨフコトリ云云木曾山中ニテ人コヒトリト云モノ即チ是ナリ和歌ニ云呼子鳥トハ別種ナリ云々ト廣大和本草ニ云ヘリ木曾人ニヨク聞テ考フヘキナリ此ホトリナル山カツノ物語ニ昔子ヲ失ナヒタル者アユヒモカタシシアヘスシテ子ヲモトメアリキケルカカホ鳥ト化テヨヒワタリケルカホ鳥ヲ呼兒鳥トモ云ト云ヘリコノ子ヲヨフヲ呼子ト云テハ語ノ脉唐フリ也子ヨヒトリトコソ云ヘケレ然レトモカホ鳥ヲヨフ兒トリト云ハ似ツカハシキコトアリ

○霍公鳥　㊁古爾、戀良武鳥者霍公鳥、云云中コロヨリハ郭公ト書ケト集中ニハ假字ニテ五字ニ書ケル外ハ皆霍公鳥ト書タリ然レトモスヘテ漢名ニハ非スマコトノ漢名ハ杜鵑

山霍公鳥　㊇足引之、山霍公鳥汝鳴者云云

○味　㊁長云云味澤相、目辭毛絶奴、云云㊂長云云邊津方爾、味村佐和伎云云

奥津鳥味　コレハ鳥ヲ詠メルニハアラネト㊅長云云奥津鳥、味經乃原爾物部乃云云ト詠カケタリ常ハ鴨ノミ奥津鳥トハ云フ

諸鳥　㊆圓方之、湊之渚

鳥、浪立巳妻唱立而邊近著毛コノ外(十一)ニ一首(十四)三首(十七)ニ二首ス
ハテ五首アリコノ(七)ノ浪立巳ノ巳字ヲ一本ニハ也ト作リ浪タテ
ヤハタテ乎加母(十四)於吉爾須毛、乎加母乃母巳呂、也佐可
ハヤナリ杼利、伊佐豆久伊毛乎、於佐氏佐努可母 渚
鳥は何の鳥をもいふへけれとあちはわきて浦洲に
むれ居るものなれば渚鳥とはいへりけむ 渚鳥は美左臭ナリト契
沖カ云ヘレト然ラシ是〔詩經〕關々雎鳩在河之洲ト云ヨリ思ヨ
リタルナルベシミサコヲ渚ニ言カケタルハ(十一)水沙兒居渚座船之
云云ト(十三)ニ又同シツツケト二處アリ阿遲ヲ渚ニ云カケタルハ(十四)
阿乃須牟、須沙能伊利江乃云云ト(同)ニ又同シツ、ケト二處アリ
然ルニ渚鳥ヲ詠ル歌スヘテ五首アル中ニ妻ヨフ騷クスタクナト
ヨメル歌四首アリサテ思フニ味コソ味サハフトモ味村トモ言テ
濱渚ニハ群居ル物ナレ雎鳩ハ妻呼立テ騷クハ
カリノ物ニアラネハ渚鳥ヲ味ノ事ニ思ヒ定ツ また鳧の類に
てちひさければ平可母ともいひ今はもはら阿治我
毛ともいふなり マタアゼカモトサヘ云漢名冠鳧

○鷹 (三)鳥栖立、飼之雁之兒、栖立去者檀嶺爾、飛反來年〔一代匠
記〕俗ニカルカモト云物アリテ是ニ近ケレト雁ハ鷹ノ誤リ
ニテ鷹兒ナルヘシ 矢形尾能多可(七)長云云多可波之母安布麻多安禮等
矢形尾乃安我大黒爾云云(九)矢形尾乃、麻之路能鷹乎屋戸爾須惠云云 眞白部乃多可(九)長云云須惠氏曾我飼眞白
部乃多可〔袖中抄〕一ヤカタ
尾トハ鷹ノ相經ニハ尾像尾町像尾トテ二ツノ様ヲアケタリヤカ
タトハ屋ノ棟ノ様ニサカリフニ切タルヲ言町カタトハ田ノ町ノ
様ニ横サマニウルハシク
切リタルナルハシ云云

○鶉 (三)長云云鶉成、伊波比廻、
雖侍候云云コノ外多シ

○大鳥 (三)長云云大鳥羽易乃山爾、吾戀流、妹者伊座等云云大鳥
ノ羽カヘト續クユエヨシハ知ラス〔ウツホ物語〕初秋卷
歌大鳥ノハネヤカタ羽ニナリヌランン今ハオトヤニ霜ノフルラン
トアルモ歌ノ意知リカタケレト何ニマレ大鳥ノ羽トカ、リタレ
ハ大キナル鳥ト云事
ニハ非ス鳥ノ名アリ おほ鳥はまたの名をこひともこふ
ともいふ物にて今もこゝふつるといへり 〔和名抄〕鸛 音館和名於保
止利マタ鵠漢語抄云古布日本紀私記云久久比ト見エタリ然ルヲ
〔大和本草〕順和名ニ鵠ノ字コフト訓又ククヒト訓ハ誤マレリ
ククヒハコフノ事コフハ鸛也鵠ニ非ス鵠ハハクテウナリ云云ト
大和本草ニ云ヘレト古布ト云名ハ今モコフツルト云ヘハ鵠ニ非
テ大鳥ナル事明ラケシ但ククヒト云モコフノ事ニテ鵠ニハ非ス
ト云ヘルハ心得カタシ和名抄ニ鵠ノ條ニ古布ハ久々比ト二ツア
ルハ漢語抄ト私記ト說ノ異ナルニナラヘテ出サレタルナリ古布
ト久々比トハ私記ノミニ限ラススヘテ訓ナレタル事ナリスヘテ
和名抄ナトヲ見ルニ一ツ條ニ名ノ二ツ出ルアリ又イク處ニモ
ワカレテ出タル名トモニ一ツ物ナルモアリソレハ意アリテセラ
レタリト見ユル處モマタ誤リテセラレタリト見ユルモアリヨク
辨ヘスハ誤リナン去レハ大鳥ノ又ノ名ハ古布今ハコフツル漢名
ハ鸛久々比ノ今ノ名ハ白鳥漢名ハ鵠ト心得タレ大和本草ヲクタ
〱シク尤ムルニハ非ス今ノ本草家ト云人トモノ皆心得タカヒ
テアレハカクハクリ言スナリ或人ハ云ク古布ト云事ハモト大ト
リノ漢名ヲ鵠ト心得ツ、古久ト云字音ヲ直ニ呼ハ、古字トコソ

云ヘキ格クナレ人聲ノ字ナレハトテ古久ヲ古布ト云ヘキ筋ハナキソカシ古布ト云ハ別ニ意アル名ナルヘシ〔字鏡〕鵠冬比又古比トアルニテ鵠ノ字ノ音ナラヌハ知ナンサテコノ字鏡ノモ久々比ト古比ト二說出タルナリ

○鶩　乎㊂人不撈、有其知之、潜爲(カツキスル)、鶩與高部、船上住㊉　男爲鳥乎之能須牟、伎美我許乃之㡌、家布美禮波云云
㊉妹戀、不寢朝明(イネヌアサケニ)、男爲鳥云云㊉伊蕪能宇良爾都禰欲比伎須牟乎之抒里能云云ユノ都禰ノ禰ノ字ハ㡌ノ書誤リニテ妻喚來栖カ
㊂今ノヲシノ歌ニ出マタ高

○高部　山爾、高部左渡(サワタリ)高々爾云云　これは鳧の一種にていまもたかへといふ又國ニヨリタカノトモタカボトモ又尾長トモ漢名ハ刀鴨〔風俗歌〕乎之多加倍加毛佐戸木爲流波良乃伊斤能云云

○千鳥　㊂浚海乃海、夕浪千鳥、汝鳴者云云同云云明日香　河庭、乳鳥鳴成、君待不得而、コノ外イトオホシ
千鳥　㊉河千鳥、佐澤上爾、立霧之、云云㊈夜降而(クタチ)、鳴河知登理、宇倍之許曾云云

○美沙吳　㊂美沙吳居、石轉爾生(イソワニオフル)名乘藻乃、云云コノ美沙吳ハ吳字一ツ落タルナルヘシ居字ヲ美沙吳ノ吳ニ用ヒテハ居ルト讀ム字ナシ沙字ヲ左吳ト讀マシキニアラネト㊉ニ水沙兒居ト書タル處㊃ニ三佐吳集過三沙吳居ナト皆是モ沙字ノミニテサコトハ讀マシクオホユ　今は魚たかともいふ漢名モ魚鷹マタ鶚マタ鵰鳩トモ

○容鳥　㊂長云云容鳥乃、間無數鳴、其言奈須云　可保鳥を今云文字ハ貌鳥香鳥可保等利ナト書ケリ

はかこ鳥ともいひ又カツホウ鳥トモカツコ鳥トモカンコ鳥トモ云〔仙覺抄〕容鳥トハ田舍人ハカホトリト云是ナリカホノ〳〵トナケハ鳴聲ヲ名トセルナリト仙覺ノ云ヘルヨロシ去レト容鳥貌鳥ナト書タルヲ見テ加遠鳥ト讀ツ、古ノ加遠鳥ヲ今ノ田舍人ノ加保鳥ト云トコトワリタルハワロシ是ハ加遠トハ云ハテタシカニ加保鳥ト呼ヘシサラテハ鳥ノ名ニ當ラス㊅長云云貌鳥者間無數鳴云云山見者山裳見貌石云云ト云歌ニ鳥ノ名ニモ貌字マタ語ノ見我保志ニモ貌字書タルヲ見テモ知ルヘシ鳥ノ名虫ノ名トハ大方鳴聲ヲ名ニ呼タリマタ人ノ顏ナトモ古ハ加保トタシカニ言ヒテ加遠トハイハス其外河家ナト云類ヒノ波倍ナトヲ皆タシカニ加波伊倍ト言ツルヲ後ノ世ニハロニ云ヤスキマヽニ加和伊惠ト云ナレツルモノナリ去レト河家ナトヲタシカニ呼テハ今ノ耳ニハ聞クルシケレハサテモアリナン容鳥ナトハ先ニイヘル如クナレハ今ノ人モ加保ト云ハテハ合ハス㊂白縫、筑紫乃綿者トアルシ之良奴爲トハ誰シノ人モ吟シカシ但シ加保ニ可不テフ音ノ字ヲ用(ツカ)ハナ古老切音可字ナル杲字ヲ用ヒタルハ可遠ト云ニ近ケレト古ノ文字用ヒニハカヽル事多カリ可保鳥ノ漢名ヲ鳴鳩一名ハ獲穀一名郭公トモ言ハ漢土ニテモ鳴聲ヲトリテ名ツケタルモノナリサテホトヽキスニ郭公ト書ガ誤リナルコトハ云モ更也　また春の末より鳴ものにてあれは　伯岐ニテ豆蒔鳥甲斐越前ニテ　なうゑ鳥ともいふ中むかし古々鳥といひけんも是なるへし〔文徳實錄〕齊衡元年四月辛巳有鳥集殿前松樹俗名古々鳥其鳴自勅左近衞將曹神門氏成射之應弦而隊帝甚稱善賜絹數疋ト見エタリ鳴

聲ヲ古々ト聞トリテ古々鳥ト名ツケタルト四月ノ頃鳴タルトヲ思ソニ是モ可保鳥ナルヘシ

○鶏　㊂長云云鶏之鳴、東國爾、コレハ庭鳥ヲ詠ルニハ非ス十云云鶏音莫動、明者雖明、鶏字書テ可計ト吟ヘキモアレト㊂ノハ云モサラナリ㊉ノモ登里ト吟ンソ安ラカナルヘキ

庭津鳥可鶏　㊆庭津鳥可鶏乃垂尾乃乳尾乃云云可鶏ト書タル假字ニ就テ兎角言事トモノアレト皆ワロシタ、其物ニ似付タル字ヲ假字ニ用ヒタルモノソ梅ニ鳥梅柳ニ楊奈疑馬ニ宇馬ナトカケルタクヒナリ　鶏㊉里中爾、鳴奈流鶏之喚立而云云㊐旭時等鶏鳴成云云是等ヲ鶏　鶏㊊云云和備氏鳴成等里トモ云ヘケレト倘可計ト吟ソヨキ　鶏左倍コレヲカケノ鳥サハト吟メトカケノ鳥ト云事古ク聞エスサテハ家ツ鳥トモ吟ヘケレト古キト多ク聞エタルトニヨリテ庭ツ鳥ト吟マ、シ

家鳥可鶏　㊄長云云家鳥、可鶏毛鳴、左夜者明云云　神代に思兼の神に思はせて常世の長鳴鳥をつとへ鳴しめつといふも庭鳥なるへし　漢土ニモ似タル事アリテ〔西京雜記〕漢成帝時交趾越嶲獻長鳴鶏ト云事見ユ　またくたかけは庭鳥の一くさにたけ高くすへて形の大なる鳥なり　〔伊勢物語〕夜モアケハ、キツニハメナテ、クタカケノマタキニナキテ、セナヲ遣ツル、眞淵カ云ククタカケハ百〔鶏〕ナリ、賞ニアタノ唐マルナルハ、ミトイ、ハリ

○雉　㊂長云云寢乃不勝宿者、瀧上乃、淺野之雉開去歳云云十春雉鳴、高圓邊丹、櫻花云云　野鳥雉　云云雨者落來、野鳥、　狹野津鳥　㊄長云云我戀思蚊、狹野津鳥、雉動、云云　　來鳴翔經云云集中キシト詠ルハ一所モナシ岸ノ借字ニソ㊆雉爾絶多倍トハ書ル今ハ支慈ト云ヘト支藝志ヲ略タルナルハ支志ト云ヘキナリ

○白鳥　㊃白鳥能、飛羽山松之、待乍曾、云云九白鳥鷺坂山松影云云コレ等ハ鳥ヲ詠ルニハアラネト

○白鷺　㊅池神力士儛可母、白鷺乃、桙啄持而、飛渡良武　白鳥とは白くたゝあらは何鳥もいふへけれと白鳥のとふと詠かけたれは鳥の名にて白鳥の鷺坂山といふに合すれは白さきの事と知らる

○二寶鳥　㊃二寶鳥乃、潜池水、情有者、君爾吾戀情爾左禮、コノ外多シ　またみほ鳥とも〔古事記〕應神御製美保杼理能迦豆伎伊伎豆伎云云美濃ノ方名ニミヨ陸奥方名カハキシ　今はかいつふり　ニホニ鳰ト書ハ作リ字ナリ漢名ハ〔和名抄〕鸊鷉䴙低ニ音和名邇保トアル是ナリ又ノ漢名ハ水札

○志長鳥　㊆志長鳥、居名野乎來者云云紗ニモ同シツ、ケ㊉ニモ同シツ、ケアリ九長水長鳥、安房爾繼有、梓弓云云加茂の眞淵か云く、志なか鳥は息長鳥てふ意にて

二寶鳥なるべし、にほ鳥の雌雄引ゐるをとりてしなかとり猪名とつゝけ、水よりも出て長き息をつく聲をとりて安房ともつゝけたり、冠辭考ニ委シク論ラヒタリ、悪クモアラシヤ、但シ〔神樂歌〕之奈加止留夜爲奈乃見奈比仁ト謠ヘルヲ思フニ、里ヲ留ニ通ハシテ鳥ヲ止留ト云ヘルナラハサモ有ヘシ、若シ物ヲ取ト云ソ意ノ止留ナラハ違フヘシ、眞淵カアトリヲサヘ、ニホ鳥ノ事ニ思ヒタルハアヤマリナリカシ

頭註 息長鳥志長鳥俗にムグリ鳥とも云水鳥なるか、息をいと長く水中に潜り居て鳴もするもの也、またすき三卷九十オ

○于具比須　㊄云云多氣乃波也之爾、于具比須奈久母㊅長云云高圓爾鶯鳴沼云云コノ外多シ、集中春鳥トアルヲ于具比須ト吟人アレトシカラス、㊂㊈㊉三處ハカリヤ有ケン、皆波留登理ニテ、于可比須トハ吟マシキナリ〔和名鈔〕鶯楊氏漢語抄云春鳥子宇久比須トアレトソレトハ異ナリ

○雁　㊅朝波、海邊爾安左里爲、暮去者、倭部越、雁四乏母、㊈妹當、茂苅背、夕霧云云(十五)安麻等夫也、可里乎都可比爾衣弖之可母云云マタ(十)三十八丁云云切木四之泣所聞、今時來等霜、コレニ引合シテ㊅十九丁折木四哭之トアルモ契沖ハカリカネノト吟タリ、然レトモ(十)ノモ㊅ノモ四文字ノ添タル、心得カタシ、

○秋沙　㊆山際爾、渡秋沙乃、往將居、其河瀬爾、浪立勿湯目　これもかもの一種なり

今ハアイサト云

○鳥　㊆曉跡、夜烏雖鳴、此山上之、木末之於者、未靜之コノ外(十二)(十四)(十五)ニモアリ

○眞鳥　㊆眞鳥住、卯名手之神社之、菅根乎云云　鷲　㊈鷲住筑波乃山之裳羽服津乃云云コノ外(十二)(十四)(十九)ニモアリ

仙覺か云く、眞鳥は鷲なり、えひすはわしの羽を眞鳥羽といふと仙覺はいへり、是よろし、今も矢にはゝくに、鷲の羽をは眞羽といふ、

○山鳥　㊇長云云足日木能、山鳥許曾波峯向爾云云コノ外(十一)同(十四)ニモアリ、漢名ハ翟雉マタ山鷄山雉トモ

○伯勞鳥　㊉春之有者、伯勞鳥之草具吉雖不所見云云　百舌鳥　㊉秋野之、草花我末鳴舌百鳥云云、末字ハ本字ノ誤リニテ草花カ本ナルヘシ、草花カ末ニハ伯勞鳥ノヱトマラシカシ、又舌百ト云事物ニ見エス、昔ヨリモスニ百舌鳥ト書ナシタレハ、是ハ文字ヲ上下ニ書タカヘツルモノナリ、其百舌鳥モモスニハ當ラス、伯勞ソマコトノ漢名ナル又ノ漢名ハ鵙

○菅鳥　(十二)白檀斐太乃細江之菅鳥乃妹爾戀哉、寐宿金鶴或人菅ハ管ノ誤リニテツヽトリナルヘシ、ツヽトリ東國ニテ澄田ト云モノナリト云ヘリ、管ニ改メタルヨロシ、　都に鳥は〔和名抄〕鶺鴒和名爾波久奈布里なり　〔字鏡〕鷄豆ニ萬奈柱トアリ、鷄ハ鶺鴒ノ又ノ漢名ナリ、マタ〔大和本草〕ツヽトリハコツコ鳥ノ一名ト、大和本草ニ云ヘルハ何鳥ヤ知ラス、〔夫木集〕寂蓮コレモマタサスカニ物ソ哀ナルカカタ山カケノツヽ鳥ノ聲、是ヲ

モ河ノ鳥トハ聞エス、名ハ同クテ異鳥ナルヘシ、

○伊加流我 (十三)長云云毛知引懸、仲枝爾（ナカツエニ）、伊加流我懸下枝爾（シヅエニ）此米乎懸、云云伊蘓婆比座與、伊加流我等、此米此米乎懸、云云伊蘓波比座與、伊加流我等此米登 今は豆まはしともいふ 漢名ハ桑扈 昔ヨリイカルカニ班鳩ト書ケトシカラス、班鳩ハ今ノハチマンハトナリ、

○此米 歌ハ今云キ、漢名ハ竊玄マタ鐵嘴

○燕 (九)燕來、時爾成奴等、雁之鳴者、本郷思都追、雲隱喧 つはめとは今もいふを、中昔は「字鏡」鷰 豆波比良古「和多抄」鷰和名 豆波久良米なといへり、また形の大なるをは「和名抄」胡鷰和名阿萬止利は、今は大つはめ、山つはめともいふ

○比波理 (九)宇良宇良爾、照流春日爾、比婆理安我里、云云コノ外(廿)ニモ二首アリ、ヒハリハ鶬鶊ト書ハシカラス、倉庚ハ今ノ朝センウクヒスナリ又雲雀ト書モ雀ハカリノ物ニテ、雲間高クアカレハ連ネタルニテ、漢名ニ非ス漢名ハ、告天子

○美夜故杼里は一種の鳥の名にはあらず「續紀」天平勝寶八歳三月甲寅朔太上天皇幸堀江上ト見エタルニ、コノ歌ハ八年ニ(廿)勝寶八歳三月ノ歌ナレハ ほり江にいてまし御供にてやありけん、大伴宿禰家持 (廿) 布奈藝保布保利江乃可波乃美奈伎波爾伎爲都々奈久波美夜故杼里家蒙 右三首江邊作之トアリ、此三首ノ中ニ保利江欲利、美乎左可能保流、梶乃音乃麻奈久奈良波古非之可利家留ト云歌モアリ たひねをすれは、都を戀ふる心にて、堀江の川に來居つゝ鳴なるは、これもおのかともにて都の鳥にはあらすやとなつかしかり詠るなり ミナキハニ來居ツヽ云ルニテ水鳥ナラスモキコユ 鳥の名に都鳥なと付る事は、遠き鄙のわさなり、都なから都鳥といふ名は呼しかし、されはこそすみた川に都鳥といふ名は聞えそめけれ「伊勢物語」云云サル折シモ、白キ鳥ノハシト足ト赤キシギノ大キサナル、水ノ上ニアソヒツヽイヲヲクフ、京ニハ見エヌ鳥ナレハ、ミナ人見シラス渡シ守ニ問ケレハ、是ナン都鳥ト云ヲ聞テ云云、此詞ニコレナントワキテ教ヘタルハ、京近ク都鳥ト云モノナキ故ナリ、然ルニ皆人此堀江ノ川ノ都鳥ヲ一種ノ鳥ノ名ト心得テ、伊勢物語ノト一ツニ思ヘルハ愚ナリ されとそれさへ今は何鳥にやさたかならす、筑紫にはこも都鳥とて嘴と足と赤きありといふなるはまことにや「大和本草」都鳥或以鷗爲都鳥未知是否、今案西土ニテ都鳥ト稱スル鳥アリ、背黑ク腹脇白ク嘴ト足ト赤キハシ長クケルノ形ニ似テ其形ウルハシ、伊勢物語ニ云ハル都鳥是ナルカト大和本草ニ云ヘルハ似ツカハシ、又眞淵

カ（伊勢物語古意）都鳥ハ鷗ノ一名ト見エタリ、古本ニ鴴トアル
ハ、草ノ手ヨリ誤レルナリト眞淵カイヘレトヨシトモ思エス、マ
シテ鷗ノ又ノ一名ニモアレ、都鳥ト云モノハヨク鳴鳥ニヤ（六帖）
珍シク鳴モワタルカ、都鳥イツレノ空ニ年ヲ經スラム（後拾遺集）
和泉へ下リ侍リケルニ、夜都鳥ノホノカニ鳴ケレハヨミ侍リケル、
和泉式部言問ハヽアリノマヽニ都鳥、都ノ事ヲ我ニ聞カセヨ（ウ
ツホ物語）吹上卷、ナキサヨリ都鳥ツラネテ立ヲリニ、今ヒト
リノコヱゴヱ鳴ヲ聞テ云云、都鳥トホキ聲ニキコユナト多シ

頭註 枕草紙に水鳥は云
云都鳥川ちどり

○阿等利　㊄防人ノ歌久爾米具留、阿等利加麻氣利、由伎米具
利、可比利久麻弖爾已波比弖麻多禰、コノ阿等利加
ハ爾ヲかニ見遣ヒタル
ニテ阿等利爾ナルヘシ
これを皆人獵子鳥といふ鳥のことにおもひて、とかくにいへとよろしからす、防人は異國より荒ひ來ん。設けの讐守にてあるを
多毛ノ切リ
登ナレハ阿
等利ト云（云長云云五百隔山伊去割
見、賊守、筑紫爾至リ云云トモアリ
任りて國々をめくりて、筑紫まて行けは、歸り來んまて家にもまつ事なく、齋ひて待てといふ意なり、
サキモリハ國々ヲ巡ルモノニハ
非ネト、吾妻ノ國々ヨリ、筑紫
ノハテマテ行メクルヲ云ナリ、此卷ノ末ニ是モ下野國ノ防人ノ歌、
布多富我美阿志氣比登奈里、阿多由麻比、和我須流等伎爾、佐伎
母里爾佐須、トモ云歌モ思ヒノヽニ云ヘトヨロシカラス、布多富ハ
土地ノ名ト思シ、和名抄下野國都賀郡ニ布多ト云郷アレハ其處ナ
ルヘシ、富ハ應神天皇御製ニモ久爾能富毛美由トアル富ニテ、和
名抄國郡部ニモ何保何保トテ多クアリ、又末ノ世ニモ（東鑑）阿
波國麻殖郡保ノ保司マタ諸國庄園郷保ノ地頭ナト多ク見ユ、今モ
處々ニ本保新保ナト云村多ケレハ、昔モ村々ノ内ニ別ニ保ト稱ル處
有ツラン（禮記）月令ノ註ニ小城曰保又都邑之城曰保ト有レトモ、
コノ義ノ保ニハ有ラテ、一郷ノ中ニモ保々麻里タル眞保良ナル處
ヲ保ト云ツルニヤアラン、其處ニ防人使ナトノ居テ防人トモサシ
タルヲ、布多富守ト云ハルカ、又末世ノ保司ノ如キ者ナルヘシ、
阿多由麻比ハ何事カアリテ敵ニ向フ事ヲ忌ミ愼シム齋忌ヒノ時ナ
ルニ、折シモカヽル時ニ防人ニサシタルハ布多富ニ居ル頭イト惡
シキ人ナリト、イワケナク恨ミタルナリ、此齋モリト齋ユマヒト
引合シテ互ニ
心得ヘキナリ

獸には

○馬 ㈠玉刻春内乃大野爾、馬數而、云云コノ外イト多シ、マタ㈨手綱濱歌遠妻四、高爾有世婆、不知十方、手綱乃濱能、尋來名益ニノ歌ノ高字ハ草書ヲ字ヲ上ニ一筆添リテ高字ニ成タルニテ、馬ニアリセハナリ、其マヽニ高ト吟テハ何ノ事トモ聞エス、馬ニテコソ手綱ニモワタリテ、安ラカニ聞ユレ、馬ハ本ヨリ主ヲ知ルモノニテ、シカモ一韓非子一說林篇管仲隰明從桓公而伐孤竹春往冬反迷惑失道管仲曰老馬之智可用也乃放老馬而隨之遂得道行云云トアル、漢土ノ故事ナトヲモ思ヒ合シテ詠ル歌ニヤト思ユ、去レト馬ニアリセハナト云事ハ、後ノ世ノ歌ニハムクツケク思ヒテエ詠シカシ、 青駒アヲコマ ㈢青駒之足騷乎速雲居曾云云

黒馬 ㈣云云夜干玉之黒馬之來夜者云云(十三)ニモ同シツヽケ二處アリ、コレヲコマト吟ハワロシ、久呂ノ合リハ古ブリト云ヘト、黒キ馬ヲコマト云ヘキニモアラス、又奴婆玉ノ古木トモツヽケ、カタシ久呂木ト吟ハキナリ 赤駒 越㈣赤駒之、馬柵乃緘結師、云云㈤長云云阿迦胡麻爾、志都久良宇知意伎云云尙多シ 多都能馬タツノマ ㈤多都能馬母、伊麻勿愛弖之可云云(同)マタ一歌アリ龍ノ馬ハ龍ノ如クニ猛ク駿キ馬ヲ云本ハ漢意ヨリヤ出タルラン 黒駒 ㈦云云早將至渉黒駒(十三)黒駒ノ廐立而云云 駒コマ ㈩妹之㋥上小竹葉野之放駒云云尙多シ コウマ タ(十四)久倣胡之爾武藝波武古宇馬能云云 驄馬 (十二)於能禮故、所罵而居者驄馬之云云マタ(十三)長云云大分青馬之鳴立鶴コレヲアシケ馬ト讀ム、トハ驄馬ハ白キ色ノカチタレハ過半青馬ト云意ニヤ 布都麻 ㈥云云宇麻爾布都麻爾於保世母天云云太ク肥タル馬ニテ不宜宇麻トヲ云ハキシ登宇ヲ合セテ都トセルナリ 青馬 水(二十)鳥乃可毛能羽能伊呂乃青馬乎云云、後ノ世ニハ武麻ト云ヘトコノ頃ハ皆宇麻ナリ然ルニ(二十)不破乃世伎、久江弖和波由久牟麻能都米云云トアルハ上總國ノ防人ノ歌ナレハ國訛リニヤトモ思ヘトナホ牟字ハ宇文字ノ書誤ナルヘシ又久江弖ノ江字モ衣字ノ誤ニヤアラン、スヘテ假字ニノミ書タル歌ニハ其物其事ニ付テノ正字コソアレ訓ノ假字ヲ用ヒタル事ハナシ衣字ノ江ニ紛レツルナルヘシ

○鹿シカ ㈠㈥云云妻戀爾、鹿將鳴山曾、高野原之宇倍、㈩男鹿(十三)雄鹿(十三)ニハ去而見牡鹿ナト借字ニモ用ヒタリ牡シカハ見テモ目ヤスクテ歌ニハ乎之可ヲノミ詠メハ志可ト云處ニカク男鹿牡鹿雄鹿ナト書ケリカク書ナレハ見ナレテ牡鹿ナト書タルヲ志可トノミ讀ム故ニ乎志加ニハ小牡鹿、左乎志加ニハ狹男牡鹿ナト添テ書タルオホシ 小牡鹿 ㈣夏野去小牡鹿之角乃束間毛云云(二十)云云都麻欲夫乎之可云云コノ外ニモアリ小ハ借字ニテ牡シカナリ小サキ鹿ニハ非ス 竿牡鹿 ㈥竿鹿之鳴奈流山乎云云(同)狹男牡鹿(同)左小鹿(同)狹小牡鹿(同)沙小牡鹿(十四)左乎思鹿(十五)草乎思香(同)佐乎思賀(十六)佐男鹿(二十)左乎之可ナト文字ハサマ〴〵ニ書リ然レトモ左乎之可ノ之可ニ鹿字一字書ルハ㈦ニ二處(十六)ニ一處ノミ 鹿兒 ㈨長云云鹿兒自物、吾獨子之、(二十)可胡㈦水手ノカリ字ニ鹿子トモ書ルニ付テ船ノ水手ハ古モ加古ニハ言マシケレハ加古吟ハ、キニヤト云人モアレト(二十)ノ可胡ハ可呉ト吟ヘシ胡字ハ濁音ニ多ク用ヘリ今モ胡粉胡麻ナトハ皆濁音ニ云後ニモ〔和名鈔〕麑加呉ト見エタリ 可とも志可とも 後にはかせきとも 歌ニモ文ニモ多シ

今は可乃志之ともいへり 雌鹿は 一和名抄一牝鹿 同麀音憂米加 人の取はやさて牡しかをそ 一古事記一内拔天香山之眞男鹿之肩拔而云云ナト まをしか

とも〔書紀〕金剝眞名鹿之皮以作天羽鞴云云ナト　まなかとも又さをしかとも
たゝへよへり
○鹿(シシ)　㊂長云云鹿自物、伊波比伏管云云㊂長云云十六社者、伊波比拜目云云(同)四時(同)鹿猪⑦宍⑭思之ナトサマ〳〵書リ
所射十六⑨長云云所射十六乃意矣痛云云⑰長云云所射宍乃行文將死跡云云⑯所射鹿乎認河邊之和草云云コレヲイユカシトヨムハワロシ齊明紀ニ同歌ニテ伊喩之之トアリイユシ、ハ手負シ、ナルヘシ　むかしより志可を
も為をもなへて志之といへり〔中務集〕田マモル家ニシヽノハムモシラテ寐タリト云ツ、歌ニハ夢トソ鹿ノ音ヲキヽ、ケルトアリ　打まかせては猪の志しなり〔雄略紀〕御製云云飼媄羅彌陀陀何、斯廬都登倭我伊麻西麿云云佐謂トハサヲ鹿ト云如クニ猪ヲホメタル詞ナリマタ〔同紀〕嗔猪直來欲噬天皇トアリテ舍人カ歌ニハ斯斯能宇多枳阿斯岡彌トヨメリ是等ニテモ猪ヲワキテ志之ト云事ハ知ナン　為のまたの
名は〔和名鈔〕野猪和名　久左井奈岐といふ是は中昔の名なるへし鹿は獵るにも安き物なるを猪はたけくいちはやきものにてとみの事にかくるゆゑに古はもはら飼おきてかしはにはつかへり〔古事記〕安康段汝者誰人答曰我者山代之猪甘也〔天智紀〕小竹田史身之猪槽水中忽然稻生〔續紀〕養老五年七月云云諸國雞猪悉放本處〔同紀〕天平四年七月云云詔和買畿内百姓畜猪四十頭放於山野令遂性命マタ地ノ名ニ猪カヒト云フハ諸國ニ多シ　然るに後の世にから國よりてい彘マタ家トモトモ猪といふもののまゐ来ぬそれかなりは為のさまして小さければ為の古と名付たり〔武烈紀〕影媛歌云云思寐能和俱吾鳴阿婆理逗那偉能古トアルハ野猪ノ子ト云テ子マテモナク野猪ナリ後ノ彘ニ非ス　はたそれも呼なれてはたゝに為ともいひて和名鈔ニ野猪ノ外ニ猪一名彘和名井トアルハワロシ是ハ和名井乃古トアルヘキナリ　それにしも古への野猪飼を心得たるは時をも世をもわきまへぬわさなり　眞淵カ〔祝詞解〕白馬白猪云云コノ白猪ハ野猪ニハ非ス家ノ事ナリ野猪ノ白キハ得カタカルヘク且生ナカラモ得ヘカラス物ナレハナリ云云ト眞淵カ云ヘルイトワロシ赤猪白猪ナト云事古ヘニ常多キ事ソ今モ彼カ牙ヲ折取テハ飼オク人モアルナリマタ彼ノ家ノ事ハ十二子ト云モノノ中ナル亥字ヲ亥ハ家也トテ昔ヨリ井ノコト訓メリコレモ後ニハ井トノミ云ナシテ井ノ年井ノ月ナトイヘト今モ十月ノ亥ノ日ヲハ井ノコノ日ト云スヤコレハ古ヨリ云來ツルマヽニ傳ヘタルモノ也然レハ井ノコノ年井ノコノ月トモ云タリケンコト知ラレタリ去レハ井ノコヤ井ノコノ日ヲ井トノミ云モ近キ事ニハ非ス和名抄ニモ彘ニ和名井ト出サレタル又同シ順スシノ歌集ニ天元元年十月初ノ井ノ日云云シロ金シテ井ノコノカメノカタヲ造リテ云云加ハレル歌井ノコノ歌ハ平兼盛カ家集ニアリ云云トテ井ノ日トモ井ノコトモ書レタリ

○虎　㊂長云云敵見有虎可叫吼登、諸人之云云⑯虎爾乘、古屋乎越而云云(同)長云云(同)長云云韓國乃虎云神乎生取爾云云

○牟佐佐婢 ㊂牟佐佐婢波、木末求跡、足日木乃云云㊅云云里ト來、牟射佐妣曾此、㊆三國山、木末爾住歴武佐左妣乃云云 むささひは古き俗名なりまさしくはもみといふ ㊅ノハシ書ニ獸名俗曰牟射佐妣トモマタ「和名鈔」鼯鼠和名毛美俗云無佐佐比トモ見ユ 今はもゝかとも 土佐薩摩ニテ毛末阿波ニテ毛毛 乃夫須末とも曾婆をしきとも

○猿 ㊂痛醜賢良乎爲跡酒不飲人乎熟見者猿ニ鴨似 ましらともいひて 借字ニハ㊁ノ家母有猿尾㊆ノ標結申尾ナト多クマシトツカヒマタ「古今集」ワヒシラニマシラナ啼ソ足曳ノ山ノカヒアル今日ニハアラスナト 歌にもよめと猨田毘古命猨女君なといふ神もおはしまた小さるこめやくと謠ひたれは佐留といふ名そふるかるへき 「皇極紀」于時童謠曰伊波能杯爾、古佐屢渠梅野俱、渠梅多爾母、云云「和名抄」ニモ猨字亦作猿和名佐流マタ猨唯和名佐留保保ナトアレトマシラト言事見エス「翻譯名義集」摩斯吒或末迦吒此云獼猴トアレハ末志良ハ天竺ノ語ノウツリタルニヤ又オノツカラ似ヨリタルニヤ又サルニ猿ト書ケト實ニハシカラス猿ハ手長サルニテ皇國ニナキモノナリサルノ漢名ハ猴

○伊奴 ㊄長云云伊奴時母能道爾布斯弖夜、伊能知周疑南、㊆垣越犬召越鳥獵爲公云云㊃長云云吾待公犬莫吠行年 子をは惡ぬといふ今はゐのころとも 「和名抄」犬兼名苑云犬一名尨莫江反爾雅註狗背嵜和名惠沼又與犬同犬子也ト見エタルハ莫江反ノ下ニ和名伊沼ト四文字アリケンヲ後寫シ脫シタルモノナリ左ナクテハ又與犬同ト云文モ聞エス猶ト狗トハ同字ナリ「禮記」曲禮孔穎達疏ニ通而言之狗犬通名若分而言之則大者爲犬小者爲狗トアルコトク犬ハ伊奴猶ハ惠沼又猶モ犬ト同ク伊沼トモ讀ヘシト云意ナリ然ルニ物ノオロカナル人ハ伊奴ヲ和名抄ニハ惡奴ト云ヘリ惡奴ハ伊奴ノ又ノ名ナリト心得タルモアリイト然ラス事ナリ和名抄ニ何トナキ犬ノ所ニハ犬岱以奴乃太末比ナト伊奴トアリマタ子ト云所ニハ猶尾草惠沼能古久佐ナト惠奴トアルニモ思ヒ合テ知ナン

○大口能眞神 ㊇大口能神眞之原爾、零雪者、云云㊂長云云大口乃眞神之原從思管云云 眞淵か云てこは狼の事にて世にたけき獸なれはかしこみて眞神といひならひ彼か口は殊に大きにもあれは大口乃眞神とはいへり 冠辭考ニ委ク云ヘリ

○牛 牡牛 ㊈長牝牛乃、三宅之瀉爾指向云云コノ牝字ヲ契沖牡字ニ改メタリ㊉吾妹兒之額爾生流雙六乃事負乃牛之倉上之瘡マタ牛トノミ詠タルハ㊅長云云牛爾己曾、鼻繩波久例云云 黑きこ牛を 「和名抄」鳥牛楊氏漢語鈔 麻伊といふは眞牛の意なるべし 宇志ノ切リ伊ナリコトヒ牛今コツテ牛トモ西國ニテハコツトイトモソ云

○熊 ㊉荒熊之、住云山之、師齒迫山責而雖問、汝名者不告

○乎佐藝 ㊃等夜乃野爾、乎佐藝禰良波里乎佐乎左毛、稱奈倣古由惠爾、波伴爾許呂波要 宇佐岐と

もたゝ字とのみもいふをさきとは方言なるべし

○狐 (十七)刺名倍爾湯和可世子等、櫟津乃檜橋從來許武狐爾安牟佐武、古ヘハ支都ト云ヘリ「伊勢物語」夜モアケハキツニハメナテクタカケノマタキニ鳴テセナヲヤリツルトモ詠メリ

蟲には

○玉蜻 (三)長云云玉蜻、磐垣淵之、隱耳、云云(十一)ニモ同シツヽケ二處アリ玉蜻ノ磐垣トツヽクヨシハ蜻蛉ハ飛トキトマル特ナト必羽搔ヲスルモノニテアレハ伊ハ打出ル語ニテ蜻蛉ノ伊羽搔トツヽケタルナリ眞淵カ「冠辭考」石ヲ打ハ火ノ出ル故ニ玉蜻ノ岩トツヽケタリト云ル餘リニ物遠シ又春ノ野ニタツ遊絲ニモ語ノ同シケレハ(十)長云云朝越座而、玉蜻、夕去來者云云ト書ケリ但シコノ蜻文字ヤ(十一)ノヲ誤リテ玉限ト書タルハ寫シ誤ナリサテコノ外(三)蜻火(同)珠蜻(八)玉蜻蜒(九)蜻蜒火ナト字ヲ借リテ書ル多シ是ハ(三)香切火(六)炎ト書ケル正字ナリ

秋津 (三)秋津羽ノ袖振妹乎珠匣、吾者蜻領巾、負並持而、馬替吾背、秋津羽トハ今モ蟬ノ羽ト云如ク薄ク輕クウルハシキ意ナルヘシ 阿支頭は彼の中の一種とも聞えねはすへてある大名 今モ陸奧南保ニテ總名ヲアキヅ仙臺ニテアケヅト云然レトモスヘテハトンホト云ヲ大名ニモテ赤トンホ黃トンホ目クラトンホナト言ヘリ又和名抄ニハ惠武婆ヲ惣名ニ立テ聞ユ かきろひは 後ニカケロフト云「和名抄」蜻蛉和名加介呂布 そらを翔る火をいふ事にて 今ノ世ニトンホト云モ空ヲ飛ブ火ノ意 本は「和名抄」赤卒一名絳騮和名 阿加惠無波を言へるなるへし 赤トンホ越前越中ニテ塘リトンホトモ云フ ゑむはは青きあきつをいふにやとおほゆ 今ハ訛リ

テヤンマ筑前ニハヱンボトモヱンブトモ肥前ニテヲンマ皆青キヲ云ヘリ實ニハ蜻蛉ハヤンマノ漢名ニテアレド通ハシテハ惣名ニモ云フ形の大なるいろの青くて〔和名抄〕女萎蕤和名惠美久佐一云夜末惠美マタ黄精和名於保惠美トアル惠美の葉に似たれはゑみはといふ意にてそあらむまたそれをもとにて赤きを赤ゑんは黄いろなるを〔和名抄〕胡黎和名木惠無婆とも呼たりけん今モ黄ヤンマトモ黄トンボトモ云フ

○河津〔三〕長云云且雲ニ多頭羽亂夕霧丹河津者騒、云云〔同〕阿蝦〔七〕河豆〔十〕〔六〕蝦ナトサマ〳〵ニ書リ〔六〕十二ウ長云云河瀬乃浄乎見者上邊者千鳥數鳴下邊者河津都麻喚云云〔七〕七ウ河津鳴清川原乎云云〔十〕四十一云云鳴川津諾文鳴來河乎浄云云コノ外清キ水ニカハツヲ詠ミタル甚多シ かはつは清き川にすみて形やさしく小さき聲よくなくをいふ集中ニモ後ノ歌ニモ皆水ニツキテ清キ川原ナト詠リ古今集序ニモ花ニナク鶯水ニスムカハツノ聲ヲ聞ケハトアリテイマモ川中ニ居ヲ云京ナトニハコレヲカシカト云魚ニモカジカト云アリ ふるくかへるを詠ることはカヘテノ木ヲ〔八〕三言ニ蝦手ト書〔十四〕四言ニ加敝流低トアル外 聞えぬを中昔より歌にも何にも専らありかへるはくさ〳〵ありて草の原にも田にも居る聲わろくかまひすしく鳴くをいふ字鏡ニモ和名抄ニモ加倍留ハアリテ加波豆ハ見エス催馬樂〔一〕知可良奈支可戸留保禰名支美美須〔後撰集〕足曳ノ山田ノソホツ打ワヒテ獨カヘルノ音ヲソ鳴ヌル〔枕册子〕ワタツミノ沖ニコカルヽモノミレハ海人ノ釣シテカヘルナリケリコノ外イト多シマタ中昔ヨリ今ノ世マテ加波豆ト加倍留トヲ一ツニ混ヘ亂リテ〔中務集〕カヘルノカレタルヲ人ノオコセテ「カレニケルカハツノ聲ヲ春タチテナトカ鳴カヌト思ヒケルカナ返シ「誰カカクカラヲ遣テハ忍ヒケンヨミカヘルテフ名ヲヤ頼ミシ〔袋草子〕干時節信喜悦甚テ又自懐中紙ニ裹物ノ取出開之見ニカレタルカヘルナリコレハ井堤ノカハツニ侍ト云斯樣ニ亂レケルヲ〔長明無名抄〕世ノ人思ヒ侍ルハタタカヘルハ皆カハツト云ソト思ヒテ侍ルメリソレモ違ヒ侍ラスサレトカハツト申カヘルハ只コノ井手ノ川ニノミ侍ルナリ色黒キヤウニテイト大キニモアラスヨノ常ノカヘルノヤウニアラハニ跳リアリク事ナトモ侍ラス云云ト云ヘルハヨク分チ知リタルナリ然レトモ井手ノ川ニノミアリト云ハ委シカラス何處ニモ居ルモノナク今モ加波豆ト加倍留ト亂レタレトナホ水ニ住スヲハ某カハツトハ云ステヒキカヘル土カヘル雨カヘル青カヘル赤カヘルナト某カヘルトノミ云ヲ以テカハツト云ハ別ナルヲシルヘキナリ

○多爾具久〔五〕長云云阿麻久毛能牟迦夫周伎波美多爾具久能、佐和多流伎波美云云 谷潜長云云白彦乃將應極、谷潜乃、狹渡極云云コレヲ先ニ思ヒタルハ天雲ノ向伏極ミニ對ヘタレハ霞ノ事ナルヘシ霞ハ谷ヨリ騰リワタリテ冥クナル物故ニ谷ク、ト云ニヤ〔四〕春日山霞多奈引、情久具、マタ同卷ニ情八十一、所念可聞、春霞トアルヲト霞ニヨセテ心具久ト詠ルヲ以テ知ルヘシ其上〔祝詞式〕新年祭谷蟆能狹渡極鹽沫能留限、トアルヲ思フニ蟆字ハ蝦蟆トツヽク字ナレハ本ハ蝦字ナリケンヲ蟆字ニ寫シ誤リタルナランサテハ寫書ニ霞字ト蝦字ト相通フトアレハ谷蝦ト書キ谷久具ト讀ツヽヤカテカスミノ事ナルヘシト思ヒタリケントモコ

レハワロカルヘシ或人谷具久は比佞我倍留なり比佞我倍留をたんがくといふ處々あるは古語の殘れるなりといへりコノ或人ノ説ニツクヘシ古事記神代ニ多爾且久トアル且ノ字ヲ眞淵カ具字ニ改シタル宜シ〔文粹〕村上天皇御製ノ詩ニ野鎚誰得辨蝦蟇尤耐驚トアルモ文字ニテ對字ニハナラネト蝦蟇ヲ多爾具久ト讀ミテシタノ御意ニハ野ツチト谷ク、トヲ對ヘ玉ヘルニヤアラン比支ノ寶ニ漢名ハ蟾蜍但シ筑紫ナトニ雨カヘルヲタンカクト云處モアリト云ヘト押ナヘテハ比支ヲタンカクト云處多シ

〇五月蠅　(三)長云云皇子乃御門乃、五月蠅成驟騷舍人者白栘爾云云(五)長云云五月蠅奈周佐和久兒等遠云云

〇久毛　(五)長云云許之佞尔波久毛能須可佞弖云云　くもを中昔よりさゝかにともよめり蟹ノ形シテ小ヤカナレハ云ニヤト云ヘリサラハ佐邪加爾ト云ヘシ佐々我爾ト云テハ違ヘリ〔古今集〕物名白露ヲ玉ニヌクトヤサ、カニノ花ニモ葉ニモ糸ヲミナヘシトアルヲ初メニテ多ク詠メリマタ〔允恭紀〕衣通郎姬歌和餓勢故餓句倍枳豫臂奈利佐瑳餓泥能區茂能於虛奈比虛豫比辭流辭毛トアルハ小竹カ根ノ蛛ト聞エタリ書紀ノ古本ハ知ラネト釋日本紀文字ハ別ナレト涅字ナリ然ルニ泥字ヲ尼字ニ改メテ左々我爾乃ト吟ムハ然ラシ小竹カ根ニ蛛ノ居テ何ワサカシテアラムコソ姿モ見エテイトオカシケレ私記云云又説蜘蛛ノ別名ナリ言其體如蟹住左左原也トアルハ蛛ノ打マカセテサ、カニト云ヒナラヘル世ノ心モテ云レタリ

〇日晩　(八)隱耳居者欝悒奈具左武登出立聞者來鳴日晩(十)日倉足(十)比具良之(七)日晩之コノ外多シ

〇蟋蟀　(八)暮月夜心毛思努爾白露乃置此庭爾蟋蟀鳴毛(十)云云鳴蟋蟀者雖聞不足可聞(十)庭草爾、村雨落而蟋蟀之云云(十)蟋蟀

之待歡秋夜乎云云(十)草深三蟋蟀多鳴屋前云云(十)蟋蟀之待吾床隔爾鳴乍本名云云揖取ノ魚彥カ〔古言梯〕萬葉ニ蟋蟀トアルハ皆コホロキト讀ムヘシ和名抄以下蟋蟀ヲキリ〳〵ストヨムハ誤リナリト云ヘルヨロシキリ〳〵スト吟ンテハ皆一言餘リ六帖ニモキリ〳〵スノ題ニ集中ノ哥一首モ入ラス是モキリ〳〵スノ題ニト吟マシキ證ナリ但集中ノハサル事ナカラ後世ニ蟋蟀ヲキリ〳〵スト訓ヲサヘ誤リナリト云ヘルハコホロキトキリ〳〵ストヲ別物ト思ヘルニヤ反リテ魚彥カ誤リナリキ古キ名ト後ノ名トヲ辨サリケン　こほろきはこをろ〳〵と鳴を其まゝに呼たる古き名ときこゆ〔和名抄〕蜻蛚和名古保呂木トアレト古遠呂〳〵トコソ鳴ケ古保呂〳〵トハ鳴カネハ本ハ古遠呂木トアリツルヲ後ニ書寫ス人ノ泳丁鹽顏ナトノ心ナラヒニ何心ナク古保呂木ト書タルナルヘシ都テカ、ル類ヒハ〔古事記〕神代ニ鹽許袁呂許袁呂爾畫鳴而マタ輕嶋之明宮天皇御卷ニ繫其衣中甲而訶和羅鳴トアルナト又濕リタル物カワ〳〵ト成ヲ加和久マタ物ノ音サワ〳〵トスルヲ佐和具ト云類皆物ノ聲ヤ音ヲソノマ、ニ和惠爲遠字ノ假字ヲ書ク事ヲ知ヘキ也いふことは鳥や虫の鳴ものに付ていふならひにてそれいひなれてはたゝにきしともすともいへりその事はのちにいはんさてこをろ〳〵ともまたきいり〳〵とも聞ゆれは後にきり〳〵すともよひ〔神樂歌〕支利支利須乃禰多佐宇禮太左美曾乃仁萬爲利天支乃禰乎保利波牟天遠佐萬左川乃遠禮奴ト云ハコヲロキノ狀ナリコヲロキハ畠ニ作リタル物ノ根ナト嚙キル物ニテオノカ角ノ長キカヨク折ル、ナリサテ〔和名抄〕蟋蟀一名蛬和名木里木里須マタ促織和名波太於里米トアル蟋蟀モ促織モ先ニ引ツル蜻蛚モ三ツノ漢名トモハ皆一ツ物ニ

テアルヲ顯主ノ思ヒ違ハレケン　爾雅ニ蟋蟀蛬疏今促織也亦蜻蛚トアルヲ思ヘテサテコホロギトキリノ〳〵ストハ一ツ蟲ハタ織ハ異ムシナルヲ漢名ノ似ツカハシキ故ニハタオリニ昔ヨリ促織トハ書來レリ然ルヲ菅家萬葉ニ一ノ蛼聲之羽風緒寒美促織之音緒音之切々砥篤トヨメルハハタオリトキリノ〳〵ストヲ一ツ蟲ニ心得タカヽルナリ菅マタ音ノキリノ〳〵トスルト云ハ鳴聲マタ羽風ヲ寒ミト云ハ一陸機爾雅疏ニ蟋蟀云云幽州人謂之趨織里語曰趨織鳴懶婦驚是也ト云ヘル意ニテマタ一菅家萬葉ニ秋風丹綻沼良之藤袴綴利世砥手蛬鳴トヨメルモ同シクコノ意ナリ古今集ニツヽリサセテフ蛬ナクト改メラレタルモ同シクツヽリサセト云意ニキリノ〳〵スカ鳴クト云フコトナリサナクテハテフトナクト二ツ重リテ詞ト、ノハスシカルヲキリノ〳〵スハツヽリサセト鳴クモノソト心得テ顯昭法師カ一袖中抄一ニモ世俗ニキリノ〳〵スハツヾレサセカヽハ拾ハント鳴ト云ヘリカヽトハ布ノヤレテ何ニモスハクモナキヲ云ナリト顯昭ノ云ハレタルハ古今集ノ歌ヲ心得タカヒタルナリ　今もこほろぎともきり〳〵すともいとゝともいふ　京ニ今手ツヽオトシトモ云ハ彼懶婦驚ト云ニカナヘリ越後ニテハツヽリサセト云フ　然るに今はくに〳〵におのかさま〳〵名をつけておもひ〳〵にいへはいとまきらはしきを聞知たるかきり問はすかたりせんはたおりめか鳴聲は機おるによく似たるを稲つく音聞なしては稲つきこまろとも今は瓜くひ虫馬おひむしとも京の童はきり〳〵す陸奥にはこをろき　尾張ヨリ東ニワノリナハキツチヨ　筑紫には今もはたおりといふ　一和名抄ニ兼名苑云絡緯一名促織和名波太於里米鳴聲如急織機故名之トアルハ兼名苑モ誤ナリ文粹ニ弓削宿禰以言對册ニ蜒隅之霜衍ニ警、蜻蟲之聲纖寒ト云ヘルモ促織ヲハタオル聲ニ鳴モノト心得タルナリ是モ違ヘリ促織トハ鳴聲ノハタオル如キニヨリテ付タル漢名ニ非ス先ニモ云ツルナリ但如急織機ト云ヘル文ニ付テ顯主ノハタオリメトノセラレタルヲ思ヘハ漢名ハ兎モアレ其蟲ノサマハ知ラレツ又一和名抄ニ螽斯和名以禰豆木古萬呂トアルヲ思フニ稲ヲ舂オトシイトノ〳〵トナルニ譬ヘタル蟲ノ名ナレハ二處ニ別ニハ出タレト是レモ彼ハタオリト同シ蟲也サテ螽斯ト云漢名モヨク當リテアレハ二ツノ名トモハ同シ蟲ノ事ト思ヒサタメツ一萬葉集ニサヽカニノ糸引カクル草村ニハタオル蟲ノ聲ソ聞ユル今馬オヒト云モシイチヨノ〳〵ト聞トリタリマタ叩頭蟲ヲ今國ニヨリテハ米ツキ蟲ト云テ名ハイネツキニ似タレト是ハコト也　又ぬかつき虫を今ははたおりとも米つき虫とも　一和名抄ニ叩頭蟲和名加豆木無之　またはた〳〵を土佐にははたおり國によりてねきむし　一和名抄ニ蟆蚸和名波太波太今モ京ヤ阿波ニハハタ〳〵讃岐ニハハタ、　また今京の童のこをろきといふは外の國に木切虫といふものなり　漢名油胡盧　むしは音をのみ聞て目には見ぬか多けれはつふさにさためつはたかひぬへし人のとりはやす松虫　漢名金鐘兒　鈴虫、漢名金琵琶スヽ蟲ト松蟲ノ呼タカヘタル人多シ鈴蟲ハ彼チヽロ蟲マツ蟲ハ一息ニ長ク引クナリ　今のつくは虫　漢名紡績娘　なと

皆こをろきの類そかしまことと忘にき彼鳥や虫にきす

といふ事は杜鵑はほと〳〵と鳴くきす ㊅安可登吉爾名能里奈久奈流保登等藝須云云〈後拾遺集〉郭公名ノリシテコソ知ラルナレ尋ネヌ人ニ告ヤヤラマシコノ後モナホ多シオノカ名ノホト〳〵ト鳴ヲ名ノリトハ云ナリ然ルニ十王經ト云物ノ別都頓宜壽ト云事ヲ引テ天竺語ナリト知ラヌ人ハオモヒヲリ 鳥はから

〈枕册子〉アサマシキモノ云云イササカ忘ラレテ寢入タルニ鳥ノイト近クカラトナクニ云云コレヲ異本ニカウトナクニトアルハワロケン末ニナリテハ〈續詞花集〉ニ逢フコトハカタヲトきゝすリスル山カラスイマハカウトソ音ハナカレケルトモアリ

はきゝ 古ハ支義志ト云ツレト後世ノキヽスト云ニ相通ヒスヘシ 名のよしは知らねと

宇具比須さてこをろ〳〵きりきりまたきすとは云は

ねと鳴聲を名につけたるは庭鳥のかけ 〈神樂歌〉仁波登利波加介呂登奈支奴〈飜譯名義集〉究究羅是ハ是雞聲ナリコノ加介呂ト久久良トヨク似タリ又漢土ニ典籍便覽ニモ雞ノ一名ヲ會稽公ト云モコケ

ケコウ あまとぶかり ⑪野干玉之夜度雁者鬱幾夜乎歷而鹿已名乎告〈後撰集〉行カヘリコヽモカシコモナリ

旅ナレヤ來ル秋コトぬえ鳥可保鳥蟬すかるなほ多し 漢土ニモニカリ〳〵トナリ

鶴雁鳥雀雞鴿蛬蝱ナト皆古ノ質朴ノ世ニ其聲ヲ以テ呼タル名ト思シ然ルヲ埤雅ニ貓能捕鼠去苗之害故貓之字從苗マタ時珍カ鶴ハ白

色雁雁故ニ名クマタ禽經張華注ニト搗鷊並音雁冬則適南集于水子云云春則鄉北集于山岸マタ徐鍇曰雞者稽也能稽時也ナト云ハナカ

ナカニ後ノ世ノサカシラナルヘシ波登天竺ヲ迦迦ト云ヒ漢土ニモ鴿ト云フナトモ聲ナリ

○須輕 ㊈長云云腰細之、須輕娘子之其姿之云云⑪春之在者酢輕成野之霍公鳥云云㊅長云云殿蓋丹、飛翔爲輕如來腰細丹、

云云スカルハ鳴聲ヲ直ニ呼タル名ナリ今ニ慈我蜂ト云モ鳴聲マタ漢土モ〈陸璣爾雅疏〉似蜂小腰取桑蟲負之于本空中七日而化爲其子里語曰咒云象我象我ト云ヘルモ鳴聲ナリ但シ桑蟲ノ子ヲ養ヒテオノカ子ニスルト云ハ誤ナル事他蟲ノ子ヲ巢ニ入テ己カ遂メル子ヲ養フ事委ニ本草綱目ノ正誤ニ有〈日本紀私記〉蜾蠃取他子爲己子若因此而爲名歟云云トアルハ他蟲ノ巢ヲ借ルモノナラハ須可里トコソ云ヘケレ須可留ト云テハ語ノ脈違ヘ 中昔は〈和名抄〉蠮螉一名蜾蠃和名リ是モ親ノ方ヨリ出詞ナレハ須可之ナリ

さそりとは云ひたれとさそりは 〈字鏡〉蜂波知又佐曾利蟻螘阿利又左佐須又佐曾利ナトアルヲ思フニハ一 さすむしの惣名ととおほし須我種ノ蟲ノ名ニハアラシ

留今は腰細とも ジカ蜂トモ みちのくには土すかりともいふ

○虛木綿 ㊈長云云虛木綿乃窂而座在者云云マユハウツロニアルモノナレハウツユフトハイヘリ 子 ⑬足常クラチネ母カカ養

子眉隱云云⑬垂乳根之、母我養蠶乃眉隱云云、雄略紀ニ蠶ヲ詔ヒケルヲ蜾蠃連カ思ヒ誤リテ嬰兒ヲ集ヘタルハ其頃モ子トノミ云ヒケル故 眉 ⑪⑬⑭筑波禰乃爾比具波麻欲能伎奴波安禮杼云云新桑眉ハ春子ナリナリ

○桑子 ⑬中中ニ人跡不在者桑子爾毛成益物乎玉之緒許 くはこは今もくは子とも

いひてかふ蠶ならて桑の木におのれとこもり居るち
ひさきまゆなるべし

〇螢　螢㊂長云云使之云者螢成髣髴聞而云云

〇蟬　㊄伊波婆之流、多伎毛登杼呂爾、鳴蟬乃、許惠乎之伎氣婆京師之於毛保由流虛蟬毛媥乎相格良思吉トアルヲ初テ現セ身ニ蟬ノ字ヲ借テ書ル多シソレヲシモ後ニハ蟬ノ脫ノコトニシテ〔古今集〕物名ウツ蟬ノカハラ木コトニト、ムレト魂ノ行ヘヲ見ヌソ哀シキトヨメリ又蟬ノ中ノ一種ノコトクニ〔同集〕長云云春ハ霞ニタナヒカレ、夏ハウツ蟬、鳴クラシ云云ナトモ詠ミ六帖ニモ蟬ノ題ニ蛬蟬歌多ク入せみはくさ〳〵いとおほくあれと古リ後ノ歌ニモ甚多シ

くきこえたるは〔和名抄〕蛁蟟和多くつ〳〵ほうしとも冬

せみとも越前ニテハチクチクオイシトモ云サテ和名抄ニ出サレタル蛁蟟ハ久豆久豆保宇之ニ非ス今云コロモ蟬ノ漢名ナリ久豆久豆ノ漢名ハ寒蜩又寒蟬トモ然ルヲマタ〔和名抄〕寒蜩俗云加無世美トテ別條リニ出サレタルハワロシ寒セミト云モノ別ニハアルヘカラス今冬セミト云ト同意ニテ久豆久豆ノ又ノ名ナルベシ　また形の大きなるは

〔和名鈔〕馬蜩無末世美トアル　宇末世美今は山蟬熊せみともすへて雌

せみは鳴ぬものにてあるかそれをはなはせみ今はお

し蟬とも〔和名抄〕蚱蟬和名奈波世美雌蟬不能鳴者也トアレト蚱蟬ト云ハセミノ總名ニテ雌蟬ニ限ラス雌蟬ハ漢名ニ

啞蟬トモ云

魚には

○鯨魚 ㊁長云云鯨魚取海邊乎指而云云、（同）勇魚㊅不知魚㊆佐伊魚ナト書テイト多シ 本の名は久治良なるを後にいさなとはいふめる 〔古事記〕神武段御製云云伊須久波斯、久治良佐夜流云云

○鈴寸 ㊂荒栲乃、藤江之浦爾、鈴寸釣白水郎跡香將見旅行吾乎、（十一）鈴寸取海部之燭火外谷不見人故戀比日

○年魚 ㊂長云云河湍爾波年魚小狹走、彌日異云云㊄麻都良可波河波能世比可利阿由都流等、云云（十三）（十九）ニハ鮎字ヲ書リ

和可由 ㊄等富都比等未都良能加波爾和可由都流（同）（二十）等ニ歌アリ和可由ハ若アユニテ年魚兒ト同シ

○束鮒 ㊃高安王裹鮒贈娘子歌奥幣往去伊麻夜爲妹吾漁有藻臥束鮒

○屎鮒 （十六）香塗流塔爾莫依川隅乃屎鮒喫有痛女奴 一束はかりのを束ふなとはいふへし藻臥とはふなはこと魚ともにたかひて藻の中に横になりて打ふし〳〵する物なれはいふくそふなは誠に川隅のあくたの中に出來る鮒にて今もさはいふ

（鮪 ㊅長云云藤井乃浦爾鮪釣等、海人船散動云云（六）鮪衝等海人之燭有伊射里火之云云マコトニハ漢名金鎗魚

○堅魚 ㊈長云云水江之浦島兒之堅魚釣云云漢名ハ鮎鍾魚マタ黑鰻魚

○鯛 ㊈長云云浦島兒之堅魚釣鯛釣矜、及七日云云（十六）醬酢爾蒜都伎合而鯛願吾爾勿所見水葱煮物コノ鯛願ト書テタヒネガフト讀來ヲ鯛モガモト讀カヘ或ハ願字誤リナリナト云人モアレトモ本ノママニネカフト讀テアルヘシ願フト云テ食マホシキコトナリ蒜ツキ合タル鯛ヲ食マホシキ我ニ水葱ノ煮物ナトモテ出見スナト云意ナリ〔ウツホ物語〕藤原君巻ニ滋野ノ師ノ老女カ左大將ノ方ノ老女ニ奏ノ云云參ラセント來賜ヘト云云サヤヨクノ玉ヘリコノ比ハネカハシキモノ也云云 神代には赤女といひき〔神代紀〕一書云云海神召赤女口女問之云云赤女即赤鯛也云云 また今のあかめは小鯛の目のあかきをいふ 小鯛ト云コトモ外ニハ見エネト㊆右歌二首小鯛王宴居之日云云

○氷魚 （十六）吾兒子之犢鼻爾爲流都夫禮石之吉野乃山爾氷魚曾懸有 ひをはあめの子なりといへり是にまきらはしきものあり今の白うを又サウメンコリトモといふもの平國によりて比伊乎といふ 漢名ハ麪條魚 また大白いをといふものをし出雲にては比乎といふ是は長さは三寸はかり河と海との潮さかひに居るものなり 漢名ハ膾殘魚マタ名ハ異ナレトコレラノ類ニテ海ニイサヽト云モアリ漢名鱊魚又ノ漢名鷺毛魚ソレヲ乾シテチリメンザコ漢名ハ鷺毛脯ト云

○ノ武奈伎（十六）石麻呂爾、吾物申、夏痩爾吉跡云物曾武奈伎取食、マタ痩々母生有者將在乎波多也波多武奈伎乎漁取跡河爾流勿　中ころもなほ（和名抄）鱣魚和名無奈木といひけるを今は宇奈岐とのみいへり　鱣魚ハフカノ漢名ナリ武奈岐ハ漢名鰻鱺魚シカルヲ（和名抄）鰻鱺魚和名波之加美伊乎トアルハ大ニ違ヘリハシカミ魚ハ（後紀）延暦十六歳八月己巳披庭溝中獲魚長六寸形異常突或云椒魚在深山澤中ト見エタルノミニテ今ハ山椒魚ト云谷川ニ居リツ、水ナラヌ所ヲモアリキ又木ニモノホリ大ナルハ六尺許モアルナリ漢名ハ鯢魚マタ箱根ノ山椒魚ト云モノアリイモリノ形ミタルモノナリ漢名黒魚マタ湖水ニ居ル山椒魚ト云モノアリ兒ノ啼聲ヲシテ鳴之ハ漢名ヲ鯑魚ト云コ、ニ又（文德實錄）仁壽三年三月癸酉近江國得魚形似獼猴異而獻之故老皆曰此椒魚也昔時見有此物ト見エタルハシカミ魚ハ何ニカアランサルニ似タル魚ハ知ス但シ獼猴ノ事ハ兎マレ近江ヨリ獻タルハ湖ヨリ漁リタル彼兒ノ啼マネスル奴ニヤ

○都奈之（十七）長云云波麻由伎具良之都奈之等流比美乃江過底云云　つなしはこのしろの又の名なりつなしといふ處もこのしろといふ國もあるか中に越中人はいまもはらつなしといへり

漢名ハ（和名抄）鰶子倒反字亦作鯽和名古乃之呂トアルノナリスヘテカヽル事考ンニハ所々ノ方名（クニナ）ヲヨク聞正シテスヘキナリソレモオロカニアレハ違フ事多シサキニコノ都奈之ヲフカノ一種ナルツノシノコトニ思居リコノ歌ハ越中氷見ニテノウタナレハ氷見ヨリ鏡磨ニ來ル者ノアリシニツノシヲ見セテ是ハ其ワタリニテ都奈之ト云モノナリヤト問ケレハ實ニ然リト答ヘキ其後ニ富山ヨリ筑紫琴ヒク人ノ來居テ物語シタルニ都奈之ト云魚ハ如何サマニアルモノソト問ツレハ外ノ國ニコノシロト云魚ヲコソ己カ國ニハナヘテツナシト云ナフヒタレト答ヘツサテ先ノ鏡トキカ云シ事語リケルニソレハ大イナル虚言シツルモノカナ我モ氷見ノ浦ニハ常ニ行通ヒテ知レリツナシトツノシトハ大キニ違ヒタルモノニテトモニ氷見ノ浦ニアルヲトテ笑ヒヌ其後ニ外ノ國々ノ國名トモヲモヨク聞正シタルニ越中ハサラナリ吾妻ニモ筑紫ニモツナシト云所イト多カリサテソ先ノ奴ハ知ヌヲ恥ニ思ヒテ知カホニ答ヘケルワカ問ツル様モワロク聞ケリト思ヒナリヌ　さて魚にはあらねとこのつゝきには

○忘貝（十一）大伴乃、美津能濱爾有、忘貝云云（六）云云拾而持去戀忘貝コノ外多シ　今わすれ貝といふものくさ〲なり土佐にいふ忘貝紀伊國にいふのまた伊豫のわすれ貝は古へのなりといひ傳へたれと何のよしもなけんは定めかたし

○鰒（三）或娘子等賜裹乾鰒戯請通觀僧之呪願云云コノ賜字ハ以字ノ草ノ手ヨリ寫シ誤シナルヘシ（十三）云云鰒貝之獨（カタ）念荷指天珠（六）云云石隱加我欲布珠乎、不取不止、（同）海嬬嬬玉求良之奥ッ浪恐海爾船出爲利處見　鰒珠（六）長云云奥津神久利ニ鰒珠左盤爾潜出之云云　白玉（十三）長云云木國之濱因云鰒珠將拾跡云而妹乃山勢能山越而行之君云云奥浪來因白玉邊浪之縁流白玉求跡曾君之不來益云々尙多シ神名ニモ伊豆國ニ鮑玉白珠比咩命ト申スアリ　石をもはめては玉といひ（十三）長沼名河之底奈流玉求而得之玉可毛云云コノ類イト多シ　又まことのしら玉をも

㊄眞珠者緒絶爲爾伎登云云ナト多ク　いへれとおほくはあはひを打まかせてたまと詠めり

○美奈乃和多　五長云云美奈乃和多、迦具漏伎可美爾伊都乃麻可云云㊆彌那綿古蜷腸㊄美奈能和多㊅三名之綿ナト皆カクロキトツ、ケタリ　よしやあしや知らねとみな貝の腸のいろの黒ければ髪にいひかけたりといひ傳へり契沖ハソレヲ惡シト思ヒテサケノ魚ノミナ腸ノ事ニ心得タリ然レトモミナノワタハ今モミノ腸ト云フサケノモ何ノモスヘテ黒キモノニ非ス美那貝ヲ今ハ訛リテジナニオイナナト云漢名ハ螺螄

○四時美　六住吉乃、粉濱之四時美開藻不見隱耳哉戀渡南漢名ハ一字鏡ニ蜆之自彌「和名抄」蜆和名之々美加比

○小螺　六長所聞多禰乃、机之島能、小螺乎伊拾持來而云云「和名抄」小嬴子和名之太太美トアルナリ今ハ訛リテ志多駄免トモ又セ、貝トモ云漢名扁螺　この外に㊤水泳、玉爾接者、礒貝之獨戀耳、年者經管、とあるをあはひの事に思ふ人もあれと玉といふこそ本よりあはひなれ礒貝は何にもあれ石なとに付てかた〳〵のみある貝をいふなるへし一種にはあらじ㊤住吉之濱に緣云、打背貝實無言以余將戀八方と詠るはうつしになれる貝からなり又貝をさして詠るにはあらねと㊂不盡のうたに云々石花(セノ)海跡(ウミト)名付而有毛、彼山之堤有海曾、にとよめる　マタ借字ニ㊤馬聲(イ)蜂音(ブ)石花(セ)蜘蟵荒鹿ト用ヘル　世我比は　二和名抄「尨蹄子石花和名勢マタ「式」蹉跎大嘗祭細螺棘甲嬴石華等トアリ　かへての柴のことくに稜たちたれは　今ハ桔梗カヒトモ云歌仙貝ノ片カヒナリ　かの山の八峯の間のくほめるかかなたこなたに入かひたるをそれか形にたとへて石花の海とは名つけたる也

○河爾　㊅長忍照八難波乃小江爾廬作難麻理弖居芦河爾乎云云借字ニハ蟹字ヲ多ク用ヘリ　かにはくさ〳〵多き中につきてわか越のかにのいとすくれたれはかしこき　古事記應神天皇　御製にも毛々豆多布都奴賀能迦邇なに〳〵と詠せ玉へり

○龜　二長云云我國者常世爾成牟、圖負留神龜毛新代登云云㊆長云云ト部座、龜毛莫燒曾云云

○於可美　三吾岡之、於可美爾言而、令落雪之摧之彼所爾塵家武　於可美は闇龗高龗　神代紀ニ靇此云於箇美　とて神の御名なり蛇なとの事を知り玉ふ神なるべし　大和ノ大原ニ於可美ノ神社有ツランニ其神ニ云テ神ヲ使ヒテ落シメタル雪ナリト殊更ニ無禮シノ詠ナシ玉ヘ

ルナルヽシ又吉字ハ草書ノ乞ヲ乍ニ寫シ誤リタルニテ於可美ニ乞
テニヤアラン古ヘハ神ニ乞テ雪落ヘクナシテ我カ落セタル雪ナリ
ト落セテ詠人ノ方ニ取リテ聞ヘシ　久知奈波の屬にも〔豐後國風土記〕球珠郡珠覃郷此村同天皇行幸之
時奉膳之人擬於御飲令汲泉水卽有蛇䨈謂於箇美於是天皇勅云
必將有臭莫令汲用因斯名曰臭泉因爲名今謂球覃郷者訛也トテ　於
かみといふか聞えたるは　惠中ト云禪ホウシ其師正シノ言行ヲ錄シタル〔駒鞍橋〕ニ草カリ童
云云一日山ヨリ歸ルニ大木ノ下ニ休ミ寐ケル其木ノ上ニオガバミ
有是ヲ呑マムトス時ニ腰ヨリ小刀スケ出テ蛇ノ頸ニタツ云云ト云
ルハ正三ノ物語ノマヽ蟒サラハ東國ニ宇波婆美ヲ於可婆美ト云處
アリト覺ユ又駒鞍橋ノ文ニ筑紫語リノ交リタルヲ見レハ惠中ハ西
國生レノ人歟サテハ西國ニテ宇波婆美ヲ於可婆
美ト云處アルニヤサテ於可美ハ於可婆美ニテ　今のうははみ
の事とおほし　於可美ハ昔ヨリ䨈字ヲ書レタルハ何ノ由ニヤ又漢土ニテ䨈ト云モ字書ニ䨈ハ龍也トアルノミニ
テ如何ナルモノニヤシラス　されと此うたは神の御名なり　天竺ニ那伽ト云物アリテ雨
ヲ降スト云事アリ其那伽ヲ漢土ニテ龍ト引當タリ天地ニハ神コソ
アレ龍ナト云物ノ力ニ雨降スヘシヤ龍蛇ト連ネテ云ヘト龍ヨリ劣
レリト云ナル乎呂知ナトカ雪降スヘシヤ又漢土ニ雹ハ蜥蜴做スト
サヘ云ナルハ余ナルツラ言ナリ彼天竺ノ那伽ヲ漢士ニ龍ト譯シテ
仙經ニ龍王ト云事アルニヨリ〔鎌倉右大臣家集〕時ニヨリスクレ
ハ民ノ嘆キナリ八大龍王雨ヤメ玉ヘトアルハ其マヽニ波知陀伊理
宇和宇ト吟ヘキヲ和多都美乃加美ト讀ハ賢ニナリ天竺ノ龍王ト皇
國ノ海神トハ異ナリ其白ヘ綿津見神ノ雨ノラシ玉フ事モ聞ス又コ
ヽニ心得置ヘキコトハ神ノ御名ト動物ノ名ト同シキアリ於可美ノ
神ト乎呂知ノ屬ナル於可美マタ多邇具久神ト加倍留ノ狀ナル谷具
久マタ野追神ト久知奈波ノ中ニ最狠毒キヲ〔字鏡〕ニ蝮乃豆知今
コノ國ノ方名ニ都知古呂ト云コノ類ナホ有ヘシ是ハ神モ其物トモ
ノ狀ニ座ツルカ又神ノ御名ヲ其物トモニ負セタルカ其故ハ知ネト
心得テアルヘキナリ閉美ト云語ノ借字ニハ㊉落過沼（チリスギヌ）蛇（ベミ）〔和名抄〕
蛇和名倍美一云久知奈波トアレト久知奈波ハ今ノ白ヘミ里マハリ
倍美ト云ハ今云マムシナルヘク思ユ

○蛟龍㊄虎爾乘ヽ古屋乎越而靑淵爾蛟龍取將來劍カ毛我今本ニ
鮫龍六帖ニモサメトアルヲ契冲蛟字ニ改メキ〔和名抄〕蛟和名美豆知

萬葉動植考　中

草類

菜 春菜 朝菜
草クサ 草カヤ 美草 眞草 和草
紫草
珠藻
旗須爲寸 爲酢寸 爲寸 波奈須
尾花
加夜 蘭白路多可我夜
四野 奈湯竹
小竹之葉 小竹 竹葉 湯小竹 伊佐左村竹
多氣
秋芽 芽子花 先芽
葦 葦若末
穗 薄 奈倍 湯種 速稻 稻
奴波珠 牟浪 他麻
狹名葛 狹根葛 山佐奈葛
狹野方 玉葛
蘿コケ
蘿コケ
角 都多 石綱 石葛
深海松 美留 俟海松
影 日影
山振
宇波疑
弱薦 苅薦 薦 花勝見 麻手其母
軍布 和可米
菅 菅葉 石穗菅 磐本菅 山菅 菅根
菅 白菅 靜菅 菅 子菅 菅根
菅 山菅 菅實
藤浪 藤
淺茅 茅花 茅草
萱草
水草
韓藍
粟
水葱 古奈伎
石竹
菖蒲
葛 葛花
名乘藻 莫謂花 繩乘
伊都藻
濱木綿
濱荻 荻
志婆
麻乎 櫻麻 夏麻 安左乎
月草
紅
娘子部四
牟貝良 八重六倉
宇利
三枝
冬薯蕷葛
菅藻 藻附
菱
土針
由利 姫由利 左由利
青角髮
下草
垣津幡
浮蓴
左和良妣
山治左 知左
須美禮 都保須美禮
藤袴
朝貌
容花 可保我波奈
山藍
惠具
葦
思草
稗
知草
子太草
似兒草
穗蓼 水蓼
麥
蓮
濱菜
波麻都豆良
宇家良
九久多知
伊波爲都良
弩自
於保爲具左
都豆良
美良
多波美豆良
根都良具佐
蔓菁
宇毛
蕀
玉帚
葵花
屎葛
余母疑
保與
堅香子之花
決蘭
母母余具佐
宇萬良
麻米
芹子

草には 草ト云テマコトニハ木ナル
モアレトキハタケクハ別ス

〇菜 ㊀長云云美夫君志持
此岳爾菜採須兒云云 春菜(ワカナ) ㊇春山之開乃乎烏里爾春菜採云
云コノ外ナホ多シコノ乎烏里ヲ
乎烏黒トアルハ誤ナ
リ㊁ニハ若菜トカケリ

朝菜 ⑯去來兒等香椎乃瀉爾白妙之袖左倍所沾而朝菜採午
六⑭許乃河泊爾安佐奈安良布兒奈禮毛安禮毛云云 菜
は何にもあれつみてくふ草の惣名わかなは春早くつ
むをいへり必しも青菜にはかきらず〔夫木集〕今日ハマ
タユキマノオハギツ
ミマセテ野邊ノ若菜ノ數
ヤマサラントモヨメリ あしたにつむは朝菜ゆふへにつ
むは夕菜〔催馬樂〕和可可止爾和加加止爾宇波毛乃須曾奴禮、
之太毛之春曾奴禮安左名川美由布名川美云云

〇草 ㊀云云磐代之岡之草根乎去
來結手名丶コノ外イト多シ 草(カヤ)㊀吾勢子波借廬作良須草無
者云云コノ外イト多シ草字
ヲ書タルニクサト吟ヘキトカヤト吟ヘキトノ別アリ加也ニ草字ヲ書
キハ〔和名抄〕武藏國埼玉郡草原加也波良因波國法美郡大草於保
加也ナト云 美草(ミクサ)㊀金野乃美草刈葺屋杼禮里之云云㊂水薦苅信濃
眞ナホシ 乃眞弓吾引者云云⑭三薦刈信濃乃眞弓云云㊉
春去者水草之上爾置霜之云云㊉秋就者水草花乃阿要奴禰思跡不知
直爾不相在者ミノヲミスヾト吟人アレトソレハ悪シソノコトハ後

ニ
ン 云 眞草(マクサ)㊀眞草苅荒野ニハ者雖有云云⑪眞薦苅大野川原之水隱
云云コレハミクサトモ吟ヘケレト外ノ美草水草ナト書
ケルニタカヒテマクサト吟ヘキナリマタ⑪ノヲ今本ニマコモカル
ト讀ミタレトワロシ水隱ニツヽケタルニハアラスクサカル野トツ
、ケタルナリ外ノ歌ト
モヲモワタリテ見ヨ

〇和草(ワカクサ)⑯所射鹿乎認河邊之和草身若可倍爾佐宿之兒等波母コレ
ヲ爾古具佐トヨミタルハワロシ身若キトツヽケタリ齋明
紀歌ニモ同シサマノ
ニ倭柯矩婆能トアリ くさをはほめてみくさともまくさと
もいひ屋を葺をは可也とも神代ニハ鵜ノ羽シテ葺タルヲ鵜
カヤト云ヘリ鵜ノ屋ト心得タル
ハワロシ鵜ノカヤナリ今モ苫(スヽキ)ニテモ
脈カラニテモ屋ヲ葺種ヲ加也トイフ かやにはすゝきかよけ
れは ㊇波太須珠寸尾花逆葺トモ㊉蜒野之、尾花苅副秋芽子之、
花乎葺核君之借廬トモ⑯波花乎可里保里保爾布佐弖トモ
ヨメリマタ㊀金野之美草苅葺トハ何草トモナキガ如クナレド心ニ
ハス、キヲオモヒテ詠ルト思ユ㊉秋就者水草花乃トヨメルモス、
キニヤアランサテカヽル所ヨリ加也ニ草字ヲ書キ又轉シテハ尾花
ニモ草花ト書リ草(クサ)ハ加也加也ハ須々支トヤウノ\ニウツシ行タリ
すゝきの一種にやかてかやとよふもありて今はそれ
をのみかやとはいひなれり サテカノ㊂ノ水薦ノコト眞淵カ
云ク薦ハ篶字ノ誤ニテ竹ノ名ナ
リトス竹トテシヌ竹ニ似テ小サク黒キ竹ナリ水ハ眞ノカリ字ミス
ヾカル野トツヽケタリトテ神代ノ野篶ヲ引テ眞淵カ云ツレト是ハ

違ヘリ野ニ草カル事ハ常ナリ小竹ナトヲ苅ル事ハ草ニ合シテハイト物遠シシカモス、ハ野ニ在物ニアラス深キ山ニ生ルモノニテ彼トク筍ヲクフスヾ竹ナリサレバ後ノ歌ニモ〔新古今集〕秋上今宵タレス、吹風ヲ身ニシメテ吉野ノタケノ月ヲ見ルラン〔續千載集〕雜下老ノ身ニ吉野ノ奥ノス、ワケテ浮世ヲ出ル道ハ知ニキ〔風雅集〕雜上吉野山花ノタメニモ尋ネハヤマタ分ケソメヌス、ノ下道ナト詠ルヲ思ヘ又草カル野トツ、ケタルコトハ先ノ歌トモニテ知ナン後ノ歌ニモ〔新續古今集〕ミクサカル荒野ノス、キウラワカミマタ穗ニ出ヌ物ヲコソ思ヘカノ薦字ハ字書ニ作甸切獸之所食草也トアリ

○紫草 ㊀紫草能爾保敝類妹乎云云㊂託馬野爾生流紫衣染云云コノ外多シ

○珠藻 ㊀射等籠荷四間乃珠藻苅麻須ウタイト多シサテ此ノ荷字ヲ我トヨムハ惡シ能ト讀ヘキナリ 玉藻は毛波をほめたる名にて海にも 哥イト多シ 河にも ㊁長云云明日香乃河之上瀬生玉藻者云云⑪玉藻苅井堤乃四加良美云云⑬明日香河瀬湍之珠藻之云云ナトイト多シ 池にも ㊂輕池之納徃轉留鴨尙爾玉藻乃於丹獨宿名久ニナト おほくよめり ㊆云云奥玉藻之名乘曾能、花トモ詠リ然ルモ玉藻トハ一種ノ藻ノ名ト思ヘルワロシ

旗須爲寸 ㊀長云云阿騎乃大野爾旗須爲寸、四能ヲ押靡云云㊂皮爲酢寸、久米能若子我伊座家留云云㊉吾妹兒爾相阪山之皮爲酢寸ト云哥ヲ古今集ニハシノス、キト入ラレタレト皮字ヲシノト讀ヘクモアラス㊇波太須珠寸尾花逆葺黑木用云云コノ外文字ハイロ〳〵ニ書リ㊉旗荒ト書タルハ芒字ナトノ書誤ニヤ書紀ニハ幡荻ト荻字ヲモ書レタリ

爲酢寸 ㊆妹所等我通路ノ細竹爲酢寸コノ外多シ 尾花 ㊇ノヲ初メイト多シ(同)吾屋戶乃草花上之白露乎云云草花ト書ルコノ外ニモ多シ⑪麻花(同)初尾花ナト文字ハイロ〳〵書リ 波奈須爲寸 ㊇日頻布君之家有波奈須爲寸云云ハナス、キト云事コノ外ニモ見エス奈字ハ太字ノ書違ヒニモアランサレトコノ頃モ花ス、キト云マシキニハ非ス 契沖かいはくはたす、きは穗にいて、打なひきたるか旗に似たれはいふなりといへり コノツ、キニマタ末ナル加也ヲモ云ン

○加夜 ⑭乎可爾與世我可流加也能佐禰加夜能云云禰自路多可我夜 ⑭可波加美能禰自路多可我夜安夜爾安夜爾左宿左寐氏己曾、己登爾氐爾思可根白ト云事思束ナシ禰字ハ穗ノ書誤リナルヘシ穗ノ白クナル頃ハ外ノ外モ枯ハテ、獨リアラハニ見ユルハ穗白高我夜トハ云ナメリ〔枕冊子〕秋ノ野ノオシナヘタルオカシサハス、キニコソアレ云云多ノ末マテ頭イト白クオホドレタルヲモ知ラテ云云、ス、キノ漢名ハ芒カヤハ菅ト云フ古クスゲニ菅字ヲ書ナレタレト菅ハスゲニアタラズ

○四野 ㊀長云云阿騎乃大野爾旗須爲寸四能乎押靡云云コノ哥㊆細竹爲酢寸トヨメル哥ニ引合シテ思ヘハ旗ス、キト志奴竹ト二ツノ草ナル事ハ知ラレタリソノ志奴ヲ志乃ト云ヤ野山ノ奴ヲ乃ト云ヤオトハ後ノ事ニテ此コロハフツニナキ事皆人知レリ然ラハ是ハ四能トアレハ志奴竹ニハアラシヤト云云旗ス、キシノヲ押ナミト吟ミテハ四能ト云語何ノ事トモ聞エス是ハ四野トアリツル野山ノ野字ヲ草書ヨリ能モシニ寫シ誤リタルナリ㊄波流能能爾⑭須我能安良能爾⑱夏能能之トアル是ラハ皆然リ草書ノ野字ハ能字ニミマカヒツヘシ又反サマニ能字ヲ野ニ誤リタルハ㊉引津野邊有告藻之(同)高松野山司之⑱多流比賣野宇良乎許藝都追(同)奈良野和

棄椒乎、(同)安利蕉米具利(同)伊都波多野佐加爾蘇泥布禮、コレ等何レモ野山ノ野ニハアラズ上ヨリ次ヘ續ク辭ノ之ナリ集中假字ノミニ書タル哥ニハ其事其物ニ付タル正字ノ野江兒名ナトハ類コソアレ讀ノ借リテ交ヘタル事ナケレバ(六)ノ四首ナトハマシテ字謬リナル事著明シ又(十四)可美都氣奴能國ノ哥ニ前モ後モミナ可美都氣野マタ可美都氣努トアル中ニタヽ一首可美都氣乃乎度能多杼里我云云コノ哥ノ或本歌トテ出タルニモ乃トアルハ上津毛ナルト云意ニテ此頃モ常ニハ上津毛野之國ト云ヘト稀ニハ野ヲ省キテ今ノ世ノ如クニ上津毛之國トモ云ルナルヘシ(七)妹所等我通路細竹爲酢寸我通靡細竹原コレヲシヌズ、キト云ス、キゾト思フハワロシ末ノナビケシスハラトアルヲ見テモ細竹ト爲酢寸ト二ツノ草ノ名ナリトハ知ヘシ此歌ニ就テ〔六帖〕ニシヌノス、キト云題ヲタテ、此歌ヲノセツ又秋風ノヤ、吹野邊ノシノス、キホニ出ス戀ハ苦シカリケリト云歌モアリ又(同)年フトモ我ワスレメヤ相阪ノシノ、ヲス、キ老ハテストモ又〔狹衣物語〕ヲクラノ山ノシノス、キモ云云ナト末ニハイト多シ又(七)淡海之哉、八橋乃小竹乎不造矢而トアルハ志奴ハ矢ニ造ベクモアラネト大ラカニ詠ルナルベシ 奈湯竹 (二)長秋山、下部留妹奈用竹乃騰遠依子等者云云(三)長、名湯竹乃十縁皇子、狹丹頰相吾大王云云(二)ノ奈用竹ハ(三)ノ名湯竹ヤ又佐佐ヲ湯小竹ト云ニ思ヒワタリテ思フニ由字ヲ用ニ書タカヒタルニテ是モ名湯竹ナルヘシ後ノ世ニモハラナヨ竹ト云ヘハ是モ其マヽニ奈用竹ト云テモ有ヘケレト先ニ云ツル例モアナリマタ何トナク奈由竹ト云ハ古語メカシク聞ユ しぬは〔一字鏡〕篠志乃又保會太斤ともいふさゝ也はその竹の類はたわ〳〵としなへとをよるものなれはなへよるてふことにて 支留ノ合リ由ナレハ なゆたけとも 今ノ語ニナユナヤスナト云モコレナリ しなゆてふこゝろに 奈由ノ合リ奴ナレハ しぬ竹とも 今ノ語ニシナ〳〵シナヤカナト云モ是也 しな〳〵となるものなれは 志奈ノ合リ左ニテ さゝとも名付たりけん サヤ〳〵ト亂レサワク物ナレハ云ニヤト思ヘトナユ竹ヤシヌナトニ思ヒ合スレハ倚シナノ〳〵ナルヘシ かくて 集中マタ外ノ書トモニサ、ニモシヌニモナヘテ小竹ト書ルハ大カタ一物ナレハ 其類の惣名とも聞ゆれと取わきては 字境ノ志乃保會太斤モ矢竹ノ事ト思シ和名抄ニモ志乃ヲ篦ノ次ニ出サレタレハ其意ニテ ほそ竹をなゆたけともこしぬともいへり (七)ノ歌ヲ思フニ今ノ世ニハ左々ヲ志乃ト云ヘト今ノ志乃ハ矢ニ造ルヘクモアラネハ彼ウタノハホソ竹ヲ志奴トヨメルナリ ほそ竹の今の名は也乃太計 先ニモ云ツル能ト奴トノコト人ノ思ヒ違ヒヌヘキ次ヘ續ク辭ノ之モシ書ヘキ所ニ笑字ヤ篦字ヲ借リテ書ル多シ(六)飽ハ上ヨリ津之小野笑(同)大海乃原笑(八)足日木笑(九)絶等寸笑(十)足日木笑(十一)浮笑緒乃(同)小竹之眼笑(十二)隱來笑(同)葦原笑(同)帶乳根笑(同)衣袂笑(同)篦跡丹者不起サトナリコノ笑字ハ字書ニ弓努矢也俗ノ矢字ト見ユ〔和名抄〕ニモ釋名云笑音笑和名夜其體曰簳音幹和名夜加良トアリテ矢ノ事ナリ(六)ニハ長云云肉自物弓笑圍而ト直ニ矢ニ用ヘリ又篦字ハ箘ノ古文ニテ〔山海經〕註箘亦篠類中箭ト見ユ〔和名抄〕ニモ唐韻云篦和名乃箭竹名也トアリテ竹ノ中ノ一種ナリ然ルヲ和名抄ニモ篦ヲ矢カラノ事ニ心得テ和名乃ト入レラリタリト見ユサテ笑字ハ矢篦字ハ竹ノ名ニテアルヲ二ツナカラ彼矢カラニスル乃タケノ事ニトリ用ヒテ之ト云語ノ借字ニ書タルナリ志奴ト云

事ハ先ニ云ツ乃ト云事ハ古事記ヤ書紀ニ知能梨ノ靫五百箭靫ト見エタル能ニテ志奴竹ヲ撓直シテ簳ニ用フヲ云フタメテ直スレハ奈保竹テフ事ニテ奈保ノ合リ乃ナリカクテ志奴ト乃トノ別ハ知ナン又㊂清江乃木笶(キシ)松原トアルハ志モシノ一ツ脱タルナリ笶字ヲ志乃トハ讀ヘキスチモ例モナシ さてこのすゝきに

○小竹之葉(サヽノハ) ㊁小竹之葉者、三山毛清爾亂友云云⑳佐左賀波乃佐也久志毛用爾云云 小竹(サヽ)㊆如是爲而也偖哉將老、三雪零大荒木野之小竹爾不有九二㊉云云小竹之末丹尾羽打觸而鶯鳴毛⑫小竹之上爾來居而鳴鳥、目乎安見云云㊉ノヲ今本ニ小竹米丹トアルハ字誤リト思シケレバ米字ヲ末ニ書カヘツサテシヌノメニト讀タルモサヽノウレニト讀カヘツ⑫ノ小竹之上爾トアルトサマノ似タル歌ナリスヘテ小竹ト書タルヲモ歌ノサマニヨリテシストサヽト讀ツクヘシ 竹葉(サヽバ)㊈云云大我野之、竹葉苅敷廬(イホリ)有爲跡者コノ我ハ或人ノ屋ノ誤リニテ大屋野ナリト云リマタ竹葉ヲタカバト讀タレトイトワロシ小竹葉トアリツル小字ノ脱タルニヤサヽバナルヘシ後ノ世ニハ竹ノ葉ヲサヽト云ナレタレト古ヘハ竹ノ葉ヲサヽトハ云ハサリ是ハウツナク小字一ツ脱タルナリ又廬字ノ下ニモ入字カ利字カ一ツ脱タルラン廬ハイホトコソイヘイホリトハ讀ヘカラス是モ後ノ世ニイホヲイホリト云ナレタルノトハ異ナリ⑭宇瀰具多能禰呂乃佐左葉能都由思母能云云 湯小竹㊉甚毛夜深勿行道邊之湯小竹之於爾霜降夜鳥 伊佐左村竹⑲和我屋度能、伊佐左村竹布久風能於等能可蘇氣伎許能由布敝可毛 さゝは野に生ふる小さき竹の節高くあるをさしていふゆさゝいさゝとはとをよるさゝてふ意又湯津石村湯津楓ナトノ類ニテシケク生タル狀ヲイフ五百ノ意なるへし今はこれをそしの竹とはいふめるまたやまによめる㊂ノ哥ナトノさゝは必とはなけれとくまさゝなりシノ竹ノ類ハスヘテ漢名篠マタ山ニ生ルクマサヽハチマキサヽニテ漢名ハ箬

○多氣 ㊄云云多氣乃波也之爾、宇具比須奈久母⑫宇惠多氣乃コノ外刺竹辟竹竹玉竹垣ナトイト多シ 竹はくさ〳〵多し大なる竹の昔より聞えたる三くさあり一には葉の廣き波の鹿子またらなる專ら皮をとりて物につかへは皮竹とてたけのさまはいと上つ代ならは葉廣熊竹ともいふへきを今は眞竹といふ〔和名抄〕若竹加波多氣本朝式用河竹二字トアルト兼好カ〔徒然草〕呉竹ハ葉細ク河竹ノ葉廣シト云ヘルヲ引合シテ思ヘハヨク知ラル然ルヲヨクモ考ヘス人ハ皮竹ヲ今ノ女竹ノ事ニ思ヒテ〔季吟古今抄〕カハ竹ハ皮ヲ纏ヒテ芦ニ似タル竹ナリ〔冠辭考〕ナユ竹ハ女竹ニテ是ヲ皮竹トモ云〔大和本草〕女竹ハ大竹トナラス皮落ス故ニ皮竹ト云又ニカ竹ト云筍ノ味苦キ故ナリナト思ヒ〳〵ニ云ヘル皆ワロシ また一つにはおほ竹是は呉竹の内の一種なりからふとくて薄し葉の細くうるはしけれは今の名に葉竹多クハハチク といふ〔和名抄〕淡竹於保多介トアルノナリ また一つにはくれ竹今は是も柴竹といひて殊に別つ事もなしからはおほ竹よりもうすくてたかうなの味

いとよし漢名ハ甘竹（和名抄）篁竹楊氏漢語抄ニ云ル呉竹也和語云久禮太介トアルノナリ但シ此篁字ハ字書ニ寶中大竹也トアレハ異ナリ甘字ハ紛ヘラレタルカ後ニ寫ス時ニ竹冠ノ添リタルカ　これもおほ竹もすへて呉竹といひためるをとりわきては是をそ呉たけとはいへりけんこれらの外には小皮竹は小さき竹に皮の落すてあれはいふなるへしまたの名は苦たけとも是は笋しのめといふかくふへくもあらす苦けれは名付けん今のをんな竹なり小カハ竹ト云名ハ（齋宮式）御贖料云云褁葉薦一枚小川竹二十株ト見エタリ名ノサマト用ハレタルサマトヲ推ハカルニ女竹ナルヘシ古今集物名ニニカ竹トアルモ（和名抄）竹具類兼名苑註云長間笋今案和名之乃女笋黄最晩生味大苦也トアルニ今モニカ竹ト云ヲ引合シ思ヘハヽツ竹ノ事ト知ラル但シ之乃ト云ツヽ其芽ト云意ナレハシノメトハ女竹ヲ云フニハアラテ女竹ノ笋ヲ云ヘルナリ然ルヲ和名抄ヲオロカニ見ル人ノ女竹ヲシノメ竹トモ云ト心得タルハ誤ナリ

○秋芽　(三)吾妹兒爾戀乍不在者秋芽之咲而散去流花有猿尾、コノ外イト多シ(同)秋芽子(十)白芽子（アキ）(同)冷芽子（アキ）(十五)安伎波疑(十)ノ白芽ハ志良波疑トモ讀ヘケレト秋風ヲ此歌ノ前ニ金風次ニ白風ト書ルニ合シテアキハキト讀ヘキナリ　芽子花(三)マタ(六)芽花　芽乃枝(六)長云云芽乃枝乎　先芽(八)吾岳爾、棹牡鹿來鳴先芽之、花嬬問爾來鳴棹牡鹿(十)云云屋前之早芽子（ワサハキ）咲爾家類香聞コノ先芽子早芽子ハ(八)大伴坂上郎女晩芽子歌爾咲花毛宇都呂（布脱）敷波厭奥乎有長意爾尙不如家里トアルニ對ヘテ和左波義ト讀ヘキナリハツハキト讀人モアレトソレモ落ツカス覺ユ又サキハキノコトニ聞ユレハ異ナル物ナリソレハ榛ノ處ニ云ン波義ハ古クハ芽子ト書少シ後ニ成リテハ今ニ萩ト書キ和名抄鹿鳴草ト出タレト正シキ字ニハ非ス實ハ漢名ハ胡枝花マタ隨軍茶トモ云是ニ草ハキ木ハキナト云事アレト萩ノ生タルマヽニテ小キ木ニ成タルカ木ハキナリ年コトニ苅テスワエノ如クナリタルハ草萩ナリ苅タルヲハ其マヽニ置クハ枯ル初ヨリ生タルマヽニオキツレハ木萩ニハナルナリサテ萩ヲ草ノ如ニ云ヘト草ニハ非ス實ニハ木ナリ

○葦　(一)葦邊行鴨之羽我比爾、霜零而云云、文字ハ(四)蘆(六)善コレハ葦字ノ誤ナルヘシ(四)葭ナトイロイロ書リ　葦若末（アシカヒ・アシナヘ）(三)吾聞之耳爾好似、葦若末乃、足痛吾勢勤多扶倍思コハ未ノ字ハ末字ノ誤ナリサテ葦若末ヲ阿之奈倍ト吟シ阿之加備トヨマンカ思ヒツキカタシ但シ(十)ノ小松之若末爾マタ(同)芽子之若末長ナトノ若末ハ乎禮ニテ異ナリ

○穗　(二)秋田穗上爾霧相朝霞云云コノ外多シ　藁(五)長云云直土爾藁解敷而云云　湯種(七)湯種蒔、荒木之小田矣、求跡云云(十五)安乎楊疑能延太伎里於呂之湯種蒔、云云　速稲(十)孃嬬等、行相乃速稲乎蒔時(同)門田早稲(十四)可豆思加和世（冠辭考）行相ノワセハ集中ノカツシカワセ六帖ノ室ノハヤワセナトノ如ク行相テフ里ノワセナラン　稲(十)住吉之岸乎田爾襲蒔稲乃云云(十六)ニモ　奈倍(十四)可美都氣努佐野田能奈倍能武良奈倍爾云云　稲は皇神たちの恩頼によりて現せ身の玉の緒なれはたなつ物のめてたき

極めにてそれ成り足へるを高きも短きも皆食てなんある然て登志田食ナリ多袁ノ切リ登ナレハ登志ト云祈年ノ祝詞ニモ取作牟奥津御年乎八束穂能伊加志穂爾ナリト有といふをやかて日神の一周り巡り玉ふ春夏秋冬にも負せて登志といふ事にはなれり漢土ニ年ト云字モソノココロナリされは蒔もうくるも苅るもすへてゐやゝしく齋ひ清まりていみなへてふ意に伊美ノ切リ伊奈倍ノ切リ禰ナレハ伊禰とは名つけつ湯種モ湯字ハ借字ニテ齋種ナリまたふたつなきものなれはうけはりてたゞになへともよび㊃ノ歌ニモタヽニ奈倍マタ〔拾遺集〕物名津ノ國ノ灘波アタリニ作ル田ハ蘆カ苗カトエコソ見ワカネまたたゝへて富草ともいへり〔風俗哥〕安良太仁於不留止見久佐乃波奈天仁川美禮云云〔詞花集〕雑下打ムレテ高倉山ニツムモノハアラタナル代ノトミクサノハナトモ和世は早く實のれはわしりね志里禰ヲ二度切セハ世トナルナリ〔夫木集〕秋一家長門田ウエシ、昨日ノサナヘ早ワセノハシリ木ニ出テ秋ハ來ニケリトモ詠コレハ今モ物ノ早キヲハシリト云スヤおくては遲くあれは奥つね月日ノロニハタタテ奥ナル意ニテ都禰ノ合リ天ナリ後におこしねともいへるは〔新古今集〕雑下俊頼ウキ身ニハ山田ノオシネオシコメテ世ヲヒタスラニ恨ミワヒヌルトヨマレタルモ晩稻ト見ユレハ遲稻てふ意なるへし曾伊ノ切リ志ニテオシネトナルヲ〔續古今集〕秋下白露ノオクテノオシネウチナヒキ田中ノ井トニ秋風ソフク、トアルヲ初メニテ奥テノオシネト云事多ク詠ルハ詞ヲ重ネタルニヤ如何ニアラン

○奴婆珠㊂居明而、君乎者將待、奴婆珠乃、吾黑爾霜者零騰文㊃烏玉㊂野干玉㊆黑玉ナトコノ外イト多シ牟浪他麻㊃牟浪他麻乃、久留爾久枳作之、和多米等之〔冠辭考〕コハ防人カカタ言ニムラ玉ト云ヘルナリ樞ト黑トハ常ニ通フ語ナレハツヽケタリ奴婆たまは檜あふきの實なり〔日本紀私記〕農播花擧師說烏扇之實也其色黑以喩之云云といへりマタ〔和名抄〕射干一名烏扇射音夜和名加良須安不木葉ノ形ノ檜扇ヲヒロケタルニ似タレハ今ハ何國ニモ皆ヒアフキト云ハモトヨリ古キ名ナルヘシソノ檜扇ト云ヲ本ニテ烏扇テフ漢名ニヨリ烏アフキトハ漢籍ノモ讀人ノ呼タリケンヲ和名抄ニハノセフレツラン後ニモ〔夫木集〕西行蓬生ハ、サル事アレヤ、庭ノオモニ烏扇ノナトシケルラントヨメリサテ眞淵カ云ク夜干玉野干玉ナド書コトハ射干ノ字音ヲ借タルナリト云リ

○狹名葛㊁玉匣將見圓山之狹名葛コノ外多シ狹根葛㊁長云云狹根葛後毛將相等大船之云云㊉核葛㊂丹波道之大江乃山之眞玉葛絶牟乃心吾不思是ヲ眞字ハ誤リテ添リタル字ニテ玉葛ナルヘシト思シカト玉葛ハ一種ノ草ノ名ニハ非ネハ土地ヲサシテ其山ノ玉葛トハ云マシケレハ玉字ハ後ヨリ入タルニテ眞葛ナルヘシ山佐奈葛㊉足引乃山佐奈葛、黃變及妹爾不相哉吾戀將居、漢名ハ五味子ナリソレカ中ニ冬葉ノヲツルハ北マタ常葉ナルハ南五味子トテ別ナリ葉ノ落ルヲハ今名ニ松フサト

云フサレハ㊉山佐奈葛黄變及トヨメルハ松フサナラント思人モアルヘケレトサル事ニハ非シ常葉ナルカ多ケレハ黄變セヌ草ノモミツルマテモト云ハルナルベシ

○玉葛㊂玉葛、實不成樹爾波、千磐破、神曾著常云不成樹別爾㊅玉葛、花耳開而不成有者云云ナホ多シたまかつらは玉藻といふこと凢可頭良をほめて呼たる名なり㊁ニ實ノコトアルハ心ニハ佐禰葛ヲ思ヒテ詠ルト思ユ其外ハ大方ハ絶スト云事ニツヽケタレハ何トサシタルニ非

羅（コケ）㊁端カキ從吉野一折取羅生松柯（タル）遺時云云㊅奥山之磐爾羅生恐毛㊆三吉野之青根我峰之蘿席誰將織經緯無二㊂ノ端書ニアル蘿字ヲヒカゲト讀人アレト日影ハ木ノ上ニ生ルモノニ非ス是ハサカリ苔カ常ノ苔カ別チカタシ外ノ書トモハヒカケニ蘿ノ字書タルモ多ケレトコレハ然ラスコノ端書ノ外ニモ歌ニ蘿モシ書タル九所ハカリヤ有ケン其中ニハサカリ苔ヲ詠リト見ユルモアリ皆コケト吟ヘキナリ蘿字ニテヒカケト吟ヘキ所ヒトツモ見エス苔㊉其枕、苔生負爲（ムシニケリ）コレハ常ノ苔ニテ今ビロウド苔ト云ノナリ羅（コケ）㊂云云子松之末爾蘿生萬代爾蘚㊂云云鉾榲之本爾蘚生左右爾本字ハ末ノ誤ニテホコ榲カウレナリこれは深き山に柴もなきものゝ長き麻絈を乳したる振にて木の枝にかゝりたれは古今集ノ物名ニさかり苔とも〔和名抄〕松蘿一名女蘿和名萬豆乃古介一云佐流乎加世今モ猴ノヲカセ又狐ノヲカセトモ山姥ノ麻絈トモいふこの一種中に筋もなくて引けは絶やすきを今の名に白髪こけ漢名白龍鬚といふ

○角㊂角障經、石見之海乃云云イト多シ冠辭考角障經石トハツタハシ磐ト云フ事ナリ云云都多㊂長云云延都多乃別之末者云云九蔓都多㊅延津田石綱（イハヽヌ）㊅石綱乃又變若及青丹吉云云コノ若字ヲ若ト書誤レリ石葛（イハツタ）㊅谷迫峰邊延有玉葛コノ左註ニ一云云云葛トアル是ハイハツタト讀ヘシ葛字ハツヽラト云處ニ用フサテツラノ切リタニテツタトナル

深海松㊂長云云辛乃﨑有、伊久里爾曾深海松生流云云深海松乃、深目乎思騰云云コノ外ナホ多シ

美留㊄長云云布可多衣乃、美留乃其等和和氣佐我禮流云云俣海松㊃長云云暮奈藝爾來因俣海松云云俣海松乃復去反云云スヘテ海松ト見ケト實ニハ漢名水松㊆葦附ノ自註ニ水松之類ト書シタル宜シ深みるも知らすタヽ海松ニテアルヲイロ／＼ニ名ヲ付テ詠ルニヤト思ハレト〔宮内式〕志摩國深海松トアレハミルノ一種ナリサラハ長ミルトテ薩摩國ニアリト云リまたみるも知らす式ヤ和名抄ニアル角マタトモ云モノナラント云人アリヨシヤ悪シヤ知ス

○影㊂人者縦、念息登母山藘、影爾所見乍、不所忘今本ニ玉藘トアルヲ本居宣長玉字ハ山ノ誤ナリトテ直シタリト云ヨロシ㊃安之比奇能夜麻可都良加氣麻之波爾母、衣可多伎可氣乎於吉夜可良佐牟コレハ日影ヲ鬘ニスルヲ山ニ生ル物ナレハ山鬘ト云サ

テ山カツラ蔭ト重ネテ云フナリ㊁ノハ實ニハ日影ヲ詠ルニ非ス諾ヲ借テ思影ノ事ニ用ヘルナリ又㊄五十串立、神酒座奉、神主部之、雲聚ノ玉影、見者乏文、玉トハ美テ云タルナリ是ヲモ山字ノ誤リトスルハワロシ山蔓ト云時コソアレ蔭ト云ニ山蔭トハ云マシキナリサテ山蘰ハ〔神樂歌〕和支毛己加、安奈志乃山乃、山人止、比登毛志留倍久也萬加都良與トアルヲ清輔ノ〔奥儀抄〕山カツラトハ神樂スルニハマサキノ葛ニテ頭ヲユフナリ其山カツラト云トア、レト好クモ思エス日影葛ヲ蘰ニスルヲ山蘰ト云ソ宜シキ麻之多日影、可豆良家流宇倍爾也左良爾梅乎之奴波牟　かけとも日かけともまた〔式〕に日蔭葛とも今も名に神たすきといふこそ古事も思ひ出ていとなつかしけれ然るをいつの頃よりやさかりこけ又の名は〔和名抄〕松蘿和名萬豆乃古介一云　佐流乎加世ともいふ物と一つに心得たるはいたき誤なり〔堀河百首〕顯仲ヨソ子島シタハニ生ルサカリ苔露カ、ラネト枯ル世モナシ、ト詠ルハ日カケニモアラテ高野ノ萬年草トサヘ聞ユソレハ日カケニモアラテ高野ノ萬年草トサヘ聞ユソレハ日影ノサマシテ蔓ニナラスイト小サキ草ナリ取テ紙ナトニ包ミ置ニ幾年經テモ水ダニカケツレハ又イキカヘレリ日カケノ漢名ハ石松ト云モノニテアルヲ古キ書トモニ蘿字ヲ書レタルニヨリ女蘿松蘿ノ事ニ思ヒ誤レリ〔書紀纂疏〕蘿謂垂苔也俗謂日蔭葛トアルナトヲ初メ今ノ世マテ誤リ來リヌスヘテ古學スル人ハ草木ナトノ事疏カナリ本草フミ讀人ハ古コトノ筋ヲ知サルユヱニカクハアルナリ　日かけは山の木くらきかけなとに杉の葉のことくにてなほ細きかやわらかに青みたる蔓になりてはふものなり

○山振㊁山振〔神代紀〕拔レ劍背揮コレヲ〔古事記〕ニハ於後手ニ布伎都々トアル如ク古ヘハ布留ト布久ト通ハシ云ヘリ㊆ナト夜麻夫枳㊈山吹コノ外イト多シ一重ナルハ漢名金椀喜水ヤヘ山吹ハ棣棠花

○宇波疑㊁妻毛有者採而多宜麻之、佐美乃山、野上乃宇波疑過去計良受也、コノ山字ハ嶌ノ誤ナルヘシ㊉春野爾煙立所見嬬嬬等四、春野之菟芽子、採而煑良思文　宇波義はのちの名は於波義〔和名鈔〕齊蒿云云和名於ハ木崔禹錫食經云、狀似艾草而香作羹食之〔夫木集〕信實今日ハマタ、雪間ノオハキツミマセテ、野邊ノ若菜ノ數ヤマサラン但シ和名鈔ニ齊蒿トアルハワロシ漢名ハ齊頭蒿ト云モノナリ〔出雲風土記〕秪神嶌云云有椎松莘齊蒿都波師太草等也ナト多ク見ユ是ハ齊ヲ薺ト作クリ　今の名はをとこよもき又ノ漢名ヲモ牡蒿ト云ヘト漢名ヨリ移タリルニハ非ス自ラヨリ合タル也　春の若葉をつみゆてゝ食ふよめかはきよりなし　コノウハキヲヨメカハキト同シ物ニ思ヘルハワロシ

○弱薦㊂長云云弱薦乎、獵路乃小野爾云云ワカクサト讀ハワロシ若草ヲ苅トツ、クル事ハ耳ナレス式ニモ稚將トイフ事アリ

苅薦　㊂飼飯海乃庭好有之苅薦乃云云イト多シ　薦　㊆三島江之玉江之薦乎、從標之、己我跡曾念、雖未苅、コノ外枕薦疊薦ナト多シ⑫ノ茭トアルハ漢名ナリ又菰トモ將トモ薦字ハシキコモニテ借字ナリ但シ唐ニモシキコモニスル故ニ菰ヲサシ

テ薦トモ云トゾ麻乎其母㊁比登其等乃、之氣吉爾餘里弖麻乎其母能、於夜自麻久良波和波麻可自夜毛、麻乎其母能布能美知可久氐、安波奈敵波云云コモヲホメテ眞ニ麥ト云ナルヘシ次ノ歌ノハ直ニシキコモニ云ナセリ花勝見㊃娘子部四咲澤ニ生流花勝見云云こもを中昔より〔古今集〕戀ニ貫之マコモカル淀ノ沢水雨フレハ常ヨリコトニマサル我戀ト詠ルヲ初ニテ今にまこもといひならへり又かつみはこもの又の名なりといへり〔能因歌枕〕コモヲハカツミト云コモノ花ヲハ花カツミト云〔八雲御抄〕コモヲハ陸奥ニハ花カツミト云タ、カツミトモ〔古今集顯註〕陸奥ノアサカノ沼ノ花カツミカツミル人ニ戀ヤワタランコモヲハ花カツミト云ナリ花ス、キ花橘ト云カ如シ云云花カツミヲ酢漿草ヤ田字草ノコトニ云人アレトヨシトモ思エス

○軍布メ㊂然之海人者、軍布苅鹽燒、無暇云云㊆礒立奧邊乎見者海藻刈舟云云㊂ノ軍布ハ擬沖カ云ク軍ト昆ト字音近ケレハ昆布ノ意ニ軍布トハ書ルニヤトイヘリ又㊆ノ海藻ヲモト讀ハワロシ免加里夫爾トヨムヘシ和可米㊃比多我多能、伊蘇乃和可米乃多知美多婁云云㊅稚海藻云云めに二種はかりあり一種は〔和名抄〕昆布和名比呂米一名衣比須女エヒスト見エタリいま一種は〔和名抄〕海藻和名邇木米俗用和布ト見エタリ是か若きを若めおいたるをおいめといふまた一種は、〔和名抄〕滑海藻阿良女俗用荒布ト見エタリ

○菅スゲ 菅葉スガノハ㊂奥山之、菅葉凌、零雪乃云云㊇高山之菅葉之努藝云云磐本菅㊂奥山之磐本菅乎、根深日乎云云㊉奥山之石本菅乃根深毛云云菅根スカノネ㊂足曰木能石根許其思美、菅根乎云云ヲ初メニテ山ニ菅ノ根ト詠ミタル五首原ニヨミタル二首ハカリヤアリケン石穗菅㊉見渡、三室ノ山石穗菅云云コレハイハホスケニテモアルヘケレト穗ハ禰ノ書誤ニテ岩根スケナルヘクヤ山菅ヤマスゲノ㊉山官亂戀耳令爲作云云ヲ初ニテヤマスゲ十一首ハカリすけといふに三つあり一つには山菅いは本すけともよめるは今のみのすけにて漢名ハ山莎みのにあむ菅なりまた一つは河すけしつ菅とも今いふ笠菅にて笠にぬふ是等は根のいと長くあるものなれは歌にも何にも根のことをいひまた後には根合せなといふ事をもすなり今一つには山菅今かうかい草といふ〔字鏡〕麥門冬山菅又云馬韭又云烏韮トアルヲ見テ宇流美良トモ可良須美良トモ云ト思フ人アルハワロシ是ハ〔本草別錄〕麥門冬秦名烏韭齊名愛韭楚名馬韭越名羊韭トアルヲ引タルナリ字音ニ讀ヘキナリサテ是ハ大葉ノ麥門冬ナリ小葉ノハ今多都ノ鬚トイフナリ是は菅の類にはあらねと葉のすけに似たれはいふなり根は長くはあらて玉をきたる如くあり童なとは實を採て手まさくりにすカク菅トノミ云ニモ山菅ト云ニモ哥ノサマニヨリテクサクサノ差ヒアルヲ菅トアルハ河スケ山菅トアルハ麥門冬トノ

ミ心得タルハ疎カナリ去レト㊃菅根之念亂而、トアルヲ初メ山菅トモ河スケトモエ定メストモ十所ハカリハアリナン

○菅　、白菅　㊂云云白菅乃、眞野乃榛原、手折而將歸(同)㊆同シツ、ケ二所アリ(十一)芦多頭乃颯入江乃白菅乃云云白スケノ眞野トツ、ケタルモ白　菅　㊃押照難波乃菅之根毛許呂爾、菅ト云名ノ由モ未思ヒエス　云云(十一)王之御笠爾縫有、在間菅云云(十八)長云云奈呉之江能須氣能根毛己呂爾云　菅根㊅長云云其佐云菅トノミ云テ河スケト聞ユル九ケ所ハカリ　保川丹、石ニ生、菅根　靜菅(シツスケ)㊆橋立倉椅川河ノ靜菅、余苅テ笠裳不編川ノ靜菅靜ハ借取而云云　字ニテ河ニ沈メタル菅テフ事ナリ

子菅　(十一)湖(ミナトニ)核延子菅云云(同)泉小菅(十四)多麻古須氣ナトイト多シ又(十二)ニ神古菅根トアリテミワコスケト讀タレト心得カタシ誤字ナルヘシ　是は河すけなり　漢名大須

○菅　山菅　㊃山菅乃、實不成事乎、吾爾所依言禮師君者與孰可宿良牟　菅實(スカノミ)㊆妹爲、菅實採行吾山路惑此日暮　是は彼かうかいくさなり　此外ニモ麥門冬ヲサシテヨメルモ有ヘケレト實ト云又ハ別チカタシ

○藤浪　㊂藤浪之花者盛爾成來平城京乎御念八君コノ外イト多シ　藤　(十)春日野之藤者散去而何物鴨云云コノ外(十四)布治能宇良葉(十七)藤ノ花ナトイト多シ

○淺茅　㊂淺茅原曲々(ツハラツハラ)ニ物念者云云イト多シ　茅花　㊇茅花拔淺茅之原乃云云ナホアリ　茅草　(十六)天爾有也神樂良能小野爾茅草苅、草苅婆可爾鶉乎立毛、チカヤナリカヤカリバカニト讀ハワロシ

○萱草(ワスレクサ)　㊂萱草吾紐ニ付香具山乃故去之里乎、不忘之爲、(十一)我屋戸、甍子太草、雖生戀忘草、見未生ナトナホ多シ

なにゝかあらん知らす　皆人ノ萱草(クワンサウ)ト書タレバ何ノ疑モナククワンサウナリト〔詩經〕衞風ノ焉得諼草言樹之背トアル諼草ノ古キ讀ミナリ唐土ニハサル古語ノアリケレハ〔文選〕養生論萱草忘憂合歡蠲忿ナト云傳ヘテ又ノ名ヲ忘憂トモ云ナラヘリ、然ルヲ詩經ノ朱熹註ニ諼草ハ合歡食之令人忘憂者ト云ヘル此諼草ト合歡ト一ツニ思ヘルモ誤又諼草ヲ食ヒテ憂ヲ忘ラスト云モ大ニ僻事ナリ其事ハ松岡玄達カ名物辨解ニ委ニ正セリ又〔延壽書〕嫩苗爲蔬食之動レ風令人昏然如醉因名忘憂ナト云ハイトモ〳〵誣言ナリサテコノ哥トモノ忘レクサハ何ニカアリケン知ラネト詩經ニテノ讀ミノ同シケレハ文字ヲ借リテワスレ草トハ書タルナルヘシ事ニヨリテコソ皇國ノ意モ戎夷ノ意モ同シ心ニ云合セタル事モアレトクワンサウガ何由ノアリテ何國ニモ憂ヲハ忘ラサンヤソレハ唯彼國ニ云ナレタルノミナリ此皇國ニサル古語ハナカリキ然レモコノ哥頃モ早ク漢意ヲ取ハヤセル頃ナレハクワンサウ古キ名ノ有ケルヲハオキテ彼忘レクサト呼ツ、コノ哥トモ詠ルニヤ如何ニアリツラン知ラネト理リハカクアル事ナレハ云ナリサテソノ忘草ヲ今ノクワンサウノ事トハ定メカタクアル又コ、ニ(十二)ニ五更之、目不醉草(メサマシクサ)跡、此乎谷、見乍座而、吾止偶爲、トアルヲ目サマシノ物種ト云事ヲハ知ラテコノ歌ノ前ト後トニ萱草ノ哥二首アルニ就テ目サマシ草ハ忘レ草ノ又ノ名ト心得タルモワロシ〔伊勢物語〕昔男後涼殿ノハサマヲワタリケレハアルヤムコトナキ人ノ御ツホネヨリワスレ草ヲシノフクサトヤイフトテイタサセ玉ヘリケレハタマハリテワスレ草オフルノヘトハ見ユラメトコハシノフナリ後モタノマンコレハ忍草トヤ云トテ忘草ヲイタサレ

タルヲ例ノ知ラス詠ニヨメルナリ又〔續古今集〕戀五寄草戀、從二位顯氏忘ル、モ忍フモ同シフルサトノ軒端ノ草ノ名コソツラケレ是レモ忘レ忍フ同シ草ト云ニハアラス同ク軒ニ生ル草ノ名ソ戀シノフモ憂ハシ思ヒワスラル、モツラシト云意ナリ是ラヨリ紛レテ大和物語花鳥餘情ナトニモ忘草忍草ヲ一物ナリト云事ハ出來ツルナリ忘レ忍フハアシヲヨシト云フニ同シナト云ハナホ惡シ

このわたりにて今忘れ草といふは若一つ葉 漢名石韋 コレハ玄旨法印ノ〔闕疑抄〕檜ノ木ノ葉ニ似タルヲ忍草トイフ一ツ葉ニ似タルヲ忘草ト云ヘリ といふものやいつまてくさ 漢名瓦松 といふものなり

○水草 ㊁昔者之舊堤者年深、池之瀲爾、水草生家里 是は池なとも引やらねはあをくおふるみくさにて何とはなけれと大かた今の名にいふ水はこへらなとなり

○韓藍(カラアヰ) ㊂吾屋戸爾、韓藍種生之、雖子不徴而亦毛將蒔登曾念㊆秋去者影毛將爲跡吾蒔之韓藍之花乎誰採家牟、㊉戀日之氣長有者三苑圃之辛藍花之色出爾來、⑪隱庭戀而死鞆、三苑原之雞冠草花之色二出目八方 コノ歌ノ下ニ類聚古集云鴨頭草又作雞冠草云云依此儀者可レ和ニ月草ニ歟ト書添タルハワロシ雞冠草ト書テツキクサト讀ヘキスチモナク又鴨頭草ト作ヘキ哥ノサマニモアラス又㊆ノ影ニモセント讀ツルハツキナク聞ユレトカク云マシキニモ非ス からゐは今のけいとうげ也 清少納言カ〔枕草紙〕草ノ花ハ云云雁ノ來ル花ト文字ハ書タルカラヰノ花ト清少納言カ云ヘルナリ是ニカライト書タル本トカラヰト書タルアリ何レニテモアルヘケレトナホカライノ方ヨシ集中雞冠草花ト書タルト韓藍ト書タルトヲ引合枕草紙ノニ思ヒワタリテイヨ／＼雞頭花トハ定メツケイトウノ葉ハ藍ニモ似タレハ唐アヰト名付ツツサテアハラノ淵ニコモリタレハカライト云ナリ彼雁來花ト云ヘルニヨリテ今ノ葉ケイトウ漢名雁來紅ト云モノニヤト思フ人モアレト葉ケイトウハ葉コソメテタケレ花ハ無ホトノモノナリサテコノ雁來花トハ其頃並ヘタル字ナルヘシ 然るをからゐはくれなゐの事と思へる人ありしからす ㊆ノ秋去者ト詠ミ㊉ノ哥ニモ秋相聞寄花哥ニテ前後皆秋ノ花トモナルニ紅ハ夏初花サクモノナリ〔續古今集〕我戀ハ大和ニハアラス唐アヰノヤシホノ衣フカク染テキ〔新拾遺集〕唐アヰノ八染ノ衣フリストモソメシ心ノ色ハカハラシ、ナトヨマレタレト雞頭ノ花ハ衣ヲ染ヘキ物ニ非ス紅藍ノ事ニ思ヒテヨマレタルナリ先ニ引レタル枕草子ニ書誤リ書脱シタル事トモアリト思シ册子ニハ草ノ花ハ云云ワサトトリタテ、人メカスヘキニモアラヌサマナレト、カマツカノ花ラウタケナリ、名ゾウタテゲナル、雁ノ來ル花ト文字ニハ書タルカルヰノ花色ハコカラネト藤ノ花ニイトヨク似テ、春ト秋トサクオカシケナリ、斯クアレト異本ニハカルヰノ花ヲカニヒノ花ト作タリソレニ就テ考フルニカルヰノ花ノ下ニ又カニヒノ花ト云事アリシカ似タル事ナレハ落タルナルヘシ雁ノ來ル花ト文字ニハ書タルト云事ヲ上ニ付テカマツカノ花ノ事ニ思フ人アレトサテハ文ノツ、キ通エヌ又下ニ付スレハ彌通エス名ソウタテケルマテハカマツカノ花サテ雁ノ來ル花ト文字ニハ書ケレト、云ハカルヰノ花又カニヒノ花ヨリ又一種ナリサテカマツカノ花ト云ハ何ニカアラン知スコレヲ葉雞頭ノコトニ覺エタルハ右

ノ雁ノ來ル花ヲ上ニ付テ心得タルナリサテカルキノ花ハ雞頭ノ花又カニヒノ花ハ今ノ藤モトキ又ノ名ハシゲンジト云モノナリ花ノ形モ色モ藤ニ似タルモノナリサレト今ノ世ニハ藤モトキノ一種ニテ花ノ色ノ白キヤ黄ナルヲゾガンヒトハ云彼枕册子ニ春ト秋トサクトアルハ後ノ書誤リナルヘシ春秋ニ二度花咲物覺エス〔拾遺集〕物名伊勢カニヒノ花ワタツミノ、オキナカニヒノハナレ出テモユト見スルハアマノイサリカ〔六帖〕カタヲカニヒノハルノヽト見エツルハ、コノモカノモニ誰カツケケン、是ハマコトニ小サキ木ナレト草トモイフヘシ本艸ニモ莞花蕘花トテ草ノ部ニ入タリ

○粟　(三)云云春日之野邊粟種益乎、コノ外多シ

○水葱（ナキ）　(三)春霞、春日里爾殖子水葱、苗有跡云師、柄者指爾家年(十四)可美都氣努、伊可保乃奴麻爾、宇惠古奈宜、可久古非牟等夜多禰物得米家武（モトメケン）(十六)云云吾爾勿所見、水葱乃羹物、(三)ノヤ(十四)ノヲウヱコナキト讀メト古今六帖ニ二首トモニウヱシナキトノセタリ殖コナキト云事落付スマシテ春日ノ里ニイカホノ沼ニナトニトカヽリタル詞ノツヽキナレハ殖シ水葱ト云ハデハ合ハス聞ユレハ六帖ノヨシト思ユサテハ(三)ノ子字ヲ志ト讀ミ(十四)ノ古字ヲ志字ニ書カヘテ共ニウヱシト吟ムヘキナリ

古奈伎　(十四)奈波之呂乃、古奈伎我波奈乎、奴伎爾須里云云　なきは今水あふひとも越路の國名にはいもなきともいふ　古ヘノナキハ今ノニハ非シト云人アレト〔天智紀〕童謠奈疑能母籐制利能母禁〔催馬樂〕太奈加乃爲度爾比可禮留太奈支ナトアルモ水アフヒノカマナリマタ〔字鏡〕莨蘱二字奈支〔和名抄〕水葱奈木一云薢菜トアル漢名モヨクアタレリ但シ水葱ハ古ク書來ツレトナキニアラス大井ノ漢名ナリ

小なきは田に生る年ことに引すてられてやせたるの大なきは池なとにおいかゐに〳〵肥ほこりたるなり古へは專らうゑて作り　植ナキノ歌モ多ク〔續後紀〕承和五年五月云云元來早濕之地聽殖水葱芹蓮類ナトモ見ユ　たるを今はさることもなしまたくふへきすへも知らす　式ニモ水葱ノコトニ處々ニ見ユ〔宇津保物語〕國讓卷ウリヤイコメナキミルミツフヽキナト奉レ給フナト見エタレト今ハ養ルスヘモ知ラネハヱグヽテ食ハレス〔救荒野譜〕薢草ノ薢草生水旁、摘來當飢饉、味皺蘸不下、相視意徬徨、ト云ヘルウヘナリ〔宇治拾遺〕ニ清徳ヒシリト云僧カ田ニ殖タルナキヲ折リテ多ク食ヒツル物語ノアレト生ナカラ食ルヘキ物ニアラス

○石竹（ナデシコ）　(三)石竹之、其花爾毛我朝旦云云(八)吾屋外爾蒔之瞿麦何時毛云云、(十七)長云云奈泥之故我、波奈乃佐可里爾云云(十八)端書牛麦ナトイト多シ梵語牛ヲ瞿ト云故ニ瞿麦ヲ牛麦ト書ルナラント契沖云ヘリ　なてしこまた　〔和名抄〕瞿麦和名奈天之止古一云古奈豆　とも後にやまとなてしこ　〔後撰集〕夏、色ト云ヘハコキモ薄キモ頼マレス大和ナテシコ散ル世ナシヤハ、ナト　唐なてしこ　〔千載集〕夏、見ルニナホコノ世ノモノト思エスハ唐ナテシコノハナニゾアリケル　なともいへり　契沖〔餘材抄〕唐ナテシコハイロ〳〵ニテマセ結テ前載ニ植ルヲ云夏咲ハテヽ秋ハサカス大和ナテシコハ紅梅色ニテ野ニ咲ヲ云是ハ夏秋ニカケテ咲ナリ(三)五十六才端書ニ瞿麦哥ニハ石

竹ト書リ

○菖蒲(三)云云菖蒲花橘乎玉爾貫云云(六)保等登藝須伊登布登伎奈之、安夜賣具佐云云イト多シ(八)霍公鳥雖待不來喧、蒲草ト書タルハ菖字ノ脱タルナリアヤメハ今云シヤウブニテ漢名白菖マコトノ菖蒲ハ今ノセキシヤウナリ

○葛(三)長云云延葛乃、彌遠永云云(四)夏葛(六)眞葛(七)眞田葛(十)田葛葉ナトイト多シ久受ニ田葛ト書ル多シ皆クズト讀ノナリ多久受トハ讀ヘカラス(十)霍公鳥、鳴音聞哉宇能花乃開落岳田草引媙嬬トアルヲ田クサ引イモト讀ハワロシ草ハ葛字ノ誤リ田葛ニ書改メテクスヒクヲトメト讀ヘキナリ岳ニ田草ヒクト云事アランヤ外ノクズトモノ哥ニワタリテ知ヘシ　葛花(八)芽之花乎花葛花云云

○名乘藻(三)美沙居石轉爾生名乘藻乃、云云(四)莫告(七)名告藻(同)莫告藻(十二)勿謂藻ナトイロ／＼ニ書リ　莫謂花(七)梓弓引津邊在莫謂花云云コレモ(同)名乘會花(同)莫語之花ナトイロ／＼ト書リ　繩乘(十一)海原之奥津繩乘打靡云云(十二)繩法(十五)奈波能里ナトイト多シ　なのりそ藻の元の名ははまも(允恭紀)云云故人號濱藻謂奈能利曾毛也　其いさふる語になといふを人の名にとりなして名はのりともいへり　ノル事ナカレ告ナト云ヘキヲ莫ノリソト云ハ莫ナリソレヲ莫ノリト云モ例多シセテ名ハ莫ノリト云ヘキヲ又略テ名ハノリト云ヘルナリ莫謂ノ名告ニ取タルソ又和名抄ニ云云漢語抄用神馬藻三字奈乃里曾今案本文未詳但神馬莫騎之義也トモ見ユ　また大らかにおきつ藻といひつゝやかて名乘そもなるもあり(七)吾妹子見偲奥津藻花開者、吾告與トヨメルハ外ニ藻ノ花ト讀ヘキ物モナケレハナリナノリソノ花ト聞ユ　今の名にはほたはら漢名ハ馬尾藻

○伊都藻(四)河上乃伊都藻乃花之何時何時來益我背子時自異目八方(十一)ニモ川上之トテ同シ歌アリコノ河上ト云事心得カタシカハノウヘカハカミカハノヘ何レニテモ落ツカス　いつ藻は今のいともなるへし又の名は總もとも松もともいふ緑なる糸のふさをいくつも貫つれたるさまして白き花春より秋かけて咲　歌ノ意ハタヽイツモノ／＼ト云ンタメニイツ藻ト打イタシタルニテアレト花ノ程ノ長キモノナレハイヨ／＼カナヘリ漢名ハ牛尾蘊

○濱木綿(四)三熊野之浦乃濱木綿百重成心者雖念直不相鴨　今ははまおもとともいふ　又濱バセヲトモ漢名文珠蘭(童蒙抄)濱ユフハ芭蕉ニ似タル草ノ莖ノ皮ノ薄クテ多ク重ナルナリ(宇津保物語)藏開巻フテヲトリ給フテオホンクタ物ノシタナルハマユフニカク書ツケ給フトアルハ今モカキツハタノ葉ナトシノサマナリ

○濱荻(四)神風之伊勢濱荻、打伏、客宿也將爲荒濱邊爾　荻(十)葦邊在、荻之葉左夜藝秋風之云云(十四)伊毛奈呂我都可布河泊豆乃、佐左良乎疑、安志等比登其等加多里與良斯毛　濱をきは濱邊に生たる荻なり葦邊なるをきの葉さやきとよめるかことし末の世

になにはのあし伊勢のはまをぎといひて蘆の事にお
もへるは何故にかあらん 荒木田盛徵カ「神風小名寄」伊勢ノ濱荻ハ二見郷三津村ノ南ノ江ニアリ五十鈴川ノ末ナリ難波ノ芦ハ伊勢ノハマヲキト云ハ是ナリコノトコロ地景スクレタル所ナリ常ノ蘆ニカハリテ左巻ナリ

〇志婆 ㊄長云云久佐太袁利志婆カ利志伎堤云云㊅云云道之志婆草長生爾異コノ外イト多シシハクサニ柴字ヲカリテ書タルトコロモアリ

〇麻手 ㊃庭立麻手刈干、布慕(シキシクフ)云云㊈長小垣内之麻実引干云云⑭爾波爾多都安佐提古夫須麻許余比大爾云云ナト多㊈ノ小垣内之トアルヲヲカキチノアサヲ引ホシト吟メト落付ス之字ヲ立字ニ突字ヲ手字ニシテ小垣内立麻手引テト書テニハニタツアサテ引ホシト讀ヘカメリ㊃ヤ⑭ノニオモヒ合セヨ 櫻麻 ⑪櫻麻乃、苧原之下草、露有者云云⑫ニモ同シツ、ケアリ 夏麻(ナツソ) ⑬長云云夏麻引命號貯云云⑭奈都素妣久、宇奈加美我多能云(同)安云奈都蘇妣久、宇奈比乎左之氏云云コノ夏麻ヒクハ枕詞ナリ

左乎 ㊃安左乎良乎遠家爾布須左爾宇麻受毛云云 あさては麻たへてふ事 タヘハ着ル物ニスヘテ云フ名ナレハ麻ノマタ庭ニタツ比ハ提トハ云マシキニ似タレト先ニ引タル⑭ノ哥ニハフスマニサヘ庭ニタツト云ヨリ打出セリ⑯打拷者經而織布、日暴朝手作尾ト詠ルニモ思合テ知ヘシ 櫻あさとは ○六帖ニハサクラヲトアリテ眞淵ナトサクラハ處ノ名ナルヘシト云ヘレド 山櫻の花の咲を時にして蒔たる麻を
今もしかいひまた麻にはおのつから雌雄のわかちあ
りて花はさかねと實のなるは雌あさ花はあれと實の
なきは雄麻にてそのをあさをは花あさとも櫻麻とも
いへり サテ櫻麻ノ雄トツ、ケタリヤト思ヘトナホ その櫻麻は彼櫻の花を見て
蒔たるのにそあらん

〇月草 ㊃月草之從安久、念可母云云㊆鴨頭草丹、衣色取、摺月伴云云コノ外イト多シ つき草は今
はつゆ草とも マタ國々ニ云方名イト多シソレカ中ニ四國中國ナトニテカマツカト云ソ何トナクユカシキサテ鴨頭草ト書ハ花ノ色ノ青キヲカモノ頭ニナソヘテナラヘタル文字ナリ實ノ漢名ハ鴨跖草ナリ

〇紅 ㊃云云紅之、色莫出曾、念死友、㊄長云云久禮奈爲乃阿可毛須蘇毘伎云云⑪吳藍之八鹽乃衣朝且云云イト多シ く
れなゐハ 「和名抄」紅藍久禮乃阿井トアルカ本ナリ其乃阿ノ切シテ久禮奈爲ト云フ 花のいろに
出たるをするよりつみとりてゆけは紅のうれつむと
も詠るは ㊉外耳、見筒戀年、紅乃、末採花乃、色不出友トアルハ末ヲツム紅ノ花ノ如ク色ニハ出ストモテフ事ニテ末ツム花ト云名ニハアラス 後につひにすゑつむ花といひてくれなゐ
の又の名のことくなりぬまた女の顔に赤き粉をつけ
てはえをそふるをはえにてふ意に 波衣ノ切リ倍ナレハ へにとい
ひつるも 「源氏物語」常夏巻ヘニト云モノイト赤ラカニカイ付テ髪ケツリツクロヒ玉ヘル云云「榮華物語」御裳着巻

齒クロメ黒ラカニハニ赤ウケサウセサセテ云云ナトアルハ赤キ粉ニテ「和名抄」釋名ニ云胚粉和名閉邇秤赤也染使赤所以著頰也トアルハキナリ　是はた紅のにほひは似る物あらねはくれなゐてふ名は打忘れてへにの花倍ヲ濁リ別爾とさへいふめり

○娘子部四　㈢娘子部四、咲澤二生流、花勝見云云㈦姫押㈧娘部思㈣姫部志㈤佳人部爲、㈢美人部師㈢女郎花ナト文字ヲイロイロニ書リ又㊤神南備能淺小竹原乃、美妾トアルヲヲミナヘシト讀ト心得ス又㊦云云乎登古乎美奈能波奈爾保比見爾トヨメルヲ顯昭ハ男ヘシノ事ニ云ヒ眞淵ハ尾花ノ事ニ思ヒクレト何レモヲワロケン男女ハ眞ノ男女ニテ花ノ事ニハ非シ

○牟具良布能　㈣何時爾加妹乎、牟具良布能、穢屋戸爾入將座、牟具良波布、伊也之伎屋戸母大皇之云云

八重六倉乎　㊤念人將來跡知者八、重六倉覆庭爾、珠布益㈪敷有、家毛何將爲八重六倉云云　むくらといふに二ツあり一ツは今いふかなむくら　漢名ヲ葎草トテ云葉ハ五ニナリテ葎トモイフアリ　一つは今いふ八重むくら此わたりに風くるまといふ　漢名ヲ猪殃ト云コレハ節コトニ細キ葉ノ繁クメクリテ出タルカ車ノ輪ノ輻ニ似タルヲ女童ナトノ節ノ本末ヲ切テ指ノ間ニ挾ミテ吹ケハクルクル廻ルヲヤカテ草ノ名ニ風車ト呼ナリ　あはれなる家あれたる庭に多く生るにつきて思へは風車そ古き名なりけれ今さへ八重むくらとよふもかなへりまた中頃よりかなむくらをむくらとはいひけるなるへし　「和名抄」葎草和名毛久良トモ見ユ又夫木集夏ニ好忠ナツカシク手ニハフレネト山カツノ、垣根ノムクラ花咲ニケリ、トモヨメリ風車ハ花咲スカナムクラハ夏ノ末ヨリ秋ニワタリテ花咲ケリコレラヲ思ヘハ中昔ヨリノムクラハ彼カナムクラナリ

○宇利　㈤長宇利波米婆胡藤母意母保由云云

○三枝サキクサ　㈤長云云三枝之、中爾乎禰牟登、愛久云云上春去先三枝幸命在云云　さきくさは常あるものにあらす近つ飛鳥宮の宗顯天皇の御代に内の大庭におひ出たりし草なり　「姓氏錄」三枝部連額田部湯坐同祖顯宗天皇御世喚集諸氏人等賜饗焉于時三莖之草於宮庭採以奉獻仍負姓三枝部連ト見ユ　年ことの率川イサカハの社の祭にさきくさになそへて供へられたるはけつり花なとにそ有けん　率川祭ノハ由理花ナルヘシト眞淵カ云ツレト「神祇令義解」三枝祭謂率川社祭也以三枝花飾酒罇祭故曰三枝祭也トアルヲ思フニ百合ナラハ百合トコソアルヘケレ三枝花トアルハ木綿花ナトノ削リ花ナルヘシ

○冬薯蕷葛マサキノカツラ　㈦皇祖神之、神ノ宮人、冬薯蕷葛彌常敷爾、吾反將見、㈨長云云冬敷蕷都良云云コノ冬薯蕷葛ノ今本ヲサネカツラト讀セタレト〔六帖〕皇ノサキノ、神ノ宮人マサキツラ、彌トコシキニ我カヘリ見ン、ト有ニ依テマサキツラ

ト讀ヘシマサキ葛ノカク神ニハ由アリコレヲトコツラトヨム人ア
リ草薢(トコロ)ト薯蕷(ヤマツイモ)ト葉ハイトヨク似タレド草薢ハ常葉ノ草ニアラネハ
サテハ冬モシ徒コトニ成ルナリマアキツラハ常葉ナルモノナレハ
常敷ト云云連ネタリ父次ノハ何カツラニモアレ長キ蔓ヲ繰ル意ニ
登免由支ト續ケタリ　まさきつらは葉も何もまさきにてかつらに
なりて物にまとふかことなるなり　古ノマサキツラハ今ノマサキノカツラハ非シ
ト云ヘト何ノ由モナシ今コソ春冬トナク常葉ニテ神ワサニ用フヘ
キモノナレ漢名ハ扶芳藤〔古今六帖〕照月ヲマサキノツナニヨリ
カケテアカスワカル、人ヲツナカン、トアルハマサキノカツラ歟
〔古今集〕外山ナルマサキノカツラ色ツキニケリト云モ常盤ナル
クサ木モ霜霰ナトノフルコロハ少シ赤ミタルヲ云フマタ〔新後拾
遺集〕モミチセシ、ツタモマサキモネリハテ、ハフ木アマタニ山
風ゾフクトアルハマサ木ノ葛ノ事ト聞ユレトマサキノカツラヲマ
サキトノミ云事モ聞ナレス其ウヘマサキモマサキノ葛モ葉ノカハ
ル事コソアレツタナトノ如ク
ニ散ハツルモノニハアラス

○菅藻 ㊆氏河爾、生菅藻乎河早、不取來爾、家里裹爲益緒　葦附 ㊇礪波郡雄神河邊作歌乎加末何泊、久禮奈爲爾保布、乎等賣良之、葦附水松之類等流等、湍爾多多須良之　すかもは丹生郡萩原の里
人のいはく今もすかもとて河にも池にも多き緑りに
て綿のことくなる藻なりといへり　コノ歌ニハ河ニノミ〔出雲國風土記〕ニハ
島根郡法吉波周五里深七尺許有ニ鴛鴦鳧鴨鮒須我毛當ニ夏・
節ニ左有美菜ニト見エタリコノ有ノ字ハ在ノ字寫シ誤リナルベシ

夏の日のあつきときには水なからも酢なとつけても
心ふとをくふことくにくふいと涼しまたかわきたる
は海の青のりにもまけす今は河池に名をつけわきて
河のをかはもづくまたあをさとも　〔大和本草〕河モツクハ所々小流ニアリ涎蘊
ニ似テ其色青ク糸ヲツカネタルカ如クニテウルハシ羹トシ或ハ酢
ニテ食フ味ヨシト云ヘルハコノ哥ニヨメルスカモニテ漢名ハ陟釐　これは水の中に石やくひ
なとに付ておふ　〔和名抄〕陟釐和名阿乎乃利トノセラレタルニヤ知ラス海ノ青ノリハ漢名乾苔ト云モノナ
リ　また池のを青みとろといふ　青ミトトロハ青クテ水ノ中ニ生ルカトロ〳〵ト滑ラカナレハ青水トロト云ナルベシ是ハ出雲風土記ノスカモナリ漢名ハ水綿　これは水の面に浮みて生
たり越中にて芦付といへるもすかもの古き國名にて
葦なとに付て生れは名付たるべし　葦附水松之類トアルハ越中ノ方名ニテ國々ニ
ワタリタル名ニアラネハワキテカクハ註サレタルナリサテ河ノ中ニ水松ノ類トテハ菅藻ノ外ニ云ヘキモノナシ是等ハ何處ニモ〳〵
押ナヘテ食フ物ニ非リケレハ字鏡和名抄ナトニモ見エス今モ知ラヌ人多キ片ヲ田舍ニハ昔ノワサモ古キ名ヲモ失ハサリキ
彼萩原人といひつるは武内の明輔なり何にすかもと
はいふそと問たるに水の中に青くおひたるはいとす
か〳〵しけれはいふなめりと答へき言さへ處みやひ

たりける

○菱(七)菱爲、浮沼池菱採我染袖、沾在哉、(十)豐國、企玖乃池奈流、菱之字禮乎、採跡也妹之、御袖所沾計武、六帖ニ此ウタトモヲ菱トルト云云又菱ノウレヲトルトヤ妹カ云云トアリ（八雲御抄）菱ヲハトルト云ト書セ玉ヘリサレト前ノ哥ノハ登流トモ讀ヘシ後ノハ菱ノウレヲトルト云テハ似ツカハシカラス都笑登也妹賀ト吟ヘシ

○土針(七)吾屋前爾、生土針、從心毛、不想人之、夜爾須良由奈　つちはりはさたかに（和名抄）玉孫一名黃孫和名奴波利久左此間云豆知波利何とは知らねと又の名をぬはりといふにつきて思ふにみそはきにやあらん（和名抄）鼠尾草和名美曾波木トテ豆知波利トハ別條ニ出サレタレト和名抄ニハ一物ノ名ノ同キモ名ノ異ナルモノ二所ニ一所ニ出タルモ多シ溝の邊た生る萩なれは溝萩と付たるも沼のかたへに咲はりとて沼はりといはんも同じ意なるべし萩ヲハリト云事ハ先ニハキノ時ニイヘリつちはりといふよしはおもひえすミソハキノ漢名ハマコトハ千屈菜

○由利(七)道邊之、草深由利乃、花咲爾、云云(十一)路邊草深百合之後云云云　姫由利(八)夏野乃、繁見丹開有、姫由利乃云云　佐由理(八)吾妹兒之、家乃垣内乃、佐由理花、云云尙多、(廿)都久波禰乃、佐由流能波奈能由等許爾母、云云　さゆりも姫ゆりもほめたる語にて異ゆりにコレハ防人ノ訛リ也あらし

○靑角髮(アヲミヅラ)(七)靑角髮、依綱原、人相鴨、石走、淡海縣物語爲　契沖か靑みつらは天吉葛(アマノヨカヅラ)をいひて匏にやと河社にいへるよしやあしやしらす

○下草(七)云云野邊之下草、吾之刈而者、(十二)櫻麻乃、苧原之下草、露有者云云(十)春之野乃、下草靡我藻依云云　した草は何となくしば草などのともなり後には（古今集）森の下草（六帖）木陰の下草（大和物語）波の下草堀沼の底の下草（後拾遺集）雪の下草（新勅撰）しはの下草（續後撰）露の下草谷の下草（續拾遺集）木々の下草（新後撰集）霜の下草（風雅集）山のした草なと色々によめりなほ多かるへし

○垣津幡(カキツハタ)(七)常不人國山乃、秋津野乃、垣津幡鴛夢見鴨(七)加吉都播多、衣爾須里都氣麻須良雄乃云云歌多シ

○浮蓴(ウキヌナハ)(七)吾情、湯谷絶谷、浮蓴邊毛奥毛衣勝益士　浮ぬなははあさゞのまたの名にて漢名ハ荇トモ莕トモ云ヒ（字鏡）蘋賞同府隣反萍也守支奴奈波トアル是ナリ但シ蘋トハ（唐本草）蘋恭曰萍有三種大者名蘋中者荇葉皆相似而圓其小者卽水上浮萍也ト云ヘル萍ナリ、是ハ荇(アサヽ)ノ又一種ニテ少シ差ヒタルナレトサハカリクタ〳〵シ

ク別ツハワロシタ、ニ荇ト思ヒタランソヨキ又水上浮萍ト云ハウキクサニテ大ニ異ナル物ナリ又字鏡ノ大萍也トアルハ同ジ名ニテ異モノナリ蘋一名大萍一名田字草トテ四ツ葉浮草ト云モノナリソレモコレモ蘋ト云カ同キニヨリテ誤レルナリ　ぬなはに似たる柴の水の面に浮みてあれはなつけたり　〔六帖〕見ルカラニ、思ヒマス田ノ池ニ生ルアサヽノ浮テ世ヲハヘヨトヤ、トアルヲ初メ後ニモ荇ニウクト詠ル歌多シ泥ヲウキト云事アレト其意ニハ非ス又蓴ハネヌナハト云カ浮ミテモ沈ミテモアレト人ノ採コロハ春ノ若芽ニテ水ノ底ニノミアレハ〔拾遺集〕雜戀、池水ノソコニハアラテネヌナハノクルヒトモナシ、マツ人モナシ、此二歌ヲ思ヒ合シテモ浮ヌナハテフ意ハ知ナンサテ六帖、ヌナハノ題ニウキヌナハノ歌ヲノミ二首出シタルハワロシタ、ヌナハト云ハナメヌナハナリ　かくて浮ぬなはてふ名の出來つれはぬなはをはぬる〳〵と滑らかなるにれの付てあるによりねぬなはともなりぬなはともいひて別ちたるなり　一字鏡一蓴奈女奴奈波トアル是ナリ蓴字ハ字書ニモ見エネトネヌナハト云ヨリ逆ノホリニ思ヘハ蓴ノ事トハ知ラルカ、レハ皆人ノ食フヌナハ、根蓴ナル事ハ云モサラナレト根蓴ト云事式ニモアマタ所々出サレマタ〔仲文集〕院ノ大將殿ノ侍ヒニ厨屋ニ蓴タ、クヲ見テ厨ニモマタヨヒナレハネヌナハノ我等ガクヒナタ、クナリケリトヨメルナトニモ思合シテ知ルヘキナリシカルヲ根ヌナハモ一ツヌナハト心得マタ春ノヲ浮ヌナハ秋ノヲ根ヌナハトヒカ定メニ定メテ絲蓴瑰ニ當ルナト云ハ知ヌ人ノ妄リ言ゾ

○山治左　㊆氣緒爾、念有吾乎、山治左能、花爾香君之移奴良武、(十一)山萵苣白露重浦經心深我戀不止　知左(十八)長云云知左能花、佐家流沙加利爾、波之吉餘之云云　山ちさは今ノヤソチサトモ思シクアレトことちさにはあらし山に生たるちさをいふなるへしちさは今もはなをとりはやす人はかめにさしてもみるなり　六帖ニハ此山チサノ歌トモヲ木ノ部ニ入ラレタレト宜シトモ覺エスチサノ木ハ古ヘハ〔字鏡〕賣子木河知左〔和名抄〕賣子木賀波知佐乃木トアリテ何チサノ木トモ云キ山チサトモ云スタヽニチサノ木トモ云サリキ

○左和良妣　㊇石垂見之上乃左和良妣乃、毛要出春爾成來鴨

○須美禮　㊇春野爾、須美禮採爾等、來師吾曾、云云(十七)長云云春野爾、須美禮乎、都牟等、之路多倍乃云云　都保須美禮　㊇山振之、咲有野邊乃、都保須美禮、此春之雨爾、盛奈里鷄利、(同)茅花拔、淺茅之原乃、都保須美禮、今盛有吾戀苦波、今ノ世ニスミレトツホスミレトハ異ナリ又スミレモ今ノスミレニハ非ストナト云ハ由モナキ事ナリ〔六帖〕スミレノ歌ニ山振ノ咲タル野邊ノツホスミレ、云云コノ哥ヲノセ、又末ノ世ニハアレト〔新續古今集〕春下崇德院ニ百首歌奉リケル時菫菜ヲ俊成ノ紫ノ、根ハフ横野ノ、ツホスミレマソテニツマンイロモムツマシ、是等ニテスミレツホスミレノ一ツ物ナル點又菫菜ト書ルヤ色モ睦シトアルニテ今ノスミレナルコトヨク知ラルスミレノ漢名ヲハ菫々菜トモ紫花地丁トモイフソカシ

○藤袴　㊇云姬部志、又藤袴、朝貌之花

○朝貌 (八)芽之花、乎花葛花瞿麥之花、姫部志又藤袴、朝貌之花、(十)朝杲、朝露負咲雖云、暮陰社、咲益家禮ナホ(十)ニ二首(十四)ニ一ウタアリ

古への朝かほは岡止ときなり 槿ヲモ牽牛ヲモアサカホト云ヘト(八)ノ七種ノ歌ニモ似ツカスマタ十暮陰社咲益家禮トヨメルニモカナハス(字鏡)桔梗阿佐加保又云岡止々支トアルソ古キ名ト聞エタリスヘテコノ字鏡ヲ作リタル僧ハ田舍人ニテヤアリケン古語トモヲ多クノセタリ都人ハ心花ニアリテ時々ニ移ロヘル故ニ古意ハ忘ルルナリ

又の名はありのひふき (和名抄)草部桔梗和名何里乃比布木ト云ヘルナリ又野榮頻符蘆和名乎加士々木ト別テ出サレタレト蘆ハ桔梗ノ又ノ漢名ニテ岡ト、キト云モ字鏡ニテ見レハ桔梗ナリ其上ト、キハ漢名ヲ沙參ト云モノニテアルカ桔梗ハト、キトヨク似タルモノニテアレハヲカト、キトハ名付ケタルナリ

さて今の都なれたる頃よりの朝かほは木はちすをいひ (和名抄)蕣木波知須ト見ユ蕣ハ槿ノ又ノ名ナリ木ハチスハモクケニテ今モ陸奧ニハ木ハチス常陸ニハ木ハチト云ヘリ(伊勢物語)、我ナラテ下ヒモトクナ朝カホノユフカケマタヌ花ニハアリトモト詠ルハ桔梗ニハアラス槿ヤ玄牛ノサマナリサテ槿ト玄牛ノ二ツノ内イツレナラント思フニ(古今集)ノ物名ニ桔梗ヲハキチカウ玄牛ヲハケンコシト入ラレタレハ桔梗ハ云モサラナリ玄牛ニモアラテ槿ナル事明ケシ(拾遺集)ニナトハ古今集ニナラヒテ物名ニ朝カホトケンコシトヲ別ニ出サレタリ(榮華物語)玉臺卷ルリノツホニカラナテシコキチカウナトマサ、セ玉ヘリスヘテ常ニ漢名ニテ云アツカフ物ハ歌ニハ言サヘツリテ詠カタケレハ物ノ名ニノミ詠入ル、ナラヒナリ

其後ほともなく今の蔓あさかほしも朝かほといひて (和名抄)牽牛子和名阿佐加保ト見ユ其上(中務集)方タカヘニ人ノ家ニイキテツトメテ萩ニ朝カホノカ、レルヲ折テ云云(源氏物語)朝顏卷枯タル花トモノ中ニ朝顏ノカレコレニハヒマツハリテ有カナキカニ咲テ云云野ワキノ卷心ト、メ取ワキ植玉フリンタウ朝カホノハヒマシレルマセモ皆散亂レタルヲ云云(住吉物語)東ニハユカニツタフアサガホナトカカリテ又(赤染衞門集)ニアサカホユフカホ植テ見シニ晝マコソナクサムカタハ無リケレ朝タカホノ花ノナキマハナト云ルヲ初ノ其後ノハ皆ツル朝顏ナリ然レトモナホ槿ヲアサカホト云事モウセ果ステ四條大納言ノ撰レタル朗詠集ニ槿花一日自爲榮ト唐ウタニ朝顏ノウタヲ添ラレタリ

木はちすはなほなこりもあれと彼岡と、きを朝顏といふ事は思ひもかけぬ事になりにたり コ、ニ又字鏡ニ先ニ引ツル桔梗ノ外ニ又別ニ桔梗加良久波又云阿佐加保ト見エタルハイト心得ス是ハ桔梗ニモ槿ニモアサカホト云名ノアルニヨリ槿ノ所ニ加良久波ト書ヘキヲ心得違ヒテ桔梗ノ條リニヤ書加ヘケン槿コソ唐桑トモ云ヘキサマナレ桔梗ハ唐クハナト云ヘキ物ニアラス

○容花 (八)高圓之、野邊乃容花、面影爾、所見乍、妹者忘不勝裳、(十)石走間々生有貌花乃云云(十四)宇知比佐都、美夜能瀨河泊能可保婆奈能

可保我波奈 (十四)美夜自呂乃、緒可敝爾多氏流可保我波奈云云、コノ緒字ハ越字ナトノ誤リニヤ草書ノ移紛ヒスヘシカク樣ニ假字ノミニ書タル歌ニハ訓ノ借字混ヘタル事ナシ(八雲御抄)常陸國ニハカキツハタヲ顏ハナト云書セ玉ヘリ、其外思ヒ思ヒニイハトヨク思エス

容花は 容鳥ノ時ニモ云ツル如ク可達トハ云ハテタシカニ可保ト云ヘシ

野なとに詠るは〔和名抄〕本書云蒲公英和名、不知奈今ハ専ラタンポポト云ヘト童モツホノ花トイヘリ河によめるは〔和名抄〕骨蓬和名、可波保禰なるへし可保波奈ヲ訛リテ可波保禰ト云ナランサテ今引出ツル和名抄、蒲公英ノ英字ヲ今本ニ草トアレト本草ノ類ノ書ニ蒲公英ト云物見エス字訛リナリ又骨蓬ト云事覺束ナシ川骨ハ漢名ハ萍蓬ト云モノナリ又㊃ノハ一ツ可保我波奈トアレハ容花ドハ別草ニモヤアラン岡邊ニ多氏流ト詠ルハカツホヨリハタケ高ク聞ユ㊉ノ秋相聞寄花歌ニテ前後皆秋花トモナリカホネル夏ヨリ秋カケテイトモヒサシク咲ツヽク花ナリ

○山藍㊈長云云〔赤花數〕十引(ソヒキニ)山藍用、摺衣服而直獨云云ノチニヤマヰトモイフ〔貫之集〕山井モテ、スレハコロモノ、アリヒモノ、長クハ神ニ我ハツカヘシ〔拾遺集〕足引ノ、山井ニスレル、コロモヲハ神ニツカフルシルシトソオモフナトイト多シ漢名透等草當ルニヤ

○惠具㊉爲君、山田之澤ニ惠具採跡、雪消之水爾裳ノ裾所沾、⑪足檜木之、山澤回具乎、採將去日谷將相母者責十方ゑくはくわゐなるへし、味のゑくけれは名つけけむ味のゑくけれは名つけゝん江戸ノ倭文子カ伊加保ノ道行振ト云モノニヱクハヘト云モノヲ是ナリト眞淵カ云ツルヨシ書タルハクワヰノ事ニヤ何ニヤ古のくわゐはその黒くわゐにて〔和名抄〕芋類烏芋和名久和井澤瀉之類也トアルノナリ今白クワヰヲタヽニクワヰト云ヘトソレハ〔和名抄〕芋類澤瀉一名芒芋和名奈萬井トアルナマヰナリ漢名ノ澤瀉ニ當ラレタレト眞ノ澤瀉ハ芋類ニ入ヘキ物ニアラス彼烏芋ノ文ト彼是思ヒ合シテナマ井ハ白クワヰノ事ト知ル又後ノ世ニオモタカニ澤瀉ト書モ同シ意ナリオモカタハ白クワヰノ雌ナリ河内には吳也周防には義和淡路には具恵播磨には爲具(呉)越路にはオモタカを具也といふ皆恵具を訛りたる名なるへし〔夫木集〕題仲種ツモム御園ニウヱツ、イサ子供、外面ノ小田ニクワ井拾ハン、ト詠ルトカノ〔伊加保道行振〕云云田ウタヲキケハヨゴヲ拾フトヒル田ハウヱス、アタシ男ノ夜田ヲハフ、ト書ルト我越路ノ田子ノ詞ニ晝ハクヤ拾ヒテ夜ル田ヲウツト云ヘルトイツレモ同シ意ニ云合セタリ後には若菜なとの事に思ひをり〔遊絲日記〕紫野ニ物スレハ前ニモノスル女ワランヘナトモアリ打ツケニヱクツムカト思ヘハモスソ思ヒヤラレケリ云々〔詞花集〕好忠ユキ消ハ、ヱクノ若菜モツムヘキニ春サヘハレス、ミヤマヘノ里、〔同集〕俊頼朝臣女トモノ若菜ツムヲ見テヨメル、賤ノ女カヱクツム澤、ウス氷、イツマテ經ヘキ我身ナルラン是等ハ若菜ト思ヘリ

○茸㊉詠芳高松之、此峯モ迫爾、笠立而、盈盛有、秋香乃吉者或人ノ云ク此芳字ハ茸ノ誤リニテ松茸ヲ詠ルナリト本居宣長カ說ナリトイヘルヨクカナヘリサテ思フニ歌ノ中ニ茸ノ事イサヽカモ聞エス強テイハヽ盛者ハ草書ノ奈茸ノ盛者ニ寫シ誤リタルニテ盈テル松茸ニモヤアラン〔拾遺集〕マツタケ物名足曳ノ、山シタ水ニ、スレニケリ、ソノ火マヅタケ、コロモアフラン、トテアリ

○思草㊉道邊之、乎花我下之思草今更爾何物可將念おもひ草はとり〳〵にいへ

とたしかにさためたる事なし　〔莫傳抄〕思草ハヲミナヘシト俊頼ノ云レタレト何ノユヱ由モナシ又月草ト云モ證ナシ〔狹衣〕物思ヒノ花ノミ咲マサリテ汀カクレノ多草ハイツレトモナク有ニモアラス中ニモ尾花ノモトノ思草ハナホヨスカト思サル、ヲムケニ霜ニウツモレハテヌルハイト心細クオホシワヒテ云云トアルヤ〔新勅撰集〕戀ニ女ノユカリヲ尋テ遣シケル左近中將公衡傳ヘテモイカニ知セン同シ野ノ尾花カモトノ草ノユカリニ、トヨメルヲ合シテ〔古今集顯注蜜勘〕秋ノ野ノ尾花ニマジリ咲花ノ色ニヤ戀ム、逢フヨシモナミ云長月ノ霜ノ内ニ尾花ハカリ殘リタル、コロ龍タンノ花ヤカニ咲出タルヲ尾花ニマシリ咲花トハ紫ノ草ノユカリヲ思ヘルニヤト中ス人侍リシトアルニワタシ思ヘハ後ニハ龍胆ノ事ニ思ヒタリト聞ユサレト是モサシタル證ナシ又〔新古今集〕冬和泉式部野邊見レハ尾花カモトノ思草カレ行冬ニナリニケルカナ、〔新千載集〕戀四夏山ノ、シケミカ下ノ思クサツユ知サリツ心カクトハ、コノ歌ナトハ又別物ト聞エタリ萬年草ト云モノハ別ナルモノナリ

○稗　(十一)打田、稗數多、雖有、擇我夜一人宿、(十二)水乎多上爾種蒔、比要乎多擇擢之業曾吾獨宿コノ歌トモ字誤リアルヘケレト今思ヒアタラス稗ハクサヒエナリヒエハ穆

○知草　(十一)湖葦交在草知草、人皆知、吾裏懷　知らす　〔仙覺抄〕知草ハ鷺ノシリサシト云クサナリ藺ノ一名ナリト云ヘルハ〔和名抄〕藺和名爲辨色立成云鷺尻刺トアルニヨリツルモノナリ但シ越前池田郷ニハ黒クワヰヲシリサシトイヘリ

○子太草　(十一)我屋戶ハ、甍子太草、雖生、戀忘草見未生、六帖下草ニコノ歌入タレトノキノシタサクトハ後世フリナリ又ノキノシタクサト云テヤカテシノフヲサセリナトトイフハイト〳〵ワロシ　した草は今のいぬわらひ　漢名倒掛草　をいふなるへし　今ノシダ又ノ名ヲウラシロト云物ハノキニ生ルモノニアラス　中むかししのふくさいひけるもひたすら軒のつまに生るものと聞ゆれは彼いぬわらひにてむかしのしたなりけらし　歌ニモ多クヨミ又〔枕冊子〕草ハ云云シノフクサイトアハレナリ屋ノツマサシ出タル物ノツマナトニアナカチニ生出タルサマイトオカシト云ルナトヨクカナヘリソノシノフサヘ今ハ別種ニテ山ニ生ルウルワシキヲノミ取ハヤリセリ

○壹師花　(十一)路邊壹師花、灼然人皆知、我戀嬬　八雲御抄に羊蹄の事におほされたるそしかるへき　シト云語ノ借字ニ(十)若羊蹄(十一)池羊蹄ナト用ヘリ

○似兒草　(十一)芦垣之、中之似兒草、爾故余漢、我共咲爲而人爾所知名、(十四)安思我利乃波故禰能禰呂乃爾古具佐能波奈都豆麻奈禮夜、比母登可受禰牟、(二十)秋風爾奈妣久可波備能、爾故具左能爾古余可爾之母於毛保由流香母　しらす、庭にも河邊にも山にもよめり　〔藻鹽草〕爾許草ハ萬葉ニ和草ト書リ花モ葉モ細カナリ青根トモ古歌ニヨメリ云云トアルニ付テ〔大和本草〕ニコ草ハ俗ニ云箱根草ハシノフニ似テ小ナリ葉細シ莖紫色光リアリ莖堅シ又黒色ナ

ルモアリ云云ト云ヘリ又コレニ付テ〔廣大和本草〕石蕨和名ニコクサ石長生ニ似テ莖黒カラス大和本草ニ箱根草ト云ハ誤リナリ棧道記ニ見エタリ云云ト云ヘリ是等ハ何レモ考ヘニカクハ云ケン但シカノ萬葉ニ和草ト書リ云云ト云ハ(十四)ノ所射鹿乎認河邊之和草、ワカクサトアル和草ノ事ナルベシ是ハニコクサト讀ハワロシワカクサナリ先ノ草ノ時ニ云キ

頭註 〔字鏡〕人參 加乃爾斤久佐 〔和名抄〕同加乃爾介久佐考フベシ

○穂蓼 (十一)吾屋戸之穂蓼古幹、採生之云云 (十六)小兒等、草者勿苅八穂蓼乎云云 水蓼 (十三)長云云水蓼、穂積至、鳥網張、坂手乎過、云云水タテハミツノ〻シキ蓼トモ聞ユレト河邊ニ生ル今モ水タテト云ノナルヘシ

○麥 (十二)柜梠越爾、麥咋駒乃、雖詈云云コノ柜梠ト書タル何故トモ知ラス(十四)久故胡之爾、武藝波武古乎馬能波都波都爾、云云ニナホ(十六)ニ三處アリ

○濱菜 長云云荒磯之於丹、濱菜採海部處女等云云 しらす 〔古今集〕コヨロギノ磯立ナラシ、イソ菜ツム、メサシヌラスナ沖ヲヲレ浪、〔袖中抄〕メサシトハ女ノ童ナリソレカ磯ニ生タル和布ヲ小刀ニテ切テアツムルナリ云云ト云ヘル類ニヤサレト海藻ハ苅トコソ耳ナレタレ菜ト云ヘハトテツムトハ云シシクヤ

○波麻都豆夜 (十四)駿河能宇美、於思敝於布流、波麻都豆夜伊麻思乎多能美於夜爾多我比奴、コノ都豆夜ノ夜字ハ良ノ誤リナリ 濱つゝらは〔和名抄〕蔓荊和名波末波比とも今ははまかつらとも濱しきみとも

○宇家良 (十四)古非思家波、素氏毛布良武乎、牟射志野乃、宇家良我波奈乃、伊呂爾豆奈由米(同)マタ二首アリ また〔和名抄〕求和名乎斤良とも

○九久多知 (十四)可美都氣野、左野乃九多知、乎里波夜志安禮波麻多牟惠、許登之許受登母 莖たちは蔓菁もアヲナ蘿蔔もオホナあれと折はやし〳〵する大根を今は直にをりばやしといふ

○伊波爲都良 (十四)伊利麻治能、於保屋我波良能伊波爲都良可婆奴流奴流、和爾奈多要曾禰(同)可美都氣奴可保夜我奴麻能、伊波爲都良比可波奴禮都追安乎奈多要曾禰 しらす 仙覺ハ藺ノ事ニ思ヒタレト藺ニ都良トハ云マシカシ

○努自 (十四)伊香保呂能、夜左可能爲堤爾、多都努自能安良波呂萬代母、佐禰乎佐禰氏婆 仙覺は虹のたつ事は思へり 天武紀ニ有大虹ト云ニスシト付タルハ古キ讀トオボユ 是もわろからす、我おもふにも奴志は 〔和名抄〕紫苑和名能之俗云之乎迴ト見ユ是ハ羊蹄ノ志ヲ本ニテ知母ノ夜方之大黄ノ於保之ナトノ類ヒニ野羊蹄ト名付タルナルヘシサテ野山ノ野ヲ古ヘニ奴ト云ヒ後ニ乃ト云シハ云モサラナリサレハ努自ヲ能之トハ云キスチニテアレハ後に漢名にて志を耳といへる草なり

やさかのゐてにたてる（タツトハ〔神代紀〕所植此云多底婁トアル意）ぬしの花の穂にあらはるゝことくにいへる意と思ゆいつれよけん

○於保爲具左（⑭可美都氣奴、伊奈良能、奴麻能、於保爲具左、與曾尓見之欲波、伊麻許曾左禮）おほゐは（〔和名抄〕莞和名於保井トアルノニテ）今丸がまとも丸すけともいふこのわたりの方名にぬゐといふは野の藺てふ事にて古き名を傳へたりとおほし（今ノ世ニ野山ノ能ヲ奴ト云人ハナケレト奴爲テフ物ノ名ニナリタレハ其マヽニ傳ヘタルナリ）

○都豆良（⑭可美都家野、安蘇夜麻都豆良、野乎比呂美、波比爾思物能乎、安世加多要世武）つゝらは乾して黒くなりたる曝して白くなりたるをのみ常に見れは（式ニハツヽラニ黒葛トノミ書テサラシタルハ曝黒葛ト書シ）野山に生たるを青つゝらといへり（〔古今集〕戀四山カツノ垣木ニハヘル、青ツヾラ人ハクレトモコトツラモナシ）さて青かつらとも（〔和名抄〕防己和名阿乎加豆良トアルヲ今モ伊豫國ニハ青カツラト云フ）今はつゝら藤ともまた蔓とも葉も大きなるを（〔靈異記〕カ女ノ處ニ副納能葛練韃廿段云云トアリテ）くまつゝらといふ今も熊つゝら又大つゞらふぢともいふ（〔和名抄〕葛類ニ馬鞭草和名久末豆々良トアルハ馬ノ鞭ニ用ヒタルニヨリテ思ヒ誤マラレタルナリ馬鞭草ハ葛類ニ入ヘキ物ニ非ス）

○美良（⑭伎波都久乃、乎加能久君美良和禮都賣杼、故爾毛乃多奈布、西奈等都麻佐禰コノ乃多奈布ノ乃字ハ古キ假字ニ美ヲみト書タルヲ乃ニ寫シタカヘタルニテ籠ニモ滿ナフナルヘシ）仙覺か云くゝみらは莖立たるみらなりといへり（今ハニラ漢名韮）

○多波美豆良（⑭安波乎呂能、乎呂田爾於波流、多波美豆良比可婆奴流奴留安乎許登奈多延）何にや知らす（强テ云ハヽヒルムシロハ引ステネハ廣ゴリテ稲ヲ枯ス物ニテアルヲ田ヲハムテフ意ニ田喫ツラトヤ付ケンコノ外ニ田ノ中ニツラト呼テ引ヘキモノナシ）

○根都良具佐（⑭芝付乃、御宇良佐伎奈流根都古具佐安比見受安良婆安禮古非米夜母、コノ根都古ノ古字ハ良ノ誤リナルヘシ六帖ニモコノ歌根ツラクサトアリ）しらす是は芦なとのことく根の連なれる草にてあるらんを男女のいねする事にいひかけたりと聞ゆ（〔諸國方言〕ト云モノニ男女ノ率寢ルヲ信濃ニテネツル、ト云ト書タルヨクカナヘリ）

○蔓菁（⑯食薦（ケコモ）敷、蔓菁煮將來、樑爾、行騰懸而、息此公）

○宇毛（⑯蓮葉者、如是許曾有物、意吉麻呂之、家在物者、宇毛乃葉爾有之）古へは芋をうもと

いへるにやまたはふれてよめるにや坂野篤親カ云ク宇字ハ伊ノ誤リニテ伊毛ナルヘシトイヘリ　何にまれはちす葉に對たれは〔和名抄〕芋和名以閇部都以毛なり

○蒜(ヒル)　㊤醬酢爾、蒜都伎合而鯛願吾勿所見、水葱乃羹物

○玉掃(タマハキ)、　㊤玉掃、苅來鎌麻呂、室乃木與、棗本、可吉將掃爲　玉はゝきは一わたりは帚をほめていへる名にてあれと是は苅といへははゝき草なるへしと契冲かいへるよろし古へのはゝき草といふもの今のにや何にやしらす今ハ漢名地膚ト云モノヲ掃木トモ掃クサトモ云テ掃ニスレト字〔字鏡〕地膚子何加久佐〔和名抄〕地膚和名爾波久佐一云末木久佐トアルノミナレハ如何ニアラム

○葵花(アフヒハナ)　㊤成棗、寸三二粟嗣、延田葛乃、後毛將相跡葵花咲　あふひとも〔古今集〕物名カクハカリアフヒノマレニナル人ヲ云云　あほひとも〔字鏡〕葵芹同阿保比トアリ布ト保ハ通ヒモスレト後毛將相跡云カケクレハコノ歌ノハアフヒト讀ソヨキ　木ばちす漢名槿　の花に似たる葵なり漢名ハ蜀葵　今の花あふひとも露あふひとも露あふひともいふまた葉も花も小さきをは小あふひといへりマタ錢アフヒトモ漢名ハ錦葵　また冬あふひは冬もかれすてあるか花は見るへくもあらす漢名ニ打マカセテ葵ト云ハソレナリ外ノ葵ニ對ヘテハ漢名モ冬葵ト云ヘリスヘテ草木ハ日カケニ向フモノニテアルヲ漢土ニハ取ツキテソノ冬アフヒヲ古ヨリ日カケニ向フト定テ　左傳ニ成王十七年云云鮑莊子之知不如葵葵猶能衞其足トモ〔准南子〕聖人於道猶葵之與日トモ〔爾雅翼〕葵者揆也葵葉傾日不使照其根乃智以揆之也ナトトリ〳〵ニ云ヘリ是ニ就テ人々オモヒ誤レルコトトモイト多ルヲ次ニ云ム　又唐あふひといふものあり唐ほひともいふ是は名こそあれ葵の一種にはあらすたけ高く莖葉にいらありて菊(カラウハキ)のことき花の黄色にていと大きなるか日かけにつれてかたふくを今は日くるまといふ　漢名ハ丈菊マタノ名ハ向日葵〔枕冊子〕草ノ花云云唐アフヒハ取ワキテ見エネト日ノ影ニ従ヒテ傾クランソナヘテノ草木ノ心トモ覺エデオカシキ云云ト云ヘルハ彼冬葵ニヤトモ聞ユレト〔催馬樂〕安支波支奈天之已可良保比ナニノ〳〵トアルヲ思フニ冬アフヒハ春ノ花ニテアレハ是ニカナハスサテハ日車ノ事ト思シ　また中頃よりあふひとて歌によむは加茂あふひにて是も葵の類ひにはあらす　漢名ハ杜衡ト云モノナリ烈ルヲソノカモ葵ヲシモ漢土ノ冬葵ノ事ニ云カケテ〔千載集〕アフヒクサ照日ハ神ノコヽロカハカケサスカタニ先ナヒクラン〔新後撰集〕イカサレハ日カケニ向フ葵クサ、月ノカツラノ枝ヲソム

ラン、ナト詠ナシマタ後ノ世ニハ加茂ブフヒツ日カケクサトサヘ思ヘリ漢土ニモ後ノ名ヲ借リテ錦葵向陽心トモ詩ナトニ作リマタ〔祕傳花鏡〕蜀葵陽草也一名戎葵一名衛足葵言其傾葉向日不令照其根也ナト心得ヲヤマレルモアリ

○屎葛（クソカツラ） ⑯菎莢（サイカシ）爾延於保登禮流、屎葛、絶事無宮將爲コノ宮ノ下ニ任字脱ルカ又宦字ノ誤カ くそかつらは今のへくそかつらなるへしこのわたりの童はくそ瓜ともいふ 漢名ハ女青ト云モノナリ〔和名抄〕細子草和名久曾加豆良トアル是ナルヘシ又〔和名抄〕女青一名雀瓢和名加波禰久左トアルモ例ノ同物ヲ名ノ違ヒニテ二處ニ出サレタルノニヤ

○余母疑 ⑯長云云安夜女具佐、餘母疑可豆良伎、左加美都伎云云

○保與 ⑱安之比奇能、夜麻能許奴禮能保與等里天、可射之都良久波、知等世保久等曾 保與は〔字鏡〕寄生保與トテ 何の木にもあるやとり木なり中昔より〔和名抄〕寄生和名夜止里木一云保夜トテ今モ 保也といふ〔造酒司式〕弓絃葉寄生各十擔眞前葛日蔭山孫組各十三擔トアルモ保與ナリ

○堅香子之花 ⑲攀堅香子花、歌一首物部能八十乃嬔嬬等之挹亂寺井之於乃堅香子之花 今はかたことかたくりとも 八十乃ノ乃字ハ衍ナルヘシ六帖ニヤソヲトメラガトアリテサテ堅カシノ花トアルハワロシ

○澤蘭 ⑲ハシ書云云黄葉澤蘭一株拔取云云ウタハ此里者、絶兩、霜哉置夏野爾吾見之草波、毛美知多里家利 何にかあらんしらす〔和名抄〕澤蘭和名佐波阿良良木一云阿加末久佐トアルモシラスマサシキ漢名ノ決蘭ハ谷川ナトノミキハニ生ル決ヒユボリト云クサナリ

○母母余具佐 ⑳父母我、等能志利弊乃、母母余具佐母母與伊弖麻勢和我伎多流麻弖〔莫傳抄〕百夜クサハ菊トアレトコレハ天平勝寶七歳乙未二月相替遣筑諸國防人等トアル哥トモノ中ナリ春ナレハ菊ニハアラジ

○宇萬良 ⑳美知乃倍乃、宇萬良能宇禮爾、波保麻米乃可良麻流伎美乎波可禮加由可牟 うはらはくさ〳〵あれと今の野いはら白いはらといふものこゝには似つかはしき〔和名抄〕營實和名無波良乃美薔薇子也トアルノニテ古今集ノ物名ニサウヒト云ヘルナリ

○麻米 ⑳今云シ哥ノ これは茨の末に蔓ふとあれは常の豆にはあらす〔和名抄〕豌豆一名野豆和名乃良末女なとなるへし

○芹子 ⑳安可禰佐須、比流波多多婢弖、奴婆多麻乃、欲流乃伊刀末仁、都賣流芹子許禮 ⑳同云云可爾波乃多爲爾世理曾都美家流

萬葉動植考　下

木類

梓　松　榛　檪木 刀我乃樹　眞木 眞木 麻氣　栲 木綿栲タク

檜　椿 山海石榴　眞弓 白眞弓　橘 花橘 安加良多知波奈 等伎自久能可久能木實　椎

須疑　馬醉木　石乍自 白管仕　茵花 丹管仕　槻 小槻 大槻　櫻花 櫻皮 山櫻花

臣木　賢木　柘　梅　天木香樹　楓

翼酢　山橘　味狹藍　阿布知　久利　梧桐

阿乎夜奈義 也奈宜 垂柳　久木 宿久木 若歷木　于花　川楊　橡 伊知比　桃樹 毛桃 桃花

桑　合歡木花　蝦手 加敝流氏　母蘇 柞 櫟柴 安可良我之波　許奈良　橿實 白杜 杖

黃楊　阿倍橘　可頭乃木　由豆流波　枳　成 斐梨

棗　兒手柏　萓莢　榎實　毛武爾禮　李

都萬麻　知智乃實　柏カヘ　保寶我之波　波自　之伎美

木には

○梓 ㊁長云云御執乃梓弓之、云云イト多シ(十三)長云云多朝者刺楊根張梓矣、御手二所取賜而、云云 あつさは若葉の赤きにより今赤芽かしはともいふ此あつさとひさきとを思ひ亂る人多し漢土ニモ然リトソひさきは葉にまたあらてさゝけのごとき莢の出來れは今はかみなりさゝけともいふ

○松 ㊀小松子松(同)濱松㊁玉松(同)松(三)松樹㊃山松㊅嶋松(同)一松㊉礒上、立回香瀧トアル瀧字ヲ改沖櫂直シテ多氏流和可麻都ト讀リ(十四)和可麻都能波奈、花可受爾之毛、我我勢故我於母敝良奈久爾、母登奈佐吉都追、(廿)伊蘇麻都(同)麻都能氣コレハ防人ノ訛ナリ

○榛 ㊀綜麻形乃林始乃狹野榛能、衣爾著成、目爾都久和我勢、集中コノ榛モシ書タル十一處ハカリヤ有ケンソレ皆秋萩ナリ波義トヨムヘシト云モアリ又皆波里乃木ナリ、波里トヨムヘシト云モアリ我モ原ハカチタルコトモアリシカトモ榛ト書タルニハ榛ノ花ト云事一ツモナク又鹿ナト詠合セタルコトモナケレハ榛字書タルヲハ波里ノ木ノ事ニオモヒ定メツ ㊂ノ去來兒等、倭部早、白菅乃、眞野乃榛原手折而、將歸(同)白菅乃眞野之榛原、往左來左、君社見良目眞野之榛原ナトハ波里ノ木ニシテハ似ツカハシカラネトマツ波里ノナミニ入ツ 針 ㊆不時、斑衣、服欲香、衣服針原時二不有鞆 波里 乃(十四)伊香保呂能蘇比乃波里波良云云同卷ニ又同ジツヽケアリ いにしへ波里といひけるを少し後に支ト里トハ通ハシ云事多ケレハ 波義ともいひ又秋はきを波里ともたかひにいひかはしけむ 〔播磨國風土記〕萩原里云云一夜之間生萩根、高一丈許仍名萩原即門御井故云針間井トアルハ波義ヲ波里ト云ケルナリ此風土記ハ出雲ヤ豐後ナトノ如ク舊キ代ノニハ非シト思ユコノ波義ニ萩ノ字ヲ書事ハ中昔ノ事ト思シ集中ニハ芽字ノミ書テ萩字書タル所ナシ菅家萬葉ニモ然リ字鏡ニ萩伊良トアリテ波義ノ譯ヲシ和名抄鹿鳴草ノ下ニ萩字出タルハ是モソノ頃アマネク萩字書タルニハ非ス故ナリ是等モ播磨風土記ノ舊時ノニアラヌ證也 さて田舍なとには〔和名抄〕武藏國ノ郡名榛澤波牟佐波トテ 波牟の木ともいひけんを今は波牟とも波里ともいふなり 秋波義モ波里乃木モトモニカヨハシ云ケル故ニ〔和名抄〕遠江國ノ郡名蓁原波伊波良トアリ是ハ波義原ト聞ユ波里ハ轉シテ波牟ト云ヘク波義ハ轉シテ波伊ト云ヘキナリ支ト云言ヲ伊ト轉スルハ常多キ事ナリサテ蓁ハ字書ニ與榛通木叢生也トテ蓁榛通ハシテ書中ニモ波牟佐波ニハ榛字書波伊原ニハ蓁字書レタルハ波里ト波義トノ差メ歟マタ彼ノサイハリハ〔神樂歌〕前張佐伊波里仁、古呂毛波斯女之、安女不禮止、安女布禮止、宇律呂比加多之、布可久曾大波トアルヲサイハリハ初ハキヲ云カサイハ先ナリト顯昭法師カ云タレト是ハ波里ノ木ナリ波里染ノ衣ハ色ノウツロハヌ物ナレハカクハ、謠ヘリト思ユ佐伊ハ何故ナラン知カタケレト強テ云ハサキタル波里ト云事ナルヘシ木ヲモリクト云事ハ眞木佐苦辟竹ナト云例モアリ又字鏡ニ刮木佐久トモ見エマタ波里ナラハタヽ波里ニテアルヘキヲ佐支婆里トモ云事ハ波里ハ實ヲモ染クサニスルモノナレハ木ヲハ佐支婆里ト別テルニヤ

○椶木㊀長云云阿禮座師神之盡、椶木乃、彌繼嗣爾、天下云云㊂長云云五百枝刺繁生有都賀乃樹乃、彌繼嗣爾云云、コノ外㊆㊈ニモ同シツヽケアリ刀我乃樹㊅長云云四時爾生有刀我乃樹能彌繼嗣爾云云今もつかの木ともいへと大方はとかといふまことに枝のさまさへいやつき〳〵に指出たり然ルヲ今ノトカノ木ニハ非スツケノ木ナリナト云ハ歌ノサマヲモ思ハヌナリ

○眞木㊁長云云泊瀬山者、眞木立、荒山道乎、云云(同)云云眞木佐苦、檜乃嬬手乎云云㊂云云眞木之立、荒山中爾云云モ斐太人之眞木流云、爾布乃河云云ナトイト多シ又㊂ノ之字ハ所字ニテ眞木所立ニヤアラン眞木之立ト云テハ何トヤラン拙クオホユ眞木㊂眞木柱太心者、有之香杼、云云㊂長云云眞木ノ葉哉、茂有羅武、松之根也、遠久寸、云云⑪奥山之、眞木乃板戸乎押開云云ナトコノ外イト多シ麻氣⑳麻氣波之良、賣米弖豆久禮留、等乃能其等云云コレハ防人ノ訛也眞木はたゝ何となき木をほめていへるもあり㊀㊁㊂ナトノ眞木ハホメタルナリ木の名なるもあり⑬⑪ナトノハ眞木ト云木ナリまた古へのまきは今のにあらすとおもへるはわろし檜ノ木ナリト云人ノアレトサル證モナシ杉ノ木ナリト云モ誤リナリ古ヘノマキハ杉ノ事ナリト云ハ和名抄ヲ見誤リスルナリ〔和名抄〕被音彼日本紀私記云末支ハ須義ノ一名ナリト心得タルソオロカナル被字ノ一名ト云ヘル事ニテ漢字ノサタナリ末伎ト須義トノ事ニハ非ス〔爾雅〕被ハ𣏌疏被一名𣏌俗作杉トアルノナリ〔和名抄〕椙音偐日本紀私記云阿波木今案、又檜木一名也見爾雅註トアルナトニモ思ニ合セテ知ルヘシソノ上〔神代紀〕一書曰素戔嗚尊曰云云乃拔鬚髯散之即成杉又拔散胸毛是成檜尻毛是成被眉毛是成橡樟トアルニテ上ツ代ノマキハ杉トモ檜トモ別ナル事知ラルマタ〔造酒司式〕檜葉眞木葉各五擔トアルノト和名抄ニスキハ杉マキハ柀ト別條ニ出サレタルニテ中昔ノ眞木モスギヤ檜ノ木ニ非ル事イチシルシ然レトモ今ノ世ニハ檜ヲ直ニマキトコソ云ハネ檜ノ皮ヲマイハタトモ云ハ眞木ノ皮(ハダ)テフ事ナリ是等ノ事ヨリ古ヘノヲ思フハタカヘリ今のまきにて何のあかぬ事もなし眞木てふ同し名もあれと香のいとくさきによりてまたくさまきとも今はいへり漢名ハ羅漢松同シ名トハケヤキヲモ地ニヨリテマキトモ云ナリ

○栲(タヘ)㊀長云云、朝月夜、清爾見者、栲乃穗爾、夜之霜落云云⑭雪穗コノ外荒栲白栲敷妙ナトイト多シ文字モ樣々ニ書リ栲字ハ栲ノ俗字ナリ〔爾雅〕栲ハ山樗トアリ栲ト楮ト音似タレハ山楮ト云意ニテ昔ヨリ多倍ニ栲字ヲ云カ又其字ノマサシキ義ハオキテ都婆支ニ椿字左久良ニ櫻字ヲ書クナミカ木綿(ユフ)㊁神山之、山邊眞蘇木綿、短木綿云云、コノ外(同)木綿花㊅白木綿花㊂木綿疊(同)木綿手次⑫染木綿⑯結幡ナトイトオホシ栲(タク)㊂栲領布乃、懸卷欲寸、妹名乎、云云コノ外㊂栲角乃、新羅國㊈細比禮乃、鷺坂山⑭多久大須麻之良夜麻可是⑭多久頭怒能之良比氣ナトイト多シたくは中頃よりいふかちの木なり〔豐後國風土記〕

柚富郷在郡西此郷之中栲樹多生常取栲皮以造木綿因曰柚富郷
一古語拾遺ニ天富命更求沃壤分阿波齋部率往東土播殖麻穀好麻所生故謂之總國穀木所生故謂之結城郡古語麻謂之總也今爲上總下總二國是也ナド見エタルニ和名抄ニ楮穀木也和名加知ト新勅撰集ニ秋上家隆草ノ上ノ露トルケサノ玉章ニ、ノキハノカネハ、木ツ葉モナシ、ナド中頃ヨリハカチトノミイヒテ古キ名ハ失ス

木をは多久といひ（栲ツ布栲フスマ栲ヒレナト云フハ栲ニテシタレハナリ）きぬなとにしての名は多倍とりしで神の御前にさゝくるをは由ふとなつけたりとおほゆ（彼是オモヒワタリテ知ナン）またたく縄てふ物を（三栲縄之、長命、四栲縄之永命栲縄之千尋縄打延云云一神代紀ニ以千尋栲縄云云ナト栲文字ヲ借リテ書レタルヲ思誤テ）栲してなひたる縄と心得たるはしからす（古ヘヨリタヽ長キ事ニコソ云カケタレ白キ事ニ云タルハナシ）海人ともの海に打はへてたくる縄なれは多久縄といへり（然ルヲ眞淵カ冠辭考ニ栲縄トハ栲ノ糸シテナヘル縄ヲ云云古今集ニ海人ノ縄タキ、イサリセントハ、ト詠ルハ綱ノ手縄ヲ手クルヲ云、且里反妓ナレハ多妓ト云テ支ヲ濁ルナリ萬葉ニタゲバヌレ、タガ子バ長キ、妹ガ髪ト詠シモタグルテフ語ハ古今集ト同シクテ計ト可ヲ濁リ然ルヲコノ栲縄ノ栲ニ惑フ人アリト眞淵カ云ヘルハカリテソロシスヘテ語ノ清濁リハ古ト今ト違フ事甚多シ今ハ手シテアリコスルニタ具留ト云ハト古ヘハ多具留ト云ケルナルヘシ彼妹カ髪ノ哥ノモ多久ト云ハ意ハ異ナレトモ多氣婆奴禮、多香根者長寸妹之髪云云マタ人皆者今者長跡多計登雖言云云、トアリ一首ノ中ニテ波ノ濁ルニハ濁音ノ婆字ヲ書ルニ氣ヤ香ニハ濁音ノ字ヲ用ヒ又（七）未通女等之織機上乎、眞櫛用掻上栲島、波間從所見、トヨミカケタルモ先ノ哥ト同シ意ニテ栲文字ヲ書タレハ是モ久ヲ濁ルマシキノナリ是等ノ多久ハ手シテクル事ニハ非ス手シテ兼ル事ニテ多加奴テフヲ加奴ノ合リ久ナレハ多久ト云タルナリマタタク縄ヲクルト云事ハ一枕册子ニ打トクマシキモノ云云タク縄ヲ海ニウケアリクトイト危ク後メタクハアラヌヤ海人モノホラントテハ其縄ヲナンヒク取マトヒクリ入ル、サマゾコトワリナルヤ枕册子ニ云ヘルヲモ思ヒ合セヨカシ今ハ彼多具留ト云ヘルナラヒニ多具縄天具縄トソ海人共ハイヘル）

○檜（一長云云眞木佐苦、檜乃嬬手乎、云云（七）云云彌和乃檜原爾插頭折兼ナトナホアリ古ヨリヒノ木ニ檜字ヲ書ケト檜ハ一名ヲ圓柏ト云モノニテ今云イブキナリヒノキニ非スヒノ木ノ漢名ハ扁柏） 檜の木に似たる木に中昔あすはひの木といひつる木あり（一枕册子ニ木には云云コノ世近クモ見エ聞エス御嶽ニ詣テ、歸ル人ナドシガモテアリクメル枝サシナトノイト手フレニクケニ荒々シケレト何ノ心アリテ明日ハ檜ノ木ト付ケンアヂキナキ兼コトナリヤ誰ニ頼メタルニカアラント思フニ知マホシウオカシ云云） 今も同じ意にてあすならうとなんいふまたさはらとも越路にはかたおもてとも（是ハフタオモテニムカヘタル名ナリ漢名ハ羅漢柏）

○椿（一巨勢山乃、列列椿、都良都良爾、（廿）奥山之、八峰乃海石榴都婆良可爾、云云ナトイト多シ） 山海石榴（七）足病之、山海石榴開、八峯越、云云、鹿我可度乃、可多夜麻都婆伎、麻己等奈禮云云六帖ニ（七）ノ山海石榴ノ歌ヲ山サクロトノセ

ラレタレトサクロハ石榴ト云モノニテ海石榴ト云モノニハアラス
又ツハキニ海石榴ト書コトハ古ヘヨリ書紀續紀式ナトニモ多ク見
エタリ伊藤東涯ノ〔乗燭譚〕ト云モノニ唐ノ時ニハツハキヲ海石
榴ト云日本ニテ古ハ唐ノ時ノ名ヲ受テツハキヲ海石榴ト云ヘルニ
ヤト云ツレト是モタカヘリツハキハ漢名山茶花ト云モノ海石榴ハ
今云朝鮮サクロト云モノニテ異モノナリ〔酉陽雜組〕山茶似海石
榴出桂州蜀地亦有ト云ヘルモ山茶ト海石榴ト別ナル證ナリマタ古
ヘヨリツハキニ椿文字ヲモ書ケト是モシカラスマコトノ椿ハ香椿
トテイトワロクサキ木ナリ又後世ニハ〔莊子〕上古有大椿者以八
千歳爲春八千歳爲秋ト云ヘル大椿ニサヘ言ヨセテ〔後拾遺集〕讀
人不知君カ代ハ限リモアラシ、濱ツハキフタ、ヒイロハ、改マル
トモ、ト詠ルハ〔文粹〕德是北辰椿葉之影再改トアルヲ本ニテ讀
メリヤ〔新古今集〕トヤカヘル鷹ノ尾山ノ玉椿、霜ヲハ經トモ、イ
ロハカハラジ、トナ其外椿ノ八千代ト云事多クヨメリカク古ヘヨ
リツハキニ椿字カク事ヲ唐士人モヨク知ニ〔草木藥方
雜記〕日本山茶花其國名爲椿不名以山茶也トモ云ヘリ

○眞弓 ㊁水薦苅、信濃乃眞弓、吾引者云云㊆南淵之細川山立檀、
弓束級、人不所知、ナトイト多シ㊁ノハ木ヲ詠ルニハ非
ス檀ノ
弓ナリ 白眞弓 ㊂云云白眞弓、張而懸有、夜路者將吉、是モ多シ
弓ニスル木ノ中ニ檀ハ取リキテ色ノ白ケレハ白マ
ユミト
云ナリ まゆみくさ〳〵あり曾婆の木も眞弓の一つ今
は矢筈錦木といふ〔書紀〕素戔能紀〔大舍人式〕其杖曾波木
二束云云〔枕草子〕木ハ云云ソハノ木ハシ
タナキコ、チスレトモ花ノ木トモハ散ハテ、押ナヘタル綠ニナリ
タル中ニ時モワカスコキ紅葉ノツヤメニテ思カケヌ青葉ノ中ヨリ

サシ出タルメツラシマユミ更ニモ云ス云云ナト見エ眞淵カ〔冠辭
考〕仁德紀毛々多羅孺椰素麼能紀云云素麼ノ木ハ和名抄ニ柧棱曾
波乃木四方木也ト云ヒ枕草子ニソハノ木ノ紅葉トモアリ然レハマ
ユミノ木ノ類ニテ枝莖ノ四方ニソハアリテヨクモミツル木今モア
リソヲ小眞弓ト云ツルヨロシ但シソハノ木ハ矢筈錦木ニテ小マミ
ニアラス小マユミトハコノサマニテソハナキヲ云ヘリ古ヘヨリマ
ユミニ檀ノ字ヲ書ケト實ノ漢名ハ衞矛サテ〔和名抄〕唐韻云柧棱
柧棱二音和名曾波乃木木也又四方木ト引レタル柧棱ハ木ノ名ニア
ラス四方木トアルニヨリテ思ヒチガハレケン字書ニ書ハ棱木也マ
タ木ノ四方爲棱八棱爲柧マタ殿堂最高之處曰柧棱トモ見ユカヽレ
ハ和名抄ニ木部ニ出テ柧棱ハ木也トノセラレタル文字クハリモイ
ト惡シ居宅部ナトニ柧音一孤棱木也又四方木也トコソ書ルヘケレ
曾婆乃木ニアテラレタルナホ惡シ四カド八カ
ドニソハタテ、削リタル木ノ事ニコソアレ

○橘 ㊂橘之、蔭履路之、八衢爾、云云コノ
外イト多シ㊈㊉ニハ橘之花トモヨメリ 花橘 ㊂長云云菖
蒲、花橘乎玉
爾貫云云ナ
トイト多シ 安加良多知婆奈 ㊅都奇穪知弖伊敝爾波由可牟、和
我佐世流、安加良多知婆奈、可氣
爾見要都追、コレハ赤ラカニテ㊈長云云島山
爾安可流橘宇受爾指云云トヨメル同シ意ナリ 等伎自久能可久
能木實 ㊅長云云此橘乎、等伎自久能、可久能木實等名附家良之
母、マタ同時支能香久乃菓子ト書タル支モジハ士久ノ二
字書タルヲ寫シタ
カヘタルナルベシ たちはなは惣名にて今のかうじみか
むの類ひなるへし 漢土ニモ橘ト云ハ斯ル物ノ惣名ナルカ分テ
橘ト云ヘハカウシナリ㊆ノ多知婆奈ノ歌ト

モノハシ書ニミナ橙橘ト書タルモ惣名ナル由ナリ　今のたちはなといふものはうま
くもあらす　今ノ漢名候橘

○椎　㊁家有者、笥爾盛飯乎、草枕、旅爾之有者、椎之葉爾盛㊆片岡之、此向峰椎蒔者云云㊅云云思比乃佐要太能登古波須具登陀

○須疑　㊂三諸之、神之神須疑、云云、㊂云云鉾椙之本爾薜生左石爾、㊃石上振乃山有杉村乃云云ナトイト多シ椙字榅字ノ誤リト思ユ字書ニ榅音温杉也

○馬酔木　㊁磯之於爾、生流馬酔木乎、手折目杼、令視倍君之、在常不言爾、㊇㊉ニモアリ㊉馬酔㊆安志妣㊦安之婢スヘテ十歌ハカリヤアリケン　あしひ後にあせみそはあせひあせほまた
馬くはすとも　漢名梫木アシヒヲ今ノニ非シトテ思ヒ〳〵ニ云ヘト皆ヨシナシ古ヘアシヒト云ヒ馬酔木ト文字ニ書タルニ今モアセホ馬クハスト云ヒ㊉二月ノウタニ詠ルナト何モ皆ヨクカナヘリ〔夫木集〕春俊頼トリツナケ玉田横野ノハナレ駒、ツヽシカドニアセミ花サク、マタ馬酔木題オソロシヤ、アセミノ花ヲ、折リタキテ、南ニ向ヒ祈ルイノリハ

○石竹白　㊂水傳、礒乃浦回乃、石竹白云云㊆石管白　白管仕○㊂加麻𨜡夜能美保乃浦廻之白管仕云云ナホアリ管字ハ菅ノ誤ナ　茵花　㊂長云云何在歳月日香、茵花、香君之牛馬留云云㊀ニモ同シツヾケアリ又㊅都追慈花、　丹管
仕　㊇長云云缶邊乃路爾丹管仕乃、将薫時乃云云　つゝしくさ〳〵多し岩つゝし
は　〔字鏡〕茵芋岡豆々志、又云伊波豆々自トモ見エタレハ　中頃にいへる岡つゝしに
て今の山つゝし　漢名山躑躅マタ〔和名抄〕山榴和名阿伊豆々之ト云ヘルハ何ニヤ知ス但シ山柘榴ト云ハ山躑躅ノ又ノ漢名ナリ　につゝしは黄つゝしにて今のゐぬつゝしな
るへし　漢名羊躑躅　また中頃に　字鏡ニモ和名抄ニモ羊躑躅毛知豆々自トイヘル　もちつ
ゝしといへるは何にかあらん今のもちつゝしは春と
く葉もなくて紫なる花の咲をいへり　漢名紫躑躅今ハ種々イト多シ古ヨリツヽシニ茵芋茵花ナト書ケト茵芋ハ今ミヤマシキミト云フモノニテ別モノナリ

○槻木　㊁長云云趁出之堤爾立有、槻木之、巳知碁智乃枝之、云云　小槻　㊆池邊小槻下細竹莫苅嫌云云　弓
槻　㊉長谷弓槻下、吾隠在妻云云㊃輕乃社之齋槻トアルモユツキト同シ㊂長云云百不足五十槻枝爾、ト詠ルモシカナリコノ五十ヲ三十ト書タルハ誤リナリ　今の世につきといふはけや木の内の一
種なり古へのはけや木の大名なりけんつきとは椀杯(マリツキ)なとにするによき木なれはいふにや　漢名欅木、古ハ弓ニシケレハ槻弓ト云事多ク聞ユ其ホカ梓檀(マユミ)櫨柘(ハシツミ)ナト弓ニ制リキ〔兵庫式〕梓弓一張長七尺六寸槻柘檀准之ト見エタリ、外ノ木トモノハスクレテ専ラ柘弓

ノミニナリヌ

○櫻花㊂長云云松風爾、池浪立而、櫻花云云㊄佐久良婆那㊂作樂花ツトイト多シ又㊉阿保山之、佐宿木花者今日毛鴨散亂見人無二、コレヲサネキト詠テ合歡ノ事ナトニ云ヘトヨシトモ思エス或人佐宿木トアル文字ヲ佐舊樂ト書改メタルイトヨク心ツケリコノ歌ノ前後ハ皆梅櫻ノウタナリ　櫻皮（カニハ）㊅長云云櫻皮卷、作流舟二、眞梶貫云云コノ櫻皮卷ト云事舟ハモトヨリ舳ニテ櫻皮モテ卷カタカルヘシ誤字カ　山櫻花㊇足比寄乃山櫻花、日並而云云㊆夜麻佐久良婆奈ナトアリかには何櫻にもあれ皮をはいふへけれと中頃よりかには櫻といふものありてもはら皮をとりつかふ花はよくもあらす「古今集」物名カツケトモ、波ノナカニハサクラレテ云云「和名抄」樺和名加波又云加仁波

○臣木（オミノキ）㊂長云云、三湯之上乃、樹村乎見者、臣木毛、生繼爾家里云云　おみの木はもみの木なりと仙覺いへりとかともみは同し木にて枝に葉のひらみて付をとか四方につくをもみといふなり漢名樅「和名抄」樅七客反和毛美「字鏡」樅毛牟乃木トアルノナリ又字鏡ニ別條リニ枻牟彌乃木トアルハ別物ニハアラテカノ毛牟乃木ナルヘケレト文字ヲ心得違ヒタリ樅ハ七恭切枻ハ想氏切音渉同樅ト字書ニモ見エタルヲ樅ト樅ト文字ノ形ノ似タル故ニ枻ヲ樅ノ事ニ思ヒ違ヒタルナルヘシ

○賢木（サカキ）㊂長云云奥山乃、賢木之枝爾、白香付、木綿取付而云云㊃神樹爾毛、手者觸云乎打細丹、人妻跡云者、不觸物可聞、是ハ宜長カミキト可讀ト云ヘリ　古へのさか木はまさか木にて又の名ははひまゆみ漢名杜仲「字鏡」杜仲波比萬由美又云屎萬由美ト見エタル今モ讚岐ニハマユミト云ヘリ垣ナトニ植レハ大ニナラステ枝多ク出ツ其マヽニテ立レハ大キナル木ニナルナリ　大昔はまさか木といひつるをやゝいひなれてはまさ木ともいひさて後には眞ト云稱辭ヲ略キテさかきとのみいひ來ぬめり神代に鈿女命（ウズメノミコト）のかつらし給へるを「書紀」ニハ天鈿女命云云亦以天香山之眞坂樹爲鬘トアリテ眞坂樹とも傳へ「古事記」ニハ天ノ宇受賣命云云、爲鬘天之眞拆而ト（マサキ）アリテ眞拆とも傳へ「古語拾遺」ニハ天鈿女命以眞辟葛爲鬘トアリテ眞辟葛とも傳へたるを思ふべしマタカノ古事記ノハ同シ係リノ上ニ五百箇眞賢木ト云事アリ同シ物ヲ同シ條リニ眞賢木トモ眞拆トモ二サマニハ云マシクコレハ葛字脫タルニテ眞拆葛ニモヤアラン　眞坂木とまさきとは一つのまさきつらはそれのつらになりたるなれはかくは語り傳へたるなり眞賢木ト云名ハ本ニテアレハタヽニ賢木トモ云ヘトマサキツラハ眞賢木マサキト云ヲ木ニテ付タル名ナレハサカキツラトハ云ハスソカシサテサカ木ニ古ヘヨリ榊トモ椗トモ拆トモ龍眼トモサマノ〱ニ書タル中ニ「字鏡」ニ杜毛利又佐加木トアルヲ思フニ杜字ハ字書ニスヘテ森テフ義見エスサテハサカキニ杜仲ノ杜モシヲ書

タルヲモリハ神ノ木ナレハモリニモ杜字ヲ書來ツルナルヘシ字鏡ノヰロ古ヘノサカキハ杜仲ニテアリケリトハ知サリケメト古ク書來ツルヲ其マヽニノセタリケン、中昔よりは今のさかき漢名青精をのみいひてまさきをさか木といふ事はたえて無りければそれにつれて彼はひまゆみの木をまさ木といふものとたに知らすなりてさはかり古く神わさにつかひたる木を屎まゆみと然いふそあさましき中昔ヨリノサカキハ今ノサカキハト云事ハ「和名抄ー榁漢語抄云比佐加木トアル其ヒサカキハ今ノサカキニヨク似タル木ナリ比ト云コトハ其ニハ非ステヨク似タル物ニ付テ云詞ナリソコヲ思ヘハ其頃ト今ノトハ一ツ木ナリ

○柘(ツミ) 三此暮、柘之左枝乃(ツミノエダノ)、流來者、梁者不打而、不取香聞将有古爾梁打人乃、無有世伐、此間毛有益、柘之枝羽裳十長云云明來者、柘之左枝爾、暮去者小松之若末爾云云 つみは今おしかへては山くはともいひ大くはともいふを越の國には是をしも眞桑といへり山におほく生たるか常の桑より葉の厚くて大きなるなり

○梅 三烏珠之、其夜之梅乎、手忘而、不折來家里思之物乎ニ、同梅之花、十梅樹五四六十ナト鳥梅、宇米、汗米、宇梅、有梅、于梅、サマ〳〵ニ書リ五和我夜度爾左加里爾散家留宇梅能波奈云云ト書ル乎ハ字ノ誤リナリ

○天木香樹(ムロノキ) 三吾妹子之見師鞆浦之天木香樹者常世有跡見之人曾奈吉同室木十牟漏能木ナトイト多シムロノ木ニ天木香樹ト書タル故ハ知ラス 今は鼠さしともいふ一字鏡一榁加波也奈支又牟呂乃木トアルノナリ但シ河ヤナキト付タルハ「爾雅」榁河柳トアルヲ心得タカヒツルナリ河ヤナキハ漢名水楊ト云モノニテ別ナリ又ムロノキヲ榁トノミハ云カタシ榁杉ト云又刺杉トモ

○楓(カツラ) 五云云月内之楓ノ如妹乎奈可責ニコレモ十天河、月ノ船浮桂梶、ト云モカツラヲ詠ルニハアラスカツラノ木ヲヨメルハ七向岡之、若楓木、下枝取花待伊間爾嘆鶴鴨 下 古へにかつらといひけんは一古事記一傍之井上有湯津香木云云訓香木云加都良乃木トモ見エ一和名抄一楓乎加豆良桂女加都良トアリテ楓桂ナト云字ヲ當ラレタルヲ思ヘハかをる木とは聞ゆれと何にや知られす一今昔物語一ニ震旦ノ長秀ト云僧桂宮ノ桂ノ枝ヲ切オロシテヨキ桂心ヲ取タル事アリカヽレハ好キカツラハアリツト思シ 今の加茂祭のかつらにはあらしかし一源氏物語一花散サトスコシサシ出テ見入玉ヘハ大キナルカツラノ木ノ追風ニ祭ノ頃オホシ出ラレテ云云トアルハ桂ヲ香ハシキモノニ云ヒナレタルナラヒニカクハイツルナルヘシ

○翼酢(ハネヅ) 四不念常、曰手師物乎、翼酢色之、變安寸、吾意可聞八打大伴家持唐棣花歌、夏儲而、開有波禰受、久方乃、雨打零者将移香十山振之、爾保敝流妹之翼酢色乃赤裳之爲形、夢所見管十唐棣花色之、移安情有者年乎曾寸經、事者不絶而 はねすをいと知かねて蓮ヤ或ハ月草ナト 思ひ思ひにいへと皆ひ

かことなりこれは今の花すはうの事とておもふはな
すはうといふははねすの訛なり〔天武紀〕淨位已上並著朱華朱華此云波泥孺正位ハ
深紫トアルヲ思フニハネス色ハ濃ナラス紫ノ事ト思シ共後ハネス
ト云事ナクテ蘇枋トノミ見エタルモ考ノ一ツナリ又㊇(十三)ナトニ唐
棣ト云ルモ〔爾雅〕釋木唐棣ハ移註樹似白楊江東呼夫移云云トアル
白楊ハ今〆箱ヤナキニテアルカ花ズハウノハダハ異ナレト葉ノ形
大カタハコヤナギニ似テ少シ大キナリカ、ルスチヨリヤ波禰受ヲ
唐棣ニアテラレケン實ニハ唐棣ハ今ノシテ櫻ニテ別ナリ、㊇二夏
儲而ト詠ルニ花スハウハ春ノ花ナレハ然ランカト思ハンカサレトコ
ノ僻アテニ波禰受ニ當ラレタル唐棣ト云モノハ全ク春サク木花ス
ハウハ春ノ末夏ノ初ニカケテ咲ナリサテ波書紀紫色ナルヲ朱華ト
書玉ヘル事ハ唐ニモ其例アリ花スハウハ漢名紫荊ト云ヒ又ノ漢名
ヲ百日紅トモ滿條紅トモ彼文字ノサタノキハタケキ漢土ニスラカ
ク紫ヲ紅トモ云モノ今ノ世ニモ紅色ナル紫色ナルナヘテ赤シト云
フ眞サヲナル綠ナルナヘテ
青シト云ハ昔ヨリノ習ナリ

○山橘㊃足引之、山橘乃色丹出而、語言繼而、相事毛將有、コノ外ナホ多シ　今は山かうしや
ふかうしとも　漢名平地木

○味狹藍㊃事不問、木尚味狹藍、諸茅等之、練乃村戸二、所詐來、(廿)安治佐爲能夜敝佐久其等、久夜都與爾乎、伊麻世和我勢故、美都々思努波牟

○阿布知㊄伊毛何美斯、何布知乃波那波知利奴倍斯、和何那久那美多、伊摩陀飛那久爾㊉相市ナホオホシ

○久利㊄長云云久利波米婆、麻斯提斯農波由云云㊈三栗乃中爾向有曝井之云云

○梧桐　歌ニハ、詠タラネト㊃梧桐日本琴一面ト端書ニ書リ、あをきはむかしも青き
りといひけらし〔和名抄〕梧桐云云今案俗訛呼爲青桐是也二音譲土ト見ユ是ハ昔モ青キリト云ケンヲ後ニ
漢名メカシクシヤウド
ト云ツルニテアルヘシ

○阿乎夜奈義㊄阿乎夜奈義、烏梅等能波奈乎云云(同)阿乎夜疑㊇安乎楊木ナトオホシ　也奈宜有㊄
知奈妣久、波流能也奈宜等云云㊅柳㊉楊(十七)楊(十八)楊奈疑ナト多シ楊モ
シ書タルハ借字ニテシタリ柳ナリマタ㊄波流楊奈宜(十二)春楊マタ(十三)
刺楊(十四)左湏楊奈疑マタ(十四)
可伎都楊疑ナトイト多シ　垂柳㊉云云、垂柳者雖見不飽鴨(同)爲垂柳(同)四垂柳ナト

○久木㊅烏玉之、夜乃深去者、久木生留淸川原爾知鳥數鳴、久　濱久木(十一)浪間從所見小島之濱久木、久成奴、君
爾不相四手コレハ濱ニ生ルヒサキナルヘシ別モノニハアラシ　若歷木(十二)度會大河,邊若歷木、吾久在者、妹戀鴨、コ
レヲクヌキト吟來ツルヲ或人ノヒサキト改メタル宜シクヌキト吟
テハ吾ヒサナラハト云カケタルニ叶ハス但シ歷木ハ古ヘヨリクヌ
キニノミ書タレハ外ノ所ニテハヒサキト讀マシキナリコレハ櫟
字ヲ古ヘヨリイチヒニノミ書ナレタルヲ(十三)ナラ紫ニ櫟紫ト書タル
ナミ
ナリ
ひさき今はかみなりさゝけとも　漢名楸又ノ漢名榎㊉去年咲之久木今開徒
土哉將墮、見人名四二、トアルヲ或人フルキト讀ルシカルヘシコ
ノ歌ノ前後ミナ櫻梅ノウタナリ又(同)云云最木末之、咲往見者、ト
アルヲモヒサキノスヱノト讀來ツルヲ或人トホキコス
エノト改タル宜シ㊇ニコノ歌ト全ク同シ歌木末ト書リ

○于花（ウノハナ）㊆佐伯山、于花以之哀我云云㊇宇乃花㊆宇能波奈ナトイト多シ㊉春去者宇乃花具多思、吾越之妹我垣間者、荒來鴨トアルハ此並ヒノ歌トモ皆春ノ花ナレハ宇ノ下ニ米字脱タルニテ宇米乃花具多思ナルヘシト思ユ

○川楊㊆丸雪降、遠江吾跡川楊、雖苅、亦生云、余跡川楊㊈ニモ川楊㊉ニモ河楊〔和名抄〕水楊和名加夜夜奈木トアルモノコレラノコトナリ

○橡（ツルハミ）㊆橡衣人者、事無跡、曰師時從、欲服所念、㊅都流波美ナトナホオホシ

○伊智比㊅長云云此片山爾二立、伊智比何木爾、梓弓云云⑬櫟津　いちひは又の名をくぬぎ實をはつるはみといふものにてあるをいちひとくぬきとことと木とおもふはたかへり〔用明紀〕赤檮此云伊知毗トアルハ木ノ堅クテ色ノ赤ケレハ赤キカシテフ意ヨリ文字ヲ赤檮ト書玉ヘルナリ〔字鏡〕櫟和名以知比櫟梂和名以知比乃加佐ト見エタル〔枕册子〕オソロシケナルモノツルハミノカサ燒タル所云云ト書タルナト橡ナラテ加佐ト云ヘキモノナシクヌキノ實ハトンクリニテ今モツルハミトイフゾカシ　かゝる花もなき木ともは昔も今も山人ならてはよくしりたる人まれにて心々に思ひいひ古きものかたりにいちひと語りたるは後までもいち日とつたへくぬきと傳へてたえさるなり〔和名抄〕ニモ櫟和名以知比鉤樟和名久沼木マタ擧木和名久沼木日本紀私記云歷木ト別ニイタサレタリ　今はくく木ともかな木とも漢名イト多シ櫟橡柞栩杼櫪檞ナト皆クヌキナリ又今イチヰト云木アリ是ハ漢名水松ト云モノニテ大キナル異モノソ〔和名抄〕一柧音永漢語抄云左久乃木木可爲笏也トアルハコノイチヰノ事ナルヘシ

○桃樹㊆向峰爾、立有桃樹成哉等人曾耳言爲汝情勤　毛桃㊆波之吉也思、吾家乃毛桃本繁花耳開而不成在目八方㊉⑪ニモアリ　桃花㊈春花、紅爾保布、桃花、下照道爾出立𡢳嬬、ナホ一首アリ

○桑㊆足乳根乃、母之其業、桑尙願者衣示、著常云物乎、其葉桑尙ト云詞調ハス聞ユ文字ノ脱タル誤リタルナトアルヘシ契沖ハ桑ノ下ニ子字脱タルニテ桑子ナルヘシトイヘレト桑子ト云ハ桑木ニ己トマユ作ル蠶ノ事トキコユレハ是モヨシトモ思エス⑭筑波禰乃、爾比具波麻欲能伎奴波安禮杼云云

○合歡木花（ネムノハナ）㊇晝者咲、夜者戀宿、君耳將見哉、和氣佐倍爾見代、マタ一首アリ⑪ニモ一ウタアリ六帖ニコヽノウタトモヲカフカノ木ト入ラレタル惡シカフカトハ合歡ノ字音ヲ訛リテ後世ノサタナリ

○蝦手㊇吾屋戶爾、黃變（モミテル）蝦手、每見、妹乎懸管不戀日者無コレヲ毛美都加倍留傳トモ讀ヘケレト古ク加倍留傳ト云ナレタレハ毛美氏留加倍傳ト讀ムヘシ　加敝流氏⑭見毛知夜麻、和可加敝流氏能、毛美都麻氏、宿毛等和波毛布、汝波安杼可毛布　すへて草木の葉の秋にあひて赤くも黄にも色つ

きたるを毛美知といふを後ノ世ニ知ヲ濁リテ美治ト云ヘル心ナラヒニフルキ世ノ歌ヲモ毛美治ト吟ムハワロシスミテ毛美和ト云ヘシコノ集ノ歌トモ濁リテ讀ヘク書タル所一ツモ見エスマタ濁リテ云ヘキスチモナシ㊈云云毛美知遲良久波、常乎奈美許曾、コレハイトキハダケク清ミタルシルシ見ユかへての黄葉いとめてたけれは今かへてのまたの名のことくなりぬ中頃ヨリサルナラヒニヤアリケン〔俗草帋〕近頃藏人ノ君意馬ト云モノアリ好士ナリ鷄冠木ヲハモミチト存テ或所ニテモミチノ紅葉トヨミテ被笑云云毛美都とは麻曾保美大留てふことなりモミチノ照ト云事ハ㊇照如此曾毛美照ト正字ニ書ルヲ初メ今黄變(モミタス)ハモミテラス毛美多比ハモミテリアヒ毛美知里家利ハモミ照リタリケリ毛美都ハモミタネバト讀ヘシ㊇味酒三輪乃祝之、山照ス秋乃黄葉、散莫惜毛、コノ後ノ歌トモニモ紅葉ニ照ルト詠タルハ〔古今集〕秋下云云何カフ人ノ袖サヘソテル〔後撰集〕羇旅コノ末コトニ紅葉照セル〔拾遺集〕冬紅葉イト、照マサリケリ〔貫之集〕モミチ葉ハ照テ見ユレト足ヒキノ云云〔榮花物語〕御賀巻マユミノエモイハズテリテオシハリイテタルモ云云ナトイト多シ〔古今集〕雪フリテ年ノクレスル時ニコソツヒニモミチヌ松モ見エケレ此類末ニナリテイト多シ實ニハモミタスト云ヘキナリ〔萬葉考〕毛美治葉トハ萬曾保萬里出ル葉テフ事ナリ萬曾保ヲ毛ニ約メ萬利ヲ美ニ約メ出ヲ治ニ約メタリ其木ノ葉ニ含メル萬曾保ノ露霜ニアヒテ色ノアラハレ出ルナリト眞淵カ云ヘル萬曾保ハヨロシ出ト云タルハソロシ古キ歌ニ毛美頭留ト云事聞エス彼八ノ毛美照ヲ出ルノ借字トセンニモ出ルヲ頭留ト云ハ雅言傳留ト云ハイト俗語ニテ後ノ歌ニスラ詠マヌ事ソ其ウヘ末ヲ濁リテ毛美治毛美頭ナト書タル所一ツモナシカモ萬曾保出ト云ハ、コソ葉ノ中ヨリ萬曾保出事トモ聞エメ萬曾保萬利出ト云テハ本ヨリ葉ノ萬曾保萬利ツ、出ル事ニナリテ若葉ノモミチナラデハ合ハスコノ麻曾保ト云事ハ麻ハ美タル辭曾保ハ赤黃キ土ニテ㊆寄赤土ウタ山跡之、宇陀乃眞赤土左丹著、ナト集中ニ多コノ眞赤土ヲ麻波爾ト讀ハワロシ波爾ハ黃土ト書リ曾保ハ今モ田ナトニ水ノ赤ク染ルヲ曾凡トモ曾夫トモ云㊇衣手爾、水澁付左右殖之田乎、云云トアル美志夫ナリ大昔ハ曾保モテ物ノ色ヲ染シタリト思ユ曾保ト云ハ動カヌ語ナルヲ曾保マセ曾保マシ曾保マスト動カシテ其保ハ同韻ナレハ略キテ麻世ハ免麻志ハ美麻須ハ牟ト切レハ曾免曾美曾牟ト云ツ、ヤカテ曾保ナラヌ色々ノヲモ染メ染ムト云ヘルナリ今ノ紅ノ絹モ眞曾美ニテ麻曾ノ切リ毛ナレハ毛美ト云サテ物ノ曾牟ト志牟ト二ツアリ何レモ染字ニテカナフニヨリ混ル、事アリ曾牟ハ色ノ方ヨリ云ヒ志牟ハ汁ノ方ヨリ云フ物ヲ染ルハ汁ニシメ置ニヨリ曾牟トモ志牟トモ云ル、也サテモミツルト云事〔古今集〕戀五讀人不知、シクレツ、モミツルヨリモ、言ノ葉ノ心ノ秋ニ逢フソワヒシキ、ト云歌一哥アリコレハ木モミテルヨリモトアリシヲ傳ヘ誤リツルカ又其頃ヨリカ、ル筋モ亂レヌルカ古今集出來ツルコロハ早ク古キ意モヤ、ウセヌナリ

○母蘇(ハハソ)㊈山品之石田乃小野之、母蘇原、云云㊈長云云波播蘇葉乃、母能美己等云云(同)又同シツ、ケトモアリ

柏⑪秋柏、潤和川邊ノ細竹ノ目、云云(同)朝柏、閏八河邊之小竹之眼笑云云コレ等ハ枕詞ニ續ケタルナリ去レト意ハタシカニ思ヒ得ス

櫟柴⑫御獵鴈羽之小野之櫟柴之、奈禮波不益戀社益コノ櫟字ハ正シキイチヒノ漢名ニテ常ニイチヒニノミ書ナレタレト

コ、ハナラシハト讀マテハ語ツヽカス又借字ニハ(一)(十三)楢乃京師(四)楢山ナトカケリ

○安可良我之波(二十)正月七日云云肆宴歌、伊奈美野乃、安可良我之波波等伎安禮騰伎美乎安我毛布、登伎波左禰奈之 木の名はは丶そともならともまた葉をつかふ時にはかしはといふ然ルヲ奈良ト柏トハ皆人一ツ木ト知タレト波々曾ヲハ別木ノコトク思エタルハ然ラス奈良ニハ古ヘヨリ常ニ楢字ヲ書タルニ〔字鏡〕楢波波曾トアルモ其意ヲ得タルナリ 今も里人はかしはの木山人は奈羅の木は丶その木このわたりの山人は葉の大きにてかしはにするをは丶そ葉のちひさくて實のくはる丶をならといへり方名(クニノ)ニハホオサ大和伊勢ナトニハホソと云 あからかしははいろつきたるをいふとぞサレトヨシヤアシヤ知スマタ〔柏傳〕一赤ラ柏ハカシハノ若葉ノ時ヲ云ナリ云云天慶二年貫之家ノ哥合ニ仲多白雲ノ、ノリ積リタル、奧山ハ、アカラ柏モ、ウツモレニケリ、云云ト柏傳ニ云タレト若葉ヲ云ハ、冬ノ歌ニテ雪ニウツモルナト云事アラジ梓ヲ今赤芽カシハト云ヘハ梓ノコトニモ有ンカ ならの木くさ/\多くあれとこと/\くはしらすスヘテ漢名槲又槲櫟トモ樸樕トモサテ大方奈良ト云所ニハ楢字加志波ト云所ニハ柏字ヲ書ナレタレト柏ハカヘヤマキヤヒノキナトノ總名楢ハ櫪ノ又ノ名ナリ こいつ丶きにまた木なるこならをもいはん

○許奈良(十四)之母都家野、美可母乃伎麻能許奈良能須麻具波思兒呂波多賀家可母多牟 是は葉の小さくて彼方名(クニナ)にならといふのと同し様なる木のなほ小さきか栗のいかのことき物の出來て秋の頃わりて見れは中にむしの居るのなり漢名抱又ノ名ハ勃落樹コレヲ物ノ疎カル人ハ彼國名ニ云ナラト一ツ木ナルカ山ノ麓ヤ路ノカタヘニアリテ人ノ苅レハ木モ小サキナリト云ハ違ヘリ木ノ大キナルノニハイガ出來ズ

○橿實(九)長云云若草乃、大香有良武、橿實之、獨歟將宿云云ナツカシト云借字ハ橿トモイタセリ 白杜(シラカシ)我足(十)引山道不知白杜伎枝母等乎々爾雪落者コレヲ古クシラカシト讀來レリ〔後撰集〕雜三白カシノ、雪モ消スル、足引ノ山路ヲ誰カ、フミ迷フヘキ、ト詠ルモコノ歌ヲトリマタ〔拾遺集〕冬足引ノ山路モシラス、白カシノ、枝ニモ葉ニモ雪ノフレヽハ、トテ人麻呂トモ入ラレタリサレハ古ク白カシトハ讀來ツレトカシニ杜栈ト書ヘキヨシモナシコレハ〔和名抄〕栈牁臧牁二音漢語抄ニ云加之所以繫舟ト見エタルノニテ(七)舟盡(ハテン)、可志振立而廬利爲、云云(十五)大舟爾、可之布里多弖天ナトヨメル可志ナリ舟ノカシニテアルヲ橿ノ木ニ借リテ書タルカ後ニカク窮シ誤リタルナリサテ栈牁トアル文字ヲ考フルニ牁字ハ〔字彙〕ニ俗舸字トアリマタ栈ハ牂ノ誤リナリ〔集韻〕ニ牂資良切音將牂戕ハ橛也ト見ユ戕字ハ〔集韻〕ニ本作戕同牁トアリ又戕字ハ〔正字通〕ニ牁字之譌トアリ〔字典〕ニモ牂本當作牂從才ハ不從戈マタ〔正字通〕牂戕即牂牁郡名マタ〔前漢書〕地理志註師古曰牂牁繫船杙也トアリ、カヽレハ栈牁トハ書マシク牂牁又ハ牂戕ナト書ヘキナリ〔肥前風記〕一ニハ柞島郡云云、于時從船牂戕之穴云云ト書リ かしは橿櫧櫪ナト書

ケト實ノ漢名ハ橘木トイフ

頭注 戈弋之誤

おほかた二くさあり一ツは葉小さく木のいろ白くて實の味の甘ければ白かし叉あまかしとも アマカシト云事木ヲサシテ云タル事ハ聞エネト〔古事記〕師木玉垣宮殿垂仁在甜白檮之前マタ遠ツ飛鳥宮殿允恭於味白檮之言八十禍津日前ナト云事アリコレハ漢名甜櫧マタ麪櫧トモ云ヘリ 今一つは葉大きに木の色赤くて實あちなしすへて あら／＼しくあれは熊かしといへり 〔古事記〕師木玉垣宮母垂仁在甜白檮之前葉廣熊白檮マタ纒向之日代宮殿景行倭建命御歌久麻加志賀波袁宇受爾佐勢曾能古トモ見ユ漢名ハ苦櫧トモ血櫧トモ 今は赤かしとも 古へ、赤カシト云名ハ聞エス古事記ニアル赤檮ヲ赤カシト讀人アレト然ラス〔用明紀〕ニモ赤檮此云伊知毗ト見ユソノウヘ大昔ハ白カシト云名サヘナカリケレハニヤ〔古事記〕ニハ可之トノミ云ヘキ所ニ皆白檮ト二字書ケリ熊白檮(カシ)甜白檮(アマカシ)味白檮(アマカシ)ナト皆シカナリ白カシ赤カシト云名ノアラハ可之ニ檮トノミ書ケ白檮甜檮熊檮ト書ルヘキヲ檮之字一字ニテハ可之ノ木トモ定メズテカシハ大方色ノ白ケレハ白檮イチヒハ赤ケレハ赤檮ト定メラレタリト思ユ

〇黃楊 ㊈君無者、奈何身將裝、餝匣有、黃楊之小梳毛、將取跡毛不念、コノ外多シ つけ二種あり

庭にみる木の小さきをは今の名にひめつけ コノ漢名ヲ黃楊ト云コレハ木ノ小サク細ケレハ櫛ナトニスヘキ木ニアラス 木の大きにて櫛なとにするをは犬つけともやとめともいへり コノ漢名ハ柞木ト云フコノ柞木ノコトニ付テ和名鈔ニ誤レタル事有次ニ云云 いぬつけはもはらくしにすれば近江にはかしらけつり土佐にはかしらつかみ丹後にはけつりとそ國名ともにいへる是そ古へよりのつけなるへき 和名抄ノ誤リト云ハ木類ニ柞四聲字苑云柞和名由之漢語抄、云波々曾木名堪作梳也トアルハコノ漢語抄ノ波々曾モ順主ノ當ラレタル由之モ共ニ誤リナリ漢語抄ハ櫟ニモ柞ト云一名ノアリテ伊知比ノ木ナルヲ波々曾ニ思ヒタカヘルナリ順主ノハ柞木ハ都牙ノ木ナルヲ梳ノ事ヨリ思ヒタカヒテ由之ニ當ラレタリ由之ハ〔內藏式〕年中所造御梳三百六十六板云云皆用由之木マタ〔內匠式〕凡內記苛所請位記料赤木軸七板黃楊軸卅枚云云ナト見エタル赤木モ由之ノ事ト思シ後ニハユストモ云〔職人歌合〕タシヒキ如何ニセン逢コトカタキユスノ木ノ我ニヒカレヌ人ノ心ヲサテ今ハイストモ云テ櫛ニモ卷物ノ軸ニモス其ニ實ノ如キ物出來ルヲヒヨント云フシノ形シタルモノニテサケモノ、根付ニスナリユシノ木ノ漢名ハ蚊子木實ハ古度子彼和名抄ニヨリテ誤ル人多シ契沖ノ雜記ニモユシハ、ソヲ同シ物ニ心得タリ

〇阿部橘 ㊉吾妹子不相久、馬下乃、阿倍橘乃、蘿生左右、コレヲ阿辨橘ト濁リテ讀人アレトサハ讀マシキナリ

あへ橘はたちはなの一くさにて幾年も月日の來經にもあへ霜雪にもあへてあるものなれはしか名つけたるへし ⑱氣能己里能由伎爾安之倍流安之比奇之、夜麻多知波奈乎、都刀爾通彌許奈ト詠ル阿倍ト同シ意ナリコノ歌ハ久シキ事ヲイハントテ阿倍橘ヲ引出タルニテアヘ橘ノ去年モ今年モアリノヽテ實ニ苔ムスマテモ逢スト云意也 今はくねんほといふ 漢名ハ〔和名抄〕橙和名安倍太知波奈トアルノナリ此一種ニタイノヽト云モノアリ是モ年ヲ經テアルモノナレハ漢名ニモ回青橙ト云

○可頭乃木 ⑭阿之賀利乃、和乎可雞夜麻能、可頭乃木能、和乎可豆佐彌母可豆佐可受等母 可頭の木は 可治ノ木ナリト契沖カ云タレト可治ノ木ト云ハ中頃ヨリノ名ト思シ古ヘハモハラ多久トモ由布トモ云テ可治ト云フ事キコエス ぬりての木にやあらん 〔崇峻紀〕白膠木此云農利涅ト見エタリ ぬりてを今も山人は 東國ニテ 可都の木可知の木 越路ナトニテ 可都木なといふは可頭の木の訛りなるへし 可頭ト可都レトノ違ヒアレト古ト今語ノ淸濁リカハレル事イト多シ 今はぬりてゝふ事をも訛りて 備前美作ナトニテハ ぬりだ 美濃ニハ ぬで コレハ和名抄ニモ傳和名沼天トアリマタ尾張上總ナトニハ のでの木 コノワタリノ山人ハ ぬるだなといひなれり 今ノ世ナラテモ〔夫木集〕紅葉仲正海人ノスム、礒ノ山ヘヲ見ワタセハ、浪ニスルデノ紅葉シニケリ、 この木に秋になりて物の實のなれることくに蟲の巣の多く出來るをふしとも 〔貫之集〕唐衣スル名ニオル、フシノ山、コエン人コソ、カネテヲシケレ、是ニ實ノナレト實ト云ヘクモアラネバフシヲノミ實ノコトクニ云ナリ 中のうつろなるによりうつふしともいひすれる衣をうつふしそめといふ 〔遍照集〕世ヲイトヒ木ノ本コトニ立ヨリテ、ウツフシソメノアサノケサナリ、古今俳諧アサノキスナリ〔千載集〕俊頼朝臣長歌云云ウツフシソメノアサ衣、花ノ袂ニ立カヘテ云云 近き世のかちん染はかつの木の實にて染たれはかつみそめといひけむを後つひに カツミナラスヲモ かちん染といひなりぬめり 昔厩戸皇子ノ馬子宿禰ニ方人シテ守屋大連トイサカヒ玉ヒシ時ニコノ木ニテ四天皇ノ像ヲ作リ頂髪ニスヱテウケヒタマヒケルカ遂ニ打勝玉ヘリケレハ近キ世ニハソノユヱヨシニモ依ケンマタカツテフ語モヨケレハ軍ノ采配ノ柄ニハ必コノ木ヲツカフ事ニテ勝軍木トサヘ名ツケタルナリ

○由豆流波 ⑭安杼毛敝可、阿自久麻夜末乃、由豆流波乃、布敷麻留等伎爾、可是布可受可母、式ニモ弓弦葉ト云事所々ニ見ユコノユツルハテフ名ハ何ノヨシニ付タルニヤ知ラネト漢土ニモ楠久ノ名ハ交讓木ト云

○枳（カラタチ） ⑯枳（カラタチ）、棘原（ノウハラ）苅除曾氣、倉將立云云コノ歌カラタチノ中ハフ苅ソケト讀來レリ曾字ハ衍リニヤ曾字ナクテカリソケト

讀ヘキナリサテ㊄ニモ字萬良能字禮爾波保毓米乃トアリ伊勢物語
ニモムハラカラクチニカリテト有テウハラトカラタチトハ物二ツ
ナルニ枳ノウハラト云事ハ有マシケレハ四言ニ唐タチト讀ン歟六
言ニカラタチ花ト讀ン歟、サレト棘ヲウハラト云事モナク字ト
云テ原字ハ續クヘクモ非ス〔字鏡〕朿木乃伊良良トアレハ棘ト朿
ト通ハシ棘原二字ヲ伊良々トシテ枳ノイラ、苅ソケトヤ讀ンサレ
ト何レニテモ穩カニハ聞エス

まさしくはからたちばな〔字鏡〕枳唐立花トアリ　と
いふへきを略きてからたちといふ　今ハキコクト云マサシキ漢名ハ狗橘

○成（ナシ）　㊤成棗、寸三二粟飼ニ云云成ハ借字ニテ梨ナリカヘサマニ
有無ノ無ニハ六ナト止時梨ニト借リテ書リ㊥黄葉之、丹穗
日者繁、然柄、妻梨木乎、手折可佐寒、㊂露
霜聞、寒夕之秋風爾、黄葉爾來毛、妻梨之木者
つま梨は〔和名抄〕樆子和名夜末奈之なるへし　コノ外ニツマナシト云ヘキモノオホエス　今も山なしと
いひて山におほくあり秋は丹蘇のことくに黄葉する
ものなり　コレハ漢名鹿梨ト云物ノ中ノ一種ナリ前ノ歌ハ妻梨ノ
黄葉ノ取ワキテ好ニハアラネト妻ト云名ノナツカシキ
意ナリ次ノ歌ノ毛字ハ之字ノ誤リニヤコノ哥ハ露霜ノ寒夜ツ
マ梨ノ木ヲ思出テ詠ルト聞ユレハ黄葉爾來之ト有ヘク思ユ

○棗　㊤成棗（ナシナツメ）、云云㊂玉掃、苅來鎌麻
（呂、室乃木與、）棗下（カ）、可吉將掃爲

○兒手柏（コノテカシハ）　㊄奈良山乃、兒手柏之、兩面爾、左毛（カニモ）右毛（カクニモ）、佞人之友、㊄
知波乃奴乃、古乃弖加之波能、保々麻例等、阿夜爾加
奈之美、於枳弖他加枳奴、コノ他字
ハ和ノ書誤リニテ我ガ來スナルヘシ　何にかあらん思ひ〳〵
にいへとよくもあらす　〔能因哥枕〕カシハヲハヤヒラテト
云コノテカシハト云ト哥枕ニ云タ
レト何ノヨシモナシ今箱根山ノ兒手柏ト云ハ三ツ出ノ木ト云モノ
ナリマタ今ノフタオモテ漢名側柏ト云モノヲ兒手柏ニ定メタルハ
二面ト云ニヨリ奈良山乃々歌ニ引當タルニテ是モヨシナキ事ナリ
總テ加之波ト名付ルハ葉ノ廣ラカニテ敷葉ニスヘキノヲコソ云ヘ
今ノ二面ナトハイト細カナル葉ナレハ柏ト付ヘキモノニアラス案
フニ今ハ八ツ手ノ木ト云モノヤ兒手柏ナルヘキ是ハ春ノ若葉サシ
出ル頃ハ白クサ、ヤカニテ
兒ノ手ヲサシ上タル狀ナリ

○皂莢（サイカシ）　今ノ木ニ字ヲ葛莢ト書キ讀ヲ
フチノキト付タルヲ契沖カ
〔代匠記〕ニ葛莢ハ二字共ニ誤リニテ皂莢ナルヘシ和名抄葛類ノ
下ニ云皂莢造莢ニ音和名加波良布知此俗ニ云蛇結トアリテモト西
海子ト云木ナルヲ葛類ニ入ラレタルハ如何ナル意ニカト契沖ハ云
ヘリ古クフチノ木ト讀來ツルニ付ケテ和名抄ノ川原藤ニ思ヒ合シ
テ字ヲ皂莢ト改メタルヨロシ但シコノ皂莢ニフチノキト付ラレタ
ルハ心得スフチノ木ト云事物ニモ見エス和名抄ニ川原藤ニ誤リテ
皂莢ト云漢名ヲ付ラレタルニヨリ仙覺ナトヤフチノキトヨミ初メ
ケン川原藤ハ今モカハラフチトモ蛇結イハラトモ云テ藤ナトノ如
ク木立ノ蔓ナリ葉ハサイカシニテ大ナルカ四月頃黄ナル花穗ニナ
リテ咲キ其アトニ莢出ク漢名ハ雲實ト云モノナリ和名抄ニ誤リテ
漢名ヲ皂莢ト當ラレタルモ似タルモノナレハ理リナリ葛類ニ入タ
ル事ヲ契沖カイフカリツレト皂莢ト云漢名コソ木ナレ川原藤ハ木
ヨリ葛類ニ入ヘキモノナリマタ雲實ハ〔和名抄〕草類雲實一名天
豆和名波末佐々介トテ別條ニ出サレタリ濱サ、ケト云ハ何ニカア
ラン川原藤ノ一
名トモキコエス　㊅皂莢（サイカシ）爾、延於保登禮流（ハヒオホドレル）、屎葛絶事無（クソカツラタユルコトナク）

宮將爲（ミヤツカヘセン） 宮ノ下ニ仕字脱タルカ又宮ハ官ノ字ヲ誤リタルカ この歌をふちの木にと吟なれたれとふちのきといふ事のうたかはしけれはさいかしにとよまゝし是は後の世にいふ名にてあれと花のさまのかしの花によく似てさて莢の出來れはさやかしといふ意になつけたるにやとおもへはもとより古き名にもあるへしや 西海子ト書モ假字ニテ文字ニ意ナシ又皂莢ト云字音ノ轉リタルニヤト云人モアレトイト物ドホシ

○榎實（エノミ） ㊤吾門之、榎實利喫、百千鳥、千鳥者雖來、君曾不來座、エノ木ニ古ク榎字書タレト榎ハ楸ノ一名ニテエノ木ノ漢名ニアラスエノキノ漢名知ラス

○毛武爾禮 ㊤長云云此片山乃、毛武爾禮乎、五百枝波伎垂、天光夜、日之異爾千、佐比豆留夜、辛碓爾春庭立、碓子爾春、云云コノ波伎垂ト云事心得ス垂ハ來字ノ書誤ニテ剝來テニヤ もむてふ語は知らねと何にまれにれの木なり此木は皮ににれあるものなれはにれの木と名付たりこの皮の粉にしたるを古へは羹にも何にもいれて 〔正親司式〕楡皮一千枚別長一尺五寸廣四寸搗得粉二石枚別ニ合右楡皮年中雜御羹菜等料云云ナト多ク見ユ 今の葛の粉のことくにつかひつゝ山におふる木にてあれは是をは山にれ家近くつくる草にれをは家にれと呼て其も同しさまにて用ひけん 家ニレト云シハ今トロ、トロ、トハコノ草ノ皮ニトロ／＼ト滑ノアレハ名付タリ山芋ヲスリタルヲトロ、ト云モサネカツラヲ出雲ナトニテトロ、カツラト云モ同シ意ナリ草ニレヲ家ニレトハ何シニ云ツルト思ン歟〔和名抄〕兎葵和名以倍仁禮ト見エタレト兎葵ハ今ノ一リン草ニテ家ニレナト云ヘキモノニ非スサテ誤リニモ兎葵ト當ラレタル漢名ト家ニレト云名トヲ引合シテ考ルニ彼草ニレハ漢名黃蜀葵ト云モノナルカ生タチモ花モ葵ニヨク似テニレ多キ草ナリコレナラテ家ニレト云ヘキモノモ無レハカクハ思ヒヨリ定メツルナリ又先ニ云ツル山ニレハ〔和名抄〕楡和名夜仁禮トアレト夜仁禮トテハ何ノ事トモアラス彼家ニレニ對ヘテ思ヘハ夜末仁禮ノ末字ヲ書オトシタルナリ或人問テ云ク和名抄ノ夜仁禮ヲ末字脱タルナリト云レタレト字鏡ニモ楡也仁禮トアルハ如何ニト問タルニ答ツラク字鏡ノハ楡云云白粉也爾禮ト讀ヘキニテ上文ノ下ニツク也字ナリ下文ノ上ニツク也字ニハ非ス穀楮也加知乃木ヽタ杵舂也支彌トアルノナトノ也字ナルヲ疏ニ見テ楡ヲ也爾禮ト云モノソソトオモヒ誤ル人多シ 然るを今はさる事もたえて山にれ家にれもたゝ紙すくにれにのみつかふめり

○李 ㊆吾園之、李花可、庭爾落、波太禮能未、遺有可母

○都萬麻 ㊆過澁溪埼見巖上樹歌一首樹名都萬麻磯ノ上之、都萬麻乎見者根乎延而、年深有之、神佐備爾家里 つまゝは何ともさたかに知れる人なし 〔夫木集〕渟間々爲家夜ト共ニ浪ノユフコソ

カケツラメ、神サヒワタル、磯ノツマ、ニ、ト有モ全クコ、ノ歌ニヨリテ詠レタル歌ニテ何ノ木トハ知ラレサリケン契沖カ〔代匠記〕コノツマ、ト云木ハ北陸或ハ田舍ニノミアル木ナルヘシ其ユエハ松杉柳欅ナトノ如クナラハ見巖上都萬麻作哥トテドニ註アルヘカラス巖上樹ト云テ其下ニ名ヲ註セルハ巻十七ニ東風越俗東風謂之安由乃可是也マタ葦附水松之類ト註ヲ加ヘタル類ニ心得ヘシ云云ト契沖カ云ヘルヨク心付リサレト北陸或ハ田舍ニノミアル木ニヤト云ルハシカラス　思ふに澁溪されてふ所を船にてすきつゝはるかに岸の上を見やりて何の木そと問たらんに浦人ハ何所ニモカタ言ノミ云モノニテアレハ船人のよこなはりにつまゝと答たるを木のさまもつはらかに見えわかねは其まゝにつまゝと詠たるにてまことは三月ノ初ノコトナレハすをゝにやありけんかくいふもおし量りなり此歌ならてつまゝてふ事むかしも今も聞えす

○知智乃實　㊇長云云知智乃實乃、父能美許等、波々蘇葉乃、母能美己等云云㊃ニモ同シツ、ケアリ　ちゝの實はとちの實なり今も山深き里にはちゝといふ人多し〔仙覺抄〕チ、ノ木ハ葉似楊梅葉菓如胡黏子熟時色赤鴨好食之云云ト云ヘルモ何ノ木ト知ラス冠辭考チ、ノ實相模ノ菖根人ニ間ツルハチ、ノ實ハ知ラスチ、ノ木ハ今イチヤウト云木ヲ是カ老タルハ乳房ノ如キモノ、垂ルナレハ云ナラン云云其實ヲチ、ノ實ト云ンソ古キ語ナルヘキト眞淵ハ云ヘリ越路ノ童モチ、ノ實ト云是ハ實ヲ破レハ白キ乳ノコトキ汁ノ出レハ云ナリ然レトモ是ハ古キ意トモキコエスイト部ヒタリ葉をつかふものはは、そは實をとるものはちゝの實とそれかさまし、詠るなり

○柏カヘ　㊇長云云松柏乃、佐賀延伊麻佐彌、尊安我吉美　松竹なといふこそみやひひても聞ゆれ松かへとつゞくる事は唐ことはの習ひなり　唐ニテ松柏ト云柏字ハ一木ノ名ニ非スフタオモテノ側柏ヒノキノ扁柏イフキノ圓柏一名ハ檜柏ヒヤクシンノ刺柏ハヒヒヤクシンノ矮柏センシユノ佛手柏ナト皆常葉ナル木ナレハ松ニナラヘテ云ナリ　かへといふは〔和名抄〕榧子本草云柏實一名榧子和名加倍　今のかやなり〔貫之集〕カグトノミ、タノムカヒアリ、露霜ニ色カハリセヌカヘノヤシロカ〔六帖〕貫之色カヘスカヘノ葉ノミソ、秋ナレト、紅葉スル事、習ハサリケリ、松カヘノ常磐ニ似ヘキ、心カハ亂レンコトモアヤナカリケリ、ナトヨメル皆漢習ナリマタ論ラフニモ足ラネト新井白蛾〔牛馬問〕ト云物ニ柏ハ和名コノテカシハ又古訓ニカヘト云云古ノカヘノ訓ヲ誤リ榧字ト混スルモノアリ云云ト白蛾カ云ヘル更ニ古語古意ヲ知ラスヒカ言ソ漢籍ヨミノ徒カクノミ心得タルカ多ケレハ今コ、ニアバメタルナリ　またかへの一種に倍美といふものあり〔主計式〕麻子花欅柳油各五合海石榴呉桃閇美油各三合トアル閇美ナリ　今は倍辨ともへゞカヤトモ播磨ニハヒヾ大和伊勢ニハヘイベ東國ニハヘホ越中ニハヒウヒ越前ニハヒヨビトモ　犬かやともいふ漢名ハ粗榧　是は實をくふ事はなくて油をのみつかふな

りマタ名ハ同クテ〔和名抄〕椥云云閉美ト云ハ今モ丹波ノ國ニ倍美ノ木トテ有ト云リコレハ又ノ漢名ヲ靈壽木トテ唐ニテ杖ニスル木ナリ

○保寶我之波 ㊈吾勢故我、捧而持流、保寶我之婆安多可毛似加靑蓋マタ皇祖神之、遠御代三世波、射布折、酒飲等伊布曾此保寶我之波、前ノ哥ノ婆ハ波字ノ誤リナリ後ノ哥ノ字誤リ有テ心得カタシ ほゝの木なりかしはにすれは保々我之波ともいふなり〔六帖〕枕ノ題ミチノクノクリコマ山ノ、木々ノ木ノ、枕ハアレト君カ手枕、マタホヽノ木ノ机ナト云事物語トモニアリ〔字鏡〕厚朴保々加志波トアルヲ初メ今モ厚朴ト云リ然レトモマコトハ漢名浮爛羅勒

○波自 ㊉長云云可未能御代欲利波自由美乎多爾藝利母多之云云 波慈のちに波にしともいひて衣をするはさらなり〔和名抄〕染色具黄櫨和名波爾之トアルナリ然レトモ漢名サタカニ知レス漆ノ一種ナリ 紅葉のいろのいとうつくしけれは後の世にはし紅葉とてめてはやせり〔風雅集〕岡邊ナルハシノモミチ葉、色コクテ、四方ノ梢ソツユノ、シホ、コノ外イト多シ 今は山うるしとも〔神代紀〕天梔弓梔此云波茸音ハ之移反トアリテ梔字ヲ書タレト梔ハクチナシノコトニテ波茸ニハ思ヒモカケヌ字ナリ似タル字ニテ梔字ニテコソアルヘケレ文字ノ似タレハ思タカヘ玉ヘリケン

○之伎美 ㊉於久夜脈能、之伎美我波奈能、㊉㊈其等也、之久之久伎美爾故非和多利奈無又六帖ニ此哥ヲシキミノ花ノ名ノコトヤトアレトシキミノ花ノシ、ク、トコソ連クヘケレシキミノ花ノ名ノコトナト云ハ、末ノ世ノ、フリナリ此コロニサル續ケアル事ナシサテ思フニ六帖ナトノ異本ニヤアリケン又他ノ歌書ニヤアリケン今ハ忘レタルカ此歌ヲシキミノ花ノハナコトヤト書タルアリキハナコトヤトテハ何ノ事トモ聞エス最ワロケレトヨク思ヘハコレハちるをはなニ見マカヒ寫シタカヒタルニテ散ルコトヤナルヘシサテ知流其等也トスレハシキミノシク／＼トハ續カネト花ノヒマナク散コトクシク／＼ト云意コモリテカナヒヌヘクヤ

萬葉草木考

一册

西門蘭溪輯

萬葉草木考 開題

萬葉草木考は一名萬葉本艸ともいひ、萬葉集中の草木鳥獸蟲魚の類を解說したもので、未だ嘗て世に紹介せられたことはない。本書は西門蘭溪の輯錄で、その自序によれば天保九年春から同十二年に至つて成つたものである。

本大系の底本は、東京帝室博物館の藏本であつて、唯一の蘭溪の稿本である。底本は卷之一・卷之二の兩卷であるが、自序に「余臥病已久依將慰老境之閑」とあるのを以て察するに、恐らくこの兩卷を以て終つたものであらう。

蘭溪の祖父蘭齋(嘉合)は有栖川職仁親王に歌道を學び、父蘭庵(嘉鄕)又歌を好んだ由である(源安意の序による)。蘭溪又その道を好み、天保五年秋八月に更科日記を校訂し、天保九年十月に刊行してゐる。又蘭溪は嘉猷と號し、ノヽ主人とも稱した。

萬葉草木考

霞のよそに春山をのそみ、霧をへたてゝ秋の野を見やれは、草木に花のほの〴〵有とは思はるれと、それの草木これの花そとさたかにはしられぬわさになん有ける、いてや万葉集の歌の心詞遠き御代のことなりけれは、思ひはかりえかたきふしとも有りて、昔の人々はた近き頃にはさま〴〵のときことゝもしけるかあまたあなるを、草木鳥獸の類ひはさのみ入たち深くたとれるもあらねは、かの霞霧をへたてゝ野山みんこときもの有て、よくせすは思ひ誤り、甚しきは櫨の梨ならさることはしらす、あるは芋と羊とまきれけんたくひにもいたりて、歌の心をさへ思ひたかへるも有ぬへし、さるを我とも西門のぬしよ、おほち蘭齋ぬしは有栖川職仁親王の宮に歌の道學はれ、つき〴〵に父の蘭庵ぬしも其道をこのみ、さて万葉のかのときもたしたりけるふしとも考へ、をち〴〵其文に書入おかれたるか、そは百か一つにもあらさりしを、蘭溪ぬしその集に有とある草木鳥獸のことゝも唐に大和にあまたの文とも考へたつねて、ときてかきあらはして万葉草木考と名つけ、又そは唐國の本草のためしなりけれはとて万葉本草とも号けられたり、この文開きみれは霞たゝぬあした春山を見霧晴し夕秋のゝ見んことく、さま〴〵の草木花ともそれそかれそとつはらにしみゆれは、かのふかき意はよりて也けりとよまれたりし如く、歌のあはれもまたいとゝ深くなり行わさにこそあらめ、これかはしにこと書してよとこはれけるを、おのれかの父の蘭庵ぬしよりして、つきていと深くむつひかはしけるなれは、いなひもはてすつたなき筆とりさかなきことはかけるは、天保の十とせといふとしのむつき十日あまりになん

東軒のあるし源安意

自叙

墨子曰盡信書不如無書。宜乎哉。萬葉集之爲書也。諸樂御宇橘諸兄公之所撰。又自大伴家持卿集中所摘出也。愚謂此集之事未分明。雖然無先之者。則可謂我邦之古書。而如中華之詩經乎。其詩經注書頗多。鄭玄長萇或爾雅埤雅之類。皆有異同而難其實焉。近世京師松岡氏著名物詳解之書而駁之。抑我國自古雖解國風之義而不解名物之義。今倣松岡氏之意而解之者也。余臥病已久依將慰老境之閑。而及此事。是九牛之一毛。而謝先賢之驥尾云爾。于旹天保九年戊戌之春。余五十有三。在迎慶堂之中而始探毫。余寒筆硯傍置火爐。嘗知烏焉馬之誤筆畫亦不定。猶慥爲一笑之樂則老軀之幸也。自記以代序。

天保九戊戌春至同十二年辛丑歳

ノヽ主人西門蘭溪猷誌

凡例

一和哥ニ用ル文字誤レル多シ、中ニモ屮木禽獸ノ如キハ殊ニ甚シ、和字ニテカヽバ宜シキヲ、漢文ブリニカカントスルヨリアヤマレリ、又誤トシリテカヽンハ、宜シケレド、不知シテスギンハ本意ナシト思ヘバ、先此集ニアルヲ辨ゼリ、

一此書屮木考ト名付タレド、虫魚禽獸ヲモ出セリ元本屮ノ書トイフモ、屮ヲ本トシテ名ヅケタルニナラヘバ也、ヨテ一名ヲ万葉本屮トモイフベシ、

一初ニ辨疑ヲアゲ、次ニ名義ヲアゲ、次ニ異名ヲ擧タリ、本屮綱目ノ只名集解發明ナド、ワケタルニヨレリ、コヽニ主治

功能ヲイハザルハ和哥ニ用ナケレバ也、

一和名ハ順ノ和名抄輔仁ノ本艸和名ヲ本トセリ

漢名ハ時珍ノ本艸綱目陳淏子ノ我傳花鏡ヲ本トセリ

名義ハ新井氏ノ東雅松岡氏ノ名物詳解谷川氏ノ和訓栞ヲ本トセリ

一異名ハ八雲御抄藻塩艸藏玉集ヲ本トセリ

倚タラザルハ諸書ニヒロヒテ出セル也

一地名ノ象山川蜻島兎道ナド正字ナレド省ケリ

一冠辞ノ分ハ省シトセシガ、多ク艸木ノ事アレバ擧タリ

一詞ノ中ニ鶴寸小竹極ノルイハ省ケリ

一注又分書ニテモ本艸ニカヽリタルハ擧タリ

一万葉ノ注書古クアマタアレ圧多クハ哥ノ意斗ヲ注セレバコヽニ不引

因ニイフ尾崎氏曰仙覺ハ万葉ハヨロツノコトノハノ義季吟ハ万世ニツタフル集トイフ元ト万葉ノ字ハ文選顔延年曲水ノ序ニ揖世貽統固万葉注云葉代也詩傳曰葉世也史記魏世家曰萬滿也左傳曰萬盈數也葉歌義也契沖曰万十千也和語ニヨロヅトイフ物ノ足事也此心ニテ名ヅクルカ後々ノ集ニ金葉玉葉新葉ナドイヘルモ此集ニヨラレタルカトイヘリ

巻之一目録

巻之二目録

萬葉草木考 一名萬葉本草

西門蘭溪輯

○菜　○○兒

辨疑　和名抄園菜類曰蔓菁アヲナ 辛芥タカナ 温菘コホネ 葍オホネ ○蕣ナツナトアリテ菘ナシ本綱ニ菘アリ時珍曰菘白菜也
又牛肚菘紫菘ノ三種ニ分テリ貝原氏曰京ニ水ナアリハタ
ケナハ田舍ニテ京ナトイフ天王寺―葛西―近江―皆菘也
菘ハ蕪菁ニ似テ一類別物也三月開黄花滿地如金四月結子
爲油コレ今ノナ也谷川氏曰ハタケナハ菘也蕓薹ハ今ノ油
菜也又ミヅナアリ救荒野譜ノ水菜也蘭溪曰アヲナハ今ノ
カブラ也タカナハ一種コホネハ綱目葍ノ別名ニテ温菘ニ
全シ今ノダイコン也ナヅナハ又一種也本綱菜部五類ニワ
カチ抄ハ園菜水―野――分クレハ菜ハ惣名ナルベシ今ヤ
飯ノ加料ニサイトイフハ菜ノ音也サカナトイフモ酒菜也
魚ヲイフハ轉シタル也ベシ

名義　時珍曰凡草木之可茹者謂之菜素問云五穀爲養五菜爲
　克又字彙云菜蔬也歐陽氏曰菜從木從瓜トアリ谷川氏曰
ナハ嘗ムベキ物ヲイフトイヘリ

○加萬目―――立多都

辨キ　抄云鷗水鳥也又江鵞カモメトアリ本綱ニ鷗アリ集解
　曰鷗生江海形色如白鴻長喙長脚群飛曜日三月生卵ト云リ
　松岡氏曰大雅皃鷺章朱注曰鷺鷗也カモメ 埤雅云鷺者黑色
　好浮一名漚種類多シ南越志云江―一ニ海―トアリ蘭溪曰
　鷗ハ處ニヨリテ形カハレリ都鳥千鳥モコノ一種ナルベシ
　此二鳥後ニ出セリ

名キ　時珍曰鷗者浮水上輕様如漚也トアリ契沖曰續紀ニ鴨
　女トアレバ鴨ニツレテナル丶事男鴨ニ雌ノソフヤウナレ
　ハイフト云リ蘭溪曰紀ニ氈ヲオリカモト訓シテ毛裘ノ義
　トイヘリムレ反メナレバイフニヤ

異名　尺名ニ鷺又水鴞鷺者鳴声鴞者形似也トアリ躬恒集ニ
　砂ニニガフトリトアリ

○梓　―弓

辨キ　抄云梓アツサトアリ和名本草梓一名楸アヅサノキトアリ

花鏡
　一名木王林中有此樹諸木内拱ト出セリ本綱ニ梓アリ珍曰
梓有三種木理白者爲梓赤者爲楸梓之美文者爲梓楸之小者

爲榎諸家疏注殊欠分明桐亦名椅與此不全ト云リ松岡氏曰詩小辨ニ維桑與梓朱注梓楸之疎理白色而生子者トアルハ陸機ノ文ヲ引リ爾雅ハ梓楸混セリ梓ハアヅサ　アカメガシハ　ゴサイバ也楸キサヽゲ也黄克興藝林伐山トイフ書ニ柳係楸線ノ字アリ楸線ハ角ノ長キヲイフ梓線トイハ子ハ楸ニ角アル事證スベシ本草モ差互セリト云リ貝原氏曰梓アヅサ　カハラヒサギ　葉モ樹モ桐ニ似タリ實長クシテ紅豆ノ如ク又著ニ似タリ蘭溪曰右ノ說ニヨレハ梓ハアヅサ也或曰梓我國ニナシ唐土ハ梓ヲ板木トス我邦櫻ヲモテスコレ自然ニヨルトシルベシ又信濃ニ梓アリ我國梓弓ノ名古クアレバ梓木ナキニハアラシ尙考フベシ

名　尺名梓又作仔其義不詳新井氏曰アハ小也ツハ角也サハ細也其小角細長ヲイフ也小豆ヲアヅキト云ガ如シ

異　字書云木之王也故曰木王花鏡仝爾雅翼說文云椅梓也梓楸也楸檟也一名四物トセリ古ハ梓楸混ゼシナラン

○玉又珠　玉刻春　珠曾不拾

辨　抄白虎通云海出明珠私記云眞珠シラタマ　四聲字苑云玉寶石也シラタマ又云璞玉未理也アラタマ　トアリ小野氏曰玉ハ惣名ニテ白玉靑ー珊瑚馬腦宝石玻璨水精琉璃等アリト云リ蘭溪曰令義解ニ自然之物曰玉造作者曰珠トアルハ後ノ制ニテ元ハ山ヨリ出ルヲ玉海ヨリ出ルヲ珠トイフ也又此集ノ玉刻春ハ借字ニテ靈治波布ニ全ク魂ノ字ノ意ニテ解スベシ又玉襷玉葛玉松ナドハ稱美ノ詞也凡テ浦々ニタマヲヨムハ貝ノ珠ニテ今ノ眞珠也

名　字彙曰古作王三画皆均自秦更隷始加點々在下画之傍者宝玉字也點在中画之傍者玉工也又玉音粟琢玉工也トアリ韻鏡大成曰タマハタカラマルキノ畧語也トイヘリ

異　抄云球琳　琅玕　琨瑤　琥琰　皆美玉名也小野氏曰叓物異名ニ龍輔　懸黎　齒老溫　事林廣記ニ崐山トアリ

○馬　ー數而

辨　抄云馬南方火畜也ムマ　爾雅云牝馬又騲ーメニ　牡ー又駿ーヲマ　漢語抄云駿トキムマ　スグレタルムマ　駑又駘オゾキムマ　トアリ本綱ニ馬アリ珍曰大祇以西北方者爲勝東南者劣弱不及馬應月故十二月而王其年以齒別之在畜屬火○辰屬午又牡ー曰騭曰見牝ー曰騇曰課曰草一歲曰馬二歲曰駒三歲曰騑四歲曰駣名声甚多見爾雅說文畧之

名　說文曰馬武也其字象頭髮足尾之形契沖曰ウマハ美ノ義也

異　白孔六帖ニ曳練勺會ニ翠黃詩經ニ駓牝トアリ言塵集ニウカベルタモ紫ノツバメトアリ此集ニタツノマトアリ

○草　眞—深野

辨　抄云艸百卉總名也又作艸本作卉クサトアリ字彙云艸百卉之惣名俗用草非說文云櫟實可以染帛爲黑色故曰草今俗以此爲艸木之艸別作阜爲黑色阜愚謂艸草二字經史通用久不可改也本綱珍曰天造地化而艸木生剛交于柔而成根荄柔交于剛而成幹枝葉蔓屬陽華實屬陰トイヘリ蘭溪曰紀ニ生艸ノ祖艸野(カヤ)姫式ニ陸奥萱(クサ)野神社中臣祓ニ草ノカキハアリカヤクサ通用セリ

名　契沖曰クサハ雜々ノ義青人草民ノ草葉ナト喩ルニ全シ谷川氏曰クサハ年毎ニ朽腐ルモノナレバ也又カヤトモイフ後ニ一種ノ名トナレリ俗ニキノミカヤノマトイフモ草木ヲナラヘタル也

異　烟叢　柔苗　芳薈ナト詩賦ニイヘリ八雲抄サイタツマ後撰ニ草ノイトヽイフハ詩ニ草縷トアル也

○奴要子鳥　｜｜｜｜｜占歎居

辨　抄三鵼恠鳥也ヌヱトアリ谷川氏曰字鏡ニ鵺ノ字アリ繪禽經鵺小鳥也其声如兒叫クルシゲナル声也又鶌チヨムトイヘリ貝原氏曰和品也今鬼ツグミトイフ物ニテ常ノツグミニ三倍セリ星多シ山中ニアリトイヘリ蘭溪曰三位賴政ノ射タリトイフハ此鳥ニ聲ノ似タレハ也或曰賴政ノ射タリシハ黑眚(シイ)ノ類也トイヘリ

○鹽　燒　乃　潮毛可奈比奴

辨　抄云—有九種白—人所食也崔禹錫食經云石—又白—又有黑—(白ハアハシホ黑ハキタシホ)トアリ本綱ニ食—戎—光明—ノ三種アリ珍曰海—井—池—鹻—崖—皆食—也又有苦—散—形—飴—又石—生于石木—生于樹蓬—生于草造物主化之玅誠難殫知也ト云リ貝原氏曰我邦ニハ海—鹻—ノミ也蘭溪曰抄ニ潮又作淖ウシホトアリ字書曰潮者地之喘息也隨月消長早曰潮脫曰汐所以應月者從其類也トアリ海ニアルハ潮ヤキタルハ塩也抄ニシホウシホトワケタレト本仝語也

名　梅氏曰鹽鹾仝郊特性云塩諸利使人歆鹾於利也谷川氏曰シホハ白穗ノ義ウシホ海シホノ義也

異　鶴林玉露ニ洗和トアリ今ノ世宦家ニテハシロモノトイヘリ

○溫湯　幸伊與ーー宮

辨　抄云溫泉ユトアリ本綱ニ溫湯アリ珍曰下有琉黃卽令水熱又朱砂泉礬石泉有砒石處有毒トイヘリ　溫湯ハ此邦ニモアマタアリ景行紀溫湯宮ニ行幸ノ事五度風土記ニモ出セリ貝原氏曰攝州有馬豫州道後信州草津上州伊香保相州熱海ハ名湯也多クハ琉黃氣アリ有馬ノ湯ニハ塩アリトイヘリ蘭溪曰相州筥根山中ニ七湯アリ大江戸ヨリ近ケレハ行人多シ

名　谷川氏曰ユハ清潔ノ義齋ノ義也湧出ル故ニイテユトイフ硫黃ヲユワウトイフモユノアワノ義也

○班鳩　ーー此米二鳥

辨　抄云鶍貟似鴿而白喙也兼名花云班鳩背大尾短者也イカルガトアリ本綱ニ桑鳸アリ珍曰大如鴝鵒蒼褐色有黃班点好食粟稻詩云交々桑鳸是也其背喙微曲而厚壯光瑩或淺黃淺白鳸類有九種爾雅云春夏秋冬桑棘行宵老是矣今俗畜其雛教作戲舞トアリ松岡氏曰イカルガ　マメマワシ珍曰桑鳸乃鳸之在桑間者其背或淡白如脂或凝黃如蠟故名竊脂今閲スルニ實ニ粟黍ヲ好テ食シ嘴凝黃也貝原氏曰桑鳸ハ淺黑色嘴大ニシテ黃色或背ノ色カハルモアリ蘭溪曰推古紀與宮室於班鳩今南都法隆寺ハ古ノ班鳩寺也トイフ又著聞集廿卷二條定高公イカルガヲ定隆卿ハ贈ルニイカルガヤマメウマシトハタレモサゾヒチリコキトハ何ヲ鳴ラントアレバマメマワシトイフハ俗名ニテマメウマシ古名ナルベシ再按ニ桑鳸ハマメウマシニテ班鳩ハツチクレバト也

名　尺名曰鳸扈仝止也トアリ和名ハ辨義ニ出セリ

異　爾雅ニ竊脂璞曰青雀蠟背鳥トモイフトアリ

○此米　一本作比米　班鳩ーー二鳥

辨　抄切韻云鴲シメ小青雀也又切韻云鶍ヒメ白喙鳥也トアリ新井氏曰下學集鶍イカルカ豆甘鳥也鴲ヒメトアリ今カハラヒハトイフニテイカルガノ如クニテ小也故ニヒメノ名アルカトイヘリ貝原氏曰和品ニテカハラヒハナリ頰ト腹ト尾上黃也背ト翅ハ黑黃マジレリ背小也マヒハトモイフ粟稈ヲ食ストハアレトヒメノ名ハアゲス松岡氏曰三才圖會ニ鐵背アリ此亦鳸類今シメト呼物是也トイヘリ蘭溪

曰今字書ヲミルニ鴿ハ鶺鴒也鵲小青雀也トアレバシメノ
方ナルベシヒメノ名ハ覺束ナシ尙後考ヲ待ノミ

○稻　掛一穗養之

辨　𡈽本和名抄云稻イネ早一ワセ晩一ヒネ稌秔稻也穗亦作
禾ホ禾未成秀也類カヒ禾穀末也芒或作秖ノギ禾穗也トア
リ本綱ニ稻珍曰稻稌者秔糯之總稱恭曰稻者穬穀之通名字
彙曰稻水田所種穀也爾雅翼曰有粘不粘今人以粘爲糯不粘
者爲秔一種有秈其種甚早号秈爲早稻粳爲晩稻トアリ松岡
氏曰詩ニ十月穫稻ミクサ　イネ稻ハ秔稻惣名也品覽ニ稻孫ア
リヒツチボ也稻之余氣也抄ニ穭ノ字ヲ用ユ非也トイヘリ
蘭溪曰江次第刈本謂之稻切穗謂之頴トアリ

名　尺名曰稻從舀家人在臼上治稻之義谷川氏曰イ子ハ飯根
ノ義ホハ火ヨリ轉セリ出初メハ赤シヨテイフ也

異　本綱ニ稌又糯又粳トアリ藏玉集トミクサ祕藏抄ドロミ
紀ニシ子

○美草　刈萱

辨　眞草トイヘニ全シヶ秋ノ百草也ト諸說ニイヘリ本居氏
曰貞觀式大嘗會條云黑酒ト云以美草餝之延喜式ニ全シ然

レハ必一種ノ草ノ名ニシテス丶キヲイヒナラヘル也ヘシ
新勅撰集此哥ヲ引テヲバナカリフキト出セリ蘭溪曰第八
ニ草花ヲヲバナトヨメレバ此美草モヲバナトヨムベキニ
ヤ

○可新　五可新之本

辨　抄云橿万年木也爾雅杻又檍カシトアリ谷川氏曰紀ニハ
橿又檮ヲ曰メリ後世樫ノ字ヲツクルニ合字也中山傳信錄
ノ羅漢松也ベシ　櫧モ全シ赤カシハ血櫧白カシハ甜櫧也
ウブメガシハト一小一犬一アリ字鏡ニ核ヲ水カシノ木ト
ヨメリトイヘリ貝原氏曰櫧ニ赤白二種アリカシノキ又カ
タキ𣏐イフトイヘリ本綱珍曰大者數抱高二三丈葉長大如
栗葉稍尖而厚堅光澤鉅齒峭利凌冬不凋三四月開白花成穗
如栗花結實大如槲子外有小苞霜後苞裂子墜大如菩提子又
甜櫧粒小木文細白俗名麪又名鈎栗又苦櫧粒大木文粗赤俗
名血櫧其色黑者名鐵櫧トイヘリ蘭溪曰新井氏ハ爾雅ヲ引
テ檀杻檍一木也トイフ抄モ誤レリ杻ノルイハアヲキノル
イ也櫧ノ字正シカランヽ六帖ニハカシカタカシト分テン
トカタカシハ堅香子ニテ今ノカタクリ也末ニ出セリ又コヽ

ニイツカシトイフハ嚴ノ字ニテホメテイフ也岡部氏曰椎
ノ子ナドハ集リテムスブヲカシノミハ一ツ箇ナル故ニヒ
トリト冠ラセタリトイヘリ
名　カシハ堅キ也ト古クイヘリ新井氏曰古ヘカシトイフハ
赤キ也又杻ヲテカシ械ヲアシカシトイフモ此木ヲ用ルヨ
リ也トイヘリ
○松　小松下乃
辨　抄云漢書ニ樹以青松或五德或十八公マツトアリ花鏡云
松爲百木之長兩鬣三鬣而細者常松也五鬣大鬣爲一朶葉者
栝子松也又有赤松白松鹿尾之異本綱珍曰松樹硯砢䦪多節
其皮廉厚有鱗形其葉後凋二三月抽蕤生花爲松黃結實狀如
猪心疊成鱗砌秋老則子長鱗裂然葉有二針三針之別三針者
爲栝子松五針爲松子松ト云リ松岡氏曰小雅如松之茂トア
リテ落葉松聚幹松塔松ノルイアリ一種俗ニカラマツ又テ
ウセンマツトモ云トイヘリ貝原氏曰松ニ雌雄アリ西國ニハ
雄松多キ故茯苓多ク畿内ニハ雌松多キ故松蕈多シトイヘ
リ谷川氏曰雄松ヲ黑松雌松ヲ赤松トイフトアリ蘭溪曰松
カサチヽリトモイフ松卵松毬也マツノミアリ松子也松ホド
アリ茯苔也松タケアリ松蕈也松ノコケアリ松蘿也松ノホ
ヤアリ松寄生也本草和名松脂ヲマツノヤニトイフ也
名　尺名安石字說曰松柏爲百木之長松猶公也故從公ト出セ
リ谷川氏曰マツハモツト通シテ久キヲ持ノ義也契沖師ハ
此集アマタ待ニヨセテヨメレハ千年ヲフル物ニテ行末ヲ
マツ心ニ名付タルカトイヘリ
異　蒼髯十八公龍鱗等ノ名アリ　藏玉抄常盤草豐千代草□虫損
草等アマタアリ
○虚蟬　ーー毛
辨　冠辭考ニ出セレバ略セリ　蟬ノ義末ニ出セリ
○花　春山万ー之艶
辨　抄云木謂之華草謂之榮々而不實謂之英切韻ニ葩ハナビラ
蕚ハナブサ蘂シベト出セリ字彙云花草木之葩也俗作苍又華
與花仝トアリ谷川氏曰花ハ春化ノ義ニヤ紀ニ春ヲ花時ト
ヨメリトアリ契沖曰ハナハ始ヲイヘバ實ニノゾメテイフ
鼻ノ字ヲハナ又ハジメトモヨムニテ思フベシトイヘリ蘭
溪曰花ハ草ニマレ木ニマレイフ名也我邦古今集已來櫻ヲ
花トノミイヒ習ハセリ唐ノ世牡丹ヲ花王ト稱セリ我邦ニ

テ花王トイフハ櫻也扨唐土ニハ櫻ナシ唐詩ニ山櫻トツクレルハ櫻桃也ユスラウメトイフ也今櫻ノ字ヲ用ルハ借テカケル也（但櫻ノ部可見）

○葉　秋山千—之彩

辨　抄切韻云葉草木之敷蘂被者也トアリ谷川氏曰ヒラ反ハ也葉手ヲヒラデ千葉ヲチヒラトヨメリ

○鳥—毛來鳴奴

辨　抄引爾雅云二足而羽曰禽一説飛曰鳥走曰獸總謂之禽トリトアリ本綱珍曰師曠禽經云羽虫三百六十毛協四呰色合五色山禽岩棲原—林處林—朝嘲水—夜啾山—咮短而尾修水—咮長而尾短トアリ谷川氏曰トリハ飛集ルノ義契沖曰人ノトリテカヒモスレバ捕ノ義ニヤトイヘリ蘭溪曰坂鳥アリ朝々山坂ヲコスヲイフ淵鳥ハスニアル放鳥ハカヒオキシヲハナツヲイフ也

○木並樹　秋山ノ、葉　樹押靡

辨　本綱珍曰木乃植物五行之一性有土宜山谷原濕肇由氣化受質分爲六類香—喬—灌—寓—苞—雜—トアリ字彙云○從草下象其根本性上枝旁引一尺下根亦引一尺故於上下均也直從—俗作—者任筆勢也相沿月久又曰樹植木之名トアリ契沖曰樹木ヲヨムハ生ノ義生ニ繁茂スルヲイフ又キヲ晉ハキトイフ素盞烏尊身ノ毛ヲ抜テ投タマヘルガサマザマノ木トナル也トイヘリ

異　八雲御抄ニクヽダチ　木ノ生ハジメノ名也俊頼抄ヤマテモノ木ノ名トイヘリ

○黄葉幷紅葉　——乎婆

辨　抄云雞冠本（カヘルデノキ）又雞頭樹（カヘルデノキ　今按一木名也ト）アリコレ今ノカヘデノ根ナガラ出處不詳貝原氏ハ機樹ヲアテヽ楓ハ別物也トテ今モミヂトイフハ秋染ル木ノ惣名ニテ一木ニアラズ和俗艳ノ字ヲカクハ二合字也トイヘリ蘭溪曰紅葉ハコク染ル也黄葉ハウスキ也サレド此集紅葉トカク事只一處也又楓ヲヨムモ誤レリ　抄ニモ楓ヲカツラトアリ本綱ニ楓香脂アリ説文解字云漢宮殿中多植之經霜後葉丹可愛トアレド今ノカエデナリヤイナヤ扨一木ニイフ卄ハカエデ衆木ニイフ卄ハ紅葉也（余異考録ニ委シク辨セリ）

名　珍曰楓樹枝弱善搖故字從楓トアリ岡部氏曰モミヂバト

ヨム正訓也モト土丹土美(マツホ)出葉テフ事也マハ眞也ソホハ丹土也赭也此集アケノ―小舟アリ又サニヌリ小舟ノサハソホノ約語ノ轉ニテノホ舟也ソホミノミナマリノ約トイフハ赤ミ黑ミヲ赤マリ黑マリトイフルイ也チハ出ルヲ畧キ轉セリモノ一言ヲマソホトイフハマソノ約モマホノ畧モ共ニモノ一言トナル也數言ヲ約メテ一言ニイフハ記ニツリバリヲチトイフルイ也又イロフミトイフ詞モアリソホマリノ約タルニテ其始ノ眞丹土ヲ衣ニスリシヨリノ名ナルヲ思ヘ今紅絹ヲモミトイフモシカ也谷川氏曰モミヅルトヨメバ詞ヲ体ニシテモミヂトイフ也蘭溪曰此集蝦手トアリテカヘルデトヨメリコハ楓又ハ機樹ヲイフニテモミヂトイフハ染ル木ナスベテイフナルベキニヤ

異　本綱楓香又白膠香又爾雅楓爲攝トアリ藏玉集ニ色是草妻意草錦草立田草ノ名アリ

○酒　味―三輪

辨　抄云酒サケ五穀之華味之主也故能益人亦能損人又神酒日本私紀和語曰美和トアリ字彙曰儀狄作酒醪杜康作秫酒易詩書ノ三書ニ酒トアリ活法曰酒者天之美祿帝王所以頤養天下享祀祈福扶老交歡百福非酒不行本綱引飲膳標題云清者曰釀濁者曰盎厚曰醇薄曰醨重釀曰酎一宿曰醴又宋ノ竇革ノ酒譜アリトイヘリ日本紀崇神時以活日爲祭三輪大神之掌酒之時神酒祭大神所獻天皇于時有宴諸臣歌曰ウマザケミワノトノヽ又大物主ノカミニミキトモアリ

名　說文云酒就也所以就人之善惡也酒字篆文象酒在卣中之狀一日造也吉凶所造化也尺名云酒蹴也入口咽之皆蹴其面ト字書ニアリ谷川氏曰サケハ榮エノ義カエ反ケ也ノメバワラヒサカエ樂ムノ義又ミキハ酒ヲ通ハシイフ也契沖曰ミキハ御酒也ミトマトハホムル也白酒黑酒トモイヘバキノ一字酒也

異　竹葉　忠愛青州從吏　平原督郵　聖清　濁賢　下若春蟻寸ノ唐土ニイヘリ八雲抄ナガルヽカスミ　タケノハトアリ

○青丹　―――吉

辨　抄云黃細密曰埴ハニトアリ字彙云埴說文粘土也禹貢ニ厥土赤埴墳周有團埴之土トイヘリ袖中抄云昔奈良坂ニ青キ土ノ有ケルヨリ夫ヲユガク丹ニツカヒケルヨリ也倚部

氏曰アヲニハヤヲニト全シ語ニテハ百ハ彌百ノイヲ省キアヲノアヲ延レバイヤトナル也サレバ彌ハ百平(ナラ)ストカヽル青ハ與ニテシハ助語也丹ハ借字ニテニハ土ノ古語也又ニハホノ古語也

名　古ヘ土ヲ二トイフ後世ツチトイフ谷川氏曰丹ヲサル則其義也丹ハ元丹青ノ惣名瓊ヲヨムモ丹ノ義也埴ヲヨムハ子バニノ畧也扨ツチハイヅクマデモツヾクノ義ツチ反チ也

〇榛　狹野　乃

辨　抄ニ榛栗ハシバミトアリテ榛ヲアケズ字彙云榛神木叢生貞又樹高丈許子如小栗トアリテ今ノハギノ義ミエズ岡部氏曰榛ハ今ノハギノ借字ニテ狹ハ發語野萩也且榛ト芽子ヲ分タントナラバ榛ハ木ハギ芽子ハ草ハギ也トイヘリ加藤氏曰集中芽子トカケル百有余皆花ノ咲タルニテ鹿ナドヨミ合セリ榛又針トカケル三十余首花ヲヨメルハナシサレバ榛ハ萩ニアラズハリト訓シテ俗ニハンノキトイフ物也此木ノ皮ニテスレバヨクウツル古ハ摺染ニセシナルヘシ契沖本居兩氏モ同シ蘭溪曰榿木名ト字書ニアリ貝原氏引宋祁方物畧記曰榿民家蒔之不三年材可倍當薪之疾種遂取里人以爲利杜甫蘇軾ナド榿木ト詩ニツクレリ山州江州ニ多シ田ノアゼニウヽル榛ニ似タリトイヘリカクアレバ古ヘ榿ノ字ナク榛ノ字ヲカリテカキシナランヨテ本綱ニナシ（侚芽子ノ處可見）

名　字彙云禮記鄭注關中鄜坊甚多其字從秦又爾雅女贄用榛以告虔也有臻至之義蘭溪曰枝ニハリアレバイフ也

〇茜草　ー｜｜指

辨　抄云茜可以染緋者也（アカネ）本綱茜草弘景曰此即今染絳也史記千畝卮茜與千戶侯等花鏡云｜｜多生山上染絳之草葉靑似棗秋開花結實如小椒根赤紫赤色說文云人血所生也トアリ松岡氏曰鄭風茹藘在阪朱注茹芦茅蒐也可以染絳也（アカネ）今野徑郊原ニアリ蔓生葉ハ棗ニ似テ四葉一節ニアツマリ生ス葉ニ勒(カヘリ)アリトイヘリ岡部氏曰コハ借字ニテカネ反キ也□□（不明）ムレバアケ延テアカ子トイフ則赤キ氣也ト今アカネ染トイフアリ紫モ赤クニホフ物ナレバツヾケシ也トイヘリ

名　尺名曰東方有而少不如西方多則茜草爲茜トアリ蘭溪曰

アカネハ赤ヲソムル根トイフ也

異　詩經ニ茹藘花鏡ニ俗名地血斉人謂之蒨草又茅蒐トアリ

○紫草　――之白妹

辨　抄紫草ムラサキトアリ本綱ニ――アリ珍曰――三月逐壟下子九月子熟時刈草末花時采則根色鮮明花鏡ニ――基赤節青二月開花紫白色結實下白惟根色紫可以染紫亙沙地而不喜水トアリ蘭溪曰源語ニ紫ノハヒオクレテトアリ又紫ハ灰サスモノゾ椿市ノトヨメルニハ椿ノ灰ヲサシテ此草ノ根ヲクダキ染ル也―ノユカリハ古今集ノ歌ニヨレリ四位已上ハ紫四位ハ薄紫三位ハ濃紫也我邦紫ヲ尊ヘリ異朝ハ褻ノ服ナリシカ李唐已來紫爲貴トイヘリ字書ニ紫ハ黑赤間色也トテ五色ノ外ナレハ上古ハイヤシメシ也

名　珍曰此草花紫根紫可以染故名谷川氏曰ムラサキハ荒唉ノ義花ヲモテ名付タリ

異　廣雅ニ　茈莀　紫丹　爾雅ニ　藐　又鴉銜草

○麻　打麻乎　麻積王

辨　抄云麻枲屬也アサ爾雅枲麻無子者也ケムシ苧麻屬白而細者也カラハシトアリ本綱ニ大麻アリ珍曰大麻今白麻也割麻牧子有雌有雄々者爲枲雌者爲苴大科如油麻葉狹而長五六月開細黃花成穗隨而結實大如胡荽子可取油剝其皮作麻其稭白而有稜輕虛可爲燭心擨呉普說則麻勃是花麻蕡是實麻仁是實中仁也トアリ松岡氏曰詩經丘中有麻注云麻穀名子可食皮可績爲布者アサミアサハ蕡也ハナアササクラアサハ枲也杜麻也トイヘリ蘭溪曰古語拾遺ニ好麻之所生故謂之總國注云麻古謂之總依爲二總之冠辞トアリ今按ニアサハ大麻也マヲハ苧麻也生シタルマヽヲアササキタルヲヲトモソトモイフ也岡部氏曰打麻トハウツクシキアサトイフ也一説アハソヘタル也

名　尺名云麻從象兩木在麻下象屋下派麻之形也谷川氏曰アサハ淺キ義也一説青割ノ義白縡ニムカヘタル也ヲトイフハ元陽ノ字ニテ長キ義也又ソトハ麻ヲサキテ用ル詞也トアリ

異　火麻　黃麻ノ字尺名ニ出セリ

○藻　珠―刈麻須　玉―刈食

辨　抄云藻水菜也モ　モハ食經云沈者曰―浮者曰蘋トアリ本綱ニ―アリ珍曰―有二種葉長二三寸而々對主卽馬―也葉細如絲及魚鰓狀節々連主卽水蘊也ト云リ松岡氏曰詩周南

子以來藻ー八聚ー大葉ー品ー數種アリ有葉無葉ノ別アリトイヘリ蘭溪曰此集伊都藻之花トアル伊津ハ賞辭ニテ五百津也多ク生スルモ也扨水雲ハモヅク江浦草ハツクモ鹿角菜ハヒヅキモ皆ー也凡テ水中ニ在テ可食モノヽ惣名也ベシ

名　尺名曰ー乃水中之有文者潔淨如澡浴故名谷川氏曰モハモヽシゲキヨリイフ也玉ハホメテイヘリ

○妙又栲　白ー乃

辨　妙ハ借字ニテ栲トカクモ誤レリ妙ニ栲ナシ詩唐風南山有栲注ニ山樗爲栲トアリテ今ノカラスノサシセウトイフ木也サレバ柠ノ字ノ誤リナラン抄云楮穀木也又穀カヂ木名也トアリ今俗ニ梶ノ字ヲ用ユ梶ハ酒器也又柁ノ字トスレド舟ノカヂニテアタラズ皆全訓ユヱカリシナラン松岡氏曰爾雅其下惟穀カヂカウゾ葉有辨キレ曰栲無辨曰構皮班者楮皮白者穀ト多識篇ニ出セリ本注楮惡木也トアルハ古ヘ紙ナク大徑アル事ヲシラザリシ也トイヘリ本綱ニ楮又柠トアリ珍曰說文ニ楮穀一種唯辨雌雄耳雄者皮班而葉無椏又三月開花成長穗如柳花狀不結實雌者皮白而葉有椏又亦開碎花結實似楊梅二種並易生葉多澁宅○皮搗煑造紙亦徭練爲帛不堅易朽ト云リ岡部氏曰考德紀其葬時帳トハリ帷惟用白布庶人可用麁布アラタヘ令義解賜柠者細布トアレバ布ヲタヘトイフ也古語拾遺ニ植穀造白和幣ニキテ植麻造青和幣神祇令ニ明多ル閇照多閇又和多閇荒多閇ナドアレバ白タヘハ穀ノ皮ニテ造ルナルベシ夫ヨリ絹布ヲモスベテイフ名トハナリタリ白細トモカクハ白細布ヲ畧セル也

名　尺名云楮本作柠其皮可績爲紵故也野人呼乳爲穀○木中白如乳故名谷川氏曰タヘハ白キ色ヲホメテイフ也

異　詩疏ニ穀桑　又穀　又構

○樛　ー木乃　刀我乃樹

辨　貝原氏曰トガハ和品ニテ葉ハモミノ如ク細ニテ葉兩ニワカル栂ノ字ヲ用ヒ來レドモ出處不詳トアリ岡部氏曰山城ニテトガトイヒ田舍ニテツガトイフ樅ノルイニテ古ヘ別ニ名ナシヨテ抄ニモ之ヲ出セリコヽニツガトイフハツゲナランツゲハ抄ニ黃楊ト出セリ樛木トアルハ俗ニ犬ツゲビンガドモイヒテ木モ枝モマガレル木也ヨテツガトイフトイヘリ蘭溪曰詩ノ周南ニ南有樛木トイフ樛ハ木枝曲垂

也ト注セレバ此字ヲカリシ也ベシ扱黄楊ハツゲ蘩子木ハ大ツゲ也今奴柘ヲ犬ツゲトイフハアタラズ

○手向草　濱松之枝――――

辨　仙覺抄詞林采葉抄此哥ヲ引テ―――ハサガリゴケ也トアリ藏玉集ニハ松ノ異名トセルモコヽニヨレリ岡部氏ハ草ハ借字ニテ手向ノ具ヲイフ第三ノ相坂山ノ手向草トイフニヨレリ谷川氏曰草ハ種ノ義ニテナクサメグサ　目ザマシグサノルイ也トイヘリ蘭溪曰岡部谷川カ兩氏ハ古本ニ松之本トアルヲ根トヨミテ手向ノ具トイヒシナラン今刊本松之枝トアルニヨラバサガリゴケニテキコユベシ扱本綱ニ松蘿一名女蘿又松上寄生抄ニモ松蘿ヲマツノコケトヨメリ卽サガリコケ也又ヒカゲハ實アリテ地ヨリ生ズサガリゴケハ根ナクシテ枝ニカヽレリ此タカヒ也下ノ蘿ノ條可見

○鵜　――川手豆

辨　抄云大曰鸕シマツドリ小曰鵜鶘ウトアリ本綱ニ鸕鷀其屎名蜀水花形如鴉而長喙微曲善沒水而取魚同集淵渚夜巢林木トイヘリコレ今ノウ也全書ニ鵜鶘似鶚而大灰色喙長尺余口中正赤頷下胡大如數升嚢沈水食水亦能竭小水取魚トアリ松岡氏曰鸕鷀ハウ鵜鶘ハ伽藍鳥トテ昔年觀物ニ供ス或ハオヽトリトイフ鸛ニ三倍ス其翅帚ニ製ストアリ蘭溪曰雄略記鸕鷀トアリ今鵜ノ字斗ヲヨムハ畧也抄ニ大小ヲ分タルモタカヘリ

名　尺名曰盧與玆仝黑也故名谷川氏曰ウハ產ノ義其羽ヲウブヤニフク事紀ニアリ今モ產婦コレヲトレハ生ヤスシト口決ニイヘリ

異　八雲抄マトフ古事記シマツドリ夫木集シマノト斗モイヘリ

○眞木幷檜　――玄檜乃嬬手

抄云檜ヒノキ爾雅柏葉松身トアリ岡部氏曰眞木ハ檜也今俗ニマキトイフハ槇トカケリ紀ニ被ヲヨメルハ杉ノルイ也又――佐苦トハ木ヲ斧モテサキテツカヘバ也嬬手トハ借字ニテ材ハ角抓ノアレバイフ也トイヘリ松岡氏曰街風ニ檜椲松舟朱注檜木名似柏トアリ今ノビヤクシン也又ヒノキハ扁栢ニテ檜トハ別也禹貢ニ杶幹栝柏トアルハ檜又栝也今人謂之圓柏ト爾雅ニ出セリ花夷草木考ニ一種檜

柏又二色檜アリスギビヤクシントイフ又矮松アリイビヤクシントイフ也荒井氏曰我國ノヒノキハ彼國ニミエズ日本寄語云玄那硯(ヒンノキト)又宋高宗日本羅本ヲ以テ翠寒宮ヲ建リト南宋宮殿記ニアリ癸未雜識ニ新羅松ヲ羅木トスヨク別タンガ爲ニカ本羅木トイヒシカコレ我國ノヒノキ也ベシトイヘリ谷川氏曰扁柏ハヒバ也朝鮮―唐―チヤボ―鳶尾―シノブ―アリ檜ヲ新羅松又羅木トイヘハ夫ハ日向松也又唐ヒノキ山―アリトイヘリ貝原氏ハ爾雅ノ檜ハ柏葉松身トアルハ我ヒノキトス抄ニ全シ蘭溪曰木曾山ニテハヒノキヲ眞木トイフ木ノ中ノ良木ナレバ也眞ハホメタルニテ眞鳥ニ全シサレバ檜ハカリタルニテ只良木ナルヲイフ也

名　貝原氏曰錐ニテモメバ火ヲ生ズル故火ノ木トイフ也新井氏曰ヒハ古ヘヨシトイフ也良材ナレバ也ベシ

異　藏玉集藻塩草ニサキクサ又一間四間草ノ名アリ契沖ハ草ニ蔓ノアルヨリ混セシ也トイヘリ

○玉蜻　―夕去來者

辨　抄云蜻蛉カケロフ胡黎キエンハ赤卒アカエンバトアリ本綱ニ蜻蛉アリ珍曰　大頭露目短頸長腰軃尾翼薄如沙食蚊虻飲露水トイヘリ貝原氏曰古今注ニ蜻蜓即蜻蛉好集水上有青黄色青而大曰蜻蛉小而赤者赤卒也蜻蛉ハ山トンボウ赤卒ハ赤トンボウ小ニメ黄ナルヲ胡黎セウレウトイフ此外ニモアリセウレウハ蜻蛉ノ音也トアリ蘭溪曰カギロヒハ元陽炎又香切火ナドアリテ今イフ遊絲ノ事也夫ニ似テトベハ蜻蛉ヲモイフ也玉蜻又蜻蜓ナドカケルハ借字也卷十一　玉垣トアルモ玉蜻ノ誤字也莊子ニ野馬陽燄ナドアルモ此カゲロフ也

名　尺名曰蜻蛉言其色蛉虹言其狀伶仃也或其尾好亭而○俗名紗羊其翅如紗也谷川氏曰カゲロフハ陽燄ノカギロヒヲハタラカシタル也童蒙抄ニ黑キトウボウトアリ

異　蜻虰　蜻蝏　蜻蜓　赤衣使者　赤辨丈人　負勞蟌　紗羊ナドノ異名アリ藻塩草ニ秋津蟲　秋ツ羽　綺語抄ニアキツエンハ也トイヘリ蘭溪曰今俗ニヤンマトイフエンバノ轉ナルベシ

○須爲寸　旗―――

辨　抄云薄ハナスヽキ爾雅草叢生曰―(且―之―)辨色立成云茅唐韻云草盛也トアリ新井氏ハ東璧本草ノ苞ニアテヽ爾雅慧

ニ作ルトイヘリ貝原富士谷ノ兩氏モ苞トセリ本綱ニ芒有
二種皆叢生珍曰七月抽長莖開白花成穗如蘆葦花者芒也五
月抽短莖開花如芒者石芒也トアリコノ石芒ヲ新井氏ハシ
ノスヽキニアテタリ貝原氏ハ石芒ハ今ノカヤニテシノス
ヽキハシノヽ如キニテ一種也トイヘリ蘭溪曰スヽキハ芒
ノ字正字也薄ノ字ハシケル草ノ惣名ナル事抄ノ如シ字書
ニ木曰林草曰薄トアレハ借字也扱穗ヲ尾花トイフハ獸ノ
尾ニ似タル也マソホノ―タカノハ―トキハ―絲―アリ旗
スヽキ花―スグロノ―ハ見立タル也集中花―ハ只一處皆
ハタ―トアリ奈良ノ朝ヨリ已後ハ花――トバカリヨメリ
六帖ニススキシノスヽキト二條ニ出セリ

名　芒一名芭芒今俗謂之芭茅可以爲籬芭故也ト尺名ニアリ
新井氏曰スヽハサヽト全ク細キ也キハ其葉人ヲヤブル事
鋒刄ノ如キヨリイヘリ

異　爾雅ニ杜榮字志ニ芭芒芭茅トアリ　篠曰抄ニ露會草
敷浪草ミダレ草　藻塩草ニ袖波草　美草　隣女集ニ袖振
草トアリ

○火炎　東野――

辨　上ノ玉蜻ノ處可見

○鴨　―自物

辨　抄云鴨野名曰鳬家名曰鶩漢語抄、鷔カモトアリ和名本
草鶩一名鴨カモトアリ本綱ニ鳬アリ藏器曰野鴨爲鳬家鴨
爲鶩トアリテ形狀ヲ分テリ畧此松岡氏曰鄭風弋鳬與雁朱
注鳬水鳥如鴨青色背上有文カモ俗用鴨字非也マガモカル
―尾ナガハジロアシ―赤ガシラナト種類多シ草木考ニ鸊
鷉俗呼冠鳬トアルハ誤也鸊鷉ハ今ノ鳰鳥俗ニカイツブリ
トイフ冠鳬ハ筑前ニテ花―トイフトアリ貝原氏曰カモハ
緑頭(アヲクビ)ヲ上トスマガモ𪜈イフ𪜈鳬ハ雁ヨリ後ニ來リ春ハ雁
ヨリ後ニカヘル黑―赤ガシラヒドリヨシフク嵩フクアリ
又コガモアリ一種タカヘ尾長トモイフ是鸊鷉ノ尺名ニ刀
鴨トアリ又シバオシアイサドウナガミコハシヒロアシナ
ド種類多シトイヘリ蘭溪曰カモハ鳬也又野鴨ハカモナレ
ド只鴨トイヘバアヒロ也

名　禽經曰鳬從几短羽高飛皃トアリ谷川氏曰氈ヲカモト訓
スル如ク羽ノヤハラカナルヲ敷裳ニセシナレバ毛裳ノ義
也トイヘリ

異　尺名ニ野鴨沈鳧トアリ藏玉集ニ青羽鳥記ニ沖津鳥トアリ

○龜　文負神ー

辨　抄ニ亀カメ鼇ウミカメ黿鼂オホカメ攝亀コカメ秦亀イシカメ鼈カハカメ六種ヲ出セリ本草和名ニハ秦亀イシカメ亀甲ウミカメ鼈甲カハカメノ三種也本綱ニハ亀鼈二類ニ分テ亀ニ水ー秦ー蠵ー瑇瑁綠毛ー疶ー鶚ー攝　蚢・アリ鼈ニハ納ー能タイー朱ー珠ー黿アリ尺名曰爾雅ニー有十種皆附會也盖山澤水火四種集解曰甲長三百六十而神亀爲之長又其息以耳雌雄尾交亦與蛇匹ー以春夏出蟄脱甲秋冬藏穴導引故靈而多壽張世南賞ー論詳之トイヘリ花鏡云凡龜蛇頭龍頸外骨内肉腸屬於首卵生無雄相顧而交或與蛇交而孕ー蛇伏氣背皆向東雖有鼻而息以耳秋冬穴蟄故多壽愈老則愈小至八百年及大如錢千年生毛不可得之物也トアリ松岡氏曰小雅我亀既厭カメ種類多シ凡トニ用ルハ水ーヲ上トス綠毛ミノカメ秦ーヤヒカメハ此邦ニモアリ谷川氏曰神ーハ山ー蠵　ハ海ー綠毛ーハミノガメ也貝原氏曰亀ナイシガメトイフ唐土禹王ノ時ー負圖出洛水ノ事アリ後ハ尺カメトイヒテ海ー川ー哥ニモヨメリ但川ーハ鳴ヲヨメリ蘭溪曰ー山トハ蓬萊ニテ仙居也ウキヽノーハ法華經ニ一眼之ーノ値浮木トイフヨリ也其外アマタアレ𪜈略セリ

名　說文曰亀頭與蛇同故字上從它其下象甲足尾之形它卽蛇字也トアリ契沖谷川兩氏曰カメハ神ト義カヨヘリ紀ニ亀石部トアルヲ抄ニ神石部トアルニテモシルベシトイヘリ

○水　並淸水　水許曾波又御井之淸ーー

辨　略本ノ和名抄云俱舍論ニ水ミヅ性濕也日本紀私記云妙美シミヅトアリ字書云水五行之首位居北方卦屬坎說文云水至柔而能攻堅故一其內又云泉源水也爾雅云水正出曰檻泉懸出曰沃泉反出曰氿泉トアリ

名　珍曰水者坎之象也其文横則爲三縱則爲出トアリ谷川氏曰水ハ實ルノ轉スヽ反シニテシミヅトイフ俗ニハサミヅトイヘリ

異　禮記ニ淸滌周禮ニ玄酒トアリ紀ニ冷水ヲサムキミモヒ催馬樂モ同シ赤染集ニオモユ袖中抄ニ野守鏡ナドアリ

○椿　列々ー　山海石榴

辨　抄云椿木名也漢語抄海石榴本朝式等用之ツハキト出セ

リ本綱椿樗一條ニ擧テ香曰椿臭曰樗トアレハアタラズ貝原氏曰椿ハ今チヤシチントイフ木也トイヘリ新井氏曰椿ハ一種也古クハ借用ヒタリ今ノツバキハ海石榴也トイヘリ蘭溪曰西陽雜俎ニ山茶似海石榴又花鏡云山茶一名曼陀羅以葉類茶故得名トテ別ニ石―榴　大―石―榴　茶―梅ノ三條ヲアゲテザクロテウセンザクロサヾンクハト和名ヲ出セリ本綱山茶ノ集解ニ海榴茶石榴茶ノ名アリ貝原氏ハ石榴ザクロ茶梅ハサヾンクハ山茶ハツハキ也トイヘリ又天武紀ニ貢白海榴トアルハ何ヲイフニヤ蘭溪再按ニ山茶ヲツバキトイフニヨルベシ扨海榴茶石榴茶ハザクロテウセンザクロヲイフナルベシ

名　新井氏曰古語ニツハ光澤ヲイフツハブキヅバイモヽノ如ク其葉ツヤアル也貝原氏曰其葉厚シアツバキ也

異　八雲御抄ニアヲキナヅチトアルハ是立タル也ベシ

○朝毛吉　――――木人乏母

辨　岡部氏ハ淺ヨトイヒカケテキトイヒシナラン古ハ葱ヲメデシ也トイフ一説麻ヲ着ルトカケタリトイヘリ麻ノ義ハ上ニ出セリ抄云葱キ葷菜也トアリ本綱葱集解曰―凡四種冬―卽凍―也夏衰冬盛莖葉俱軟美渼―莖實硬而味薄冬卽葉枯胡―莖葉粗硬根若金燈茖―生于山谷トイヘリ貝原氏曰―ハ我邦ニモ四種アリネギワケギカリギアサツキ也又小―二種アリ根トモニワケテトルアリワケギトイフ冬―也カリテトルアリ誤―也又アサツキアリ和名也ラツキヤウアリ薤也ニンニクアリ蒜也ヒルアリ野蒜也和品ニ天台蒜アリ行者ニンニクトイフトアリ蘭溪曰葱　葷類ノ惣稱也

名　尺名曰葱從怱外直中實有怱通之象也初生曰―針葉曰―青衣曰―袍莖曰―白葉中涕曰―苒トアリ谷川曰ギハ氣ノ義根ヲ賞スルヨリネギトイフ俗ニネブカトイフ色ニ淺―蒔―ナドイフモコレヨリ也

異　綱目ニ芤菜伯鹿胎ナドアリ職人盡哥合ニウツホ草今ヒトモジトイフギノ一字トイフ也

○葦　―邊行

辨　抄云葭一名葦アシ爾雅云一名蘆玉篇亂菼也蘆之初生也アシツツトアリ綱目ニ蘆アリ集解曰芦有數種其長丈許中空皮薄色白者葭也葦也短小猶葦而中空皮厚色青蒼者菼也

薍也荻也其最短小而中實者薕也皆以初生巳成得名トイヘリ松岡氏曰通雅云菼薍萑荻薕一也葭芦葦一也沈活夢溪筆談云薕葦葭ハ芦也薍萑菼ハ荻也トアルノ兩解千古ノ疑惑ヲ破ル郭璞ノ薕似萑而細也トアルハ俗ニヒメヨシスダレヨシト呼物也トイヘリ蘭溪曰古キ連哥ニナニハノアシハ伊世ノハマヲキトアリ契沖曰タヾハマニ生タル也イセニカギラズ丹後與謝ノ浦ニモアリトイヘリ

名　只名ニ詩疏云葦之初生曰葭未秀曰芦長成曰葦々ハ偉大也芦ハ色盧黑也葭ハ嘉美也トアリ谷川氏曰アシヲヨシトイフハ反語也アリヲナシトイフガ如シ松岡氏曰ヨシアシハ反語也甘草ヲ大苦トイフガ如シトアリ

異　只名云葦葭花名蓬蕽笋名虇トアリ能因哥枕ヨカス旅中抄難波草藏玉集ニ氷室草ワスレ草藻鹽草ニサヾシ草　玉江草ナドアリ

○忘貝　美津能濱爾有

辨　谷川氏曰一種ノ貝ノ名ニアラズ心ヲナグサメテウキヲワスル丶ニトリナセリ今讃岐松カ浦ニ忘貝トイフアリ蛤ノルイ也崇德院ノ御哥ニ松島ノ松ノ浦ワニ吹ヨセバヒロヒテ忍ベ戀忘貝トヨミ玉ヒシヨリ也トイヘリ蘭溪曰古今集ニ戀忘草トヨメルハ萱草也未ニ出ス　サラバ忘レ貝トイフモアリヌベシ尚可考

○埴　岸之―布ニ　直土爾　岸乃黃土粉

辨　抄云土黃細密曰埴ハニトアリ說文云粘土也禹貢云厥土赤埴墳トアリ本綱珍曰土者五行之主坤之體也具五色而以黃爲正其爲德至柔而剛至靜有常兼五行生万物而不與其能坤之德至乎哉トアリ蘭溪曰老子ニ埏埴以爲器ヲハニヲ子ヤストヨメリ又ハニフトイフノフハソノアル處ヲイフ生ノ義ニテ埴生ナルベシ

名　埴黃土也此集黃土赤土ヲヨメリ谷川氏曰子バニノ略ニハツチノ古語也又粉ヲニトヨムハ丹ノ義丹ハ丹青ノ惣名ニテ丹キヲ元ニシテ色ナル粉ヲニトイヘリ紅粉ヲベニトイフ例也

○喚兒鳥　――――象中山

辨　抄云呼子鳥ヨブコドリトアリ貝原氏曰和品也トイフ富士谷ハ漢名青鵻トテ俗ニイフカンコ鳥也其證ハ小侍從「柚木タツ斧ノヒヾキニ――オボメクホトゾウシト思フ

ナトアルヲ引リ又中古古今傳受トイフ事ノ始リテ猿又鹿又ハコ鳥ツヽ鳥ナドイヘリ東ノ野州切紙トイフ書ニカツボウノ\トナク鳥也トアリ谷川氏曰心敬法師曰山鳥鶫（ツグミ）時鳥鶯ヨム人ニヨリテ殊也俊惠法師「今宵タレ待兼山ノ―ヲロノ鏡ニカケヲウツシテトアルハ山鳥也覺性法親王集ニ「山近ク我ヲトヾメテ――イフ事ナシニ谷ヲ過也後撰集ニ「我宿ノ花ニナヽキソ―ヨブカヒアリテ君モコナクニトモアリ何鳥ニマレヨブニイヒカケシナラン徒然草ニ――ハ春ノ物トイヒ又ハコ鳥ツヽ鳥也トモイヘリ又―――鳴時招意ノ法行ヘハヨシトイヘルハ木魂ヲイフ也トアリ蘭溪曰何ノ鳥トモナク山ニテ鳴ヰ人ヲヨブニ見立タルモコトニ春山ノ長閑ナルニ呼ヨフニキヽナセシナラン或曰ヨビ鳥ニテコハソヘタリヌエ鳥ヲヌエコ鳥トイフカ如シトイヘリ

〇多津　――鳴倍思哉

辨　抄云鶴水鳥似鳴長喙高脚者也唐韻云鸖鸖別名也（ツルタヅ　アシタヅ）トアリ本綱ニ鶴アリ珍曰長三尺高三尺余喙長四寸丹頂赤目赤頂青脚修頸凋尾粗膝纖指白羽黑翎占有灰色蒼色者嘗以夜半鳴聲喫雲霄雄鳴上風雌鳴下風聲交而孕亦啖虵虺聞降眞香煙則降其糞能化石皆物類相感也按相―經云―陽鳥也而遊于陰行必依淵渚止不集林木二年落子毛易黑點三年產伏又七年羽翮具又七年飛薄雲漢又七年舞應節又七年鳴中律又七年大毛落氄毛生或白如雪或黑如漆六十年雌雄相視而孕千六百年形始定飮而不食乃胎化也トアリ花鏡又全シ松岡氏曰小雅鶴鳴朱注曰長頸竦身高脚頂赤身頸尾黑其鳴高亮聞八九里タツツルトアレド色黑トイフハ誤レリ非尾兩羽之下翅歛則似尾ト五雜俎說約等ニ辨ズ又爾雅翼ニ鵠者鶴音之轉後人以鵠名頗著爲鶴之外有鵠トアリテ古鵠鶴一物トセリ又曰鶴ニ玄黃蒼白ノ數品アリアネハツルアリ頭上長毛アルヲ異トストイヘリ貝原氏曰此ルイニマナヅルアリ鶬雞也丹頂―アネハヅルアリ琉球―アリトイヘリ蘭溪曰古ハ鵠鶴一物トスル證ハ王義之ノ法帖ニ一本ハ鶴一本ハ鵠トカケリ今按ルニ鵠ハハクテウ也又鸖ハ今ノコフヅルニウノトリニテ三物名ヲ混スル人アリヨテコトハルノミ

名　尺名云―字篆文象翅首短尾之形一云白色雃々故名トア

リ谷川氏曰ナク聲ヨリ名付シニヤ蘭溪曰田ヅ聲田ヅトハ
田澤芦水ニアサルヨリイフナルベシ

異 綱目ニ仙禽 胎禽

○鹿 ・鳴山曾

辨 抄云鹿カ 麌サヲシカ 麀メカ 麋オホシカ 麏クシカ トワカテリ 本綱ニハ鹿麋双頭 麂ノ五條アリ ー 集解珍曰馬身羊尾頭側而長高脚而行速牡者有角小而無班毛雜黄白色俗稱麀鹿孕六月而生子性淫一牡常交數牝謂之聚鹿性食亀能別良草食則相呼行則同旅居則環角外向以防害臥則口朝尾閭以通督脉般仲堪云ーー以白色爲正述異記 千歳爲蒼又五百歳爲白又五百歳爲玄々鹿骨亦黒爲脯食之可善生也トアリ花鏡又同松岡氏曰小雅鹿鳴ノ朱注云鹿有角麀牝鹿也カノシシカ爾雅云牡麀牝麀其子麛絶有力曰麚トアリ貝原氏曰鹿角ハ春生夏長秋堅冬脱牡ーハ鳴キ牝ハナカズ七月ノ末ヨリ九月ノ末マデナク四五月ハ子ヲウム娠ム事凡九月ニテ只一子ヲウメリ又角ノ數ニヨリテ聲ヲ發スヨテ四聲ニ限ルト由宗ノ人イヘリ蘭溪曰エゾ地ノ奥ニハキナカイトイフ獸アリ馬ノ用ヲナス丞縣ハ鹿也トイヘリ沈存中筆談ニ北狄有駝鹿極大而色蒼黒無班角大而有文トイヒシハコレナランカ

名 尺名ニ鹿字篆文象其頭角身足之形谷川氏曰シカハ閃鹿(シカ)ノ義カト斗イフハ略也ヲシカハ男鹿也サヲシカノサハ發語也

異 班龍梵書ニ密利迦羅ト尺名ニアリ花鏡和靖所養曰呦々トアリ八雲抄スガル蜂ヲモイヘド鹿ヲ正トス紀ニシロキカセギ谷川氏曰角ノ枝ニ似タレハイフ鹿柵ヲ直ニ呼シナラン藏玉集紅葉鳥 秘藏抄スヾカ□□草ハラヒ草六月ノ鹿也トアリ

萬葉草木考卷之一 終

萬葉草木考卷二

○奴婆珠 ——乃吾黑髮

辨 岡部氏曰射干玉ハ正字ニテ夜干野干ハ音ヲ借リタル也トイヘリ抄云射干一名烏扇カラスアフギトアリ本綱ニ射干アリ珍曰其花三四月開六出大如萱花結房大如拇指一房四隔十余子々大如胡椒而色紫極硬咬之不破七月始拈花鏡云葉似姜而狹長六月開花黃紅色亦有紫碧秋結實作房トアリ蘭溪曰今ヒアフギトイフコレ也射干ノ名ハ獸又木ニモアリ喜撰式ニ夜ハヌバタマ髮ハムバタマトワケタルハイカナルニヤ

名 尺名曰射干之形莖硬疎長正如射之長竿狀又其葉叢生橫鋪一面如烏翅及扇之狀トアリ谷川氏曰又ハ黑晴ヲイフ漆ヲヌリトイヘリ沼濡寢縫ナド同シハトハ羽明玉羽太玉ナドイヘバ沼羽玉ノ義ニヤ又此葉羽ニ似タル故野羽也其實ヲ野羽玉トイフ又葉縫合タル如ナレバ縫葉ノ義ニイフカ玉ハ凡テ草木ノ實ヲイフ實ノ色黑ケレバ烏玉トカケリトイヘリ岡部氏曰射干ノ實ハ黑キ玉ノ如クニテ野ニ生スル故野眞玉トイフ眞玉ハ山海ヨリイヅコレハ野ヨリ出レバ也

異 尺名ニ烏扇 烏翣 鳳翼 思扇又野萱花トアリ夫木集ニカラスノアフギトヨメリ

○御綱葉 到熊埜岬取其處——

辨 仁德紀ニ——類聚國史ニ三角柏式ニ御綱柏又三津野柏トアリ歌林良材曰三葉柏也トアリ谷川氏曰伊世神宮ニテ三ツノ柏ヲトリテトフ事アリ是ヲ投ルニタツハ叶ヒタヽヌハ叶ハヌ也俊忠家千首「神風ヤ———ニコト問テタツヲ眞袖ニツヽミテゾクルト俊頼ヨメリ又長明伊世記云志麻國トクノシマトイフ處ニアリ木ノ上ニ桂ノ樣ニ生タルヲトリテ切下ストキ平ニフシテ落タルヲハトラズタテ振ニ落タル斗ヲトル神宮四度ノ御祭ノトキ必入物也寂蓮「思フ事トクノミシマノナブ柏長クゾタノム廣キ惠ヲ又神宮祕書云風日□祭ニ———ヲ流シテ吉凶ヲ問フ是ヲ柏流トイフ續古今「思ヒアマリミツノ柏ニ問トノ沈ムモウクハ泪也ケリトアリトイヘリ松岡氏曰柏ハ惣名ニテ側柏扁柏竹柏ナドアリ詩召南ノ樸樕カシハクヌギ爾雅樸樕心本綱ニ

槲有二種一種叢生小者トアル是也鎭江府志ニ槲一種小而
叢生土人呼爲索落葉トイヘリ蘭溪曰抄ニ槲又柏ヲヨメリ
サレド柏ハ今ノヤヘトイフ也爾雅ノ樸樕東壁ノ大葉櫟ト
アル今ノカシハナルベシ谷川氏曰古カシハトイフハ堅葉
ニテ橿ヲカシトイフニ同シ

名　只名曰葉搖動有殼穀之態故曰槲樕又樸樕婆娑蓬然之貞
其樹偃寒其葉凡々故也トアリ契沖曰カシハヽ只葉ヲイフ
仁徳紀葉此云固斯波トアリ荒井氏曰槲ニカギラズ炊屋ニ
テ炊ケル飯ヲモリモツヽミモシケル葉ヲイフ膳夫ヲカシ
ハデトイフモ此義也今食フモノニカヘシキトイフ古語ノ
殘レル也北史隋書和國人藉以槲葉トアリトイヘリ（蘭溪別ニ柏考アリ）

ﾃ合見

異　只名ニ槲樕　樸樕　大葉櫟トアリ八雲抄ニヤヒラデト
アリ

○狹名葛　――佐不寐者

辨　抄引蘇敬本草云五味皮肉甘酸□中辛苦都有鹹味故以名
五味也サネカツラトアリ　本綱ニ五味子集解曰春初生苗引
赤蔓附高木其長六七尺葉尖圓似杏葉三四月開黄白花七月
・結實成叢生端如豌豆許生青熟紅紫トアリ花鏡云五味子產

高麗者第一葉似杏花似小蓮而黄白非架不能引上結字如梧
桐子ト出セリ貝原氏曰醫書ニ遼――トアルハ朝鮮產也又
唐――アリ劣レリトイヘリ

名　五味ノ義抄ニイヘルガ如シ岡部氏別記曰眞カヅラノ義
ト思ヘリシハイマダシコレハ滑ケキ汁ノアル事記ニモ出
タリサハ發語ナトヲハ言ノ轉ニテスカヅラ也ヌル／＼ト
ナメラカナル汁アルヲイフ事池ノヌナハ海ノノリノ如シ
トイヘリ蘭溪曰眞玉葛トモカケハ核ヲ賞スルカツラノ義
トモイフベシ

異　爾雅莖藉別錄ニ玄及會及トモアリ

○篶　水―刈　三―刈

辨　篶ノ字本草ニミエズ抄ニモナシ字書ニ―黑竹也トアレ
バアタラズ和品ナルベシ篶ノ字ヲカリテカケル也岡部氏
曰神代紀野槌者採五百箇野篶八十玉籤トアルニヨレバス
ヾテフ竹ヲカル野トツヾケシ也トイヘリ風雅集ニタカン
ナノ細キヲ奉ラントテ是ハスヾ竹カイヅレトミワキテ又
古今著聞集ニ此スヾハ鞍馬ノ福ニテ候ゾトアリ古哥ニモ
古埜ノダケニスヾワケテ旅人ノスヾノシノヤ大嶽ノスヾ

フク風ナドミエタリ蘭溪曰一年越前ニアリシニ四月比人々スヾタケトリニ出タリ其トリシヲミシニ竹ノ子ノ長サ四五寸大サハキセルノラウノ如シ扨皮ヲムキテ煮ル也ソノ竹ハ山竹トテ長サ八尺斗アリテ山中ニ茂生セリ其地雪フカキ處ナレバ淡竹(ハチク)苦竹(マタケ)ハ里ニテモ多カラネバ其スヾヲ竹ノ子トテ賞セリ幾年ナドニ此竹實ナル事オビタヽシコレハ竹疫ニテ枯タリトキク其實ヲジネンゴト土人ハイフハ佛書ニ自然粳米アリ夫ニ擬シテ名付シニヤアラン其年信濃下野ナドニモ實ナレリトイヘリ

○玉葛　――不實

辨　抄云葛穀一名鹿豆クズカヅラノミ　葛實名也葛粉クズナヅラノチ葛根入地五六寸石也トアリ本綱ニ葛アリ珍曰葛有野生有家種其蔓延長取治了作絺綌其根紫內白長者七八尺其葉有三尖如楓葉而長面青背淡其花成穗纍々相綴紅紫色其莢如小黃豆莢亦有毛其子綠色○○如○梅子核生嚼醒氣八九月采之本經所謂葛穀是也蘇恭亦言葛穀是實而宋蘇頌謂葛花不結實誤矣其花晒乾亦可據食花鏡モ同シ松岡氏曰葛覃朱注曰―草名蔓生可爲絺綌者如名クズ說文―絺綌草也山中ニアリテ三葉一處ニ攢生ス莖葉共ニ有毛秋花ヲ開ク紫黯色豌豆花ニ似テ大也又野―アリ有毒トイヘリ蘭溪曰永正紀ニ正殿寶殿ノ垣等ニ生カヽル―ハ掃退サル物也又紀ニ押木珠縵アリ八雲抄老槃ヲイヒ後撰ニハ葵ヲイヒ新勅撰集ニ柳ノ糸ヲイフ共ニ髮ニシタルヨリイヘバスミテヨムベシ此玉葛ハニゴリテヨムベキ也

名　尺名曰葛從葛諸聲也鹿食九草此其一故曰鹿藿新井氏曰カツラノカハ髮也ツラツルツヾラ皆ツヾク意也谷川氏曰鬘ヨリ少テ長キ○○フ也玉ハホメタリ又クズハ細屑ノ義其根ヲ粉ニシテ食フナレバ也

異　本經ニ雜齊別錄ニ鹿藿黃介トアリ莫傳抄松無草トアリ

○霍公鳥　――蓋哉鳴之

辨　抄云鶺鴒ホトヽギス今ノ郭公也トアリ本綱ニ杜鵑アリ珍曰杜鵑狀如雀鷂而色慘黑赤口有小冠春暮卽鳴夜啼達旦鳴必向北至夏尤甚晝夜不止其色哀切曰家候之以興農事惟食蟲蠹不能爲巢居他巢生子冬凡則藏蟄藏器曰荊楚歲時記ニ――鳴時先聞者主別離學其○令人吐血登廁聞之不祥厭法但作狗聲應之トイフ蘭溪曰今ノ俗廁ニテキクヲイムハ同

シ花鏡ニハ出サズ只三體詩ニ｜｜枝上月三更トアリテ唐土ニハ春末ヨリ鳴トミエタリ貝原氏曰｜｜ハ前足後足趾各二ツ鷹ニ似タリ又鶻鵃ハ鶻嘲也郭公ハ鳲鳩也共ニアタラス杜鵑正字也トイヘリ富士谷氏曰時鳥トカクハ和字也夏ノ來ルヲ知テナケバ也文選ニ時鳥トアルハ別也又四手ノ田長トハ田ヲウヽル頃ナケバ田ヲウヱヨト催ス心ニ名付シ也强テ一名𪜈定メガタシ又血ニナクトハ熱鳥ニテ口ツキニ肉生スレバ鳴侍ニ破レテ血イヅル也トイフ尙說多シ略ス

名 尺名曰蜀人見鵑而思杜宇故名谷川氏曰過時不熟トナクト袖中抄ニイフ本草ニ田家促之以興農事トアルヨリ哥ニホトトキススキズトモヨメリ

異 高紀ニ杜宇子規催歸說文ニ巂鳥 周燕 陽雀ナドアリ藏玉集ニ橘鳥 永久四年百首時ツ鳥祕藏抄クキラ八雲抄時ノ鳥トアリ又蘭家ニテハクウノヽコトイフヨシ也

○蘿 竹取 生松柯

詞 拾芥抄具云蘿ヒカゲノカツラ 又苔類云松蘿一名女蘿 [illegible] トアリ本綱ニ松蘿埤雅云女蘿松上浮蔓又言在木乃女蘿在草爲兎絲機疏云兎絲蔓生草上松蘿蔓延松上生枝爾雅翼云女蘿色青而細長無雜蔓兎絲黃赤不相類珍曰嘗以二陸羅氏之說爲的花鏡云藤蘿一名女蘿在木上者兎絲在草上者其花黃赤如金結實細而□冬則萎落トアリ松岡氏曰松蘿松上寄生也本草ニ白龍鬚アリ即古ノ女蘿ト一物也時珍別條ニ出セレド同物也松蘿ハホヤ女蘿ハネナレカヅラ也トイヘリ貝原氏曰松蘿ハ松樹上ニ生スル寄生也ヒカゲハ地ヨリ生ジテ寄生ナラズ實アル物也サルヲガセマツノコケ𪜈イフ也谷川氏曰ヒカゲ草トイフハ加茂ノ祭ニイフヒカゲノカツラハ今キツネノヲガセトイフ也式ニ日蔭蔓紀ニ天之日影神代紀以蘿爲手繦ナドアルニ松蘿トスレド別種也或曰石松也トイヘリ

名 谷川氏曰盤戸ニ神ノコモラセ玉ヒケレバ日カゲサシ出ン事ヲ壽キテタスキトセシヨリナラン蘭溪曰山中木間ナト生スレバ日カゲトハイヒシナラン

異 記ニ天ノ日カゲ新拾遺ニ日ヒカゲ古今集ニ山カヅラ又物ノ名ニサガリゴケ新古今ニヒカゲ草トアリ

○柯并枝 前條ト同處 最末枝 下枝

辨　抄ニ玉篇云枝柯エダ木之別梢也纂要云大枝日幹カラ細
枝曰條與枝同又云梢ハ枝梢也コスヱトアリ谷川氏曰ホハ秀
也ツハ助語也記ニ上ツ枝トアリ又下ヲシタトイフシダル
ノ略也トイヘリ源語浮舟ニマタフリニ山橘ツクリテツラ
ヌキソヘタルトモアリ

○秋芽　――之

辨　抄云鹿鳴草又爾雅ニ萩又蕭ハギトアリ此集榛ヲモヨメ
リ前ニ出セリ續後撰集ニ芳宜宴アリ此集ニモ又カケリ假
名ガキ也稻生氏富士谷氏共ニ隨軍茶ニアテタリ救荒本草
隨軍茶一名胡枝子生平澤中有二種葉形有大小大者類黑豆
葉小者莖類蓍草葉似苜蓿葉而長大花色有紫白結子如粟粒
大氣味與槐相類救飢採子微春即成米又採嫩葉薫麗爲茶亦
可トアリ貝原氏ハ花史ニアル觀音菊天竺花トイフニアテ
タリ五月開至七月花頭細小其色純紫枝葉如嫩柳其幹之長
與人齊我邦和歌ニヨメトモ中華不賞之トイヘリ新井氏曰
抄ニ鹿鳴トアルハ詩小雅ノ呦々鹿鳴トイフニヨレリトア
リ蘭溪曰抄ニ叹萩又蕭ト出セシハ同名ヲ一條ニ出セシニ
テ蕭ハ今ノヨモギ也今ヤハギハ天竺花ナドナルベシカカシ
ナガキニテハ芳宜茅子ナリ古ハ漢名モ委シカラネバ借テ
カキシ事多シ貝原富士谷氏曰日萩原―宮城野―アリ冬枯
テ春宿根ヨリ苗ヲ生ス木―ノアリ此集ノ眞―ニテ顯昭ハ
大―トイフ莖冬不枯シテ莖ヨリ葉ヲ生ズ本アラノ小―ハ
又一種也下マバラ也又夏―アリ南京　日光―ミダレ―ナ
ドアリサレバ禾草共ニアルベシ別ニ草アリ合明草也仙臺
ノアリ草決明也トイヘリ

名　新井氏曰薺蒿ヲハギトイフヲハ大也鼠尾草ミソハキト
イフミソカハ密テ花ノ細密也皆ハギヨリ出タリトイヘリ
蘭溪曰秋ニイタレバ花葉共ニハルノ義ニヤ

異　八雲抄シカナグサ藻塩ニ月是草野守草サイハリ莫傳抄ニ
初是草庭見草草藏玉ニ古枝草秋達草濃染草

○橘　――之蘰路乃

辨　家嚴頭書云―八多陰也故ニハチマタトイフ古ヘ都ノ大
路ナドニ木ヲウヱシニヤ雄略紀餌香市邊―本又此集十三
ニ東ノ市ノ植木ノトイヘリ抄云橘一名金衣クチハナト出
セリ花鏡云爾云橘シカン大曰抽タチハナ南方暖地多而初夏開小白花六七
月成實文冬黃熟韓彥直有――譜多種可考トアリ本綱ニ――ア

リ珍曰—柑柚三者相類而不同又柑八品橘十有四品トアリテ辨別シカタシ貝原氏曰—ハタチバナニテ今ノミカン也今俗ニタチバナトイフハ油橘ニテ最下品也トイヘリ谷川氏曰タチバナハ橘類ニテ最下品綿—トイフ花ヲ賞シテ花—トイフ後世盧—ヲイフハ誤レリ盧—ハ金—ニテ今ノキンカン也夏ミカン𪜈イフトイヘリ新井氏曰允恭紀天皇崩其明年春三月田道間守非時香菓八竿八縵テ賚シテ常世ヨリ返奏曰今天皇崩シ玉ヒテ何ヲカイハン生テモ益ナシト陵ニ行テ叫哭シテ死ストアル多遲間守ハ祖先新羅王子天日鉾トイフノ歸化シテ其子ヲ但馬諸助トイフ其後ナレバ祖先ノ國ニ出サレシ也常世ハ古ノ新羅國今ノ朝鮮ノ濟州ナルベシ今モ此島柑橘多ク國珍トセリトイヘリ蘭溪曰我邦紀州ヲ上トス

名　尺名曰雲左色爲慶二色爲裔々雲外赤內黃非煙非霧郁々紛々之象橘實有似於裔雲也新井氏曰田道花トイフニヤ

異　花鏡ニ木奴　叢玉ニ昔草　莫傳ニニハコ草　八雲ニカトツキトアリ

叢青木　——乃是縉

名　岡部氏曰神代紀狀如葦牙抽葦方ハアシノ苗ナレバアシカビノアシナヘテフ意ニテ人ノ蹇ニ轉シイヒカケタルカ卷十ニ芽子之若末長又秋芽子末若トアルニ似タリトイヘリ本居氏曰若末ヲカビトハ訓ジガタシ卷十ニ小松ノ若末ニトアルヲウレトヨメレバコヽモウシトヨミテ足痛ヲアナエテトヨマンカ芦ノ芽ハナユルモノニアラズ一本若生トアルニヨラバカビトモ訓ズベシ蘭溪曰抄ニ葈アシヅノ蘆之初生也コレ古ノアシカビニテ今ノヨシゴ也アシナヘメアシ發語ニテシナヘハ軟ノ意ニテヤハラカニウケコタヘヨトイフナルベシ

○鯨魚　——海邊乎

辨　抄云大魚雄曰鯨雌曰鯢淮南子曰魚之王也クヂラトアリ本綱ニ泥鰌アリ集解云海鰌生海中江—生江中泥—生湖池最小トアリ（海鰌ハクヂラ江—ブリ泥—ドゼウ）嶺表錄云海—即海上最偉者也小者亦千余丈吞舟之說固作謬羅願爾雅翼云海中—長數千里穴居海底入穴則海溢爲潮出穴則潮退ト云々契沖厚顏抄引壹岐風土記云鯨伏在郷西昔者鰐追鯨走來隱伏故云鯨伏俗曰鯨爲伊左トアリ貝原氏曰昔ハクジラヲモリニテツカズ

弓ニテイル死シテ浦ニヨル是イスナトリ也近江ノ湖ニヨメルハ磯菜取ニテタガヘリトイフ蘭溪曰貝原氏ハ湖ニハ鯨スマ子バカクワケラレタリサレト岡部氏ハ海ツ物ノ中ニテクヂラトルヲ大海ノ稱ヘ言トシ海トツヾクルヨリ轉ジテ濱ニモ灘ニモイフ也ソガ中ニ淡海ニ鯨ナケレ𪜈海テフ語ニ隔テツヾケシ也似ツカヌヲモ言葉ノヨリ來ルニマカヒテツヾクルハ海人小舟○瀬津津白浪立田山ノ如シトイヘリ戸田茂睡警言調云イサナトリハ生魚ヲサシテイフ也トモアリ

名　閩書陸佃云適徙好動故名鯨允恭紀ニイサナトリ尺曰鯨取也古語ニイサハ鯨也ナハ魚也トナリ

異　寧波府志ニ海鰍瓊州府志ニ海龍王　雷州府志ニ海龍翁トアリ

此集勇魚トモアリ

○小竹　——之葉　細竹

辨　抄云篠シノサヽ（俗用小竹字）　細小竹也トアリ本綱竹ノ條ニ珍曰小曰篠大曰蕩トアリ花鏡云戴凱之有竹記六十一品又五月十三日爲竹醉日是日種者易活トイヘリ新井氏曰篠ハ細竹サヽ又シヌ𪜈イフ俗ノ小竹也谷川氏曰篠又小竹シヌト訓ス字鏡篶ヲ訓セリ蘭溪曰篠箭屬小竹也六書正譌作篠非又篶竹長良トアレバ字鏡モ又ウケガタシ

名　谷川氏曰サヽハ小々浪小々蟹ノ例ニテ細ノ義也又シノハシナフノ義也

○伊久里　——爾曾

辨　抄云石凝土也イシトアリ本綱金石部珍曰石者氣之核土之骨也大則岩巖細則砂塵トイヘリ應神紀トナカノイクリ尺紀ニ異助語也句離謂石也今尚山陰道方言石ヲイクリトイフ又景行紀ニ次于柏峽ヲ大野其野有石天皇祈之曰朕得滅土蜘蛛者將蹶茲石如○葉而擧焉號其石曰蹈石（ホシシ）トイフヨリ云カシハトイフ名ハアリトキケリ

名　活法云土構爲石々氣之核也氣之生石猶人筋絡之生爪牙也谷川氏曰イハイシ也クリハ海ノ石ハ黒キヲモテイフ又曰イハ發語シハ下也紀ニ下ヲシトイフハ下津岩根ナト也

異　土精　地骨　雲根　海眼ナドアリ　八雲抄堀川百首ニ志カ○○○（シハイ(カ)）ハトガシハ袖中抄水ノ下ノ石ヲミナムシロトイヘリ

○角　―障經

辨　抄云角ツノ獸頭上出骨也有枝曰觡無枝曰角又字書云獸不童也トアリ厚顏抄引私記云師說昔孝靈帝時有逓牛欲以角破堤堤中恩有磐有觸角相拘乃遂不能壞故歌言巖有先引此語乎サハルヲサハフトイフハ通音ナレバ也トイヘリ冠辭考ニハ角綱(ツヌ)羅相通ハシテヌサ反ナヽレバツナヲ延テツヌサトイヒテハフハ蔓ノ這フ也トイヘリ

蔦ノ事ハ末ニ出セリ

○海松　深――生流

辨　抄云水松ミル又海松トアリ本綱ニ水松アリ集解云水松狀如松トアリ貝原氏曰石花菜ヲミルトイフハ非也今海松トイフハ石帆ニテ海樹ナリ丹キアリ黑キアリ白褐色アリ石ニ附テ生ストイヘリ蘭溪曰武遠國ノ貢物ニ深海松長――アリ源氏澪標卷ニウミマツトアリ○哥ニハミルメトモヨミナラヘリメハ布ノ惣名ニテヒロメアラメノ如シ

○都多　[illegible]――乃

辨　抄云[illegible]トアリ我邦蔦ノ字ヲヨメル字鏡ニホドヽ訓リ說文ニ蔦寄生也トアレバ今ノヤドリ木也海道記ニハ蔦ノ字ヲヨメリ豐前國搗木アリ集韻云搗蔦同シ蔦ハ爾雅ニモ出タリ小野氏曰地錦一名地朕ツタ又ツナクサ常春藤キヅタ也トイフ谷川氏曰地錦ツタ千歲藟キヅタ又フユヅタ也錦ヅタハ文アリ小ヅタアリ紅葉セズ庭ヅタアリ薜荔也トイヘリ花鏡云薜荔無根可以緣木而生藤蔓四時不凋在石曰石綾在地曰地錦在木曰長春藤好敷岩石紫花發後結實鳥雀兒童採食之謂木饅頭トアリ又本綱木蓮ノ附錄ニ地錦葉如鴨掌藤蔓着地節處有根亦緣樹名冬月不死一名地噤別有地錦草與此不同トアリ蘭溪曰抄ノ絡石ハ今ノ定家カツラ也薜荔ハ惣名ナレバ地錦ヲツタトスベシ

名　地錦ノ字解ナクテシルベシ谷川氏曰蔓延スル物ナレバツタフノ義也

異　藏玉藻塩ニ松無草トアリ篠目抄ニハ藤トセリ

○青駒

辨　家業頭書曰第三ニ赤駒トアレバコヽモ赤駒ナランアカワカ通ズ我ノ字ノ意也トイヘリ抄ニ駒馬子也コマトアリ本綱馬ノ尺名曰二歲曰駒トアリ字書云周禮庾人攻駒又左尺以上曰――ト云リ松岡氏曰周南漢廣ノ章朱注ニ――馬之小

著トアリ蘭溪曰純ニ駁駒アリ後世ハ馬駒通用也コマニマカスル道ハ韓非子ニアリテ隙行コマハ莊子ニ出タリ谷川氏曰コマハ小馬ノ義黑馬ヲコマトヨムハコクノ音也烏梅ト同シ

○椎　—之葉爾盛

辨　本草ニ出サズ閑書ニ科樹トアリ泉州志興化府志ニモイヅシヒハ椎ノ音轉ナリト貝原氏ハイヘリ抄云椎子シヒトアリ和名本草ニシヒト出セリ貝原氏又曰我邦大木アリ屋材トス山中ニ生ス其實圓キアリ長キアリ山里ニテ貧民ノ飢ヲ助ル也トイヘリ谷川氏曰通小町ノ謠ニイチビカシヒマテバジイト並ベイヘバモト香椎トナラヘイヒシニヤ字鏡椽ヲアカシヒトアリ薩州ノシヒハ甜櫧也ベシトイヘリ

名　神武紀椎ヲシヒト訓ズルハ音ヲ訓トス谷川氏曰スイノ音轉トイヘド繁實ノ義也ベシ新井氏曰シハ下シヒハ實自ラ落テ樹下ニアル也

○結松　野中爾立有——

辨　蘭溪曰前ノ哥ニ引ムスビ又結ビケントモアレバ一種ノ名ニハアラジサレドココニ野中ニ立ルトアレバ一種ノ振ニキコユ今ヤ常陸下總海邊ノ松ハ其嫩枝ムスビアヘリコレ濱風ニモマレテ自ラ結ベリ尙別ニアリヤ可考

○鳥翔　——成

辨　印本ニハカケリナストヨメリ一本翔ハ翅ノ誤ニテツバサトヨミテ鳥ノ事ニモナル也トアリ抄云翅鳥翼也ツバサ翮鳥羽也トアリ字書云詩大雅○○以翼注云在前曰引旁在曰翼又翅翼也又翔回飛也又翮○莖也增韻云鳥之勁羽一曰・羽根ト出セリ谷川氏曰此ツバサハ鳥總トイフニ義通ヘリ轉語ナラントイヘリ　鳥總ノ處可合見

○宇禮附木末　小松之——十三ニ樹奴禮我之多

辨　抄云梢コズヱ林梢也トアリ字書云梢木枝也加藤氏曰集中木末トカクハ皆コヌレト訓スベシコスヱトセシハナシトイヘリ蘭溪曰ウラウレ同シ今モ木ノウラトイフ末ノ字也コズヱニ同シ

○杉　神之神—　椊—之本

辨　抄云杉亦作檆スギ俗用椙字非也和名本草杉材スギノキトアリ本綱ニ杉アリ珍曰—木葉硬微扁如刺結實如楓實出倭國者謂之倭木其木有赤白二種赤杉實而多油白杉虛而乾

煤有斑文如雉者謂之野雞斑此木不生白蟻焼灰發火藥トイヘリ貝原氏曰赤キヲ良トス鬼ー木ネヂケタリ我邦昔ハ〇ヲマキトイフマキノ戸ハ杉ノ戸也又蠻種　唐ーアリ一名ヒタスギ近年ワタレリ谷川氏曰イトーアリ温杉〇〇〇〇リベニートイフ猿猴ー綾ーアリ神代ーハ筥根ノ湖ニアリ披玖ーハ酒〇ノ糟ニヨシトイヘリ蘭溪曰赤ーハ油ー也白ーアリ鉾ーハ遠クヨリミレバ鉾ノ如シ又ムスギトモヨメリ加藤氏曰神木ハ非常ヲサケテヒメ齋フ意ニテ十三ニ隱藏杉トカキテイハフスギトヨム也トイヘリ

名　集解曰木類松而經直葉附枝而生若刺針トアリ貝原氏曰木直也故ニ名ク諸説同シ

異　尺名曰結又沙木椒木トアリ祕藏抄イソ木

〇木綿　眞蘇ーー

辨　抄ノ祭祀具云木綿ユフ折之多曰絲著也トアリ谷川氏曰モト楮樹ノ皮ヲ剝テ造レルヨシ古クイヘリ寶基本紀謂以穀木作白和幣名穀木綿サレバ紙ノ濫觴也梁塵抄ニハ紙ニ造ル木也今ノ〇メルニアラズ神樂哥ニ三島ー又ーツクル信濃ナドアリ古ヘ信濃伊豆ヨリ出シナルヘシ東國ノ俗シナトイフ卽栲也トアリ或曰阿波國麻殖郡種穗忌部神社ノ神主ヨリ神祇令ノ御家ニマイラス例トゾ郡ノ名モコレニヨレリ此社ノ祭神天日鷲神天太玉命等也コレハ常ノ麻ヨリ白クシテ脆シトイヘリ加藤氏曰木綿ハ穀皮也木綿麻ナト割テ用ル物ヲ曾トイヒ其中ニユフヲホメテ〇曾トイフ式ニモ木綿ヲ貴ミ麻ヲ賤メリトイヘリ（一ノ卷白妙〇卷綿ノ處可見合）

名　谷川氏曰ユフハ潔白淸淨ノ義也蘭溪曰悠紀主基トイソニ同シ意ナルベシ

〇山振　ーー乃

辨　抄云欵冬一名虎鬚ヤマブキ ヤマフヽキ トアリ蘭溪曰本綱滋草ニ欵冬〇〇今ノフキノトウ也朗詠集欵冬誤綻暮春風トツクレリ又酴醾花ヲアツレドコレハゴヤオギボタレバナドイフ正名也俗ニ酴醾䣼ト酒ノ名アルモ此花ヨリノ名也貝原氏富士谷氏ハ棣棠ニアテタリ花鏡云棣棠藤本叢生如茶蘼多尖而小邊如鋸齒三月開花金黄色圓如小球トアルニテ又一重ノ花アリ園史遵生八牋等ニ金碗喜水トアリ本綱ニハ出サズ此集棣棠ヲハネズトヨメルハ棠棣ノ誤リニテ上下セシ也本綱ニハ郁李一名棠棣其花粉紅色ト出セリ貝原氏

曰白ヤマブキアリ實アル物ナレバ別種ナルベシ又草ヤマブキハ園史ノ金線梅也〇〇〇字鏡ニハ恠ノ字ヲヤマブキトヨメリ

名　棣棠ノ義シレズ抄ニ欵冬ツヽキ箕ミヅマキ悪實ウニツヽキ棗吾〇

一皆葉大ニシテ欵冬ニ似タリフヽクトハ其花蓬髮ニ似タル也俗ホヽ丁〇イフ扨今ノ山吹ハ葉モ似タル處ナク花モ色ハ似タレドフヾクモノニモアラズ尙カンガフベシ四ノ巻山吹ノ條可合見

異　俗ニハ蕗ノ字ヲカクナレト蕗ハ草ノ異名ニ蕗ト出セレバアタラズ八雲抄妹ニ似タル草藏玉集ニオモカゲ草カヾミ草トアリ

〇馬醉木　生流一一一

辨　抄ニナシ本綱ニモノセズ今本ツヾシト訓ズルハ誤リニテ今アセミトイフモノナリトイフヲヨシトス大和本草外國品ニノセテ曰葉ハ忍冬ニ似タリ春末青白ノ花開テ下ニサガル少黄色ヲ帶微毒アリ馬此葉ヲ食ヘハ死ス西國ニテヨシミシバトイフトアリ加藤氏曰アセミハ木瓜也ベシ東人シドミトイツテ馬ノ毒也トイフカノイハ〇ヾシヲ羊躑躅トイフニムカヘテアシビヲ馬醉木トカケルヲシルベシソノアシビ又シドミトイフヲ考ルニ病ニシラタマアリ貝ニシタヾミ草ニドクダミトイフハ病ノ事也ソノダミトドミト通ヒテシドミハアシタミノアヲ略シアシミハアシタミノタヲ略セル也トイフ橘泰曰馬醉木ハレンゲツヽジノ事也佐渡ノ金山コノツヽジ斗也西國ニテハヨシミシバトイフアシミ反ナルベシ

名　馬醉木ノ義上ニイヘリ今ヤアセボノ木トイフアセボニツクレハヨシトイフ〇

〇鷹之兒　何之一一

辨　加藤氏曰此カリハカ〇〇〇〇〇也夏鴨トイヒテ後ノ物語ニカリノコトイフ是也契沖ハ舊本鷹作雁トアルニヨリ雁之兒トセリ谷川氏曰野鴨ヲカリトヨメリ蜻蛉日記枕草紙ナドニカリノコトアル皆同シトイヘリ蘭溪曰カルカモトイフアリ鳬ノ一種也漢名不詳コヽニカリトイフハ鳬ノ惣名ニイヘルナラン尙鳬雁ノ處可合見

〇石乍自　一一一木丘開道

辨　抄ニ羊躑躅イハツヽシ モチツヽシ　茵芋ニツヽシ ナカツヽシ　山榴アイツヽシノ三條
ニ分テリ六帖ニハツヽジイハツヾジトワケタリツヾジ
ハ今ノツヽジニテイハツヽジハサツキキリシマノルイ也
白ツヽジハモチツヽジナリ哥ニハオシナベテヨメ𪜈ワカ
チアル也本綱ニ羊躑躅アリコレモチツヽジト附錄ニ山｜
｜アリ時珍曰山谷有之春生苗葉淺綠色枝而花繁一枝數蕚二
月始開花如羊｜｜而蒂如石榴花有紅紫者五出又千葉者
一名紅躑躅山石榴映山紅鶻花トアリ花鏡云杜鵑サツキツヽジ一名紅躑
躅於杜鵑啼時盛開亦有黄白二色者又山躑躅キリシマ俗名映山紅類
杜鵑花而稍大若生(　)山頭其年必豐稔亦有紅紫二色トイハ
リ貝原氏曰本草ニハ毒草ニノセタレド草ニアラズ小樹也
又ルイ多シ紫ツヽジ淀川｜紅ノ｜蓮華｜アサギツヽジア
リ羊｜｜ハモチツヽジ也又杜鵑花アリサツキ也又瓔珞ツ
ヽジアリトイヘリ蘭溪曰ツヽジハ惣名也其ソカチ初ニイ
ハヽ知ニ擬イハツヽジトイヒアツヽジサツキキリシマヲ
コマトイフ也モチツヽジハ一種也ト定ムベシ
本綱ニ羊躑躅アリ集解曰小樹高二尺葉似桃葉花黄似瓜
花又附錄ニ古不可草ノ名アリコレモチツヽジ也

名　尺名曰羊食其葉則躑躅而死故名蘭溪曰ツヽハ物ヲカソ
フル意ニテ又羊蹄ヲシトノミイヘバ其花ノアマタサクノ
名ニヤアラン
異　尺名曰黄躑躅黄杜鵑羊不食草鬧羊花驚羊花老虎花玉枝
皆モチツヽジノ名トセリ莫傳抄ニ火トリ草祕中抄ニ火タ
キ草ト躑躅ノ異名ニイヘリ

○虎　｜可叫吼登

辨　抄云虎トラ 豹ナカツカミトアリ本綱虎アリ集解曰狀如
猪而大如牛黄質黑章鋸牙鉤爪鬚健而尖舌大如掌夜視一目
放光一目看物｜食狗則醉狗乃｜之酒也｜畏人獸而蝟制之
者無大小也又豹至稀惟○不貴爾雅云似虎而非眞曰豹金壁
故事云豹死留皮人死留名トアリ左氏傳ニ皐比續紀ニ大○
皮トアルハ虎皮也又紫日紀皇子御誕生ノ時宮内侍虎ノカ
シラヲトリテ御先ヘマヰルコレハ惡氣ヲ席ルノ爲也トイ
ヘリ
名　尺名曰虎象其聲也谷川氏曰人ナトルノ義又於菟ノオハ
發聲同シ音ニイノニヤヲハソヘタリ或ハ高麗ノ語也
異　尺名曰左傳ニ於菟注ニ虎楚於閩氏曰李父伯都李耳山

君子路波羅大蟲等ノ名アリ爾雅曰ー曰鶌黑ー曰鴽(イウ)

○木綿花　ーーー乃榮時

辨　前ノ眞蘇木綿可合見

○鶉　ー成

辨　抄云淮南子蝦蟇化爲ーウツラトアリ花鏡云鵪鶉一條ニ少シテ曰ーー早秋田澤小鳥也頭小尾禿羽多蒼黑色無斑者爲鵪有斑者爲鶉雄足高雌足早又有丹鶉白ー錦ー之異夜則群飛晝則草伏有常匹而無常居隨地而安故又呼鵪鶉山東最多人可以聲呼而○之凡鳥性畏人惟鶉喜近人々畜之使鬪トアリ本綱鶉鷃二条ニ擧テ集解曰鶉有雌雄常於田野屢得其卵何言化也又鷃鶉類也珍曰三四月田鼠化爲鴽是也鶉有斑而四時常在鷃始田鼠化終復爲鼠故無斑而夏有冬無此別也トイヘリ松岡氏曰詩ニ鶉之奔々朱注云鶉鷂屬小雅注ー鵰也ウヅラ爾雅鶉其雄鶛雌痹是也鴿ハ鶉之無斑者ト本草ニアリ鶉說文作䳼作鷻朱注モ毛傳ニヨツテ鵰トス鵰ハ今ノワシ也トイヘリ貝原氏曰鶉ハ異邦ヨリワタル鷃ハカヤククキ也又ボトシギ也トアリ蘭溪曰鶉ハウヅラ也鷃鵪鴽ハ一物ニテカヤクキ也本同類ナレバ皆ウヅラトヨメルナラン

名　尺名曰鶉性醇竄伏淺草無常居而有常匹隨地而安莊子ニ聖人ー居是其行遇小草卽旋遐之亦可謂醇無其子曰鴽又鷃尺名曰不木處可謂安寧自如トアリ新井氏曰ウハフト通シテ粟田豆田ナドニ居ルノ名也ツラハ群列也富士谷氏ハウツルノ義ニテ其居ヲカフルヨリイフカヤクキハ草ヲカヤクキハキル也一說ニ草潛ニテカヤクヾリノ義也

異　尺名曰鵪　鶉鴽　鳸　皆鷃也藏玉ニ尾花ドリ此集ニイトラ仙覺曰イウ通ストイヘリ

○三輪　神社爾ーー須惠

辨　抄祭祀具云神酒ミワトアリ厚顏抄曰崇神紀ニウマサケミワノトノ丶岡部氏頭書曰神ニ供ズルニハ齋瓶(イハヒベ)ニ釀テソノ瓶ナガラ供スル故ニミワスヱナドイフ也其ミワハ釀瓶(カミワ)ヲ略シテイフ齊瓶ハ祭器也酒ヲカミスルハ麴ヲ交ヘテ造ルナレバカンダチカビダチ米也トイフ意ニテ酒ヲカミスルカムカマナド皆通ゼリトイヘリ谷川氏曰ミワハ酒神也又神酒ヲ供ズル瓮ヲモミワトイヘリイハヒベトイヘル同物也トイヘリ蘭溪曰出雲國造神賀詞ニ天ノ甕(ミカ)和爾齊許母利底ト云ニ拠オモフニミワトイフハ神酒ニ限ル名ナルニ

ヤ今ミキ㕝イフミハマト通ヒテホムル詞キハ酒ノ古語也

名　異名分類曰土佐國神酒川ノ水ヲモテ大神ノ爲ニ酒ヲカモセシガ○テタカリケレバ彼川ノ名ヲトリテミワトイフ也トアリ

○玉梓　――之

辨　梓ノ義ノ上ニイヘリ谷川氏曰弓ヲアヅサ矢ハヤルノ訓ナレバ思フ心ヲ文シテイヒヤルヲタトヘテホムル詞ヲ加ヘテ玉梓トハイフ也又玉ハタマフ義ニテ古ハ此葉ヲモテ文字ヲカキシナルベシトイヘリ蘭溪曰今ヤ玉札玉章ナドイフモコレヨリウツリシ也中ツ世ニハ消息トイヒ今ハ俗手紙トイフ手紙ハ手簡ヨリウツリタル也

○槻　―木之

辨　抄云槻ツキノキ木名堪作弓也トアリ本草ニミエズ貝原氏引江陰縣志曰―質堅而勁多葉繁陰人家門巷多樹之葉モ木理モケヤキニ似タリトイヘリ字彙ニモ―木名トアリ本草ニイカデモラセシナラン

名　谷川氏曰强木ノ義ニヤ今モツキケヤキトツヾケイヘリ

此集弓槻トアリ弓ハ五百ノ借字ナラン

○大鳥　――羽易之山

辨　岡部氏曰此集鴨ノハガヒニトアレバ左右ノ翼ヲカハスノ意ニテ事モナクツヾケシナラントイフ人モアレド穩カナラズ抄ニ鸛ヲオホトリトヨメバソレヲイフカ又鷲ナドヲサシテイヘルカモシ鷲ヲイハヾ羽ヲ易ルヲ待テ矢ニ用ルナレバ羽易ノ意也トイヘリ抄ニ鸛アリオホトリトアリ本綱鸛集解曰―有兩種似鵠（ハクテフ）而巣樹者爲白―黑色曲頸者爲黑―又曰―身如鶴但頭無丹頂無烏帶雍不善唳止以喙相撃而鳴多在樓殿吻上作窠トアリ貝原氏曰和景ハ黑白アリトイヘド此邦一種也田野ニスミ高木ニ巣ヲカクル蛇ヲ食フトイヘリ蘭溪曰鸛ハ今コウヅル又コウノトリトモイフ貝原氏ハコウクヾヒ一物トスルカ紀抄鵠ヲクヾヒトアリテ今ノハクテウ也ワシノ事ハ末ニ出セリ

名　尺名曰鸛字篆文象形其背尾色黑又禽經ニ鸛鳴喈々故名蘭溪曰オヽトリハ大鳥ノ義コウハクハンノ轉也貝原氏曰クヾヒハクチナハクヒノ略也トイヘリ

異　鸛詩疏ニ皂君又負釜黑尻又鵠尺名ニ天鵞トアリ

○奈用竹　――乃騰依

辨　岡部氏曰ナヨタケハ女竹ニテ皮竹トモイフナエナヨ通ヘリトホ○ルモタチヤカニ同ジク許カヨヘリトイヘリ貝原氏曰國俗女竹トイツテ葉モ身モカハレルアリ大竹トナラズ皮落ズ故ニ皮竹トイフ筍ノ味ニガシ吳竹ノ漢名苦竹トイフトハ別也徒然草曰吳竹ハ葉細ク皮竹ノ葉ヒロシトアリテ味品也トイヘリ抄云箬竹本朝式用河竹二字一作苦カハタケト出セリ

○栲　――紲之長命

辨　栲紲ハタクヅヤ也栲ノ皮ニテナヘリ栲角―衾―繩―領巾ナドアリ

白妙ノ處ニ委ク見

○宇波疑　野上乃――

辨　抄野菜アニ薺蒿アリ　オハギ　ト出セリ本綱ニ和名ニオハキトアリ本綱ニ藁蒿アリ珍曰――生高岡似小薊宿根生於百草葉似斜蒿而細料二月生莖葉可食又可蒸トアリ松岡氏曰菁々者莪ノ朱注云莪蘿蒿也トハ爾雅ニヨレリ陸璣ハ葉似斜蒿時珍似小薊トハ救荒本草ノ泥胡菜ト一物ナラン泥胡菜ハキツネアザミトイフモノナリ扨莪蒿ハ東哉ニアリ葉似青蒿小角ヲ結フ洛地未知有之トイヘリ蘭溪曰コノ葉蒿今ノヨメガハギ俗ニヨメナトイフモノニテスナハチウハギ也ベシ

名　尺名曰陸云莪之爲言高也蘭溪曰ウハギヲハギ通ヘバヲノカナ也ハギノ小サキニ是立タルカ

異　爾雅ニ莪蒿　蘿蒿　抱娘蒿ト尺名ニ出セリ抄ニ薺蒿菜本草和名ニ齊頭蒿トアリ

萬葉草木考卷二　終

昭和九年六月十五日印刷
昭和九年六月二十日發行

未刊國文古註釋大系　第二冊

非賣品

編纂者　吉澤義則

發行者　東京市神田區一ツ橋通　大橋貞雄

印刷者　東京市小石川區久堅町一〇八　君島潔

印刷所　共同印刷株式會社

發行所　東京市神田區一ツ橋通
振替東京六八二八六番
電話九段自四一五一至四一五五
帝國教育會出版部

